「いなの穂のもろ穂に垂(シ)でよ、枯落穂(ナビレ)も無く」

もろ-まひ 諸舞【名】東遊(アヅマビ)の駿河舞・求子(モトコ)の二曲を舞ふこと。(片舞に對して)

もろ-まゆ 諸眉【名】灰條の略。 用明天皇職人鑑「烏帽子屋が身を立烏帽子、諸眉は」

もろまゆ-えばうし 諸眉烏帽子【名】左右兩方に眉のある烏帽子。

もろ-み 諸味・醪【名】酒又は醬油の、醪酵中に屬し、未だ液汁を分離せぬもの。酒のは、即ちどぶろく。 和名「醪、毛呂美」

もろみ-ぐさ 諸味草・醪草【名】〔植〕はぎ(萩)【一】に同じ。

もろみ-ざけ 諸味酒・醪酒【名】諸味の酒。

もろ-むき 諸向【名】【一】彼方へも此方へも依り向ふこと。 萬葉「武藏野の草葉もろむきかもかくも君がまにまに吾(ワ)は寄りにしを」 【二】〔植〕ろらじろかんば(裏白樺)に同じ。

もろ-むすび 諸結【名】紐を結ぶに、左右兩方を動かして締め合はすること。男結と女結とあり。各條を見よ。(片結に對して)

もろ-め 諸目・兩目【名】左右の目。兩眼。 盛衰記「兩目にては睨み、片目にては睨み」

もろ-もち 諸持【名】諸共に持つこと。力をあはせてすること。 土佐「かの人人の、口網ももろ持にて、この海邊にて荷ひ出せる歌」

もろもっと 【名】〔動〕もるもっとの轉訛。

もろ-もろ 諸・諸諸【名】いろいろ。許多。又、衆くの人。衆。 祝詞「新年祭」「集侍(ツドヒ)はれる神主・神部等(ララ)、諸聞しめせと宣(ノル)」 「茅」もろもろの愚者も月夜の十夜かな」

もろ-や 諸矢【名】射術の練習に、同時に手に持つ一對の矢、即ち甲矢(ヤ)と乙矢(ヤツ)と、又、それを的に射當つること。ひとてや。(片矢に對して) 拾遺「引く人もなしと思ひし梓弓今ぞ嬉しき諸矢しつれば」 徒然「ある人、弓射ることを習ふに、諸矢をたばさみて、的に向ふ」

もろ-やしろ 諸社【名】もろもろの社。多くのやしろ。諸社(シヤシヤ)。諸神。 新六「六十(ヂウ)あまり國に滿ちたるもろ社世のためにこそ跡を垂れけめ」

もろ-ゆがけ 諸韘・諸鞲【名】左右の手に韘をはむること。歩立(カチ)にて矢を射る時は、左手のを去れども、騎射の時は、手綱を取る故、兩手にはむるなり。一具韘(ユガケ)。まごゆがけ(的韘)參照。

もろよせ-のはま もろよせの濱【名】〔地〕但馬國美方(ミカ)郡にある濱。 枕「濱は、……、打出の濱、もろよせの濱」

もろ-より 諸縒・諸撚【名】片撚絲を二本以上合はせ、これに前と反對の方向に撚を掛くること。即ち、木綿絲にては、普通に二子(ヨツ)・三子(ミツ)と呼ぶ撚方。(片撚に對して)

もろより-いと 諸縒絲・諸撚絲【名】諸撚にしたる絲。あはせいと。よりいと。(片撚絲に對して) 「同じ。

もろらん 室蘭【名】〔地〕むろらん(室蘭)に

もろ-わざ 諸業【名】もろもろのわざ。多くの事。諸事。 若風金「心にあらねば、もろわざうつる事難し」

もろ-わちがひ 諸輪違【名】棒術の一。 雪女五枚羽子板「棒の祕術……片手輪違・諸輪違」

もろわ-むすび 諸輪結【名】紐の結び方の一。下圖を見よ。

(諸輪結)

もろ-を 諸緒【名】緒の結び方の一。

もろをか-いちう 諸岡一羽【名】〔人〕神道流剣法の達人。常陸國江戸崎(ヤキド)に居り、飯塚家直に學びて、奥儀を極む。門人甚だ多し。中にも根岸兎角・岩間小熊・土子土呂之助等、最も顯る。

もろ-をりど 諸折戸【名】二枚開きの折戸。(片折戸に對して) 宇治「ふりたる家のもろ折戸の中へ落ち入りにけり」

も-わけ 藻分【名】魚を料理する時、先づ、俎の上にて、庖丁にて、魚の體を撫づること。

や

【發音】【一】や行第一の音。子音yが母音aと結び附きて發す。子音yの母音a・oに結び附きたるは、即ちゆ・よにして、同じくや行に屬するい・えも、もとyとi・eとの結び附きたるものなりしならんが、後世は、子音脱落して、發音のみならず、假名までも、あ行のい・えと全く同一なるに至れり(但し、外來語の場合を除く)。yは、氣息の咽喉より鼻腔へ通ずる路を閉ぢ、舌の中部を、母音い(i)を發する時の位置よりも一層高めて、その左右の緣邊を口蓋に密著せしめ、中央に僅かに存せしめたる空隙より、聲帶の振動を帶びたる氣息を通過せしめて發する音にして、摩擦音に屬し、その發する場所よりすれば、口蓋音に屬す。又、その氣息は聲帶の振動を帶びたるが故に、濁音の一にして、これに對する清音はひの子音なり。ひ【一】の條下を參照せよ。子音yの母音iと異なる所は、ただ舌の位置の少しく高きと、氣息通過の際、摩擦を生ずるとの二點に在るのみなるが故に、い列音の直下にあ音の續く時、その中間にy音加はりて、あはやの如くに發音せらるる場合あり。あ【五】の條下を參照せよ。ぱんぱいん(半母韻)參照。【三】長音は、やあと書くと

やーと書くとの兩法あり。本書にては前者に依れり。【四】一語の中にて、やの直後にうの續く時は、相合して、よの長音に發音せらるること多し。例へば、やうか(八日)・やうし(養子)をヨオカ・ヨオシと發音する類。又、やの直下にふの續く例は動詞もやふ(紡ふ)の類あれど、習慣上、ふをウと發音し、その直前の音と音節を分ちて發音せり。【四】やは、い列音の假名の下に記してあ列拗音を示すことあり。即ちきや(kya)・しや(sha=sya)・じや(ja=zya)・ちや(cha=tya)・ぢや(dya)但し後世の發音はじやに同じ)・にや(nya)・ひや(hya)・びや(bya)・ぴや(pya)みや(mya)・りや(rya)、これなり。同じや行のゆ・よも、同樣に、きゅ・しゅ・ちゅ・きょ・しょ・ちょ等の如く、う列拗音・お列拗音を示すことあり。又、これらの場合に、そのや行の假名を、きゃ・きゅ・きょ等の如く、右方に片寄せて小く記す方法もあり。漢字の音にては、い列音の假名の下にやを記したるは、すべて拗音に發音すること、いしや(醫者)・ちや(茶)などの例の如し。なほ、これら拗音の發音の方法・位置に關しては、各い列音の發音の條下に說けり。【五】漢語の熟語にて、やの頭音を有する文字がnの韻を有する文字の直後に續く時、そのやが拗音ニャと轉呼せられ、mの韻を有する文字の直後に續く時、拗音ミャと轉呼せらるることある場合に就きては、に【七】・み【五】の條下を見よ。

【字源】平假名やは漢字「也」(漢・吳音共にヤ)の草體、變體平假名ゃは「屋」(訓ヤ)の草體、ゃは「夜」(漢・吳音共にヤ)の草體、ゃは「邪」(漢・吳音共にヤ)の草體より出で、片假名ヤは「也」の略體、又、萬葉假名としては、前記「也」・「屋」・「夜」の外、字音に據れるものに「耶」・「揶」・「嫋」等、訓を取りたるものに「八」・「矢」・「箭」・「哉」等あり。

や 家・屋【名】【一】『やかた(屋形)・やしろ(社)・こや(小屋)・たまや(靈屋)・さや(鞘)・みや(宮)など複合語としても多く用ひらる』人などの住む料として、建築せる物。いへ。家

屋。住宅。竹取「うるはしきやを作り」 ㊁『いたや(板屋)・かはらや(瓦屋)・かやや(茅屋)・ひはだや(檜皮屋)・わらや(藁屋)など、複合語としても多く用ひらる』やね(屋根)に同じ。字鏡「蓑、屋不久也」 ㊂地上に据ゑたる物の上をおほふために、家の屋根と同様なる形に造りたるもの。蜉蝣抄「春雪……藏人下二知修理職、儲二屋具一」

高き屋【句】たかや(高屋)に同じ。日本紀竟宴歌「高き屋にのぼりて見れば烟立つ民のかまどは賑ひにけり」

や

矢【名】㊀弓に番へて、勢よく遠距離に送り遣り、鳥獣又は人を殺傷するに用ふるもの。鐵砲渡來以前、主として、狩獵又は戰爭に用ひたれども、現今にては、體育上の練習用等に供するのみ。大別すれば、野矢(ヤ)・征矢(ヤ)・的矢(ヤト)の三種ありて、何れも、主として、矢柄(ヤガラ)・矢筈(ヤハズ)・矢羽(ヤハネ)・鏃(ヤジリ)の四部より成る。各條を見よ。「箭」 和名「箭。釋名云、笑、夜」 ㊁紋所の一。前項の矢に象りて描けるもの。一本矢・並(ナラ)矢・三本並矢・違(ヒガ)矢・三矢違・割(ワリ)矢など、種種あり。 ㊂堅き材木又は石を割らんとする時、その小口に插み、玄翁などにて打ち込みて割るに用ふる、楔形なる物。 ㊃土木の工事に、土砂を崩壞せしむるに用ふる、樫などの堅き木材の棒。直徑四五寸、長さ約四尺、一端に鐵冠あり、他端は尖り、その尖りたる方を土砂に打ち込みて、これを崩壞せしむ。 ㊄『やおもて(矢面)』 ㊅やつざばや(矢繼早)㊆參照』質問・批難などの言葉の譬。

「質問の矢を放つ」

矢、弦上に在り、發せざるべからず【句】『文選の陳琳の作なる爲二袁紹一檄二豫州一といふ文の李善註に「三國魏志(陳琳傳)、琳避二難冀州一、袁本初使レ典二文章一、作二此檄一、以告二劉備一、言曹公失レ德不レ堪二依附一、宜レ歸二本初一也、後紹敗、琳歸二曹公一、曹公曰、卿昔爲二本初一移書、但可レ罪二狀孤一而已、惡止二其身一、何乃上及二父祖一邪、琳謝レ罪曰、矢在二弦上一不レ可レ不レ發、曹公愛二其才一而不レ責レ之」とあり』事、已に著手したる上は、中止すべからざる譬。〔諺語〕

矢の如し【句】㊀『矢を射るが如し』に同じ。狂言「ししがり」「それ、達磨の文に曰く、殺生せよ、殺生せよ、刹那(セツ)も殺生せざれば、その身、地獄へ、矢の如くといふ時は、いかほど殺生しても、苦しうない」 ㊁『論語の衛靈公篇に「子曰直哉史魚、邦有レ道如レ矢、邦無レ道如レ矢」とあり』志を屈せず眞直に進む譬。

矢の催促【句】急き立つる催促。

矢の使【句】矢の催促の使者。急き立つる使。心中宵庚申「おくび町の笹屋から、竹の子取りに矢の使」

矢も楯もたまらず【句】勢の制すべからざる譬。一途に思ひつめて怺ふるを得ざる譬。

矢を射るが如し【句】急速なる譬。矢の如し。字鏡「俄かに荒き風吹きて、船を南の方へ吹きもて行くこと、矢を射るがごとし」

矢を刺す【句】次條に同じ。記「横刀(ヤカタ)の手上(ヒガ)とりしばり、矛ゆけ、矢刺して追入るる時に」

矢を番ふ【句】射んとて、矢を、弦に掛く。矢をはぐ。

矢を矧ぐ【句】前條に同じ。字鏡「矢左右(ヤ)なくも射ず」 著聞「太子、又、舍人(リヤ)跡見(アト)に仰せて、四天王に誓ひて、矢を放さしむ」

矢を放つ【句】矢を射る。

や

幅【名】車輪の轂(ヤキ)より、放射狀をなして、輪に達し、その兩者を連結する、數多の棒。和名「輻、夜」太平記「三十(ヤ)の幅も、少少折れにければ、御車は、路頭に顚倒す」

谷【名】たに(谷)㊀を云ふ。〔江戸附近の方言〕今、多く地名に殘れり。四谷(ヨツヤ)・下谷(シタヤ)・谷中(ヤナカ)・熊谷(クマガヤ)・幡ヶ谷(ハタガヤ)など、これなり。やつ(谷)參照。

野【名】㊀『易經に「龍戰二于野一、其血玄黃」とあり』の(野)に同じ。 ㊁『書經の大禹謨篇に「君子在レ野、小人在レ位」とあり』官吏生活にあらざる社會。民間。(朝(チヤウ)に對して) ㊂『論語の公冶長篇に「質勝レ文則野」、同書の子路篇に「子曰野哉由也、君子於二其所一レ不レ知、蓋闕如也」とあり』人智の開けぬこと。いやしきこと。野鄙。「生活に入る。

野に下る【句】官途を退きて、民間の野に遺賢無し【句】『書經の大禹謨篇に「嘉言罔レ攸伏、野無二遺賢一」とあり』賢人は悉く登庸せられて、民間に遺(ヰ)れる者無し。

や

八【數】㊀やつ(八)に同じ。(多くは、他の語の上に添へて、複合語として用ふ)記「八人(ヤヒト)」 ㊁多くの數。(他の語の上に添へて、複合語として用ふ)記「八雲立ついづも八重垣妻ごみに八重垣造るその八重垣を」

や

【感】驚き、思ひつき、呼びかけ、又は力をこめなどする時發する聲。いや。おや。やあ。源氏「物におそはるるここちして、やとおびゆれど」後拾遺「思ひ出づる時もあらじと思へども、やといふにこそ驚かれぬれ」著聞「や、お局、この痩見てたび候へ」狂言「鶴潤」「や、程なうこれぢや。汝はそこに待って居れ」

や

耶・邪・乎・哉・也【助】㊀感嘆の意。よ。記「その坂を登り立ちて、ねもごろに歎かして、あづまはやと詔(ノ)りたまひき」同「おしてるや難波の崎よ」拾遺「鳴けや鳴け高間の山のほととぎすこのさみだれに聲な惜しみそ」字鏡「あなぬるの湯や、たけ、たけ」 ㊁疑問の意。か。萬葉「衣しも多くあらなむ取り替へて著なばや君が面わすれせむ」後撰「數ならぬわがみ山べの時鳥木柴隱れの聲は聞こゆや」新古今「人知れず今や今やとちはやぶる神さぶるまで君をこそ待て」 ㊂反語の意。やは。やも。か。かは。かも。萬葉「しばしも見さけむ山を心なくもの隱さふべしや」伊勢「忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは」 ㊃類似せる物事を並べ擧ぐる意。蜻蛉「柚や梨やなどを、なつかしげに持たりて」大鏡「里の刀禰(ネギ)、村の行事出て來て、火祭や何やと煩はしく責めし事、今は聞えず」

や・かな【句】〔文〕俳諧にて、「名月や盲(メク)の妻の泣く夜かな」などの如く、一句の内に、「や」と「かな」とを切字(キレジ)として用ふること。最も忌むべきものとして、特にいふ。

や

屋【接尾】㊀商人・職人などにつきて、その賣る品物、從事する仕事などの種類の名に添へて、その家又はその人を示す語。「本(ホン)屋」『油屋』『車屋』『屋根屋』『株屋』 ㊁商工業家又は俳優などが、その家を、他と區別する稱號に添へて用ふる語。やがう(屋號)參照。 ㊂風人などその居處を雅號として表はす語に添へて用ひる語。けん(軒)・さい(齋)參照。「鈴の屋(本居宣長)」『伊吹(イブキ)の屋(平田篤胤)』 ㊃或人を、その性質の上より、輕侮の意にいふ時に添へていふ語。「わからずや」「氣取(リキ)や」 ㊄性質上、神聖なるべき事業・職業に、營利的なる所行ある時、その人を嘲る意にて添へていふ語。「學校屋」「宗教屋」

や

【接尾】『助辭のや㊀の轉義』目下の人の名又はその地位の名稱に添へて、親しみ呼ぶに用ふる語。「爺(ジヤ)や」 狂言「水汲」新發意「門前のいちやを遣され」

やあ

【感】やに同じ。記「吐嗟、ヤ、ア」謠曲(丹後物狂)「やあ、喧(ヤカマ)し」 狂言(秀句大名)「やあ、太郎冠者が戻ったさうな。戻ったか、戻ったか」同(棒縛)「やあ、思ひついた」一英「やあ暫く蟬(ヒグラシ)だまれ初時雨」

やああ

【感】前條に同じ。蘇生歌「やああ、これは源五樣、死なずに、まめで御座んすか」

やあたーのかがみ

八咫鏡【名】やたのかがみ(八咫鏡)に同じ。〔古語〕記「八尺鏡(訓二八尺二云八阿多一)」

やーあて

屋充【名】行幸の時、その所の殿舍を、又、伊勢大神宮の遷宮の時、殿舍・門垣を飾り整ふることを分掌せしむること。兵範記「有二行幸一……有二屋充事一、各向奉二行屋屋一、令二諸司官人奉仕一之」

やあど 帆桁（英 Yard）【名】西洋形帆前船の帆桁（ヤダ）。

やあど 碼（英 Yard）【名】ヤアドポンド法に於ける長さの基本單位。インチの三十六倍、フウトの三倍、ファゾム（但し、米國には、この單位なし）の二分の一。英國のは我國の三尺〇一七四尺、米國のは三尺〇一七五二に相當す。やるど。やある。やあろ。

やあとこせ【名】『次條の話の轉』**かっぽれ**

やあとこせ【感】『彌（イヤ）當（ヒキ）しへの訛といふ』喝惚（カツポレ）を踊る時の囃詞の一。

やあど-ぽんど-はふ 碼封度法（英 Yard-pound system）【名】英・米兩國及び英國植民地等に行はれ、度にはヤアド、地積にはエエカア、量にはガロン、衡にはポンドを基本單位とする度量衡法。メエトル法のためにこれを用ふる國は減少したれど、なほ工業上及び世界に於ける貿易、殊に亞細亞沿岸の貿易には、盛んに行はる。英國式度量衡。

や-あはせ 矢合【名】昔、戰を始むる時、兩軍より、互に、その合圖の矢（主に鏑矢）を射出ししこと。やいれ。太平記「義貞、忽に入間（イルマ）川を渡りて、先づ鬨の聲を揚げ、陣を進め、早、矢合の矢をぞ射させける」

やあはせ-どき 矢合時【名】矢合をするに適したる時。蜜蜂記「矢合時を定めたれば、明くるを待つに及ばずして」

やあふう（英 Yahoo）【名】㊀第十八世紀の英國の文人スウイフト（Swift）の名著「ガリバア旅行記」中に記せる、人體を有する野獸。㊁下等なる人物。

やあ-やあ【感】やあを重ぬて、強くいふ時の聲。狂言（無筆女）「やあやあ、何と仰せらるる」 兼好法師物見車「やあやあ、童（ワラハ）どもは、何を笑ふぞ」

やあら【感】やあに同じ。やら。やんら。やれ。狂言（箕かづき）「やあら、おのれは、憎い事をいふ奴ぢや」 若風俗「やあら目出度や、鶴は千年、龜は萬年、東方朔は九千歳と、年越の夜の厄拂が高聲」

やある 碼【名】やあど（碼）の訛。

やあろ 碼【名】前條に同じ。

やい【感】㊀呼び掛くる時發する聲。やよ。やあ。 狂言（花子）「やい、おのれさへ、花子樣とぬかすか」 ㊁あいに同じ。〔越後國の方言〕

や-いう 夜遊【名】夜間に遊び樂しむこと。遊山。

や-いう 野遊【名】野外に出でて遊ぶこと。

やいう 也有【名】〔人〕**よこるやいう**（横井也有）の音便。

やい-がね 燒金【名】**やきがね**（燒金）の音便。本朝三國誌「怒の顏（カホ）ばせ、恨の息（イキ）ざし、四の眼光、やいがねの爆（ハク）き散るに異ならず」

やい-がま 燒鎌【名】**やきがま**（燒鎌）の音便。

やい-がり 燒狩【名】**やきがり**（燒狩）の音便。東鑑「燒狩停二止之一」

や-いくさ 矢軍【名】互に矢を射て戰ふこと、又、その戰。太平記「初は、射手を汰（エラ）へて、散散に矢軍をしけるが」

やい-ぐさ 熟艾【名】〔植〕『燒草の義か。艾（モグサ）として用ふるよりいふなるべし』**よもぎ**（艾）に同じ。〔古語〕 延喜式「熟艾。也以左・也以波久左」

やい-ぐし 燒串【名】㊀**やきぐし**（燒串）の音便。和名「串、夜伊久之。炙宍串也」 ㊁串に、四角の板をさし、その下に少しの人の毛髮を結び附け、その毛を燒きて、臭氣により、田畠を荒す猪・鹿を近寄せぬに用ふるもの。國によりては、直ちに鹿・猪の毛・肉をも燒く事あり。

やい-ごめ 燒米【名】**やきごめ**（燒米）の音便。 雲藝「やい米は、嫗（オウナ）の齒痛みて、噛み殘したる」

やいさ【名】**やい**に同じ。 蟬丸「やいさ、おのれら」

やい-じるし 燒印【名】**やきじるし**（燒印）の音便。 平家「花方が面（オモテ）に、浪方といふやいじるしをぞせられける」

やい-ずみ 燒炭【名】㊀**やきずみ**（燒炭）の音便。 ㊁田畠を荒す鹿などをおどすために、竹に、煤に和したる鹿の油を塗りて、その田畠に立ておくもの。

や-いた 矢板【名】『下端を尖らしなどして、打ち込むに便ならしむること普通なるより、矢といふ』土木の工事にて、土砂の四方へ崩れ去り、又は外部よりの水土の入り込むを防ぐために、四方を圍ひて、密接して打ち込む板。普通、木の板を用ふれども、鐵筋コンクリイト又は鋼鐵などを用ふることもあり。

やいた 矢板【名】〔地〕下野國黒谷（クロヤ）郡にある町。內川の東岸。宇都宮市の北方八里二十町。陸羽街道に當り、鐵道東北線の停車場、郡役所・稅務署等あり。

やいづ 燒津【名】〔地〕駿河國志太（シダ）郡にある町。駿河灣の西岸。藤枝の東一里半。横濱・清水（シミズ）間往復の汽船寄航し、字燒津北には、鐵道東海道線の停車場あり。日本武尊が迎火を以て、賊軍を惱ましし古戰場なりと傳へらる。

やいづ-じんじや 燒津神社【名】駿河國燒津町に鎭座せる縣社。式內の古社にて、祭神は日本武尊、なほ吉備津彥・大伴武日連・七束脛（カナギ）を相殿とし、これに大日靈貴（オホヒルメノムチ）尊・宇迦之魂（ウカノミタマ）命・猿田彥命・景行天皇及び日本武尊を配祀す。

やいづ-みやうじん 燒津明神【名】前條の舊稱。

やい-と 灸【名】『燒處（トイ）の義』**きう**（灸）に同じ。 增鏡「かばかりになりては、御やいとならでは、まがまがしき御事出で來（ク）べし」 併藏類選（野有）「蚊の口や灸は知らぬ背中にも」

灸の婆【句】㊀昔、灸を据うる事を職のごとくにせし老婆。 風俗文選（四季雜）「やいとの婆婆をかり招き、筋違・風門（フウモン）すゑられて」 ㊁灸を据うる人。今宮心中「小蒲團敷けと、あはせくるりの灸のばば」

灸を据う【句】「灸をすう」㊀に同じ。 娥歌留多「やいとすゑんと存ぜしに」

やいとう 灸【名】**やいと**（灸）の音便。 字彙集「灸、ヤイトウ」

やいと-かづら 灸葛【名】〔植〕**へくそかづら**（屁糞葛）に同じ。

やいと-ぎやう 灸響・灸行【名】『行は假借の文字』小兒に灸を据うる時、熱さを堪へたる褒美として、菓子などを與ふること。今宮心中「まそっと遊んで、やいと行の相伴せうか」

やいと-け 灸饗【名】**やいとぎやう**（灸饗）に同じ。 鶉衣（抱腹賛）「灸饗の豆のからからと鳴る時は」

やいと-げふ 灸業【名】前條の誤。 新版歌祭文「まだ祝言もせぬ先から、女夫（メウト）いさかひの取り越かいやい。灸業のかはり、喧嘩の行司さすのかいやい」

やいと-ばし 灸箸【名】灸を据うる時、艾（モグサ）を挾むに用ふる箸。 今宮心中「くすりくすりの灸箸、痴話のたよりの薄げぶり」

やいと-ばな 灸花【名】〔植〕**へくそかづら**（屁糞葛）に同じ。

やいの【感】女などのかきくどく時に發する聲。 仲我五人兄弟「女夫（メウト）ぢやが、合點か、やいの、やいのと抱きつく」

やい-ば 刃・刄【名】㊀**やきば**（燒刃）の音便。 義經記「やいばの薙鎌（カマ）」 ㊁燒刃の附きてある物の義』はもの。ぎれもの。 ㊂薄く鋭き物の譬。 松風村雨東帰鑒「潮をたたく刃の鱗」

刃に掛く【句】刃物にて斬る。 國姓爺「玉體を、やみやみと、逆臣の刃にかけんこと、勿體なしとも、淺ましとも」

刃から出た錆【句】次條の略。〔諺語〕

刃から出た錆は、礪ぐに砥が無い【句】「身から出た錆」に同じ。〔諺語〕

刃に伏す【句】「劍（ケン）に伏す」に同じ。

刃の上に伏す【句】前條に同じ。 太平記「寶劍は、武家の輩、もし天罪を顧みずして、玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させたまはんずるために、暫くも御身を放たるる事あるまじきなり」

刃の錆は、刃より出でて、刃を腐らす【句」「刃から出た錆は、礪ぐに砥が無い」に同じ。〔諺語〕 國姓爺「刃の錆は、刃より出でて、刃を腐らし、檜山の火は、檜より出でて、檜を燒く。仇も、

情も、わが身より出づる」

刃の劒【句】**やいば**(刃)[三][四]に同じ。狂言「禁野」「この雉の尾、やいばの劒なれば、御鷹をさし落し申す間」

刃を迎へて解く【句】『「破竹の勢」を見よ』事の、力を貴さずして解決する譬。

やいば-ぐさ 燒葉草・熟艾【名】〔植〕**よもぎ**(艾)に同じ。〔古語〕延喜式「熟艾。也以久左。也以波久佐」

やいば-ざさ 刃笹【名】〔植〕**くまざさ**(熊笹)「笹」[三]に同じ。

やいば-た 燒畠・燒畑【名】**やきばた**(燒畠)の音便。〔古語〕和名「燎、火田也、不耕而火種也、……也以八太」

やいば-り 燒鍼【名】**やきばり**(燒鍼)の音便。

やいば-わたし 刃渡【名】仕上げたる刀劍を、註文者に渡すこと。長町女腹切「お悦に、刃渡の御祝儀・御振舞があるさうな」

やい-ひ 燒火【名】『燒(ヤ)火の音便』**やいと**(灸)に同じ。曾呂利狂歌咄「灸治……、蛛だにもすゆるやいひの聲はせずいかにわびしき犬の長ぼえ」

やい-いん 夜陰【名】夜の暗き時。よる。

やい-ん 夜飲【名】『詩經の小雅湛露篇に「厭厭夜飲、不醉無歸」とあり』夜、酒を飲むこと。

やい-やい【感】**やいを**重ねて、強くいふ時の聲。狂言(秀句大名)「やいやい、太郎冠者、あるか」

やい-れ 矢入【名】次條に同じ。

やいれ-はじめ 矢入始【名】昔の戰の始に、先づ敵陣に矢を射込みしこと。やいれ。

や-いろ 矢色【名】發射したる矢の、勢呀えて飛びゆくこと。太平記「切って放したる矢色・弦音・弓倒(ハシク)、五善、何れも逞しく勢ありて」

やいろ-ぐも 八色雲【名】『「八雲(モヤ)立つ」の八雲の意義を誤解したるに因る造語』さまざまの色彩を帶びたる雲。謠曲(俊成忠度)「出雲の國にいまして大宮づくりせし所に、八色雲の立つを御覽じて」

やう 益【名】**やく**(益)の音便。**やうなし**(益無し)參照。竹取「何事も、やうもなしとて、藥も食はず」

やう 樣【名】『**やうす**(樣子)參照』[一]のり。てほん。樣式。模形。模樣。[二]かたち。ありさま。やうす。模樣。體裁。狀態。枕「まんなのやう、文字の世に知らずあやしきを」榮花「さぶらふ人、聲高からず、打ち解けず、しめやかに心にくくめでたき院のやうなり」[三]似たる狀態にいふ語。云云の如くなること。伊勢「布引の瀧……、石のおもてに、白絹に岩を包めらん樣になんありける」宇津「弟宮は、兄宮の御やうなり」[四]動作の狀態にいふ語。(下に助辭「は」を添ふることも、これを略することもありて、結局「云云することは」「云云するには」の意となる)伊勢「かの大將出でて、人にたばかりたまふやう、……島好みたまふ君なり、この石を奉らんとのたまひて」宇津「狐を引き上げていふやうは、狐は變化(ヘン)あるものなれば、今日の内に行きつきていへとて放てば」[五]いはれ。わけ。子細。事情。樣子。空穗「さるを見つつ、ここらの人の聲取りたまふも、やうあらん」宇津「いかに斯くは集まる。何かあらん、やうのあるにこそ。怪しき事かな」[六]しかた。手段。方法。樣體。今昔「その歌詠むべき躬恒、貫之召さすれば、各、物に行きにけり。……。又、異人(ヒトビト)には言ふべき樣なければ、この歌、只今詠みて遣されんなんや」盛衰記「坂東に名ある者、一人として、父・祖父(チヽオヤ)の家人(ケニン)ならぬはなしと承れば、さりとも樣ありなんと思ひて罷るなり」[七]云云の日的に適はしめんとすること。狂言(花子)「必ず、必ず、あらはれぬやうにしてゐよ」

樣に依りて葫蘆を畫く【名】『續湘山野錄に「陶尚書穀乞レ罷二禁林一、太祖曰、依レ樣葫蘆、且作且作、不レ許罷、復不二進用一、穀因題二玉堂一云、堪レ笑翰林陶學士、年年依レ樣畫二葫蘆一」とあるに本づく』ただ先人の所爲に倣ふのみにて、毫も自ら新意を出す所なき譬。(諺語)樣離る【名】樣式が少し變る。源氏「家の有樣も、樣離れて珍しきに」

やう 洋【名】大なる海。おほうみ。海洋。

洋の東西【句】東洋と西洋と。

やう 陽【名】[一]活動的・積極的などの物事。例へば、女に對する男、臣に對する君、地に對する天、北に對する南、夜に對する晝など。(陰に對して)[二]南方に向ひて、日のよくさす處。[三]山の南方。(陰に對して)[四]川の北方。(陽に對して)[五]〔理〕**やうきよく**(陽極)の略。(陰に對して)[六]『史記の韓非傳に「陽收二其身一、而實疏之」とあり』うはべ。あらは。表面。

陽に開く【句】積極的に動く。開展す。太平記「六萬餘騎の兵を一手に幷せて、陽に開いて、中に取籠めんと勇みけり」

陽の火【句】**ひ**(火)の條下を見よ。

やう 夜雨【名】夜、雨の降ること、又その雨。

やう-あ 養痾【名】病痾を療養すること。

やう-い 洋醫【名】[一]**せいやう**(西洋醫)に同じ。(漢醫に對して)[二]西洋人の醫者。

やう-い 洋夷【名】**ぐわい**(外夷)に同じ。

やう-い 瘍醫【名】瘍科の醫者。外科醫。

やういう 養由【名】〔人〕次條に同じ。保元「弓は、養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふ事なし」

やういう-き 養由基【名】〔人〕『養由は姓、基は名。漢書の枚乘傳、淮南子の說山篇などに見ゆ』支那春秋時代の楚の共王の臣。射術を善くし、百步離れて柳の葉を射るに、百發百中なり、又、王、その白猿を射るべし時、矢を弓に番へたるのみにて、猿、柱を擁して、號泣せりといふ。

やう-いおん 陽イオン【名】〔化〕『英 Cation』陽電氣を帶びたるイオン。(陰いおんに對して)

やう-いく 養育【名】やしなひ育つること。

やういく-れう 養育料【名】養育に要する費用。養料。

やういく-ゐん 養育院【名】自活の途無く、又保護者もなき老人・病人・小兒などを收養して養育する所。普通には、收容せらるる者の種類によりて、養老院・施療院・孤兒院・感化院など分立せらる。

やう-いろ 樣色【名】**ほんやういろ**(本樣色)に同じ。

やう-えい 養營【名】七十歲の異稱なりといふ。**やうきやう**(養鄕)・**やうこく**(養國)參照。運步色葉集「養營、ヤウエイ。曰二七十歲一」

やう-えい 陽影【名】太陽のひかり。ひか

やう-えき 養液【名】滋養の効ある液。

やう-えん 陽炎・陽焰・陽燄【名】**かげろふ**(陽炎)に同じ。

やう-か 八日【名】『八日(カナ)の音便』[一]日數八つ。一日の八倍。[二]その月の第八の日。十二日と共に、藥師の緣日。柳梅「傘は八日の手附(テツ)十二日」

八日の日【句】前條[二]に同じ。古今「八日の日詠める」

やう-か 養家【名】養子より、養父の家を指していふ語。養子緣組によりて、養子の入籍すべき又は入籍したる家。やうしさき。養方(ヤウカタ)。(實家に對して)

やう-か 楊家【名】楊朱の學說を祖述する學者。

やう-かい 洋海【名】**かいやう**(海洋)に同じ。

やうかい-ぎよ 洋海魚【名】**ゑんかいぎよ**(遠海魚)に同じ。

やうかいち 八日市【名】〔地〕近江國神崎郡にある町。愛知(エチ)川と蒲生(ガモ)郡との中間。御代參街道の要衝に當り、近江鐵道の停車場あり、又、湖南鐵道の終點にして、葉煙草專賣支局出張所・飛行場等あり、商家多し。

やうか-いちば 八日市場【名】〔地〕**ふくをか**(福岡)[三]の舊稱。

やう-かう 羊羹【名】『戰國策の中山の條に「中山君饗二都士大夫一、司馬子期在焉、羊羹不レ遍、司馬子期怒而走二於楚一、說二楚王一伐二中山一」とあり。**やうかん**(羊羹)參照』羊の羹(モツ)。

やう-かう 洋行【名】[一]西洋へ渡行すること。[二]支那にて、外國人經營の大商店。

やう-がう 影向【名】〔佛〕神佛が、その本體より、一時應現すること。神佛の來臨。大鏡「今日、この御堂に影向したまふらん神明・冥道(ミヤウダウ)たちも聞こしめせ」

やうかう-がへり 洋行歸【名】西洋に渡行して歸り來ること、又その人。

やうがう-しゆ 影響衆【名】〔佛〕『釋迦如來の教化を贊助するために、影の如く、響の如く、身を應現する義』ししゆ(四衆)【二】を見よ。

やうがう-しゆ 影向衆【名】〔佛〕前條の誤。盛衰記「我、かの千僧讀經の時は、影向衆として聽聞しき」

やうがう-せき 影向石【名】神の、始めて形を現したまひし所の標とせる石。

やうかう-ひ 洋行費【名】洋行するに要する費用。

やうかう-みやげ 洋行土産【名】洋行がへりの人の齎したるみやげ。

やう-がく 洋學【名】西洋の學問。西洋の語學。(和學・漢學に對して)

やう-がく 洋樂【名】**せいやうおんがく**(西洋音樂)に同じ。

やう-がくぎ 洋樂器【名】西洋の樂器。

やうかく-さう やうかく草【名】〔植〕**ふうてうさう**(風鳥草)に同じ。

やうがく-しや 洋學者【名】洋學の學者。

やうがく-じよ 洋學所【名】**ばんしよしらべじよ**(蕃書調所)を見よ。

やう-がひ 瑩貝【名】貝にて作り、又、竹もしくは木にても作り、紙・帛などを瑩(ミガ)きて、光澤を出すに用ふる具。えうがひ。**やうず**(瑩ず)參照。

やう-がまし 樣がまし【形二】【一】樣子あるらし。譯(ヤク)ありげなり。樣體ぶるやうに見ゆ。盛衰記「不參はなかなか樣がましとて、西八條へ御座(ザ)しつつ」【二】註文やかまし。わづらはし。條件つきにて、しちめんだうなり。

やう-かん 羊羹【名】『漢字の宋音。味、羊の羹(ヒツジ)の如く美なりとの義。**やうかう**(羊羹)參照』【一】生(ナマ)菓子の一。小豆(ササ)の餡に、砂糖と小麥粉などとを加へ、蒸籠(セイロ)にて蒸して製したるもの。足利時代に、すでに、數十種ありし由なるが、近世、小麥粉を用ひず、寒天を加へて煉りたるものも生ぜしより、舊來のを蒸(ジ)羊羹、寒天を加へたるを煉羊羹といひて、區別するに至り、何れも、箱に流し込みて製す。又、果實などを加へて製したるもありて、栗羊羹・柿羊羹・甘藷(モ)羊羹などの名あり。傾城反魂香「落雁・かすてら、羊羹より」【二】**やうかんいろ**(羊羹色)の略。【三】徳川時代に、江戸の江戸橋四日市なる竹屋清藏の賣り出しし、叺(スカ)形なる、一種の紙煙草入。【四】煉瓦を、長さに沿ひて、半分に切りたるもの。〔煉瓦職工の語〕

やう-かん 羊肝【名】『荆門歲節記に「洛陽人家重陽作二羊肝餅一」とあり』羊の肝(モ)。美味なるものといふ。

やう-かん 陽感【名】**しんかん**(神感)に同じ。謠曲「道祖神」「天(ア)滿つ陽感ぞめでたかりける」

やうかん-いろ 羊羹色【名】黑・紫などの染色の、褪(サ)め古びたるもの。ななつさがり。妹背山婦庭訓「羊羹色の黑小袖」

やうかん-し 羊羹紙【名】**つぼやがみ**(壺屋紙)に同じ。

やう-き 樣器・楊器【名】『樣式の器の義なりといふ』飲食の器具を載するに用ふる、陶製の盤なりとも、白木の引入(ヒキ)を、塗りたるを朱器といふに對し、呼ぶなりとも、又、實は楊器の義にて、楊(ヤナギ)の木にて製したる盃盤なりともいふ。空穗「氷(ヒ)召せば、小く割りて、蓮の葉に包みて、やうきに据ゑて」枕「雪のいと高く降りたるを、やうきに盛らせたまひて」

やう-き 陽氣【名】『易經の上經に「潛龍勿レ用、陽氣潛藏」とあり』【一】陽の氣。物の動かんとし、又發生せんとする氣運。(陰氣に對して)【二】時候。季節。氣候。【三】人の性質、又は土地などの、はれやかに賑かなること。(陰氣に對して)【四】心のおちつかぬこと。心の浮き立つこと。三代男「醉狂の喧嘩、陽氣の鑑咎(ヨウガリ)」

陽氣の所爲【名】人の言行の常軌を逸したるを、氣候のためならんと推察していふ語。

陽氣發する處、金石亦透る【句】『朱熹の文に「陽氣發處、金石亦透、精神一到、何事不レ成」となるに本づく』いかなる困難も、熱誠を籠めて、行へば打ち勝つを得る譬。〔諺語〕

やう-き 養氣【名】自己の元氣をやしなふこと。「養氣の術」

やう-きう 陽九【名】『漢書の匈奴傳に「今天下遭二陽九之厄一」とあり』厄歲に八目あるその一。八目は百六・陽九・陰七・陽七・陰五・陽五・陰三・陽三にして、常歲四千五百六十につき、厄歲五十七ありといふ。窮厄。わざはひ。災難。

やう-きう-しゆう 陽岐宗【名】〔佛〕支那にて、宋代に、今の江西省袁州府宜春縣なる楊岐山の住僧方會の創めし、一派の臨濟宗。陽岐派。「五家(ケ)・七宗」參照。

やう-き-せき 陽起石【名】〔鑛〕カルシウム・マグネシウム・鐵の珪酸鹽類なる、一種の石。即ち礬土を含まざる角閃石の一種にして、滑石片岩・綠片岩などの合分をなし、輝石の分解によりて生じたるものも多く、綠色又は灰綠色を呈して輝き、大抵、纖維狀又は放射狀に凝集す。

やう-き-は 楊岐派【名】〔佛〕**やうきしゆう**(楊岐宗)に同じ。

やう-きひ 楊貴妃【名】〔人〕【一】『楊は姓、貴妃は、唐代の女官の階級中、第一等にあり』支那唐の玄宗の寵妃。蜀州の司戶楊玄琰の女。初、皇子壽王の妃となりしが、開元二十四年、武惠妃の薨ずるや、召されて宮に入り、太眞と號し、帝寵を專らにし、儀禮、皇后に等しきに至り、天寶四年、貴妃となる。父玄琰は、齊國公を贈られ、一族多く重用せられ、從祖兄楊國忠の如き、最も顯る。帝、又、安祿山を寵して、妃と親族の約を結ばしめ、祿山も亦妃に母事せしが、天寶十四年叛し、國忠を誅するを以て名とし、關に入るや、帝蒙塵し、馬嵬(ヴイ)に至りし時、將士飢疲の餘、國忠を殺し、妃も亦遂に害せらる。時に年三十八。【二】謠曲の一。玄宗皇帝に仕ふる方士、楊貴妃の魂魄を尋ねて、蓬萊宮に至り、貴妃に會ひて、皇帝の思慕の情を傳へしに、貴妃も、千代の契は固より望む所ながら、もと仙界の者なりし身の、假に人界に生れて、楊家の女となりしなれば、心に任せざる由を述べて、悲嘆する事を作れるもの。【三】香(カウ)の一。香(カウ)、美しく芳しき匂ありて、火末は似(ニタ)に同じ。

面面の楊貴妃【句】**めんめん**(面面)の條下を見よ。

やうきひ-ざくら 楊貴妃櫻【名】〔植〕『昔、大和國奈良の僧玄宗といふ者の愛せし櫻なるより、この名ありといふ』八重櫻の一種。花は中輪、花瓣は紅色にして、先端白し。

やう-きん 洋琴【名】【一】**びやの**(洋琴)に同じ。【二】清樂の合奏に用ふる、日本製の、一種の箏。桐の材の臺に、十三條の眞鍮の絲針金を張り、月琴に用ふる義甲に似て小形なる、鼈甲製の爪を以て、普通の箏と同樣の彈奏法をなす。安政の頃、鏑木溪庵の製作に係り、明樂の小琴の形に倣へるもの。

やう-きん 楊琴【名】清樂の合奏に用ふる、一種の箏。桐材を用ひて作り、全部を黑塗にし、二個所の彫拔を設け、絃數は二十六條、眞鍮の絲針金を用ひ、二條づつ同音とし、爪と彈奏の方法とは、前條のに同じ。大阪にて考案・製作せしものにて、支那の打琴を摸したるものの如しといふ。

やう-きん 陽琴【名】明治三十年の頃、名古屋の森田仙溪の、西洋のオオトハアプ(autoharp)に擬して、それよりも一層簡單に考案・製作したる、玩具用の箏。銅材を用ひて製し、黑塗とし、金蒔繪を施し、甲に一箇の圓き穴を穿ち、絃の數は、大形なるは十五本、小形なるは十本とし、その掛方は前條と同じく、鋼鐵の絲針金を用ふ。柱(ジ)なく、爪は、義甲の元を曲げて卷き、拇指に嵌めて彈く。「に同じ。

やう-きん 洋芹【名】**おらんだぜり**(和蘭芹)に同じ。

やう-きん 洋禽【名】西洋種の鳥。

やうぎん 洋銀【名】一西洋の銀貨。二『英 German silver』銅・亞鉛・ニッケルより成る、銀白色にして硬き合金。三金屬の割合は、普通、銅百分の五十、亞鉛百分の三十、ニッケル百分の二十とし、可鍛性と延伸性とに富み、鑄造容易にして、加工し易く、且つ空氣中にて腐蝕することなきため、諸種の器具に製造し、針金としては、電氣抵抗線に用ひ、又、世界の大部分にて、補助貨幣に使用せられ、ニッケル貨幣の名を以て呼ばる。上記の主成分の外、アルミニウムを加へたるもあり、その量百分の三に及ぶ者は、アルミニウム銀の名ありて、羊羹なる銀白色を呈し、タングステン百分の一乃至二を加へたるは、プラチノイドの名ありて、抵抗大なるため、電氣機械用として尊ばる。又、少量の鐵を用ひたるもありて、白色の度及び靱性、硬度を增加せしむ。

やうき-もの 陽氣者【名】陽氣なる人。快活なる人。

やうきやう 養鄕【名】五十歲の異稱といふ。**やうえい**(養營)・**やうこく**(養國)參照。運歩色葉集「養鄕、ヤウキヤウ。曰二五十歲一」

やうきやう 佯狂・陽狂【名】『史記の殷本紀に「箕子懼、乃佯狂爲レ奴」、後漢書の丁鴻傳に「鴻初與二九江人鮑駿、同事二桓榮、甚相友善、及二鴻亡レ封、與レ駿遇二于東海一、陽狂不レ識レ駿、駿乃止而讓レ之曰、…」とあり。佯・陽の二字、相通ずるなり』佯(ヤウ)りて、狂氣らしく振舞ふこと。にせきちがひ。

やう-きゆう 楊弓【名】『小兒の、楊(ヤナ)の枝にて作りたる弓を弄びしに因るかとも、又、支那の養由基が楊柳の葉を射たりとの故事に本づきて、小き的矢なるよりいへるかともいひ、又、一說に、楊貴妃の玩びしに因るともいふ』長さ二尺八寸ほどの、遊戲用の弓。近代は、蘇枋(ヲウバン)・華櫚(リウキウ)・紫檀等の材にて作り、多くは繼弓にて、堋(ナラ)は七間半の距離に設くるを定式とし、黑革を張り、中に徑三寸ほどの的を釣る。上古、公卿の間に玩ばれ、殊に七夕には、第一とせられたりといふ。庭訓往來「楊弓、雀小弓膳夫」

やうきゆう-し 楊弓師【名】楊弓の製造を職とする人。

やうきゆう-てん 楊弓店【名】次條に同じ。

やうきゆう-ば 楊弓場【名】楊弓の遊をなさしむる家。矢拾に若き女を抱へて、賣女の風起るに及んで、終に廢る。やば。

やう-ぎよ 養魚【名】一魚を飼養すること。二人工によりて魚類を飼養・蕃殖せしむること。

やう-きよく 陽極【名】〔理〕『英 Positivo pole』電池の極(クヰヨク)の一。電流の、電池より外部に流出する端。多くは、銅又は炭素なり。(陰極に對して)

やうぎよ-ち 養魚池【名】養魚を行ふため行ふ場所。

やうぎよ-ぢやう 養魚場【名】養魚(一)を行ふ場所。「めの池。

やうぐうらく 央宮樂【名】**やうぐく**(央宮樂)に同じ。

やうくん 養君【名】養ひ育つる主君。やしなひぎみ。保元「一宮重仁親王は、故刑部卿忠盛の養君にてましませば」

やうぐ-らく 央宮樂【名】雅樂の一。黃鐘(ワウキヤウ)調に屬する唐樂。やうぐうらく。

やう-くわ 陽卦【名】『すべて、象を男に取るによりていふ』八卦(クワケ)の中の、震(シン)・坎(カン)・艮(ゲン)の三卦、卽ち☳と☵と☶とにして、震を長男、坎を中男、艮を少男とす。(陰卦に對して)

やう-くわ 洋貨【名】一西洋の貨幣。二西洋の貨物。

やう-くわ 瘍科【名】漢方醫の一分科、癰(ヨウ)・疽(ソ)などの皮膚病を治療するもの。外科。

やう-くわ 養花【名】次條の二語を見よ。

養花の雨【句】花曇の時に降る雨。

養花の天【句】『釋仲林の花品に「越之好尙、惟牡丹、澤國此月多有二輕雨微雲、謂二之養花天一」とあり』花曇(ハナグモリ)の天「に同じ。

やう-くわ 洋畫【名】**せいやうぐわ**(西洋畫)に同じ。

やう-くわ 陽畫【名】寫眞にて、種板より、燒附によりて紙面に取りたる形象、卽ち明暗・黑白の部分の、その實物と同樣に見ゆるもの。生畫。(陰畫に對して)

やう-くわい 洋灰【名】**せめんと**に同じ。

やうくわき 揚貨機【名】**ういんち**(捲揚機)に同じ。

やう-ぐわし 洋菓子【名】**せいやうぐわし**(西洋菓子)に同じ。

やう-くわん 洋館【名】**せいやうくわん**(西洋館)に同じ。

やう-くわん 陽關【名】〔地〕『玉門關の南に當るよりいふ』古、支那甘肅省安肅道敦煌縣の西南百五十淸里に在りし關。漢代の設置に係り、都尉ここに鎭し、玉門關と並び稱して、二關の名あり。西域に通ずる要路に當り、これを出でて西すれば、沙漠の地となる。

陽關三疊【句】支那唐の王維の「送二元二使一安西一」と題する詩「渭城朝雨浥二輕塵一、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出二陽關一無二故人一」は、古來、送別の宴に唱へられ、これを唱ふるに、後の三句を二度重ぬる習なること。

陽關の曲【句】送別の時に唱ふる前條の王維の詩。

やう-けい 家請【名】『ひとうけ(人請)參照』貸家を借る時の請人(ウケニン)。博多小女郎「口あひ・家請」

やう-けい 養兒【名】父又は母の養子にて、己より年長なる男子。(養弟に對して)

やう-けい 養系【名】養家の系統。

やう-けい 洋雞【名】西洋種の雞。

やう-けい 養雞【名】雞を飼養すること。

やう-けう 洋教【名】**きりすとけう**(基督教)に同じ。

やう-げつ 陽月【名】『陰の氣の極點に達して、陽氣のすでに萌す月の義。「一陽(イチヤウ)來復」參照』陰曆十月の異稱。

やう-けん 洋犬【名】**せいやういぬ**(西洋犬)に同じ。

やう-けん 洋劍【名】**さあべる**(洋劍)に同じ。

やう-げん 揚言・颺言【名】人に知らしむるために、ことさらに聲を張り上げて言ふこと。公然と言ひふらすこと。

揚言する者は、信寡し【句】『逸周書に「多レ私者不レ義、揚言者寡レ信」となるに本づく』大言・壯語する者は、實行に乏し。〔諺語〕

やう-げん 陽言【名】『戰國策に「陽二言救一韓」とあり』表面をいつはりて言ひふらすこと。

やうげん-じ 養源寺【名】一但馬國豐岡町にある、曹洞宗の寺。大原山と號す。本尊は正觀世音菩薩。開山は天寶育嚴。慶長元年、豐岡城主杉原帶刀(ハカセ)の建立。諸堂の整備、山陰第一と稱せらる。二紀伊國有田郡廣村にある、日蓮宗の寺。長流山と號す。正德元年、德川吉宗の生母淨國院の本願により、德川賴宣、その觀魚の地を寄付して建立したるもの。出世大黑天像の靈驗を以て聞ゆ。

やうげん-ねん 養源院【名】京都市下京區大和大路東に入る、三十三間堂回(マワ)町にある、天台宗の寺。本尊は阿彌陀佛、開基は法印盛伯。文祿三年、豐臣秀吉の妾淀君、父淺井長政の追福のために建立し、長政の法號を取りて寺號とし、その弟盛伯を住持とす。後、火災に罹りしより、德川秀忠夫人發願して再建す。その際、伏見城の一部の緣板を轉用して、方丈緣側の天井板とし、慶長五年六月の役の戰血を印する由傳へ、血天井と稱す。

やう-こ 養虎【名】虎を飼養すること。

養虎の患【句】患を後日に殘すことの譬。平家「今井・樋口・楯・根井とて、木曾が四天王のその一つなれば、これらを助けられんは、養虎の患あるべし」

やう-こ 羊祜【名】〔人〕支那晉代の人。字は叔子。泰山南城に生る。世世襄陽の太守たり、祜に至りて九世、皆、淸德を以つて聞ゆ。祜、學德並び高く、民人、悉く德化す。太傅に任ぜらるれしより、羊太傅とも稱せらる。だるのひ(墮淚碑)參照。

やう-ご 洋語【名】**せいやうご**(西洋語)に同じ。

やう-ご 養護【名】養育し保護すること。

やう-こう 陽侯【名】次條を見よ。

陽侯の波【句】『淮南子の覽冥篇に「陽侯之波」とありて、註に、陽侯陵陽國侯也、其國近水、溺死於水、其神能爲大波、有所傷害、因謂之陽侯之波」と見ゆ』風波。風浪。

やう-とう 洋紅【名】**やうべに**(洋紅)に同じ。

やう-こく 陽國【名】陽氣に富む國。南方の國。(陰國に對して) 國姓爺「この大明は、南陽國にして、日の國なり」

やう-こく 養國【名】六十歳の異稱なりといふ。**やうえい**(養營)・**やうきやう**(養鄉) 運歩色葉集「養國、ヤウコク。日二六十歳」

やう-こくちゆう 楊國忠【名】〔人〕支那唐の玄宗の寵臣。初の名は釗、楊貴妃の從祖兄。貴妃の父玄璲の死後、その家を護り、因りて貴妃の姨(後の虢國夫人)に通じ、放浪久しくせし後、玄宗に擢用せられ、計算を主り、累遷して監察御史に至り、なほ累遷し、名を國忠と賜はり、官、右相に至り、顯職數四を兼ね、驕奢度なく、天寶十四年、安祿山反し、國忠の罪を數へ、これを誅するを名とす。翌年、祿山、關に入るや、國忠、帝を奉じて蜀に赴かんとし、往いて馬嵬に次せし時、將士に殺さる。妻子及び虢國夫人等も、陳倉に走りて殺さる。

やう-ごとなし 止事無し【形一】**やんごとなし**(止事無し)の音便。〔古語〕源氏「よき娘おはするやうごとなき所所」 空穗「斯くやうごとなく物したまふを」

やう-ごふ 永劫【名】〔佛〕『無量壽經の上卷に「兆載永劫」とあり』永久の長時。えいごふ。「未來永劫」

やうさい 榮西【名】〔人〕**えいさい**(榮西)を見よ。

やう-さう 洋裝【名】㊀西洋風の服裝、又は裝飾。「洋裝・斷髮の美人」 ㊁**やうざう**(洋裝)に同じ。

やう-さう 影草【名】「探竿(カン)影草」を見よ。

やう-ざう 影像【名】**えいざう**(影像)に同じ。

やう-さん 洋傘【名】『西洋風の傘の義』

かうもりがさ(蝙蝠傘)に同じ。

やう-さん 養蠶【名】蠶兒を飼養すること。こがひ。

やう-さん 洋算【名】洋式の算法。筆算。「(和算に對して)」

やう-ざん 陽山【名】平地に特立して、四方の觀望に適し、敵の攻め上るに不便なる山。をとこやま。(陰山に對して)〔古の兵家の語〕

やうさん-こく 養蠶國【名】養蠶の盛んに行はるる國。即ち我國・伊太利など。

やうさん-しつ 養蠶室【名】**さんしつ**(蠶室)に同じ。

やう-し 養子【名】養子緣組によりて、子となりたる者。女子なる場合には、養女といふ。やしなひご。とりこ。義子。養子を貰ふなら、臍の上【句】『帶を下腹にするは、上品なる人のせぬ事なるよりいふ』養子には、上品なる育の者を擇びて貰ふべし。〔諺語〕

やう-し 楊枝【名】楊(カヤ)の枝。

やう-し 洋紙【名】**せいやうし**(西洋紙)に同じ。(和紙に對して)

やう-し 佯死・陽死【名】『史記の李將軍傳に「廣佯死」とあり、漢書の李廣傳には、佯を陽と書けり。二字、相通ずるなり』死にたる樣をよそほふこと。

やう-し 揚子【名】〔人〕**やうゆう**(揚雄)の敬稱。

やう-し 楊子【名】〔人〕**やうしゆ**(楊朱)の敬稱。

やう-し 羊齒【名】〔植〕『各小葉の缺刻の形につきていふ』**ようらじろ**(裏白)〔㊁の漢名。

やう-じ 楊枝【名】『印度に、齒木(シモク)として、小枝の頭を嚙みて細條となし、我國の房(ヤ)楊枝の如くにして、齒牙を磨き清むるに用ふる習俗あるもの、支那に傳はりて、專ら楊材を用ひて作りたるより起れる名稱。隋書の眞臘傳に「每旦澡洗以二楊枝一淨レ齒、讀二誦經呪一、又澡灑乃食、食罷還用二楊枝一淨レ齒、又讀二經呪一」、西域記に「漱レ口嚼二楊枝一」とあり。齒木の梵語は Dantakāṣṭha(憚哆家惡託)』齒牙を掃除するに用ふる具。房楊枝・小(コ)楊枝・刷毛(ケ)楊枝などの種類あり。禁秘抄「女官御楊枝二を雙二指御簾一」

楊枝一本【句】極めて僅かなる物事の譬。狂言盜人連歌「まだ楊枝一本取りは致しませぬ」

楊枝で重箱(ヂウバコ)の隅をほじくる【句】「重箱の隅を楊枝でほじくる」に同じ。〔諺語〕

楊枝に目鼻【句】次條の略。

楊枝に目鼻を附けたやう【句】痩せたる人の形容。「卵に目鼻」・「炭團(ヅダン)に目鼻」參照。

やう-じ 陽字【名】**やうもん**(陽文)に同じ。(陰字に對して)

やう-じ 洋字【名】西洋の文字。

やうじ-いれ 楊枝入【名】楊枝を入るる容物。小き箱又は袋物細工などを用ふ。「見よ。楊枝刺(サシヨウ)の類。

やう-しう 陽秋【名】「皮裏(リ)の陽秋」を見よ。

やう-しう 揚州【名】〔地〕支那の一部。禹貢九州の一にも、漢代十三州の一にも、その名見ゆれど、前者は、もとより草昧の世、確說の限にあらざれども、淮河より東南、東海に瀕するまでの間の稱なりしものの如く、後者は、前漢と後漢とによりて、地域に異同あれど、大體に於て、今の安徽・江蘇二省の大部分と浙江・福建・江西諸省の地とを包括し、後、三國の時、又、曹魏は、今の安徽省の北部に、孫吳は、長江以南に於て、安徽・江蘇・浙江・江西・福建の地に、これを置き、晉一統の後も、舊名を襲用し、爾後、南朝の間、歷代、主として、これに因りたれど、面積は漸次縮小して、遂に今の南京附近」帶の稱呼たるに至り、隋に至りて、又、これを設けたれども、僅かに江蘇省淮揚海道に屬する府の名稱たるに至り、そのまま前清の末年に及びしが、今は江都縣と改稱せらる。地勢平坦、天津に通ずる大運河に瀕し、各處に湖沼ありて、交通甚だ便、商工業は特に擧げて言ふべき者なけれど、街上港灣共に繁華なる上、隋の煬帝の江都宮を置きし處、又、マルコポオロの三年間仕官せし所として名高く、又、佛敎の盛地にして、今も、佛書の出版盛んなり。

楊州の鶴【句】「鶴に騎って楊州に上る」を見よ。

やうしう-くわん 楊州冠【名】衞府(ヲ)の人の著用せし、一種の冠。西宮記「以二衞府冠一爲二楊州冠一」

やう-しうん 揚子雲【名】〔人〕**やうゆう**(揚雄)に同じ。

やう-じ-うを 楊枝魚【名】〔動〕總鰭類に屬する魚。體形、甚だ細長く、後方は殊に細くして、長さ一尺餘に達し、長形の尾あり、齒を缺く。暖地の產にして、我國到處の內海等の、藻多き所に棲息す。

やうし-えんぐみ 養子緣組【名】〔法〕親子の關係無き者の間に於て、養はれたる者が、養ひたる者の嫡出子たる身分を取得し、養はれたる者が、養ひたる者の家に入る効力を發生する行爲。その養ひたる者を養親といひ、養はれて、嫡出子たる身分を取得する者を養子といふ。

やうし-えんぐみ-じけん 養子緣組事件【名】〔法〕養子緣組の無効・取消又は離緣を目的とする訴訟事件。

やうし-おや 養子親【名】養家なる、養子の父母たる者。やしなひおや。とりおや。養父母。二代男「養子親に懸る人」

やうじ-がくれ 楊枝隱【名】楊枝を拵ち、呪文(ジユモン)を唱へて行ふ、隱形(オンギヤウ)の術。浮世床「女の事では、楊枝隱だはな、用も無くて通ふ奴(ヤ)かの」

やうじ-がた 楊枝形【名】**やうじほ**(楊枝葉)に同じ。運歩色葉集「楊枝形、ヤウジガタ」

やうし-き 樣式【名】㊀一定の形式。ひながた。かた。模樣。 ㊁かたち。さま。

やうじ-けづり 楊枝削【名】木を削りて楊枝を作ること、又、それを職とする人。「子。

やうし-ご 養子兒【名】養子たる兒。養

やうし-さき 養子先【名】養子に行きたる先方の家。養家。

やうじ-さし 楊枝刺【名】楊枝をさし込みておくに用ふる物。懷中などして携ふるは、烟草入に似たる形の小き袋物を用ふ。楊子入(イレジ)の類。

やうし-しよくぶつ 羊齒植物【名】〔植〕しだしよくぶつ（羊齒植物）に同じ。

やうじ-たけ 【名】空穗（ウツ）の竈（トカ）の外側の一部。

やう-しつ 羊質【名】次條を見よ。

羊質虎皮【句】『素書に「羊質虎皮者、柔」又、後漢書の劉焉傳論に「羊質虎皮、見レ豺則恐」とあり』次條に同じ。

羊質にして虎皮【句】『揚子法言の吾子篇に「羊質而虎皮、見レ草而說、見レ豺而戰、忘二其皮之虎一也」とあり』表面は立派なれども、内部にその實なき譬。

やう-しつ 洋室【名】**やうま**（洋間）に同じ。

やう-しつ 養實【名】養子と實子と。養家と實家と。養系と實系と。「じがた。

やうじ-は 楊枝葉【名】鏃の形の一。やう

やうし-はうげん 揚子方言【名】〔書〕支那漢代に、各地より朝廷に參勤せる使者の方言一萬一千九百餘字を聚錄したるもの。十二卷。揚雄の著なる由、風俗通に記さるれど、洪邁の容齋隨筆には、これを否定せり。舊本、題して、輶軒使者絕代語釋別國方言といひ、或は、單に、別國方言とも、方言ともいふ。

やうじ-ばこ 楊枝箱【名】小楊枝入とし

やうし-はふげん 揚子法言【名】〔書〕論語に倣ひて、訓言を述べたるもの。十三卷、十三篇に分たる。支那前漢の揚雄の著。老子の思想と關係深く、性善・性惡の二說を折衷して、善惡混淆說を主張せり。

やうし-ぶん 養子分【名】養子たる身分、又その人。丹波與作「御養子分の約束にて、苦から取る花嫁御」

やうじ-みせ 楊枝見世・楊枝店【名】小楊枝・房楊枝を賣りし商店。和合人「鐵漿を落して、楊枝見世牙をとがらして」

やうし-むこ 養子聟【名】**むこやうし**（聟養子）に同じ。

やうし-むすめ 養子娘【名】**やうぢよ**（養女）に同じ。日本振袖始「養子娘にやった。おれが娘でない」

やう-しん 養親【名】養子緣組によりて親となりたる者。養父母、又はその一方。

やしなひおや。とりおや。

やう-しん 痒疹【名】〔醫〕『羅 Prurigo』一種の慢性皮膚病。大抵、生後半歲頃より、身體の諸部に痒みを感じ、上下肢の伸したる側面に於て殊に甚しく、毎歲、一定の季節に增惡す。俗に雁瘡（ガサン）と稱するも、多くはこれなり。經過は輕症と雖も、幼時より二十歲前後まで持續し、重症にありては三四十歲に及びても全治せざるもあれど、何れも、早晚自然に治癒するを常とす。

やう-しん 楊震【名】〔人〕支那後漢の名士。字は伯起。弘農華陰の人。博覽・明達、關西の孔子と稱せらる。生徒に教授し、徵聘に應ぜず、年五十にして、始めて州郡に仕へ、荊州刺史に累進す。

やう-しん 陽神【名】男の神。（陰神に對して）王統記「陽神・陰神、この國を生みたまひしが」「に同じ。

やう-じん 洋人【名】**せいやうじん**（西洋人）

やうしん-さう 楊眞操【名】琵琶の祕曲の一。盛衰記「仁明天皇の御宇、承和二年に、掃頭頭貞敏、遣唐使として牒狀を賜はり、觀密府に參じ、上覽に達して、琵琶の博士を望み申されしに、開成二年の秋の比、廉承武を送られて、祕曲を授けられ、我朝に傳へしは、流泉・啄木・楊眞操の三曲なり」

やう-しん-し 養親子【名】養親と養子と。

やうしん-りう 楊心流【名】柔術の一派。德川時代の初期、肥前國長崎の醫師三浦楊心を祖とすとも、同地の小兒科醫秋山四郎兵衞由時の、支那に渡り、博轉といふ者に習ひ得て、なほ工夫を加へて創めしものともいふ。

やう-しや 羊車【名】【名】■釋名に「羊車、羊祥也、祥善也、善飾之車、今犢車是也」とあり』美麗なる車。一說に、羊に牽かする車。日〔佛〕**やうろくごしや**（羊鹿牛車）を見よ。

やう-じや 楊枝屋【名】楊枝の製造又は販賣を業とする家、又その人。

やう-じや 羊車【名】【名】■釋名に「羊車、羊祥也、祥善也、善飾之車、今犢車是也」とあり』美麗なる車。一說に、羊に牽かする車。日〔佛〕**やうろくごしや**（羊鹿牛車）を見よ。

やう-じや 楊枝屋【名】楊枝の製造又は販賣を業とする家、又その人。

海の上。

やう-じやう 養生【名】生命をやしなふこと。健康の增進をはかること。攝生。衞生。保養。諸國はなし「忍びて、養生をする病人」

やうじやう-か 養生家【名】自己の養生に注意する人。攝生家。衞生家。

やうじやう-がく 養生學【名】**えいせいがく**（衞生學）に同じ。

やうじやう-ざしき 養生座敷【名】養生のために居る座敷。一代女「西國がたの女中、州原町に養生座敷を借りて」

やうじやう-しよ 養生所【名】■養生をなす場所。日德川幕府にて、小川笙船の獻議にもとづき、享保七年十二月、町奉行支配の下に、江戸小石川藥園（今の東京帝國大學附屬の植物園）に設けたる施療所。小川氏、代代、その肝煎役に任ぜられ、明治元年廢せらる。笙船の建議書には、施藥院とあり、一時は貧病院とも稱したり。

やうじやうしよきもいり 養生所肝煎【名】江戸幕府の職制の一。前條參照。

やうじやう-にち 陽將日【名】陰陽家にて嫁娶に吉なりといふ日。台記別記「女子入內事、……正月十九日可也、但爲二陽將日一」「に同じ。

やうしゆ 洋種【名】**せいやうだね**（西洋種）

やうしゆ 洋酒【名】**せいやうしゆ**（西洋酒）に同じ。「分取したる液體の部分。

やう-しゆ 羊脂油【名】羊肉の脂肪より

やう-しゆ 楊朱【名】〔人〕支那春秋・戰國の頃の哲學者。字は子居。時代は、墨子よりはやや後なるが如し。著書の有無は知るべからざれども、列子の第七卷なる楊朱篇に依れば、亂離の世の影響を受けて、人は自己のために生存するものにして、社會乃至國家とは何等の關係なく、生前に快樂を盡すべしとの利己的快樂說を說き、一面には極端なる厭世主義をも包含し、墨翟の說と並行して、一時、天下を風靡し、孟子は、口を極めて、兩者を攻擊せり。**やうぼく**（楊墨）參照。

楊朱、岐路に泣く【句】『淮南子の說林篇に「楊子見二逵路一而哭レ之、爲下其可二以南一可中以北上、墨子見二練絲一而泣レ之、爲下其可二以黃一可中以黑上」とあり』本同じくして、末の異なるを悲しむ譬。

やう-じゆ 楊樹【名】楊（カヤ）の樹。

やうしゆ-てうせんあさがほ 洋種朝鮮朝顏【名】〔植〕茄（ナス）科に屬する、一年生の草。普通の朝鮮朝顏に似て、花、やや小く、果實は、裂開すること深くして、殆く基部に及び、且つ、刺、長大にして鋭し。有毒植物なれど、葉も、種子も藥用に供せらる。せいやうきちがひなすび。

やう-しゆん 陽春【名】■『陽氣下の發動する季節なるよりいふ』はる。春季。日陰曆正月の異名。日古の支那の楚國の歌曲の名。次條を見よ。

陽春・白雪【句】『宋玉の對二楚王問一と題する文に「客有下歌二於郢中一者上、其始曰二下里巴人一、國中屬而和者數千人、其爲二陽阿薤露一、國中屬而和者數百人、其爲二陽春白雪一、國中屬而和者不レ過二數十人一、引レ商刻レ羽、雜以二流徵一、國中屬而和者不レ過二數人一而已、是其曲彌高、其和彌寡」とあるに本づく』■古の支那の楚國の曲調高き歌曲の名。日すべて、曲調高き歌。

やうじゆりよう-の-け やうじゆりようの毛【名】馬の足の下部・後方、蹄よりは少し上に、特に長く生えてある毛。

やう-しよ 洋書【名】西洋の書籍。西洋本。洋本。（和書・漢書に對して）

よう-しよく 洋食【名】西洋風の食事。西洋料理。

やうしよく-てん 洋食店【名】客の注文に應じて洋食を供する家。

やうしよく-や 洋食屋【名】前條に同じ。

やうしよ-しらべしよ 洋書調所【名】**ばんしよしらべしよ**（蕃書調所）を見よ。

やうし-よめご 養子嫁御【名】養子の嫁御。丹波與作「姫君樣は關東へ、養子嫁子にお下り」

やうし-るね 羊齒類【名】〔植〕**やうししよくぶつ**（羊齒植物）に同じ。

やう-す 様子【名】『朱子語録に「小學書做二人底様子」とあり。す(子)は接尾語』一ありさま。狀況。形式。模様。體裁。様(ヤウ)。様體。二なりふり。容姿。様體。三わけ。事情。仔細。様(ヤウ)。狂言「唐人相撲「様子、段段聞居けた」生寫朝顔話「妾(ワタ)は、もと中國うまれ、様子あって都の住居(ヒスマ)」四ただならぬ狀態。變兆。一代男「末末馴染(ナジ)みて、もし、又、御なかに様子が出來たらば、近所に、さいはひ子安の御地藏は御座り」

様子を附く【句】次條に同じ。五人女「髪はいつ櫛の齒を入れしや、しどもなく亂れしを、いつそこそこにからげて、身に様子も附けず」

様子を作る【句】**やうすぶる**(様子振る)

やうず 【名】春の、雨を催す南風。〔播磨國・四國の方言〕

やうず 瑩ず【動佐變他】瑩貝(ヤウヒ)を用ひて、光澤を出す。えうず。〔古語拾遺〕麻「いみじくやうじたる、白き衣」榮花「御ぐし……、ひまなくやうじかけたるやうにて、御たけには、七八寸ばかりは餘らせたまへらんかし」

やうず 養ず【動佐變他】やしなふ。養育す。曾我「我等が君をやうじ奉るに、敵こはくして、國中に隱れがたし」

やうすける 【動下一自】養生をなす。〔但馬國の方言〕

やうす-ぶる 様子振る【四自】**やうだいぶる**(様體振る)に同じ。

やうす-みせ 様子見【名】様子のすぐれたるを見せたく思へること。武藏義理物語「様子みせなる草花に心を寄する風情して」

やう-すね 羊水【名】〔動〕『羅Liquorami』羊膜の中にありて、胎兒を圍繞する液。姙娠の初期には、無色・透明なれども、後に至れば、混濁して、白色又は帶黃色を呈し、一種の臭氣を有す。羊膜液。「じ。

やう-せい 洋青【名】**ぷろしやんぶりゆう**に同じ。

やう-せい 養成【名】養育して成長せしむること。やしなひたつること。「所。

やうせい-じよ 養成所【名】養成する場

やうぜい-てんわう 陽成天皇【名】〔人〕第五十七代の天皇。御名は貞明(サダアキ)。清和天皇の皇長子。御母は皇太后藤原高子。在位八年(紀元一五三七年—一五四四年)。讓位の後、天曆三年九月御落飾、その翌月崩御。御年八十二。

やうぜい-ゐん 陽成院【名】〔人〕前條に同じ。榮花「陽成院の御子だち、いみじうすきをかしうおはしまさひて」

やう-せき 陽石【名】一いんやうせき(陰陽石)を見よ。二陰莖の形なる石。

やう-せつ 養拙【名】『潘岳の閒居賦に「終優游以養レ拙」とあり』うまれつきのままなる拙き德を養ふこと。

やうせつ 養拙【名】〔人〕**てらゐやうせつ**(寺井養拙)を見よ。

やうせつ-りう 養拙流【名】和様の書家の一。寺井養拙を祖とす。

やう-せん 洋船【名】**せいやうがたせん**(西洋形船)に同じ。

やう-せん 陽船【名】一輕快なる小船。(陰船に對して)二水戰の時、陽の備に當る船。(陰船に對して)

やう-せん 陽仙【名】馬の目の上にある旋毛(ツム)。みあげのつむじ。

やうそう 羊僧【名】〔佛〕『大智度論の卷三、又、地藏十王經の卷五に、四種僧の一として記せる啞(瘂)羊僧の略。啞羊は、啞(ヤフ)の羊(ヒツ)にて、至愚なる者の譬』持戒を知らず、これを犯しても悔い除くことを知らざる比丘(ビク)。

やう-そう 羊僧【代】『前條の語の轉義』僧の謙遜していふ第一人稱。東鑑「偏就二羊僧諷詞一、思止畢」

やう-そく 陽息【名】出づる氣息。呼氣。(陰息に對して)

やう-そく 養息【名】**やうし**(養子)に同じ。

やう-そふ 養祖父【名】養親の父。

やう-そぼ 養祖母【名】養親の母。

やう-だ 羊駝【名】〔動〕『何れも、體貌羊に似たるによりていふ』偶蹄類中、反芻類・駱駝科・ラマ屬の動物、即ちラマ・アルパカ等の總稱。すべて、南米の特產なり。(現在にては、駱駝科は、この屬と駱駝屬とを含むのみなり)

やう-だい 様體【名】一すがた。なりふり。やうす。容姿。落窪「君のなり果てたまはんやうだいも見んとて」增鏡「髮(ムカ)ざし・やうだい、これも、けしうはあらず見ゆ」二ありさま。狀況。事情。宇治「物のやうだいも知らせたまはざりけり」謠曲「道の様體をも御尋ねあらうずるにて候」三病氣のありさま。病狀。病勢。容態。「様體、善からず」『様體を聞く』四しかた。手段。方法。様(ヤウ)。五様體ぶること。容態。五人女「我家の裏なる草花見るさへ、斯くやうだいなり」「臺。

やう-だい 陽臺【名】山の南面にある樓臺の夢【句】「巫山(ウザ)の夢」に同じ。太平記「珊瑚の樹の上に、陽臺の夢、長くさめ、連理の枝のほとりに、驪山の花、自ら濃かなり」

やうだい-がき 様體書【名】病狀を記したる書附(カキ)。診斷書。容體書。容態書。

やうだい-くさし 様體臭し【形一】様體ぶりてあり。もったいくさし。

やうたいふ 羊太傅【名】〔人〕**やうと**(羊祜)に同じ。東關紀行「樹陰に石を高く積み上げて、目に立つさまなる塚あり。……、梶原が墓となん答ふ。……。羊太傅が跡にはあらねども、心ある旅人は、ここにも涙をや落すらん」

やうたい-ぶる 様體振る【動四自】重重しく振舞ふ。様子ぶる。もったいぶる。容體ぶる。

やうだい-まんざい 煬帝萬歲【名】**まんざいらく**(萬歲樂)一に同じ。

やうだい-まんざい-らく 煬帝萬歲樂【名】**まんざいらく**(萬歲樂)一に同じ。

やう-たう 洋刀【名】**さあべる**(洋劍)に同じ。

やう-たう 羊桃【名】〔植〕**じれんし**(五斂子)の漢名。

やう-たう 洋島【名】〔地〕**たいやうたう**(大洋島)に同じ。(陸島に對して)

やう-だう 陽道【名】『禮記の昏義篇に「天子理二陽道一、后治二陰德一」とあり』陽の道。男子の道。

やう-ち 家内【名】一家のうち。家族。家内(イナ)。五人女「や内殘らず、……無理に帷子(ヒカラ)脫がせて」

やう-ちん 永沈【名】『永く沈みて出でざる義。還魂紙料の卷上に「鄙俗には、永沈を地獄の名と思ふも、この雙六の行はれし餘波なり」とあり』一浄土雙六にて、一たび入れば、終まで出づること能はざる場所。二ぢごく(地獄)に同じ。

永沈に落つ【句】一浄土雙六の遊にて、永沈の場所に入る。二永久に浮び出でぬ譬。

やうちん-すごろく 永沈雙六【名】『永沈(ヤウチン)一を設けて、一たびその場所に入れば、永久に出づること能はずと定めてあるよりいふ』**じやうざすごろく**(浄土雙六)に同じ。

やう-ちやう 羊腸【名】一『呂氏春秋に「太行之山、盤紆如二羊腸一」とあり』羊のはらわた。二『史記の魏世家に「魏伐趙、斷二羊腸、拔二閼與一」、魏武帝の苦寒行に「羊腸阪詰屈」とあり。羊の腸は、草食動物の常として、極めて長きより、山路の長く屈曲せるに譬ふ』阪路の、屈曲して險しきさま。又その阪路。つづらをり。九折。太平記「谷深く、石滑かにして、路、羊腸を踐みて上る事二十餘町」

やう-ちやう 横笛【名】**わうちやく**(横笛)の音便。平家「腰よりやうちやう抜き出し、ちっと鳴らいて」

やうちゆう-びやう 恙蟲病【名】〔醫〕**つつがむしびやう**(恙蟲病)に同じ。

やう-ぢよ 養女【名】他人の娘を貰ひて、自己の子とすること、又その娘。やしなひむすめ。やうしむすめ。とりむすめ。もらひむすめ。

やう-つつり 家移【名】**いてん**(移轉)に同じ。天王寺まるり「まあ家うつりの心で」

やうつつり-がゆ 家移粥【名】家移の時、手傳ひたる人に供する粥。

やうてい 養丁【名】古、衞士(エジ)と仕丁(ヤウテイ)との費用を供給するために、別に充てし丁なりといふ。**やうぶつ**(養物)參照。三代實錄「諸衞士仕丁等愁訴云、……仰二養丁之輪物一、以充二羈旅之資用一」

やうてい 養弟【名】父又は母の養子にて、己より年劣なる男子。(養兄に對して)

やうてん 陽天【名】九天(キウテン)の一。東南方にある天。

やうでんき 陽電氣【名】〔理〕『英 Positive electricity』硝子の棒を絹にて摩擦する時、その硝子の棒に發する電氣、及びこれと同性質なる電氣。ぷらす電氣。正(セイ)電氣。(陰電氣に對して)

やうでんし 陽電子【名】〔理〕『英 Positive electron』でんし(電子)を見よ。

やうーとう 羊頭【名】羊の頭部。

羊頭、狗肉【句】次條の略。「羊頭狗肉の誹を免れず」

やうーとう 羊頭【句】次條に同じ。羊頭を掲げて、狗肉を賣る。羊頭を懸けて、馬肉を賣る【名】『無門關に「懸二羊頭一賣二馬肉一」とあり』次條に同じ。羊頭を懸けて、馬脯を賣る【句】『漢書の光武記に「懸二羊頭一賣二馬脯一、盜跖行二孔子語一」とあり』看板に善き物を示して、惡しき物を賣る。「疱瘡」

やうーとう 羊痘【名】羊の身體に發する

やうーとう 洋燈【名】『洋風の燈火の義』らんぷ(洋燈)に同じ。

やうーとく 陽德【名】㊀陽㊁の德。萬物を發育せしむる、宇宙の力。謠曲「氷室」「陽德折を違へずして、雨露霜雪の時を得たり」㊁表むきに行ふ德行。(陰德に對して)「こと。

やうーとく 養德【名】心の德を養成する

やうーとぢ 洋綴【名】**せいやうとぢ**(西洋綴)に同じ。

やうーな 益無【形】次條の語幹。やうなしの意。感動句に用ふ。〔古語〕源氏「あなやうな。よからぬものならん」

やうーなし 益無し【形一】**やくなし**(益無し)の音便。〔古語〕伊勢「昔、男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして」望月「おのが身の內に、親を養はんにやうなき所あらば、施し奉るべし」

やうーのーたち 陽太刀【句】たち(太刀)の「を見よ。

やうーのーまく 陽幕【句】まく(幕)の條下を見よ。

やうーばい 楊梅【名】〔植〕**やまもも**(楊梅)に同じ。謠曲(芭蕉)「楊梅・桃李・數數の色香。

やうばいーさう 楊梅瘡【名】『膿の凝結せる樣、楊梅皮(ヤウヒ)に似たりといふ』全身、殊に面部に膿物の發する黴毒。

やうばいーたうり 楊梅桃李【名】潤朱(ルウコ)・萌葱(キエ)・白などを段絨(ダンジン)にせるもの。「に同じ。

やうばいーひ 楊梅皮【名】ももかは(桃皮)

やうばいーりう 楊梅流【名】籠築(ハヒヂ)の一流。藤原敦家の孫季行を祖とす。二條流と共に、應仁の頃に至りて絕ゆ。

やうーはう 養方【名】**やうか**(養家)に同じ。

やうーはう 陽報【名】多くの人の耳目に觸るる應報。「じ。

やうーはく 洋白【名】**やうぎん**(洋銀)に同

やうーはくぎ 楊伯起【名】〔人〕**やうしん**(楊震)に同じ。

やうーはつ 洋髮【名】女の髮の結ひ方の、「洋風なるもの。

やうーひ 羊皮【名】羊の毛皮。

やうひーし 羊皮紙【名】紙の用をなすべきやうに調製したる、羊又は山羊の皮。

やうーふ 養父【名】㊀『五代史の唐莊劉后傳に「幸二張全義第一、酒酣命レ后拜二全義一爲二養父一」とあり』父に代りて養育したる男。(養母㊁に對して)㊁養家の父親。

やうーふ 養親(ヤウシン)たる男。(養母に對して)

やうーふう 洋風【名】**せいやうふう**(西洋風)に同じ。

やうーふく 洋服【名】西洋風の衣服。明治維新後、我國に傳はり、文・武官の大禮服を初とし、各種の制服に採用せられ、延いて廣く貴賤・上下を通じて用ふるに至れり。西洋服。

やうふくーさいみん 洋服細民【名】洋服は著用してあれども、收入の少き人。

やうふくーをさこ 洋服男【名】洋服を著てある男。

やうーぶつ 陽物【名】㊀『易經の上經に「乾陽物也、坤陰物也」とあり』陽㊁に屬する物。(陰物に對して)㊁男陰。陰莖。

やうーぶつ 養物【名】古、養丁が、衞士(エジ)・仕丁(ヤウテイ)などの給養の料として差し出し輪物。「親(ヤウシン)。

やうーぶぼ 養父母【名】養父と養母と。養

やうーぶん 羊糞【名】羊のくそ。肥料に供せらる。

やうーぶん 養分【名】**じやうぶん**(滋養分)に同じ。「と。

やうーへい 養兵【名】兵士を養ひおくこ

やうーへき 洋癖【名】西洋の事物を特に好む癖。西洋かぶれ。

やうーべに 洋紅【名】コチニイル蟲の煎汁に、明礬・鹽化第一錫又は酒石英を加へ、色素を沈澱せしめて製する、紅色の染料。鮮麗にして、耐久性に富む。かあみんれえき。やうこう。本洋紅。(新洋紅に對して)

やうぼ 養母【名】㊀母の代となりて養育したる女。(養父に對して)㊁養家の母親。養親(ヤウシン)たる女。(養父に對して)

やうーほう 養蜂【名】蜜蜂を飼養して、その蜜と蠟とを採取すること。

やうーぼく 陽木【名】㊀『周禮の山虞篇に「仲冬斬二陽木一」とあり』春より夏にかけて繁茂する樹木。例へば、桐など。㊁きやら(伽羅)㊂の異稱。(陰木に對して)

やうーぼく 楊墨【名】〔人〕楊朱と墨翟(ボキテ)と。

やうーぼね 陽骨【名】鳥の羽の一部。

やうーほん 洋本【名】㊀**やうしよ**(洋書)に「同じ。㊁洋綴(ヤウテ)の本。

やうほん-じたて 洋本仕立【名】次條に同じ。

やうほん-とぢ 洋本綴【名】**せいやうとぢ**(西洋綴)に同じ。「間。洋室、

やうーま 洋間【名】西洋風の部屋。西洋

やうーまい 養妹【名】父、又は母の養女にて、己より年少なる妹。

やうーまう 羊毛【名】緬羊(ヤウ)・山羊(ギヤ)等、諸種の羊の毛。

やうーまく 羊膜【名】〔動〕『英 Ammion』胎膜の一。漿液膜と共に胚體壁の一部より起り、胚囊の最內層をなし、又、臍緒(ヘソヅ)の最外面を覆ひ、その內には、羊膜液充滿し、胚はその液中に沒浴す。

やうまく-えき 羊膜液【名】〔動〕**やうすゐ**(羊水)に同じ。

やうまく-るゐ 羊膜類【名】〔動〕脊椎動物の內、胚體に羊膜を有する種類、卽ち爬蟲類・鳥類・哺乳類の總稱。有羊膜類。(無羊膜類に對して)

やーうん 夜雲【名】夜の雲。

やうーめい 揚名【名】㊀『孝經に「立レ身行レ道、揚二名於後世一」とあり』名譽を高くすること。㊁王朝時代及びその後に於て、名のみ設けて、實職も得分(ブン)も無き官。地方官、殊に國司に限られしものの如く、中にも、最も著名なるは、揚名の介(スケ)にして、年官・年爵の制の結果、給主は、その國の吏務を知行し、その子孫もしくは家臣、その國司諸官に任ぜられ、その所得は給主の手に入るより起りしものなるべく、後には、誤りて、山城・常陸・近江・上野等數箇國の介を揚名の介などいふに至れり。望月「やうめい、勞ある人にて」源氏「やうめいのすけなる家になん侍りける」徒然「揚名の介に限らず、揚名の目(サク)といふものあり。政事要略にあり」㊂名のみにて、實なきこと。虛名。清慎公記「揚名關白、早可レ被二停止一者也」

やうめい 陽明【名】『後漢書の五行志に「或以爲二鳳凰陽明之應一、故非二明王一則隱不レ見」とあり』陽氣の明かなること。

やうめい 陽明【名】〔人〕**わうやうめい**(王陽明)を見よ。

やうめい-がく 陽明學【名】支那明の王陽明の唱道せし儒學。餘姚(ヨエ)の學。姚江(カウ)學。良知學。王學。りやうち(良知)。ちかうがいつせつ(知行合一說)參照。

やうめい-がくは 陽明學派【名】儒學の一派。支那明の王陽明の唱道せしもの。我國にては、中江藤樹を祖とし、熊澤蕃山、これを承け、その後、三輪執齋・佐藤一齋・大鹽中齋等あり。餘姚(ヨウ)學派。姚江(ヨウコウ)學派。

やうめい-け 陽明家【名】『その殿邸、平安の宮城東面、陽明門の前方に在りしよりいふ』五攝家の一なる近衞家の雅稱。

やうめい-ぜんしよ 陽明全書【名】〔書〕王陽明の著作全部を編輯したるもの。三十八卷。その内、初の三卷は語錄、即ち傳習錄にして、朱子晚年定論を附し、その外は雜文を輯めたる文錄五卷、奏疏・公移の文を輯めたる別錄十卷、詩と雜文との外集七卷、文錄の補遺なる續編六卷、年譜五卷、世德記二卷。傳習錄は門人徐愛の編、その他は、陽明の歿後、門人錢德洪等の編。王文成公全書。

やうめい-は 陽明派【名】**やうめいがくは**(陽明學派)に同じ。

やうめい-もん 陽明門【名】〔一〕『拾芥抄に「陽明門、山氏造レ之」とあり、山と音相近き好字面を取りて、陽明の二字を名とせしなり』平安京大内裡の外廓十二門の一。東面の正門。待賢門の北に位し、もと北端より第一の門なりしに、上東門建てられてより、第二の門となれり。門の大さ五間、戸は三間。東方、直ちに近衞大路、即ち陽明門大路に通ず。

陽明門の院【句】**びはごの**(枇杷殿)に同じかるべしといふ。桑花「皇后宮は、陽明門の院におはします」

やうめいもん-ゐん 陽明門院【名】〔人〕後朱雀天皇の皇后、後三條天皇の母后。御名は禎子。三條天皇の皇女、御母は中宮藤原妍子(道長の第二女)。上東門院の邸に生れ、宮中に生長す。生後三箇月餘にして、内親王の宣下あり、三歳にして、淮三宮の年官・年爵を賜はる。萬壽四年、東宮(後の朱雀天皇)の御息所となり、後三條天皇・良子内親王・娟子内親王を生み、長曆元年二月中宮に立ち、三月皇后に立ち、寛德二年、天皇崩じて後に薙髮す。永承六年皇太后となり、治曆四年太皇大后となり、延久三年後三條天皇即位ありて、尊號を陽明門院といふ。嘉保元年崩ず。御年八十二。

やう-もん 陽文【名】印章又は鐘鼎の銘などの文字の、浮彫(ウキボリ)の如く高くあらはしてあるもの。陽字。識文(シンモン)。(陰文(インモン)に對して)

やう-やう 様様【名】**さまざま**(樣樣)に同じ。平家「をかしきやうやうの見物なりける」平家「判官なさけある人にて、やうやうに慰め奉りたまふ」

やう-やう 漸う【副】『稍稍(ヤヤ)の音便』【一】**おひおひに**(追追に)に同じ。枕「春は曙、やうやう白くなりゆく山ぎは」【二】**からうじて**(辛うじて)に同じ。

やうやうの事で【句】やっとの事で。藤栗毛「やうやうの事に人を押し分け、飛び乘ったるは、大阪八軒屋の登船」

やう-やう 揚揚【貌】得意に思へるさま。

やう-やう 洋洋【貌】【一】『詩經の衞風碩人篇に「河水洋洋」とあり』水の盛んに充ちひろがれるさま。【二】『詩經の大雅大明篇に「牧野洋洋、楚辭の大招篇に「西方流沙、滌洋洋只」とあり』土地の遙かに擴がれるさま。【三】『中庸の第十六章に「洋洋乎如レ在二其上一、如レ在二其左右一」とあり』流動して充ちわたれるさま。古今序「沙長篤、巖之頌、洋洋滿レ耳」太平記「見物の貴賤、岐(ヨウ)に滿ちて、只、帝德を頌し奉る聲、洋洋として、耳に盈てり」【四】『詩經の魯頌閟宮篇に「萬舞洋洋」とあり』多いさま。

やう-やう 漾漾【貌】【一】波の漂ひ動くさま。【二】物の漂ふさま。又、漂ひ流るるさま。

やう-やう 【感】**やあやあ**に同じ。宇治「人の妻まく者あり、やうやう、おうおうと云ひて」

やう-やうし 様様し【形二】いかにも樣子あるらし。ただならぬさまなり。子細らし。無名抄「荒れたる、大なる堂あり、やうやうしきが有りげに見えければ、怪しくて」

やうやう-しや 洋洋社【名】明治八年、那珂通高(ナカミチタカ)の、榊原芳野・黑川眞頼などと組織せし文會。雜誌「洋洋社談」をその機關として發行したり。

やうやうしや-だん 洋洋社談【名】前條「を見よ。

やうやう-と 漸うと【副】**やうやう**(漸)【二】に同じ。長町女腹切「目まぜをすれば、やうやうと心づき」

やうやう-と-して 漸うとして【副】前條に同じ。宇治「初は安く通りつる穴、身の太くなりて、せばく覺えて、やうやうとして、穴の口までは出でたれども」

やうやう-に 漸うに【副】前條に同じ。續狂言記「漸漸に寢所出來ぬ年の中」

やう-やく 漸く【副】『**やうやう**(漸う)の語尾の、形容詞の連體形の語尾に同化せられて、くと變じたるものか』**やうやう**(漸う)に同じ。土佐「夜、やうやく明けゆくに」鬼貫「月をとて漸く雲のちぎれちぎれ」

やうやく-に 漸くに【副】前條に同じ。紀「漸進、ヤウヤクニススミテ」

やうやく-に-して 漸くにして【副】前條に同じ。

やうゆう 揚雄【名】〔人〕支那前漢の學者。字は子雲。蜀郡成都の人。初、司馬相如の賦を愛讀して、文學者たらんとし、成帝の時、甘泉賦を上る。作る所の諸賦、皆、難奧にして宏麗。後、又、志を哲理に傾けて、太玄經・揚子法言の著あり。揚子方言もその著す所といふ。天鳳五年歿す。年七十一。

やう-ら 彌占【名】幾度も重ねて行ふ占。〔古語〕萬葉「もろさかの舟かづき入るるやうらさし妹は問ふともその名はのらじ」〔方言〕

やうら 【副】**やをら**を云ふ。〔西國・常陸國の

やう-らう 養老【名】【一】『靈龜三年、天皇、美濃國不破の行宮に行幸、數日駐輦の時、多度山(後の養老山)の靈泉の、よく老を醫するを覽たまひ、符瑞書に「醴泉者美泉、可二以養レ老、蓋水之精也、寔惟美泉、即合二大瑞一とあるに本づきて、天下に大赦して改元せられしなり』元正天皇の御代の年號(紀元一三七七年—一三八四年)。【二】〔地〕美濃國十五郡の一。郡役所を高田町に置く。上古の多藝(ギ)郡の地にて、後世、一部を高城西(ニシ)郡と稱し、又、上石津郡と改めしを、明治二十九年、元の如くにこれを併せて、この新稱を立てたり。

養老の律令【句】養老二年に、藤原不比等(フヒト)等に勅して、大寶の律令を刊定せられしもの。大寶令を前令又は古令と呼ぶに對して、養老の令を新令ともいふ。

やうらう-きん 養老金【名】多年の勤勞に對し、その老後の慰安に與ふる金。

やうらうくみあひ-ぶんばいはふ 養老組合分配法【名】〔商〕**さいちやうめいほけん**(最長命保險)に同じ。

やうらう-さん 養老山【名】〔地〕美濃國養老郡の中央にある山。長さ十里に亙り、南は、伊勢國桑名の北に至りて盡き、明治二十九年以前は、これを界として、多藝(ギ)・上石津の二郡を分てり。山麓を、今、養老郡養老村といひ、山中に有名なる養老瀧あり。古稱、多度山。

やうらう-しゆ 養老酒【名】美濃國養老郡の邊にて釀造・販賣する一種の酒。養老年中、養老瀧の醴泉を掬みて、醴酒を造りたるに起りし由傳ふれど、現今販賣せるは味醂の一種にて、百分中約十三の酒精を含む。

やうらう-ねんきん 養老年金【名】老後に、毎年、一定の金額を交付する養老金、又、これを交付する制度。多くは、職工・勞動者等に對する制度にて、一定の掛金をなさしめて、これを交付するを、普通とす。

やうらう-の-たき 養老瀧【名】〔地〕美濃

國養老郡養老山の半腹に懸れる瀧。高さ約十丈五尺、幅二間と稱し、下に一大岩石ありて、これを受け、水淺きが故に、浴するを得。近年、瀧の邊を公園とし、大垣停車場より三里、養老鐵道を通ず。瀧に近く養老神社あり、社邊に菊水いふ名水湧出す。これ、續日本記・十訓抄・古今著聞集等に記せる孝子の說話に關するものにて、今は尋常の寒泉なれど、當時は鑛泉なりしため、孝子の傳說も生ぜしなるべし。古稱、多度瀧。著聞「昔、元正天皇の御時、美濃國に、貧しく賤しきをのこありけり。……。その酒の出づる所を、養老の瀧と名づけられけり」

やうらう-ほけん 養老保險 【名】〔商〕『獨 Alg.kirzte Lebensversicherung』生命保險の一種。被保險者が一定の期間生存し、老年に達したる場合に、保險金額を支拂ふもの。生存・死亡混合保險の一種にして、死亡保險たる終身保險とは性質同一ならざれども、生命保險中、相並びて、最も多く行はる。

やうらう-やき 養老燒 【名】天保の末、尾張國海東郡津島の人周吉が、美濃國養老山にて燒きし陶器。茶碗類多し。

やうらう-ゐん 養老院 【名】**やういくゐん**(養育院)を見よ。「まらせたるもの。

やうーらく 羊酪 【名】羊の乳の脂肪質を固

やうーらく 瓔珞 【名】■〔佛〕『梵 Keyūra』(枳由良)の譯語。西域記に「國中人物、首冠二華鬘、身佩二瓔珞一……、在レ頭曰レ瓔、在レ身曰レ珞」とあり』佛像・天蓋などの裝飾に、珠玉を編みて垂し下げたるもの。もと、印度の貴人の、これを佩びしより起る。謠曲春日龍神「瓔珞細軟の衣を脫ぎ、龍弊の散衣(ヱヒ)を著しつつ」 ■〔建〕洋風の建築にて、軒先に附くる、飾の板。

やうらく-きやう 瓔珞經 【名】〔書〕菩薩の法・六度・四聖諦等種種の法門を說ける佛經。十四卷。姚秦の竺佛念の譯。具さには菩薩瓔珞本業經といふ。

やうらく-ごけ 瓔珞苔 【名】〔植〕くらまごけ(鞍馬苔)に同じ。

やうらく-さう 瓔珞草 【名】〔植〕しろかいだ(秋海棠)に同じ。「天の諸市の一。

やうらく-し 瓔珞市 【名】〔佛〕功利(クリヤウ)

やうらく-しやじん 瓔珞沙參 【名】〔植〕しでしやじん(四手沙參)に同じ。

やうらく-どうだん 瓔珞滿天星 【名】〔植〕べにごうだん(紅滿天星)に同じ。

やうらく-ひば 瓔珞檜葉 【名】〔植〕いとひば(絲檜葉)に同じ。

やうらく-ぼたん 瓔珞牡丹 【名】〔植〕けまんさう(華鬘草)に同じ。

やうらく-ほほづき 瓔珞酸漿 【名】〔植〕酸漿の一變種。葉腋より細莖出でて、三四寸に達し、細長き葉狀片散布し、花は、この細莖に附きて、總狀に排列し、果實は、熟すれば、美しき紅色を呈す。

やうらく-らん 瓔珞蘭 【名】〔植〕蘭科に屬する多年生の草。我國・深山の老樹に自生し、葉は、厚くして、七八片密接して、互生し、その間より、花莖抽でて、二三寸に達し、暗紫色の花、穗狀に排列して、開き、毎花、一片の細針狀の苞を有す。あじろごけ。ひあふぎらん。

やうーらん 洋藍 【名】印度藍と人造藍との總稱。

やうーりう 楊柳 【名】■〔植〕『詩經の小雅采薇篇に「楊柳依依」とありて、康熙字典に「按、楊柳一物二種、毛詩分而言之者、齊風折レ柳樊レ圃、陳風東門之楊、是也、合而言之者、小雅楊柳依依、是也、本草云、楊枝硬而提起、故謂二之楊、柳枝弱而垂流、故謂二之柳一、正字通、據二古詩南レ楊有レ柳、分爲二二非一」とあり』楊(ナヤギ)と柳(ヤギ)と。 ■綾り上げたる縮織の縮める部分の形を限定するために、その著しく出でたるを、線狀又はその他の形の凹凸ある二箇の轉子の間に通じて、上下より强く壓する工程。絹縮・新御召(ハシヨオ)などには、この工程を施せるもの多し。

楊柳を掛く 【句】楊柳■を爲す。

やうーりう 洋流 【名】〔地〕かいりう(海流)に同じ。

やうりうーくわんおん 楊柳觀音 【名】〔佛〕薩 【名】〔佛〕前條に同じ。

やうりうーくわんぜおん 楊柳觀世音 【名】〔佛〕觀世音菩薩の三十三身の一。楊柳を三摩耶形(サヤマヤ)とせるもの。即ち、右手に楊柳を取り、左手に施無畏(セヤ)の印を結び、この楊柳は、衆生の願望に從ふこと、柳の枝の風に從ふが如くなる慈悲心を示せるもの。

やうりうーちぢみ 楊柳縮 【名】楊柳の工程

やーうれ 【感】『や己(オ)の義かといふ。いざ

ゐれ 參照』相手に呼び掛くる聲。やおれ。宇治「從者を呼びて、やうれ、御前の邊にて見て來(コ)といひて、參らせけり」

やうーれう 養料 【名】■營養に供する材料。 ■養育に要する財物。養育料。 ■〔法〕扶養義務の、扶養權利者に給する、生活の資料。

法律上の養料 【句】〔法〕はふていふやうれう(法定扶養料)に同じ。

やうーれき 陽曆 【名】〔天〕たいやうれき(太陽曆)に同じ。(陰曆に對して)

やうーろくーじーしや 羊鹿牛車 【名】〔佛〕さんしや(三車)■に同じ。「と。

やうーわ 陽和 【名】春さきの溫和なこ

やうーわ 養和 【名】安德天皇の御代の年號(紀元一八四一年)「と、又、その陣營。

やーえい 野營 【名】野原に陣營を張ること。

やーえい 夜營 【名】夜、陣營を張ること、又、その陣營。「又、その宴會。

やーえん 夜宴 【名】夜、宴會を催すこと。

やーおう 【感】叫ぶ時の聲。今昔「阿彌陀佛、我を殺す人あり、やおう、やおうとぞ、音を擧げて叫びける」「よ。

やーおき 八起 【名】「七轉(ロナコ)八起」を見

やーおくり 矢送 【名】昔、戰場にて、敵より射來れる矢を、更に射て、敵へ送り返しこと。甲陽軍鑑「矢おくりと申して、敵方の矢を、袖すりの節より折掛け、はしり羽を一つもぎ、敵へ返すなり」「つる所。

やーおち 矢落 【名】的の下、射たる矢の落

やーおと 矢音 【名】射たる矢の、風を切り又は物に當りて發する音。

やおひーのーつむじ 矢負旋毛 【名】きゆうし(弓矢)■に同じ。

やーおもて 矢面 【名】■射たる矢の飛びゆく正面。保元「川越(ヨシ)に、矢二つ放つ。夜中なれば、誰とは知らず、矢面に進んだる者、二騎射落されぬ」 ■龜甲打(ツキウチ)の表。七一職人歌合「組に、矢おもてといふ組」 ■『や(矢)■參照』質問・批難などの集中する地位。「矢面に立つ」

やーおれ 【感】やうれに同じ。盛衰記「やおれ、家貞・貞能よ」

やーか 宅 【名】いへ。家宅。やけ。やかす。〔古語〕源氏「やかの辰巳の隅の扇、いと危し」

やーか 八日 【名】**やうか**(八日)に同じ。紀「八日、ヤカ」「うた。

やーか 野歌 【名】田野の人の歌ふ歌。のら

やーかう 夜行 【名】夜、行くこと。よあるき。やぎやう。

やーがう 屋號 【名】商工業家又は俳優などの、や(屋)■を添へたる稱號。「武藏屋」・「河內屋」、「大和屋(坂東三津五郎)」・「音羽(オトハ)屋」(尾上菊五郎)など。

やーがかり 矢懸 【名】射たる矢の屆く地點。程よき矢頃の處。太平記「敵の勢に機を呑まれて、矢懸までも進み得ず」

やーがき 屋垣 【名】家の垣。かき。住吉「やがきより覗けば、簀子(スノコ)に寄りかかりたる姿、夜目にもしるく見え」「人。

やーかく 野客 【名】野にある人。仕官せぬ

やーかく 野鶴 【名】■野に居る鶴。飼はれてをらぬ鶴。 ■『劉長卿の送二方外上人一詩に「孤雲將二野鶴一、豈向二人間一住」とあり』人の束縛を受けぬ閑人の譬。

野鶴、鷄群に在り 【句】『晉書の嵇紹傳に「昨於二洛人中一始見二嵇紹一、昂昂然如二野鶴在二鷄群一」とあるに本づく』「鷄群(ケイ)の一鶴」に同じ。〔諺語〕

やーかく 夜鶴 【名】夜中に巢ごもれる鶴。夜鶴、子を思ふ 【句】『白氏文集の卷三に「夜鶴懷子籠中鳴」とあり』「燒野の雉子(キヽ)夜の鶴」に同じ。〔諺語〕

やがく 夜學【名】よる學問すること、又、その學問。
夜學の蓋置(カブ)【句】『支那にては、夜學の人、この物の上に、油を入れたる土器を重ね、燈心を浸し、點火して、卓上に置きしよりいふ』茶の湯にて用ふる蓋置の、唐物なるもの。

やがくーかう 夜學校【名】夜間に授業をなす規定の學校。

やがくーせい 夜學生【名】夜學校の生徒。

やかくーそうしよ 野客叢書【名】〔書〕經籍の異同を考證し、その誤を正したるもの。支那宋の王楙の撰。十二卷。別に野老記聞一卷を附す。もと四庫全書に載せたるは三十卷にして、十二卷のは鈔本なり。

やーかげ 屋陰・家陰【名】家の下かげ。家におほはれて、日光のよく通らぬ所。徒然「北の屋かげに消え殘りたる雪の、いたうこほりたるに」

やかーす 宇【名】『宅(ヤカ)栖(ス)の義なるべしといふ』やか(宅)に同じ。〔古語〕和名「宇。唐韻云、宇、夜賀須。宇也。宇、門屏之間也」

やーかず 屋數・家數【名】いへかず(家數)に同じ。

やーかず 矢數【名】一矢の數。二射たる矢の、中りたる數。著聞「緒附(ツケ)射つれば、矢數三つに用ふる習なれば、三つの數を矢一筋にて、持になりけりとなん」三通矢(ツウヤ)などの時、射手の、力の續くかぎり、多くの矢を射ること。おほやかず(大矢數)參照。蜉蝣「籌焚くや矢數の空を時鳥」

やかずーかう 矢數香【名】組香(クミカウ)の一。盤上に、一定の間隔ごとに矢を立て、聞手は、左右に分れ、一回聞き當つる毎に、一矢づつ進み、先に最後の矢に達したる方を勝とするもの。

やかずーばいかい 矢數俳諧【名】〔文〕俳句にて、早く多くの句を詠み出づるを勝とする方法。五元集「住吉にて、西鶴が矢數俳諧に後見頼みければ、驥の歩(アユミ)二萬句の蠅あふぎけり」

やかずーゆがけ 矢數韘・矢數弓懸【名】簡略なる韘。さしゆがけ。

やがすり 矢飛白・矢絣【名】矢羽根の如き形にあらはせし飛白。飛白染(カスリ)にしたる經(タテ)絲の位置を、順次に少しづつ位置を變へて、織りたるもの。主に婦女子の衣服に用ふ。

やーかぜ 矢風【名】射たる矢の飛びゆく時に起す風。曾丹集「ともしする秋の山べに射る人の弓の矢風に紅葉散るらし」
矢風を負ふ【句】飛び來る矢の勢に怖れて、背を向けて退く。保元「大將に矢風負はせて引き退けん」

やかた 屋形【名】一かりに構へたる家、又はかりに宿る所。かりやかた。寓居。〔館〕空穂「みづからはやかたに住むとも御願の所はものせん」古今「水莖の岡の屋形に妹と我(ワ)と寢ての朝明(アサ)の霜の降(フ)はも」二貴人の宿り又は住める家。みたち。との。〔館〕狂言(武悪)「あれも、御やかたでは、おぼえの者でござれば、え搦め捕りますまい」三貴人を、その居所の上よりいふ語。〔館〕やかたがう(屋形號)參照。甲陽軍鑑「城に屋形を置き奉りて、遣遙軒公を始め、御親類衆を、悉くうしろに陣を取らせ申し」四牛車(ウシ)の車箱の屋根。うはぶき。うへ。むねおもて。くるまやかた。和名「車蓋、俗、車屋形、夜賀太」蜉「似げなきもの。月のいとあかきに、やかたなき車にあひたる」五ふなやかた(船屋形)の略。榮花「いろいろのうす物を屋形に張りて、かねての常夏(トコナツ)の花おしたる船」太平記「山鳩一つ、船の屋形の上にあり」六やかたぶね(屋形船)の略。蜉「やかたといふ物にぞおはす。されど、奥なるは、聊かたのもし。端に立てる者どもこそ、目くるるこちすれ」太平記「屋形に乘りたる兵の鎧の草摺に、裏をかかせてぞ立ちたりける」七やかたもん(屋形紋)の略。八やかたちりめん(屋形縮緬)の略。〔八形〕

やーかた 箭像【名】やかたを(箭像尾)の略。

やーかた 箭形【名】〔植〕『英 Sagittate』葉脚(ヤアシ)の形の一。矢羽根(ネ)を倒にしたる如き形にて、左右尖りて、下方に向へるもの。

やかたーがう 屋形號【名】室町時代以後、國持大名の、特許を得て稱へし、屋形三の稱號。特許なき者は、家臣に烏帽子・直垂(ヒタレ)・素襖(ソオウ)などを著用せしむること能はざる規定なりきといふ。

やかたーぐるま 屋形車【名】屋形四を設けてある牛車(ギシヤ)。「御座船。

やかたーござ 屋形御座【名】屋形船なる

やかたーごし 屋形輿【名】くるまこし(車輿)に同じきか。玉葉「入道相國、駕二屋形輿一」

やーかたし 彌堅し【形一】いよいよ堅し。〔古語〕記「した堅く、やがたく取らせ秀鱒(ホヤ)取らす子」

やかたーじろ 屋形城・館城【名】屋形三三にてもあり、又、城にてもあるもの。居城。國姓爺「五常軍甘輝が館城、獅子が城にぞ著きにける」

やかたーちりめん 屋形縮緬・八形縮緬【名】ちぢみ細かくして上品なる、昔の舶來の縮緬。やかた。

やかたーづくり 屋形造・館造【名】屋形の建てざま。曾我「おもひおもひの屋形造、色色の幕の紋」

やかたーにしき 屋形錦【名】屋形紋のある錦。太神宮式「屋形錦被一條」

やかたーふう 屋形風・館風【名】やしきふう(屋敷風)に同じ。

やかたーぶね 屋形船【名】屋形を取り附けたる和船。貴人の乘用又は遊山の料に供す。多くは河船なれど、海に用ふるもあり。屋形を唐破風造(カラハフヅクリ)にせる唐屋形(カラヤカタ)、江戸にて、吉原通する者の乘りしきりぎりすなど、その一なり。やぶね。やねぶね。ひよけぶね。やかた。東鑑「以二金銀以下一作二屋形船一」其角「やかた船花見ぬ女中出でにけり」

(ねぶたかや)

やかたーぼうとう 屋形奉公・館奉公【名】やしきぼうとう(屋敷奉公)に同じ。置土產「京より西國に屋形奉公勤めて、親元へ歸る」

やかたーぼね 體【名】『彌堅骨の義なるべし』體軀の强壯なること。かたぼね。〔古語〕名義抄「體、ヤカタボネ・カタボネ」

やかたーまち 屋形町・館町【名】やしきまち(屋敷町)に同じ。一代女「うるはしきは、大阪の屋敷町まはり」

やーかため 屋固【名】建築の柱建などの時、又は移轉せんとする時などに、凶事なからん事を欲して、祈り固むる儀式。出世景清「番匠の棟梁、木工(タクミ)の頭(カシラ)、修理(シユリ)の頭、おのがじしなる出立(イデタチ)、吉方(エホウ)に打ち向ひ、まづ屋がための祭文を唱へつつ、御幣を振つて再拜し」

やかたーもの 屋形者【名】やしきもの(屋敷物)に同じ。遊女「向ふより來る二人の客は、やかた者と見え、侍客見たまへ、どれも美しい者でござるの」

やかたーもん 屋形紋【名】家の形を描きたる模樣。やかた。日本振袖始「天の逆矛、屋形紋の錦に」

やかたーを 矢形尾・屋形尾・八形尾【名】鷹の尾の一種。鈴附の上に、一枚重なりたるもの、又、符の切れ方の、矢羽を撮きたるやうなるもの、又、身寄・徒前の中央に在りて、屋の棟のやうなる形のもの、又、符の切れ形の八字形をなせるものなど、種種の說あり。〔古語〕萬葉「矢形尾の眞白の鷹を宿にすゑかき撫で見つつ飼はくしよしも」

やーかぢ 八舵【名】多くの舵。夫木「八舵かけ島がくれゆく我妹子がとまり添ふらん袖見えずとも」

やかーつーかみ 宅神・家神【名】家を守護する神。かまがみ。明月記「建久十年四月三十日の條「今夜家神祭……件竈神日來坐二坊門一」

やがて 即て・頓て・軈て【副】『軈は、身に應じして爲す意の和字』一二つの事物の間に、狀態又は時間上の隔の殆ど無き意。そのまま。ただちに。すなはち。やんがて。空穂「まかではべりしまま、やがてまうでてはべりしに」蜉「今二人は、女院・淑景舍(シゲイ)の人、やがてはらからなりけ

り」 ㊁程度を、大よそに指していふ意。かれこれ。まづ。「その後、やがて二三年も經しならん」

やがての内に【句】多く時を經ぬ内に。近日の内に。その内。やがて。狂言(胸突)「やがての内に算用を致しませう」

やがての事に【句】前條に同じ。

やかない【形】せはし(忙し)に同じ。〔駿河國の方言〕

やか-なふ【動四他】眞實よりにはあらずして、かりそめに爲す。

やがね 彌鐵【名】**いやがね**(彌鐵)に同じ。

やがはえ 彌榮【名】『**やぐはえ**(彌木榮)又は(彌孫生)の義といふ』木のますます生ひ茂るさま。

彌榮如(ナ)す【句】彌榮のごとく。〔古語〕記「さわさわに汝(イ)が言へせこそ打ち渡すやがはえなす來(キ)入り參來(マヰ)れ」

やか-ばら 燒腹【名】**やけばら**(燒腹)の轉訛。俗曲 釜淵鹽級巴「今追出したら、やか腹立て、どんな事をぬかさうやら」

やがはり 矢代【名】身がはりとなりて、矢に當ること。國府事戰記「義經八島の浦の合戰に、佐藤次信矢代にたち」

やがふ 野合【名】『史記の仲尼世家に「紇與二顏氏女一野合、而生二孔子一」とあり』媒妁なくして、夫婦となること。なれあひ。どれあひ。私通。

やか-べ 家部【名】上古の制度にて、その家に附屬せる部民、卽ち家人・奴婢等。氏部と共に、諸氏の長に給せしもの。天武天皇の御代に至り、廢して、封戸(フ)をこれに代へられたり。紀「氏部・家部、ウヂベ・ヤカベ」

やか-へし 矢返【名】しかへし。返報。報復。

やか-まし 喧し【形二】㊀さわがし。さうざうし。かまびすし。俳諧古選(立島)「早かろがやかましかろが蕎かな」㊁小言(コゴ)多し。あまりに干渉して、うるさし。㊂うるさし。煩はし。面倒なり。博多小女郎浪枕「身請代金千四百五十兩な。端錢(ハ)があって、やかましい。五十兩は亭主に遣る」「瓣のある人。

やかまし-や 喧屋【名】小言(コゴ)を言ふ人。

やがみ 八上【名】㊀〔地〕河内國の舊郡の一。もとの丹比(ヒノヒ)郡八下(ヒ)郷の地にて、明治二十九年、南河内郡の一部となる。㊁因幡國の舊郡の一。明治二十九年、八東(ハヅ)・智頭(ヂヅ)の二郡と合して、八頭(ヅ)郡となる。

やかみ-じやう 八上城【名】丹波國多紀郡朝路(チヂ)山の北麓に在りし城。永正中、波多野秀忠の築造に係り、波多野氏は、もと因幡國八上郡を領せしより、八上殿と稱せられ、應仁の亂、一族、山名宗全に黨し、秀忠の時、この地に築く。天正六年、明智光秀攻めてこれを滅し、光秀誅死の後、前田玄以の邑となり、同氏除封の後、德川氏松平康重を以てこれに代へ、次いで廢城となる。

やがみ-すげ 八上菅【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する多年生の草。多くは、水邊に生じ、高さ三四尺に達し、葉は細長くして、長さ約一尺、花は、小穗狀花序をなしたるもの、多く集まりて、一寸餘の穗を作る。

やがみ-やき 八上燒【名】**ひけたやき**(曳田燒)を見よ。

やかみ-やま 屋上山【名】〔地〕石見國那賀郡下松山村八神にある丘陵。萬葉「妹が袖さやにも見えず嬬(ツ)ごもる屋上の山の」

やがむら-のせき 谷村關【名】〔地〕德川時代に、相摸國足柄上郡谷村の東南に在りて、箱根關の裏關たりし關所。川村關と同じく小田原城主の警衛に屬し、小田原と駿河國御廚(ミクリ)との間の裏道を警めしものにて、兩者を合はせて、川村の兩番所と呼びたり。

やかん 夜間【名】夜のうち。よる。やちゆう。(晝間(カン)に對して)

やかん 野干【名】㊀〔動〕『法華經に「野干體瘦無目、爲二諸童子一摘擲、受二諸苦痛一」とあり』體瘦せて、目無しといふ獸。㊁『祖庭事苑に「野干、形小尾大、能上樹、疑二枯木一不登。狐卽形大、疑氷不渡、不能上樹」とあり。射干と混同していふなり』次條㊁に同じ。㊂〔動〕**きつね**(狐)の異稱。水鏡「野干を狐と申しはべりしは、……妻(ノ)の女、驚き怖れ、え堪へずして、野干になりて、籬の上にのぼりてをり」㊃能樂の假面の一。「小鍛冶」の曲などに用ふ。㊄『**きつね**(狐)㊂參照』うかれめ。娼妓。〔奥州松前の方言〕

やかん 射干【名】㊀〔植〕**ひあふぎ**(檜扇)㊁の漢名。㊂〔動〕『司馬相如の子虛賦に「騰遠射干」とありて、註に、「射干似レ狐、能緣レ木」とあり』狐に似て、能く樹に上るといふ獸。

やがん 夜眼【名】**よめ**(夜眼)に同じ。

やかやぎ【名】〔植〕**のうぜんかづら**(紫葳)に同じ。

やから 族【名】㊀氏族。眷族。一門。うからやから。和名「百族、毛毛夜加良」㊁**ごもがら**(罐)に同じ。空穗「盜人のやから」

やがら 矢柄・矢幹・箭【名】㊀**の**(箆)に同じ。㊁〔動〕硬鱔類に屬する魚。體形、圓く細長く、色は薄赤く、尾鰭の間より、赤色なる絲狀の物を出す。あかはら。

やがら 八柄・簇【名】相撲(スマ)の四十八手の中、投(ナゲ)十二手の一。上手(テハ)にて、相手の後褌を取り、差手を添へて吊り上げ、振り廻して投ぐるもの。

やから-かね 八から鉦【名】歌念佛㊁の類。若者が、緒を附けたる數多の叩鉦(ヒクガネ)を、腰・首などに附け、これを打ち鳴らしつつ、一心不亂に早く踊りまはるもの。やつからがね。はつちやうがね。やつがね。

やがら-ぜめ 矢柄責・矢幹責【名】矢柄にて打ち叩く拷問。津國女夫池「まつすぐに申せ、少しもあらがはば、矢柄責・鐵砲ひしぎ」

やがら-なげ 八柄投・簇投【名】**やがら**(八柄)に同じ。

やから-びと 族人【名】同一の氏族に屬する人。ぞくじん。紀「儻者、ヤカラビト」

やがら-もみ 矢柄揉・矢幹揉【名】紙を矢柄にて揉みて、皺紋をなさしめたるもの。

やがる【接尾】『**あがる**(上る)の訛。卽ち元來は尊敬の意なるを、反對の意に用ひたるなり』動詞に添へて、輕んじ罵る意を示すに用ふる語。「何を爲(シ)やがる」「早く行きやがれ」

やき 燒【名】㊀燒くこと、又、燒きたる狀態・程度。㊁刃物を作るに、鐵を火中に入れて、赤熱以上にしたる上、水に冷して堅くし、切味を鋭からしむること、又、斯くしたる狀態・程度。

燒が廻る【句】㊀前條㊁の場合に、火加減、あまりに全部に行きわたりたるため、切味、却って鈍る。㊁老衰などのために、頭腦の敏活さ鈍る。

燒を入る【句】燒㊁を施して、刃物の刃を鋭く作る。**やきいれ**(燒入)參照。

やき 夜氣【名】夜間の氣。夜のけはひ。

やき 夜歸【名】夜間、家に歸ること。

やぎ 山羊・野羊【名】〔動〕偶蹄類中、反芻類に屬する獸。數種ありて、何れも、羊類に似、概ね、體は羊より大なるを常とし、牡は顎下に髭あり、且つ一種の臭氣を發し、又、牝・牡共に、角は、目の直上に在りて、少しく後方に曲り、右方のは左卷、左方のは右卷に螺旋をなす。毛は多くは剛し。カシミヤ・モヘエヤ・アルパカなど、皆、その製品として名高く、革は手袋・靴などの材料とす。乳は、滋養分に富む。

靈南翁「西遊記」長崎に、たまたまやぎといふ獸あり。その形、羊に似て、色黑く、毛長きものなり」

やぎ【名】〔動〕**いそばな**(磯花)に同じ。

やぎ 榔子【名】〔植〕**やし**(榔子)に同じ。

やぎ 八木【名】〔地〕大和國高市郡にある町。奈良市の南方約六里十二町、奈良より和歌山への街道に當り、西は、飛鳥(カス)川を隔てて今井町に接し、鐵道櫻井線畝傍(ウネビ)驛及び郡役所などあり。神武天皇の陵以下十三の帝陵、橿原宮趾等の史蹟に富む。

八木の亥子餅(モチ)【句】昔、十月の亥子に、攝津國能勢(セ)郡八木村の人門太夫が、禁中に獻じたる餅。淨衣を著し、別火を設けて調製し、赤小豆(キ)を

入れて、薄紅色に搗き、その一つを、幅四寸長さ六寸五分、深さ二寸の箱に入れて、箱の形に固め、四隅と中央とに、粟一粒づつを置きて、蓋をなしたるを、初の亥の日には、門太夫より百箱、中の亥の日には、次の村なる大丸村の里中より、末の亥の日には、切畑村の里中より、各八九十箱(亥の日が二日のみなる年は、切畑村のは略す)を獻りたり。

やき-あぐ 焼上ぐ【動下二他】焼きて、燃え上らしむ。平家「館(タチ)に火掛け、焼き上げて」

やき-いし 焼石【名】をんじやく(温石)[一]に同じ。大鏡「冬は餅(ヒモチ)のいと大きなるをぞ一つ、小きをば二つ焼きて、焼石のやうに、御身にあてて持ちたまへりけるが」

やき-いひ 焼飯【名】やきめし(焼飯)に同じ。五人女「重菓子入(ヲカシイレ)に焼飯、そぎ楊枝・茶瓶忘るな」

やき-いへ 焼家【名】『火災によりて、よく焼くる家の義』木造の家を、土蔵造の家などと區別していふ語。やきや。「江戸の語」

やき-いん 焼印【名】金屬にて作り、火中に熱して、物に捺す印、又、これを用ひて捺したる痕。やきはん。やきじるし。やいじるし。やきはん。

やきいん-あみがさ 焼印編笠【名】『編笠茶屋の焼印を捺してありしよりいふ』**しのびあみがさ**(忍編笠)に同じ。松の葉(山谷暦)「二枚肩にて得乗らいで、焼印編笠うちかざし」「てある鑑札。

やきいん-ふだ 焼印札【名】焼印を捺し

やき-いも 焼芋・焼薯【名】扁き一種の釜に入れて、炙り焼きたる薩摩芋。

やき-いれ 焼入【名】焼(ヤ)[二]を施して、刃物の刃を堅くすること。「じ。

やきう 野球【名】べえすぼおる(野球)に同

やぎう 野牛【名】[動]論語の季氏篇に「虎兕出二於柙一」とありて、朱熹の註に「兕、野牛也」と見ゆ』偶蹄類中、反芻類に屬する哺乳動物。體形も大きも、普通の牛に酪似し、四嚢の胃を有して、反芻する性質も、これに同じく、その他、前頭と背部とに隆起あり、二個の、黑色にして、多少三角形をなせる、大なる角を具へ、毛は捲縮し、且つ頭部と頸部とに於て、殊に長し。印度及び南亞非利加に産し、北亞米利加にも産したれども、濫獲の結果、今は、動物園等に殘存せる外、全滅に等し。

やき-うしなふ 焼失ふ【動四他】**やきほろぼす**(焼亡す)に同じ。紫式部日記「反故(ホゴ)ども、皆、破(ヤ)り、焼失ひ」著聞「衆徒(トシユ)の頸を切りて、御寺を焼きうしなふべき由、下知したりければにや」「と。

やきう-せん 野球戦【名】野球の仕合(アヒ)

やきう-ち 焼討・焼打【名】火を放ちて、攻め立つること。やきぜめ。火攻。

やき-うり 焼賣【名】焼きたる食品を賣ること。(煮賣に對して)東海道名所記「鰻の焼賣」「じ。

やき-うを 焼魚【名】**やきざかな**(焼肴)に同

やき-おいた 焼御痛【名】**おいた**(御痛)は**おいたみ**(御痛)の略』**やきしほ**(焼鹽)を云ふ。[宮中の女の語]

やき-おとす 焼落す【動四他】火を放ちて、焼き崩す。太平記「韓信、蕭と、後に大河を當て、橋を焼落し、船を打ち破りてぞ棄てたりける」

やき-かざめ 焼蟒蛉【名】蟹の足の、炙り焼きたるもの。添肴などに用ふ。

やき-がしら 焼頭【名】魚類などの頭部を炙り焼くこと。本朝櫻陰比事「件の法師、衣脱捨て、近江鮒の焼頭せし所を、女と共に捕へて」

やき-かは 焼皮【名】豚などの腸を切り除き、酒糟を入れて縫ひ塞ぎ、毛の上より泥土を塗り、ぬる火に炙りて、蒸焼にしたる上、泥土を落せば、毛はそれと共に剝げ落つるを、そのまま、四足を斷ち、酒鹽にて味を附けて、料理する物。庭訓往來「豕焼皮、熊掌」

やき-がま 焼鎌【名】焼(ヤ)[二]を施して、刃を鋭く作りたる鎌。焼刃のある鎌。やいがま。祝詞「大祓「彼方(カナタ)の繁木(キシゲ)が本(モト)を、焼鎌の敏鎌(マト)もて打ち掃ふ事の如く」「窯」に同じ。

やき-がま 焼窯・窯【名】**やきものがま**(焼物

やき-がまぼこ 焼蒲鉾【名】火に炙りて焦目(コガ)を附けたる板附蒲鉾。

やき-がり 焼狩【名】禽獸を狩り捕ふるために、その居る所の山野などの草木に火を放つこと。やきやまがり。やいがり。盛衰記「兵衛佐殿、折節、伊豆の奥野の焼狩とて、狩場におはしましけり」

やき-きん 焼金【名】吹き分けて、夾雜物を去りたる、純料の黃金。やきがね。

やき-ぎり 焼桐【名】器物・下駄などに雅致あらしむるために、桐の材の表面を火に焦したる上、木理を洗ひ出し、凸起せしめたるもの。

やき-きる 焼切る【動四他】[一]針金などを、強熱を加へて、切斷す。[二]腐肉などを、焼金などにて除き去る。やきとる。

やき-ぎれ 焼切・焼帛【名】慶長の頃、南蠻船を焼討したる時、焼け殘りし古金襴。

やきく 野菊【名】**のぎく**(野菊)に同じ。

やき-くさ 焼草・焼種【名】[一]物を焼くに用ふる枯草その他の材料。もえくさ。太平記「埋草(ウメクサ)を以て、堀を埋(ウ)め、焼草を積んで、櫓を落さんとしける時」[二]**もぐさ**(艾)に同じ。[三]身を亡す種。江戸名所記「智慮・才覺も、藝も、美男も、心のあぢだても、皆、これ、傾城のため、我が焼草となるなり」

やきくさ-ぶね 焼草船【名】昔の船軍にて、焼草[一]を積み、敵船に近づきたる時、火を放ちて、これに焼け移らしむる船。

やき-ぐし 焼串【名】魚などを貫きて、炙り焼くに用ふる串。やいぐし。「の實。

やき-ぐり 焼栗【名】焙り又は焼きたる栗

焼栗が芽を出す【句】「枯木(カレ)に花咲く」に同じ。[諺語]

やき-こ 焼粉【名】[一]焼きて、粉としたるもの。[二]耐火粘土を高熱にて焼きたる上、碎きたる、白色の粉末。耐火煉瓦・坩堝(ルツボ)等を造る。これを交ふれば、これらの物を焼く時、收縮・膨脹の憂を減する利あり。しやもつと。

やき-ごえ 焼肥【名】塵芥などを蒸焼にして製したる肥料。麥を蒔き、野菜を植うる時用ふるに適す。

やき-ごて 焼鏝【名】紙・布帛などの皺を伸ばし、折目を附け、又、糊附したる部分を乾かす等のために、火中に熱して、火熨斗(ヒノ)の如く押し當てて用ふる、一種の鏝。概ね形小く、分厚(ブアツ)に製す。焼金(ヤキガネ)[一][二]に代用することもあり。[二]焼繪を描くに用ふる、一種の小き鏝。

やき-ごひ 焼鯉【名】食ふために炙り焼きたる鯉。

やき-こめ 焼籠【名】人の籠れる建物を焼きたてて、逃さぬこと。犬筑波「やきこめにすべきかたきを打ち損じ(こいふ句に)不鍛錬なる城の水實」

やき-ごめ 焼米【名】籾のままの新米を炒りたる上、搗きつぶして、殼を去りたる食品。やいごめ。和名「糒米。唐韵云、糒、夜岐古女。焼稻爲レ米也」

やきごめ-すな 焼米砂【名】焼け落ちたる古城の穀倉の址などより出づる、焼けたる米の化石。昔、藥用に供したり。

やき-ころす 焼殺す【動四他】焼きて殺す。焚殺す。

やき-ざかな 焼肴【名】食ふために炙り焼きたる魚肉。やきうを。(煮肴などに對して)

やき-ざたう 焼砂糖【名】**からめる**に同じ。

やき-しほ 焼鹽【名】鹽を、素焼の壺に入れて、蒸焼にしたる純白のもの。鶏鶩合戰

物語「元より無道心なれば、……、燒鹽ばかりの一飯をも施す事は稀にして」

やき-しほだひ 燒鹽鯛【名】食ふために炙り燒きたる鹽鯛。醒睡笑「來ぬ人をまつ井のうらの夕めしに燒鹽鯛の身をこがしつつ」

やき-しめ 燒標【名】馬の尾を木に插みて立て、火を附けてくゆらせ、その臭氣によりて、田畠を荒す猪・鹿などを近寄らせぬやうにすること。藏玉集「やきしめとは、馬の毛を木に插みてけぶらかして、田に立つるをいふなり。鹿に食はせじ料なり」

やき-じるし 燒印【名】**やきいん**(燒印)に同じ。平家「汝が一期(イチ)の間の思出一つ與ふべしとて、花方が面に、波方といふ燒印をぞせられける」

やき-すず 矢疵【名】矢に射られて生じた疵。「る疵。

やき-すぎ 燒杉【名】**やきぎり**(燒桐)を見よ。藤栗毛「燒杉の下駄」

やき-すつ 燒捨つ【動下二他】燒きて、そのままに打ち捨ておく。たきすつ。千載「燒きすてしふる野の小野の眞葛原玉卷くばかりなりにけるかな」

やき-すて 燒捨【名】燒き捨つること。

やきすて-そじやう 燒捨訴狀【名】箱訴(ハコ)の訴狀の、法式に違へるために燒き捨つべきもの。

やき-ずみ 燒炭【名】燃料に供する炭。おこしずみ。やいずみ。太平記「燒炭の如くなる罪人」

やき-ずるめ 燒鰯【名】㊀燒ふために炙り燒きたる鰯。㊁**やきもち**(燒餅)㊁に同じ。

やき-せきかう 燒石膏【名】〔化〕石膏を、適當の溫度にて燒きて、結晶水の大部分を放出せしめたるもの。白色の粉末をなし、水を加へて煉れば、再び硬化す。塑像の模型を造り、ランプの口金を附くるに用ひ、又、外科術にて、繃帶の料に供す。燒(ヤカ)石膏。

やき-ぜめ 燒攻【名】**やきうち**(燒討)に同じ。太平記「四方より火を懸けて、燒攻にすべし」

やき-たご 燒たご【名】燒物製の便器。藤栗毛「洩瓶(ビン)……、そりや、小便(ベン)のする燒たごぢやあござらないか」

やき-だす 燒出す【動四他】家を燒きて、遁れ出でしむ。太平記「卿相・雲客も、兵火のため燒出されて、此處の辻堂、彼處の拜堂に身を側め」

やき-だち 燒太刀【名】燒(ヤキ)㊁を施して刃を鋭く作りたる太刀。燒刃のある太刀。萬葉「燒太刀のたがみ押しねり」

やきだち-の 燒太刀の【枕】㊀燒太刀は利(ト)きものなるより、とにかけていふ。萬葉「朝よひに音(ネ)のみし泣けば燒太刀のと心も我(ア)は思ひかねつも」㊁太刀は、人の身の邊に著くものなるより、へつかふにかけていふ。一說に、太刀は、鞘を隔てて、人の身體に著くものなるより、隔附(ヘ)かふの意なりと。萬葉「絶ゆといはばわびしみせむと燒太刀のへつかふ事はよけくや吾君(ワギ)」

やきだち-を 燒太刀を【枕】を感嘆の助辭とし、或は目的格の助辭と見、或は太刀を磨ぐといふ意ともいふ。萬葉「燒太刀をとなみの關に明日よりは守部(モリ)遣りそへ君を留めむ」

やき-たつ 燒立つ【動下二他】さかんに燒く。萬葉「しかの蜑のけぶり燒立て燒く鹽のからき戀をも吾はするかも」

やき-たて 燒立【名】㊀燒き立つること。㊁食品などの、炙り燒きてより、未だ時を經ぬこと、又その物。

やき-たな 燒たな【名】**いりたな**(炒たな)に同じ。字鏡集「熬、イリタナ・タナ・ヤキタナ」「類。

やき-たま 燒玉【名】炮烙火矢(ハウラクビヤ)の

やき-たまご 燒卵・燒玉子【名】㊀**たまご**

やき-(卵燒)に同じ。一代女「看も、生貝・燒玉子はありながら、煮しめ豆・山椒の皮などはさむは、色町を見たやうに思はれて」㊁雞卵の殼に疵を附け、薄紙にて包み、熱灰にて蒸燒にせる食品。

やき-だんご 燒團子【名】燒きたる團子に醬油をつけたるもの。

やき-ぢく 燒軸【名】筆の軸の、處處いぶして黑くしたるもの。「と。

やきつぎ-や 燒繼・燒接【名】燒き繼ぐこ

やきつぎ-や 燒繼屋・燒接屋【名】燒繼を職とする家、又その人。「く」の轉訛。

やき-つく 燒附く【動四他】**やけつく**(燒附

やき-つく 燒附く【動下二他】㊀燒金(キン)㊁を捺して、印(シルシ)の附くやうにす。慮養記「金を以て頰を燒き、波方(カミカタ)とぞ燒き附けたる」㊁燒附(ヤキ)をなす。長町女腹切「目貫(キン)の性(シヤウ)よしも、つい燒きつけて、惡性に身を研ぎへらす奉公や」

やき-つぐ 燒繼ぐ【動四他】割れたる陶磁器などを、火中に熱し、釉藥(スクリグ)を熔して、接續せしむ。

やき-つけ 燒附【名】㊀釉藥(スクリグ)を施して燒き上げたる磁器の上に、更に顏料にて、書畫を書き、再び窯にて燒きて、その書畫などの消えぬやうにすること。うはゑ。㊁鍍金(キン)を施すこと、又、それを施したる物。柳樽「燒附の投げたを救ふ銀の匙」㊂『英 Positive proof』寫眞術にて、種板の下に、感光性ある紙を重ね、光線に曝して、その紙面に陽畫を現れしむること。印畫を製すること。かみやき。

やき-つち 燒土【名】㊀燒きたる土。㊁埴土に、木の切端などを加へて燒きたる肥料。㊂耐火粘土を燒きて粉末にし、耐火モルタルを製する時、砂に代用するもの。

やき-て 燒手【名】㊀欺きて、嬉しがらする方法。諸藝太平記「間夫(ヲ)の胤にて、吹上が子にては無きぞ。……信心ありし故、今の燒手を知らするなり」㊁燒餅を燒く癖ある人。嫉妬ぶかき人。

やき-どうふ 燒豆腐【名】㊀炙り燒きたる豆腐。㊁『燒豆腐は、串を二本並べ刺し、火に炙りて製するよりいふ』**ぶし**(武士)を嘲りていふ語。〔德川時代の語〕

やき-どころ 燒所【名】**やきば**(燒場)に同じ。「きたる鳥。

やき-とり 燒鳥【名】食ふために炙り燒

燒鳥に捉緒(ヲ)【句】次條の略。〔諺語〕吾吟我集「燒鳥にへをとはいへど我はただ猫に網手を附けんとぞ思ふ」

燒鳥に捉緒(ヲ)を附けよ【句】炙り燒きたる鳥にも、足緒を附けて逃げぬやうにする程の、細心の注意を爲せ。〔諺語〕「る」に同じ。

やき-とる 燒取る【動四他】**やきぎる**(燒切

やき-なだれ 燒頽【名】陶器を製する時、その釉藥(スクリグ)の熔けて、その陶器の表面に流れ下りたるもの。

やき-なべ 燒鍋【名】食品を炒(イ)附くるに用ふる鍋。いりなべ。

やき-なほし 燒直【名】燒きなほすこと、又、燒きなほしたる物。

やき-なほす 燒直す【動四他】㊀食品などの、一度燒きたるものを、更に又燒く。㊁詩文などの原作に、手を加へて、多少變化せしむ。

やき-にく 燒肉【名】食ふために、炙り燒き又は炒りいためたる獸肉。

やき-ねずみ 燒鼠【名】炙り燒きたる鼠。狐を誘ひ捕ふる等に用ふ。「語」

燒鼠に狐【句】「猫に鰹節」に同じ。〔諺語〕

やき-のり 燒海苔【名】炙り燒きたる海苔。醬油をつけて食ふ。

やき-ば 燒刃【名】㊀燒(ヤキ)㊁を施して鋭くしたる刃。やいば。新六「鍛冶屋なる太刀の燒刃のはやくより思ひ切りてしこの世ならずや」㊂**はもん**(刃文)に同じ。

燒刃を渡す【句】刀劍を鍛へて、刃を附く。俗曲(十二段君が色香)「三條の小鍛冶宗近が打ちたる所の一振、大和の國に年經たるその男狐の血潮にて、燒刃を渡し、名づけて、小狐丸と、今も源氏の重寶なれども」

やき-ば 燒場【名】㊀燒く場所。㊁死骸を燒く場所。ひや。茶毘所(シヤビ)。火葬場。

やき-ばえ 燒鮠【名】炙り燒きたる鮠。若風俗「看賣は、直(ネ)に小鳥を好かるる浪人の宿へ、磨餌(ヱ)の燒鮠など運びて」

やき-はぎ 燒剝【名】鳥獸を料理するために、皮を燒きて剝ぐこと。

やきばざさ 燒刃笹【名】〔植〕『葉緣の白色なるさま、刀劍の燒刃に似たるよりいふ』くまざさ(熊笹)[1]に同じ。

やきばた 燒畑・燒畠【名】山間の地などにて、春先、雜草・雜木などを燒き拂ひ、その跡に、蕎麥(ソバ)・麥・粟などを蒔き附くること。やいばた。やきまき。きりかへばた。きりばた。なぎばた。やけばた。

やきばたけ 燒畑・燒畠【名】前條に同じ。

やきばたらき 燒働【名】昔の戰にて、陣營・民舍などに火を放ち、それに乘じて戰ふこと。甲陽軍鑑「虛空藏(コクゾウ)山の城へ働き申すべきと斷り、景虎、切所(セツショ)を起し、鼠宿まで、燒働致さるる」

やきばひ 燒灰【名】物を燒きて、灰を作ること、又、その人。延喜式「造酒司酒部一人、率二燒灰一人、驅使五人」

やきはまぐり 燒蛤【名】食ふために、生の蛤を、貝のまま炙り燒くこと。松葉の火にて燒くを佳とし、昔、伊勢國桑名のもの、東海道名物の一なりき。「じ。

やきはん 燒判【名】**やきいん**(燒印)に同

やきはらふ 燒拂ふ【動四他】跡形の無くなるまでに燒く。全部を燒く。著聞「佛像を難波の堀江に流し捨てて、伽藍を燒拂はれにけり」

やきばり 燒鍼【名】昔、鍼術の一法として、鐵製の鍼を、燈火にて熱して、患部に刺ししこと。やいばり。

やきひげ 山羊髭・野羊髭【名】人の顎髭(アゴヒゲ)の、山羊の牡の髭の如きさまのもの。

やきふ 燒麩【名】ふ(麩)を見よ。續膝栗毛「平(ヒラ)の蓋を取って見て、そりやこそな、又燒麩にはあやまるはえ」

やぎふ 柳生【名】[1]〔地〕大和國添上(ソウノ)郡の村。古の楊生郷の一部。奈良市の東方五里。德川時代には、柳生氏の陣屋あり。[2]姓氏の一。本姓は菅原、道眞の第四世紀伊守重宣より出づ。その孫永家、藤原賴通(ヨリミチ)の家令たりし關係により、長曆元年、賴通、春日社に四箇の莊を寄せられし時、永家、小柳生の莊を賜はり、子孫その地に住し、遂に地名を取りて、姓とす。十一世の孫永珍の時、一旦所領を失ひ、建武中興の際、功によりて、又、舊領を賜はり、その七世の孫宗嚴(ムネヨシ)、又、豐臣秀吉より所領を沒收せられしが、その子宗矩に至り、更に、德川氏より、舊地千石を與へられ、後、頻りに加封せられて、一萬二千五百石に至り、正保三年、嫡子三嚴(ヨシミツ)、八千三百石を以て、その後を繼ぎ、四千石を三男宗冬に分ちしが、宗家は、寛文八年に二千石を加賜せられ、萬石の列に入り、子孫相繼ぎて明治に至り、維新後、華族に列し、子爵を授けらる。[3]〔地〕明治の初年設置の縣の一。四年七月、大和國舊柳生藩の地に立てしもの。同年十一月、奈良縣に入る。

やぎふ-がさ 柳生笠【名】ふたつがさ(二笠)に同じ。

やぎふし 八木節【名】俗曲の一。下野國邊より出でたるものといふ。

やぎふ-しんかげりう 柳生眞影流【名】

やぎふりう(柳生流)に同じ。

やぎふ-たじまのかみ 柳生但馬守【名】[1]〔人〕**やぎふむねよし**(柳生宗嚴)に同じ。[2]**やぎふむねのり**(柳生宗矩)に同じ。

やぎ-ふで 燒筆【名】箸の如き形の木の端を燒き焦して、下畫を描くに用ふるもの。古き檜桐などの材を貴び、描きたる痕は、拭へば直ちに消ゆ。

やぎふ-むねのり 柳生宗矩【名】〔人〕劍法家。通稱は新左衞門、又、又右衞門、但馬守と稱す。宗嚴(ムネヨシ)の第二子。兄嚴勝、大和國柳生莊を領して、筒井順慶に屬せしが、後、故ありて、本領を去り、他國に死す。宗矩、文祿三年、德川家康に謁して、麾下に列し、關ヶ原の役後、舊領柳生の地を賜はり、二千石を知行す。父に繼いで、刀劍の術に達す。將軍家光の信寵渥く、常に近侍して、政の治顧問に備はり、秩祿頻りに加增して、一萬二千五百石に至る。正保三年卒す。年七十六。

やぎふむねよし 柳生宗嚴【名】〔人〕劍法家。通稱、初は新介、後、新左衞門と改め、又、但馬守と稱し、石舟齋と號す。大和國柳生村の人。父は美作守家嚴、宗嚴、少時より刀劍の術を好み、新蔭(カゲ)流の祖秀綱に師事し、推重せらる。當時の侯伯、その門に入る者多く、遂に信長に仕へ、後、病に罹りて、柳生に閑居し、文祿三年、德川家康に謁して、又、その術を傳へ、慶長十一年柳生に死す。年八十。一說に、柳生流は、宗嚴の孫(卽ち宗矩の子)三嚴(ヨシミツ)を祖とすともいふ。三嚴、通稱は重兵衞(十兵衞とも書く)と稱す。

やぎふ-りう 柳生流【名】前條を見よ。

やきほね-なます 燒骨鱠【名】鯛の薄身・骨などを燒きて拷り取り、田つくり・川えび・糸くらげ・栗・生薑(ショウガ)・大根おろしなどを入れ、酢と鹽とにてあへたる鱠。

やきほろぼす 燒亡す【動四他】敵の居處などを燒きて、無くなす。やきうしなふ。蕪菁「君が行く道の長てを繰りたたね燒きほろぼさむ天の火もがも」著聞「守屋(モリヤ)、仰を承りて、堂塔を燒きほろぼして、佛法を滅亡す」

やきまき 燒蒔【名】**やきばた**(燒畑)に同じ。字鏡「統、稻也。也支萬支。又、阿良萬支」

やきまきだ 燒蒔田【名】前條に同じ。

やきまし 燒增【名】寫眞屋に撮影を依賴したる寫眞の、初め受け取りたる枚數にて足らざる時の追加。又、その寫眞。

やきみそ 燒味噌【名】食ふために炙りたる味噌。續狹衣「柿の葉に燒味噌盛らん海箸(ハシスキ)」

やきみやうばん 燒明礬【名】〔化〕明礬を燒きて、結晶水を失はせたる白色・粗鬆の粉末。藥用とす。枯明礬。

やきん 野禽【名】野に棲む鳥。

やきん 夜勤【名】夜間勤務すること、又その勤務。よづめ。

やきん 冶金【名】鑛石、その他、金屬を含める原料より、工業的に金屬を抽出し、又は、その合金を製出する作業。製錬。

やきん-がく 冶金學【名】冶金の方法を攻究する應用科學。

やきん-こうぢやう 冶金工場【名】冶金の作業を行ふ場所。製煉場。

やきめし 燒飯【名】炙り燒きて表面に焦目(コゲ)を附けたる握飯。やきいひ。

やぎ-もぎ【貌】氣を揉みいらだつさま。やきやき。

やき-もち 燒餅【名】[1]炙り燒きたる餅。庭訓往來「煎餅・燒餅」[2]**ぎつぱ**(銀鍔)に同じ。雞州府志「燒餅。以二粳米粉一爲二小片團一、其內盛二赤小豆併砂糖一、片鏟上燒過、以二其形之相似一、或謂二銀鍔一」[3]『次條を見よ』ねたみ。嫉妬。悋氣。

燒餅燒くとて、手を燒くな【句】嫉妬は、自己の禍となること多ければ、愼むべし。〔諺語〕

燒餅を燒く【句】嫉妬をなす。悋氣をなす。ふすぶ。やく。

やきもち-かづら 燒餅葛【名】〔植〕**はすのはかづら**(蓮葉葛)に同じ。

やきもち-し 燒餅師【名】燒餅[1]を製して賣る人。人倫訓蒙圖彙「燒餅師(ヤキモチシ)、大和大路(ヤマトオホヂ)、五條の角にあって、これをあひす」

やきもち-ぢやや 燒餅茶屋【名】燒餅[1]又は[2]を製して賣る茶屋。孕常鬢「藥草の燒餅茶屋の妹春まで、色を酌茶(クミチ)の女夫(フ)あひ」

やき-もちひ 燒餅【名】**やきもち**(燒餅)[1]に同じ。

やきもち-ぶかし 燒餅深し【形一】しつぶかし(嫉妬深し)に同じ。浮世床「燒餅ぶかかつたから、自分から氣で氣を疾んで」

やきもち-やき 燒餅燒【名】嫉妬をなすこと、又それをなす性質の人。

やき-もの 燒物【名】[1]食ふために炙り燒きたる魚・鳥など。燒魚又は燒鳥など。あぶりもの。今昔「鹿……煎物(モノ)にてもうまし。燒物にても、うまき奴ぞかし」[2]陶器・磁器・土器の總稱。釉藥(クスリ)を用ひたると、然らずして、素地(キ)のままなるとあり。後者は素燒(スヤキ)といふ。陶磁器。せともの。すゑもの。[3]燒(ヤキ)を入れて作りたる物。はもの。用明天皇職人鑑「鍛冶屋……打ちに打ちたるもの、もとは燒刃の燒物なれば」

燒物のお染【句】次條の略。〔諺語〕

焼物のお染で、袖振らぬ【句】『お染は、淨瑠璃「染模様妹脊門松」「新版歌祭文」などに記されて、久松との情事にて有名なる、大阪東區瓦屋橋附近の油屋の娘。陶磁器製のお染の人形は、人形芝居のお染とは違ひて、振袖を振らずといふを、同音の降(フ)るに言ひかけたるもの』雨が降るやうに見えて、容易に降らぬ時にいふ語。〔諺語〕

やきもの-がま 焼物窯【名】焼物㊁を焼くかまど。やきがま。陶窯。

やきもの-ぐすり 焼物薬【名】陶磁器の素地(キジ)の表面に薄く施して、焼き、製品に美觀を呈し、又、液體の透竄と汚物の附著とを防ぐために用ふる、一種の硝子質の物。透明なるもの、不透明なるもの、艶あるもの、艶なきもの等の種類あり。又、これに酸化金屬もしくは金屬を加へて、種種の色を呈せしむるやうしたるもあり、これを色薬(イログ)といふ。うはぐすり。つやぐすり。やきものぐすり。釉薬。

やきもの-し 焼物師【名】焼物㊁の製造を職とする人。する人。するものづくり。するびと。せともの。

やきもの-ばち 焼物鉢【名】焼物㊁の鉢。ちやわんばち。

やき-や 焼家【名】**やきいえ**(焼家)に同じ。

やー-ぎやう 也行【名】〔語〕五十音圖中の第八の行、即ち「や・い・ゆ・え・よ」。

やー-ぎやう 夜行【名】㊀夜間あるくこと。よあるき。やかう。宗長手記「節分の夜、……京には、厄落(ヤクオ)とて、年の數、錢を包みて、乞食の夜行に落して取らする事を思ひやりて」㊁夜まはり。枕「似げなきもの。……。靫負(ヒオ)の佐(スケ)の夜行」源氏「とのゐ人の、あやしき聲したる、夜行うちして」㊂ひやくきぎやうにち(百鬼夜行日)の略。桑花「路の程などに、夜行の夜などにも、おのづからありまふらん、いとうしろめたき事なり」

やきやう-しやう 夜驚症【名】〔醫〕夜間、睡眠中に、突然驚怖の狀を呈して、起きあがる病。多くは、晝間の神經昂奮に由來し、普通、二歳乃至八歳の神經質の小兒に發すること多し。

やき-やき 焼焼【名】**やきもき**に同じ。

やき-やまがり 焼山狩【名】山にて焼狩をなすこと。盛衰記「焼山狩仕りて、狩場の灰など懸りて見苦しく候へば、靜かに見參に入るべし」

やー-きよく 野曲【名】**えいきよく**(郢曲)に同じ。東鑑「好方盡二野曲一」

やー-ぎり 矢切【名】㊀敵の射たる矢を切り拂ふこと。㊁しのびがへし(忍返)㊁に同じ。〔屋欄〕若鳳傘「柏の梢、矢切を飛越す面影を見附けたまひて」

矢切の但馬【句】〔人〕治承四年五月、以仁(モチヒト)王に從ひて、宇治橋の上にて奮闘し、敵の射たる矢を刀を揮ひて切り拂ひし三井寺の僧五智院但馬の異名。平家五智院の但馬、大長刀の鞘をはづして、只一人、橋の上にぞ進みたる。平家の方には、これを見て、唯射取れや射取れとて、さしつめ引きつめ散散に射けれども、但馬、少しも騒がず、あがる矢をば突きくぐり、さがる矢をば躍り越え、向つて來るをば、長刀にて切つて落す。敵も味方も見物す。それよりしてこそ、矢切の但馬とはいはれけれ」太平記「宇治橋を引き落して、橋桁ばかり殘りて候ひしをだに、筒井淨妙・矢切の但馬なんどは、一條二條の大路よりも廣げに走り渡りて」

やぎり-と 矢切子・屋欄子【名】忍返(シノビ)を組成する、細き木又は鐵など。

やきり-たつ 矢切立【名】和船の袖垣の端。みおくりたつ。

やき-わく 焼枠・焼框【名】寫眞の焼附(ヤキツ)をなすに、紙を種板に重ねて嵌むる、木製の枠。大さは、種種ありて、上面には硝子板を嵌め、背面よりは、木の板を、ばねなどにて押し附くるやうにす。

やき-ゑ 焼繪【名】㊀焼金(ヤキガネ)を用ひて、紙・木板・竹材・天鵞絨(ビロド)などに、繪又は文字を書くこと、又、その繪又は文字。今日にては、象牙などにも施し、藥品を用ひて灼熱せしめたるプラチナの針金にて書く。こてゑ。今物語「今參の侍、……、焼繪をめでたくする由聞えければ、檀紙に焼繪をさせけるに」一説に、この文のは、次の㊁の説明に該當するものなるべしともいふ。盛衰記「白篦(ハジ)に、……三浦小太郎義盛と焼繪したりけるを」㊁尉(ジヨウ)㊄を加へし墨汁にて、紙に繪又は文字を書き、乾かして、火を附くれば、火はその繪又は文字のままに傳はりて、紙を焼き抜くこと、又そのもの。

やく 役【名】㊀**ぶやく**(夫役)に同じ。醒睡笑「蠟を附けたる馬二疋、京へ上(ボ)る。山中の關にて役をせよといふ」唐船噺今國姓爺「毎日・毎日、役にされ、植ゑる田も植ゑられず」㊁つとめ。職務。役目。空穂俳諧古選「花守の役にさされて借烏帽子」源氏㊂ことゑ(事)㊃に同じ。源氏「しほ垂るる事をやくにて松島に年經るあまもなげきをぞ積む」㊃『夫役の代りに納入する金錢の義』所得に應じて、官府に納入する雜税。役錢。㊄能樂・演劇などにて、役者の、分擔して、或人物に扮すること。

役に立たずの門立(カドタチ)【句】「たくらだの市立」に同じ。〔諺語〕

役に立つ【句】『立つは四段活用』才能又は長所あるがために、一かどの用を辨ず。用ふるに堪ふ。やくだつ。狂言「烏帽子折」「もし殿様御出世などと御座らう時、御やくに立たうと存じ」

役に立つ【句】『立つは下二段活用』才能又は長所によりて、一かどの用を辨ぜしむ。使用に供す。

役を振る【句】役目を割り當つ。分擔の任務を命ず。

やく 疫【名】**やくびやう**(疫病)に同じ。續紀「百官官人患レ疫」

やく 益【名】**りやく**(利益)に同じ。盛衰記「十萬僧讀經す。その聲、冥界に充ち滿ちて、その益、罪垢(ザイ)を洗ひぬべし」

やく 易【名】**えき**(易)に同じ。〔古語〕紀「易博士、ヤクノハカセ」

やく 厄【名】㊀わざはひ。災難。災厄。水鏡「龍蓋寺は厄を轉じたまへると承りて詣でそめしより」㊁やくどし(厄年)の略。㊂『種痘法の知られざりし時代には、一生の大厄なりしよりいふ』ほうさう(疱瘡)の異稱。浮世風呂「お孫さまが、痘瘡(ホウサウ)を遊ばしたさうでございますね」

厄の年【句】やくどし(厄年)に同じ。曾根崎心中「今年は、こな様も、廿五の厄の年、わしも十九の厄年とて」

厄を落す【句】次條に同じ。宗長手記「數ふればわが八十の雜事錢やくとていかが落しやるべき」

厄を拂ふ【句】厄難を祓ひ落す。厄年の厄を攘ひ除く。

やく 軛【名】**くびき**(頸木)に同じ。

やく 葯【名】〔植〕雄蕊の一部。花絲の頂端にありて、嚢狀をなし、内部に花粉を包藏す。通常、左右兩半に分る。

やく 犛牛(西藏 Gyak)【名】〔動〕偶蹄類中、反芻類に屬する哺乳動物。體形も、大さも、牛に似たれども、頭部・頸背部及び軀幹の下部より脚にかけて、長毛垂れ、尾は、馬のに似て、總狀をなす。體色は、黑きを常とすれども、白きもあり。支那と中央亞細亞との境界地方に棲息し、西藏人は、これを飼養して、使役に供し、又肉・乳汁・毛皮、皆、有用にして、尾毛は、犛牛毛(ヤク)といひ、價貴し。

やく 約【名】㊀ちかひ。ちぎり。約束。契約。㊁『論語の里仁篇に「以レ約失レ之者鮮矣」とあり』つづまやかなること。節約。簡約。㊂『論語の里仁篇に「不仁者不レ可二以久レ約」とあり』まづしきこと。貧窮。㊃〔語〕**やくおん**(約音)に同じ。「多かりは、多くありの約」㊄わりざん。除法。

やく 譯【名】をさ。譯すること、又、譯したる語句・文章。譯解。飜譯。

譯を重ぬ【句】『史記の司馬相如傳に「西域重レ譯請レ朝、稽首來享」とあり』二箇國以上の國語に、順次に譯して、意思を通ず。

譯を附く【句】外國文講讀の際、譯解を施す。譯讀をなす。

やく 燒く・焚く【動四他】一火を、他の物に移らせて、その物を灰となす。たく。もやす。燃燒す。二火氣に觸れしめて、食物・器物などを、ただちに用ひ得るやうにす。三日光に曝して、水分を蒸發せしむ。日に燒けしむ。かわかす。四心を亂し惱ます。思ひ焦れしむ。こがす。萬葉「冬ごもり春の大野(スノ)を燒く人は燒き足らぬかも吾心燒く」五さまざまに心を配る。六欺きて、嬉しがらす。だます。すかす。たらす。一代女「この津に來りて、この道に身をなし、人をよく燒くとて、野墓のるりと名に呼ばれて」七「燒餅を燒く」の略。浮世床「燒く代りには、手があるだらう」

やく 燒く・焚く【動下二自】一火、物に移りつきて、その物、灰となる。二火氣に觸れて、食品・器物など、ただちに用ひ得るやうになる。三日光に曝されて、水分蒸發し、又、斯かる暑さに照されて、苦しく感ず。かわく。鬼貫「撫子よ川原に足の燒けるまで」四旱のために、田畠の作物など、枯れ萎む。和泉式部集「田舍なる人のもとより、ひでりして、國の皆燒けたる事わびたるに」五日光に照されて、色變る。六酸(ス)などのために、化學的變化生じて、色・質など變る。七噴火す。橘南谿西遊記「安永年間、薩摩の櫻島山、大いに燒けて後」八光、空などに映りて、燃ゆるやうに見ゆ。九心亂れ惱む。思ひ焦る。こがる。萬葉「思ひぞ燒くるわが下心」十さまざまに心を配るやうになる。心づかひせらる。十一ねたましく感ず。嫉妬又は羨望の情起る。十二「胸燒く」を見よ。燒けた後(ト)の火の廻【句】一出火のありたる後に、夜まはりをして警戒すること。〔諺語〕二災に遭ひたる後に、豫防の方法に著手する譬。〔諺語〕

やぐ 夜具【名】夜、寢ぬる時、身體の下に敷き又は上に掛けて用ふる物、即ち蒲團・搔卷(マキ)などの總稱。よぎ。よるのもの。ふすま。

やくあて 役當【名】役目を割り當つること。分擔の任務を命ずること。八笑人「狸の役當て、面(ツラ)不足をいふもの」

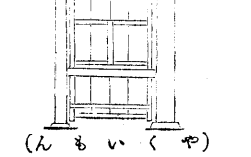
やくい 藥醫【名】てんやく(典藥)の唐名。運歩色葉集「藥醫、ヤクイ、典藥之唐名」

やくいし 役石【名】鉢前(マヘ)に据うる、前石(マヘイシ)・湯桶石(ユトウ)・手燭石(テショク)の三つの石。〔庭師の語〕

やくいん 役印【名】しょくいん(職印)に同じ。

やくいん 約因【名】〔法〕『英 Consideration』契約に於ける當事者の、債務を負擔するに至れる原因。例へば、賣買の契約に於て、賣主の財產を移轉すべき約束と、買主の代金を支拂ふべき約束とは、互にその約因をなす類。英法に於て發達したる觀念にして、英法にては、捺印證書に依るものを除く外、約因なければ、契約は無効なりとすれど、我國にては、この觀念を認めず。

やくいもん 藥醫門【名】〔建〕門の形式の一。方形なる二本の柱に、各、一本づつ、方形又は圓形の控柱あり。冠木(キカ)と男梁(ダンリウ)とを取り附け、その上に切妻破風(キハフ)造なる一軒(ケン)の屋根を設けたるもの。もと醫師の家に設けしものにて、醫師は、患者、不時に出入するが故に、初は扉無かりしといふ。役居(ヤク)門。運歩色葉集「藥醫門、門扇無レ之、病人無レ限故如レ此也」



やくうど 【名】西比利亞のレナ(Lena)河の流域に住める種族。亞細亞的人種の北方派に屬す。トルコ人・キリギス・ウスベク等の種族と同族。現今は、露西亞人又はツングウス族と混血せる者あり。

やくうま 役馬【名】夫役(ブヤク)に徵發せらるる馬。孕常齋「科人(シナ)渡す役馬」

やくうん 厄運【名】ふうん(不運)に同じ。

やくくう・やくうもん 亦空亦有門【名】〔佛〕しもん(四門)一を見よ。

やくえき 藥液【名】藥に用ふる液。藥劑を溶したる液。

やくおとし 厄落【名】『厄を落す』を見よ』やくはらひ(厄拂)一に同じ。也有「雪拂ふ垣根や梅の厄落」

やくおとし 役落【名】前條の誤。宗長手記「節分の夜、……京には、役落とて、年の數錢を包みて、乞食の夜行(ヤヤ)に落して取らする事を思ひやりて」

やくおん 約音【名】〔語〕連接せる二音が、反切法によりて、一音に約(ツヅ)まりて生じたる音。例へば、「譽められ」が「ほまれ」となり、「嬉しくありけり」が「嬉しかりけり」となる類。

やくか 藥價【名】藥の代價。やくだい。

やくかい 譯解【名】外國文を講讀する時、語句を自國の語に譯して解釋すること、又その解釋したる語句・文章。

やくかい 厄介・役介【名】『厄難を介抱する義かとも、又、班彪の王命論(文選の卷十一にあり)に「遭二羅厄會」とある厄會(厄難の會集する義)の轉なるべしともいふ』一他の難儀を助くること。介抱。世話。二手數のかかること。煩はしきこと。面倒。難儀。「話を受く。

厄介になる【句】難儀を助けらる。世

厄介もくかい【句】やくかい(厄介)二を强めていふ語。

厄介もくかいになる【句】「厄介になる」を强めていふ語。浮世風呂「貧乏しても、こんた衆の厄介もっけえにやあならねえ」

厄介を掛く【句】自己の難儀につきて、他人に手數を掛く。

やくかい 厄害【名】厄難と災害と。

やくかいばう 厄介坊【名】やくかいもの(厄介者)に同じ。

やくかいばらひ 厄介拂【名】厄介二の原因となる事物を避け拂ふこと。

やくかいむすこ 厄介息子【名】親・兄弟などに屢ば迷惑を掛くる息子。

やくかいむすめ 厄介娘【名】親・兄弟などに迷惑を掛くる娘。

やくかいもの 厄介者【名】一厄介二の原因となる人。他人に迷惑を掛くる者。やくかいばう。二ねさふらふ。食客。やくかいばう。

やくかう 藥効【名】藥の効力。藥のきめ。藥力。

やくかう 藥衡【名】『英 Apothecaries weight』藥品をはかるに用ふる目方の單位。おんす參照。

やくかかり 役係【名】或役に當れる人。八笑人「役係の者」

やくがく 藥學【名】『獨 Pharmacie』藥劑に關して攻究する科學。

やくがくし 藥學士【名】學士の一。大學醫學部又は醫科大學の藥學科を卒業したる者の稱。舊稱、製藥士。

やくがくはかせ 藥學博士【名】やくがくはくし(藥學博士)に同じ。

やくがくはかせくわい 藥學博士會【名】やくがくはくしくわい(藥學傳士會)に同じ。

やくがくはくし 藥學博士【名】博士の一。藥學の蘊奧を究めたる者に授く。

やくがくはくしくわい 藥學博士會【名】博士會の一。藥學博士を以て組織す。

やくがはり 役替【名】役目のかはること。他の役に轉ずること。

やくがひ 夜久貝【名】〔動〕やくわろがひ(夜光貝)に同じ。釋名「夜句人(私記曰或本爲二夜句一同也、披玖者西海別島也、出二美貝一、今俗謂二之夜句貝一、但此島與二大隅島一相近耳」

やくがへ 役替【名】役目を替ふること。他の役に轉ぜしむること。轉職。

やくがみしも 役上下【名】江戸時代に、目見(メミエ)以下の格式の一。上下を著用して出仕するを得ることは、上下役(ヤクヤク)と同一なれども、家督跡式の相續に當り、躑躅間(ツツジ)にて、命を受くること無かりしもの。

やく-がら 役柄【名】一役目につきての體面。二役目の性質。俗曲(尾上岩藤)「萬一、奥向(ムキ)へ、狼藉者が斬り入るか、又は盗賊などが忍び入る、その時は、役柄ぢや、女子(ヨナ)ながら、御前(ゴゼ)の固(カタ)」

やく-き 薬器【名】薬を入るるに用ふる器。昔のは、形、壺に似て、蓋あるものなりきといふ。

やく-き 薬氣【名】薬の氣。くすりけ。

やく-き 躍起【名】一躍りあがること。二目的を達せんとあせること。いらだつこと。「同じ。

やく-ぎ 役儀 役義【名】**やくめ**(役目)に

やく-ぎ 譯義【名】譯したる意義。飜譯したる文句の意味。

やく-きうんどう 躍起運動【名】躍起となりて、目的を達せんとする運動。「同じ。

やく-ぎ-とりあげ 役義取上【名】次條に

やく-ぎ-とりはなち 役儀取放【名】**やくめしはなち**(役儀召放)に同じ。

やく-きん 役金【名】江戸幕府にて、慶應三年九月以後、遠國奉行等に、金にて給與したる役俸。從來の布衣以上の吏の役知・役料・役扶持に代へたるものにて、三月・六月・九月・十二月の四期に分給したり。

やく-ぎ-めしはなち 役儀召放【名】江戸幕府時代の刑罰の一。武士に科して、その役儀を免ぜしもの。

やく-きよく 薬局【名】一薬劑師の調劑をなす所。調劑所。二次條の略。「俚語」

やく-きよく-せい 薬局生【名】醫師の薬局に在りて、調劑をなす人。

やく-きよく-はう 薬局方【名】薬物處方製劑の規定。薬品の性質・製法・試驗法等を掲ぐ。文明諸國、皆、獨自の制定あり。**にほんやくきよくはう**(日本薬局方)参照。

やく-きりまい 役切米【名】江戸幕府にて、賄方の下吏に給與せし役俸。「同じ。

やく-ぐ 役供・益供【名】**やくそう**(役送)に

やく-ぐみ 役組【名】役割を組み合はすること、又その組。新可笑記「何の役組も定なく、先づ御廣間へ相詰めける」

やく-くん 約訓【名】約音に依る訓讀。例へば、「朽網」を「くたみ」、「荒磯」を「ありそ」と訓む類。

やく-くわん 譯官【名】一『漢書の百官志に「典客名二大鴻臚一屬官有二行人譯官一」とあり』飜譯又は通譯に從事する官。通詞。通事。二明治二年八月より同四年八月まで、外務省に置かれし官吏。大譯官・中譯官・少譯官の三等に分かれ、大譯官は奏任、他は判任にして、三者共に外國と交通の辭令・文書の飜譯を掌る外、大譯官は、外客入朝の參侍譯語をも掌りたり。

やく-くわん 約款【名】契約の條款。

やく-げつ 約月【名】約束したる期限の月。

やくけつてき-りせつすゐりはふ 約結的離接推理法【名】〔哲〕**ぢれんま**に同じ。

やく-けふ 薬莢【名】金屬にて、筒の如き形に造り、内に火薬等を入れ、銃砲に裝塡して、發射するに用ふるもの。けえす。

やく-げん 約言【名】約(ツヅ)めて言ふこと、又その言葉。

やく-げん 薬言【名】『史記の商君傳に「苦言藥也。甘言疾也」とあり』「藥石の言」に同じ。

やく-ご 薬戸【名】古、典薬寮に屬して、薬草の種採に役せし戸(コ)。「の用語。

やく-ご 譯語【名】飜譯したる言語。譯文

やくご 約語【名】**やくげん**(約言)に同じ。

やくざ【名】『嬉遊笑覽に、渭濱庵隨筆を引きて「博奕に、三枚といふものをするに、八九の數を高目上上として、十とつまるは數にならず、八九三(ザク)廿につまる故、惡しき事の隱語を八九三といひ初めたるなり」と記し、なほ、**べらばう**といふ語と共に、博徒の語なりといへり』役に立たぬこと。價値の無きこと。

やくざい 薬劑【名】『史記の孝武帝紀に「於レ是天子始親祠レ竈、而遣二方士一入レ海求二蓬萊安期生之屬一、而事下化二丹砂諸藥劑一爲中黄金上矣」とあり』調合・加減したる藥。くすり。

やく-ざい 薬材【名】『三國志の魏國の部趙儼傳の裴松の註に「忘レ持二其常所一服藥、雍州聞レ之、乃追二送雜藥材數箱一」とあり』**やくじゆ**(藥種)に同じ。

やくざい-かん 薬劑監【名】**りくぐんやくざいかん**(陸軍薬劑監)の略。

やくざい-くわん 薬劑官【名】一**かいぐんやくざいくわん**(海軍薬劑官)の略。二**りくぐんやくざいくわん**(陸軍薬劑官)の略。

やくざい-し 薬劑士【名】海軍薬劑官の内、尉官相等なるもの、即ち海軍大藥劑士・海軍中藥劑士・海軍少藥劑士の總稱。

やくざい-し 薬劑師【名】一醫師の處方箋によりて、藥劑を調合するを營業とする者。藥劑師免狀を得たる者に限る。又、藥劑師は、自ら藥品を製造し、及び藥品の販賣をなすことを得。二**やくざいしやう**(藥劑師長)を見よ。

やくざい-し-しけん 薬劑師試驗【名】藥劑師希望の者を集めて、その職に適する學力の有無を檢定する試驗。

やくざい-し-ちやう 薬劑師長【名】宮内省侍醫寮に屬して、藥品の製造・試驗及び調劑の事を掌る奏任官。定員一人。その事務を助くる藥劑師二人、同じく奏任官たり。その下に、藥劑生あり。

やくざい-し-めんきよよう 薬劑師免許證【名】臺灣及び澎湖島にて、藥劑師の業を營まんとする者の出願したる場合に、臺灣總督の下付する免許證。

やくざいし-めんじやう 薬劑師免狀【名】藥劑師試驗の及第證書を有して、藥劑師たらんとする者の出願に對し、内務大臣の下付する免狀。又、年齡滿二十歲以上にして、醫學大學藥學科・官公立藥學專門學校もしくは醫學專門學校藥學科・文部大臣の指定したる私立藥學專門學校及び高等中學校醫學部藥學科の卒業證書を有し、又は、外國の大學醫學部もしくは藥學校を卒業し、或は外國にて、藥劑師免許を得たる者の、その卒業證書もしくは開業證書を以て、同樣の出願をなしたるに對しては、内務大臣は試驗を要せずして、この免狀を與ふることあるべし。

やくざい-せい 薬劑正【名】**りくぐんやくざいせい**(陸軍薬劑正)の略。

やくざい-せい 薬劑生【名】一明治八年一月より十一年八月にかけて、宮内省に置かれ、一等乃至六等の六級に分れ、藥劑の事に從事したる判任官。二藥劑師免狀を有し、又は、これを受くべき資格ある一年志願兵にて、志願によりて、上等兵に任ぜられたる後、調藥に關する下士及び士官の勤務を練習する者。

やくざい-ゐん 薬劑員【名】宮内省侍醫寮に屬し、藥劑師の下に在りて、藥品の製造・試驗及び調劑に從事する判任官。

やく-さう 薬草【名】一藥として用ふる草(クサ)。方丈「もろもろの藥草を栽ゑたり」二〔佛〕『法華經の第五なる藥草喩品に見ゆ』衆生(シユジヤウ)の機類を、草木に譬へていふ語。佛の教法を雨に譬へ、雨は平等(ビヤウ)一味なれども、衆生の機類に應じて、各自の智性を滋生し、以て惑を治すといふにつきていふ。實際は、機類を三草・二木に差別して譬へてあれども、その數の多きに隨ひて、木の方は略したるなり。

やくさうゆ-ぼん 薬草喩品【名】〔書〕法華經二十八品中の第五品。

やく-ぐさし 屋臭し【形一】**こげくさし**(焦臭し)に同じ。〔近江國の方言〕

やくさ-の-かんだから 八種神寶【名】天日槍(アメノヒボコ)の來朝せし時齎しきといふ、八種類の神寶、即ち珠二貫、振浪比禮(カミナミヒレ)・切浪比禮(カミナキヒレ)・振風比禮(カミフリヒレ)・切風比禮(カミキリヒレ)・奥津(オキツ)鏡・邊津(ヘツ)鏡。後世、但馬國出口(イデ)神社に齎き祀れり。一名、玉津寶(タマツ)。

やくざ-ば やくざ場【名】價値なき土地。武野俗談「その道のやくざ場の如くいへども」「やくさみ、歡樂なり」

やくさみ【名】やくさむこと。病氣。藥鑑草

やくさむ【動四自】病に罹る。病む。紀「日神擧體不平、……ヤクサミタマフ」

やくざ-もの やくざ物・やくざ者【名】一やくざなる人。役に立たぬ人。二**だうらくもの**(道樂者)一に同じ。

やくし 譯師【名】經論を飜譯する法師。

やくしるりくわうによらい(藥師琉璃光如來)の略。

やくし 藥師【名】〔佛〕**やくしるりくわうによらい**(藥師琉璃光如來)の略。藥師の前、地藏の後【句】『藥師の緣日は八日、地藏の緣日は二十四日にて、その前後は打ち續きて闇夜なるよりいふ』闇夜をいふ語。〔諺語〕

藥師十二の誓願【句】〔佛〕「藥師の十二誓願」に同じ。十訓「藥師十二の誓願は、衆病悉除にたのもしき」

藥師の三尊【名】〔佛〕中尊は藥師如來、左脇侍は日光(ニッコウ)菩薩、右脇侍は月光(ゲッコウ)菩薩なる三尊。

藥師の十二願【句】〔佛〕「藥師の十二誓願」に同じ。

藥師の十二神將【句】〔佛〕**じふにじんしやう**(十二神將)を見よ。

藥師の十二誓願【句】〔佛〕藥師如來の誓願なりといふ十二件、即ち第一、自他の身の光明熾盛の願、第二、威德巍巍として、衆生を開曉する願、第三、衆生をして、所欲を飽滿し、乏少なからしむる願、第四、一切衆生をして、大乘に安立せしむる願、第五、一切衆生をして、梵行(ボンギョウ)を行じ、三聚戒(サンジュカイ)を具せしむる願、第六、一切の不具者をして、諸根完具せしむる願、第七、一切衆生の衆病を除き、身心安樂にして、無上菩提を證得せしむる願、第八、轉女成男の願、第九、諸の有情をして、天魔・外道(ゲダウ)の纏縛、邪思・惡見の稠林を解脫せしめて、正見(シャウケン)に引攝(インセフ)する願、第十、衆生をして、惡王・劫賊等の横難を解脫せしむる願、第十一、飢渴の衆生に、上食を得しむる願、第十二、貧乏にして、衣食なき者に、妙衣を得しむる願。但し異說あり。**じふにじんしやう**(十二神將)參照。

藥師の眞言【句】〔佛〕藥師如來に祈る時、唱ふる眞言、即ち「唵(オン)、呼嚕呼嚕(コロコロ)、旋茶利(センダリ)、摩登枳(マトキ)、莎訶(カソワ)」。「又、翻譯したる詩。

やくし 譯詩【名】詩を翻譯すること、

やくし 藥司【名】㊀**くすりのつかさ**(藥司)に同じ。㊁古、太宰府に置かれ、醫藥の事を掌りし司(ツカ)。

やくじ 藥餌【名】藥物と食餌と。くすりと食物と。「藥餌に親しむ」「見よ。

やくじき 藥食【名】**ばんしゆく**(晩粥)を

やくしきやう 藥師經【名】〔書〕『梵Bhaisajyaguru-sūtraの譯語』藥師如來の誓願と功德とを說ける佛經。五種の漢譯あり、東晉の帛尸梨蜜多羅(ハクシリミタラ)の譯、佛說灌頂拔除過罪生死得脫經一卷と、宋の慧簡の譯、藥師瑠璃光經一卷(藏經には入らず)と、隋の達摩笈多(ダルマギタ)の譯、佛說藥師如來本願經一卷と、唐の玄奘の譯、藥師瑠璃光如來本願功德經一卷と、唐の義淨の譯なる藥師瑠璃光七佛本願功德經二卷とにして、前の四譯は、藥師如來の功德を說ける部のみを譯出し、第五の義淨の譯は、七佛藥師の事を詳譯せり。故に、前の四譯を藥師經又は隨願藥師經と稱し、義淨のを七佛藥師經と呼ぶ。

やくしけくわ 藥師悔過【名】〔佛〕藥師如來に向ひて、罪障を懺悔する法。續紀「令二天下諸國藥師悔過一七日」

やくしこう 藥師講【名】〔佛〕藥師如來を念誦する法會。藥師經を百座に分ちて、講說・讃嘆す。平家「先づあらはれての御立願には、……、百座の藥師講」

やくしじさ 役仕事【名】役(ヤク)㊁のための仕事。唐船噺今國姓爺「賃も取らずの役仕事」

やくしさう 藥師草・苦賈菜【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。我國、山野に自生し、高さ一二尺に達し、白色・乳液の液を含み、葉は互生し、長楕圓形或は倒卵形にして、齒牙あり、下部は莖を抱き、花は頭狀花序をなし、すべて黃色の舌狀花冠を有し、果實には白色の冠有り。

やくしざん 藥師算【名】數學的遊戲の一。恭石など若干を、中空・方形・正三角形又は正五角形に並べさせ、次ぎに、その一邊を除く外、すべて扇し、その扇したる石

を、殘したる石に添へて並べさせ、その端數を問ひて、總數を言ひ當つるもの。

やくしじ 藥師寺【名】㊀大和國生駒(イコマ)郡都跡(トセキ)村大字西之京(ニシノキヤウ)にある法相宗の寺。本尊は藥師如來。法相宗三大本山の一。天武天皇、皇后の病氣平癒を祈らんがために、藤原の京の地域なる高市(タケチ)郡岡本に建立せられしを、元明天皇の時、今の地に移されしもの。奈良七大寺の一。天延以降、屢ば災厄に罹り、三層樓を除く外、江戸時代の建築に係る。㊁下野國河內郡藥師寺村大字藥師寺にありし寺。天智天皇(一說に、天武天皇)の九年の建立。歷朝の尊信厚く、聖武天皇の勝寶六年、鑑眞和尚、奈良の東大寺、筑紫の觀音寺とこの寺とに戒壇を建てて、三戒壇と呼ばれ、弓削(ユゲ)道鏡、稱德天皇の崩後、この寺の別當に貶せられて、ここに死せり。その大伽藍は、建長の頃まで存せしが、何時の頃にか廢して、龍興寺といふ別院のみ、僅かに殘り、その別院は、鑑眞和尚の唐の揚州龍興寺を模倣せしものにて、一時は末寺三十六を有したり。戒壇の地には、足利尊氏、安國寺を建てたりと傳へしが、これも、何時しか廢れたり。㊂姓氏の一。小山氏より出づ。寬喜年中、小山朝村、下野國河內郡藥師寺の地に藥師寺城を築きて、子孫相承け、藥師寺を氏とす。その裔次郎左衞門公義は高師直に仕へ、文武の材を以て名あり、この人の歌「取るは憂し取らねば人の數ならず捨つべきものは弓矢なりけり」は、頗る人口に膾炙す。その子孫は、宇都宮氏に仕へ、世世、この城に主たりしが、慶長二年、宇都宮氏と共に滅び、城も亦廢す。

藥師寺の最勝會【句】大和國藥師寺にて、毎年三月七日より六日間行ひし最勝會。太平記「三月には、……、七日、藥師寺の最勝會」

やくししちぶつ 藥師七佛【名】〔佛〕**しちぶつやくし**(七佛藥師)に同じ。

やくしじふにじんしやう 藥師十二神將【名】〔佛〕**じふにじんしやう**(十二神將)に同じ。

やくしだう 藥師堂【名】藥師如來の像を安置しおく堂。油彆藥師堂繪馬(マエ)に礫(テツ)打ち掛けて」

やくしだけ 藥師嶽【名】〔地〕㊀越中國上新川(カミニヒカハ)郡にある山。飛騨山脈北部の一峻峰。海拔九六五六尺。立山(タテヤマ)の一峯なる雄山の南方三里餘にあり。黑部川・常願寺川の分水嶺をなす。㊁相摸國津久井(ツクヰ)・足柄上(アシガラカミ)二郡の境界にある山。海拔四九七四尺。相摸國第一の高山なりといひ、この邊、すべて絕壑深奧、殆ど人跡を絕つ。一名、毘盧(ビロ)ゲ嶽。

やくしつ 藥室【名】〔兵〕『英Powder-chamber』砲腔の一部。尾栓室の前、砲彈の後なる、火藥を裝塡する所。

やくじつ 約日【名】約束したる期日。運歩色葉集「約日、ヤクジツ」

やくしによらい 藥師如來【名】〔佛〕『梵Bhaisajyaguru-tathāgataの譯語』**やくしるりくわうによらい**(藥師琉璃光如來)の略。謠曲檀風「新宮藥師如來の淨琉璃淨土」

やくしのじふにじんしやうほふ 藥師十二神將法【句】〔佛〕藥師の十二神將を本尊として修(シ)する、密敎の祕法。太平記「藥師の十二神將法、愛染明王、一字文殊・不動慈救(ジク)延命の法」

やくしぶつ 藥師佛【名】〔佛〕**やくしによらい**(藥師如來)に同じ。

やくしほとけ 藥師佛【名】〔佛〕前條に同じ。空穗「藥師ほとけ現じたまふ」

やくしほの燒く鹽の【枕】鹽は味辛きものなるより、**からし**(辛し)にかけていふ。萬葉「しかの蜑の一日も落ちず燒く鹽のからき戀をも我(ワ)はするかも」

やくしほふ 藥師法【名】〔佛〕密敎にて、藥師如來を祭り、その眞言を受持して消災・除難を祈る法。

やくしほふけくわ 藥師法悔過【名】〔佛〕**やくしけくわ**(藥師悔過)に同じ。

やくしほんぐわんきやう 藥師本願經【名】〔書〕**やくしきやう**(藥師經)を見よ。

やくしま 屋久島【名】〔地〕大隅國佐多岬の西南三十三海里にある島。周回二十

六里。形、圓錐狀をなし、上屋久・下屋久の二村に分れ、熊毛郡に屬す。全島、皆山にして、最高峯宮之浦岳は六三四尺に達す。首邑宮ノ浦は、北岸に在り、良港にして、鹿兒島を距る九十四海里、定期航行の汽船、種子(ネ)島及び鹿兒島の間を往復す。古は「益救」・「益久」・「液玖」など記せり。

やくしまーたから 屋久島寶【名】〔動〕『屋久島に產する寶貝の義』腹足類に屬する軟體動物。我國、南方の暖海に多く、介殼は、楕圓形にして、長さ二三寸、表面は靑白色を呈し、粟色と黑色との斑點あり。

やくしーまねり 藥師參【名】藥師を本尊とせる寺に參詣すること。油糟「いなば堂藥師まねりは長閑にて」

やくーじん 藥疹【名】〔醫〕藥物の內服・吸入・塗布・注射等によりて、特異の體質を有する者に生ずる發疹。藥物の種類は、沃土と臭素とより生ずる者、最も多し。

やくーじん 躍進【名】躍り上りて進むこと。

やくじん 益信【名】〔人〕眞言宗の僧。廣澤(ヒロサワ)流の祖。備後國の人。俗姓は紀。一に、品治(ホンヂ)氏といふ。弘法の法孫源仁の弟子。幼にして、奈良の東大寺に入りて、得度・受戒し、元興寺の明詮に法相宗をも學ぶ。傳法阿闍梨位に至り、東寺の長者に任ぜられ、宇多法皇に傳法灌頂を授け奉り、六年入寂す。年八十。尙侍藤原淑子の病を祈りて驗ありきとて、淑子、洛東に圓城寺を建てて住せしめしより、圓城寺僧正とも呼ばれたり。著書數部あり。諡を本覺大師と賜はる。

やくーじん 疫神【名】**やくびやうがみ**(疫病神)【名】に同じ。義經記「ただ追ひて物を見よと、つぶやきごとして、やくじんの渡るやうにて押し出す」

やくーじん 厄神【名】災厄を降すといふ「惡神。

やくじんーさい 疫神祭【名】疫病を攘ひ、又はその來襲を防ぐために、疫神を祭ること、卽ち四角四境祭(シカクシキヤウ)など。

やくじんーばらひ 厄神拂【名】祈りて、厄神を追ひ拂ふこと。やくはらひ。

やくじんーまうで 厄神詣【名】昔、正月十九日、山城國男山八幡宮の御旅所に厄神を勸請することあり、それに參詣すること。やくまねり。やはたまねり。

やくじんーまつり 厄神祭【名】攝津國須磨村大字多井畑(ハタ)なる厄除(ヤクヨケ)八幡宮にて、昔は前條の男山八幡のと同日、明治四十三年以後は、新曆によりて十八九兩日に、參詣者の厄を拂ふとて行ふ祭。

やくじんゑ 厄神會【名】昔、山城國男山八幡宮にて、その年の厄を拂ふとて、正月十九日に修(シユ)せし法會。

やくーしや 役者【名】㊀役目に當る人。役人。謠曲(經政)「かの御琵琶を佛前にすゑおき、管絃講にて弔ひ申せとの御事にて候ふ程に、役者を集め候ふ」㊁能樂又は演劇などにて、演技上の或役を分擔して、それに扮する人。能役者又は俳優。わざをぎ。狂言算用「諸に、舞に、役者の眞似」諸國はなし「役者も銘銘の魂入りて」

やくーしや 譯者【名】譯する人、又、譯したる人。飜譯者。

やくーしやう 藥商【名】㊀くすりや(藥屋)に同じ。㊁藥種商と藥劑師との併稱。

やくーじやう 藥上【名】〔佛〕次條に同じ。

やくじやうーぼさつ 藥上菩薩【名】〔佛〕『觀藥王藥上二菩薩經に見ゆ』二十五菩薩の一、又、藥師如來の眷屬たる八大菩薩の一。藥王菩薩の弟。電光明と稱し、佛涅槃(ネハン)の後、像法時に、兄藥王菩薩と共に、妙藥を僧日藏及び諸衆に供養し、未來世に、藥王に次いで成佛し、淨藏如來と號すといふ。

やくーしやーこども 役者子供【名】**ぶたいこ**(舞臺子)に同じ。一代男「總じて、役者子供の世を暮し、今日有って、明日は柳の雪の如し」

やくしやーぶね 役者船【名】旅廻(ハタヒマワリ)の役者一同の乘れる船。ひさご「幾日路も苦で月見る役者船」

やくーしゆ 藥種【名】㊀藥の材料。きぐすり。藥材。藥料。㊁**やくさう**(藥草)に同じ。

やくーしゆ 藥酒【名】藥を加へたる酒。藥用に供する酒。「木。

やくーじゆ 藥樹【名】藥用に供し得る樹

やくしゆーしやう 藥種商【名】藥品を販賣する免許商。藥種屋。「譯すこと。

やくーしゆつ 譯出【名】外國語を邦語に

やくーじゆつ 譯述【名】飜譯して、原文の意を述べあらはすこと。

やくしゆーや 藥種屋【名】藥種を賣る家、又その人。くすりや。御樓「藥種屋で屠蘇を買ふのは無病なり」

やくーじゆーわう 藥樹王【名】**やくわうじゆ**(藥王樹)に同じ。平治「大雪山にて、藥壽王といふ木あり」

やくーしよ 役所【名】㊀役人の、各自の役を取り扱ふ所。太平記「攻口近く陣を取り、役所を雙べてぞ御座(ザ)しける」同「暫く陣を取って、役所を構へ、手分をして合戰を致せ」㊁官公吏の執務する所。官廳。官衙。官署。

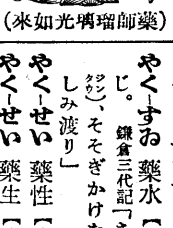
やくーしよ 譯書【名】譯述したる書籍。飜譯書。譯本。(原書に對して)「じ。

やくーじよ 躍如【名】**やくぜん**(躍然)に同

やくしよーむき 役所向【名】役所の仕事。官廳に關したる事。

やくしるりくわうーきやう 藥師瑠璃光經【名】〔書〕**やくしきやう**(藥師經)を見よ。

やくしるりくわうーによらい 藥師瑠璃光如來【名】〔佛〕『梵 Bhaiṣajyaguru-vaiḍūryaprabha-tathāgata の譯語』須彌(シユミ)山の東方なる淨瑠璃世界の敎主。十二誓願を發し、衆生の病源を救ひ、無明の痼疾を治すといふもの。その像は、普通、左手に藥壺を持ち、右手に施無畏(セムヰ)印を結べる樣に作り、眷屬に日光・月光の二菩薩、文殊・觀音・勢至・無盡意・寶檀華・藥王・藥上・彌勒(ミロク)の八大菩薩及び十二神將等あり。醫王。大醫王佛。醫王善逝。藥師如來。藥師佛。藥師。



(藥師瑠璃光如來)

やくしるりくわうによらいーほんぐわんーくどくーきやう 藥師瑠璃光如來本願功德經【名】〔書〕**やくしきやう**(藥師經)を見よ。

やくしるりくわうーぶつ 藥師瑠璃光佛【名】〔佛〕**やくしるりくわうによらい**(藥師瑠璃光如來)に同じ。

やくす 約す【動佐變他】㊀『論語の雍也篇に「約ノ之ヲ以ノ禮」とあり』括り束ぬ。引き締む。㊁或物事の將來につきて、取極(トリキメ)をなす。ちぎる。ちかふ。約束す。契約す。㊂引き締め括りて濫ならぬやうにす。つづまやかにす。省約す。節約す。㊃〔數〕『英 Cancel』分數の分母と分子とを、その公約數にて割りて、簡易ならしむ。

やくす 譯す【動佐變他】㊀『潛夫論に「賢人爲ノ聖譯」とあり』譯(ヤク)を說く。解釋す。說明す。㊁或國の言葉を、他の國の言葉に變へて、意味を通ぜしむ。通譯す。飜譯す。譯述す。

やくす 扼す・搤す【動佐變他】とりておさへつく。握りしむ。とり。ひしぐ。

やくーすう 約數【名】〔數〕『英 Measure又 Exact divisor』或整數又は或式を整除し得る數又は式。例へば、7は21の約數、$2x+5$は$2x^2+9x+20$の約數なる類。

やくーすぎ 屋久杉・夜久杉・野雞班【名】〔植〕大隅國屋久島に產する杉。同島には、杉の原生林ありて、年輪緻密にして、木理に雅致あるがために、特に島名を冠して呼ばれ、裝飾用材として廣く用ひらる。さつますぎ。

やくーすね 藥水【名】**やくえき**(藥液)に同じ。鎌倉三代記「さいはひ氣附の獨參湯(ドクジン)、そそぎかけたる藥水の一滴、五臟にしみ渡り」

やくーせい 藥性【名】藥物の性質。

やくーせい 藥生【名】古、內藥司に屬して、製藥の事を掌りし下官。

やくーせき 藥石【名】㊀『祖庭事苑に「攻ノ病曰ノ藥、劫ノ病曰ノ石、古以ニ砭石一爲ノ針」左傳の襄公二十三年の條の孔穎達の疏には「治病藥分用ノ石、本草所ノ云鐘乳・礬磁、

石之類多矣」とあり』薬と石針と、又それを用ひて療治すること。諸種の薬物と治療法と。 ㊁『黄檗清規に「薬石晩食也、比丘過ㇾ午不ㇾ食、故晩食名二薬石一、爲ㇾ療餓渇病一也」とあり』**ばんしゅく**(晩粥)を見よ。 ㊂『左傳の襄公二十三年の條に「季孫之愛ㇾ我疾疢也、孟孫之惡ㇾ我藥石也、美疢不ㇾ如二惡石一也」又、唐書に「卿進二藥石之言一、故以二藥石一報ㇾ之」とあり』その身を裨益する事物の譬。

やくせん 役錢 【名】 ㊀役(ヤク)㊃として差し出す金錢。 ㊁徳川時代に、薫者・車力・米春など、日雇を營業とする者に札を給して、毎月取り立てし雜税。

やくせん 役船 【名】 公用に供すべき船。

やくせん 藥煎 【名】 **しょはうせん**(處方箋)に同じ。

やくぜん 躍然 【貌】 いきいきと目の前に見ゆるやうなるさま。躍動するが如きさま。躍如。躍躍。

やくそう 役僧 【名】 寺院にて、それぞれの事務を取り扱ふ僧。

やくそう 役送・益送 【名】 神供(ジン)・供御(ゴ)、又は大饗などの時の膳部を、陪膳に取り次ぐこと、又その役の人。やくぐ。平寧若宮の拜殿にして、康定に酒を勸めらる。齋院の次官、陪膳す。五位一人、役送を勤む」 增鏡「陪膳、權大納言公相、やくそうは殿上人なり」

やくそく 約束 【名】 ㊀『笞子の樞言篇に「約束則解、結紐則絶」とあり』括り束ぬること。束縛。 ㊁『漢書の匈奴傳に「無二文書、以二言語一爲二約束一」とあり』或物事の將來に關して、取極(キリ)をなすこと。契約。約定。 ㊂とりきめ。さだめ。制定。 ㊃前以ての運命。やくそくごと。さだまりごと。因緣。宿緣。

やくそくいうびん 約束郵便 【名】 特殊取扱郵便の一。無封の書狀にて、官公署の事務に關するもの、同一の市區町村内に發著するもの、全部又は大部分を印刷したるもの、若しくは、毎月一回以上繼續して差し出し、且つ一年の差出數三萬通を下らざるか、一回毎に同文のものを百通以上差し出す時、又は定期刊行物・書籍・印刷物に限り、所轄遞信局の承認を受け、後納郵送料の擔保として、現金若しくは有價證券を提供し置き(差出人が官署なる場合は、この限に非ず)、郵送の都度一一郵便切手を貼用する手數を要せず、一定の期間滿了の後、通貨にて、その期間内に差し出したる郵便物の數に對する料金を納付すべきもの。

やくそくいうびんぶつ 約束郵便物 【名】 特殊取扱郵便物の一。約束郵便の取扱に依るもの。

やくそくごと 約束事 【句】 ㊀約束したる物事。 ㊁**やくそく**(約束)㊃に同じ。

やくそくてがた 約束手形 【名】 ㊀徳川時代に行はれし手形の一。二種ありて、一は、貨物を買ひたる時、その代金をその月三十日限に支拂ふべき旨を約し、その當日に拂ひ渡すべき手形を、兩替屋宛に認めて、貨物主に渡ししものと、他は、貨物を買ひ、その代金を、來る何月何日にこの手形と引き替へに渡すべき旨を認めて、貨物主に與へしものとにて、この二種の手形、甲より乙に渡りし時は、振出先、又は印元に至りて、期日に支拂ふや否やを照會する習慣なりき。 ㊁現行の手形の一。或人が、他の人に對して、一定の期日に、一定の金額を、債務者又はその指圖人又は手形所持人に、無條件にて支拂ふべき旨を約束して振り出す流通證券。約束手形なることを示すべき文字、一定の金額、受取人の氏名又は商號、單純なる支拂の約束、振出の年月日、一定の滿期日、振出地の記載と、振出人の署名又は記名・捺印とを要す。やくて。

やくそくび 約束日 【名】 約束せる日。一代男「約束日參りて、太夫樣に會ひて」

やくた 【名】 次條を見よ。

やくたも無し 【句】 「やくたいも無し」の略。 狂言(布施無)「あのやくたもない事、とっととござれ」

やくたい 益體 【名】 ㊀役に立つこと。常に次條の如く、否定に用ひて、しだらなしなどの意をなす。 運歩色葉集「益體、ヤクタイ」 ㊁「やくたい無し」の略。藤栗毛「お汁椀(ワン)を置かんすさかひ、あれ、こぼれたはいの。こりや、もう、とっとやくたいぢや」

やくたい無し 【句】 役に立たず。たわいなし。埒(ラチ)もなし。しまりなし。しだらなし。 新水代薫「寒き坊主頭隠すべき頭巾さへ、いつしか袂より落ちて、やくたいなし」 柳狩劇本地「打ち附くるやら、蹈み割るやら、やくたい、更に無かりけり」

やくたいの有る事か 【句】 『かは反語の助辭』前條に同じ。 曾我會稽山「荷を締めるやら、何やら、やくたいの有る事か」

やくたい 藥袋 【名】 藥を入るる袋。藥「囊。

やくたい 藥代 【名】 **くすりだい**(藥代)に同じ。藥料。 狂言(針立雷)「只今療治を致した藥代を下され」

やくたいし 藥袋紙 【名】 和紙の一種。楮(ノカウ)の樹皮より得たる液と、雁皮の液とを等量に用ひて漉き、板に張りて乾かし、黄蘗(キハダ)にて染めて製す。藥劑の包裝に用ひて、藥劑の、外氣のために變質するを防ぐに供したれど、價貴きがために、今日にては、殆ど需要なきに至れり。

やくたう 藥湯 【名】 ㊀**たうやく**(湯藥)に同じ。 ㊁**くすりゆ**(藥湯)に同じ。 所記、笭湯といふ藥湯を仕掛けて」

やくだか 役高 【名】 ㊀役の高下・繁簡等に從ひて支給する、一定の祿高。役扶持の額。 ㊁『**やく**(役)㊃を見よ』永高(ヤウカ)を用ひたる地方にて、その一貫文を高五石の割に、石高(コクカ)に換算し、課税等の場合に用ひしもの。

やくたく 役宅 【名】 役員の住居する家。

やくだく 約諾 【名】 **だくやく**(諾約)に同じ。 講曲(九世月)「この橋立てを作らんと約諾ありしその頃は」

やくだたり 厄崇 【名】 厄神の崇を受くること。厄年の厄に罹ること。やくまけ。 曾根崎心中「今年は、こな樣も、二十五歳の厄の年、わしも、十九……」とて、思ひ合うたる厄崇」

やくだつ 役立つ 【動四自】 役に立つ。用ひ得る價値あり。 狂言(かねのね)「これは割鐘(カワガネ)ぢや。役だつまい」「しむ。

やくだつ 役立つ 【動下二他】 役に立たしむ。

やくだな 夜具棚 【名】 **やぐだな**(夜具戸棚)に同じ。 和合人「夜具棚をあけて見ればー」

やくち 役知 【名】 徳川時代に、京都所司代・大阪城代などの、遠國の官の最も重き者に、幕府より支給したる役俸。**やくきん**(役金)參照。

やぐち 矢口・箭口 【名】 ㊀矢に射られたる疵口。 本朝三國誌「拔き捨つる矢口より流るる血は瀧なして」 ㊁狩獵などの目的にて、始めて矢を射ること。 東鑑「富士野御狩……於二其所一、被ㇾ祭二山神矢口等一」

やぐちの祭 【名】 昔、矢開(ヤアケ)の時、矢口餅を調へて、山神を祭り、射手などに饗應せしこと。

やぐち 矢口 【名】 〔地〕 武藏國荏原(ヱバラ)郡の村。多摩川に沿ひ、古、江戸・鎌倉間の街道の渡津なりきといふ。延文三年十月、新田義興主從の横死せし所。また、多摩郡の矢野口(ヤノクチ)にも、義興の變事を傳ふ。後者は、武藏國府中を經て、鎌倉に向ふ渡津に當りし所にして、今、何れとも定め難し。

やぐぢ 夜具地 【名】 夜具に用ふる布帛。

やくちなは 屋蛇 【名】 〔動〕 屋上に棲みて、鼠又は鳥の雛などを捕へ食ふ蛇。青大將の類なるが如し。「開」に同じ。

やぐちびらき 矢口開 【名】 **やびらき**(矢開)に同じ。

やぐちもち 矢口餅 【名】 矢口の祭に、山神に供し、又、射手などの食ひし、黑・赤・白三色の餅。低聲に矢聲を發して、食ふ習なりきといふ。

やくぢやう 約定 【名】 約束して取り極むること、又その取り極めたる事項。

やくぢやうこくきやう 約定國境 【名】 〔法〕 人爲の約束にて定めたる國境。(自然的國境に對して)

やくぢやう-しよ 約定書【名】約定の條項を記して、當事者間に取りかはす證書。

やくぢやう-ずみ 約定濟【名】賣買などの約定の、既に濟みたること、又その物。

やくぢやう-ぜいりつ 約定稅率【名】〔法〕**けふていぜいりつ**(協定稅率)に同じ。

やくぢやう-てがた 約定手形【名】〔法〕これを差し出せば、金錢又はその他の物を引き換へ渡すべき旨を記載せる流通證券。

やくぢやう-もどし 約定戻【名】〔商〕戻(モド)運賃の一。運賃の總額に對し、何割と、豫め率を約定し、それによりて、一箇年の終に割り戻すもの。(臨時戻に對して)

やくぢやう-りそく 約定利息【名】〔法〕當事者の約束にて、特に定めたる利息。(法定利息に對して)

やくぢやう-りりつ 約定利率【名】〔法〕當事者の約束にて、特に定めたる利率。(法定利率に對して)

やく-づか 厄塚【名】昔、京都の吉田神祇官にて、陰曆十二月節分の夜、式を行ひて、庭上に築き、正月十九日に至りて解き拂ひし塚。

やく-づき 厄月【名】陰陽家の說にて、何等かの厄難に逢ふべき故、忌み愼むべしとする月。小右記「十月御厄月、若可二令忌給一乎」

やく-づき 役附【名】役に附くこと、又、「附きたる役。

やく-づけ 役附【名】割り當てたる役を書き記すこと、又その書き記したるもの。若風傘「中川金之丞がやくにんづけ。

やく-でん 易田【名】**えきでん**(易田)に同し事、南北三(サ)ぶが早口、それぞれの役附、見る人に笑はせ、泣かせ」

やく-て 約手【名】〔商〕**やくそくてがた**(約束手形)■の略。〔俚諺〕

やく-てん 藥店【名】藥品を賣る商店。くすりや。藥舖。「じ。

やく-でん 易田【名】**えきでん**(易田)に同

やく-と 【副】甚だ。膝栗毛「やくと足が達者だのし」

やく-と 役と【副】■役目の如くに。もつぱら。やくやくと。枕「やくと集まりて」今昔「京に水銀(ガネ)あきなひする者ありけり。年來、役と商ひければ、大きに富みて」■わざと。ことさらに。〔東武の方言〕

やく-ど 約度【名】〔數〕**やくりやう**(約量)に同じ。「よ。

やく-とう 藥筒【名】**やくはう**(藥包)を見

やく-とう 役とう【副】**やくと**(役と)■に同じ。〔三河・奧州の方言〕

やく-どう 躍動【名】躍躍として勢あること。いきいきとして見ゆること。

やく-とく 役得・役德【名】一定の收入の外に、その役に從事せるがために得る、臨時の利得。役目のほまち。

やく-どく 藥毒【名】藥の中に含める毒分。根南志具佐「藥毒に中りて死んだらば」

やく-どく 譯讀【名】飜譯して讀むこと、又その讀みかた。

やく-どし 厄年【名】陰陽家の說にて、何等かの厄難に逢ふべき故、忌み愼むべしとする年齡。時代によりて、年齡は一定せざれども、現時に於ては、男子は二十五歲・四十二歲・六十一歲、女子は十九歲・三十三歲・四十七歲にして、中にも、四十二歲と三十三歲とを大厄と呼びて、最も忌み愼む。十九は、重九と音相通じ、二十五厄、五五二十五といふ九九の語あるより後後二重後の意に取りて、死後の事とし、卅三は三三卽ち散散の意、四十二は、四二卽死(シ)の意に通ずる故なりともいふ。又、厄年の前年を前厄(マヤク)、次の年を後厄(アトヤク)と呼びて、同じく忌み愼む。やく。やくまはり。雲萬「左の大殿のやく年におはする」曾根崎心中「今年は、こな樣も、二十五の厄の年、わしも十九の厄年とて」

やく-とだな 夜具戸棚【名】夜具を藏め納るる戸棚。やぐだな。和合人「已(ヤ)あ、この夜具戸棚へ這入るべい」

やぐとぢ-ばり 夜具綴針【名】夜具を縫ふに用ふる針。長さ二寸二分、太さもこれに釣り合ひ、縫針の中にて最も大なり。よぎとぢばり。

やく-なう 藥囊【名】■藥劑を入れおくための囊(ノウ)。藥袋。■「英Bag-cartridge」**やくはう**(藥包)を見よ。

やく-なし 役無【名】役目の無きこと。若風傘「源介を召し出され、三百石御加增、役なしに仰せつけられ」

やく-なし 益無し【形一】かひなし。無益(ムヤク)なり。むだなり。やうなし。源氏「やくなき片思ひなりけり」大鏡「うけたまはらせたまへる殿ばらを、御けしき變りて、やくなしとおぼしたるに」

やくなし-ごと 益無事【名】やくなき事。無用なる事。いだづらごと。紫式部日記「いと斯うやくなし事多からずとも書かせたまへ」「厄。厄。

やく-なん 厄難【名】わざはひ。災難。災

やく-にたたず 役不立【名】役に立たぬこと、又その人。機轉の利かぬこと、又その人。能(ノウ)なし。五人女「その男は、役に立たずにて」

やく-にふようきん 役入用金【名】德川幕府にて、勘定奉行に、役俸の外、役目の入用に充つるために給せし金。

やく-にん 役人【名】■役目を受け持てる人。役に當る人。役者。役員。太平記「布衣の役人、悉く次第を守り、列を引き」狂言、祇園「さりながら、太鼓持つ役人がござらぬ。誰に致さう」■公の職務を帶びたる人。官公吏。■**やくしや**(役者)■に同じ。松風村雨東帶鑑「猿の役人、面(ツ)おっ取って」織留「帳附、隙も無く、臺所の役人、それぞれに承り」

やく-にん-こんじやう 役人根性【名】役人■に共有なる根性、卽ち上官に對しては諂ひ、普通人に對しては、權威を弄すること。「づる人足。

やく-にんそく 役人足【名】役(ヤク)■に出

やく-にんそく-ちんぎんつき-かかへやしき 役人足賃銀附抱屋敷【名】**ちんぎんつきかかへやしき**(賃銀附抱屋敷)に同じ。

やく-にん-づけ 役人附【名】**やくづけ**(役附)に同じ。若風傘「初狂言のかはり、三番つづきの口上に、役人附け、ためらはず、さても申したり」

やく-にん-ふう 役人風【名】役人■らしき樣子。

やく-の-まだらがひ 屋久斑貝・夜久斑貝【名】〔動〕**にしきがひ**(錦貝)■に同じ。和名「錦貝、夜久乃斑貝」

やく-ば 役場【名】■**やくしよ**(役所)に同じ。■町長・村長又は戶籍吏・公證人・執達吏などの公吏の執務する所。

やく-はう 藥方【名】藥の處方。調藥の方法。藥法。

やく-はう 藥包【名】『英Cartridge』火藥を使用に供し得るやう適宜に包めるもの。用途に隨ひて、形、種種あり。工業用ダイナマイトは、圓壔形に壓搾して、防水紙に包み、火器の發射火藥は、金屬製又は紙製の藥莢に入れ、又は絹布の類にて作れる囊に入れて用ひ、又は絹布の前者を藥筒、又は彈藥筒、後者を藥囊と呼ぶ。

やくはえ 【名】次條を見よ。

やくはえの如く【句】『**やくはえ**は、彌木榮(ヤイサカ)の義にて、木の、いやが上に生え榮ゆるをいふとも、彌孫生(ヤイマゴ)の義にて、木の切り株より若芽のいやが上に生ひ出づるをいふとも、又、彌桑枝の義にて、茂りたる桑の枝なりともいふ』ますますさかんに。やがはえ如(ナ)す。〔古語〕祝詞(春日祭)「嚴(カイ)しやくはえの如く仕へ奉り」同(平野祭)「嚴しやくはえの如く立榮えしめ、仕へ奉らしめたまへ」

やく-はおり 役羽織【名】役目によりて、それぞれ規定せられたる羽織。役服たる羽織。

やく-はふ 藥法【名】『史記の倉公傳に「敎以下案法逆順、論二藥法一、定二五味一、及和齊湯法上」とあり』**やくはう**(藥方)に同じ。

やく-ばん 藥盤【名】火藥の燃燒速度を利用する時限信管にありて、火道藥を壓塡せる、溝ある盤。

やく-はらひ 厄拂・厄禳【名】『「厄を拂ふ」を見よ』■厄難を、神佛に祈りなどして祓ひ落すこと、又その方法。やくおとし。一代男「厄拂に、いざ思ひ立ち」■

昔、大晦日又は節分の夜などに、門に立ちて、祝の文句を節面白く言ひつづけ、その家の厄を祓ふと稱して、金品を乞ひあるくこと、又その事を爲す物貰。若風俗 やあら目出たや、鶴は千年、龜は萬年、東方朔は九千歳と年越の夜の厄拂が高聲」

やくばり 矢配・矢賦【名】『矢の根を配置する部分なるよりいふ』箙(ヤナビ)の下部、筈の中。くしがた。

やくび 厄日【名】㊀陰陽家の説にて、何等かの厄難に逢ふべき故、忌み慎むべしとする日。㊁農家などにて、天候に因る厄難に遭ふこと多しとする日。即ち八朔・二百十日など。

やくび 役日【名】**ものび**(物日)に同じ。若風俗「紋日を拵へ、八日・十二日は、三津寺の藥師、十五日は八幡、十八日は清水觀音、役日も定め、毎月むつかしくなりぬべし」

やくひつ 譯筆【名】飜譯の文章の言ひまはし。「くこと。

やくひつ 約筆【名】約(ツヅ)めて簡單に書

やくひん 藥品【名】くすり。藥物。藥劑。

やくびやう 燒餅【名】**やきもち**(燒餅)に同じ。盛衰記「煮餅(ニビ)を參らうか、やく餅を參らうか」

やくびやう 疫病【名】**えやみ**(疫)に同じ。盛衰記「飢饉・疫病・燒亡(マモウ)」「に同じ。

疫病の神【句】**やくびやうがみ**(疫病神)

疫病の神で敵【句】次條の略。〔諺語〕蘆屋道滿大内鑑「疫病の神で敵とやら」

疫病の神で、敵を取る【句】『憎しと思へる人の、疫病に罹りて、難澁する義』自ら手を下さざれども、意外の好機會來りて、憎しと思へる人の、災に罹る形容。〔諺語〕

疫病の神にても、敵は取る【句】前條に同じ。〔諺語〕尤の草紙「疫病の神にても、敵は取るといへり」

やくびやうーがみ 疫病神【名】㊀疫病を流行せしむといふ神。えやみのかみ。やくじん。疫鬼。㊁多くの人に避け嫌はる人の譬。

疫病神で敵【句】次條の略。〔諺語〕

疫病神で、敵を取る【句】「疫病の神で敵を取る」に同じ。〔諺語〕

やくびやうーほんだふう(本多風)を見よ。疫病本多【名】疫病本多・癩眉・宿無姿【句】安永の頃の遊惰なる風俗を並べ擧げて誘りの語。〔諺語〕半日閑話「髪は、本多として、……。この頃、諺に曰く、疫病本多・癩眉・宿なし姿といふ」

やくびやうーよけ 疫病除【名】疫病神の祟を受けぬやうにすること。疫病に罹らぬやうにすること。

やくーふ 役夫【名】役(ツヅ)㊀に徴發せらるる人夫。ぶをとこ。**ぶやく**(夫役)參照。

やくびやうーよけ 疫病除【名】疫病神の祟を受けぬやうにすること。疫病に罹らぬやうにすること。

やくーふ 役夫【名】役(ツヅ)㊀に徴發せらるる人夫。ぶをとこ。**ぶやく**(夫役)參照。

やくーふく 役服【名】それぞれの役目によりて著るべき服。役目の制服。役羽織の類。

やくふさくれうまい 役夫作料米【名】

やくふたくまい(役夫工米)に同じ。

やくーふそく 役不足【名】俳優などが、割り當てられた役に對して、不平を言ひたつること。八笑人「國次第にして、役不足を言ひつこなしだよ」「に同じ。

やくーふだ 役札・役牌【名】**きりふだ**(切札)

やくふーたくーとうらう 役夫工功粮【名】次條に同じ。

やくふーたくーまい 役夫工米【名】古、伊勢大神宮造營の時、役夫・工匠の食料として、諸國より徴發せし錢。役夫工功粮(クコウ)。

やくーぶち 役扶持【名】江戸幕府にて、毎月給せし役俸。**やくきん**(役金)參照。

やくーぶつ 藥物【名】藥となる物。くすり。藥品。藥劑。

やくぶつーがく 藥物學【名】㊀『獨 Pharmakologie』種種の物質につきて、生理的反應を攻究し、且つ治病の目的に供する科學。㊁『獨 Arzneimittelohre』前項の藥物學の一部。一定の物質につきて、その固有の生理的反應を應用して、治病の道を講ずるもの。(毒物學に對して)

やくぶつーせうどく 藥物消毒【名】消毒

方法の一。藥物を用ふるもの。**せうどくやく**(消毒藥)參照。

やくーぶね 役船【名】公用に從事する船。御用船。「の文章。

やくーぶん 譯文【名】譯したる文章。飜譯

やくーぶん 約文【名】長き文章を約(ツヅ)めて、簡單にすること、又その文章。

やくーぶん 約分【名】〔數〕『英 Reduction of fraction』分數の分母と分子とを、公約數にて除して、簡單にすること。その結果は、既約分數といふ。

やくぶん-せんてい 譯文筌蹄【名】〔書〕同訓異義の漢字を擧げて、一一その意義・差別・用法等を說き、例をも示したるもの。六卷。荻生徂徠の著。

やくーほ 藥鋪・藥舖【名】くすりや。藥店。

やくーほ 藥圃【名】**やくえん**(藥園)に同じ。

やくーほ 譯補【名】譯したる上、原文に無き意味を補ふこと、又その物。

やくーほう 役俸【名】役目に對して、それを勤むる人に給する俸祿。

やくーほん 譯本【名】**やくしよ**(譯書)に同じ。(原本に對して)

やくーまい 役米【名】江戸幕府にて、中間(チウカン)・小者(コモノ)に給せし役俸。

やくーまう 犛毛(英 Yak hair)【名】**やく**(犛牛)を見よ。

やくーまけ 厄負【名】厄の祟を受くること。厄年の災に罹ること。やくだたり。

やくーまはり 厄廻【名】**やくざし**(厄年)に同じ。

やくーまはり 役廻【名】割り當てられて勤むる役。役目のまはりあはせ。八笑人「役廻は、助高屋だぜ」

やくーまへ 役前【名】その人の勤むる役柄(ヤクガラ)。「詣」に同じ。

やくーみ 藥味【名】㊀㊁『漢書の藝文志に「假二藥味之滋一、因二氣感之宜一」とあり』藥の種類。藥種。藥品。狂言(膏藥煉)「身どもの膏藥は、天下に隱がおりない。……。我御料(ワヨ)が藥味は、何何がいるぞ」㊂

食物に添へて用ふる香料など。即ち、七色唐辛・胡椒・生薑(ショガ)、又、蕎麥(ソバ)を食ふ時に用ふる、刻みたる葱など。

やくみーざら 藥味皿【名】藥味をまぜ合はせ又は盛るに用ふる皿。

やくみーだいくわん 藥彌大觀【名】〔佛〕藥師如來と阿彌陀如來と大日如來と觀音菩薩と。鶏鷲今昔「和光は、藥彌大觀の內證より出で、所願を成就せしむる事は、分って四種あり」

やくみーだんす 藥味簞笥【名】**ひやくみだんす**(百味簞笥)に同じ。

やくーむき 役向【名】役目の方面。やくがら。俗曲「尾上岩藤」「お役向はお中老」

やくーめ 役目【名】役としての務。やくぎ。職分。

やくーめい 役名【名】役の名目。職名。

やくーめい 藥名【名】藥の名稱。

やくーも 八雲【名】㊀次條を見よ。㊁『古今和歌集の序に「人の世となりて、素盞嗚(スサノ)尊よりぞ、三十文字(モジ)あまり一文字(モジ)は詠みける」とて、尊の歌に「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣造るその八重垣を」を指せるよりいふ』三十一字の歌。やまとうた。和歌。玄玉集「やまと歌は、八雲の風、久しく傳はりて」

八雲立つ【句】『彌(イヤ)雲立つの略』雲重なりて、さかんに立ちおこる。記「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣造るその八重垣を」

八雲の色【句】和歌の趣味。歌道。風雅「出雲八雲の色に志を染め、和歌の浦波に名をかくる人人」

八雲の風【句】和歌の風流。歌道。玄玉集「やまと歌は、八雲の風、久しく傳はりて」

八雲の道【句】和歌の道。歌道。敷島の道。續古今「今も、八雲の道に遊び」

やくも 八雲【名】〔書〕**やくもみせう**(八雲御抄)の略。增鏡「朝夕の御いとなみは、和歌の道にて、ぞありける。末の世に八雲などいふもの作らせたまへるも、この御門(ミカド)の仕事なり」

やくも 八雲【名】〔人〕**こいづみやくも**(小泉八雲)を見よ。

やくもごと 八雲琴【名】燒桐を、長さ三尺、幅四寸の割竹の形に削り、二條の絃を張りたる、一種の琴。文政年中、伊豫國の人、中山通卿の創製に係り、琴臺に載せて彈奏し、歌曲は高尙・優雅を旨とせり。後、加藤蘆舟、少しくその製を變じて、二絃琴と稱し、歌曲も俗曲に採りて、新作せり。いづもごと。

やくもさう 八雲草【名】〔植〕**めはじき**(光蔓草)〔蔔〕に同じ。

やくもさす 八雲刺す【枕】次條に同じ。

やくもさう 八雲刺すいづもの子らが黑髮は吉野の川の沖になづさふ」

やくもたつ 八雲立つ【枕】『「八雲(モヤク)立つ」の條に引ける素盞嗚(スサノヲ)尊の歌によりて、**いづも**(出雲)にかけていふ。やくもさす。やつめさす。紀「やくも立つ出雲たけるが佩ける太刀つづらさは卷きさみ無しにあはれ」

八雲立つ國【句】〔地〕**いづも**(出雲)〔一〕の異稱。若鳳奪「八雲立つ國の守に仕へし增田氏」

やくもちぢみ 八雲縮【名】出雲國松江市より織り出す木綿縮。

やくもみせう 八雲御抄【名】〔書〕正義・作法・枝葉・言語・名所・用意等に分類して、歌の品目及び歌病・歌式などをも詳論せるもの。六卷。順德天皇の御撰。

やくやう 藥養【名】『顏延之の自陳表に「乞解二所職一隨就二藥養一」とあり』藥にて身體を養ふこと。服藥して養生すること。

やくやく 役役【名】それぞれの役。各自の役目。狂言(祇園)「それがし、當年は、祇園會の當番に當ってござる。……。もはや役役がきはまった」

やくやく 躍躍【貌】いきいきたる狀。躍動するさま。活動するさま。躍如。

やくやくと 役役と【副】**やくと**(役と)に同じ。宇治「使ひ習はしたる犬……に、生きたる猿丸を捕へて、明暮(クレ)、やくやくと食ひ殺させて習はす」堀文「夏草は茂りにけりなやくやくと春見し野邊の道まどふまで」

やくやし 役屋敷【名】昔、役人〔一〕の、その役を取り扱ひし屋敷。

やくよう 藥用【名】〔一〕『史記の倉公傳に「意方能知二病死生一、論二藥用所レ宜」とあり』藥として用ふること。〔二〕藥を用ふること。藥にて、病を直すこと。

やくようしよくぶつ 藥用植物【名】『英 Medicinal (又 Officinal) plants』醫藥上の應用に供する植物。

やくようせきけん 藥用石鹼【名】『英 Medicinal soap』醫藥上に應用する石鹼。

やくようにんじん 藥用人參【名】〔植〕**にんじん**(人參)〔一〕に同じ。

やくようぶだうしゆ 藥用葡萄酒【名】醫藥上に應用する葡萄酒。

やくよけ 厄除【名】厄〔一〕を受けぬやうにすること、又その方法。やくはらひ。厄除の大師【句】**めうほふじ**(妙法寺)を見よ。

やぐら 谷倉【名】〔一〕物を貯藏する目的にて穿ちたる土窟。〔相摸國鎌倉及び上總國の方言〕〔二〕はかあな。つかあな。墓穴(ボケ)。

やぐら 矢倉【名】〔一〕武器を藏めおくための倉。つはものぐら。武庫。兵庫。紀「兵庫、ヤグラ」〔二〕**やぐら**(櫓)〔一〕に同じ。〔三〕**やぐら**(櫓)〔三〕に同じ。〔四〕**ふなやぐら**(船矢倉)の略。〔五〕**やぐらおとし**(矢倉落)の略。〔六〕相撲(スマヒ)の四十八手の一。四手(ヨツ)に組み、上手にて相手の褌を取り、上手の方の足を相手の內股へ、蹴り込む心にて、體を下手の方へ廻しながら投げ倒すもの。この手は、殘れば持出(モチダシ)にもなる。これを矢倉出(ヤグラ)といふ。又、別に突(キツ)矢倉・下手(シタテ)矢倉といふもあり。うはてやぐら。やぐらなげ。〔櫓〕

やぐら 櫓・矢庫【名】〔一〕前條〔一〕の轉義』城門・城壁などの上に、展望・矢石發射などの場所として、高く構へたる建物。武庫を兼ねたるも尠からず。江戸時代の城郭には、その制、殊に發達して、塗籠造とするに至り、その最も壯大なるを、天主閣とす。城樓。〔矢倉〕和名抄「櫓、夜久良、城上守禦樓也」太平記「櫓の狹間(マ)の板を切り落し」〔二〕展望のために高く構へたる建設物。「火見の櫓」〔三〕昔の劇場にて、表側の正面、木戸口の家根に、官許を得て開設したるしとし、高く構へたる床。櫓幕を張りめぐらし、又、五本の槍を並べ立て、左右に、梵天とて、采配を立て、幕の中にて、櫓太鼓を打ち鳴らしたり。もと城郭のに倣ひ、その上にて采配を以って、人を召し集むるに擬せしなりといふ。〔矢倉〕〔四〕相撲(スマヒ)に附屬する設備。丸太にて高く組み上げ、上りて櫓太鼓を打ち鳴らす場所。關取千兩曦「饗く櫓の、とうからと打ち仕舞うたる太鼓より」〔五〕**ごたつやぐら**(火燵櫓)の略。〔六〕**やぐら**(矢倉)〔六〕に同じ。

櫓三枚【句】〔一〕櫓下(ヤグラ)三枚」に同じ。

櫓を上ぐ【句】〔一〕櫓を設く。鴉鷺合戰「鹿垣(シシガキ)結ひて、矢庫あげ、火燒(ヒヤキ)に籬たかせて」〔二〕芝居を建てて、興行を開始す。「一層長きもの。

やぐらおとし 矢倉落【名】長柄の槍の、男の髮の結ひ方の一。幕の內以上の相撲取の結ぶ習にて、鬢髢(ビンヅル)を十分に出すもの。

(し落櫓)

やぐらおとし 櫓落【名】

やぐらかいだて 櫓搔楯【名】櫓〔一〕の上に垣楯を設けたるもの。太平記「重ね重ねに構へたる櫓搔楯を引き破らんと」

やぐらけむだし 櫓烟出【名】茅葺の家にて、屋根の棟の上に作りたる烟出。

やぐらさん 櫓棧【名】渡櫓(ヤグラ)に用ふる棧瓦。

やぐらした 櫓下【名】〔一〕櫓の下に當る處。〔二〕次條及びその次の略。

櫓下三枚【句】江戸の劇場にて、櫓下に、板を三枚繼ぎあはせ、中央に座元の名、左右の二枚に女形の大立者の名を記したる看板。その二枚目の左右に、なほ一枚づつ(立女形(ヤタテヤマ)の名を記したるを掲げ、更に、その左右に、その他の俳優及び囃子方・作者・淨瑠璃語の名を記したるを列ねたり。

櫓下の看板【句】江戸の劇場にて、中通(ナカトホリ)以上のすべての役者を、繪組に書きて、櫓下に置きたるもの。京阪の芝居にては、三枚づつきとして、櫓の左右に置きたり。段書(ダンガキ)看板。

櫓下四枚【句】昔の京阪の劇場にて、櫓下に、座元の名を中央とし、その右方に二枚目・三枚目の女形、左方に四枚目・立女形(ヤタテヤマ)の名を記せる看板を並べたるもの。その左右に、他の座員の看板を列ね掲げしなり。

やぐらしばゐ 櫓芝居【名】櫓を構へたる劇場にて興行する芝居。

やぐらせん 櫓錢【名】昔の劇場にて、興行權を有する者の、その興行權を貸與して、太夫元より受け取る料金。

やぐらだい 櫓臺【名】渡櫓(ヤグラ)の土臺たる石垣。

やぐらだいこ 櫓太鼓【名】相撲場(スマヒ)又は昔の劇場にて、開場及び閉場の知らせとして、櫓の上にて打ち鳴らす太鼓。

やぐらだし 矢倉出【名】**やぐら**(矢倉)〔六〕を見よ。

やぐらたつ 矢倉立【名】和船の一部。矢倉の控柱の垣立(カキタツ)の內部にあるもの。

やぐらだな 櫓棚【名】床間(トコマ)・書院などの脇に設くる棚の一種。「に同じ。

やぐらなげ 矢倉投【名】**やぐら**(矢倉)〔六〕

やぐらなほし 櫓直【名】昔、火燵櫓(コタツヤグラ)の古び損はれたるを修繕し、又はそれを新製の品と取り換ふるを業とせし人。

やぐらぬき 櫓貫【名】〔建〕楔(ヒツサ)の如くにして、雙方より打ち込み、二合(フタツガセ)にしたる貫。

やぐらのつかさ 八座司【名】『**はちざ**(八座)〔一〕の直譯』**さんぎ**(參議)〔一〕に同じ。後拾遺「八くらのつかさに備はりて、五日の暇も妨なし」

やぐらばな 櫓花【名】〔植〕**ざいふりぼく**(采振木)に同じ。「る平瓦。

やぐらひら 櫓平【名】渡櫓(ヤグラ)に用ふ

やぐら-ぶね 矢倉船【名】船 矢倉の設ある船。樓船。

やぐら-まく 櫓幕・矢倉幕【名】一櫓に張り渡す幕。二昔、劇場の櫓に張り渡ししし幕。座元の定紋を染め抜くを常とせり。

やく-らん 薬欄【名】薬園のかこひの柵、又、樂園。芭蕉「薬欄に何れの花を草枕」

やぐら-もの 櫓物【名】主として、渡櫓(ワタリグラ)などに用ふる、最も大形なる瓦。櫓物に對して、長屋物と廣間(ヒロマ)物とあり。前者は小形なり。後者は、大阪瓦ともいひ、大形にして、宮殿などに用ふ。

やぐら-もん 櫓門・矢倉門【名】わたりやぐらもん(渡櫓門)に同じ。

やぐら-やり 櫓槍・矢倉槍【名】昔、劇場にて、櫓に並べおきし、五本の槍。

やく-りき 藥力【名】藥の効力。藥のきき め。大磯虎稚物語「小粒の丸藥、二つに割って用ひなば、藥力、五體に渡るべからず」

やくり-さん 八栗山【名】〔地〕讃岐國木田(キタ)郡にある山。高さ一五三七尺頂上より八國を望み得るによりて、八國山と稱せしが、後、訛りて、八栗山となれるなりといふ。山頂には、劍の如き集塊岩の五あるによりて、五劍山の稱ありしが、永祿十一年の霖雨と寶永三年の大地震とに、その二峯を失へり。

やくり-じ 八栗寺【名】讃岐國木田(キタ)郡牟禮(ムレ)村大字牟禮にある眞言宗大覺寺派の寺。五劍山・千手院と號す。本尊は正觀音。四國八十八箇所の第八十五番の札所。延曆年間、僧空海の開基といふ。八國(ヤクク)寺。

やく-りやう 約量【名】〔數〕甲の量が乙の量を整數倍だけ含む時、その乙の量を甲の量に對していふ稱。約度。

やく-ぐるま 矢車【名】一矢を插しおく臺。二矢の形に造りたる物數本を、車の輻(ヤ)の如く植ゑ並べたるもの。鯉幟の竿などに附く。三紋所の一。前項の物の形を描きたるもの。やはずぐるま。百合若野守鏡「矢車の家の紋」四〔植〕やまぐるま(山車)に同じ。

やぐるま-ぎく 矢車菊【名】〔植〕次條三に同じ。

やぐるま-さう 矢車草【名】〔植〕一虎耳草(シュキ)科に屬する多年生の草。我國、北海道及び本州中部以北の山地に自生し、又、觀賞用として栽培す。高さ三四尺に達し、葉は根莖より生ずるもの、長き葉柄ありて、掌狀に五裂し、莖より生ずるものは、三尖頭を有する三箇乃至五箇の小葉より成る掌狀複葉にして、長き葉柄ありて、互生す。六七月の頃、筒狀にして上部五裂せる帶黃白色の小花、圓錐花序に排列して開く。はうちは。はうちはさう。〔鬼燈檠〕二菊科に屬する一年生又は二年生の草。培養して、觀賞用に供す。高さ二三尺に達し、枝を分ち、葉は互生し、葉柄を缺き、細長くして尖り、莖の下部に著生するものは、鋸齒を有し、又は羽狀に分裂し、上部に附著するものは、線形にして全緣、花は夏季、枝頭に、頭狀花序をなして開き、すべて、筒狀花冠を有し、その周圍にあるものは、大形にして、青紫色又は紅色又は白色を呈す。獨逸國の國花として名高し。やぐるまぎく。

(二)うさまるぐや

やぐるまし だ 矢車羊齒【名】〔植〕みやまぐまわらび(深山熊蕨)に同じ。

やく-れい 藥禮【名】醫師に、投藥の禮として贈る金。醫師に拂ふ療治代。

やく-れう 役料【名】一役目に對する報酬。二江戸幕府にて、春・夏・冬の三季に分ちて、金及び米を併せ給せし役俸。やくきん(役金)參照。

やく-れう 藥料【名】一やくだい(藥代)に同じ。二やくざい(藥材)に同じ。

やく-ろ 藥爐【名】藥を煮る爐(ロ)。

やく-ろう 藥籠【名】一古、藥品を貯ふるに用ひし器。大抵徑三寸五分の圓き筥を三重又は四重とし、謂はゆる藥籠蓋の造にして、上下くひ合ひて重なるやうにし、堆朱(ツイシュ)・堆黑・螺鈿等の裝飾を施したり又、それと同樣の物にて、方形なるは印籠(インロウ)といひ、印判・印肉を納むるに用ひ、後世、藥籠・印籠共に、これを小く作りて、重ねたる各筥の兩側に、上下相通ずる細管を作り附け、緒を通して、腰に帶び、その中には、大抵藥品を入れ、印判・印肉を入るること稀なるに拘らず、印籠と呼びたり。二やろう(藥籠)に同じ。

藥籠中の物【句】『唐書の狄仁傑傳に「元行沖謂二狄仁傑一曰、凡爲レ家者必有二儲薯・脯醢以適レ口、參朮以攻レ疾。行沖請三藥物之末一、仁傑笑曰、吾藥籠中物、何可二一日無一也」とあるに本づく』その人に附屬して、時に應じて役に立つ人物の譬。〔諺語〕

やくろう-ばこ 藥籠筥【名】箪笥の如き製作にて、四五段の抽出を有し、内に藥袋紙に包みたる藥劑を幾箇も容れ、又金屬製の匙をも入れたるもの。醫師病家に携帶しゆき、出先にて、調劑する用に供す。

やくろう-ぶた 藥籠蓋【名】いんろうぶた(印籠蓋)に同じ。

やくろう-もち 藥籠持【名】藥籠筥を携帶して供(モ)する醫者の下僕。

やく-ろん 約論【名】約めて論ずること、又その論。

やく-わ【感】蹴鞠(ケマリ)一にて、鞠を受け又は乞ふ時の掛聲。著聞「鞠を受くるには、やくわといひ、ありといひ、おらといふ」

やく-わ 野花【名】野に咲く花。

やく-わ 野火【名】野に燃ゆる火。のび。

やく-わ 夜火【名】夜燃ゆる火。

やく-わい 夜會【名】一夜、會合すること、又その會合。二西洋風の夜の宴會。

やぐわいむすび(夜會結)の略。

やぐわい 野外【名】のはら。郊外。

やぐわい-えんしふ 野外演習【名】演習三の、野外にて行ふもの。

やぐわい-けうれん 野外教練【名】一野外に出でて、教練を行ふこと、又その教練。二(兵)秋季演習の一。歩兵・騎兵の聯隊及び旅團、又、野砲兵の野外に出でて行ふもの。機動演習に先ちて、各團隊各自に單獨に行ふを例とし、操典に示せる原則を、初めての土地に應用するを目的とす。

やぐわい-げき 野外劇【名】屋外にて、自然を背景とし演ずる劇。ぺえじえんと。

やくわい-ふく 夜會服【名】夜會三の時著用する、女の洋服。

やくわい-むすび 夜會結【名】女の髮の結ひ方の一。髷(マゲ)よりねぢり上げて、左右に輪を作り、銀杏返(イチヨウガヘシ)をつぶしたるが如き狀にする束髮。やくわい。

(結會夜)

やく-わう 藥王【名】一『捺女耆域因緣經に「本草經說、有二藥王樹一、從レ外照レ內、見二人腹藏一、此兒樵中得レ無レ有二藥王一耶」とあり』藥の中の最上なるもの。二〔佛〕やくわうぼさつ(藥王菩薩)に同じ。

やく-わう 夜光【名】一夜光ること、又その光。二『述異記に「南海有レ珠、即鯨目、夜可二以鑒一、謂二之夜光一」とあり』次條の略。

夜光の玉【句】『戰國策の楚國の條に「楚王遣二使車百乘一、獻二雞駭之犀、夜光之璧於秦王一」とあり』古、支那にありきといふ、暗夜にも光を發する、貴き玉。

夜光の杯【句】『東方朔の十洲記に「周穆王時、西域獻二夜光常滿杯一、受二三升一、是白玉之精、光明夜照、暝夕出二杯於中庭一、以向レ天、比レ旦而水汁滿中、汁甘而香美」とあり』夜光を放つ玉杯。

やくわう-がひ 夜光貝【名】〔動〕腹足類に屬する軟體動物。南洋地方に多く、我國にも、南方の海に產し、殼は螺螺(エサザ)に似、厚く大きく、高さは幅とほぼ等しく、大なるは五六寸に達し、外面は、綠色にして、白色及び褐色の部あり。螺層は六乃至七、まろみを帶び、下部に二、上部に一の結節狀の隆起線あり。殼口大にして、內面は眞珠樣光澤を帶び、基部凸出す。殼美麗なるを以って、螺鈿・杯・釦などに作り、

膳は玩具に製しなどす。やくがひ。

やくわう-じゆ 薬王樹【名】〔植〕印度の大靈山に生じ、葉は鼓に似て、その音を聞かば、不老不死となるといふ樹。やくじゆわう。

やくわう-せき 夜光石【名】〔鑛〕**こんがうせき**(金剛石)に同じ。

やくわう-ちゆう 夜光蟲【名】〔動〕鞭毛蟲類に屬する原生動物。球狀にして、大さは粟粒よりも小く、全體膠質にして透明、一本の長き觸手を以て、海面に浮游し、無數相集まり、水波の動搖に從ひて、夜間、燐光を發す。熱帶地方の海には、殊に充滿し、その光强くして、暗夜にも讀書をなし得る程なりといふ。筑紫(シツク)の不知火(シヌヒ)も、この類ならんといふ。

やくわう-の-かひ 夜光貝【名】〔動〕**やくわうがひ**(夜光貝)に同じ。

やくわう-ぼさつ 薬王菩薩【名】〔佛〕『法華經及び觀藥王藥上二菩薩經に出づ』二十五菩薩の一、又、藥師如來の眷屬たる八大菩薩の一。藥上菩薩の兄。天竺の長者にて、星宿光と稱し、佛涅槃(ネハン)の後、像法時に、大乘を聞きて、心に歡喜を生じ、訶黎勒(カリロク)及び諸の雜藥を僧日藏及び諸衆に供養し、未來世に成佛して、淨眼(ジヤウゲン)如來と號すといふ。平家、藥王菩薩・勇施菩薩、二人の從僧に變じ」

やくわうぼさつ-ぼん 藥王菩薩品【名】〔書〕次條の略。

やくわうぼさつ-ぼんじ-ぼん 藥王菩薩本事品【名】〔書〕法華經二十八品中の第二十二品。藥王菩薩の、往昔、法華を供養するために、身を燒き、臂を燃しし本事因緣を說けるもの。

やくわう-ぼん 藥王品【名】〔書〕前條の略。著聞「法華經を誦(ジユ)ず。藥王品に至りて、……、兩三遍誦じて」

やくわう-ゐん 藥王院【名】武藏國南多摩郡淺川村にある、新義眞言宗智山派の寺。本尊は藥師如來。有喜寺と號し、高尾山上にあり。天平十六年行基の開基、永和年中俊源中興す。明治二十八年、智山派の別格大本山となる。

やく-わん 藥鑵・藥罐【名】一銅・眞鍮などにて、鐵瓶の如き形に造りたるもの。もと藥を煮るに用ひたれども、今は、主に、湯を短時間に沸すに用ふ。和合人「姉さんその藥鑵をちよと」二**やくわんあたま**(藥鑵頭)の略。三湯沸に用ふる藥鑵の、火熱の傳導力早きを、尻の早きに譬へていふ。『**いうちよ**(遊女)を云ふ。〔松前の方言〕藥鑵で茹でた蛸【句】『手も足も出でずとの義』幅の利かぬ譬。〔諺語〕

やく-わん 扼腕・掩腕【名】憤慨して、己が腕をきびしく押ふること。「切齒・扼腕」の如く、滑かに光れる頭の義』殆ど全部禿げたる頭。きんかんあたま。

やくわん-あたま 藥鑵頭【名】『藥鑵の底』

やくわん-がくもん 藥鑵學問【名】『藥鑵の、火熱の傳道早き代りに、熱の冷むることも早きに譬へていふ』學問するに、覺ゆることも早き代りに、忘るることも早きこと。

やくわん-ごゑ 藥鑵聲【名】高調子にて騷しき聲。傾城酒呑童子「遣手の鍋が藥鑵聲、煮えかへったる顏つきして」

やく-わり 役割【名】役を、人人に割りあつること、又その各人の引き受けたる役。もんぱんづけ。八笑人「曾我の役割を、一兩人、御覽に入れませう」和合人「さあ、さう役割がきまれば、誰ぞ一足先へ、諏訪町河岸のいせ傳へ行つて」

やく-ゐん 役員【名】一**やくにん**(役人)二に同じ。二會社・結社などにて、それぞれの事務を取り扱ふ人。

やく-ゐん 施藥院【名】一施の字は、讀まぬ習なり』王朝時代に、諸國の藥種を納めて、窮乏の病人を養治せし所。初、天平二年、光明皇后、これを大和國平城京に設け、皇后職並びに大臣家より資用を給せり。その後中絕せしを、天長二年、施藥院使・判官・主典・醫師各一人を定置せられ、尋いで、又、廢頹し、別に興福寺附屬のもの存せしが、又、藤原氏私設のものも生じ、山城國平安京の左京なる唐橋(カラハシ)の南、室町(ムロマチ)の西に在り、施藥院使の上に、別當一人を置きて、藤原氏の內より任命し、施藥院使は醫道の丹、波氏を補したり。何れの時代まで存續せしかは、詳かならず。二**やうじやうしよ**(養生所)「じ。

やくゐん-し 施藥院司【名】前條一に同よ。

やくゐん-し 施藥院使【名】**やくゐん**(施藥院)二を見よ。

やくゐ-もん 役居門【名】**やくいもん**(藥醫門)の誤。

やく-ゐん 藥園【名】一藥草を植ゑおく所。藥圃。二江戸幕府にて、江戸小石川・駒込に設けて、藥草を植ゑおきし所。今の東京帝國大學所屬の植物園は、卽ちその跡なり。やくぼ。**やうじやうしよ**(養生所)三參照。

やくゐん-あづかり 藥園預【名】**やくゐんぶぎやう**(藥園奉行)に同じ。

やくゐん-かた 藥園方【名】江戸幕府にて、吹上花畑奉行の支配に屬して、藥園の事を掌りし職。

やくゐん-かん 藥園監【名】**やくゐんぶぎやう**(藥園奉行)に同じ。

やくゐん-し 藥園師【名】古、典藥寮に屬し、藥の性・色・目を知り、藥園の諸草の種植・採收及び藥園生の敎授を掌りしもの。定員二人。

やくゐん-せい 藥園生【名】王朝時代に、藥園師に就きて、諸種の藥を學びし者。

やくゐん-ぶぎやう 藥園奉行【名】江戸幕府の職制の一。若年寄の支配の下に、藥園二を管掌せしめし職。

やけ 燒【名】一燒くること、又、燒けたること。西遊記「薩摩の櫻島山、大いに燒けて後、……、その燒、漸く鎭りて」二金屬の鑛床が、地表に現れたる所に於て、風化により、褐鐵鑛を多く生じ、物の焦げたるが如き暗褐の汚色を呈すること。三日出前又は日沒後、太陽の光線の映りて、空の赤く見ゆること。朝やけ、夕やけ。霞。四事物の意の如くならぬために、結果を考へぬ亂暴なる行動をなすこと。すてばち。わざくれ。やけくそ。薩摩歌「もう遁れぬ。やけぢや」和合人「土場六一人かぶりとなりしかば、今は土場六もやけになり」燒の皮【名】前條四を强めていふ語。燒の勘八【句】前條に同じ。燒のやん八【句】前條に同じ。浮世風呂「三十兩ばかり損をして、やけのやん八おこして」

やけ 宅【名】**やか**(宅)に同じ。〔古語〕宅の神【句】**やかつかみ**(宅つ神)に同じ。宅の人等【句】**やかべ**(家部)に同じ。〔古語〕紀「家人部、ヤケノヒトラ」

やーけ 驛家【名】古、宿驛の船・馬などを取り扱ひし家。えきか。名目抄「驛家、ヤケ」

驛家の使【句】**うまやづかひ**(驛使)に同じ。

やけあがる 燒上る【動四自】**もえあがる**(燃上る)に同じ。太平記「折節風烈しく吹きて、餘煙十分に覆ひければ、建仁寺の輪藏、開山塔、並びに塔頭瑞光庵、同時に皆燒け上る」

やけあと 燒跡【名】燒けたるあと。出火のありし跡。やけば。太平記「御屋形の燒跡」

燒跡の釘拾【句】放逸なる生活の擧句に、儉約をする譬。〔諺語〕

やけあと 燒痕【名】やけどのあと。東海道名所記「佛の御顏に、錢の燒痕つかせ給ひ」

やけあな 燒穴・燒孔【名】布帛などの一部に、火に燒けて生じたる孔。一茶「燒穴の日に日に殖える紙衣かな」

やーけい 野景【名】野原の景色。「のぢ。

やーけい 野徑・野逕【名】野にある細き道。

やーけい 野雞【名】〔動〕『史記の封禪書に「野雞野雉」とありて、註に「野雞、雉也。呂后名雉、故曰二野雞一」と見ゆ』**きじ**(雉)の異稱。運歩色葉集「野雞、ヤケイ、雉名」二『英 Jungle-fowl』印度並びにその附近の島嶼に野棲する雞。數種あり。

やーけい 夜景【名】夜の景色。夜色。

やけい-どや 夜警小屋【名】夜警に從事する者の詰めをる小屋。

やけ-いし 焼石【名】焼けたる石。火熱を受けて熱くなりたる石。
焼石に水【句】『焼石は、多く水を注ぎかけても、悉く吸收するに譬へていふ語』いかに供給し、又は勞力を費しても、少しも効なき譬。〔諺語〕

やけい-ば 夜警場【名】夜警をする場處。夜警小屋のある場處。

やけ-うす 焼失す【動下二自】焼けて、跡形無くなる。せうしつす。

やけ-うるし 焼漆【名】日に焼けたる漆。狂言「塗師平六」「火焔と燃え上って、身はやけ漆となりたるぞや」「れ崩る。

やけ-おつ 焼落つ【動上二自】焼けて、倒

やけ-がね 焼金・焼鐵【名】焼けたる金屬。火力にて熱したる金。心中刃は氷の朔日「焼鐵おっ取り」

やけ-くぎ 焼釘【名】焼けたる釘。火力に遭ひて熱くなりたる釘。

やけ-くさ 焼種【名】焼くる材料。和合人「足の毛へ燈明の火をくつつけたやつだ。……處が思ひの外焼くさが多いから」

やけ-くさ 焼草【名】焼けたる草。新撰萬葉「燃草(ヤケグサ)に梅散り落ちぬ生ひたらば いかなる花か又は折るべき」「いふ語。

やけ-くそ 焼糞【名】**やけ**(焼)四を强めて

やけ-くび 焼首【名】焼けたる首。今書「焼殺したる者をば、何の故に、その焼頭をば、穢げに取り持つべき」

やけ-こがし 焼焦【名】過ちて焼焦(ヤケコゲ)を生ぜしむること。やけっこがし。

やけ-こげ 焼焦【名】焼けて焦げたること、又その部分。やけっこげ。

やけ-ざけ 焼酒・自棄酒【名】焼三の心を紛らすために飲む酒。やけのみ。

やけ-しづまる 焼靜まる【動四自】焼け終りて、靜かになる。火事止む。やけどまる。太平記「岡崎の在家より、俄かに火出て來て、やがて焼け靜まりけるが」

やけ-じに 焼死【名】**せうし**(焼死)に同じ。

やけ-しぬ 焼死ぬ【動奈變自】火に焼かれて死ぬ。焚死す。

やけじり-じま 焼尻島【名】〔地〕『アイヌ名ヤンケシリに焼尻の字を充てたるもの』天鹽(ボシ)國に屬する島。苦前(ヤヂ)郡の西北十四海里の海上にあり。周囲二里半弱。

やけ-すけ 焼助・自棄助【名】焼三になりたる人を、人名に擬していふ語。

やけ-ぜに 焼錢【名】焼けたる錢。火中に在りたる錢。

やけ-そば 焼卒都婆【名】焼けて黑くなりたる卒都婆。物臭太郎「あれ程色黑くきたなげなる者も、世にはありけるぞ。……、焼卒都婆の如く立竦(クヲヂス)にして」

やけ-だいり 焼内裏【名】出火のために焼けたる内裏。盛衰記「焼内裏の芝築地(ツイ)の陰より」

やけ-だけ 焼嶽【名】〔地〕飛驒・信濃兩國の境にある山。飛驒山脈の南部硫黄岳の北方に連なれる火山。海拔六九一〇尺。全形圓錐狀、頂上に硫氣の噴口多く存す。一名、焼山。

やけ-だざる 焼出さる【動下二自】火事のために、住宅を焼かれて、他處に脱る。

やけ-だされ 焼出【名】焼け出さるること、又、焼け出されたる人。

やけ-づ 夜月【名】夜の月。「く」に同じ。

やけ-つく 焼附く【動四他】**こげつく**(焦附)

やけ-っこがし 焼焦【名】**やけこがし**(焼焦)の音便。

やけ-っこげ 焼焦【名】**やけこげ**(焼焦)の音便。

やけ-っち 焼土【名】焼けたる土。火熱に遭ひて、水氣を失ひたる土。せうど。

やけ-っぱら 焼腹・自棄腹【名】**やけばら**(焼腹)の音便。

やけ-つんぼ 焼聾【名】聾なる人を罵りていふ語。かなつんぼ。狂言「聾座頭」「臆病つんぼのやけつんぼめ」

やけ-つら 焼面【名】やけどしたる顔。焼面火に懲りず【名】『「焼處(ヤケ)、火に懲りず」に同じ。〔諺語〕堀川狂歌集「焼面の懲りぬたぐひか灰になる山のあたまにもゆる蕨は」

やけ-ど 焼處・火傷【名】皮膚の、火・熱湯などに觸れて、そこなはること、又その痕跡。くわしやう。俳諧新選(超波)「火傷して物に狂ふや冬ごもり」
焼處、火に懲りず【句】同じ失敗を、性懲もなく繰り返す。焼面(ツラ)、火に懲りず。〔諺語〕

やけ-どまり 焼止【名】焼けとまること、又、焼けとまりたる處。

やけ-とまる 焼止る【頭四自】一焼け移りて、遂にとまる。焼くること止む。鎭火す。やけしづまる。二心を惑はすこと止む。思ひとどまる。若風集「若道狂の焼けとまらぬ者の申し出して」

やけ-の 焼野【名】野火に焼けたる野。新六「きぎす鳴く春の焼野のかぎ蕨外山(トヤマ)をかけてもえわたるかな」
焼野の鴉【句】元來黑き物の一層黑く見ゆる譬。盛衰記「身の色より、上の裝束まで、牛驚くほどにありければ、焼野の鴉に似たりけり」

やけ-の-ぎす 焼野の雉子(キギス)【句】巣を營みたる野を焼かれたる雉子。
焼野の雉子(キギス)、夜の鶴【句】『巣を營みたる野を焼かれたる雉子の、己を忘れて、雛を救ふ義』子を思ふ情の切なる譬。〔諺語〕謡曲「唐船」「親の子を思ふこと、人倫に限らず、焼野の雉、夜の鶴、梁の燕は、子ゆゑこそ物思へ」
焼野の雉子【句】「焼野の雉子(キギス)」に同じ。盛衰記「源氏は、……、平家の船の行くに任せて、陸(クガ)より責追ぶ。焼野の雉の隱なく、鷹の賞むるに異ならず」
焼野の原【句】**やけの**(焼野)に同じ。平家「故郷を焼野の原とかへりみて末もけぶりの波路をぞ行く」「ど。

やけ-の-がはら 焼野原【名】前條に同じ。

やけ-のはら 焼野原【名】前條に同じ。俳諧新選(雁宕)「焼野原江戸へ遣る子の通りけり」

やけ-のみ 焼飲・自棄飲【名】焼酒(ヤケ)を飲むこと。

やけ-ば 焼場【名】**やけあと**(焼跡)に同じ。
焼場に銅壺曳く【名】「焼原(ハラ)銅壺曳く」に同じ。〔諺語〕

やけ-ばた 焼畑・焼畠【名】次條に同じ。萬代「人の住む里のけしきになりにけり山路の末の賤(シヅ)のやけばた」

やけ-ばたけ 焼畑・焼畠【名】一**やきばた**(焼畑)に同じ。二旱にて、水氣の無くなりたる畑。芭蕉「芋の葉や月待つ里のやけ畑」

やけ-ばひ 焼灰【名】焼けて生じたる灰。若風俗「愚かなる人や、女の焼灰なればとて、衆道(シヅウ)を好ける人の手に持つ事なればと申せば」

やけ-はら 焼原【名】**やけの**(焼野)に同じ。後撰「今日よりは荻のやけ原かきわけて若菜摘みにと誰を誘はん」
焼原に銅壺曳く【句】がらがらと音して騷しき譬。焼場(バヤ)に銅壺曳く。〔諺語〕
焼原へ霜の降ったやう【句】色黑く醜き女の、白粉(オシロイ)を塗りくりたる譬。〔諺語〕

やけ-ばら 焼腹・自棄腹【名】やけ腹を立つること。やけっぱら。

やけばら-だち 焼腹立・自棄腹立【名】焼腹をたつること。曾根崎心中「姪を嫁はれしと、やけ腹立ちに打ち當てて」

やけ-ひと 家人【名】**やかべ**(家部)に同じ。〔古語〕

やけ-ひばし 焼火箸【名】焼けたる火箸。火力に遭ひて熱したる火箸。

やけ-ふ 焼生【名】野原の焼跡に草の生えたる所。野焼の跡の草原。曾丹集「あらはまでやけふに見えし春の野も草深げにもなりにけるかな」

やけふ 夜業【名】夜間、仕事をすること、又その仕事。よなべ。

やけ-ぶくれ 焼脹【名】火傷して脹るること、又その脹れたる所。

やけ-ぶとり 焼太【名】火事に遭ひて、その後の生活、又は事業などの却って豐かになること。

やけ-ふんべつ 焼分別・自棄分別【名】焼(ヤケ)[二]になりて、思ひ浮ぶ分別。窮餘に案出する方法。新水代藏「まん更人を倒さんとのみ分別する者、一人も無し。是非に及ばざるの焦(ヤケ)分別なり」

やけ-ぼくち 焼火口【名】焼けたる火口。燃えさしの火口。
焼火口に火が附く【名】「焼木杭に火が附く」に同じ。

やけ-ぼくひ 焼木杭【名】焼けたるくひ。燃えさしの棒杭。もえぐひ。やけぼっくひ。
焼木杭には火が附きやすい【句】嘗て關係ありし者は、一旦縁切れても、復、元の關係にかへり易し。燃杭(ヤモエ)に火が附きよい。〔諺語〕
焼木杭に火が附く【名】嘗て關係ありて、一旦縁の切れたる者、また元の關係にかへる。焼火口(ヤケザ)に火が附く。

やけ-ぼこり 焼埃【名】焼くる時立ち上がること。延焼。[二]**やけぶぶり**(焼太)に「木杭」の音便。

やけ-ぼっくひ 焼木杭【名】**やけぼくひ**(焼木杭)に同じ。

やけ-みまひ 焼見舞【名】**くわじみまひ**(火事見舞)に同じ。俳家奇人談(牧童)「梅が香や先づ一番に焼見舞」『ぬ。のいぬ。

やけ-ん 野犬【名】飼主なき犬。のらい

やけ-ん 薬研【名】[一]生薬(スリ)を剉截するに用ふる器。鐵又は青銅にて、舟形に造り、臺を取り附けたるもの。窪部に粗刻(アラキ)の生薬を入れ、薬研車と名づくる鐵又は青銅製の圓盤に木製の横軸を附したる具にて、縦に前後に軋らせて、適宜の大さに押し砕く。くすりおろし。太平記「岸の額の片土(カタツ)、くわと崩れて、薬研のやうなる所」[二]左右より中央に向つて、傾斜面を作りたる窪み。V字形。

やけ-ん 野諺【名】田舎のことわざ。

やけ-ん 野言【名】ゐなかことば。野語。

やけん-うまぐは 薬研馬鍬【名】農具の一。普通の馬鍬の齒杆の外に、その前方に一の横軸を設け、これに薬研狀なる數個の車輪を取り附け、土塊を、この車輪の廻轉によりて先づ切斷し、齒杆によりて更に細かくするもの。粘重なる濕地に使用するに適す。

やけ-ん-ぐるま 薬研車【名】**やげん**(薬研)[二]を見よ。

やけ-ん-つば 薬研鍔【名】『薬研車に似たるよりいふ』薬研車の如く、圓くして、周圍の尖りたる形の鍔。艶狩劍本地「薬研鍔の二尺一寸」

やけ-ん-どひ 薬研樋【名】薬研[二]の形なる樋。

やけ-ん-ばら 薬研腹【名】指にて、巧に子をおろす、即ち墮胎すること、薬研が生薬をおろして、粉となすが如しとて、その腹を指していふ語。傾城島原蛙合戰「大きな腹……この指二本で墮(オ)す程にけける程に、薬研腹と申します」

やげん-ぼり 薬研堀【名】[一]『形、薬研[二]の窪める部分に似たるよりいふ』兩岸より底に至るに從ひ、幅狹くなるやうに、斜に掘り下げたる堀。秋夜長物語「薬研堀の底せばなる中」[二][地]東京市日本橋區兩國廣小路の南に當る地。明治三十年頃に埋めて陸地とせり。

やけ-やしき 焼屋敷【名】焼けたる屋敷。俳諧新選(行雲)「焼屋敷茄子も植ゑず建てにけり」

やけ-やま 焼山【名】[一]嘗て野火などに焼け、又は現に焼けてある山。噴火し、又は現に噴火せる山。夫木「やけ山の烟の末は一つにて霞む雲居を歸るかりがね」[二][地]越後國中頸城(ヒキカク)・西頸城の兩郡に亙れる活火山。妙高山彙に屬し、妙高山の西方に位し、東方、火打山に連なる。高さ七九二三尺。[三][地]羽後國仙北(ホセク)・北秋田二郡と陸中國鹿角(カツ)郡との境界にある火山群。その一峯熊澤山は、高さ三三五〇尺。[四][地]**やけだけ**(焼嶽)に同じ。

やけ-やまばた 焼山畑・焼山畠【名】山の焼畑。新六「風渡るやけ山畑の下もえもまだ事ゆかず冴ゆる白雪」

やこ 野狐【名】野に棲める狐。鵜鷺合戰「百丈の野狐の無間(ハヤ)は、これを嫌はず」

やー-ご 野語【名】**やげん**(野言)に同じ。

やー-とう 冶工【名】冶金をなす職工。いものかち。いもじ。

やー-とうぢ 八小路【名】**むさし**(六指)を云ふ。〔信濃國の方言〕

やご-え-やま 矢越山【名】〔地〕肥後國に在る山。今の同國菊池・阿蘇二郡に跨れる矢護(ヤ)山の舊稱なりといふ。檜垣嫗集「わが戀の思ひしことのとほらぬは矢越の山のあればなりけり」

やー-こく 夜國【名】南極又は北極に近くして、一年中の過半は、日光を見ることなき國。

やー-ごし 家越【名】**いてん**(移轉)[二]に同じ。俳家奇人談(不角)「六月(ハヤ)の晦日家越のはらひかな」

やごし-ぐるま 家越車【名】**ひきこしぐるま**(引越車)に同じ。俳諧新選(太祇)「鉢植も家越車や唐辛子」

やこ-ぜん 野狐禪【名】『蘇軾の常州太平寺舊葡亭の詩に「六花舊葡林間佛、九節菖蒲石上仙、何似東坡鐵柱杖、一時驚散野狐禪」とあり。古人、一轉語を誤りて、五百生の間、野狐に墮せし由の說話、五燈會元の卷三、從容錄の第八則、無門關の第二則等に見ゆ。それらの意にていへる語なるべし』禪學を修めて、眞にその道を得ざることを嘲りていふ誤。

やー-じたへ 矢答【名】矢を射て中りたる時に叫ぶ聲。やさけび。甲陽軍鑑「矢開にならざる物の事、猫・庭鳥にて候。……その鳥を上に作りおきて、看に主人遣され候時、矢じたへと申す物をして食ふなり」

やじたへ 矢答の童子【句】弓術の稽古の時、的の附近に身を潛めゐて、矢の中りたる時は、采配を出して、その旨を射たる人に知らせ、又、射中てし數を檢する役。

やごつ-なし 止事無し【形一】次條の轉。宇治「我ならぬやごつなき人の御鼻にもこそ參れ」

やごと-なし 止事無し【形一】**やんごとなし**(止事無し)の音便。講曲(吳服)「やごとなき女性(ニョウ)二人あり」

やー-こぼれ 矢零【名】弓に番へて發射せんとする矢の、左の手の、弓を握れる拳よりはづれてすべり落つること。これを防ぐために、古は、弓に鈕(ツ)といふものを打ち附くること行はれたり。

やー-ごろ 矢頃・矢比【名】矢を射て中つるに適したる距離。砲の著彈距離の類。やだけ。保元「惡(ク)い剛の者かな、我が矢比に寄せて扣へたり、只一矢に射落さんと思へども」平家「矢頃に廻る者をば、さし詰めさし詰め射けるに」『を見よ。

やー-ごゑ 八聲【名】次條及びその次の語

やー-ごゑ 八聲の鐘【句】次條の語を、夜明の鐘の音に擬へていふもの。俗曲(玉くしげ)「そらおぼれせしきぬぎぬに、八聲の鐘と島騒ぐ五町(ヤヂ)の天の曉に」根南志具佐後篇「芝居……一番太鼓は、八聲に先立ち、三番叟は明けるを待たず」

やー-ごゑ 八聲の鳥【句】夜の明方に、幾度も鳴く雞。しばどり。しばなきどり。千載「思ひかね越ゆる關路に夜を深み八聲の鳥に音をぞ添へつる」義經記「まだ夜ぶかに今出川をば出でさせたまひけれども、八聲の鳥もしどろに鳴きて」

やー-ごゑ 矢聲【名】矢叫の聲。或は、矢は假借の文字にて、次條と同一の語ならんか。東鑑「發二矢聲一、太微音也」

やー-ごゑ や聲【名】やといふ掛聲。えいごゑ。太平記「や聲を出してぞ戰ひける」

やー-ざ 夜坐【名】夜坐りてあること。

やー-さい 野菜【名】畑に作りて、食用に供する草。あをもの。せんざいもの。蔬菜。野蔬。

やー-ざい 屋財【名】**かざい**(家財)[二]に同じ。大織冠「彼の親方賭博打(バクチ)……屋財・家財負けほほけ」

屋財・家財【名】『屋財と家財とは同義の語なるを重ねて、意味を強めたる語』すべての家具。

やさい-ばたけ 野菜畑【名】野菜を栽培せる畑。

やさい-もの 野菜物【名】野菜の類。

やさう 野草【名】野に生ずる草。のぐさ。

やさう 夜窓【名】夜のまど。太平記「夜窓の燈(シビ)を挑げて、聚螢の光に易ふ」

やさう 野葬【名】■野外に葬ること。■【佛】四葬の一。骸を野外に捨ておくもの。林葬。施林。

やざう 彌藏【名】『やぞう』と關係ある語か』手を袖より引き込め、乳のあたりに置きて、握拳(ニギリコブシ)を作りてあること。昔、職人などのせしわざなり。〔江戸の語〕浮世床「握拳のやざうで、額ぎはをこすらうとする」

やさか 八尺【名】次條を見よ。

八尺の嘆【句】『や(八)は多數の義。なほ、さか(尺)を見よ』長く息づきて嘆くこと。長嘆。長大息。〔古語〕萬葉「わが嘆くやさかのなげき」

八尺の曲玉の五百箇の御統の玉【句】「八尺瓊(ヤサカニ)の五百箇御統」に同じ。〔古語〕記「左・右の御手にも、各、八尺の勾璁(マガタマ)の五百津のみすまるの珠を纏き持たして」

やさか 八坂・八阪【名】〔地〕■京都市下京區八阪。■**やさかじんじゃ**(八坂神社)の略。一代女「祇園町・八坂はせはしく」

八坂の塔【句】**ほふくわんじ**(法觀寺)を見よ。

やさがし 家搜【名】家の中を隈なく探して、求むること。家宅搜索、冥途の飛脚「俄かに在所家並(ヤナミ)の、片端から家搜、親父樣を、今搜す」

やさか-じんじゃ 八坂神社・八阪神社【名】京都市下京區祇園町に鎮座せる官幣中社。祭神は素盡嗚(スサノヲ)尊・稻田姫命・八柱御子(ヤハシラノミコ)神。貞觀十八年、僧圓如、これを播磨國廣峯より遷し奉り、元慶の初、藤原基經、感神院を興して、院内に遷し祀る。初、春日神社の末社なりしが、天延三年、日吉(ヒエ)神社の末社となり、始めて御靈會(ゴリヤウエ)を行ひ、後世、これを祇園會(ギヲンエ)と呼び、京都の一偉觀となる。今は、六月十五日に例祭を行ふ。一名、祇園神社・祇園天神・牛頭(ゴズ)天王。

やさ-かた 城玄・八坂方・屋坂方・屋佐方【名】『城玄は京都の八坂に住せしよりいふ』琵琶法師の一派。生佛(ショウブツ)の弟子如一の門に出でし城玄を祖とす。大山派・妙文(メウモン)派・關派・櫻派に分れ、四派、何れも、その名に城の字を用ふ。八坂(ヤサカ)流。(都方(ミヤコガタ)に對して)

やさ-がた 優形・優方【名】■心のやさしく上品なること。狂言「蕨大名」「下京(シモキヤウ)邊に、心やさがたな御方がござる」本朝二十不孝「志もやさがたに、情深し」■やさしく上品なる姿。

やさがた-をとこ 優形男【名】やさしく上品なる男。やさをとこ。二代男「やさがた男、その年は二十六七にして」

やさか-でら 八坂寺・八阪寺【名】**ほふくわんじ**(法觀寺)に同じ。

やさか-どり 八尺鳥【枕】八尺(ヤサカ)の嘆をする鳥の義より、**いきづく**(息づく)にかけていふ。萬葉「沖に棲もを鴨のもころやさか鳥いきづく妹を置きて來ぬかも」

やさか-に 八尺瓊【名】『**やさか**につきては、異說もありて、彌榮(イヤサカ)の義なりとも、彌眞明(イヤサカ)の義なりとも、美玉を產する地名なりともいふ』長き緒に、多くの玉を貫きたるもの。上古、身に著けて、裝飾とせり。

八尺瓊の五百箇統(イホツ)の玉【句】次條に同じ。日本紀竟宴歌「天(アメ)の穗日(ホヒ)神のみおやはやさかにのいほつばるの玉とこそ聞け」

八尺瓊の五百箇御統(スマルミ)【句】極めて多くの玉を用ひて造りたる八尺瓊。八尺瓊の五百箇統(イホツ)の御統(スマル)の玉。八尺の曲玉の五百箇(ヤサカ)の御統(スマル)の玉。紀「八坂瓊(ヤサカ)の五百箇御統(御統、此云二美須磨屢一)」

八尺瓊の五百筒御統(スマルミ)の玉【句】前條に同じ。祝詞「大殿祭」「齋玉作(イミタマツクリ)らが持齋(モチ)まはり持淨(モチ)まはり造り仕へまつれる瑞(ミ)の八尺瓊の御吹(ギヒ)の五百都御統の玉に、明和幣(ニギテ)・曜和幣(ニギテ)を附けて」

八尺瓊の曲玉【句】多くの曲玉より成る八尺瓊。三種の神器の中にもあり。紀「天明玉(アメノクラノ)の作れる八坂瓊(ヤサカ)の曲玉」

やさか-にんぎやう 八坂人形【名】京都の八坂・清水(キヨミズ)・五條坂の邊にて賣る人形。

やさかむ 瘦かむ・瘠かむ【動四自】**やせかむ**(瘦かむ)に同じ。〔古語〕紀「瘦、ヤサカ」

やさかり 八道行成【名】**やさすかり**(八道行成)に同じ。〔古語〕名義抄「八道行成、ヤサカリ・ヤサカリ・ヤサスカリ」

やさかり-りう 八坂流【名】**やさかた**(城玄)に同じ。

やさぎ 矢先【名】■**やじり**(鏃)に同じ。〔鏃〕和名「箭……其足目、鏑、或謂二之鏃一、訓二夜佐岐一、俗云二夜之利一」■射たる矢先に廻る者こそなかりけれ」太平記「諸人、この矢を傳へ見て、あなおそろし、いかなる不運の者か、この矢先に廻りて死なんずらん」■矢先にて爭ふこと。やいくさ。國姓爺後日合戰「返事は互に矢先の時」■ねらひて捕へ、挾みなどせんとしたる手先。醒睡笑「坐禪豆を少し送りたりし事あり、……小兒の矢先はづれず、ほしりほしりと當りし事よ」■或事のありたる、その時。とたん。ひやうし。堀川波の鼓

やさ-げび 矢叫【名】射たる矢の物に當りたる時、その射手の、叫聲を揚ぐること、又その叫聲。やごゑ。平家「手答して、はたと申る。得たりやをうと、矢叫をこそしてけれ」

やさ-ことば 優言葉【名】やさしく上品なる言葉。

やさし 優し・誹し【形二】■**はづかし**(恥し)に同じ。〔古語〕萬葉「玉島のこの河上に家はあれど君をやさしみあらはさずありき」竹取「人ぎき、やさし」■『さしむかふに、恥しく感ずる程なる義』すぐれたり。殊勝なり。しをらし。著聞「神樂・催馬樂(サイバラ)うたひて、やさしく神さびたる人」保元「合はぬ敵と思へども、汝が詞のやさしきに、矢一つ給はらん」■人情に富めり。なさけ深し。相手に對して、柔和なり。榮花「いとどしういたはしうやさしげに扱ひきこえさせたまふ」■たやすし。容易なり。(むづかしに對して)

やさし-がる 優しがる【動四自】やきしと思ふ。

やさし-だつ 優しだつ【動四自】やさしきさまをなす。やさばむ。榮式部日記「くせぐせしく、やさしだち、恥ぢられ奉る人にもそばめたてられて侍らまし」

やさし-み 優味【名】やさしき氣味。人情に富める樣子。

やさし-を 優男【名】次條に同じ。吉野忠信「武夫の智勇を兼ねしやさし雄」

やさし-をとこ 優男【名】**やさきさこ**(優男)に同じ。松風村雨東帶鑑「花も實も在原の優し男の情」

やさ-すがた 優姿【名】姿のしとやかに上品なること、又その姿。

やさ-すかり 八道行成【名】『さすは差すの義、かりは稈蒲(カリ)なりといふ』古の一種の遊戲の具。八條の線を劃したる盤面にて、棊子を動かして、勝負を爭ひしものといふ。今の十六むさしの類なるべし。やさかり。やつさすかり。〔古語〕和名「八道行成、讀、夜佐須賀利」

やさた 矢沙汰【名】的を狙ひて射たる矢の中りたる狀態を見分くること。しき目つきにて、睨むやうにすること。

やさ-にらみ 優睨【名】美人などの、やさ

やさば 【名】〔動〕**をさがめ**(をさ龜)に同じ。

やさ-ばむ 優ばむ【動四自】**やさしだつ**(優しだつ)に同じ。さざめごと「艷といふも、あながち句の姿、言葉のやさばみあだめきたるにはあるべからず」

やさ-びと 優人【名】しとやかに上品なる人。やさもの。文武五人男「山寺に櫻惜しみし優人の歌」

やさびる 優びる【動下二自】しとやかに上品なるさまにてあり。「に同じ。

やさ-ぶみ 優文・優書【名】えんしよ(艶書)

やさぶみ-あはせ 優文合・優書合【名】えんしよあはせ(艶書合)に同じ。

やさぶらう 彌三郎【名】「婆婆(ババ)で見た彌三郎」を見よ。

や-さへ 矢支【名】『ささ(支ふ)を見よ』

やふせぎ(矢防)に同じ。〔古語〕江次第抄「乏者矢佐戸」

やさ-ぼふし 優法師【名】しとやかに上品なる法師。最明寺殿百人上臈「色あるやさ法師」

やざま 矢狭間・矢間【名】やま(矢間)に同じ。盛衰記「矢間を開きて、馬の腹を射る」

や-さん 夜参【名】よまゐり(夜参)に同じ。奥の細道「亭主に酒すすめられて、氣比(ケヒ)明神に夜参す」

や-さん 野山【名】〔地〕かうやさん(高野山)の雅稱。元亨釋書「送二紫衣一襲野山二」

や-さん 野蠶【名】『後漢書の光武紀に「野蠶成繭」とあり』野生の蠶。やまゆ。

や-さん 射山【名】はこやのやま(藐姑射山)に同じ。盛衰記「新院御宸筆御願文云、…守二謙遜於厲鄉之訓一、樂二閑於射山之屬一」

やさん-だいし 野山大師【名】〔人〕こうぼふだいし(弘法大師)の異稱。

やさ-め 優女【名】やさをんな(優女)に同じ。

やさ-もの 優者【名】やさびと(優人)に同じ。一代男「この宿に口きくやさ者は」

やさ-やさ 優優【貌】いかにも、しとやかに上品なるさま。愚管抄「内裏の御事は、幽玄にてやさやさとのみ思ひ習へる人」

やさ-やさし 優優し【形二】やさやさとしてあり。いかにもしとやかに上品なり。

やさら-がひ やさら貝【名】〔動〕あまをぶね(蜑小舟)に同じ。

やざゑもん-だち 彌左衛門裁【名】『池水彌左衛門といふ同心の創めしものなるよりいふ』袴の仕立方の一。

や-さを 優男【名】次條に同じ。

やさ-をとこ 優男【名】しとやかに上品なる男。やさしを。やさしをとこ。やさを。平家「名歌仕って、御感に預かる程のやさ男」

やさ-をんな 優女【名】しとやかに上品なる女。やさめ。氣陣八島「やさ女、しんぞ都恥かしく」

や-し 矢師【名】矢を造ることを職とする人。やざいく。やはぎ。雍州府志「造レ矢者謂二矢師一」

や-し 矢籠【名】しこ(矢籠)に同じ。堀川波の鼓「弓に靫(ホウ)に矢籠(ヤ)・矢箱」

や-し 野師【名】祭禮又は緣日など、人出の多き場處にて、見世物などを興行し、又見懸倒(カケ)の商品などを賣る者。みせものし。香具師。的屋(テキ)。

や-し 野史【名】一在野の人の編纂せる歴史。私撰の歴史。野乘。二〔書〕後小松天皇の明德元年より仁孝天皇の文政八年まで、四百二十餘年間の歴史。二百九十一卷。有栖川家の臣周防國德山藩士飯田忠彦の著。大日本史の後を繼ぎ、體裁も全くこれに倣ひ、獨力を以て三十八年を費し、嘉永四年五月成り、有栖川宮に依りてこれを上る。然るに、忠彦、櫻田事變に連累すとの故を以て捕へられんとし、文久元年、憤懣して自殺せしため、この書、久しく世に知られざりしが、明治二年、修史局の設けらるるや、官、この書を徵して、忠彦の業を褒賞し、明治十四年三月、嗣、文彦これを印刷に附す。

や-し 椰子【名】一〔植〕棕櫚科に屬する常綠喬木。熱帶の沿海各地に自生す。幹は、高さ十丈、徑一尺五六寸に達し、その頂上に、長さ六尺乃至二丈の羽狀複葉叢生す。花は、單性にして、雌雄同株に開き、三稜の核果を結ぶ。材は、堅硬・緻密にして、建築・家具等の諸用に供し、花梗を傷けて、出づる液汁は酒に釀し、葉は屋根を葺くに用ひ、若葉は、漂白して、編物とし、果皮の外圍は、强靱なる纖維に富むを以て、これより綱具・網などを製し、内果皮は、堅牢にして、コップ又は胡弓の胴を作り、食用となり、仁より搾りたる油は、石鹼原料・化粧用油・蠟燭製造用・藥用・煙火用に供し、殘滓は家畜の飼料とし、又、若き果實の胚乳の内部に存する乳糜の液汁は、土人の重要なる飲料となる。ここやし。やぎ。やしほ。運歩色葉集「椰子、ヤシ」二椰子の木の實。

椰子の柄杓(ヒシヤク)【句】椰子の實を二つに割り、柄を附けて、柄杓に作りたるもの。椰子は毒を消す効ありとて、產湯を汲むに用ふ。

や-じ 彌次・野次【名】一やじうま(彌次馬)の略。二やじること。

彌次を飛ばす【句】さかんにやじる。

やし-あぶら 椰子油【名】やしゆ(椰子油)に同じ。

やし-しう 野州【名】〔地〕しもつけ(下野)の雅稱。正統記「奥州・野州の守も、次の年の春、重ねて下向して」

やし-じう 野獸【名】一山野に棲息する獸類。二獰猛なる人の譬。

野獸盡きて、獵狗烹(ニ)らる【句】『史記の淮陰侯傳に「野獸已盡、而獵狗烹」とあるに本づく』「狡兎(カウ)死して、走狗烹らる」に同じ。〔諺語〕

やじ-うま 彌次馬・野次馬【名】やぢうま(彌次馬)を見よ。

やし-き 屋敷【名】一家を建つべき地所。やしきち。やしきどころ。著聞「國に、屋敷など、永代限り充てたまひけり」二廣大なる地所に造りたる大住宅。地位高き官吏などの、立派なる家屋。邸宅。〔邸〕

二ぶけやしき(武家屋敷)の略。箱根靈驗躍仇討「物堅いお屋敷ゆゑ、外(ソ)見る事さへならなんだに」「の在りしあと。

やしき-あと 屋敷跡・邸跡【名】屋敷二三

やしき-あらため 屋敷改【名】江戸幕府の職制の一。若年寄の支配の下に、江戸府内の武家・庶民・社寺の屋敷の坪數・家作坪數を調査し、家屋の新築・取拂・讓與より交換・下賜等に至るまでの一切の事務を掌りしもの。小姓・書院の兩番より出役する習にて、定員は、もと四人乃至六人にて一定せざりしが、後世三人に一定したり。

やしき-がた 屋敷方【名】屋敷二の方面の家家又は人人。武家がた。(御所方・町方などに對して)一代女「酒樂(ラク)といへる座頭、江戸に下りて、屋敷方の御慰に、紙帳(チヤウ)の内に入りて、鳴物八人の役を、ひとりして間(マ)を合はせける」

やしき-がまへ 屋敷構【名】一屋敷二三の構へ方。二城を、屋敷の構の如くに、簡略に構へたるもの。「二の小き域。

やしき-がまへ-じろ 屋敷構城【名】前條に同じ。甲陽軍鑑「敵に、屋敷城を一つ攻取られたまふ事なし」

やしき-じろ 屋敷城【名】前條に同じ。

やしき-そだち 屋敷育【名】屋敷二にて生長すること、又其所にて生長したる人。武家そだち。

やじ-きた 彌次喜多【名】一十返舍一九の作、道中膝栗毛の主人公なる栃面(トチメン)屋彌次郎兵衛とその食客なる北八と。二滑稽にて、失敗多き言動をなすこと。

やしき-ち 屋敷地【名】屋敷二を建つべき地、又、それを建てたありし地。やち。續鳩翁道話「元の屋敷地を買戻し、四間ばりに、七間の家を新に建て」

やしき-ぢよちゆう 屋敷女中【名】屋敷奉公をする女中。几董「紅裏(モヒ)は屋敷女中か遠雉子(トホキ)」

やしき-づとめ 屋敷勤【名】やしきぼうこう(屋敷奉公)に同じ。浮世風呂「この嫁が、屋敷勤の頃より、部屋方に勤めたるが」

やしき-どころ 屋敷所【名】やしき(屋敷)二に同じ。盛衰記「新田(ニタ)の庄を屋敷所に申し候ひしが」

やしき-ふう 屋敷風【名】屋敷二の風習。やかたふう。ぶけふう。

やしき-ぼうこう 屋敷奉公【名】屋敷二に奉公すること。やしきづとめ。やかた奉公。武家づとめ。武家奉公。

やしき-まち 屋敷町【名】屋敷二の建ちつづきてある町。やかたまち。太閤「蓮翹や黄母衣(ロキホ)の衆の屋敷町」

やしき-みがき 屋敷磨【名】屋敷奉公をして、躾(ケイ)をよくすること。一代女「屋敷琢の漉皮(カハヅリ)」

やしき-もの 屋敷者【名】屋敷 ㊁に住み又は奉公せる者。やかたもの。

やしき-もり 屋敷守【名】屋敷を守りをる人。邸宅の番人。新可笑記「屋敷守、愚案の一とほり申されしは」

やしき-わり 屋敷割【名】屋敷地を割り當つること。

やしきをんな 屋敷女【名】屋敷奉公をなし、又は嘗てそれをなしたる女。

やし-くわ 椰子科【名】〔植〕しゆろくわ(棕櫚科)に同じ。

やしし【感】やっしっしに 同じ。松の葉「やしし櫓櫂(イロカ)を早めて」

やし-じゆ 椰子樹【名】〔植〕やし(椰子)㊀に同じ。

やし-たう 椰子糖【名】椰子の樹より採「りたる蔗糖。

やし-つ 薬石【名】『漢字の宋音』ばんしゆく(晩粥)を見よ。

やしなはし-どころ 養所【名】養はしむる家。繊蟹「子ゆゑに世の立たぬ事となり果て、……、奉公の口も、子のやしなはし所も聞立て、二時(ツキ)あまりに埒を明けける」

やしなはす 養はす【動四他】養はしむ。繊蟹「それ程の乳なれば、よき所へ勤め、その銀(カネ)附けて、養はして」

やし-なひ 養【名】㊀やしなふこと。養育。保育。丹波與作「在所の衆のやしなひで、やうやう馬を追ひならひ」㊁滋養分・肥料など、すべて動植物の體を養ひ助くる物。甲陽軍鑑「牡丹・芍薬……、春、やしなひをすれば、花の時、輪(ソン)を多く持ち候」㊂生命を保つ材料を與ふること。報謝。文武五人男「三十三番の巡禮に養と宣ふか」㊃やしなひご(養子)の略。平家「いもが子は這ふ程にこそなりにけれ と申されたりければ、院、やがて御心得ありて、ただもり取りてやしなひにせよとぞ附けさせましましける」㊄舌に、小き瘡の發したること。

やしなひ-おや 養親【名】他人の子を貰ひて養ひ育つる親。やうしん。傾城酒呑童子「誠の親よ、實子よと、親しみ寄り、やしなひ親の心に滿足せうか」

やしなひ-ぎみ 養君【名】もり立て育つる主君。徒然「やしなひ君の、比叡山におはしますが」

やしなひ-ご 養子【名】貰ひて養ひ育つる子。養息子(ムヤシナヒコ)又は養娘(ムヤシナヒ)。やうし。續鳩翁道話「自分は、生涯、身を固め、やしなひ子を守(モリ)立て」

やしなひ-ごろし 養殺【名】かひごろし(飼殺)に同じ。書門松「飯でも焚かせ、すすぎ・洗濯、手足さすらせ、一生は養殺にする覺悟」

やしなひ-たつ 養立つ【動下二他】やしなふ(養ふ)㊀を強めていふ語。おほしたつ。榮花「鏑鶴をやしなひ立てて松が枝の陰にすません事をしぞ思ふ」

やしなひ-ちち 養父【名】他人の子を貰ひて養ひ育つる父。やうふ。盛衰記「眞盛も、養仲がためには、七箇目の養父」

やしなひ-はは 養母【名】他人の子を貰ひて養ひ育つる母。やうば。發心集「かのやしなひ母の冷泉殿」

やしなひ-むこ 養聟【名】貰ひて養ひ育て、聟としたる子。養子にして聟たる者。聟養子(ムコヤシ)。むこ。

やしなひ-むすこ 養息子【名】貰ひて養ひ育てたるむすこ。男の養子。

やしなひ-むすめ 養娘【名】貰ひて養ひ育てたる娘。女の養子。やうぢよ。平家「女護島「これこそ、俊寛がやしなひ娘」

やしなひ-よめ 養嫁【名】貰ひて養ひ育て、嫁としたる者。養女にて嫁たる者。生玉心中「やしなひ嫁のおきは」

やし-なふ 養ふ【動四他】㊀衣食を供給して、生長又は生活せしむ。そだつ。はぐくむ。養育す。紀「みなそこふをみのをとめをたれやしなはむ」㊁他人の子を、我子として育つ。新勅撰「やしなひはべりける娘」㊂生活せしむ。扶養す。㊃動植物に飲食物又は肥料を與ふ。飼ふ。つちかふ。㊄もり立つ。傳育す。紀「供養、イタハリヤシナフ」㊅自ら食事をなす力なき者に、箸にて、食物を、その口に入れて食はしむ。㊆心の衰へぬやうにす。方丈「はつかに心をやしなふばかりなり」養ひ得ては、花の父母【句】春雨の潤によりて、花の蕾のふくらみ開くを、父母のその子を養ひ育つるに譬へていふ語。諺語「朗詠「養得自爲二花父母一」

やし-はい 椰子盃【名】椰子の實を割りて作りたる盃。下學集「椰子盃、ヤシハイ。椰子也。横截二椰子一爲盃、若以毒投二盃中一、酒忽沸涌、令二人無一害也」

やし-はご 玄孫【名】『彌數子の義といふ』げんそん(玄孫)に同じ。和名「玄孫。爾雅云、曾孫之子爲二玄孫一、夜之波古」字治「それが子・孫・やしは子に至るまで」

やし-ばり 矢縛【名】やたばね(矢束)に同じ。運歩色葉集「矢縛」「うち。

やし-ふ 夜襲【名】夜、敵を襲ふこと。よ

やし-ふ 【名】ならぢや(奈良茶)㊀を云ふ。「大和國奈良の方言」風俗文選「南部賦」「奈良茶は、やじふと名づけ」

やじふ-がゆ やじふ粥【名】ならちやがゆ(奈良茶粥)に同じ。李典「若粥(ヤジフ)焚く火の夜は明けにけり」

やし-ほ 八入【名】㊀幾夜も染汁に浸して、濃く染むること、又、かくの如くにして染めたる色。萬葉「たかしきのうへかた山は紅の八しほの色になりにけるかも」同「紅のやしほに染めておこせたる夜の裾も通りて濡れぬ」㊁〔植〕槭樹(カヘデ)の一品種。その葉、春季に紅色を呈して美しく、秋に至りて綠色となるもの。新六「見わたしの岡のやしほは散りすぎてはつせの山に嵐吹くなり」㊂つつじの一種。野洲つつじ。

八入の雨【句】八入㊀の色に葉紅せしむる雨。六帖「紅の八しほの雨は降り來らし立田の山の色づく見れば」

やし-ほぢ 八潮路【名】多くの潮路。潮の八百路(ヤホ)。祝詞「大祓」「荒鹽の鹽の八百道(ヤホ)の八鹽道の鹽の八百會(ヤホ)に座す速開都比咩(ハヒメモ)といふ神」

やし-ほり 八鹽折【名】やしほぎり(八鹽折)の略。

八鹽折の酒【句】「八鹽折(ヤシホ)の酒」の略。謠曲「大蛇」「やしほりの酒を取り合はせ」

やし-ほ-をり 八鹽折【名】『鹽は假借の字にて、やしほ(八入)㊀のしほと同義なるべしといひ、又をり(折)は折り返してする義なるべしともいふ』幾回も繰り返してすること。

八鹽折の酒【句】幾度も繰り返して釀したるよき酒。記「八鹽折の酒を釀(モ)み」

八鹽折の紐刀(ヒモガ)【句】幾度も繰り返して鍛へたる銳き紐刀。記「八鹽折の紐小刀(ヒモナガ)を作りて」

やし-ま 八洲・八島【名】〔地〕やしまぐに(八洲國)に同じ。萬葉「あきつ神わが大王(オホキミ)の天(アメ)のした八しまの内に」源氏「八しまもる國つ御神も心あらばあかぬ別の仲をことわれ」

やし-ま 屋島・八島【名】〔地〕『遠く望めば、屋根の如き形なるよりいふ』讃岐國木田郡古高松(カフマツ)の北に、一條の干潟を隔つる島山。古は、干潟の部分、全く一條の水なりきといふ。東は牟禮(ムレ)・庵治(アヂ)と相對して、一灣を抱き、長さ約五十町、山角北に盡くる所を長崎といひ、安德天皇行宮の舊址なり。

屋島の戰【句】文治二年二月、讃岐國屋島に於ける源平兩軍の合戰。十九日開戰、二十一日には、平軍、志度(シド)浦に移り、義經、又、陸上よりこれを追ひしより、平軍、内海を西に下りて、九州に赴かんとせしが、源範頼、大兵を擁して、豐後國に在りしため、長門國境浦(カヤラン)に泊す。

やし-ま 八島【名】㊀謠曲の一。源義經の靈、都の僧となり、讃岐國八島に來り、その地に於ける古の源平の合戰の模樣を物語ることを作れるもの。㊁「室(ムロ)の八島」を見よ。

やじま 矢島【名】〔地〕明治の初年設置の縣の一。羽後國舊矢島藩の地に立てしもの。四年、秋田・本庄・岩崎・龜田・松嶺(ツツネ)の五縣と合して、今の秋田縣を立つ。

やしまぐに 八洲國・八島國【名】おほやしまぐに(大八洲國)に同じ。『記』「八千矛(ヤチホコ)の神の命はやしまぐに妻まぎかねて」

やしまじ 屋島寺【名】讃岐國屋島の山頂にある眞言宗御室(オムロ)派の寺。南面山・千光院と號す。本尊は千手觀音、空海の作といふ。多く源平合戰の古器を傳ふ。四國八十八個所中、第八十四番の札所。

やしまじぬ-の-かみ 八島士奴神【名】『八島知主、卽ち八島を治むる神の義』素盡男(スサノヲ)尊と櫛稻田(クシナダ)姫との間に生れたりといふ神。一名、冬衣(ギヤユス)神。

やしまの-ないだいじん 八島内大臣【名】〔人〕たひらむねのり(平宗盛)の異稱。

やしまの-みささぎ 八島陵【名】大和國添上(カウノウヘ)郡東市(イチノ)村大字八島にある墳墓。桓武天皇の太弟早良(サヲラ)親王の墓。

やしまむち-の-かみ 八島牟遲神【名】大國主神の妃鳥耳(トリ)神の父。

やしん 野心【名】〔左傳の宣公四年の條に「是子也、熊虎之狀、而豺狼之聲、非殺必滅、二若敖氏一矣、諺曰、狼子野心、是乃狼也、其可レ畜乎」とあり』豺狼の子の、人に飼はるも、山野を忘れず、馴れ服せずして、飼主に害を加ふる心。馴れ服せぬ心。〔二〕身分不相應の望。非望を企つる心。たくらみ。野望。太平記「この人、いかさま野心を插みたまふかと覺ゆるぞ」〔三〕『宋書の王僧達傳に「闇性寡レ任、野心素積」とあり』野趣〔一〕を樂しむ心。野性。

やじん 野人【名】〔一〕『孟子の萬章篇に「齊東野人語也」とあり』田野の間に住める人。ゐなかびと。醒睡笑「野人、春の暖かなるに思ひ立ち」〔二〕『論語の先進篇に「先進於二禮樂一野人也」とあり』素朴にして誠實なる人。〔三〕『孟子の滕文公篇に「無二君子一莫レ治二野人一」とあり』民間の人。在野の人。〔四〕未開の人民。〔五〕無粹なる人。やぼなる人。ぶこつもの。一代男「男も、無性なる野人にはあらず」

野人獻芹【句】けんきん(獻芹)を見よ。

野人、曆日無し【句】『陸遊の詩に「野人無二曆日一、鳥啼知二四時一」とあり』「山中、曆日無し」に同じ。

やしや 夜叉・藥叉(梵 Yakṣa)【名】〔佛〕『勇健・輕捷・能瞰鬼・捷疾鬼など譯す』八部衆の一。天夜叉・虛空夜叉・地夜叉の三種ありて、天夜叉と虛空夜叉とは能く飛行すれども、地夜叉は飛行すること能はず。藥叉十六大將の名もありて、その中の七將は、藥師の十二神將と共通なり。その像は、形貌醜怪なり。夜叉明王。太平記「夜叉・羅刹の怒れる姿に異ならず」

夜叉が嫁入【句】醜き女の厚化粧せるを嘲りていふ語。〔諺語〕

やじやう 野情【名】野人〔一〕の風情。ゐなか人の心。

やしやく 野錫【代】僧の第一人稱の謙稱。

やしやご 玄孫【名】やしはご(玄孫)の訛。

やしやぜんまい 夜叉薇【名】〔植〕水龍骨(ウラボシ)科に屬する多年生の羊齒植物。我國山野に自生し、普通の薇に似て、小葉やや細長し。かはぜんまい。

やしやだけ 夜叉竹【名】〔植〕業平(ナリヒラ)竹の變種。莖は、圓筒形にして、地上莖には、多くの斑紋あり。篠(ササ)は、帶綠色にして、斑紋を有せず。觀賞用とす。「じ。

やしやの-き 夜叉樹【名】〔植〕次條に同

やしやはんのき 夜叉榛【名】〔植〕やしやぶし(夜叉附子)に同じ。

やしやびしやく 夜叉柄杓【名】〔植〕虎耳草(シヤクヤク)科に屬する落葉小灌木。我國、深山の古木に著生し、高さ一二尺に達し、葉は、互生し、長き葉柄を具へ、掌狀に五乃至七淺裂し、夏、葉腋より花梗生じ、頂に、淡綠色にして、やや紅色を帶びたる離瓣花、一二個づつ開き、花後、卵狀球形にして、剛毛を密生せる漿果を結び、熟すれば、味酸し。胃癌を治するに効ありといふ。てんぼい。

やしやびしやく-だまし 夜叉柄杓だまし【名】〔植〕やぶさんざし(藪山梔子)に同じ。

やしやぶし 夜叉附子・夜叉五倍子【名】〔一〕〔植〕樺木(カバノキ)科に屬する落葉喬木。本州・四國・九州の山地に自生し、高さ二丈餘に達し、樹皮、帶赤褐黑色にして、帶綠白色の斑點あり、硬くして厚き鱗狀をなす。葉は互生し、尖れる卵形にして、細鋸齒を具へ、單性の小花、雌雄同株に開き、外形松毬(マツカサ)に似たる、七八分の乾果を結び、熟すれば、黑褐色を呈す。材は、淡褐黑色にして、淡褐色の縞と白色の小斑點とを有し、質堅くして、木理美しきを以て、挽物細工に用ひ、皮を剝ぎたる圓材は、床柱に用ひ、又、薪炭材ともなり、葉は水田の肥料、果實は、五倍子(ゴバイシ)の代用として、染料に適す。おほばみねばり。おほばやしやぶし。おほみねばり。ぎふし。つけなべ。につくわうぶし。〔二〕やまはんのき(山榛)〔三〕に同じ。

やしや-みやうわう 夜叉明王【名】やしや(夜叉)に同じ。謠曲「葵上」「北方金剛夜叉明王」

やしや-むさし 夜叉武藏【名】〔人〕もりながかず(森長一)を見よ。

やしゆ 椰子油【名】椰子の實を搾りて得る脂肪。白色の固體にして、豚の油に似、古來、印度人の食用品なりしが、現時は、石鹼・蠟燭製造の原料とし、又、牛酪代用品の製造にも用ふ。やしあぶら。

やしゆ 野趣【名】〔一〕田野のおもむき。〔二〕素朴なる趣味。「野趣橫溢」

やじゆ 椰樹【名】〔植〕やしゆ(椰子樹)に同じ。

やしゆ-たう 椰樹糖【名】『英 Palm sugar』椰子の幹より採取する砂糖。採取の量少く、品質劣れるより、多く世に行はれず。

やしゆだら 耶輸陀羅・耶輸多羅【名】〔梵 Yaśodarā〕【名】〔人〕『持稱・持譽・具稱など譯す』佛陀在家時代の妃。隣國拘利(クリ)の城主善覺の女。佛陀との間に、一子羅睺羅(ラゴラ)あり。佛陀の求道(グダウ)・修行の間、貞節を持して、羅睺羅を養育し、佛陀の成道(ジヤウダウ)後、頗りにその弟子たらんことを請ひたれども、佛許さず。後、佛弟子阿難の懇請により、佛陀の繼母と共に出家して、尼となれり。密敎にては、胎藏界觀音院の一尊とす。愛爲(イ)。

やしゆだら-によ 耶輸陀羅女・耶輸多羅女【名】〔人〕前條に同じ。太平記「その一角仙人は、佛の因位なり、その婬女は、耶輸陀羅女これなり」

やしよう 夜誦【名】やざく(夜讀)に同じ。

やじよう 野乘【名】やし(野史)〔一〕に同じ。

やしよう-め やしよう女【名】やしよめ(やしよ女)に同じ。遊京漫錄「京都丸太町通堀河西へ入る順興寺といふ淨土眞宗の末寺あり、この寺に蓮如上人の作りたまへりとて、自らの筆して書殘したまひし子守歌といふものあり。文調いと古雅にして、いにしへの京地のさま、思ひやらるるなり。その文、やしようめ、やしようめ、京の町にしよこめ、うつつるものをみしようめ、……」

やしよく 夜食【名】〔一〕『史記の孟嘗君傳に「嘗待レ客夜食」とあり』夜、物を食ふこと。夜、食事をなすこと。〔二〕昔、一日二食の習慣なりし時、夜に入りて、別に食事をなししこと、又、後、三食の習慣となりても、その外に、なほ夜間に食事をなししこと。薩摩歌「入相時分に膳立して、夕飯・夜食を引張り」〔三〕一日三食の中の最後の食事。ゆふめし。ばんめし。〔四〕よなべ(夜鍋)〔三〕に同じ。〔俚語〕

夜食の固(カタ)【句】私通の結果、腹に宿りたる兒。因果の胤。〔俚語〕假名文章娘節用「とまったのか、あの夜食のかたまりが出來たといふのか」

やしよく 夜色【名】夜のけしき。夜景。

やしよく 野色【名】野原のけしき。

やしよくにん 家職人【名】ふしんかた(普請方)に同じ。

やしよ-め やしよ女【名】〔一〕やさめ(優女)の訛なりといふ〕やしようめ(やしよう女)參照』古くは子守歌、後世は萬歲の唱ふる祝辭などに用ふる語。幾八卦柱曆「とく若に御萬歲と、御代も榮えます。……

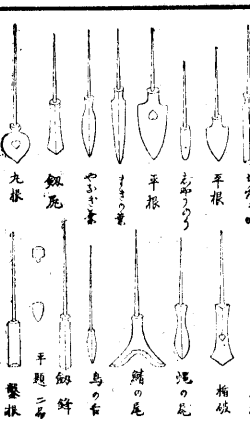
やしよ、やしよめ、京の町のやしよめと、賣ったる物はやしよめ」「を見よ。

やじらう 矢次郎【名】**やたらう**(矢太郎)

やじらう 彌次郎【名】「婆婆(ばばあ)で見た彌次郎」を見よ。

やじらみ 屋じらみ【名】〔動〕**やくちなは**(屋蛇)を云ふ。〔筑前國の方言〕

やじり 矢尻・鏃【名】一矢柄(やがら)の先に插し込みて、射中てたる時、その物を突き刺す物。銅・鐵の發見なかりし古代には、燧石・黑曜石・水晶・瑪瑙(めのう)などの堅緻なる石片を磨ぎて造り、又は、骨・角などを(やじり)用ひたるもあり。後世は、銅製のもあれど、多くは鐵製となり、形により、雁鴈(がんがん)・尖矢(とがりや)・劔尻(けんじり)・柳葉(やなぎば)・平根(ひらね)・神頭(じんとう)・蟇目(ひきめ)などあり。やさき。



やのね やのみ。和名「箭……其尻曰レ鏑、或謂二之鏃一、訓二夜佐岐一、俗云、夜之利」二矢を射中つる腕まへ。曾我虎磨「小藤太(とうた)が鏃の細かさ、これ見たまへ」

やじり 家尻・家後【名】家・藏などの後部の壁。

家尻を切る【句】『甲陽軍鑑の卷六には「藏や土藏の尻を切る盜人といへり』金品を盜み出す目的にて、家尻を切り穿つ。お染久松色讀販「この藏の家尻を切り、持出す所を見附かつちやあ、寢覺が惡(わ)い」

やじりーさき 家尻切・家後切【名】一前條を見よ』家尻を切ること、又、それを爲す盜賊。和漢三才圖會「家尻切、ヤジリキリ、夜穿二墻壁一、盜二資財一者、謂二之家尻切一」二わるもの。惡黨。天の網島「小春といふ家尻切にたらされ」三他人を憎み罵りていふ語。

やじりーまき 鏃卷【名】**くつまき**(沓卷)一に同じ。保元「目九つ差したる鏑(かぶら)の、……、鏃卷に朱さしたるが、普通の蟇目(ひきめ)ほどなるに」

やじる 彌次る・野次る【動四他】他人の言動に對し、嘲弄を加へて、妨害す。

やじるし 矢印【名】誰の射たるかを知らするために、矢の沓卷(くつまき)又は羽本(はもと)の下の邊に記す、その人の姓命・家紋など。漆・燒印又は小刀にて記す。承久記「白芭(しらは)に山鳥の羽にて矧ぎたる、矢じるししたりけり」

やじるし 屋印【名】その家なる證據を示す印、即ち屋號など。

やしろ 社【名】『屋代の義にて、もと齋場をいひしものといふ』神を奉祀する建物もしくは一定の地域。大和國三輪(みわ)町の大物主(おほものぬし)神社の如き、山を以て神體とし、別に建物を設けざる例として、有名なり。みや。ほこら。神社。萬葉「國國のやしろの神に幣(ぬさ)まつりあが戀するなる妹が悲しさ」

社の司【句】**しやし**(社司)一に同じ。夫木「神宮……やしろのつかさ」

やしろーだう 社堂【名】神社と佛堂との混淆せる建物、即ち宮寺(みやでら)の類なるべし。著聞「道に堂あるに、……、ここをば何といふぞと尋ねければ、やしろ堂と申すと答へけるを聞きて」

やしろーひろかた 屋代弘賢【名】〔人〕國學者。江戸の人。初の名は詮虎、又、詮賢といひ、後弘賢と改め、更に詮文と改む。通稱は太一郎、輪池と號す。幕府に仕へて、累りに登用せられて、終に表右筆勘定格に進む。博學・能文、最も古今の典故に精しく、幕命に依り、藩翰譜續編の纂修に與り、又、古今要覽稿編纂の總判となる。和歌にも通じ、入門の士殆ど三千人に至れり。又、當時、幕府にて、日下部(くさべ)某と共に一雙の能書と稱せられ、外國通信の國書は、大抵その筆に成りたりといふ。天保十二年閏正月歿す。年八十四。

やじろーべゑ 彌次郎兵衛【名】**つりあにんぎやう**(釣合人形)を云ふ。〔東京の語〕

やしろーめし 社召【名】武家時代に、社家に召し籠めし刑。

やしろーりんち 屋代輪池【名】〔人〕**やしろひろかた**(屋代弘賢)に同じ。

やす 安【名】値段の安きこと。廉價。〔商人などの語〕「新株は五十錢安を示す」

やす 猜・魚叉・魚扠【名】長き柄の頭部に、鐵製の、先端數本に分れて尖りたるものを取り附け、鯨その他の魚貝を刺し捕ふるに用ふる物。ほこ・銛(もり)の類なれども、尖頭鋭利なり。菱(ひし)五參照。和漢三才圖會「猜、ヤス。以レ扠刺二泥中一、取レ魚者也」

やす 野州【名】〔地〕一近江國十二郡の一。郡役所を野洲村に置く。二近江國野洲郡の村。三上(みかみ)山の西北麓、野洲川を挾みて、守山(もりやま)町と相望む。鐵道東海道線の停車場、又、郡役所あり。

やす 安【名】〔地〕上古、前條の地の邊に設けし國。記「近淡海(あふみ)の安の國造(くにのみやつこ)の祖(おや)意富多牟和氣(おほたむわけ)が女(むすめ)」

やす 夜須【名】〔地〕筑前國の舊郡の一。明治二十九年、上座(かみつざ)・下座(しもつざ)二郡と合して、朝倉郡を置く。

やす 痩す・瘠す【動下二自】一動植物の體衰へ細る。萬葉「わが君にわけは戀ふらし賜ひたるつばなを食へどいや痩せに痩す」二土質、草木の生育に適せず。(肥ゆに對して)「たりとても。痩せても、枯れても【句】いかに衰へ

やす【助動】一『四段活用の動詞と同一の語尾變化をなす』ますの轉訛。膝栗毛「お賬かでござりやした」續膝栗毛「洗つて貰ひやすめえ」二命令形「やせ」の訛。敬意の命令の意。なされ。〔京都・大阪邊の語〕狂言(實盛)「一時も置かぬお歸りやす」

やすーあがり 安上【名】金を多く費さずに濟むこと。

やすーい 安寢【名】心安らかに寢ぬること。安眠。〔古語〕萬葉「まなかひにかかりてもとなやすいしなさぬ」

やすーうけあひ 安請合【名】たやすく請け合ふこと。はやうけあひ。輕諾。

やすうま 安馬【名】價値なき馬。甲陽軍鑑「母に……附きつ離れつする馬は、後、夫馬(ふば)になりても、重き荷持つ事ならず、遠き路もならず、やす馬と、これをいふ」

やすーうり 安賣【名】一安き價にて賣ること。廉賣。二誰に對しても、手數を厭はず振舞ふこと。

やすかた 安方【名】〔動〕次條の略。運歩色葉集「虛人姿、ヤスカタ」夕霧阿波鳴海「唄ふ聲にも血の涙、子は安方の轉や」

やすかたーのーとり 安方鳥【名】〔動〕**うとう**

やすかた (善知鳥安方)に同じ。正徹集「隔てゆくうき身をそとの濱風に碎く涙やすかたの鳥」

やすーかは 野洲川【名】〔地〕近江國にある川。横田川の下流。三上(みかみ)山の麓を過ぎて南流し、二派に分れて、琵琶湖に入る。この國第一の長流にして、水源より約十五里。平時は水涸れ、砂磧廣し。

やすーがみなり 安神鳴【名】雷神の形に造りたる、粗末なる玩具。若風俗「ふんどしなしの赤鬼、太鼓持たぬ安神鳴、これ、皆、童子(わらは)たらしの樣に拵へて」

やすーかむ 痩かむ【動四他】**やせかむ**(痩かむ)に同じ。〔古語〕「髮落體痩而、……ヤスカミテ」

やすぎ 安來【名】〔地〕出雲國能義(よぎ)郡の町。松江市と米子(よなご)町との間なる小繁華の地。山陰街道の要地にして、鐵道山陰本線の停車場あり。古は、屋杉又は八杉とも書きたり。

やすぎーぶし 安來節【名】出雲國地方に行はるる俗謠。同國安來港より起り、同地の三子(みつこ)節より脫化せるものといふ。本調子の三絃に合はせて謠ふ。ぎぢ

やうすくひ(泥鰌掬)參照。

やすーくに 安國【名】安らかに治まれる國。泰平なる國。枕詞(新年祭)「四方(よも)の

國を安國と平けく知らしめすが故に」

やすくにじんじゃ 靖國神社【名】東京市麹町區富士見町三丁目、九段坂の上に鎮座せる別格官幣社。嘉永六年以後、内外の諸戰に際し、國家のために戰死せし軍人・軍屬を合祀す。明治二年六月、社地を定め、招魂社と稱せしを、十二年六月、今の名稱に改む。

やーずくみ 矢竦【名】矢が多く身に當りて、動作の自由を妨げらるること。太平記「矢、冬野の霜に臥したるが如く折懸けたれば、矢ずくみに立つて、はたらかず」

やずーくめ 矢竦【名】矢を多く射中てて、相手の動作の自由を妨ぐること。吉野都女楠「鎧の間間、矢ずくめに竦められ」

やずーくわんり 安官吏【名】俸給の僅かなる官吏を、嘲る意味にていふ語。

やーすけ 彌助【名】㊀うそ。いつはり。〔九州の方言〕㊁『つるべずし(釣瓶酢)を見よ』

にぎりずし(握酢)を云ふ。〔東京の劇場又は客商賣の人などの語〕

やすけーぎぬ 夜須計絹・安下絹【名】秩父絹に似て、粗末に、糊氣多き絹布。

やすけし 安けし【形一】**やすし**(安し)に同じ。萬葉「嘆くそら安けくなくに念ふそら苦しきものを」「鮓」に同じ。

やすけーずし 彌助酢【名】**つるべずし**(釣瓶酢)

やすーざらし 野洲晒【名】近江國野洲町地方にて晒しし麻布。野洲川の水質、漂白に適せしより、天文年間、南都の僧の漂白法をこの地の者に傳授せしより起るといふ。あふみざらし。

やすし 安し【形一】㊀心、苦なく、おちつきてあり。惱なし。危險を感ぜず。安泰なり。安穩なり。萬葉「さ寢(ネ)る夜は多くあれども物思(モ)はず安く寢る夜はさねなきものを」㊁商品の品質・分量などの割合に、多くの價を要せず。廉價なり。低廉なり。(高しに對して)㊂品位低し。質劣りてあり。盛衰記「京中の上下、安き口にはささやきけり」和合人「中通(ナカトヒ)の引込(ヒキコミ)だな。〈ん、そんな安いのぢやねえは」

安い物は高い物【句】價低き商品は、品質も劣等にて、結局、價高きと同樣なり。安物は高物。安物買の錢失(ゼニナウ)。〔諺語〕

安からう惡からう【句】「高からう善からう、安からう惡からう」を見よ。

安き物は錢失(ゼニナウ)【句】「安物買(スヤモノ)の錢失」に同じ。〔諺語〕

安く無い【句】一とほりならず。尋常ならず。羨し。「安くない仲(カナ)」

やすし 易し【形一】『前條の語の轉義』㊀行ふに、勞力を要せず。やさし。たやすし。容易なり。(難しに對して)㊁動詞の連用形に接續して、その動作・作用に傾きがちなる意を示す。萬葉「念はじといひてしものをはねず色の移ろひやすきわが心かも」

やすーだ 安田【名】次條を見よ。

天(ヤ)の安田【句】高天原に在りきといふ、肥えたる田地。紀「天安田、アメノヤスダ」

やすーだいじ 安大事【名】危險ならぬやうにて、實は重大なる事柄。平家「義仲、近江の國を經てこそ都へは上るべきに、例の山僧どもの防ぐこともやあらんずらん。……、これこそ、さすが安大事よ」甲陽軍鑑「やす大事の中に、安きは稀なるべし」

やーすぢ 矢筋【名】射たる矢の飛びゆく道すぢ。新六「今の世や弓の心もあらはれて放つ矢筋のちがはざるらん」

やすぢ 馬陸【名】〔動〕**やすて**(馬陸)に同じ。

やすぢーがけ 八筋掛【名】三味線の類にて、絃の八筋なる、昔の樂器。置土產「八筋がけを忍駒にて彈かれしが、又もなき音曲」

やすーっーぼし 安っぽし【形一】『**ぼし**は接尾語』**やすし**(安し)㊁に同じ。

やすて 馬陸【名】〔動〕多足類に屬する節足動物。好んで、樹林・草叢中の陰濕の地に棲み、體は圓筒狀にして、長さ五六分、背面は赤褐色を呈す。一關節毎に、二對づつの步脚あり。物に觸はれば、卷曲して圓くなり、忌むべき臭氣を放つ。

やーて 安手【名】やすね。安價。「安手な品」「同じ。

やすーどまり 安泊【名】**ややど**(安宿)に

やすな 安那【名】〔地〕備後國の舊郡の一。明治三十一年、深津郡と合して、深安郡を立つ。

やすな 保名【名】次條に同じ。「に同じ。

やすなきやらん 保名狂亂【名】次條

やすなものぐるひ 保名物狂【名】清元節の名曲の一。院本「蘆屋道滿大内鑑(アシヤドウマンオホウチカガミ)」の小袖物狂より脫化するもの。阿部安名、その情人榊の前が寃罪のために自殺せるを悲しみて、狂氣し、榊の前の小袖を肩にして、あこがれ歩く事を作れるもの。鶴屋南北の作にて、本外題は「深山櫻及兼樹振(ミヤマザクラオヨビカネノフリ)」。

やすぬ 夜須野【名】〔地〕『もと、そそき野といひしを、神功皇后、狩獵の時、獲物多かりしより、「我心則安」と宣ひ、この名を得るに至る』筑前郡夜須郡(今は安朝郡の一部)夜須川の流域に在りし野。

やすーね 安値・安直【名】値段の安きこと、又、その値段。安價。廉價。あんちよく。(高値に對して)

やすねーおぼえ 安値覺・安直覺【名】安値に慣るること。〔商人などの語〕

やすのーかは 安河【名】**あめのやすのかは**(天安河)の略。萬葉「七夕歌。……やすの河中に隔てて向ひ立ち」

やすーのーこほり 安郡【名】安郡より產する材木なりとも、「安」は「あむ」と讀むべきにて、長門國安武町より產する材木なりともいふ。太平記「西は羅城門の礎より、東は八條河原邊まで、五六・八九寸の琵琶の甲、安郡なんどを鏑(ヤ)貫きて、したたかに屏を塗り」

やすーのーわたり 安渡【名】安河(カヤスノ)の渡場。萬葉「天の川やすの渡に船浮けて秋立つ待つと妹に告げこそ」

やすーはう 安報【名】價安しとの報知。〔商人などの語〕

やすーはたご 安旅籠【名】㊀價の安き飲食店。一膳飯屋など。望一後千句「瓜や茄子や夕顏の汁(ミヒフ句に)立寄るは五條あたりの安旅籠」㊁**ややど**(安宿)に同じ。

やすはらーていしつ 安原貞室【名】〔人〕俳人。京都の人。名は正章、通稱は鍵屋彥右衞門。一瓢軒と號す。紙商にて、松永貞德の高弟。花の本第二世を繼ぐ。延寶元年二月歿す。年六十四。玉海集・悲母追善・永室守・獨吟千句・百韻自註・貞德終焉記等あり。

やすーふ 安分【名】僅少なる分合(ブン)。淀鯉出世瀧登「あつたら物、安分で、こつちへ貰ひたい」「粗雜なる建築。

やすーふだ 安札【名】入札(ニフサツ)の金額の僅少なること、又、その入札。一代玄「安札にて普請する人」

やすーぼとけ 安佛【名】尊からず見ゆる佛。やすっぽき佛。浮世床「戒名が短いと、萬更安佛になるやうに思はれます」

やすーまく 休幕【名】儀式などの時、その場所の一部なる地上に幕を打ちて、休憩所としたるもの。榮花「春宮の行啓……御やすまくに入らせたまひぬ」

やすまつーりう 安松流【名】射術の流派の一。安松左近の創めしもの。

やすまり 休・安【名】やすまる材料。榮花「勾欄に背中をあてて、それをやすまりに眠(ネ)り集まりたまふ」

やすまる 休まる・安まる【動四自】安らかになる。しづまる。やすむ。蜻蛉「わが思ふ人は誰(タ)ぞとは見なせども嘆の床のやすまらぬかな」盛衰記「人の病の休まる比(ヒ)に、醫師は驗(ゲン)あり」

やすみ 休【名】㊀休むこと。休息。休憩。㊁休む時。休む期間。休暇。㊂眠ること。睡眠。就寢。(接頭語お(御)を添へて用ふ)㊃**ねむり**(眠)㊄に同じ。㊅やまひ。病氣。〔齋宮の忌詞〕延喜式「凡忌詞……外七言……病稱二夜須美一」

やーすみ 八隅【名】『萬葉集に、**やすみしし**(安見知し)の**やすみ**に八隅の字を充てたるを、その漢字どほりの意味の語と誤解せしに起る』國の八方の隅。天下の諸方

面。**やすみしる**(安見知る)参照。新古今(序)「八隅知る名をのがれて」新續古今「すべらぎの八隅知るてふ近き代の」

やすーみ 安見【名】安らかに天下を知ろしめすこと。撰集抄「清涼・紫宸の間はやすみしたまひて、百官にいつかれさせたまひ、……、いづこにやすみする人にかと尋ねたまふに」「に同じ。

やすみーと 休蠶【名】〔農〕みんさん(眠蠶)

やすーみこし 安見越【名】値段の安くなる見込。〔商人などの語〕

やすみしーし 安見知し【枕】安見(ヤスミ)を爲(シ)たまふ義とも、安らかに見そなはし知ろしめす義とも、又、安見(ヤスミ)して、天下を知らす義ともいひ、數説あり。**おほきみ**(大君)にかけていふ。記「高光る日の御子(ニ)、やすみししし我が大君」萬葉「安見知し吾が大君」

やすみーじよ 休所【名】**やすみどころ**(休所)に同じ。謠曲(東北)「あの方丈は、和泉式部の御休所にて候か」

やすみーしる 安見知る【枕】**やすみしし**(安見知し)の誤。**やすみ**(八隅)参照。玉葉「安見知る我がすべらぎの御代にこそさかゑの村の色もすみけれ」

やすーみせ 安見世【名】遊興費の安き娼樓。膝栗毛「今宵は、島原の廓中を見物して、安見世もあらば、一宿せばやと」

やすみーぢやや 休茶屋【名】休息所となる茶屋。五人女「小判も知らぬ休茶屋」

やすみーつづき 休續【名】やすみの幾日も連なること。「休むこと。

やすみーつづけ 休續【名】何日も續けて

やすーみてぐら 安幣帛【名】安らかに足らひたる幣帛。〔古語〕祝詞(春日祭)「うづの大みてぐらを安みてぐらの足(ダ)みてぐらと、平けく安らけく聞しめせ」

やすみーどころ 休所【名】休む所。やすみじよ。休息所。休憩所。源氏「同じ大臣(オトド)の寢殿を、時時の御やすみどころとしたまひて」小島の日ずさみ「黒木の御所、小柴垣など結ひわたして、……、休所は風もたまらねば」

やすみーどし 休年【名】草木の、實を結ぶ數の少き年。

やすみーどの 安殿【名】『**やすみしし**(安見知し)参照』安らかに天下を知らしめす宮殿。〔古語〕紀「内安殿、……ヤスミドノ」

やすみーび 休日【名】休む日。休暇の日。

やすむ 休む【動四自】『**やすし**(安し)と、語源相同じ』一心身安らかになる。事しづかになる。平穩になる。やすまる。しづまる。萬葉「わぎも子は早も來ぬかと待つらむを沖にやすまむ家へ著かずして」二寢ぬ。眠る。紫式部日記「又のあした、内の御使、朝霧も霽れぬに參れり。うちやすみすぐして、見ずなりにけり」三病氣快くなる。癒ゆ。おこたる。靈異記「不レ愈、ヤス萬受」

やすむ 休む【動下二他】心身を安らかならしむ。安心せしむ。休息せしむ。萬葉「泣く兒なす慕ひ來まして息(イキ)だにも未だやすめず」芭蕉「雲をりをり人を休むる月見かな」

やすむ 休む【動四他】一時、爲さずに置く。中止す。休止す。空穗「まかりありく事も休まん」

やすーむしろ 安席【名】安らかなる席(セキ)。紀「はしだてのさかしき山もわぎも子と二人起ゆればやすむしろかも」

やすんず 安んず【動佐變自】『安みすの音便』心安らかになる。煩悶せず。安心す。滿足す。

やすんず 安んず【動佐變他】『安くすの音便』心を安らかならしむ。安心せしむ。滿足せしむ。

やすめ 安目【名】値段の安くなる氣味。和合人「ぐつと安目でめえりやせう。御相談なすって」

やすめーかけがね 休掛金【名】門の扇の内面に打ち附けて、門を差し込むに用ふる、コ字形の金物。

やすめーがなもの 休金物【名】**あふりざめ**(煽止)に同じ。

やすめーことば 休言葉【名】昔の語學者が、單に、言葉の調子を助くるのみにて、

別段の意義なしとしたる助辭。例へば、古事記の「擊ちてし止まむ」の「し」、萬葉集の「紀の關守い止(ヤ)めてむかも」の「い」など。

やすめーじ 休字【名】休言葉をあらはす文字。源氏細流抄「女の、これはしもと、只、これはといはんためなり。し文字はやすめ字なり」

やすめーち 休地【名】地力の消耗を防ぐため、一時、その土地に作物を植ゑずに置くこと、又その土地。

やすめーづる 休弦【名】弓を用ひぬ時、その反(ソリ)を防ぐために、假りに懸けおく弦。

やすめーどころ 休所【名】休むる所。休ましむる所。猿蓑(珍碩)「細脛のやすめ所や夏の山」

やすめーばた 休畑【名】休地(ハタケ)たる畑。太祇「若草ややがて田になるやすめ畑」

やすもと 【名】〔植〕**かはやなぎ**(瓦柳)に同じ。

やすーもの 安物【名】値段の安き品物、即ち粗惡なる品物。天の網島「さすが賣物、安物め」

安物買うて、鼻落す【句】一價安き淫賣婦などに關係して、黴毒に感染す。〔諺語〕二僅かの金錢を吝しみて、災を招く譬。〔諺語〕

安物は錢失【句】「安物買(ヤスモノカヒ)の錢失」に同じ。〔諺語〕

安物は高物【句】「安い物は高い物」に同じ。〔諺語〕「こと、又その人。

やすものーかひ 安物買【名】安物を買ふ

安物買の錢失【句】價低き物は、品質も劣れる故、これを買ふは、結局、高價なる物を買ふに同じ。安い物は高い物。安物は錢失。〔諺語〕

やすもふ 休もふ【動四自】**やすむ**(休む)に同じ。續記「天皇(スメラ)が朝(ミカド)を暫(シバシ)くの間も罷り出でて休もふ事なく」

やすーやす 痩す痩す【副】痩せながら。萬葉「痩す痩す生けらばあらむをはたやはた鰒(アワビ)を取ると川に流るな」

やすーやす 安安・易易【貌】一心身の極めて安くおだやかなるさま。盛衰記「御產、安安と成らせたまひにけり」二極めてたやすきさま。易易(イイ)。著聞「いとやすやすとしはてにけり」

やすーやど 安宿【名】宿料の安き旅人宿。下等なる旅宿。やすどまり。やすはたご。きちんやど。

やすーら 安ら【貌】**やすらか**(安らか)一に同じ。夫木「白山の松の木蔭に隱ろへてやすらに樓めるらいの島かな」

やすらい 夜須禮【名】次條の略。百練抄「近日京中兒女、備二風流、調二鼓笛一、參二紫野社一。世號二之夜須禮一」俳諧新選羅人「安良(ヤライ)や嘯一休の笑顔」

やすらいばな 夜須禮花【名】一**いまみやまつり**(今宮祭)に同じ。二山城國葛野(カドノ)郡高雄山神護寺の法華會。陰曆三月十日に行ふ。夫木「高雄寺あはれなりける勤かなやすらい花と鼓打つなり」

やすらい-まつり 夜須禮祭【名】前條一に同じ。

やすーらか 安らか【貌】一心身の安くおだやかなるさま。やすら。空穗「安らかに物など參りて」二狀態のきはだたず穩かなるさま。特異ならぬさま。徒然「うちある調度も、昔おぼえて安らかなるこそ、心にくしと見ゆれ」

やすーらけし 安らけし【形一】安らかなり。おだやかなり。穩當なり。祝詞(春日祭)「うづの大幣帛(ヤスケクラ)を、安幣帛(ヤスケクラ)の足幣帛(タリクラ)と平けく安らけく聞しめせ」

やすーらひ 休【名】一ためらふこと。たゆたひ。いさよひ。躊躇。猶豫。六帖「君や來(コ)ん我や行かんのやすらひに横の板戸もさで寢にけり」二休むこと。休息。玉葉「道のべの木の下ごとのやすらひに待つらん花の宿や暮れなん」三深く心を用ひぬこと。かりそめ。疎略。天の戸をやすらひにこそ出でしかどゆふつけ鳥よ問はば答へよ」

やすらひ-ばな 安花【名】**やすらいばな**(夜須禮花)を見よ。

やすらひ-まつり 安祭【名】やすらいまつり（夜須禮祭）を見よ。

やすーらふ 休らふ【動四自】一ためらふ。たゆたふ。いさよふ。躊躇す。猶豫す。空穂「せちにそそのかしたまへど、とかくやすらひて」二休む。休息す。源氏「ここに休らはんの御心も深ければ、打休みたまひて」

やすーらふ 休らふ【動下二他】休らはしむ。著聞「くつばみを休らへ、鐙を振向けて」

やすり 鑢【名】『彌磨（ヤスリ）の義といふ』鋼鐵製にて、面に、細かき刻み目を附け、木の柄ありて、他の金屬の表面を磨りみがき、又は鋸の目を立つる等に用ふる具。刻み目は、兩面に斜に平行せる縱線のもの、斜に交叉して、平行せるものなどあり。こすり。和名「鑪、鑢子、夜須利、所三以利二鋸齒一也」「同じ。

鑢・掠を取る【句】「掠（カスリ）を取る」に同じ。

やすーり 安利【名】歩合（ブ）の少き利子。又は利益。

やすり 矢摺【名】一矢條の略。運歩色葉集「矢摺」二弓の一部。矢を番ふ所。

やすりーがは 矢摺革【名】脇立（ワキダテ）の一部。壺板に草摺を取り附くる處に、搓（ヨレ）の絲の代りに附くる染革。

やすりーがみ 鑢紙【名】麻類の纖維にて漉きたる强靭なる紙の面に、細かなる金剛砂、硝子の粉などを塗り附けたるもの。金屬の表面を磨りみがく等に用ふ。かみやすり。

やすりーしげどう 矢摺重籐【名】星卷の上部のみを特に繁く卷きたる重籐。

やすりーどう 矢摺籐【名】矢摺二に卷きたる籐。

やすね 安井【名】江戸幕府の碁職四家の一。安井算哲の養子算知（舊姓藤中）を初祖とし、明治維新の後、第九世算英に至りて、藝統絶ゆ。

やすーね 野水【名】野を流るる水。野流。

やすねーこんぴらぐう 安井金毘羅宮【名】

やすねじんじや（安井神社）を見よ。

やすねーさんてつ 安井算哲・保井算哲【名】〔人〕碁職安井家の祖。河内國の人。安井忠右衞門宗順の第二子。六藏、又は吉次と稱し、幼より圍碁を善くし、十一歳の時、榊原式部大輔の推薦によりて德川家康に謁し、常に駿府に在勤して、碁局の相手を勤む。十九歳、剃髮して、算哲と號し、本因坊算砂・中村道碩・林門入等と共に、幕府碁所の一員となり、晩年、京都に在住し、毎年江戸に下りて、職を奉ず。子なかりしを以て、本因坊第二世の時、門人算知に讓りしが、後、子生れ、家、二つに分る。實子は、澁川助左衞門といひ、曆學家として著る。父の安井姓を稱し、子の澁川姓を稱するは、その祖先滿安、河内國澁川郡を領して、足利義滿に仕へ、滿安の孫光重、播磨國安井郡を領せしことあるに因る。慶安五年五月、京都に歿す。年六十三。

やすねーじんじや 安井神社【名】京都市下京區廣道通松原上ル三丁目下辨天町に鎭座せる神社。祭神は崇德天皇及び大國主神、なほ源頼政を合祀す。崇德天皇讓位の後、離宮の存せし地にして、扇後葛野郡安井村に移し、蓮華光院と稱せしが、元祿八年、安井村より遷し、新たに讚岐國象頭（ゾウズ）山の本社に模して、結構壯麗、俗に安井金毘羅宮と呼ぶ。

やすねーしゆんかい 安井春海・保井春海【名〕〔人〕しぶかはろくざう（澁川六藏）一に同じ。

やすねーそくけん 安井息軒【名〕〔人〕儒者。名は衡、通稱は仲平。日向國の人。發憤して、學に志し、大阪に赴きて、篠崎小竹に學び、江戸に出でて昌平黌に入り、又、松崎慊堂に經を質す。天保元年、飫肥（オビ）侯の藩學を創設するに際し、三十二歳にして、助教となり、又、藩政に參せしが、俗吏に阻まれ、七年辭して東上し、再び昌平黌に入り、文久二年昌平黌教授となる。明治維新後、彦根侯に聘せられ、尋いで飫肥侯に仕へ、九年、東京土手三番町の寓に歿す。年七十八。著す所、管子纂詁・左傳輯釋・論語集說・海防私議等あり。

やすねーにんぎやう 安井人形【名】〔人〕大和國奈良及びその附近にて、古代の土偶を模造して賣れる人形。法隆寺の瓦工安井彌兵衞の、同寺の塔中に安置せる埴土偶・泣人形、鳥佛師の作といふ古代の土偶などに模して製せしに創まるといふ。

やすねーはるみ 安井春海・保井春海【名〕〔人〕しぶかはろくざう（澁川六藏）一に同じ。

やすねーもんぜき 安井門跡【名〕れんげくわうゐん（蓮華光院）を見よ。

やせ 痩・瘠【名】痩すること、又、痩せてあること、又その人。西染野中の隱井「お前は、いかう痩が來た。心持でも惡いのか、但しは、何ぞ苦になるか」

やせ 八瀨矢瀨・矢背【名〕〔地〕山城國愛宕（オタギ）郡にある村。比叡山の西麓、修學院（シユガクイン）村の北隣にして、賀茂川の支流高野（タカノ）川に沿ひ、又、北は大原（オハラ）に接し、八瀨・大原と連稱せらる。京都市より近江國堅田等を經て、若狹・越前等に通ずる北國路の要衝に當る。村民、昔は禁中に出入して、駕輿丁を勤むる慣例ありき。

やーせい 野性【名】一疎野にして馴れ親しまぬ性質。二靜かなる田舍を愛する心。野心。

やーせい 野生【名】動植物の、自然に野に生ずること、又その動植物。

やーせい 野生【代】第一人稱の謙稱。小生。陋生。拙者。「同じ。

やーぜい 屋稅【名】かをくぜい（家屋稅）に同じ。

やせーうで 痩腕・瘠腕【名】一痩せて細き腕。ほそうで。二劣りたる腕まへ。微力。ほそうで。雪女五枚羽子板「大炊介が痩腕にて、赤沼父子を討たんとは、誠に蟷螂が斧なれば」

痩腕にも骨【名】「一寸（スン）の蟲にも五分の魂」に同じ。〔諺語〕

やせーうま 痩馬・瘠馬【名】一痩せ衰へたる馬。謠曲「鉢木」「勇みかねたる痩馬の、あら道おそや」二しらいごもち（白絲餅）に同じ。

痩馬に重荷【句】腕前に比べて、任務の重きに過ぐる譬。〔諺語〕

痩馬に十駄【句】前條に同じ。〔諺語〕

痩馬に針【句】「痩子（コヤセ）に蓮根」に同じ。〔諺語〕

痩馬の道急【句】心はせけども、効果の擧らぬ譬。〔諺語〕

痩馬、鞭を畏れず【句】『鹽鐵論に「痩馬不レ畏二鞭箠一、弊民不レ畏二刑法一」とあり』一苛酷に使役せられたる馬は、鞭うたれてもおそろしとは感ぜざるに至る。〔諺語〕二人は、苛酷なる取扱を受くる時は、自暴自棄に陷りて、何等の制裁をも意に介せざるに至る。〔諺語〕田舍壯子「痩馬、鞭を恐れずといふ諺あり、よくよく人情を知りて、人を使ふべし」

痩馬、鞭を驚かず【句】前條に同じ。〔諺語〕

やせーおとろふ 痩衰ふ・瘠衰ふ【動下二自】身體、痩せて衰弱す。

やせーおに 痩鬼・瘠鬼【名】一痩せたる鬼。二鬼を嘲りていふ語。諸藝太平記「數ならぬ痩鬼の癖として」

やせーが 痩我・瘠我【名】やせがまん（痩我慢）の略。丹波與作「そなたが親を殺させまいと、痩我を張って出來心」

やせーがくし 痩隱・瘠隱【名】だおひ（駄負）に同じ。

やせーがた 痩形・瘠形【名】次條に同じ。

やせーがたち 痩形・瘠形【名】痩せたる體格。やさがた。やせがた。

やせーがは 八瀨川【名〕〔地〕たかのがは（高野川）に同じ。夫木「八瀨川を瀨瀨の井堰にせきとめて水ひきかくる小野の苗代」「つら。

やせーがほ 痩顏【名】痩せたる顏。やせつ

やせーがます 痩梭魚・瘠梭魚【名】『梭魚の細長き形に譬へていへる語』痩せたる人を嘲りていふ語。

やせーがまん 痩我慢・瘠我慢【名】苦しきを强ひて忍ぶこと。まけをしみ。やせが。

やせーからめく 痩乾らめく・瘠乾らめく【動四自】次條に同じ。枕「受領などおと

なだたる人は、太き、いとよし。あまり痩せからめきたるは、心いられたらんと推し量らる」

やせ-かむ 瘠かむ・痩かむ【動四自】『かむはかがむ(屈む)の略』**やせおとろふ**(痩衰ふ)に同じ。〔古語〕 紀「痩、ヤセカミ」

やせ-がる 痩枯る・瘠枯る【動下二自】痩せて、干からぶ。著聞「白蟲の、身もなく痩枯れて」 砂石集 痩せがれたる法師……痩せがれたる小冠者」

や-せき 野蹟・野跡【名】小野道風の筆蹟。さんせき(三蹟)(一)参照。

やせ-ぎす 痩ぎす・瘠ぎす【名】身體の痩せて、やさしげなること。やさがた。

やせ-くび 痩首・痩首・瘠頸・痩頸【名】一痩せて細き首。かせくび。ほそくび。二他人の首を罵りていふ語。かせくび。ほそくび。

やせ-ご 痩子・瘠子【名】痩せたる子。痩せ衰へたる子。 太祇「いとほしい痩子の裾や衣がへ」

痩子に蓮根【句】『痩せ衰へたる子に蓮根(一)の發する義』「泣面に蜂」に同じ。〔諺語〕

痩子にも産神【句】一痩せ衰へたる子にも、これを守護する産土神(ウブガミ)あり。〔諺語〕二いかなる人にも、それぞれに保護者はあるものなり。〔諺語〕

痩子の酢好【句】「痩法師の酢好」に同じ。〔諺語〕

痩子の物を火蟲がせびる【句】「餓鬼の物を蟲がせびる」に同じ。〔諺語〕

やせ-とこ 痩こけ・瘠こけ【名】痩せこけてあること、又その人。

やせ-とける 痩せこける・瘠せこける【動下一自】甚しく痩す。やせおとろふ。やせさらぼふ。やせほそる。やせっこける。

やせ-ざむらひ 痩侍・瘠侍【名】一痩せたる武士。二身分卑き侍。生活ゆたかならぬ武士。かせざむらひ。 浦島年代記「痩侍と侮り」

やせ-さらぼふ 痩せさらぼふ・瘠せさらぼふ【動四自】痩せて、骨高くなる。やせこける。 宇治「物も食はずすごしたれば、影のやうに痩せさらぼひつつ」

やせ-じし 痩肉・瘠肉【名】痩せたる肉體。 俳諧新選(志音)「痩肉の寢心變る袷かな」

やせ-しんしやう 痩身上・瘠身上【名】次條に同じ。

やせ-しんだい 痩身代・瘠身代【名】次條に同じ。

やせ-じよたい 痩世帶・瘠世帶【名】ゆたかならぬ生活。かせじよたい。

やせ-ずね 痩臑・瘠臑【名】痩せたるすね。ほそずね。やせはぎ。ほそはぎ。 蕪村「痩臑の毛に微風あり衣がへ」

やせ-ずまひ 痩住居【名】見すぼらしき住居。 增補手習鑑「高が浪人の痩ずまひ、取卷くも、仰仰し」

やせ-だ 痩田・瘠田【名】地味の瘠せたる田。瘠地なる田地。

やせ-ち 痩地・瘠地【名】地味の瘠せたる土地。瘠土(ヤセツチ)の土地。

やせ-ぢから 痩力・瘠力【名】痩せ衰へたる力。 松風村雨東帰鑑「老ぼれの痩力」

や-せつ 夜雪【名】夜間の雪。

や-せつ 野拙【代】第一人稱の謙稱。拙者。小生。野生。

やせ-っこけ 痩っこけ・瘠っこけ【名】**やせこけ**(痩こけ)の音便。

やせ-っとける 痩せっこける・瘠せっこける【動下一自】**やせこける**(痩せこける)の音便。

やせ-つち 痩土・瘠地【名】作物に對する養分に乏しき土。瘠地の土。瘠土(ヤセツチ)。

やせ-っぽち 痩っぽち・瘠っぽち【名】『**やせほふし**(痩法師)の訛』身體の痩せてあること、又その人を嘲りていふ語。

やせ-つら 痩面・瘠面【名】**やせがほ**(痩顔)を罵りていふ語。

やせ-とくい 痩得意・瘠得意【名】買ふ金高の少き顧客。 手代氣質「私どもも、少しづつ物を取って、痩得意でござる」

やせ-どころ 痩處・瘠處【名】**やせち**(瘠地)に同じ。 紀「磽地、ヤセドコロ」

やせ-とほる 痩通る・瘠通る【動四自】身體の全部痩す。 新續古今「大原へ行くとはなしに戀すれば、痩せとほりぬるものにぞありける」

やせ-はぎ 痩脛・瘠脛【名】**やせずね**(痩臑)に同じ。 俳諧古選(乙人)「どう居ても痩脛寒しきりぎりす」

やせばたけ 痩畑【名】肥沃ならざる畑。

痩畑の鬼灯(ホホヅキヂヤウチン)【句】萎縮せる物の譬。 伊賀越道中雙六「見れば見る程、頃合(ヒロ)な好い女房、一人寐さすは殘念なれど、此方(ヒロ)も寒氣に閉ぢられ、痩畑の鬼灯で、あったら物を見逃す事」

やせ-ばむ 痩ばむ・瘠ばむ【動四自】痩せたる姿に見む。

やせ-ひぢ 瘠臂【名】瘠せたる臂。

瘠臂張って、肩を脱ぐ【句】次條を强めていふ語。

瘠臂を張る【句】瘠我慢をなす。

やせ-ほそる 痩細る・瘠細る【動四自】身體痩せて、細くなる。やせこまる。 源氏「こよなう痩せほそりたまへれど」

やせ-ぼち 痩ぼち・瘠ぼち【名】**やせっぽち**(痩っぽち)に同じ。

やせ-ぼったし 痩ぼったし・瘠ぼったし【形一】痩ばみてあり。

やせ-ほふし 痩法師・瘠法師【名】一痩せたる法師。二『**ほふし**(法師)は接尾語』**やせっぽち**(痩っぽち)に同じ。 紫の一本「その座にありし痩法師お梅といふが」

痩法師の酢好【句】『酢を飲めば、身體痩すといふによりていふ』自身に不利益となる事を爲す等の譬。 醒睡笑「痩法師の酢ごのみとは」

やせまなく【名】〔植〕**ぐんばいなづな**(軍配菎蒻)に同じ。〔室町時代の語〕

や-せん 野戰【名】野原にて戰ふこと、又その戰。平場(ヒラ)の戰。のがっせん。のいくさ。

や-せん 夜戰【名】夜戰ふこと、又その戰。

や-せん 矢錢【名】**ぐんようきん**(軍用金)に同じ。〔室町時代の語〕

や-せん 夜船【名】夜行く船。よふね。

や-ぜん 夜前【名】**ぜんや**(前夜)に同じ。

やせん-いうびん 野戰郵便【名】戰地に臨時に設置する郵便。

やせん-かわ 夜船閑話【名】〔書〕『洛東白河の山中に巖居せる人の語に託して記せるより、「白河(カシラ)夜船(ネブ)」の諺に基きて、名づけたるもの』坐禪にもとづく精神修養と長生の法とを說けるもの。一卷。白隱禪師の著。

やせん-ぐん 野戰軍【名】野戰に從事する總部隊。

やせんさく 矢穿鑿・矢詮索【名】中りたる矢の射手を穿鑿すること。 曾我會稽山「名乘・家名の印(シル)もなく、既に矢穿鑿に及ぶべっかりしを」

やせん-しゆはうしやう 野戰首砲廠【名】〔兵〕**やせんへいきほんしやう**(野戰兵器本廠)の舊稱。

やせん-たい 野戰隊【名】野戰に從事する〔兵〕**けいがさほほうへい**(繫駕徒步砲兵)を見よ。

やせん-ぢゆうはうへい 野戰重砲兵【名】〔兵〕野戰隊と兵站電信隊、もしくは普通の電信局との間に於て、通信事務を執行する軍隊。開設前には、輜重隊中に在りて行進す。

やせん-はう 野戰砲【名】〔兵〕『英 Field-artillery gun』野戰に使用する砲。主に野砲・野戰榴彈砲・山砲等を指し、輕量にして、運搬しやすきを、特性とするが故に、砲架は轉動砲架を用ひ、又、發射速度の大なるものを用ふ。近時、自動車にて運搬するものあり。

やせん-はうしやう 野戰砲廠【名】〔兵〕**やせんへいきしやう**(野戰兵器廠)の舊稱。

やせん-はうへい 野戰砲兵【名】〔兵〕專ら野戰に從事する砲兵、卽ち野戰砲を操縱する砲兵。現今は、これを野砲兵と山砲兵との二種に分ち、何れも、砲手と馭卒とより組織し、繫駕編成す。(重砲兵に對して)

やせんはうへい-かん 野戰砲兵監【名】陸軍教育總監部の職員の一。各野戰砲兵

闡體の教育上、本科・專門の事項に就きての齊一進歩の貴に任じ、又、野戰砲兵に關する事項を調査・研究・審議し、並びに、立案する事を掌り、且つ陸軍野戰砲兵射擊學校を管轄す。

やせんはうへいかんぶ 野戰砲兵監部【名】陸軍教育總監部の一部局。野戰砲兵監、これを統轄す。

やせんはうへいしやげきがくかう 野戰砲兵射擊學校【名】りくぐんやせんはうへいしやげきがくかう(陸軍野戰砲兵射擊學校)の略。

やせんびやうゐん 野戰病院【名】〔兵〕戰場に接して開設し、各繃帶所より、又は直接に戰線より來る傷病者を收容して、これを治療する所。常に戰鬪部隊の進退に伴なふ故に、その移轉に當り、殘留すべき傷病者ある時は、衞生豫備員を以て戰地定立病院を設け、その業務を擔當せしむ。

やせん-へいきしやう 野戰兵器廠【名】〔兵〕野戰に要する豫備兵器を貯へ、及び兵器の修理材料を整へ、これが補給・交換・修理を行ひ、又、戰線より後送し來れる兵器を修理する所。通常、兵站首地に設置す。舊稱、野戰砲廠。

やせん-へいきほんしやう 野戰兵器本廠【名】〔兵〕野戰に要する豫備兵器を貯へ、野戰兵器廠及び電信豫備廠に補給し、戰線より後送し來れる兵器の收容・整理に任ずる所。要塞內もしくば集積所の要地に設置す。舊稱、野戰首砲廠。

やせん-りうだんはう 野戰榴彈砲【名】〔兵〕野戰砲の一種。擲射を以て、防禦構造物に據る敵を射擊し、且つ間接射擊を容易ならしむるために、野戰に使用する榴彈砲。普通の野砲より威力優勢、而して、運動性は、野砲と大差なきを主とし、通常口徑十五サンチ內外のものを用ふ。

やせ-め 痩目・瘠目【名】塗物にて、生地(ナマ)の材の痩せおちて、木目(メ)の部分のみ高く殘り、表面に凹凸のあらはれてあること。きやせ。

やせめ 矢攻【名】矢を射かけて攻むること。吉野都女楠「矢せめにせよ」

やせ-やせ 痩痩・瘠瘠【貌】甚しく痩せたるさま。源氏「手つき、やせやせとして」

やせ-やぶ 痩藪・瘠藪【名】瘠地の藪。猿蓑千那「瘠藪や作倒(ツクリ)の軒の梅」

やせ-やま 痩山・瘠山【名】瘠地の山。

瘠山の雜木【句】極めて價値乏しき物事の譬。〔諺語〕

やせ-やまひ 痩病・瘠病【名】痩する病氣。東北院職人歌合「君ゆゑに心とつけるやせ病あはぬつぎめに灸治してみん」

やせ-らうにん 痩浪人・瘠浪人【名】一痩せたる浪人。すからにん。曾我會稽山「あら仰仰し、痩浪人一人か二人討たんとて」二生活のゆたかならぬ浪人。

やせ-をとこ 痩男・瘠男【名】一痩せたる男。二能樂の假面(ノ)の一。男物にて、「定家(カテイ)」・「砧(クヌギ)」などの曲に用ふ。俳諧新選(凡董)「後仕手(ノチテ)の面(オモテ)や月の瘠男」

やそ 野蔬【名】やさい(野菜)に同じ。

やそ 耶蘇(希伯來語 Yēshū'n 羅 Jesus の訛)【名】〔人〕『救主の義。耶蘇は、支那音にて「エス」』きりすと(基督)に同じ。

やそ 八十【數】一十の八倍。はちじふ。やそぢ。二多くの數。やそぢ。萬葉「天の川河門(カハ)八十ありいづくにか君が御舟をわが待ちをらむ」

やそ 野叟【名】田野に住めるおやぢ。村老。野翁。盛衰記「邑老村女・漁人・野叟參り集まり」

やそう 野僧【名】田舍の僧。

やそう 野僧【代】『前條の語の轉義』僧の第一人稱の謙稱。拙僧。拙衲。貧道。

やぞう【名】『やぞう(彌藏)參照』はすば(蓮葉)[1]を云ふ。〔遠江國の方言〕

やそうぢ 八十氏【名】多くの氏族。忠見集「八十氏の戴く山の雲なれば久しけれどもまづは頼もし」

やそうぢ-びと 八十氏人【名】八十氏の人人。多くの氏人。萬葉「ものの ふのやそ氏人も吉野川絶ゆることなく仕へつつ見む」源氏「かざしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを」

やそ-か 八十楫・八十檝【名】多くの楫。〔古語〕萬葉「難波津にみ船おろすゑやそか貫(ス)き今は漕ぎぬと妹に告げこそ」

やそ-か 八十日【名】一日數八十。二多くの日數。やそかび。

八十日行く【句】行くに、八十日ほどの多くの日數を要す。〔古語〕「八百日(ヤホカ)行く」參照。白河殿七百首「八十日ゆく濱の眞砂路(ヤソヂ)はるばると限知られずつもる白雪」

やそかげ 八十陰【名】多くの日陰。紀「わが大君の隱りますあまの八十陰」

やそ-かしはで 八十膳夫【名】多くの膳夫。記「八十建(ヤソタケル)に宛てて、八十膳夫を設(マ)けて、人ごとに刀(タチ)佩けて」

やそ-かは 八十川【名】幾筋にも分れて流るる川。丹波與作「日本一の大井川、發子(ヤ)に無(ス)の字を打出せば、水の出ばなの八十川の、島田・金谷(カナヤ)に二日のよごみ」

やそか-び 八十日日【名】やそか(八日)に同じ。祝詞(國造神壽)「八十日日は在れども、今日(フ)の生日(イク)の足日(タル)に」

やそ-がみ 八十神【名】多くの神。ももやそがみ。記「この大國主の神の兄弟(ミナオ)、八十神坐(マ)しき。……、その八十神、各、稻羽の八上比賣(ヒメカミ)を婚(ヨ)ばはむの心ありて」

やそ-きりすけう 耶蘇舊教【名】〔基〕きりすけう(舊教)に同じ。

やそ-くに 八十國【名】多くの國。祝詞「國の八十國、島の八十島を生みたまひ」萬葉「八十國は難波につどひ船飾(ヤナカ)あがせむ日ろを見も人もがも」

やそ-くま 八十隈【名】多くの隈(クマ)。ももくま。萬葉「船浮けてわが行く河の河隈(クマ)の八十阿(クマ)落ちず」同「この道の八十隈ごとによろづたびかへりみすれどいやとほに里はさかりぬ」

やそ-くまで 八十隅手【名】『て(手)はぢ(路)の轉』八十隈を經て行く道。遠隔の地。〔古語〕記「僕(ア)は、百(モモ)足らず八十墹手(ヤソデク)に隱りて侍(サブ)ひなむ」紀「百不足八十隈(隈、此云二毎磨湟一)、モモタラズヤソクマデ」

やそ-けう 耶蘇教【名】〔宗〕きりすけう(基督教)に同じ。

やそ-さか 八十坂【名】「八十路(チヌ)の坂」に同じ。落葉「やそ坂を越えよと切れる杖なれば突きてを登れ位山にも」

やそ-さと 八十里【名】多くの里數。續後紀「八十里なす城(キ)に芥子拾ふ天人はたうだきて拾はずなりぬ」

やそ-しま 八十島【名】一多くの島。祝詞(鎭火祭)「國の八十國(クニ)、島の八十島を生みたまひ」萬葉「ももくさの道は來にしを又更に八十島過ぎて別れか行かむ」二地名。攝津國東成(ナリ)郡の一部の古稱。住吉神社の西北にて、玉津島(シマ)又は磐出森(モリ)に同じといふ。古、八十島祭を行ひし處。元眞集「八十島の浦の渚に數へつつとまれる年もあまた經ぬべし」三やそしまつり(八十島祭)の略。台記「八十島、大納言典侍(卽乳母參議淸隆女)出京」

やそしまつり 八十島の神祭【句】やそしまつり(八十島祭)に同じ。延喜式「八十島神祭(中宮淮レ之)」

やそしまの使 八十島の使【句】「八十島の祭の使」に同じ。續世繼「今は乳母(メノト)にて、八十島の使などせられければ」

やそしまの祭 八十島の祭【句】やそしまつり(八十島祭)に同じ。

やそしまの祭の使 八十島の祭の使【句】古、八十島祭(ヤソシマツリ)に、朝廷より遣されし使者。御乳母たる典侍、これに補せらるるを例としたり。八十島の使。續古今「八十島の祭の使承りて侍りけるに」

やそしまくだり 八十島下【名】古、八十島祭(ヤソシマツリ)の使となりて、朝廷より難波に遣されしこと。平治「紀伊の二位と申すは、紀伊守範元が孫右馬頭範國が娘なり。八十島下に三位に敍し」

やそしままつり 八十島祭【名】『祈年祭の祝詞に「皇神(スメガミ)の敷きます島の八十

島」とある八十島、即ち諸の島島の神を祀る意なりといふ。古、天皇即位の時、使を攝津國難波に遣して、住吉神・大依羅(オホヨサミ)神・海(ワタツ)神・垂水(タルミ)神・住道(スミノ)神を祀り、國土生成の神恩を謝し、皇威の洽からんことを祈りたまひしこと。史上に傳はれるは、文徳天皇の嘉祥三年九月のを初とし、後には、祓(ハラヒ)の式を主とするが如くなるに至れり。勅使は、宮主(ミヤ)あり、典侍あり、御巫(ミカ)あり、琴師あり、神祇官と内藏寮(クラノツカサ)との官人等、これに從ひ、中にも、典侍は、天皇の御衣を奉ずるを以て、その任甚だ重く、副車(ソヒグルマ)、ために警蹕を稱し、その近親の者の相共に下るもの、甚だ多し。又、祭に先だち、山城國に符を下して蠟せしめたる船に乘せて發せしめ、攝津國に對しては、祭場の鋪設を命じ、使の一行到著の上は、宮主、國司をして、壇を作らしめ、祭物を置き、女官・藏人寮の官人等、御衣の案を、宮主の前に立て、典侍の車等は、宮主の座の東方に、中宮・東宮の屬以下は、更にその東方の座に列し、設備了れば、神祇官御琴を彈じ、女官、御衣の筥を披きて、これを振ひ、次に中宮の御料、次に東宮の御料の順序にて、同じくこれを振ひ、宮主、膝突に著き、御麻を捧げて、祓を修し、祭物を海に投じ、事了れば、祭使、衆を率ゐて、京に歸りぬ。鎌倉時代までは續行せしかど、後、廢絶せり。

やそしま-まうで 八十島詣【名】古、八十島祭の使に任ぜられて、住吉社などに參詣せしこと。長方集「紀伊二位、八十島詣に、住吉にて」

やそしま-めぐり 八十島巡【名】一多くの島をめぐりあるくこと。堀杰「久方の月を遙かに眺むれば八十島めぐり見る心地する」二「八十島祭は、我國の島島を巡回するに代へて、難波にて行ひしものなるよりいふなるべし」**やそしまうで**(八十島詣)に同じ。月詣集「法皇の御時、八十島めぐりに住吉にて詠める」

やそ-しゆう 耶蘇宗【名】〔宗〕**きりすとけう**(基督教)に同じ。

やそ-せ 八十瀬【名】多くの瀬。萬葉「天の川八十瀬きらひぬ彦星の時待つ舟は今し漕ぐらし」

やそ-たける 八十梟師【名】多くの梟師(ムナケル)。多くの賊徒の首魁。紀「尾生(ナ)る土雲(クグモ)八十建(ヤソタケル)、その室(ムロ)に在りて」記「八十梟師(梟師、此云二多稽一屢)」同「熊襲八十梟師クマソノヤソタケル」

やそ-たまぐし 八十玉籤【名】多くの玉籤。記「五百箇眞坂樹八十玉籤、イホツマサカキノヤソタマグシ」

やそ-ぢ 八十路・八十【名】『次條の語の轉義。路は假借の文字』年齢の積り積りて八十歳に至るを、坂路を上りゆくに譬へていふ語。やそさか。新和歌集「西の山八十ぢの坂は高くともなほ登るべき峰ぞ遙けき」

「十」に同じ。

やそ-ぢ 八十【數】『ぢは接尾語』**やそ**(八)

やそ-つな 八十綱【名】極めて長き綱。祝詞(新年祭)「遠き國は、八十綱掛けて引き寄する事の如く」

やそ-ともの-を 八十伴緒【名】**ともをと**(伴緒)を見よ。祝詞(大祓)「伴男の八十伴男を始めて、官官(ツカサツカサ)に仕へまつる人たち」

やそ-の-いはばし 八十石階【名】〔地〕播磨國印南(イナミ)郡東神吉(カンガミ)村大字升田にある古蹟。里俗、陰陽二神及び八十二神降臨の地と稱す。加古川町より、川を隔てて、僅かに八町にして、麓より西南方へ登ること二町、一山の石、自ら階段を成し、その數八十、殆ど人工に成れるものの如く、山頂は、眺望甚だ佳にして、淡路島・摩耶山等見渡さる。夫木「雪降れば天の羽衣白たへに風さへ渡る八十の石橋」

やそ-は 八十葉【名】葉の、繁く生えてあること。又、**や**は箭の義にて、そばの木を、その皮の箭に似たるにつきていふ語なりともいふ。〔古語〕紀「川くまに立榮ゆる百足らずやそは木は」

やそ-ばうず 耶蘇坊主【名】耶蘇教の牧

師・宣教師などを罵りていふ語。

やそ-ひらか 八十平瓮【名】多くのひらか。〔古語〕

天の八十平瓮【句】神代に用ひし多くのひらか。〔古語〕記「櫛八玉(クシヤタ)の神、鵜に化(ナ)りて、海(ワタ)の底に入りて、底のはにを咋(ヒ)出でて、天の八十ひらかを作りて」

やそまがつひ-の-かみ 八十禍津日神【名】『**やそ**(八十)は多數の義とも、美稱ならんともいふ。**つ**は領格の助辭、**ひ**は異靈の義』伊弉諾(イザナギ)尊、黄泉より歸り來たまひて、日向國の橘小門(ツクシノヒムカノ)の檍原(アハギハラ)に祓(ハラヒ)せられし時、大禍津日(オホマガツヒ)神と共に成り出でたりといふ神。

やそ-め 【名】鯛の脊鰭の一部。

やそ-やま 八十山【名】多くの山。題季集「ほととぎす八十山までに尋ね來てただ一聲は聞くべきものか」

やそ-よろづ 八十萬【數】極めて多き數。やほよろづ。紀「八十諸神、ヤソヨロヅノカミ」

やた 八咫【名】**やたがが**(八咫鏡)・**やたが**

「**らす**(八咫烏)を見よ。

八咫の鏡【句】**やたかがみ**(八咫鏡)に同じ。風雅「岩戸あけし八咫の鏡の山かづらかけて現しき明けき世は」

八咫の烏【句】**やたがらす**(八咫烏)に同じ。素性集「島の鴨、八咫の烏を題にて、歌奉れと仰せらるれば」

やだ 【名】『嫌(イヤ)だの義か』氣質に一種の癖ありて、從順ならぬこと。かだ。生玉心中「日頃やだのあるこの嘉平次、さぞ逃げた、走ったと、評判でござらう」

やたい 屋臺・屋體【名】一屋根あり、形、家の如くにて、小く、物を載せて賣りあるき、又は祭禮の練物(ネリモノ)として用ふる物。二**をざりやたい**(踊屋臺)の略。若風俗「しら聲にて唄ひ出して、家體の御簾を明けての面影」三能樂・演劇・踊などにて、家に擬するに用ふる道具。四小き粗末なる家を嘲りていふ語。五**やたいぼね**(屋臺骨)の略。枳斐麒本地「公家(クゲ)でも、御所でも、蹈んで、屋臺共に、馬足に掛け、微塵

にするが」

やだい 矢代【名】弓の勝負の時、射手を分ちて二組とするため、先づ射手より一本づつの矢を差し出さしめ、それを、二本づつ、手に取りて、交叉するやうに振り落し、下になりたる矢と上に重なりたる矢とによりて、全員を二組に編成すること。矢代を振る【句】矢代の方法によりて、射手の全員を二組に分つ。四季草「矢代を振りて、上矢の射手、下矢の射手、相手となり」

やだい 矢臺【名】矢を立ておく臺。西宮記「射場初事、御座南立二同机一、其南立二御弓臺(二張)一、其東立二御矢臺一」

やだい 夜臺【名】はかあな。壙穴。墳墓。夜臺の客となる【句】死ぬ。不歸の客となる。鶉衣「贈佐屋洗耳序」「古稀に四つを添へて、つひに夜臺の客となんぬ」

やだいく 家大工【名】家屋の建築に從事する大工。(船大工などに對して)

やだいく 矢大工【名】『矢者(ヤヒト)の大工の義』江戸時代に、幕府の命を受けて、拷問首の臺木の製造に從事せし大工。

やだいじん 矢大神・矢大臣【名】一隨身門に安置せる像の、左方のもの。(左大臣に對して)二その委、前項の像に似たるよりいふ』居酒屋にて、その空樽に腰を掛けて、居酒を飲むこと。和合人「隨身門の外には矢大臣の集會絶えず」

やだいじん-もん 矢大臣門【名】**ずゐじんもん**(隨身門)に同じ。

やたい-ばやし 屋臺囃子・家臺囃子【名】**ばかばやし**(馬鹿囃子)に同じ。俗曲初(戀千種の濫觴)「大川へ、家臺囃の大茶船(オホチヤブネ)、囃子(ハヤシ)に連れて」

やたい-びき 屋臺引・屋體引【名】宮殿・樓閣など、すべて家屋を畫くに、定木を用ひてすること。

やたい-ぼね 屋臺骨・家臺骨・屋體骨・家體骨【名】一屋臺(一)の骨組、即ちその建築の材料。やたい。二家屋の建築に用ひたる材料、又その建築の精粗。やたい。續膝栗毛「家體骨はがうてきだが、をさまら

ねえ内だの」 ㊁その家を支持する物事、即ちその財産など。やたい。

やたい-みせ 屋臺店・屋體店【名】とこみせ（床店）に同じ。

やたう 夜盗【名】夜、物を盗むこと、又それをなす人。よたう。 俳諧新選（宋屋）「夜盗にも天の與やほととぎす」

やたう 野黨【名】現在、内閣を組織してあらぬ政黨。民黨。（與黨に對して）

やたうなに 矢だうなに【副】矢を射ても、効なき故に。無駄に。徒に矢を費すに過ぎざれば。 保元「已ほどの者をば、矢だうなに手取にせん」 太平記「敵の馬の立様、旌の紋、京家の人と覺ゆるぞ。矢だうなに、遠矢な射そ、只拔連れてかかれ」

やたうま やだ馬【名】一種の悪癖ありて、從順ならぬ馬。 雜兵物語「總じて、喰物に念を入れて、さぞうまくはあんべいけれども、頑馬（ヤタウマ）になるが、さぞ迷惑だんべい」

やた-かがみ 八咫鏡・八尺鏡【名】「やた」は、多くの端（タ）の義にて、背面の中央なる紐座（ヒモ）から緣に至るまでの模様に、多くの紋帶ある、精巧なる鏡なりといふ。「やた」は八端又は八頭（タナア）の略にて、八花形（ヤツガタ）の鏡なりとの説もあれど、考古學の研究に依れば、古代の鏡は、一般に圓形なれば、その説は當らず、又咫（アタ）を長さの單位なりとし、彌咫（タ）即ち咫に餘れる大なる鏡なりといひ、或は、直徑八寸ほどの鏡なりといふ説もありて、天照大神（アマテラス）より皇孫瓊瓊杵（キニ）尊に傳へたまひて、三種の神器の一となれるは、延喜式及び儀式帳に、御樋代（ハヒロ）の内徑一尺六寸三分とあれば、ほぼ一尺ほどの大さなるべしと推測せらる。やたのかがみ。 古語拾遺 記「天香久山（アメノカグヤマ）の五百（ホイ）つ眞賢木（サカキ）を根こじにこじて、……中つ枝（エ）に、八尺鏡を取繫（カケ）け」 紀「八咫鏡、ヤタカガミ」

やたーがらす 八咫烏【名】神武天皇の東征の時、天照大神より遣され、熊野より大和國への進軍を導きたりといふ烏。「や」は八翅（ヤハ）にて、「はた」は、魚の鰭（ハタ）、衣服の端袖（ソハタ）などの「はた」と同義なる上、古事記の序文にも、「大烏導二吉野一」と見えたれば、大なる烏の意なるべしといふ。又、「やた」は八頭（ヤタア）にて、頭の八つある烏なりとも、日本書紀に「頭八咫」と書きてあれば、全體の大さを、頭部の寸法にて示したるにて、大なる烏の意なりともいふ。やたのからす。 古語 記「今、天（アメ）より八咫烏を遣（コヤ）せむ。故（カレ）、その八咫烏道引きてむ。その立たむ後（ノチ）より幸行（イデ）ますべし」 紀「頭八咫烏、ヤタガラス」 ㊁三足の烏。 古語 和名「陽烏。曆天記云、日中有二三足烏一、赤色（今按、文選謂二之陽烏一、日本紀謂二之頭八咫烏一、楊氏私記云、夜太加良須）」 ㊂うぎ

やうざう（烏形幢）に同じ。 讃岐典侍日記「御即位……例のやた烏、見も知らぬ物ども」

やたく 野澤【名】（佛）次條を見よ。

野澤十二流【句】（佛）『「小野（ヲノ）の六流」と「廣澤（ヒロサハ）の六流」とを見よ』「眞言（シンゴン）の十二流」に同じ。

野澤の二流【句】（佛）前條に同じ。

やたけ や嶽【名】たけ（嶽）に同じといふ。 古語 六百番歌合「わが戀のやたけの雉子（キギス）心せよ通ふ裾野も人あさるなり」 蕉隱草「やたけ（みねなり。たけとも讀めり）」

やたけ 矢丈【名】やごろ（矢頃）に同じ。

やだけ 矢竹・箭竹【名】㊀やがら（矢柄）に同じ。 ㊁（植）禾本（ホクン）科に屬する植物。竹類の一。我國、所所に生じ、高さ二丈内外に達し、地上莖は中空にして、節間一二尺に及ぶ。葉は互生し、披針形にして、長さ四寸五分乃至一尺ほど。籜（タケ）は、綠色にして、毛あり。莖は矢の箆（ノ）に製し、又は編みて、笊などを造るに用ふ。

やたけ-ごころ 彌猛心・矢長心【名】『矢長は假借の文字』いよいよ猛り勇む心。 謠曲（八島）「智者は惑はず、勇者は畏れずのやたけ心の梓弓」

やたけ-に 彌猛に・矢長に【副】『矢長は假借の文字』いよいよ猛り勇みて。 太平記「岸高うして切り立てたれば、矢長に思へども、昇り得ず」 傾城反魂香「某、やたけに思うても、師の命は力なし」

やたこ 【名】やつこ（奴）に同じといふ。 古語 萬葉「八多籠等（コラ）が夜盡といはず行く道を吾はことごと宮路にぞする」（「八多籠」は「はたご」と訓みて、旅籠馬を引く人をいふとの説、又、「等」は「馬」の字の誤寫にて、「はたごうま」と訓むべしとの説もあり）

やた-じんじや 矢田神社【名】大和國生駒（イコマ）郡矢田村に鎮座せる神社。式内の古社にて、矢田部氏の祖を祀る。

やたち 家建【名】家の建方。建築の狀態。 鳩翁道話「つくづくと足場を見るに、忍び込むるは究竟（ヤツツキ）の家だち」

やた-ぢざう 矢田地藏【名】矢田寺の本尊なる地藏菩薩。

やたぢざう-えんぎ-えまき 矢田地藏緣起繪卷【名】矢田寺㊀の本尊なる地藏尊の因緣・靈驗を記せる繪卷物。同種のもの、二三に止まらねども、最も世に知られたるは、京都矢田寺所藏の二卷本にして、繪は春日隆兼の筆、詞書は世尊寺殿（行房卿か）と傳へ、明治三十二年、國寶に指定せらる。その矢田寺の有に歸せしは、明治維新後なるべしといふ。

やたぢざうそんざう-えんぎ 矢田地藏尊像緣起【名】前條に同じ。

やたて 矢立【名】㊀「矢立の硯」の略。 盛養記「時忠の卿は、……、懷中より矢立・墨筆取り出し、所司を招き、硯に水入れ」 ㊁木又は金屬などにて、小き墨壺と、筆を入るる筒との連結したるものを造り、帶に差し込みて携帶する具。 狂言（文山だち）「某（ガシ）は、これに矢立を持っておぢやる。したらば、それで書かせませ」

矢立の硯【句】古、陣中にて、箙などの中に藏めて携帶せし、小き硯箱。やたて。 盛養記「矢立の硯を取り寄せて」

やたて-がひ 矢立貝【名】（動）腹足類に屬する軟體動物。我國、南海に多く產し、殼は長紡錘形にして、灰白色に白斑あり、長き一寸四五分に達す。

やた-でら 矢田寺【名】㊀こんがうせんじ（金剛山寺）㊁に同じ。 ㊁京都市上京區寺町三條上る天性寺前町にある淨土宗西山派の寺。本尊は地藏菩薩。大和國の金剛山寺を寫せるものにして、初は建仁寺禪居庵に屬したり。

やた-ぬ 矢田野【名】（地）大和國生駒（イコマ）郡矢田村の邊にありし野。富小川（トミガハ）の西にて、もと、添下（ソフノ）郡に屬し、矢田の池・矢田神社・矢田寺など、その附近に在りたり。

やたね 矢種【名】㊀射るために、箙（ヤナビ）などに盛りて、身に帶びたる矢。 保元「矢種あるほど射盡して、家に火をかけて」 ㊁や（矢）に同じ。 鎌田兵衛名所盞「飛び來る矢だねを受流し」

やたの-かがみ 八咫鏡・八尺鏡【名】やた-かがみ（八咫鏡）に同じ。

やたの-の 矢田野【名】（地）所在地、詳かならず。 猿蓑（凡兆）「矢田の野や浦のなぐれに鳴く千鳥」

やたばね 矢束・矢把【名】箙（ヤナビ）などに盛りたる矢を束ねおくに用ふるもの。やしばり。 盛養記「矢たばね解き、弓の弦しめして用心せり」

やたび 八度【副】㊀はちど。八回。 ㊁あまたたび。 新勅撰「霜八たびおけど緣の柳葉にゆふして掛けて世を祈るかな」

やたべ 八部【名】（地）攝津國の舊郡の一。同國の西端に位す。明治二十九年、廢せられて、一部は神戸市に、他は武庫（コ）郡の一部となり、今は、大部分神戸市に入り、他は須磨町の一部たり。

やたま 八田間【名】『やたはやつ（八）のつの、やの韻に引かれて、轉ぜしものなるべしといふ』家の廣大にして、多くの室を有すること、又その家とも、家の柱と柱とのへだたりの大なること、又その家ともいふ。 古語 記「家に率（ヰ）て入りて、八田間の大室（ムロ）に喚び入れて」

やたま 矢玉【名】矢と彈丸と。

やたんす 矢簞笥【名】昔、矢を入れおくに用ひし簞笥。

やだもの やだ者【名】『やだを見よ』氣質に一癖ありて、從順ならぬ人。

やたら 矢鱈【副】**やたらに**(矢鱈に)に同じ。膝栗毛「やたら、そんな事をして詰るものかえ」

やたらう 矢太郎【名】射術の競爭の時、射手の上に立ちて、矢の支配をなす者。これに次ぎて輔佐する者を、矢次郎といふ。**ゆみたらう**(弓太郎)參照。「同なるもの。

やたら-じま 矢鱈縞【名】織物の縞の不

やたら-づけ 矢鱈漬【名】種種の野菜を、手あたり次第に交ぜて漬けたる漬物。

やたら-と 矢鱈と【副】次條に同じ。浮世床「今、この小僧がうたった唄は、やたらと流行るが」

やたら-に 矢鱈に【副】『次條の語』より出でたる語といふ。順序も規律もなく、手あたり次第に。むやみに。むしやうに。むちやくちやに。やたらと。やたら。浮世風呂「やたらに使ふ」一茶「茶鳴子のやたらに鳴るや春霞」

やたら-びやうし 矢鱈拍手【名】一音樂にて、一定の律動なくして、只早く鳴らす拍子なりとも、五拍子の内の樂拍子をつづめたるものともいふ。「八多羅拍子」體源抄「八多羅拍子」の革を附けたる行縢(ハバキ)なりといへど、確かならず。二鞍の當る所に、別

やたら-むしやうに 矢鱈無性に【副】**やたら**(矢鱈に)を强めていふ語。やたらめっぽふに。めったやたらに。

やたら-めっぽふに 矢鱈滅法に【副】前條に同じ。

やち 屋地【名】**やしきち**(屋敷地)に同じ。砂石集「屋地を賣りて、用途の五六十貫が程ありける」

やち 谷地・野地【名】谷(ヤ)にてある土地。續猿蓑(公羽)「そのかみは谷地なりけらし小夜砧」

やち 野致【名】**やしゆ**(野趣)に同じ。

やち 八千【數】一千の八倍。はつせん。二極めて多くの數。(名詞に冠らせて用ふ)

やちうど 【名】〔植〕さはをぐるま(澤小車)に同じ。

やぢ-うま 彌次馬【名】『やぢ(彌次)は宛字』一馴しがたき馬なるべしとも、牡の馬なるべしともいふ。松の葉「日本一のやぢ馬かたらば、なほ善かろ」二關係なき事に對し、傍觀しながら、無責任に騷ぎ立つること、又その人。

やち-がや やち茅【名】〔植〕**ぬまがや**(沼茅)に同じ。

やち-くさ 八千種【名】多くの種類。やそくさ。ちぐさ。萬葉「春のはじめは八千くさに花咲きにほひ」

やち-しね 八千稻【名】多くの稻。祝詞(大忌祭)「初穗(ホツ)は、汁にも、顯(ウツ)にも、千(チ)しね・八千しねに引居(ヒエ)ゑて」

やち-しほ 八千入【名】『しほ(入)を見よ』幾度も染むること。ちしほ。後拾遺「色深き袖の袂にならふらし千しほ八千しほ染むるもみぢ葉」「に同じ。

やち-ぜり やち芹【名】〔植〕**のだけ**(前胡)

やち-たび 八千度【名】多くの度數。あまたたび。ちたび。古今「さきだちぬ悔の八千度悲しきは流るる水の歸り來ぬなり」

やち-だも 【名】〔植〕木犀科に屬する落葉喬木。我國、北海道の濕地に自生し、高さ七八丈に達し、樹皮は、黃ばみたる赭黑色を呈し、深き裂目あり。葉は、對生し、奇數羽狀複葉にして、通常、長楕圓形にして無柄なる九個の小葉より成りて、長さ一尺二三寸に達し、黃色の小花を著け、總狀に排列せる翅果を結ぶ。おほばとねりこ。

やち-とせ 八千歲【名】極めて多くの年。やちよ。萬葉「八千とせに生(ア)れつがしつつ天の下知らしめさむと」

やちとせ-つばき 八千歲椿【名】**だいちん**(大椿)一に同じ。夫木「君が代はからくれなゐの深き色に八千とせ椿もみぢする「き(榛木)に同じ。

やち-はんのき やち榛樹【名】〔植〕**はんの**

やち-また 八衢【名】多く分岐せるちまた。萬葉「橘の蔭踏む道の八ちまたに物をぞ思ふ妹にあはずて」

やちん 家賃【名】借家人の家主に拂ふ料金。たなちん。やどちん。若鳳會「屋賃・銘(ネ)の利の算用ばかりして」「じ。

やちやう 野帳【名】**のちやう**(野帳)に同

やぢやう 野嬢【名】ゐなかの娘。村嬢。

やぢやう 野釀【名】**そんしゆ**(村酒)に同じ。「だ。よる。

やちゆう 夜中【名】夜のうち。夜のあひ

やちよ 八千代【名】極めて多くの年代。やちとせ。古今「鹽の山差出(サシ)の磯にすむ千鳥君が御代をばやちよとぞ鳴く」八千代の玉椿【句】**やちとせつばき**(八千歲椿)に同じ。太功記「胸は八千代の玉椿」

やち-よ 八千夜【名】極めて多くの夜。伊勢「秋の夜の千夜をひと夜になずらへて八千夜し寢ばや飽く時のあらん」「じ。

やちよ 野猪【名】〔動〕**ゐのしし**(猪)に同野猪にして、介する者【句】『介は甲(ヨロヒ)の義』**ゐのししむしや**(猪武者)に同じ。

やちよ-ぐさ 八千代草【名】〔植〕**きみかげさう**(君影草)に同じ。「同じ。

やちよ-さう 八千代草【名】〔植〕前條に

やちよ-ひら 八千代平【名】本練絹なる、一種の袴地。

やちよ-りう 八千代流【名】京都に行はるる、踊の一流派。大内の狂言師より出でしものと稱し、東京の藤間(フヂ)・花柳(ハナヤギ)の二派と同樣、京都の花柳界の踊は、この派の手中に在り、毎年の都踊の振袖(フリソデ)も、すべてその掌る所なり。

やつ 八【數】『つは接尾語』一七つより一つ多く、九つより一つ少き數。やっつ。はち。二生れてより七年以上八年以下を經たる年齡。八歲。やっつ。八の功德(クドク)の池【句】〔佛〕**はちくどくち**(八功德池)に同じ。夫木「いつか見ん八の功德の池に咲く四色の蓮(ハチス)清き光を」

八の岩壺(ヰイボ)【句】神樂を奏する時、數多の石の壺を並べ、その上に板を敷き、これを蹈み鳴らすもの。神代の昔、天照大神の天(ア)の石窟(イ)に隱れたまひし時の天鈿女(アメノウズメ)命の故事に擬すといふ。新後撰「榊もて八の岩つぼ蹈み鳴らし君をぞ祈る宇治の宮人」

八の苦【句】〔佛〕**はっく**(八苦)に同じ。謠曲春榮「人間界に生るれば、八の苦離れず」

やつ 谷【名】『やち(谷地)の轉か』たに(谷)を云ふ。「相摸國鎌倉及び上總國の方言」十六夜「忍音(シノビネ)は比企のやつなるほととぎす雲ゐに高くいつか名のらん」春曲(奥話情浮名横櫛)「江戸の親にも勘當受け、住所なく、鎌倉の谷七郷(ガウ)を喰ひつめても」

やつ 八【名】**やつざき**(八時)の略。やっつ。

やつ 奴【名】『やつこ(奴)の略』一人又は鳥獸を罵りて呼ぶ語。竹取「かぐや姫てふ大盜人のやつ」源氏「狐は、さこそは人をおびやかせど、ことにもあらぬやつ」二物事を卑しめて指すに用ふる語。「世間によくあるやつさ」

やづ 八頭【名】〔地〕因幡國舊郡の一。明治二十九年、八上(ヤカミ)・八東(ハツカ)・智頭(チヅ)の三郡を合はせて置きしものにて、郡役所を賀茂村に置く。

やつ 奴【代】『前條の語の轉義』第三人稱の卑稱。あやつ。あいつ。やつこ。やっこ。字治「やつも斬りけれども」

やっ 【感】一掛聲又は囃言葉に用ふる聲。二呼ばれたるに應ふる聲。「土佐國・越前國の方言」

やつ-あし 八足【名】一鳥獸などの、不具にして、足の八本あること。二器物の、足の八本あること、又その器物。三次條の略。

八足の机【句】足の八本なる机。神供(クウ)を載するに用ふ。やつあし。はっそく。

八足の門【句】本柱(ホンバシラ)の外に控柱(ヒカシラ)の八本ある門。東鑑「鶴岳宮寺廻廊・八足門」

やつ-あたり 八當【名】不平・不滿の心あ

りて、その事に關係なき人人に對して、怒を遷すこと。

やつ-いり 八入【名】木綿の縞物などを織るに、經(タテ)絲を、一本づつ別別の綜統(ヘドサ)に通し、その四本づつを筬(オサ)一羽に引き込むこと。やへいり。

やついり-がすいりふたこ 八入瓦斯入雙子【名】八入縞なる瓦斯雙子。

やついり-じま 八入縞【名】八入の織り方に依れる縞木綿。

やつ-いれ 八入【名】器物の、八箇入子(イレコ)にしたること、又その器物。庭訓往來「八入盆」

やついろ-ぐさ 八色草【名】〔植〕**やつしろさう**(八さう)(八代草)に同じ。

やつ-うめ 八梅【名】〔植〕**やつぶさうめ**(八房梅)に同じ。

やつ-つか 八束・八拳【名】『助數詞つか(束)』を見よ。たけの長きこと。とつか。記「天(アメ)の新集(ニヒ)の凝烟(ケブリ)の八拳(ヤツカ)垂るまで燒(タ)擧げ」

やつか 八束【名】〔地〕出雲國六郡の一。明治二十九年、島根・意宇(オウ)・秋鹿(カイ)の三郡を合はせて置きしもの。郡役所を松江市に置きたり。

やづか 矢束【名】矢の長さ。**そく**(束)四參照。今昔「弓を、箭づかの有るかぎり引きたまひて、箭を放ちたれば」平家「これは、箙(ヤナグヒ)が弱く候ふ。矢束もすこし短く候へば」

矢束を長く引く【句】矢をつがひて、弓をなるべく幅廣く引く。盛衰記「嫡子伊豆守仲綱は、……、甲(カブト)を著ざりけり。矢束を長く引かんとなり」

矢束を引く【句】箙(ヤナグヒ)の長さを引く。保元「爲朝、……、弓手(ユミテ)のかひな、馬手(メテ)に四寸延びて、矢束を引くこと、世に超えたり」

やづかさ 【名】**つかさ**(司)に同じといふ。蘆鹽「やづかさに鳴く。山谷越えてといふなり。又、一說に、野のつかさに鳴くといへり」

やつ-がしら 八頭【名】〔動〕一鳴禽類に屬する鳥。鶺(ツグミ)よりやや大きく、嘴長く、下方に曲り、頭上に冠羽あり、一體に淡赤褐色にして、冠羽と背部とに、黑色帶數箇あり。歐洲・西比利亞・支那には普通なれども、我國にては、稀に北海道に見ることあるに過ぎず。〔戴勝〕二〔植〕里芋の一類。葉柄綠紫色を呈し、分蘗力盛んにして、親芋はやや扁平にして、煮て食ふに美味なれども、子芋は小くして、品質不良、蕃殖用に供すべきのみ。〔九面芋・車轂芋〕

やつ-がたけ 八ケ嶽【名】〔地〕信濃國と甲斐國との間にある山。八ケ嶽火山彙の主峯にして、その南方に位し、高さ九五六七尺に達す。二重式火山なれど、活動休止後、時を經ること久しく、外輪山の西側は、風雨浸蝕のため、破壞し了れり。

やつ-がなわ 八金輪【名】紋所の一。八箇の輪を組み合はせて描けるもの。

やつ-がね 八鉦【名】**やからがね**(やから鉦)に同じ。

やつか-のき やつかの木【名】**まさかき**(眞榊)に同じといふ。〔古語〕

やつかはぎ 八束脛【名】『その人、體格は小きに、手足は長かりしよりいふ』**つちぐも**(土蜘蛛)三の異稱。「(變)を見よ。

やつ-かはり 八變・八替【名】**よつかはり**(四變)

やつか-ひげ 八束髭・八拳髭【名】たけ長き髭。記「八拳髭、心前(ムナサキ)に至るまで啼きいさちき」

やっかふだ-さん 八甲田山【名】〔地〕**はっかふださん**(八甲田山)に同じ。

やつか-ぼ 八束穗【名】たけ長き穗、專ら稻の穗にいひ、その豐熟を形容していふ。もろは。祝詞「新年祭「奥(モヤ)つ御年(シラ)を、八束穗のいかし穗に、皇神等(スメガミ)のよさしまつれば」

やっかまし 喧し【他一】**やかまし**(喧し)の音便。和合人「解って居るよ。やっかましい」

やつか-まき 矢束卷【名】鏑矢(カブラヤ)の鏑の上なるねた卷の上に、更に絲を卷くこと、又その卷きたる物。

やつ-からかね 八から鉦【名】**やからがね**(八から鉦)に同じ。

やつがり 僕【代】次條の轉。字鏡集「奴、ヤツガリ・ヤツコ・ツカヒ人・ツブネ」

やつがれ 僕【代】『奴(ヤツ)吾(ワ)の約といふ』第一人稱の謙稱。(男にも女にも通用す)やつこ。やつがり。紀「吾、ヤツガレ」同「妾、ヤツガレ」

やっき 【貌】心を苛立(イラ)たするさま。和合人「女郎どもが、大奮發(ヤッキ)と成って」

やっ-つき 屋繼・家繼【名】**あとつき**(跡繼)一に同じ。若鳳俗「爰に入聟して三十五年、今年六十餘まで、屋繼の無き事を嘆き」

やっ-つき 矢繼【名】矢を放ちたる後、又、次の矢を弓の弦につがふこと。著聞「いかにも、又矢つぎすべしともおぼえず」盛衰記「あきまを數へて、矢繼早し」

やつぎ-ばや 矢繼早【名】一矢つぎのすばやきこと。矢を、引き續き敏捷に射ること。著聞「犬、射られて、けいけいと鳴きて走るを、やがて同じさまに、矢つぎばやに射てけり」保元「大力の强力、矢つぎ早の手ききなり」二『や(矢)』五參照』質問などを、のべつに敏捷に仕向くること。

やつ-ぎり 八切【名】一つの物を、八個に切り分つこと。

やつぎり-がた 八切形【名】寫眞の乾板(ハン)の、縱八インチ半、幅六インチのもの。同じ。

やっ-くち 八口【名】**わきあけ**(脇明)三に同じ。

やっ-づくめ 矢づくめ【名】矢の有りたけの種類のを用ふること。國姓爺後日合戰「鐵砲づくめ・矢づくめ」

やっ-くら 八座【名】**はちざ**(八座)に同じ。光經集「やつくらや羽(ハ)の林も何ならじ悟る蓮(ハス)の九品(クホン)には」

やっ-づくり 屋作・家作【名】家を造ること、又その造り方。紫式部日記「反故(ホゴ)ども、皆破(ヤ)り、燒失ひ、ひひなどのやづくりに、この春しはべりにし後」

やっ-こ 【名】『家(ヤ)つ子の義。つは領格の助辭』目下の者を親しみて呼ぶ語。いへのこ。いへわらは。萬葉「たたさにも蟹も横さもやつことぞあれはありける主の殿戸(トノ)に」二君又は神に仕ふる人。

けらい。紀「君臣、キミ・ヤツコラ」同「鹿島神奴、カシマノカミノヤツコ」三追ひ使はるる、身分賤しき者。奴僕。奴婢。しもべ。名義抄「奴、ヤツコ・ヤツガリ・ツブネ・ツカヒビト」同「官婢、ツカサヤツコ」四或物事に心身を束縛すること。奴隸。萬葉「面忘(スオモレ)だにも得すやとた握りて打てども徵りず戀の奴は」

やっ-こ 奴【代】一**やつがれ**(僕)に同じ。紀「妾、ヤツコ」同「奴縣主小根、ヤツコアガタヌシヲネ」二第三人稱の卑稱。やつ。やっこ。萬葉「家にありし樞(クルル)に鑠(カヤ)さし藏めてし戀の奴の握みかかりて」

やっ-こ 奴【名】『**やつこ**(奴)の音便』一前條に同じ。二江戸時代の、武家の奉公人。撥鬢(バチビン)・鎌髭の姿にて、奴詞と呼ぶ一種の詞を用ひ、任俠の氣を帶び、主人の行列に、槍・挾箱を持ちて振りあるきつつ、供先を勤めしもの。をりすけ。薩摩歌「奥大名の長道中、奴が首も投鞘に」三江戸時代に、任俠を標榜して、世を渡りし者。旗本より出でたるを旗本奴、江戸市民より出でたるを町奴といひ、互に勢力を爭ひたり。をとこだて。四しもべ。下男。蘆村「菊つくり汝は菊の奴かな」五江戸時代の刑罰の一。重罪者の妻及び女子、又は人に從ひて、關所破(セキヤリ)・山越などせし、女などに對し、本籍を除きて、獄舍に使役し、又、もしこれを乞ふ者ある時は、下付して、婢たらしめしこと。男子にもこれを課せしこと、稀にはあり。六藝・娼妓などの、奴風を爲すこと、又その女。きんぴら。きやん。七**やっこ**あたま(奴頭)の略。八**やっこだこ**(奴凧)の略。九**やっこどうふ**(奴豆腐)の略。十**しまだわげ**(島田髷)を云ふ。〔京都・大阪の語〕十一**たいこもち**(太鼓持)三を云ふ。〔京都・大阪の語〕〔諺語〕

奴道心捨衣(ロモヒ)【句】次條に同じ。

奴只中(ナカ)道心者【句】男を立つべきさかりの年齡にて、出家すること、又その人。〔諺語〕

奴に髭が無い樣【句】『奴三は、多く鎌髭を生やしよりいふ。**やっこひげ**(奴

髭)参照』その物事特有の附屬物の缺けてある形容。〔諺語〕

奴の尻は寒晒【句】奴㊀の、寒中にても、衣の尻を短く端折りし形容。〔諺語〕

奴を振る【句】奴㊀が、行列の供先にて、身體と手とを、一種特有の狀態に振り動かすやうにして、槍・挾箱などを持ち行く。薩摩歌「あわて騷いで、三五兵衞は奴振る。源五兵衞は女子(ヂナ)の眞似」俳諧新選(雁宕)「山風の奴振らする案山子(シカ)かな」

やっこ 奴【代】やつ(奴)に同じ。

やつご 八子【名】八歳の子。

八子も痞癤(カンシ)【句】「一寸の蟲にも五分の魂」に同じ。〔諺語〕八犬傳「人は見かけによるものかは。無くて七癖、八子も痞癤」

やっこあたま 奴頭【名】㊀奴㊀㊁の結ひしものなるよりいふ』**ばちびん**(撥鬢)に同じ。㊁江戸時代に、髮置(カミオキ)の時、兩方の耳の上の部分にのみ毛髮を殘し、他はすべて剃り去りしこと。やっこ。

やっこいか 奴凧【名】**やっこだこ**(奴凧)に同じ。俗曲「新かむろ」「いよし御見(ゴケン)や、ちわ文も、槍へ使の奴いか、緣の絲目、ふっつり切れて」

やっこかたぎ 奴形氣・奴氣質【名】奴㊀㊁の通有する、放埒・無頼の氣質。をりすけこんじやう。世間息子形氣「假にも正道なる心は出さず、奴形氣となって」

やっこことば 奴詞【名】奴㊀㊁などの用ひし、一種粗雜なる言葉づかひ。六方ことば。關東べい。後撰夷曲集「蟲を奴子詞にて詠める、ここで鳴けどっこへそっこへ遣るまいぞなんだ辨慶武藏野の蟲」

やっこざうりとり 奴草履取【名】奴㊀の、草履取の役を勤むるもの。一代男「太緒の雪駄、いかつに突きなして、奴草履取を附け」

やっこさん 奴樣【代】やっこ(奴)をやや和げていふ語。

やっこさんがはら 奴棧瓦【名】最も小きい棧瓦。

やっこじやのめ 奴蛇目【名】緣の黑き部分の淺き蛇目傘(ジヤガサ)。

やっこだうじやうじ 奴道成寺【名】もも**ちどりむすめだうじやうじ**(百千鳥娘道成寺)を見よ。

やっこだこ 奴凧【名】奴㊀の突袖(ツヅキ)したる樣に切り拔きて貼りたる凧。やっこいか。

(こだこつや)

やっこだたみ 奴疊【名】石疊㊁の模樣に染めたる疊表。

やっこだて 奴立【名】奴風をなして、人に誇ること。色道大鑑「女郎の奴だて、聊かいぶかしき事なれども」

やっこだひ 奴鯛【名】〔動〕硬鱗類に屬する魚。巾著鯛の類にて、全身淡蒼色にして黑ばみ、二條の褐色線あり。體長三寸五分ほどにて、幅は狹く、頭部小く、吻頭突き出で、前鰓蓋に齒緣あり。鱗はやや大きく、腹鱗は淡褐色を呈す。我國南部の近海に產す。

やっこぢやや 奴茶屋【名】山城國山科(ヤマシナ)街道の路傍にある茶屋。昔、戰亂の世、街道に野武士出沒して、旅客を掠むること多かりし時、この店の主人、片岡丑兵衞といふ者、勇猛にして、射術に達し、その難儀を救ひたりといひ、今も、當時の遺物といふ、古びたる弓矢を、店頭に列ぬ。

やっこどうふ 奴豆腐【名】『豆腐の煮ゆるとき、奴の尻を振る樣に震ふに因りていふ』豆腐を六七分の立方形に切り、煮て食ふもの。又、煮ずして、醬油をつけ、藥味を添へても食ふ。

やっとこの【感】『やっとこのとを重ねて用ひたる語』『掛聲又は囃言葉として用ふる聲。五人女「俄かに顏をつくり髭、戀の奴の物眞似、嵐三右衞門が生寫、やっこの、やっこのとはうたへども」百日曾我「長い刀を差すぞ盃、やっこの、やっこの、奴がかけし武藏野の」「(奴司)を見よ。

やっこのかみ 官奴正【名】**やっこのつかさ**

やっこのとまん 奴小萬【名】〔人〕㊀元祿年間、大阪に居りし女俠。柳里恭これに通へりといふ。㊁『前項のに擬へて、世人の呼びなししものなるべし』大阪長堀なる木津屋といふ豪家の女。三好ゆきと稱す。顏に墨を塗り、その上に白粉を施し、異彩に扮ちて、市中を往來したりといふ。書畫を善くし、京都堂上家の被官の浪人して、大阪に來りしを扶助して、男妾とせしが、後その男、義に違ふことありしより、怒りて放逐し、爾來復び男に馴れず、晚年、尼となりて、正慶と號し、難波(ナニワ)村に隱居す。

やっこのつかさ 官奴司【名】古の宮內省の被管の一。官戶、奴婢(ヒ)の名籍と口分田(クブン)との事を掌りし所。長官を官奴正(ヤツコノ)といふ。大同三年正月、主殿(トノモ)寮に合併す。みやつこのつかさ。

やっこはいかい 奴俳諧【名】奴詞を用ひて綴る俳諧。百物語「奴俳諧とて、人のしけるを聞きしに、冬の事なりしに、螢水に頭(アタマ)かっぱる氷かな といふ句に、又、附けける、しやっ面(ラ)寒き雪の曙」

やっこばた 奴旗【名】**やっこだこ**(奴凧)を云ふ。〔肥前國長崎の方言〕

やっこひげ 奴髭【名】『奴㊀は多くこの髭を生やしよりいふ』**かまひげ**(鎌髭)に同じ。最明寺殿百人上薦「奴髭に氷柱(ツラ)ゐて、奥齒にかじる脣辛」

やっこふう 奴風【名】奴㊀の風俗。

やっこみおし 奴水押【名】髢(カモ)の無き水押。荷船などに多し。

やっこもどひ 奴元結【名】次條の略。

やっこもどゆひ 奴元結【名】藝妓などの根掛に用ひ、今は良家の婦女の間にも用ふる、白く太き元結。

やつこやみ【名】**しひね**(癤)に同じ。〔古語〕字鏡集「癤、シヒネ・ヤツコヤミ・コブ」

やっこらさ【名】『次條の語の轉義』思慮淺くして、ただ多くの人の間を騷ぎまはること、又その人。〔俚語〕

やっこらさ【感】『やっとこらさとを重ねたる語』掛聲又は囃言葉として用ふる聲。曾我會稽山「八枚肩、徒步(カチ)すねっぱき、やっこらさ」

やつこらま 臣・僕【名】『らまは接尾語』**やつこ**(臣)に同じ。〔古語〕紀「僕、ヤツコラマ」同「臣、ヤツコラマ」「られし女。

やっこをんな 奴女【名】奴㊀の刑に處せる聲。薩摩歌「やっさ・やっさのから櫓の音」

やつさがり 八下【名】**やつすぎ**(八過)に同じ。

やつざき 八裂【名】罰として、身體を、幾つにも小く裂くこと。寸斷。平家「王立ち返りて、御劔を召し寄せて、荆軻を八裂にこそし給ひけれ」

やつさすかり 八道行成【名】**やさかり**(八道行成)に同じ。名義抄「八道行成、ヤサスカリ・ヤサカリ・ヤツサスカリ」

やっさもっさ【名】とりこみごと。ごたくさ。どさくさ。紛擾。新版歌祭文「先刻(キサク)のやっさもっさで取りのぼしたか、頭痛もする」

やつし 俏・窶【名】㊀やつすこと、又、やつしたる物。㊁**やつしかた**(俏形)の略。油地獄「やつしは茁左衞門、幸左衞門が思案ごと。四郎三(サン)がうれひ事」膝栗毛「頭は卷髮(マキ)にて、芝居のやつしとい髮」

やつしぐち(地口)を云ふ。〔江戸の語〕

やつしがき 俏書・窶書【名】文字の畫(カク)を省略して書くこと、又その文字。置古敎信士寨廻「替名・替字のやつし書」

やつしかた 俏形・窶形【名】俳優の、やさ男に扮ること、又それを得意とする俳優。やつし。

やつしげい 窶藝【名】俏形の技。俗つづれ「上方(カタ)に、坂田藤十郎と申しまして、やつし藝の名人あれども」

やつしごと 窶事【名】俏形に扮する技。若鳳俗「中川金之丞がやつし事、南北三ぶが早日、それぞれの役付(ツケ)、見る人に笑はせ、泣かせ」

やつしことば 俏言葉・窶言葉【名】省略したる言葉。「したる文字。

やつしじ 俏字・窶字【名】俏書(ヤツシ)に文を見よ。

やつししまだ 俏島田・窶島田【名】下の嬉遊笑覽「やつし島田は、今いふ

島田くづしなるべし」

やっしっし【感】力を込めたる時の掛聲、又は囃言葉に用ふる聲。平假名盛衰記「鱸(モト)の櫓を押した、押した。おっと心得。やっしっし、いい、やっしっし」

やつしーはりうち 窶針打【名】**はりうち**(針打)[三]を見よ。

やつしーふう 俏風・窶風【名】芝居の靈の一。本多髷の如くにて、俏形(ヤツシ)に扮つ時に著くるもの。

やっーしよい【感】掛聲の一。やっちょい。「わっしよい。」

やつしろ 八代【名】[地] [一]肥後國十二郡の一。郡役所を八代町に置きたり。[二]肥後國八代郡にある町。熊本市の南方、鐵路二十三哩にして、商工業の盛大なること、熊本市に次ぐ。[三](地)明治の初年設置の縣の一。四年七月、藩を廢して縣としたる人吉(ヒトヨシ)縣に、長崎府に屬せし天草(アマクサ)を合はせて置き、肥後國下益城(マシキ)・宇土・球磨(クマ)・葦北・八代・天草の六郡を管せしめしもの。六年一月廢止し、白川縣に合して、肥後全國を管し、九年二月、熊本縣と改稱して、今日に及べり。[四]甲斐國の舊郡の一。明治十三年、東八代・西八代の二郡に分つ。各條を見よ。

やつしろーがひ 八代貝【名】[動] [一]腹足類に屬する軟體動物。鍋貝の類にて、殼の形、それに似、長さ四五寸、外面は、帶黃褐色を呈し、栗色の斑紋あり。殼口の內部は黃褐色を呈す。我國、北は北海道より、南は沖繩に至るまで、普く產す。

やつしろーぎさやう 八代桔梗【名】[植]次條に同じ。

やつしろーさう 八代草【名】[植]桔梗科に屬する多年生の草。莖は直立すれども、纖長にして、高さ一尺內外、葉は互生し、葉柄長く、葉片は長楕圓形にして、先端尖り、鈍鋸齒を有す。五月より九月にかけて、莖頭に、紫碧色又は白色の鐘狀花、十五乃至二十個相集まりて、圓形の穗狀花序をなして開き、蒴果を結ぶ。濕地に自生し、園藝的變種多し。ごしょぎきやう。

やつしろーじやう 八代城【名】肥後國八代町の中央に在りし城。球磨(クマ)川の北岸に位す。元和五年、大震の為に倒壞せしより、翌年、加藤正廣、その臣正方をして築造せしむ。當時、牙城は樓櫓を列し、五層の天守閣あり、東西八百十六間、南北四百四十八間なりきといふ。然るに、寛永九年(一說には寛文十二年)、雷火に燒け、寛永九年、加藤氏退轉の後、細川忠興入りて、此に治し、正保三年、忠興の孫光尙(ナヒサ)の時、その臣長岡興長、城代となり、世襲して、明治維新に至れり。

やつしろーのーうみ 八代海【名】[地]肥後國八代郡の海洋。北は宇土半島、西は天草群島に屏障せられ、西南には薩摩の獅子島・長島等あり、黑瀨戶によりて外洋に通じ、北は三角(ミスミ)瀨戶・柳瀨戶及び本渡(ホンド)瀨戶によりて島原海に通ず。古來、不知火(シラヌヒ)によりて有名なり。

やつしろーのーみや 八代宮【名】肥後國八代郡八代町舊八代城の本丸に鎭座せる官幣中社。祭神は征西將軍懷良(カネナガ)親王及び後征西將軍成長(ナリナガ)親王。八代城は、菊池武光の、懷良親王を迎へし處なるより、明治十三年、この神社の創祀あるに至りしなり。

やつしろーみかん 八代蜜柑【名】[植]蜜柑の一品種。果實は、中形にしてやや扁圓、外皮やや厚く、光澤あれども、平滑ならず。頭部愈に凹みて、小孔をなし、內に十二箇內外の嚢を有し、漿液に富み、每嚢、二箇の核子を有す。

やつしろーもの 八代物【名】**やつもの**(八物)に同じ。延喜式「大膳職・造酒司供二八代物」

やつしろーやき 八代燒【名】肥後國八代郡高田(カウダ)村にて製する陶器。寛永九年、細川氏の肥後國に封ぜし時、上野(アノ)燒の陶工上野喜藏、その二子忠兵衞・藤四郎と共に創む。後世のは青灰色の素地に無色の釉藥を施し、多く白色の象眼あれども、初代の製作は赤褐帶紫色の粗なる坏質に青黃黑の垂下釉を施したるものと傳ふ。主として、茶壺・茶碗などにて質緻密、青・黃・黑の重下釉あり。高田燒。

やつす 俏す・窶す【動四他】[一]やつれしむ。やつやつしくす。伊勢「尼になれる人ありけり。形をやつしたれど」[二]行儀又は文字の畫(クワク)をくづす。「代男」事過ぎて、後はやつして、亂酒(ミダレザケ)」[三]容色を飾る。化粧をす。めかす。

憂き身を窶す【句】姿振(ナリ)も構はぬまでに、一事に熱中す。丹波與作「馬方風情(フゼイ)に何の恥辱、憂き身やつすは、親のため」

やつーすぎ 八過【名】八時(ヤツセ)を過ぐること、又その時刻。やつさがり。[二]**なつさがり**(七下)[三]に同じ。浮世風呂「甚三紅絹(モヘ)の八過かといふ身頃(ミゴロ)」

やつーだま 八玉【名】八個の玉を順次に投げつつ行ふ品玉(シナタマ)。八犬傳「渠(カ)は、女田樂なれども、輪鼓(ワコ)・品玉・八玉・綱渡の技(ワザ)なんどにも、をさをさ長(タ)けたる者としいへば」

やつーぢ 八乳【名】猫の皮の、八箇の乳房の痕あるもの、又その皮を張りて造りたる三味線。珍しきものとして貴ばる。柳樽「岡崎を八乳で彈いて叱られる」

やつーちや 八茶【名】日の長き季節に、三食以外、八時(ヤツセ)頃に食する飯。硯水(ケミズ)。おやつ。[大阪邊の方言]

やっーちや【感】掛聲又は囃言葉に用ふる聲。蘆生夢魂其前日「日本の名人樣、やっちや、やっちやと譽める歌より、譽めさする金ぞ、諸藝の上手なる」

やつーちやうじ 八丁子【名】紋所の一。丁子八箇を車輪狀に描けるもの。

やっーちよい【感】**やっしよい**に同じ。

やっーつ 八【名】**やう**(八)の音便。

やっーつ 八【數】**やう**(八)の音便。

やーづつ 矢筒【名】矢を藏めおくに用ふる(遣る)の條下を見よ。

やっーつーかへしーつ 遣っつ返しつ【句】**やる**(遣る)の條下を見よ。

やっーつける 遣附ける【動下一他】**やりつく**(遣附く)[三][四][五]の訛。和合人「炎でもすゑて……三つ四つ一緒にやつつけべえ」

やーて 八手【名】[一]次條の略。[二](植)五加(ゴカ)科に屬する常綠灌木。我國、暖地に自生し、高さ七八尺に達し、葉は、互生し、葉柄長く、葉片は、深綠色を呈し、質厚くして、光澤あり、掌狀に分裂し、裂片の數、概ね八箇にして、細鋸齒あり。冬季、莖頭に、白色の小花、圓錐花序をなして簇り咲く。有毒なり。てんぐのはうちは。はぼろ。[八角金盤・金剛纂]

(二)(やつ)

やつでーあみ 八手網【名】四手網に、更に四本の手を添へたるもの。やつで。

やつでーのーぎ 八手木【名】[植]**やつて**(八手)[二]に同じ。

やっーと【副】**やっやう**(漸う)[一]に同じ。[二]甚だまさりて。ずっと。浮世風呂「走(ハシ)こくらせうなら、横に寢てこける方が、やっと速いぢや」[三]多く。たくさん。膝栗毛「あないな男は、やっとはどざりませんはいな」

やっとの事で【句】「漸(ヤウ)うの事で」

やっとう【名】『次條の語の轉義』**げきけん**(擊劍)に同じ。[俚語]續膝栗毛「さいはひ、やっとうも出來るとの話」

やっとう【感】擊劍などの時の掛聲。國姥爺「木刀かざし、跳り上って、聲を掛け、えい、やっとう」

やつーどき 八時【名】昔の時刻の一。今の午後二時より同四時までに當る。やつ。

やっとこ【名】『**やとこ**の音便』鐵製にて、形は釘拔に似、小き針金狀の物、板金・熱鐵などを挾むに用ふる工具。かなばし。

やっとこーさ【感】力を勞したる時にいふ掛聲。うんとこさ。やっとこせ。やっとこな。やっとな。

やっとこさーと【副】**やっとこさに**同じ。

やっとこーせ【感】**やっとこさに**同じ。

やっとこーたいね やっとこ大尉【名】**ぴんぼふせうゐ**(貧乏少尉)を見よ。

やっとこーな【感】**やっとこさに**同じ。

やっとーな【感】**やっとこさに**同じ。

やっと-まかせ やっと任【感】まっかせに同じ。伊賀越道中雙六「駕籠……やっとまかせは聲ばかり、一肩いっては立ち留り」

やっと-まねった やっと參った【感】すまふ(相撲)に同じ。狂言(文相撲)「馬のふせおこし、やっとまねったを覺えました」

やつ-どり やつ鳥【名】〔動〕さつきどり(鵹鵑鳥)に同じ。伊呂波字類「鵹鵑鳥、ヤツドリ」

やつ-なぎ 【名】〔植〕えごのき(齋墩果)に同じ。

やつ-のすぶる-つかさ 八統官【名】はっしやう(八省)【一】に同じ。〔古語〕記「八省、ヤツノスブルツカサ」

やつ-はし 八橋【名】【一】小川又は池沼の底淺き所に、數枚の小き板を、屈折せるが如き形に、次第に繼ぎ足して架けわたしたる、小き橋。遺濟集「わが宿の前の八橋踏みならし道ゆき人の過ぎぬ日はなし」【二】古、三河國に在りきといふ橋。同國碧海(ヘキカイ)郡知立(チリウ)町大字八橋に在りしものといふ。古は、この邊官道に當りしより、その名著るるに至りしなり。伊勢、三河の國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水行く川のくも手なれば、橋を八つ渡せるによりてなん、八橋といひける」【三】名香の一。質は羅國、香閑かに涼しくて、古木よりは花やかにて、火末は菖蒲に似たるもの。【四】やつはしおり(八橋綾)の略。【五】幅六七分、長さ一寸五六分ほどの短册形に製したる、紅梅燒の類の菓子。京聖護(ウジ)院の名產。【六】〔植〕いちほつ(蕙尾)に同じ。

やつ-はし-おり (副)やはり(矢張)の訛。

やつはし-おり 八橋織【名】紋綾の一種。表裏の外見等しからざる正形綾織を、市松形その他種種の形狀に從ひ、表・裏共に、その綾の方向の、相隣するもの、皆反對するが如くに配置したるもの。絹綾・綿(ノ)綾・絹毛交綾(ケンモウマジリ)など、種種あり。その一種、紋樣を織り出せるは、紋八橋の名あり。やつはし。

やつはし-けんげう 八橋撿挍【名】〔人〕近世の箏曲の祖。奥州岩城の人。幼にして江戸に出で、三絃を學びて、座頭となり(一說には攝津國の座頭となるとも)寺尾撿挍城印に從ひて、上永と改め、後、更に八橋撿挍城談(一說には城秀)と號す。筑後國の還俗僧法水及び肥前國諫早(イサハ)の慶巖寺の僧玄恕(一說には玄淨)に從ひて、その箏曲を極む。八橋は、その俚耳に入りがたきを慮り、三絃の組唄に倣ひて、新たに十三曲の組等を作り、後、京都に上りて、六角に住せしより、上方の人のその門に入りし者、頗る多く、貞享二年歿す。その歿後、箏曲界には、流派相分れたれども、何れも八橋撿挍を宗とす。

やつはし-りう 八橋流【名】箏曲の流派の一。八橋撿挍を祖とするもの。古は盛んに行はれしが、今は、東京の山田流、上方の生田(ヲダ)流、最も行はる。つくしりう(筑紫流)及びやながはりう(柳川流)參照。

やつ-ばち 八撥【名】『羯鼓は、兩枝にて兩頭を擊つものなり、彌(ヤ)即ち物の重なる義にて、やつ(八)といふとぞ』かっこ(羯鼓)に同じ。【二】太鼓の曲打(キヨク)。〔八桴〕古今夷曲集「八桴打つを見て、橋ならぬ蜘蛛手の曲の八桴や太鼓うつつに世を渡るかな」

やつばち-たづな 八撥手綱【名】『八撥即ち羯鼓を、頸に懸け、胸に附けて擊つ委勢に似たるよりいふ』馬術にて、手綱を取るに、長く取りて、肘の後方にまはる惡しき取り方。

やつ-はな 八花【名】次條【一】の略。賤夢「八花・九曜の星・蜆蚫(ムカ)などいふ繪凧」

やつはなぁ-がた 八花形【名】【一】圓くして、周圍に、花瓣の如き稜(ドカ)の八つある形。やつはなさき。やつはな。大鏡「今樣の葵・やつ花形の鏡」【二】擊劍の手の一。幸若(高館)「大勢の中へ割って入り、蜘蛛手・かくなは・十文字・八花形といふものに、散散に切ったりけり」

やつはなぁ-ささ 八花崎・八花前【名】前條【一】に同じ。類聚雜要抄「鏡筥……徑一尺一寸、八花刪……八花崎、牽弘一尺四寸」

やつ-ばら 奴原【名】『ばら(原)は接尾語』

やつ(奴)の 複數。やつら。竹取「遲く來(ク)るやつばらを待たじ」

やっ-ぱり 矢張【副】やはり(矢張)の音便。

やつ-ばれ 八霽【名】八時(ヤツ)に雨の霽るること。「八霽に笠脫ぐな【句】八時(ドキ)に雨の霽るるは、又もや降り出すものなれば、油斷する勿れ。〔諺語〕

やつ-びやうし 八拍子【名】【一】謠曲にて、七・五調十二字を謠ふ時の原則と定められたる拍子。樂譜も、これを基礎とし、地拍子・矩拍子等の稱あり。又、この十二字八拍子なるを本地(ホンヂ)といひ、四拍子なるを取地(トリ)、六拍子なるを片地(カタ)といふ。【二】やから鉦(ガネ)の拍子。

やつ-ぶさ 八房【名】〔植〕くわんざう(款冬)に同じ。

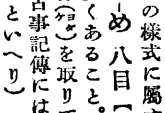
やつぶさ-うめ 八房梅【名】〔植〕梅の一品種。雌蕊の數二本乃至八本ありて、一花に三四箇の果實を結ぶもの。ざろんうめ。〔品字梅・重葉梅〕

やつぶさ-せんにち 八房千日【名】〔植〕せんにちさう(千日草)に同じ。

やつぶさ-の-うめ 八房梅【名】〔植〕やつぶさうめ(八房梅)に同じ。

やつぶ-たう ヤップ島(英Yap island)【名】〔地〕我國委任統治地なる南洋カロリナ諸島の西部に在る島。

やつ-ぶち 八藤【名】【一】紋所の一。【二】模樣の一。



(やつぶち【二】)

やっ-ぺし 【副】幾度も。たびたび。柳樽「めような晩禿(ロカブ)やっぺし耳に口」膝栗毛「忘れないやうにと、その名を、やっぺし言ひつけた辭さあ」

やつ-ぼ 矢坪・矢壺【名】矢を射んとして狙ふ場所。やどころ。保元「大鏑を以て、ひようと射たまふが、高紐に弦や堰かれけん、思ふ矢壺に下(ザ)りつつ」太平記「三尺五寸の太刀を抜き、甲(カブト)の眞向(マムカ)に差しかざし、誠に矢所(ザヤ)少く、馬を立てて控へたり」

やつ-づま 屋端【句】【一】家のつま。軒端(ハ)。榮花「あやめ草長きためしに引きなして、やづまにかかるものとのみ、蓬の宿を打ち拂ひ」【二】家の入口。謠曲胡蝶「人ありとも見えぬ屋づまより、女性(ニヨウ)一人來りたまひ」

やつ-また 八叉【名】【一】八箇に分岐すること、又その形。【二】〔植〕めひじば(馬唐)に同じ。

やつまた-もく 八叉もく【名】〔植〕褐色藻類に屬する海藻。長さ二三尺ばかり、葉は下部のは篦形にして、小けれども、上部のは、細長くして、不規則に分岐し、扁くして、中肋狀の縱條を有し、葉の下部に、豌豆大の氣胞を有す。ばらもく。

やつ-まつばら 八松原【名】〔地〕相摸國高座(ザウ)郡明治村の海濱。東は片瀨川に及ぶ。盛衰記「馬を早めて行く程に、八松原・腰越・由比濱を打ち越えて、小坪坂を上る」

やつ-まと 八的【名】騎射の一種。的を八箇所に立てて行ふものなるべしといふ。小右記「令射二八的一」油糟「八的をいつしか秋の日は暮れて」

やつむね-づくり 八棟造【名】神社の建築式の一。權現造中、屋根の覆雜にして、棟の多數なるもの。京都の北野神社は、この樣式に屬す。

やつ-め 八目【名】編み目・刻み目などの多くあること。記「いづし河の河島の節竹(ヨタ)を取りて、八目の荒籠(コカ)を作り」(古事記傳には、「八」の字は「大」の字の誤かといへり)

八目の鏑(カブラ)【句】やつめかぶら(八目鏑)に同じ。盛衰記「闘を合せて、鳴矢(ヤ)を射通しければ」

八目の鏑矢【句】前條に同じ。日本武尊東鑑「かご弓に、八目の鏑矢取り添へ」

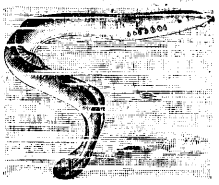
八目の鳴鏑【句】前條に同じ。

八目の草鞋【句】やつめわらんぢ(八目草鞋)に同じ。孕常磐「頭陀(ヅタ)の袋・麻衣、鐵鉢を御手に据ゑ、八目のわらんぢ召さるれば」

やつ-め 奴め【名】『めは接尾語』やつ(奴)を一層卑しめていふ語。著聞「おのれほどの奴めは」

やつ-め 奴め【代】『前條の語の轉義』やつ(奴)を一層卑しめていふ語。

やつめ-うなぎ 八目鰻【名】[動]『鰓孔も、眼の如く見ゆるよりいふ』圓口類に屬する魚。體形、鰻に似、鼻孔は、頭の中央に在りて、盲嚢狀を呈し、眼の後方に、七對の鰓孔列なり、口は圓形にして、吸盤狀に變じ、これを以て他物に吸著す。常に海中に棲息すれども、秋季に至れば、清澄なる河川に遡り、二月乃至四月頃、砂礫の間に産卵し、産卵終れば、大抵死す。幼魚は、頭部小くして、上脣のみを有し、眼も小く、鰓は直接に食道に開通する等、構造、頗る成魚と同じからず、秋季、海に下り、約五年にして、成魚となる。我國に産するもの、川八目(カハヤ)・砂八目(スナヤ)の二種あり。前者は、體長一尺五寸に達し、背部蒼黑色にして、食用に供せられ、後者は、體長約五寸に過ぎず、背部黄褐色にして、食用に供することなく、二種共に日本海に面する各地に産す。[禪魚・文魚]



(やつめうなぎ)

やつめ-かぶら 八目鏑【名】鏑に多くの目のある鏑矢。日本紀私記「八目鏑、夜豆女加布良」

やつめ-ぐさ 八目草【名】[植]やつめらん(八目蘭)に同じ。

やつめ-さす 八雲刺す【枕】『やつめは八雲(ヤクモ)の轉訛、さす(刺す)はたつ(立つ)に同じ』やくもたつ(八雲立つ)に同じ。記「やつめさす出雲たけるがはける太刀つづらさは卷きさみ無しにあはれ」

やつめ-らん 八目蘭【名】[植]のきしのぶ(軒荵)に同じ。

やつめ-わらんぢ 八目草鞋【名】乳(チ)の八つある草鞋。八葉蓮華に象れるなりとて、修驗など、これを用ふ。

やつ-もの 八物【名】古、神を祭る時に供へし、折薦帖・狹帖・短帖・折薦・葉薦・山城・食薦・寮造食薦(各、八枚)の八種の物。

やつ-もも 八桃【名】[植]やまなし(山梨)に同じ。

やつ-やぐるま 八矢車【名】紋所の一。矢の數を、八本に描けるもの。

やつ-やつ 谷谷【名】此處(ココ)・彼處(カシコ)の谷(ヤツ)。多くの谷(ヤツ)。太平記「鎌倉には、……、この陣より軍破れて、寄手、谷谷に亂れ入る」

やつ-やつし 窶窶し・窶し【形二】甚だやつれたる樣なり。字鏡集「窶、ヤツヤツシ。イヤシ」

やつ-よ 彌つ世【名】多くの世。やちよ。[古語]萬葉「あぢさゐの八重咲く如くやつ世にをいませわがせこ見つつしぬばむ」

やつ-ら 奴等【名】やつばら(奴原)に同じ。

やつ-ら 奴等【代】やつ(奴)の複數。

やつら-の-まひ 八列舞・八佾舞【名】はちいつ(八佾)に同じ。紀「八佾之舞、ヤツラノマヒ」

やつり-やま 八釣山【名】[地]大和國高市(ヤカチ)郡飛鳥(カスカ)村の大字八釣にある山。八釣は、顯宗天皇の飛鳥八釣宮の在りし地なり。萬葉「矢釣山木立(コダ)も見えず散りまがふ雪もはだらに參り來(コ)」

やつる 窶る【動下二他】一痩せ衰ふ。憔悴す。源氏「舟路のしわざとて、少し黑みやつれたる旅姿」二見ばえなき姿となる。事そぎたる樣子に見ゆ。源氏「御裝束をも、やつれたる狩の御ぞをたてまつり」

やづる 矢弦【名】次條を見よ。

矢弦を引く【句】「矢束(ヤヅカ)を引く」の誤なるべし。鎌田兵衛名所盃「左の腕(ナカ)右うでより四寸長く、矢弦を引くこと、雙(ナラ)なく」

やつるぎ 八劍【名】次條の略。太平記「いつかわが身の尾張なる熱田の八劍伏拜み、潮干に今や鳴海潟」

やつるぎ-の-みや 八劍宮【名】尾張國熱田(アツタ)神宮の別宮。和銅元年、一種の寶劍を祀りたるもの。一時は、熱田神宮と混同せられたるものの如し。

やつれ 窶【名】やつれること、又、やつれたる姿。源氏「霧はれゆかばはしたなかるべきやつれを、おもなく御覽じ咎められぬべきさまなれば」

やつれ-ぐさ 窶種【名】やつれる原因。

やつれ-すがた 窶姿【名】やつれたる姿。源氏「かやうの御やつれ姿を、いかでかは御覽じつけん」

やつれ-ばむ 窶ばむ【動四自】やつれたる樣に見ゆ。源氏「誰も、さばかりになりぬる御有樣の、いとやつればみ、ただありなるやはあるべき」

やつ-わり 八割【名】一八つに等分すること、又その容積。二『容積、四斗樽を八等分せるに當るよりいふ』五升の酒、又、それを容るるだけの大さの樽。現今には、六割(ワリ)と呼ぶ。

やつ-を 八緒【名】八筋の緒。

八緒の琴【句】八筋の緒を張りたる琴。八絃の琴。記「八絃(ヤツ)の琴を調べたるごと、天の下治めたまひしいざほわけの天皇(スメラミコト)」

やて 矢手【名】めて(馬手)一に同じ。遥歩色葉集「矢手」

やてい 野體【名】粗野なる風體。ぶいき。ぶすい。一代男「忍べばこそ、供をも連れず、風俗も野體にて出でしに」

やてい 野亭【名】野道の傍にありて、旅人の休憩する小家。東關紀行「十餘の日數を經て、鎌倉に下り著きし間、或は山館。野亭の夜のとまり」「野禽」

やてう 野鳥【名】野に居る鳥。のとり。

やてつ 冶鐵【名】鐵を鍛冶すること。

やてん 野店【名】野道の傍にある茶店。

やでん 野田【名】てんや(田野)に同じ。

やてん-ばうし やでん帽子【名】絹にて四角に造り、角ごとに、錘(ツイモ)を附けて落ちぬやうにしたる帽子。京都加茂川の臺師傳兵衛と呼ぶ者の創めしものといふ。

やと 野渡【名】野川の渡場(ワタバ)。謠曲(浦島)「野渡、人無うして、おのづから浮よや繫がる船ならん」

やと 野兎【名】野生の兎。(家兎に對して)

やど 屋戸【名】家の戸。萬葉「夕されば屋戸あけまけて吾待たむ夢(イメ)にあひ見る來むといふ人を」同「人の見て言咎(トガ)せぬ夢(イメ)にわがこよひ至らむ屋戸さすなゆめ」

やど 宿【名】『前條の語の轉義』一住む所。いへ。すみか。やどり。家屋。[屋戸]萬葉「背によし奈良の山なる黑木もて造れる室戸(ヤド)はませどあかぬかも」大鑑「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へん」二わが家。自宅。[屋戸]萬葉「いかならむ時にか妹を葎生(ムグラ)のいやしき屋戸に入りまさせなむ」三家の敷地。家の構の内。萬葉「わがやどのいささむら竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも」蕪村「宿の梅折り取るほどになりにけり」四旅にて、やどること、又、その處。やどり。たびやどり。宿泊。旅宿。萬葉「しなが鳥みなぬを來れば有馬山夕霧立ちぬ宿はなくして」芭蕉「くたびれて宿借る頃や藤の花」五奉公人の親元又は請人(ウケニン)の家。六なかやど(中宿)三三の略。七こやど(小宿)の略。八やどや(宿屋)三に同じ。一代女「揚屋の夕暮、……男ありて、待顔には見せけれども、宿よりそこそこにあしらひ」

やど 宿の官(ツカ)【句】しゅくわん(宿官)に同じ。枕「やどりのつかさの權の守(カミ)は下野・甲斐・越後・筑波・阿波」

宿も狹に【句】宿も狹くなる程に。攝太「宿もせに朝ごと稻をほすよりはは てを結ひてぞ掛くべかりける」

宿を替ふ【句】ひきこす。轉宅す。蕪村「宿替へて火燵(ツタ)嬉しき在所」

宿を取る【句】旅にて、やどる。旅宿を定む。宿(ヤド)を取る。空穗「わが袖は宿取る蟲もなかりしを、怪しく蝶の通はざるらん」太平「宿取って山路の吹雪(ヤブ)覗きけり」

やーど 宿【代】妻がその夫を指していふ第三人稱。宅(ヤケ)。

やどーあづけ 宿預【名】預(アヅ)㊁の一。訴訟の目的にて、江戸に來りたる者に、私曲ある場合に、その旅宿に預けて守らせしこと。その際、その旅宿より差し出す證文を、宿預證文といへり。

やどあづけーしようもん 宿預證文【名】「じ。前條を見よ。

やどーいり 宿入【名】**やぶいり**(藪入)に同じ。

やどうーのりかね 矢頭教兼【名】【人】赤穂四十七士の一。通稱は右衛門七。代代、赤穂侯に仕ふ。國難起るや、父に從ひて、義盟に加はりしが、良雄、その幼を憐みて止めたれども、聽かず、父と共に京都に抵りしに、父病歿し、その遺志を奉じて、目的を達す。死を賜はる時、年十八。

やどーおり 宿下【名】㊀奉公人が、暇を請ひて、親元又は請人(ウケニン)の家などへ歸り行くこと。やどさがり。やどり。一代女「御暇請ひて、本郷六丁目の裏棚へ宿下をして、露地口の柱に、この奥によろづ物縫仕立屋と張り札をして」㊁**やぶいり**(藪入)に同じ。

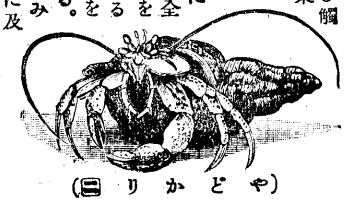
やどかし 宿貸【名】宿を貸すこと、又その人。

やどーがへ 宿替【名】ひきこし。轉宅。織留「宿替しするに、それぞれの世帶道具をば運ぶこそ可笑しけれ」

やどーがほ 宿顔【名】宿なりといふが如く見ゆること。拾遺「ほととぎす鳴くや五月の宿がほに必ず匂ふ軒の橘」

やどーから 宿柄【名】『柄は假借の字。故の義』宿の故なること。宿故。金葉「宿からぞ月の光もまさりけるよの曇なくすめばなりけり」新葉和歌集「宿からは花も心にとまるかな代代のみゆきのあとと思へば」

やどーかり 宿借【名】㊀宿を借ること、又その人。借家。借家人。油屠「上にかたかた下にかたかた(さいふ句に)二階にも宿かりありて打つ衣」㊁甲殼類に屬する節足動物。體は、蝦と蟹との中間の形をなし、大小一對の螯(ハサミ)及び四對の脚と、蝦のに似たる眼及び觸角を具へ、腹部は柔軟にして、皮殼を被らず。螺類の空殼を求めて、その中に棲む奇性あり。强敵に襲はるる時は、體を全部殼中に收めて、害を免る。身體成長する時は、更に大形の殼を求めて、これに移る。沿海に產し、我國のみにても、種類數十に及ぶ。かにのやどり。かみな。がうな。「寄居蟲・寄生蝦」



(やどりかに㊁)

やどく 夜讀【名】夜、書を讀むこと。

やどーぐるま 宿車【名】車宿(ヤドル)に屬する挽子の挽く人力車。(抱(カカ)車・辻車などに對して)

やどこ 【名】**やっこ**に同じ。

やどこ 矢獨銛【名】槇皮(ハヅ)を打ち込むに用ふる具。形、鑿に似、兩刃はあれど、切刃(キツ)を缺きたるもの。

やどーごや 宿小屋【名】ささやかながら、住むに足る家。今宮心中「世間晴れて、宿小屋持ち」

やどころ 矢所【名】**やつぼ**(矢坪)に同じ。盛衰記「上總太郎判官、弓を引儲けて、箭所のしづまるを待つ處に、忠綱に組まんと志して」

矢所の答【句】犬追物(イヌオモノ)にて、矢の犬に中りたる時、射手の、檢見(ケン)より矢所を問はれたるに對して、それに答ふること。その答が、矢の中りたる場所と一致せざる場合には、射中てたる數には、入れぬ定なりしなり。

やところーさぢ 八所綴【名】一種の淺きかぶり笠。

やどーさがり 宿下【名】**やどおり**(宿下)に同じ。浮世風呂「姉さんの宿さがりの時に行ったあ」

やどす 宿す【動四他】㊀やどらしむ。宿を貸す。宿泊を許す。空穗「旅人にこそあなれ、しばしやどさんかし」㊁一時とどまらしむ。留む。のこす。後撰「中將にて内にさぶらひける時に、あひ知りける女藏人の曹司に、壺やなぐひ・おいかけをやどしおきてはべりける」拾玉「契あればまためぐりけり月影をやどすにつけて袖の白露」㊂はらむ。姙娠す。

やーとせ 八年・八歳【名】㊀一年の八倍。㊁生れてより七年以上を經て、九年には、ならぬ年齡。はつさい。「料」に同じ。

やどーせん 宿錢【名】**しゆくはくれう**(宿泊料)に同じ。

やどーちん 宿賃【名】㊀**やちん**(屋賃)に同じ。『異本洞房語園「住宅を貸し、……、宿賃は相對致すべく候」』㊁**しゆくはくれう**(宿泊料)に同じ。

やどーちや 宿茶【名】新たに家を借りたる人が、家主・相借(アイヂヤ)の人などを招き、振舞ふこと、又その振舞。傾城島原蛙合戰「宿茶と申して、家住初め、相貸家(アイヂヤ)中へ酒を盛る約束」

やどーちやう 宿帳【名】旅人宿にて、宿泊したる旅人の住所・姓名などを記すために備へつけおく帳簿。膝栗毛「東海道五十三次の紀行(ハナシ)に、……、その有增(アリマシ)を宿帳の帖(モノ)になしたるは」

やどつきーぎ 宿著著【名】宿に著くまでの間だけ著る衣服。(座敷著などに對して)紫の一本「今の小袖かたびらを、宿つき著と脫捨てて」

やどーとり 宿取【名】旅宿を定むること、又その人。醒睡笑「兄の家とも知らず行きたり。宿とりを、主人伺ひ見れば、件(クダン)の弟なりし」

やどーなし 宿無【名】一定の住家の無きこと、又その人。無宿。根南志具佐後篇「宿なしになり申すは、悲しいこんだと」

やどなしーいぬ 宿無犬【名】飼主の無き犬。のらいぬ。

やどなしーすがた 宿無姿【名】宿無の人の、見すぼらしき姿。肇・疫病本多(ヤクビヤウ)・癩眉・宿無姿」

やどなしーたびし 宿無旅【名】宿泊すべき家も無きほどの、淋しき旅。國姓爺「宿なし旅の行著き次第」

やどなしーねこ 宿無猫【名】飼主の無き「猫。のらねこ。

やどーぬし 宿主【名】宿を借りたる時の、その宿の主人。醒睡笑「有馬の湯に入りける者、宿主と語るついでに」

やとはかす 雇はかす・傭はかす【動四他】雇はしむ。雇ふを許す。盛衰記「下人一人雇はかし給へ。四五日が程に歸すべし」

やどーばひり 宿這入【名】家を定めて、それに住み初むること。

やどーばらひ 宿拂【名】宿錢を拂ふこと。織留「宿拂請合ふやら、又、小遣錢持って來て遣るやら」

やとはれーちん 雇賃・傭賃【名】やとはれ人の、雇人より得る賃金。醒睡笑「今日の雇はれ賃を損にして、取るまいまでに」

やとはれーびと 雇人・傭人【名】雇はれて働く人。やとひにん。

やーとひ 雇・傭【名】㊀やとふこと。㊁官廳などにて、本官又は本職とせず、臨時に雇ひて使用する職員。

やとひーいる 雇入る・傭入る【動下二他】長期の仕事に新たに雇ふ。「こと。

やとひーいれ 雇入・傭入【名】雇ひ入るる

やとひーかか 雇嚊・傭嚊【名】雇ひたる嚊。雇人なる嚊。天神記「雇嚊出入(デイ)の者」

やどーひき 宿引【名】或宿屋に雇はれて、旅客に、その宿屋に泊るやうに勸むること、又その人。一茶「宿引に女も出たり春の風」「と。

やとひーきり 雇切・傭切【名】雇ひ切ること

やとひーきる 雇切る・傭切る【動四他】或期間つづけて雇ふ。

やとひーぐるま 雇車・傭車【名】それを挽く人夫と共に雇ふ車。

やとひーげぢよ 雇下女・傭下女【名】臨時に雇ふ下女。一代男「雇腰元・雇下女」

やとひーとしもと 雇腰元【名】臨時に雇ふ腰元。一代男「雇腰元・雇下女」

やとひーざね 雇實【名】「建」眞矧(サネ)の一種。雙方の板に溝を穿ち、實(サネ)を別に造りて、その板の中間に嵌め込むもの。

やとひ-ざむらひ 雇士【名】明治維新の當時、藩士にて、政府の雇となりしもの。五等官以上には任ぜぬ定にて、同二年六月廢せられたり。

やとひ-せん 雇錢・傭錢【名】次條に同じ。

やとひ-ちん 雇賃・傭賃【名】雇主の、雇はれたる人に拂ふ賃金。

やとひ-て 雇手・傭手【名】雇ふ人。

やとひ-ど 雇人・傭人【名】**やとひびと**(雇人)㊀の略。博多小女郎浪枕「やとひどにかろはれ、小宿さへ住んだがの」

傭人、身にならず【句】雇人は、何時解雇せらるるかわからぬ故、忠實に働かず。【諺語】

やとひ-とむ 雇止む・傭止む【動下二他】解雇す。解傭す。

やとひ-とめ 雇止・傭止【名】**かいと**(解雇)

やとひ-にん 雇人・傭人【名】**やとひびと**(雇人)㊀に同じ。

やとひにん-くちいれ-げふ 雇人口入業【名】雇人の口入㊁をなす營業。口入營業。けいあん。(東京府にては、明治三十六年以來、雇人口入營業取締規則を設けて、名稱の如何に拘らず、手數料を受け、雇人の身元を保證して、雇傭の周旋を業とする者を取り締り來りしが、大正六年よりは、紹介營業取締營業規則を設けて、これに代へ、單に雇人と稱する者の周旋のみならず、藝妓・娼妓・事務員等の紹介をも、その範圍内に包含せしめたり)

やとひ-ぬし 雇主・傭主【名】雇ひて、賃金を拂ふ人。雇人を働かす人。

やとひぬし-くみあひ 雇主組合【名】同地方に於ける雇主又は同業の雇主が設けて、その雇人たる職工の保險・恩給・衛生等に關する方法及び勞働組合に對抗する手段を講究する組合。

やとひ-ばば 雇婆【名】老年なる雇女。

やとひ-びと 雇人・傭人【名】㊀雇主の使役する人。雇はるる人。やとはれびと。やとひにん。やとひど。武家義理物語「雇人、肩を揃へて、道を急ぎしに」㊁**やとひぬし**(雇主)に同じ。

やとひめ 雇女・傭女【名】雇ひて使役する女。延喜式「孕割雇女」

やとひ-ねん 雇員【名】**こゐん**(雇員)に同じ。

やとひ-をとこ 雇男・傭男【名】雇ひて使役する男。雇人なる男。下男。浮世親仁形氣「いらぬ雇男をして、煮燒をさせて」

やとひ-をんな 雇女・傭女【名】雇ひて使役する女。雇人なる女。下女。

やとふ 雇ふ・傭ふ【動四他】㊀賃金を拂ひて、一時、人又は物を使ふ。雇傭す。[傳ふ] 大和「げすにもあらねば、人にやとはれ使はれもせず」㊁借りて用ふ。用ひて役に立たす。方丈「舌根をやとひて、不請(フシ)の念佛兩三度をして止みぬ」

雇ふ乞食は、冷飯を食はず【句】賴みて働かす時は、いかに賤しき者にても、つけあがる者なり。【諺語】

雇ふ法師は味噌を嫌ふ【句】前條に同じ。【諺語】

やど-ふだ 宿札【名】㊀宿屋の名を記したる札。太平記「大衆、……我先にと京へ入りて、よからんずる宿をも取り、財寶をも管領せんと志して、宿札どもを、面面に、二三十づつ持たせて」醒睡笑「太閤御所薩摩御陣立あり、庶子のなにがしも御供し、宿札を持ちて行く」㊁名を記し、門口などに掲げて、その人の宿所なるを知らしむる札。櫻陰比事「餘宗ませずに、一町殘らず法華の宿札を出して」

やど-ぶね 宿船【名】船を家として起居する場合のその船。

やど-ぼり 矢通【名】矢場などにて、射たる矢の通過して、垛(ダツ)に達するまでの間の處。

やど-まり 矢止・矢留【名】鎧の胸板。

矢止の拈返(ヒネリ)(カヘシ)【句】鎧の胸板の覆輪。

やどまり-かなもの 矢止金物・矢留金物【名】鎧の胸板の金物。

やど-め 矢止・矢留【名】矢を射るを止むること。

やどめ【名】[植]**いぬつげ**(犬黃楊)に同じ。

やど-もと 宿元・宿許【名】㊀宿㊁の場所。住居せる家。狂言「宿元で御座らば、御藥を上げませうが」㊁宿㊂の家。おやもと。うけやど。一代男「御用もあらば重ねてと、立歸るほどに、宿元を聞けば」

やど-もり 宿守【名】宿㊁を守ること、又その人。るすぬ。るすばん。源氏「宿もりなるをのこを呼びて聞く」

やど-や 宿屋【名】㊀やどりてある家。宿泊せる家。今昔「步兵等、楯の外の宿屋を燒く」㊁旅人を宿らすことを營業とする家。はたごや。旅舍。旅館。㊂**あげや**(揚屋)に同じ。又、その主人。やど。一代女「揚屋の夕暮……、さだまりの紋日も、宿屋へ身あがりの御無念」

やど-や-いり 宿屋入【名】**あげやいり**(揚屋入)に同じ。一代女「宿屋入の飛石(イヒ)、座敷つきの拔足」

やど-や-かご 宿屋駕籠【名】宿屋にて、客のために雇ひ入れたる駕籠。その駕籠舁、問屋場にて繼ぎ立てたる駕籠よりも確實なりとて、喜ばれたり。膝栗毛「こりやあ宿屋駕籠でおざりますから、蒲團が敷いてあるだけ、お前方は……お德といふものぢや」

「せる人に供する飯。

やど-や-めし 宿屋飯【名】宿屋にて、宿泊

やど-とり 矢取【名】矢場などにて、射たる矢を拾ひ集むること、又、それを掌る人。やひろひ。北山抄「矢取自二堋前一西度」和名抄「左り勝手の白齒の矢取」

矢取の奏【句】古、期廷の射術の時、矢取の姓名を奏せしこと。江次第「矢取奏留二御所」

やどり 宿【名】㊀やどること、又その所。住居。宿泊。やど。萬葉「秋田刈るかりほの宿匂ふまで咲ける秋萩見れどあかぬかも」㊁一時とどまること、又その所。伊勢「わが袖は草のいほりにあらねども暮るれば露のやどりなりけり」㊂「星の宿」に同じ。

宿を取る【句】「宿(ヤド)を取る」に同じ。

古今「夕ぐれのまがきは山と見えなんなん夜は越えぢとやどり取るべく」

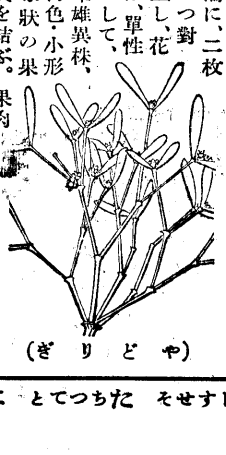
やどり 宿下【名】**やどおり**(宿下)の約。

やどり-うど 宿人【名】**やどりびと**(宿人)の音便。著聞「誰(タ)そと問へば、我はやどりうどとて侍り」

「鳥」に同じ。

やどり-からす 宿鳥【名】**とまりがらす**(止鳥)に同じ。

やどり-ぎ 宿木【名】㊀他の樹に寄生する樹。[寄生・寓木]㊁[植]槲寄生(ヤドリギ)科に屬する常綠の灌木。槲(ヤナギ)・櫟(ヤナギ)・栗などの樹皮に寄生す。幹は、綠黃色を呈し、叉狀に分岐し、高さ三四尺に達するものあり。葉は、細き倒卵形にて、莖の末端に、二枚づつ對生し、花は、單性にして、雌雄異株、白色・小形球狀の果實を結ぶ。果肉の中に粘稠性の物質を含み、鳥、この果實を喙む時は、嘴に種子粘著し、他の樹枝に運搬せらるるに役立ち、又その粘稠性の物質を鳥黐として用ふることあり。外國にては、この木をクリスマスの裝飾に用ふる所あり。ほや。[寄生木・槲寄生] 和名抄「寄生。一名、寓木、夜度利岐。一云、保夜」



(ぎりどや)

やどりぎ-くわ 槲寄生科【名】[植]顯花植物・雙子葉門・被子類・離瓣花區の一科。他の雙子葉植物の樹枝に寄生し、又、葉綠をも具へて、半寄生・半獨立の狀をなす。主として、熱帶の產にして、二十一屬・八百五十種を含み、その内、我國に自生するもの、二屬・八種あり。

やどり-どころ 宿所【名】宿る所、又宿りてある所。しゆくしよ。源氏「あづまぢのひなのなはての馬さくりうたての月の宿りどころや」

やどり-びと 宿人【名】㊀宿る人、又宿りてある人。とまりびと。やどりうど。㊁同居せる人。ねさふらふ。

やどり-むすめ 矢取娘【名】矢取をする娘。やとりをんな。奈曲(初櫻千種の濡事)「名歌・名うての揚弓に、箭取娘の仇者は」

やどり-をんな 矢取女【名】前條に同じ。

やどる 宿る【動四自】㊀宿㊁として居る。住む。萬葉「江林に次(ヤド)るししゐも求むるによき白たへの袖捲きあげてしし待つわがせ」㊂旅にて、他人の家を借りて寢ぬ。とまる。宿泊す。萬葉「秋の野のみ草刈り葺きやどれりし宇治の都の假庵(ヤド)し思ほゆ」㊃一時とどまる。とどこほる。古今「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらん」㊄星、その座にうつりゐる。㊅はらまる。胎内に居る。

やどろく 宿六【名】一家の主人。〔俚語〕

やどろん 宿論【名】宿割に關する議論。曾我「女の盃論か、宿論か」

やどわり 宿割【名】宿泊すべき人人を、それぞれの旅宿に割り當つること、又、その役目に當る人。續膝栗毛「先刻、お宿割がお出(デ)で」

やな 梁【名】水を横斷して、魚の通路を遮り、ただ一部を開放し、その部分に裝置を施して、魚を陷らしめ、捕獲するやうにせるもの。紀「梁、此云二矢奈一」曾丹「谷がみや勢田の早瀬に梁さしてよるとしなれば浮寢をぞする」「草「やなのせ」

やな 梁の瀬【句】やなせ(梁瀬)に同じ。蒸鹽

やな 【名】『やなぎだる(柳樽)の略なるべしといふ』ぬりだる(塗樽)を云ふ。〔遠江國の方言〕

やな 八名【名】〔地〕㊀三河内十郡の一。郡役所を八名町に置けり。㊁三河國八名郡にある町。

やーな 【助】『感嘆の意の助辭やとなとを重ねたる語』やの。よな。やんな。源氏「よからずの右近がさまやな」狂言「あらおもしろの池水やな」(とぶかっちり)「ええ、濡れて、寒(ザ)やな」

やーなあざって 彌明後日【名】やのあざって(彌明後日)の轉。

やーない 屋内【名】かない(家内)に同じ。一代男「やない繁昌」

やないば 【名】『柳端の義にて、その端、垂柳の枝のたわみたる形をなして、左右へ折れ曲れるよりいふとぞ』鐙(アブミ)の舌の覆輪。今川大雙紙「鐙の名所の事、……沓どみのまはりをばやないば」

やないーばこ 柳筥・柳箱【名】柳の木にて編み造り、硯・畫・筆・短冊・冠・鞠・經卷の類を納るるに用ひし箱。平安朝の中期以後、盛んに用ひられしものの如く、初は、柳の細枝を採めて編み、即ち今の柳行李の類にて、その蓋は、硯蓋・廣蓋と同樣に、前記の調度を載するに用ひしが、後には、柳の細枝を紙撚にて、臺板と脚とに、編みつけて、小き机の如き形に作り、又、後には、柳の木の、廣さ五分ほどの三角柱形に削りたるを、幾つも並べ寄せて、生絲(キイト)又は紙撚にて、二個所編み、簀子(コシ)の如くにして、足を附けたり。又、用ふる場合の吉凶に應じて、木の數の奇・偶を分ち、家家によりて、木の並べ方に、縱・横の區別を設けなどしたりといふ。やなぎばこ。やないば。枕「山藍・日蔭など、やない筥に入れて、冠したるをのこ、持てありく」榮花「物の數書き、文を柳箱に入れて」

(やないば)

やなーうんじやう 梁運上・築運上【名】江戸時代に、梁にて、魚を捕獲する者に課せし運上。

やなか 谷中【名】〔地〕東京市下谷區の西谷中の七福神【句】東京市下谷區谷中邊の諸寺に散在せる七福神、即ち上野の大黑天、淺草の蛭子、不忍(シノバズ)の辨天、谷中天王寺の毘沙門天、谷中長安寺の壽老人、日暮里(ニッポリ)花見寺の布袋、田端(タバタ)西行庵の福祿壽。新年に、これらの祠を巡拜して七福神詣を行ふ者尠からず。

やながせ 柳瀬【名】〔地〕近江國伊香(イカ)郡片岡村の大字。越前との國境を距ること僅かに十餘町に在り、余吾(ヨゴ)川の左岸に位し、北國街道に當り、又、敦賀に至る柳瀬街道に分る處。鐵道北陸線の停車場あり。德川幕府にては、關所を設け、彥根藩をして守らしめたりといふ。

柳瀬の役【句】天正十一年三月、羽柴秀吉が、近江國柳瀬の附近にて、柴田勝家の軍と對抗せし役。

やながせーなは 柳瀬繩【名】紀伊國より產する棕櫚繩。

やながは 柳川【名】㊀〔地〕近江國愛知(エチ)郡稻(イナ)村の大字。琵琶湖南東にある泊舟の地。㊁やながはなべ(柳川鍋)の略。㊂〔地〕明治の初年設置の縣の一。みつま(三潴)㊃參照。

やながは 柳河【名】〔地〕筑後國山門(ヤマト)郡にある村。福岡市を距ること十五里二十二町、筑後川の左岸に位し、久留米(クルメ)に亞ぐ大邑たり。立花氏の舊藩地。

やながはーぎやうえふ 柳河杏葉【名】『筑後國柳河藩主たりし立花氏の定紋なるよりいふ』紋所の杏葉の一。

やながはーけんげう 柳川撿挍【名】〔人〕三味線の名人。攝津國の座頭。寛永の頃、八橋撿挍と並稱せらる。八橋撿挍の筆曲に熱中したるに對し、三絃を專門とし、後、京都に移り、江戸に出でて、柳川撿挍と稱せり。端手(ハシ)七曲、裏組七曲はその作なりといふ。

やながはーしげのぶ 柳川重信【名】〔人〕浮世繪師。北齋派の一人。鈴木重兵衛と稱す。江戸の人。初、本所の柳川町に住せしより、柳川重信と稱するに至れり。北齋に師事し、後、鈴木南嶺・浪華の法橋玉山等の畫風を慕ひ、又、歌川國貞の畫風をも參せり。讀本(ヨミホン)・草雙紙に畫筆を染めたるもの多し。天保三年歿す。年四十六。門人句山、養はれて家を嗣ぎ、二代重信と稱せり。

やながはーしし 柳川獅子【名】柳川流の彫金家の手に成れる獅子。

やながはーじやう 柳河城【名】筑後國柳河町に在りし城。永祿年中、蒲池(カバチ)鑑盛(モリ)の創築に係り、後、龍造寺氏居り、尋いで、立花氏に歸す。慶長五年。關ヶ原の役に、宗茂、西軍に黨せしため、一旦奥州棚倉に移され、加藤・田中の二氏を經て、宗茂、大阪の役、東軍に屬して功ありしより、七年、舊封に復せられて、この城に治し、世襲して、明治維新に至れり。

やながはせいがん 梁川星巖【名】〔人〕詩人。美濃川安八(ヤハ)郡曾根村の人。名は孟緯、字は公圖又は無象、字は伯兎、新十郎と稱す。鄕里に星ヶ岡あるを取りて、星巖と號し、又、老龍庵・白峰・天谷老人・三野逸民・詩禪道人等の別號あり。七歲句讀を學び、十二歲父母を喪ひ、享和三年、家を弟仲建に付して、江戸に出で、古賀精里・山本北山に從ひて學び、最も詩に長じ、神田お玉が池なる市河寛齋の江湖社の跡に玉池吟社を開き、徒を聚めて敎授す。弘化二年、江戸を去りて、京都鴨川の上に居をトし、鴨沂小屋と號し、佛典と陽明學とを研鑽し、又、賴三樹三郎・梅田雲濱等と謀りて、天下の志士を糾合せんとせしが、安政五年病歿す。年七十。著す所、星巖集八卷あり。大沼沈山・小野湖山・森春濤・岡本黃石等、明治の詩星は、皆、その門に出づ。

やながはーなべ 柳川鍋【名】ごぢやうなべ(泥鰌鍋)に同じ。

やながはーやき 柳河燒【名】筑後國柳河町附近より產する土器。慶長年間の創始に係り、質は軟脆、膚は緻密、白色にして黑斑あり。點茶家に愛玩せらる。德川時代には年年幕府に獻じたり。

やながはーりう 柳川流【名】㊀彫金家の流派の一。横谷(ヨコ)より出で、柳川政次とその子直政とを祖とす。㊁三味線の流派の一。柳川撿挍を祖とす。八橋流(筆曲專門の家なれど、箏曲の家は、必ず三味線を兼ねたり)と共に久しく榮え、三味線の細工人も、柳川・八橋の苗字を許さるを名譽としたりといふ。

やーなぎ 柳【名】㊀〔植〕落葉喬木にして、高さ三四丈に達し、下垂する細長き枝を有し、葉は、互生し、披針形にして、緣邊に鋸齒あり。庭園・路傍等に栽培す。材は器具に作る。垂柳(シダレヤナギ)。あそびぐさ。かなぜぐさ。かざみぐさ。かぜみぐさ。かはぞへぐさ。ねみづくさ。はるすすき。萬葉「うち靡く春のやなぎとわが宿の梅の

花とをいかにかわかむ」 ㊁〔植〕『矢の木の轉にて、古は、矢の箆(ノ)には、竹を用ひず、楊の枝を用ひ、延喜・天曆の御代までは、これを貢せしめたり』楊柳(ヤナギ)科楊柳屬の植物即ち垂柳(シダレ)・行李柳(コウリヤナギ)・でろ柳・箱柳(ハコヤナギ)・水楊(ミヤナギ)等の總稱。喬木又は灌木にして、單性の裸花、雌雄異株に生じ、雌花雄花、共に穗狀花序に排列す。 ㊂裏(カネ)の色目の一。表は白、裏は青。一説に、裏は薄青又は青黑なりと。女房のにては、五衣(イツツノ)の何れも表白、裏青なるに、紅の單(ヒトヘ)を著けたり。冬より春にかけて使用せり。まつのゆき。やなぎがさね。 山家「綠なる松にかさなる白雪は柳のきぬを山におほへる」 ㊃織色の一。縱絲は萌黃、横絲は白きを用ひたるもの。やなぎいろ。 空穗「桂(ヤナギ)に、柳の織物の薄き織物重ねて著て」 ㊄やなぎだる(柳樽)㊁㊂の略。東路のつと「豆腐を燒きて、一盃を勸めしは、都の柳もいかで及ぶべからん」 ㊅『「柳に風と受け流す」を見よ』素直(スナ)にて、少しも逆らはぬこと。西鶴置土產「前後かまはず、一座は柳になつて立ちけるが、風のなびきにかはるは大臣の心」 ㊆院本「祇園女御九重錦」の内、横曾根平太郎の妻お柳(ヤナギ)として、かりに人間と化したる柳の靈の現るる事を作れる段。

柳に受く【句】逆らはずに受け流す。

柳に風【句】次條の略。

柳に風と受け流す【句】『柳の枝の、强風に吹かれても、吹かるるがままに靡くに譬へていふ』少しも逆らはずして、巧みに受け流す。

柳に鞠(ヤナギ)【句】㊀柳と蹴鞠とを配合して、模樣としたるもの。蹴鞠の掛(カカリ)には、多く柳を植うるに因る。一代女「柳に鞠・五所絞(イツツボリ)或は袖石疊、おもひおもひの明衣(ユカタ)」 ㊁『前記の模樣に似たる所あるよりいふ』摘菜(ツマナ)と里芋とを實としたる汁。

柳に雪折無し【句】「强木(ツヨキ)はむづ折、柳に雪折無し」を見よ。

柳の絲【句】りうし(柳枝)の直譯。 萬葉「わが刺せる柳の絲を吹き亂る風にも妹が梅の散るらむ」

柳の營(ナイト)【句】りうえい(柳營)の直譯。 新續古今序「えびすを平ぐる軍の君のつかさを兼ねて、梓弓柳のいとなみしげきはかりごとを、とばりの内にめぐらし」

柳の營(ナイト)【句】前條に同じ。

柳の枝に雪折は無し【句】「柳に雪折無し」に同じ。〔諺語〕

柳の髻【句】古、三月の節句に、柳の枝を、葉の附きたるまま、頭髮の飾とせしもの。支那唐の代に、その日、細柳圈を侍臣に賜ひ、蠱毒を免るる効ありとて帶びしめし制度の傳はれるなりといふ。なほ、支那北地の俗に、柳の枝を浮水に插して、邪氣を攘ふことある由、釋氏要覽の卷下にも見えたり。 萬葉「ますらをの伏し居歎きて造りたるしだり柳の蘊(カガ)せ吾妹(モヒギ)」 太平「翁まろ、……三月三日に、頭辨(カウベン)、柳のかづらをせさせ、桃の花、かざしにせさせ」

柳の門【句】柳を植ゑてある門。柳のやど。 玉葉「春雨は來る人もなく跡絕えぬ柳のかどの軒の玉水」

柳の髮【句】㊀柳の枝の細く長きを、毛髮に譬へていふ語。 新千載「春風や柳の髮をけづるらん綠の眉も亂るばかりに」 ㊁やなぎがみ(柳髮)に同じ。 謠曲「龍太鼓」「亂るるは柳の髮か、春雨の涙に咽ぶ心かな」 五十年忌歎念佛「柳の髮を、何故に、浮世恨みて尼が崎」

柳の腰【句】やなぎごし(柳腰)に同じ。本朝三國誌「上帶を結うて締めたる柳の腰は細くとも、心は太き女武者」

柳の下に、何時も泥鰌は居らぬ【句】㊀嘗て、柳の樹の下なる水中に泥鰌を捕へたることありとて、常にその場處にて捕へ得るものには非ず。〔諺語〕 ㊁嘗て幸運を得たりとて、常に同じ場處に又は同じ方法によりて、同じく幸運を得らるべしと思ふは、大なる誤なり。〔諺語〕

柳の葉を百度(モモビ)中つ【句】やういうき養由基)を見よ。 雅氏「柳の葉をももたびあてつべき舍人(トネ)の、うけばりて射取る」

柳の眉【句】㊀まゆ(眉)㊁を見よ。 ㊂りうび(柳眉)の直譯。 國姓爺「二八ばかりの上臈の芙蓉の顏(カ)ばせ、柳の眉」

柳の宿【句】柳を植ゑてある宿。柳の門(カ)。 壬三「淋しさは幾ももとせもなかりけり柳の宿の春の曙」

柳の湯【句】柳の葉を入れて浴する湯。桃湯(モモ)の類。 春記「御脚病也。以二柳湯一可レ令二洗給一者」

柳は綠、花は紅【句】『蘇軾の詩に「柳綠花紅眞面目」とあるに本づく』「柳綠(リウリヨク)・花紅」に同じ。〔諺語〕 養好法師物見草「悟あれば迷あり、逢ふ世あれば別あり、……柳は綠、花は紅、ただ一ことの敎にて」

やなぎいちご 柳苺【名】〔植〕かぢいちご(梶苺)に同じ。

やなぎいり 柳入【名】織物の織方の一。經(タテ)絲を、一本づつ別別の綜絖(ソウコウ)に通じ、その三本を筬(サ)一羽に引き込むこと。多くは、木綿の縞物の縞絲の部分に應用せられ、これがために、その縞絲は極めて、明瞭に顯るるに至る。みついり。

やなぎいろ 柳色【名】やなぎ(柳)㊃に同じ。 公任集「昔よりあけの衣は名のみして柳色なる年を經るかな」 享保三年六月上原殿聞書「ぬきじろといふは、今程の柳色なり」

やなぎうら 柳裏【名】柳色の裏地、又それを裏としたる衣服。 太平記「赤き袴に柳裏の衣著たる女房」

やなぎうり 柳賣【名】昔、削掛(ケヅリカケ)を賣りあるきし者。削掛は、柳を材とす。

やなぎえびら 柳箙【名】柳の木にて造り、木地蠟色に塗り、所所を、鹿の角にて飾りたる箙。 七一職人歌合「さかつらが無くて、柳えびらにする」

やなぎおもだか 柳澤瀉【名】〔植〕うりかは(瓜皮)に同じ。

やなぎがうり 柳行李【名】やなぎごり(柳行李)に同じ。

やなぎがさね 柳襲【名】やなぎ(柳)㊂に同じ。

やなぎがし 柳樫【名】〔植〕ほそがし(細葉樫)に同じ。

やなぎがみ 柳髮【名】長く美しき毛髮。やなぎのかみ。 東海道名所記「名にゆふやげにも島田の柳髮」

やなぎくわ 楊柳科【名】〔植〕顯花植物、被子類、雙子葉門、離瓣花區に屬する一科。これに屬するものは、灌木又は喬木にして、二屬、凡そ二百種を含み、その多數は北半球の溫帶地方に產し、その他、熱帶・亞熱帶の地方にも產し、我國に自生するものは、二屬、凡そ四十六種を數ふ。

やなぎげた 柳下駄【名】一種の下駄。 智慧袋「春風に鼻緒もよるや柳下駄」

やなぎごし 柳腰【名】りうえう(柳腰)の直譯。 浮世風呂「ほっそり、すうわり、柳腰とさへいふぢやあねえか」

やなぎごり 柳行李【名】瘤柳(ナギ)の若枝の皮を剝ぎたるものにて編み造る行李。 芭蕉「柳行李片荷は涼し初眞瓜」

やなぎさいこ 柳柴胡【名】〔植〕すずさいこ(鈴柴胡)に同じ。

やなぎさう 柳草【名】㊀〔植〕柳葉菜(ヨウ)科に屬する多年生の草。我國、本州中部以北、樺太にかけて自生し、又、觀賞用とす。莖は、纖長にして直立し、高さ一尺乃至四尺に達し、平滑にして、分枝すること稀に、根莖は、太くして、地中を匍匐し、葉は、互生し、披針形にして、裏面は白色を帶ぶ。七八月の頃、紫紅色、又、稀には白色なる、直徑七八分の四瓣花、總狀花序をなして開き、長さ一寸五分ほどの蒴果を結ぶ。やなぎらん。 ㊁うなぎつかみ(鰻攫)に同じ。 ㊂くさだま(草連球)に同じ。 ㊃ぬまごらのを(沼虎尾)に同じ。

やなぎざけ 柳酒【名】柳屋の酒。下文を見よ。 會呂利狂歌咄「萬里小路(コウヂ)に、柳屋とて、名酒を造る者、名は八田(ヤツタ)の某(ボウ)といふ。……、酒の價も、他所(ヨ)より高く、……。いかなる者かしたりけん、歌を詠みて、門口に立てたり。柳酒直(ネ)こそ高けれほとときす本尊かけて憎い奴(ヤツ)だな」

やなぎ-さは 柳澤【名】姓氏の一。本姓は清和源氏。武田信光より出で、甲斐國北巨摩(コマ)郡駒城(コマ)村字柳澤に居り、地名を取りて姓とす。信光十五世の孫柳澤信俊、武田勝頼の幕下にあり、信俊の長子安吉を繕、安吉の弟安忠、兄の後を繼ぐに及び、德川氏に仕へ、慶安元年、命ぜられて館林(ヤカテバヤシ)の綱吉に仕へ、延寶三年、保明、綱吉に仕へ、異數の昇進をなす。子、吉里(ヨシサト)の時、享保九年、大和國郡山に轉じ、子孫相繼ぎて、明治維新に至り、その外、吉保の第四子經隆、第五子時睦、共に、元祿十四年、松平姓と墾田一萬石づつを賜はりしが、享保九年、經隆は越後國黑川に、時睦は越後國時睦に移封し、維新後、三家とも、舊姓柳澤に復し、宗家は伯爵、分家は子爵を授けらる。

やなぎさは-きそうん 柳澤淇園【名】〔人〕大和國郡山藩の老臣。名は里恭、修して、柳(リウ)里恭といへり。字は公美、通稱は、權太夫。玉桂・竹桂の別號あり。父は、柳澤吉保の老臣。淇園、聰明・英敏、多才多能、殊に書道に秀づ。常に客を好み、訪ふ者あれば、門を閉ぢて歸らしめず、寄食の徒幾人なるを知らず、家祿ために不足を告ぐるに至れりといふ。寶曆八年歿す。年五十三。

やなぎさは-やすあき 柳澤保明【名】〔人〕

やなぎさは-よしやす 柳澤吉保【名】〔人〕幕臣。安忠の子。通稱は彌八郎、初の名は保明。將軍綱吉の未だ館林(タテバヤシ)に在りし時より仕へ、延寶八年、綱吉の入りて將軍となるや、御小納戸役となる。その後、頻りに累進して、元祿三年、上總國佐貫(サヌキ)に治し、その神田橋の邸へは、將軍綱吉の來り臨むこと、毎年四五度に及び、七年、武藏國川越(カワゴエ)の城主となり、次いで、侍從に補せられて、老臣格となり、更に左近衛少將となりて、席次、老臣の上に在り、十四年、その嫡子安貞と共に、松平の稱號と偏偉とを賜はりて、松平美濃守吉保といひ、安貞は松平伊豆守吉里(ヨシサト)と稱し、二男安道、三男信豐も松平を稱し、寶永元年には、幕府創立以來、その宗室・懿親以外の者の封ぜらるることなかりし甲府の地に封を移し、十五萬餘石を食む。六年、綱吉の薨ずるや、悲歎の餘、剃髮せしが、將軍家宣に止められて果さず、隱居して、家督を吉里に讓り、入道して、保山元菱と號し、正德四年十一月、駒込の別墅に卒す。年五十七。

やなぎ-さび 柳皺・柳佐比【名】烏帽子の皺(ヒサ)の、柳の葉の如き形の高低あるもの、又、その烏帽子。身分輕き者の著用せしもの。藤典(遊行)「烏帽子も、柳さびたる有樣なり」

やなぎ-しぼり 柳絞【名】染模樣の一。細き竪絞。たきしぼり(瀧絞)參照。

やなぎしま 柳島【名】〔地〕東京市本所區の東南部を占むる地。有名なる妙見堂ありて、寺を法性寺といふ。

やなぎ-しろ 柳代【名】『やなぎ(柳)㊁參照』さかて(酒手)に同じ。

やなぎ-だう 柳堂【名】めろげんじ(妙源寺)

やなぎ-たけ 柳茸【名】〔植〕菌類の一。實物明かならず。若鳳舎「精進かたく、燒麩柳茸の煮染物(モノシリ)」

やなぎ-だすき 柳襷【名】鳥襷の鳥と同樣。柳を交へさまに紋樣に出したる織文(ヲリフミ)。增鏡「三重の狩衣、柳だすきを青く織れる中に、櫻を色色に織れり」

やなぎ-たて 柳蓼【名】〔植〕かはたて(川蓼)に同じ。

やなぎ-だな 柳棚【名】床間(トコノマ)・書院などの脇に設くる棚の一種。

やなぎ-たんぽぽ 柳蒲公英【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。山野に自生し、高さ二三尺に達し、葉は、互生し、披針形にして、大鋸齒を具へ、黃色の頭狀花を開く。あざみたんぽぽ。

やなぎ-だる 柳樽【名】㊀柳の木にて作りたる酒樽なるべし。一說に、えだる(柄樽)に同じとも、形は斗樽(ハカリダル)と同一にて、長き手の附けるものともいふ。蔭廬歌「媒人(ナカダチ)が、袷・羽織も隨目好き大鯛・昆布・柳樽、五色の縮緬・紅絹(モミ)・眞錦・附紙臺(ツケガミダイ)・折紙臺(ヲリガミダイ)、三荷(ミツニ)に擔はせ」㊁昔の酒の銘の一。やなぎ。正章千句「柳樽には酒も殘らぬ(柳樽は、ただ酒の名なれば、打ち任せては、春にはなりがたきか)」㊂さけ(酒)の異稱。やなぎ。狂言(柳樽)「さる方(クカ)より柳樽を貰うた。一人飲むもいかがぢや。誰ぞ呼びまして飲まうと思ふが、何と思ふぞ」㊃能(ノウ)の狂言の一。他より酒を貰ひたる人、知人を招きて共に飲まんとせしが、冠者、宴席の接待に馴れずして、失敗する事を作れるもの。

やなぎ-だる 柳樽・柳多留・家内喜多留【名】〔書〕『選者川柳の文字より思ひ附き、且つこの中にうまき者ありとの謎にて名づけしものなるべしといふ』川柳(カハヤナギ)の句集。奚陵軒可有といふ人の、前句附(マヘクツケ)の集なる「萬句合(マンクアハセ)」の中より、句合の中より句意獨立し、巧に人生の弱點を穿ちたるものを選び、體裁を慶紀逸の「武玉川(ムタマガワ)」に倣ひて、明和二年五月、その初篇を出ししに始まり、爾後、ほぼ、毎年一篇づつを出して、初代川柳の生存中、第二十三篇に及び、その歿後は、點者互に軋轢して、隨所に萬句會を興行し、統一を失ひしを、和笛老人と號する者、その間に在りて、十二三年の間に、第二十四篇より第二十九篇までを編次し、花洛庵一口・門柳、またその後を承けて、第四十六篇に及び、文化三年より、二代目川柳の手に第六十篇まで出板せられ、三代目川柳は、事によりて、社中より點者たることを拒絕せられ、四代目(川柳の名を改めて、俳風狂句と稱することとし、斯道中興の祖と呼ばるる者によりて、天保七年まで、第百五十三篇に達し、五代目の時は、天保の改革に遭遇して、斯道もまたその面目を發揮すること能はざりしかど、嘉永三年までに、第三百八十三篇まで出板し、別に、中本の「新篇柳多留」と題するものを、天保十二年より嘉永六年までの間に、第五十五篇まで、世に出せり。その後、「柳多留」の出板は絕えたれど、これに代る句集は、なほ多く出板せられたり。載する所の句、大抵、作者の名を缺き、選者自身の作も、その間に編入せられたるが如く、又、引き續き出板せるものの中、「俳風(ハイフウ)柳樽」と題するものもあり。藤栗毛「柳樽といふ本に、衣川(コロモガワ)さい槌ばかり流れけり といふ句があり申す」

やなぎだる-しぶね 柳樽拾遺【名】〔書〕次條を見よ。

やなぎだる-だいぜん 柳樽大全【名】〔書〕『初の名「古今前句集」、並びにその卷を二十卷としたるは、「古今和歌集」に擬へしものなるべし』寶曆以後、寛政初年までの川柳を、「柳多留」の中より、拔萃せるもの。二十卷。初、「古今前句集」と題せしを、一旦「諧風柳樽拾遺」(略して「柳樽拾遺」ともいふ)と改め、後、更にこの名に改めしなり。

やなぎ-ながし 柳流【名】抵抗せず、しなやかに受け流すこと。柳に流すこと。俗曲(尾上岩藤)「足らはぬ事を、御遠慮ならお叱りなされて、お指圖頼み上げますと、柳流のしなやかに言ひまはしたる利發さよ」

やなぎ-ぬかぼ 柳糠穂【名】〔植〕蓼(タデ)科に屬する多年生の草。原野に自生し、高さ一尺内外に達し、葉は、披針形にして、長さ一二寸、淡紅色の細花、疎なる穗狀花序に排列して開く。

やなぎ-の-ま 柳之間【名】江戸城中に於ける部屋の一。大廣間の北に在りて、その襖に、狩野洞雲の筆に成れる雪の柳の畫あり、四位以下の表大名、大名次席、表高家等の詰所に充てられたり。

やなぎの-ま-づめ 柳之間詰【名】江戸城中の柳之間に詰むる資格の者。

やなぎ-は 柳派【名】江戸の落語家の一派。麗麗亭柳橋(ヤナギバシ)を祖とするもの。

やなぎ-ば 柳葉【名】柳の葉。新勅撰「霜八たびおけど綠の柳葉に木綿(ユフ)して掛けて世を祈るかな」

やなぎ-ば 柳葉【名】㊀或草木の一種、その葉の形、柳のに似たるもの。㊁鏃(ヤジリ)の形の、柳の葉に似たるもの。やないば。北條五代記「柳葉の根にて射通したる穴」

やなぎ-ば 柳鮠【名】〔動〕次條の略。

やなぎ-ばえ 柳鮠【名】〔動〕石斑魚(ヒヅ)の幼魚。若鳳魚書の過より、蛔頭の釣針持たせて、岩井川の汀に、柳鮠など、手本(テホン)凉(リヤウ)なくかく時」 續猿蓑文鳥「ちか焼や麥からくべて柳ばえ」

やなぎ-ばこ 柳筥・柳箱【名】**やないばこ**(柳筥)に同じ。下學集「柳筥、ヤナギバコ、編二柳枝一作之、一尺四方也」

やなぎはーざさ 柳葉笹【名】〔植〕**ちござさ**(稚兒笹)に同じ。

やなぎ-ばし 柳箸【名】柳の木にて作る箸。新年の雜煮(ニフ)箸、その他の祝箸として用ふ。

やなぎ-ばし 柳橋【名】『神田柳原の末に在るよりいりとぞ』神田川の隅田川に注ぐ所にある橋。水路に依る交通便利にして、遊山船の發著も多かりしため、江戸時代より、兩岸に藝妓多く住み、料理店・貸席の類も多く、明治の初年までも、その藝妓は、都下の藝妓中の粹と稱せられ、深川藝妓の餘風を存するものといはれたり。

やなぎはぜ 柳鯊【名】〔動〕鯊魚の一種。體長五六寸。口は大きく上顎骨は眼の後緣に達す。前鰓蓋には鋭き小棘あり。體面は平滑。背鄕は淡褐色にて紫褐色の斑紋あり、頗る不明瞭に數條の横帶を形成す。鰭には紫褐色の斑紋あり。腹面は白し。海岸附近に棲息す。肉は美味ならず。ねぎ。 柳樽「到來に串削らせる柳はぜ」

ややぎば-の-さいしん 柳葉細辛【名】〔植〕**すずざいこ**(鈴柴胡)に同じ。

やなぎ-はら 柳原【名】柳の多く生ひてある所。新古今「高瀬さす六田(ムツ)の淀の柳原綠も深く霞む春かな」

やなぎはら 柳原【名】〔地〕㊀東京市神田區、萬世(マイ)橋より、神田川に沿ひ、淺草橋に至る街路。江戸時代より古著屋多きを以て有名なり。㊁山城國紀伊郡の町。もと愛宕(オタ)郡に屬し、柳原庄と呼びしが、新町村編制の時、紀伊郡に入る。武家義經物語「柳原はるかに過ぎて、賀茂の川原になれば」 ㊂姓氏の一。本姓は藤原。日野權大納言俊光の第四子資明、柳原殿に居りしに因みて、氏を改む。資明、北朝に仕へて、權大納言・正二位に至る。名家の一にして、代代、文筆を事とし、殊に第十八世紀光(モツ)、學を好みて、續史愚抄を作る。子孫相繼ぎて、明治に至り、伯爵を授けらる。

やなぎはら-ぎぬ 柳原絹【名】昔、山城國柳原より產せし絹布。毛吹草「山城、柳原絹、ヤナギハラギヌ」

やなぎはら-だいなごん 柳原大納言【名】『東京市神田區柳原の地は、江戸時代より古著屋多きより、公卿の姓氏の柳原に言ひかけたる語』 **ふるぎ**(古著)を云ふ。〔江戸の語〕

やなぎ-ぶぐ 柳河豚【名】〔動〕**さらふぐ**(虎河豚)に同じ。

やなぎ-まち 柳町【名】〔地〕筑前國福岡市にある町。遊廓は九州帝國大學創立の際、新柳町に移轉せしめられたり。博多小女郎浪枕「毎年の筑前がまひ、幸に柳町の小女郎とは、抑もより互にのぼり」

やなぎ-まないた 柳俎板【名】柳の木にて作りたる俎板。古くなりても木理立たざるを以て喜ばる。西鶴置土產「臺所を見渡せば、柳眞那板取りまはして」

やなぎ-も 柳藻【名】〔植〕眼子菜(ヒルムシロ)科に屬する草。淡水中に自生し、莖は細長くして分岐す。葉は、線形にして、長さ二三寸、幅一分内外。葉腋より花莖出で、帶黄綠色の花、穗狀をなして開く。ささも。

やなぎもと 柳本【名】㊀〔地〕大和國磯城(キシ)郡にある村。纒向(マキ)山の西北麓、山邊(ヤマベ)郡との界に接す。奈良鐵道の停車場あり、又、崇神・景行二天皇の御陵なる山邊道上(ヤマノベ)陵あり。織田氏の舊藩地。㊁〔地〕明治の初年設置の縣の一。四年七月、大和國柳本藩の地に立てしもの。同年十一月、奈良縣に入る。

やなぎ-や 柳屋【名】柳樽㊀を釀造・販賣せし家なるべしといふ。

やなぎ-よもぎ 柳蓬【名】〔植〕**むかしよもぎ**(昔蓬)に同じ。

やなぎ-らん 柳蘭【名】〔植〕**やなぎさう**(柳草)㊀に同じ。

やなぎ-ねのこづち 柳牛膝【名】〔植〕莧(ヒユ)科に屬する多年生の草。陰地に自生し、牛膝(ウシヒザ)に似、葉は、柳のに似て、牛膝のよりも薄く、光澤、一層著しく、花と果實とは、牛膝のに異ならず。

やなーぐれ 梁崩・簗崩【名】構へ設けたる梁のくづれこはること。堀文「鵜舟多く下す時しも瀧川に梁くづれして鮎子さばしる」

やなーぐひ 胡籙・箙藁【名】㊀矢を盛りて、背に負ふに用ふる具。形、細く高く筒の如くなる壺(ツボ)胡籙丈低く平たき平(ヒラ)胡籙の二種あり。共に、蒔繪・螺鈿・木地螺鈿・木地蒔繪等の製あり、又、狩(カリ)胡籙とて、箭粗のもあり。又、盛る矢の種類により、石打の胡籙・節黑(フシ)の胡籙などとも呼ばれたり。ころく。和名「箙、夜奈久比。唐令用二胡籙二字」。盛ル矢器也。唐韵云、箙籙、箭室也」 大鏡「胡籙の水晶(スイサウ)の管も、この殿の思ひ寄りしいでたまへるなり」

(ひぐなや)

やなぐひ-おひ 胡籙負・箙負【名】胡籙を負ふこと、又、それを負ひてある人。宇治「衞府どもをば、箙負にして、御覽あるべしとて」

やなぐひ-さし 胡籙差・箙差【名】『胡籙を負へるに似たるよりいふ』扇を後腰(シタ)に插すこと。

やなす 梁簀・簗簀【名】篠竹を編みて造り、梁(ヤナ)として用ふる簀。和名「籍、夜奈須。取レ魚箔也」

やなせ 梁瀬・簗瀬【名】梁(ヤナ)を設けてある瀨。國政集『淚川色をば袖にせかれけりやなせにとまるもみぢ葉のごと』

やなだ 梁田【名】〔地〕下野國の舊郡の一。渡良瀨(ワタラセ)川の南岸約二方里の地。二十九年、足利郡の一部となる。

やなひめ-じんじや 矢奈比賣神社【名】遠江國額田(ヌカタ)郡見付(ミツケ)町に鎮座せる縣社。祭神は矢奈比賣命。その神事は、神輿の舁夫、片裸なるが故に、裸體祭の名あり。俗稱、見付天神。

やなーぼこり 梁ぼこり・簗ぼこり【名】魚の、梁の上などに跳ね上ることなるべきか。〔古語〕 大蛇「君ませば物も思はず玉河の瀨に臥す鮎のやなぼこりして」

やーなみ 矢並【名】箙(ヤナビ)に差したる矢のならび。金槐集「もののふの矢なみつくろふ籠手(テ)の上に霰たばしる那須の篠原」

やなーみ 屋並・家並【名】㊀家の並び方、又、その並びたる家。室町千鳥數「上の町、下の町、中の町の家並」 ㊁並べる家の一つ一つ。毋戸。唐船噺今國姓爺「町屋は家並門並(カドナミ)、百姓は頭數にせぶり取り」

やーなり 屋鳴・家鳴【名】家屋の鳴り響くこと、又その音。織留「何の事もない座敷を、家鳴すると言出し、人の心を惱ませ」

やなね 柳井【名】〔地〕周防國玖珂(クカ)郡にある町。明治三十八年、柳井津(ヤナイヅ)町・柳井村・古開作(コカイ)村併合して改稱せるものにして、瀨戸内海の一部、柳井灣に臨む。船舶の出入多く、又、鐵道山陽本線の柳井津驛あり。

やなね-じま 柳井縞【名】周防國玖珂(クカ)・大島・熊毛の三郡より產出して、玖珂郡柳井町を主なる集散地とする雙子(コウ)縞・瓦斯縞・木綿縞。大内氏時代より產出し、明治維新前までは頗る有名なりき。

やなねづ 柳井津【名】〔地〕**やなね**(柳井)を見よ。

やに 脂【名】㊀**じゅし**(樹脂)に同じ。和名「桃脂、毛毛乃夜邇」 ㊁烟草を燻らす時分泌して、溜る、茶褐色の粘液。 ㊂**めやに**(目脂)の略。

やに 脂下(ガ)る【句】㊀"脂が雁首の方に垂れ下るよりいふ"煙管(ルカン)を前さがりにくはへて、煙草(コウ)を燻らす。㊁得意になり、落ちつき拂ひて氣取る。

やに 【名】**やにちや**に同じ。鹿筑波「わらはべのすかすもきかずやに言うて(さいふ句に)見るもあぶなき松の木のぼり」

やに-かへし 脂返【名】昔、烟管(キセル)の吸口に装置して、中に溜る烟草(コウ)のやにを、口に入らしめぬやうにしたるもの。

やに-こし 脂こし【形一】『脂こしの義にて、こしは接尾語』一脂(ヤニ)の氣多し。ねばりづよし。二あっさりとせず。しつこし。吾吟我集「寄ゝ松戀」佳吉のきしませぶりに寢坊してやにこき人はまつに氣の毒」三しっかりとせず。堅固ならず。やにっこし。

やに-しる 脂汁【名】やに(脂)に同じ。

やに-ちや 脂茶【名】『松脂の粘りて、持ち扱ひにくきに譬へていふとぞ。貞享本節用集に「脂茶者、ヤンチヤモノ」とあり。』

やんちや に同じ。

やにちや-ばう やにちや坊【名】やんちやばう(やんちや坊)に同じ。

やに-っ-こし【形一】やにこしの音便。

やに-には 家庭【名】『には(庭)二を見よ』家のある場所。人家の地。ひとざを。記「千葉の葛野(カヅ)を見れば百千足(チタモ)る家庭も見ゆ國のほも見ゆ」

やに-には 矢庭・矢場【名】『には(庭)二を見よ』一矢を射たる、その場所。今昔「四人は、矢庭に射殺したりけり」保元「六郎は、矢場に落ちて死ににけり」二その場。太平記「一所に集まりたる敵三百餘人、矢庭に討殺され」

やに-はに 矢庭に【副】すこしも猶豫せず。いきなり。丹波與作「やにはに二人を縋りとめ」雲妙問雨夜月「雲雀(ヒバリ)を逐うて、矢庭に捉(ト)らんとす」

やに-ばん 脂盤【名】彫金の用具の一。厚き木にて作りたる盤の、上面に松脂(ヤニ)に地粉(ジノ)・松煙・種油などを混じたるものを附著せしめ、その脂を火氣に近づけて溶解したる上に、彫刻すべき金屬を密著し、放冷して凝固せしめ、押木の上にて、彫刻を施すに用ふるもの。大小は一樣ならず。

やに-ばう 脂棒【名】彫金の用具の一。太き棒の一端に、前條のと同一なる松脂を附著せしめ、前條のと同一なる目的に用ふるもの。大さは一定せざれど、小品の彫刻にのみ用ふ。

やに-むに 【副】しやにむに(遮二無二)に同じ。

やにる 【動四自】一兒供、だだをこねる。やにちやを言ふ。二はにかむ二に同じ。【遠江國の方言】

やに-れ 粉【名】一(植)あきにれ(秋楡)に同じ。和名「楡白者名曰ゝ粉、夜邇禮」二はるにれ(春楡)に同じ。

やぬし 家主【名】一一家の主人。戶主。二貸家の持主。おほや。曠野荷分「妻無しと家主やくれし女郎花」

やぬち 屋内・家内【名】『屋の内の約』家のうち。屋内。戶内。萬葉「櫛も見じ屋中(ヤヌチ)も掃かじ草枕旅行く君をいはふともひて」

やね 屋根【名】『屋嶺(ネ)の義、又、屋の上(ウヘ)の約との説もあり』一雨露・風雪・寒暑を防禦するために、建物の上部に設くる覆(オホ)、瓦・亞鉛板・銅板・茅(カヤ)・柿(コケラ)・板・檜皮(ヒハ)などにて葺く。二或物の上部の覆(オホ)。俳諧新選(可幸)「牛の背に屋根出かしつる暑さかな」三やねふね(屋根船)の略。和合人「諏訪町河岸のいせ傳へ行つて、屋根を一ばい拵へさせ」

同じ屋根の下に住む【句】同じ棟の長屋に、相住(アヒト)す。

やね-いし 屋根石【名】風强き地方などにて、屋根に載せて、その柿(コケラ)の飛び散るを防ぐ壓石。

やね-いた 屋根板【名】屋根を葺くに用ふる板。

やね-ねう 夜尿【名】おねう(遺尿)に同じ。

やね-ねう-しやう 夜尿症【名】【醫】おねうしやう(遺尿症)に同じ。

やね-うら 屋根裏【名】一屋根の裏面。天井二なき家にては、あらはに見ゆ。二『英Attic』西洋にて、屋根の直下なる部屋。最も粗末なる所とす。

やね-がへ 屋根替【名】屋根を葺き替ふること。

やね-くぎ 屋根釘【名】こばねくぎ(小羽根釘)に同じ。

やね-ごし 屋根越【名】屋根を隔ててあること。

屋根越の天の川【句】距離遠くして、話の通ぜぬ譬。【諺語】假名手本忠臣藏「ちと咄したい事がある。屋根ごしの天の川で、爰からは言はれぬ」

やね-しっくい 屋根漆喰【名】瓦の接合又は棟などに用ふるしっくい。

やね-だい 屋根代【名】木賃などの宿泊料。俗曲(道行思樂餘)「女房も持たぬ出居(デヰ)衆の氣散じは、屋根代出せば家主(ヤヌシ)へ」

やね-づたひ 屋根傳【名】屋根の上を傳ひゆくこと。

やね-つづき 屋根續【名】屋根の續き居ること。棟つづき。柳樽「兩國で見れば富士まで屋根つづき」

やね-ばん 屋根番【名】屋根の上にて火の見をなすこと、又その人。

やね-ふさ 屋根葺【名】屋根を葺くこと、又、それを職業とする人。ふきし。やねや。太平記「屋根ふきは屋根ですずみの噂かな」

やねふね 屋根船【名】やかたぶね(屋形船)に同じ。

やねや 屋根屋【名】やねふき(屋根葺)に同じ、又、その住める家。俳諧新選(瓜流)「何某の屋根屋出られつ聖廟忌」

やの 矢筈【名】の(筈)に同じ。新六「ものの、ふの負ふてふやのの矯むれどもなほ直(ヌ)ならねわが心かな」

やの【助】やなに同じ。狂言(伊文字)「あらの名殘惜しやの」

やの-あさって 彌明後日【名】一明後日の次の日。しあさって。やなあさって。明明後日。二しあさっての次の日。明明後日の次の日。【東京の語】

やのくち 矢野口【名】【地】武藏國南多摩郡稻城村の大字。郡の東端、多摩川の南岸。古は、府中より鎌倉への往來に當りし地なり。やぐち(矢口)參照。

やの-ごひ 矢拭【名】射たる矢の、土砂に汚れたるを拭ひ去るに用ふる紙又は布。

やの-じ 也字【名】次條の略。

やの-じ-むすび 也字結【名】『形、やや「ヤ」の字に似たるよりいふ』女の帶の結び方の一。背中にて、左の上部より右の下部へ斜に結ぶもの。元祿以後、帶先の垂れたる風の流行せしを、寛政に至り、上に揚げ結ぶ風の生じてより行はる。後、その形一變して、眞直に結ぶものもあり、これを竪(タテ)やの字と呼ぶ。やのじ。

やのすけ 彌之助【名】つりあひにんぎやう(釣合人形)を云ふ。【京都の語】

やの-ね 矢根【名】やじり(矢尻)に同じ。狂言(文相撲)「侍衆に、只居られうより、矢の根を磨かれといへ」

やのね-いし 矢根石【名】石器時代の遺物として、各地より發掘せらるる、矢の根の形の石。當時矢の根として用ひられしものなるべし。天狗のやじり。

やのね-かぢ 矢根鍛冶【名】古、專ら矢の根を鍛へし鍛冶職。

やのね-ぐさ 矢根草【名】【植】蓼(タデ)科に屬する多年生の草。各地に自生し、莖は、纖弱にして、殆ど平滑、高さ、三尺に達し、葉は、卵形乃至長卵形にして、基部刳込(クリコ)み、七八月頃、紅色又は白色の花、十箇内外、頭狀に集まりて開く。

やのね-ごらう 矢根五郎【名】歌舞伎十八番の一。曾我五郎、矢の根を磨ぎながら假睡し、兄十郎の敵工藤の館にて、急難に遭ふ由を夢み、直ちに立ちて、敵の館に向ひ、途中、駄馬を奪ひ、大根を鞭にして急ぐといふ筋のもの。享保十四年正月、二代目市川團十郎の、中村座にて「扇惠方曾我(ソガノヒロエ)」興行の際より始まる。

やのね-しだ 矢根羊齒【名】【植】水龍骨(ノアツシ)科に屬する常綠羊齒植物。地上を匍匐し、又は樹上に攀上す。根莖は、極めて細長く、葉は、長三角形又は卵狀披針形をなし、二三寸の葉柄ありて、根莖の上に、或は遠く、或は近く生ず。子囊群は、葉の裏面に多數散在し、大小一樣ならざれども、圓形にして、被包を缺く。我國、中部以南の地、殊に林間の陰地に自生す。

やの-の-かみやま 矢野神山【名】【地】伊豫國喜多郡上須(カミス)戒(カイ)・豐茂(トヨモ)の三村及ひ西宇和郡日土(ヒト)村に跨る出石(イシ)山の古稱なりともいひ、又、出雲國神門

(ヨウ)郡八野、備後國甲奴(カウ)郡矢野、播磨國赤穗郡八野などの異説もあり。出石山は高さ四六八〇尺。 山槐「雁鳴きて寒き朝けの露霜に矢野の神山色づきにけり」

やのふ 野衲【名】田舍の僧。

やのふ 野衲【代】僧の謙稱。

やの-み 矢實【名】やじり(矢尻)に同じ。今川大雙紙「征矢(ヤ)また尖矢などをわが持ちたる時、……矢の實の方を出す事なし」

やの-もの 矢者・谷者【名】『彈左衞門は、淺草谷村(ムラ)、即ち今の三谷(ヤツ)に住みて、後には、矢の紋所を附けしよりいふ』江戸時代に、重罪囚を、刑場に送る時、彈左衞門の部下の、白衣・帶刀にて、拔身の朱槍を持ちて附き添ひゆきし者。

やは 野坡【名】〔人〕**たけだやは**(竹田野坡)を見よ。

やは【副】**やはかに**同じ。盛衰記「中に取り籠め、戰ひ候はんには、やは一人も遁れ出づべき」謠曲(佐佐木)「身不肖の高綱がお馬を申したらんは、やは僻事(ヒガゴト)にては候」

やは 柔・和【貌】**やはらか**(柔か)に同じ。一代女「やはなる手して、臨腹を快く擦りて」

やは【助】㊀疑問の意。や。やも。かは。かも。古今「世の中は昔よりやは憂かりけん、わが身一つのためになれるか」㊁反語の意。や。やも。かは。かも。古今「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えねかやは隱るる」同「散る花の鳴くにしとまるものならば我鶯に劣らましやは」

やば 矢場・矢塲【名】㊀弓を射る練習をなす場所。いば。ゆば。㊁**やうきゆうば**(揚弓場)に同じ。㊂店の構を揚弓場とし、抱(カカ)の女に色を賣らしめし家。和合人「奥山中の矢場・茶見世などへめぐり」

やば 【名】『**やぼ**(野暮)と關係ある語か』けしからぬこと、又、その事柄。奇怪。不都合。無法。〔京都・大阪邊の語〕膝栗毛「己等(オヲヒ)、やばな事働きくさるな」續道中膝栗毛「やばな事するとは、御法度を背くといふ、上方(カミガタ)の通言なり」

やば 野馬【名】㊀**のうま**(野馬)に同じ。盛衰記「馬は淺ましき野馬に、けしかる鞍具足なり」㊁〔動〕『爾雅の註に「野馬如レ馬而小、出二於塞外一」とあり』一種の馬。㊂『莊子の逍遙遊篇に「野馬也、塵埃也、生物之以レ息相吹也」、又「群書札記に「野馬日中遊氣也、映レ日則見、不レ映レ日則不レ見、佛書所謂陽燄、即世所謂紅塵也」と見ゆ』**かげろふ**(陽炎)に同じ。

やば 夜馬【名】夜乘る馬。謠曲(張良)「曉かけて、遙かに夜馬に鞭うつ人影」

やばい 野梅【名】**のうめ**(野梅)に同じ。

やはう 野堡【名】〔兵〕歩兵のみのために設くる堡壘。胸墻に固守すべき小地域の全部もしくはその大分を圍み、大抵は、若干の掩蔽部を設け、又は障碍を同らす。

やはう 野砲【名】〔兵〕『英Field gun』野戰砲の一。大なる初速を與へ、平射彈道を以て、戰場を掃射するを目的とするもの。口徑は、普通七サンチメエトル半とし、砲架は裝輪式にして、砲車は普通馬六頭を以て輓き、砲の仰角は二十度を最大限とし、初速は六百乃至七百メエトル秒とす。

やばう 野望【名】**やしん**(野心)㊁に同じ。

やはう-へい 野砲兵【名】〔兵〕砲兵の一。野砲の操縱を任務とするもの。

やは-か【副】『副詞**やは**に助辭**か**の添ひたる語』㊀いかでか。何として。何ぞ。いづくんぞ。やは。太平記「いかなる新田殿なりとも、やはか怪へ候や」㊁何としても。定めて。必ず。曾我「御内方へとは虛言なり、やはか通ると廣言して」謠曲(壇鳳)「やはか左樣には仰せ候まじ」

やはき 矢矧・矢作【名】矢を矧ぎ作ること、又それを職業とする人。矢師。記「矢部、ヤハギ」

やはぎ 矢作【名】㊀〔地〕三河國碧海郡に在る町。矢作川の西岸。矢作の大橋を以て、東岸なる岡崎市と相通ず。㊁加賀國石川郡富奥村の大字。古來、居民、矢を矧ぐ事を業とせしより地名となれるなりといふ。道興准后「今宵しも矢はぎの里に居てぞ見る夏も末なる弓張の月」

やはぎ-がは 矢作川・矢矧川【名】〔地〕三河國に在る川。この國第一の大河にして、源を信濃國下伊那(イナ)郡に發し、南流して當國に入り、更に三河・美濃兩國の國境に沿ひて西走し、東・西加茂郡の境界をなし、岡崎市と矢作町との間を流れ、吉田の西にて、渥美(ツ)灣に入る。幹川の流程三十里二十三町。**春母**(モロ)町より下は、舟筏の便あり。

やはぎ-の-おほはし 矢作大橋・矢矧大橋【名】三河國矢作川に架りて、東岸の岡崎市と西岸の矢作町とを連結せる橋。江戸時代には、幕府、特に保護を加へ、海道一の稱あり、昔は、長さ二百八間、高欄に擬寶珠の設あり、杭の數七十と傳へたれど、今のは、長さ百五十間に過ぎず。

やはぎ-べ 矢矧部・矢作部【名】古代、矢矧を職業とせし一部曲、又、それに屬する民。記「矢作部、ヤハギベ」

やはく 夜泊【名】夜中に、舟を泊らすること。

やばけ 八化【名】八たびも化けかはること。謠「狐の七化(ナナバケ)、狸の八化」

やばけい 耶馬溪【名】〔地〕『もと山國(ヤマ)谷と呼びしを、賴山陽、「耶馬溪圖卷記」を作りて、耶馬溪の文字を用ひしより、人口に膾炙するに至れるなり』豐後國下毛(シモ)郡山國川の上流に沿へる一帶の谿谷。長さ約十餘里。火山岩塊の灰泥に混じたる集塊岩より成れるを以て、風雨作用のために、土壤と灰泥とは漸次辭し去り、岩塊のみ殘留せるによりて成れるなり。

やばこ 矢箱【名】矢を藏めおくための箱。やびつ。堀川波の鼓「弓に、靫(ヤブ)に、「し。

やはし 柔し【形一】やはらかなり。よわ

やはし 八橋【名】〔地〕**やばせ**(八橋)を見よ。

やはじめ 矢始【名】魚の春鰆の一部。

やはす 和す【動四他】**やはらぐ**(和ぐ)に同じ。祝詞「大殿祭「神等(カミタチ)のいすろこびあれびまさむを言直(コトホ)し和しまして」

やはず 矢筈【名】㊀矢の上端、刻込(コミ)し、弦を受くる所。直に箆(ノ)を刻りて用ひたる**はず**箭筈(ヤハ)・篦筈(ヤハ)などいひ、又、別に竹・角・木又は金屬・水晶などにて作りたるを、篦に插入せるもありて、角筈・銀筈などの名あり。和名「筈、夜波須、箭受レ弦處也」盛衰記「小溝といふ所にて陣を取り、矢筈を汰(ヨ)へて射けれども」㊁左右より中央に集まるさまの、前項の矢筈に似たる模樣。㊂紋所の一。矢羽根を二枚向ひ合はせたるが如き形に描く。並(ナラ)矢筈・蓮(ハチス)矢筈・矢筈車などの種類あり。義經千本櫻「矢筈の提灯梶原平三景時、家來數多に十手持たせ」㊃芝居の鬘(カツラ)の一。

やはず 矢筈を取る【名】矢を手に取りて、射んとす。盛衰記「源三位入道殿の、矢筈を取って持ちたまふぞ」義經記「檀の浦にて、互に先がけ爭ひて、矢筈を取りたまひし、その遺恨に」

やはず-あざみ 矢筈薊・飛廉【名】〔植〕菊科に屬する二年生の草。高さ二尺乃至四尺に達す。莖は、刺ある翅を具へ、葉は、互生し、被針形にして、羽狀に分裂し、緣邊に刺あり。花は、紫色又は白色の筒狀花、頭狀花序に排列して開く。山野に自生す。ひれあざみ。おにあざみ。そそき。ひれん。

やはず-がけ 矢筈掛【名】斜に打ち違ふること、又その狀態。はすかけ。たすき。

やはず-ぐさ 矢筈草【名】㊀〔植〕**ぎんばいさう**(銀梅草)に同じ。㊁**やはずさう**(矢筈草)に同じ。

やはず-ぐるま 矢筈車【名】紋所の一。八本の矢筈を、矢の根を中心にして放射狀に描きたるもの。

やはず-さう 野筈草・雞眼草【名】〔植〕豈(ヤ)科に屬する一年生の草。高さ四五寸乃至一尺ほどに達す。葉は、複葉にして、互生し、三箇の長楕圓形、又は倒卵形の小葉より成り、葉腋に、紫色の小蝶形花開く。牧草又は肥料に供す。山野に自生す。

やはずはぎ

やはず-じやう 矢筈狀【名】矢筈に似たる形狀。

やはず-ちがひ 矢筈違【名】紋所の一。十字架の紋より出でたる切竹十文字の一なり。

やはず-つのまた 矢筈角又・矢筈鹿角菜【名】〔植〕紅色藻類に屬する海藻。葉狀

體は、扁平にして、叉狀に分岐し、開展して扇狀をなし、全長尺餘に達し、根部は、盤狀をなして、大抵、數莖簇生し、全體、淡紫赤色乃至深赤褐色を呈す。我國にても、北海道及び三陸以北の本州日本海沿岸に生ずれど、利用未だ普からず、ただ糊料に供するのみ。歐米にては、糊狀物質を取りて、織物・製紙・印刷業等の糊附、ビイル・蜂蜜の透明劑、細菌の培養基、醫藥・食用等に供す。やはずのり。

やはずーにしきぎ 矢筈錦木【名】〔植〕にしきぎ(錦木)[三]に同じ。

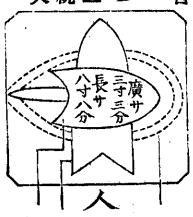
やはずーのーき 矢筈木【名】〔植〕前條に同じ。

やはずーのり 矢筈糊【名】〔植〕やはずつのまた(矢筈角叉)に同じ。

やはずーはぎ 矢筈萩【名】〔植〕やはずさう(矢筈草)に同じ。

やはずーまゆはき 矢筈眉掃【名】〔植〕やはずあざみ(矢筈薊)に同じ。

やはずーもち 矢筈餅【名】昔、具足の祝に用ひし、矢筈狀の餅。



やはずーもんじ 矢筈文字【名】『英Arrow-headed writing』せっけいもんじ(楔形文字)に同じ。

やはずーゑんどう 矢筈豌豆【名】〔植〕豆(マメ)科に屬する一年生の草。莖細長く、葉は、一回羽狀複葉にして、先端に卷鬚あり、小葉は、上端、矢筈狀をなし、葉腋に、紅色の蝶形花、單生して開き、花後、莢を結ぶ。牧草に供す。原野に自生す。のゑんどう。

やばせ 八橋【名】〔地〕伯耆國の舊郡の一。明治二十九年、河村・久米の二郡と合して、東伯(トウハク)郡となる。古は、「やばし」といへり。

やばせ 矢橋【名】〔地〕近江國栗太(クリモト)郡老上(オイ)村の大字。西は琵琶湖に臨みて、大津の石場に對し、相距ること約一里、昔は、山田と共に大津への渡航者甚だ多く、古くは矢早瀬・矢八瀬・矢馳・八橋とも書きたり。平家「或は、滋賀・辛崎(サキ)の濱路に歩み續ける大衆もあり、或は山田・矢馳の湖上に舟押し出す衆徒もあり」

矢橋の歸帆【句】近江國矢橋にて眺むる、琵琶湖上の歸帆。近江八景の一。

やばせーかいだう 矢橋街道【名】〔地〕近江國草津と矢橋との間の街道。距離二十町。

やばせーふね 矢橋舟【名】近江國矢橋より、大津邊へ、客を乘せて往復する船。蕉村「菜の花に皆出しまひぬ矢橋舟」

やはた 八幡【名】『これを名とする土地は、何れも八幡(ハチマン)宮の所在地にして、この神、阿彌陀佛の垂迹(スイジャク)にて、八方に幡(ハタ)を立つるは、阿彌陀佛の三摩耶形(サンマヤギヤウ)なるに因るとの說あれど、又、一說に、始めて八幡(ハチマン)と稱したる神社につきては、大隅の正(ショウ)八幡宮即ち鹿兒島神宮・筥崎(ハコザキ)八幡宮・宇佐八幡宮の三說あれど、何れにもせよ、筥崎八幡宮所在地の郡なる宗像(ムナカタ)郡に式內織幡(ハタオリ)神社、大和國添上(カミツ)郡に式內神波多(ハタ)神社あるを思ひ、又、豐前國宇佐郡八幡村の式內八幡比賣(ヒメ)神社を、伊豫國伊豫郡の式內伊豫豆比子(ヒコ)命神社、肥後國阿蘇郡の式內阿蘇比咩(ヒメ)神社等と對照するに、八幡(ハタ)は、もと機(ハタ)即ち織物に緣故ある土地にて、そこに祀りたる神社なるより、八幡を社名とし、後、地名には、元のまま「やはた」といひ、社名には、音讀して「はちまん」と呼ぶに至りしならんともいふ』[一]〔地〕筑前國遠賀(オンガ)郡にある市。尾倉・大藏・枝光(エダ)の三大字より成る。九州街道・鐵道鹿兒島本線及び九州電氣鐵道の要驛にして、枝光及び八幡の兩驛、この地に在り。明治二十九年、枝光に八幡製鐵所の開設以來急速の發展をなす。[二]〔地〕山城國綴喜(ツヅキ)郡にある町。男山(ヤワタ)の東麓。西部を橋本驛、北部を大谷(オホタニ)、木津川の岸を川口といふ。京都より四里二十八町、郡中第一の都邑なり。[三]〔地〕上總國市原郡にある町。郡の首邑。千葉町の南二里十二町、鐵道木更津線の一驛。[四]〔地〕千葉街道下總國東葛飾(シカガシカ)郡にある町。市川・船橋二驛の間に位す。[五]いはしみづはちまんぐう(石清水八幡宮)に同じ。盛衰記「八幡の御幸(みかう)ありて、御遊(イウヨウ)候ひけり」[六]をさこやまはちまんぐう(男山八幡宮)に同じ。

八幡の八幡不知(ヤハタズ)【句】下總國東葛飾(シカガシカ)郡なる八幡神社の社前路傍にある小藪。古來、これに入る者、祟ありと稱し、四方に垣を繞らして、入るを禁ず。俗に、水戸黃門、此に入りて異人に遇へりと傳ふ。

やばだい 耶馬臺・野馬臺【名】〔地〕『後漢書の倭國傳に「國皆稱王、世世傳統、其大倭王居二耶馬臺國一」、魏志に「南至二耶馬臺國一、女王之所レ都、水行十日、陸行一月」とあり』古來、やまと(日本)の漢譯なりと說き來りたれど、實は、上古、支那人の我國九州の一部を指して呼べるにて、今日の肥後國菊池郡山門(ヤマト)郷又は筑後國山門(ヤマト)郡などの地なるべく、「大倭王」といへるも、必ずしも天皇と解するを要せず、一地方の豪族をいへるなるべしといふ。ばだい。『釋記』史書中、耶摩臺・耶摩堆・耶靡堆・倭人・倭國・倭面等之號甚多」

野馬臺の詩【句】〔文〕吉備眞備(キビノマキビ)入唐の時、かの國の人、眞備の才學を試みんとて、難解のこの詩を讀ましめし、松尾(マツオ)の明神及び長谷寺(ハセデラ)の觀音の靈、蜘蛛と化して、絲を曳き、讀方を教へたりといふ。即ち

始一定一塡一天一本一宗一初一功一元一建
終一臣一君一周一枝一祖一興一治一法一主
谷一孫一走一生一羽一祭一成一終一事一衡
堰一田一魚一膾一翔一世一代一天一工一翼
孫一子一動一戈一葛一百一國一氏一右一輔
昌一微一中一干一後一東一海一姬一司一爲
白一矢一水一寄一故一空一爲一遂一國一宣
龍一瀛一窘一急一城一土一茫一茫一中一鼓
牛一喰一食一人一黃一赤一興一丘一青一鐘
陽一鼠一黑一代一雞一流一華一竭一猿一外
水一丹一盡一後一在一三一王一英一稱一犬
流一天一命一公一百一雄一星一流一飛

やばせか 矢馳八瀬【名】〔地〕近江國矢橋にて眺むる、琵琶湖上の歸帆【句】近江國矢橋にて眺むる、琵琶湖上の歸帆。近江八景の一。

やばだい 耶馬臺・野馬臺【名】〔地〕『後漢書の倭國傳に「國皆稱王、世世傳統、其大倭王居二耶馬臺國一」、魏志に「南至二耶馬臺國一、女王之所レ都、水行十日、陸行一月」とあり』古來、やまと(日本)の漢譯なりと說き來りたれど、實は、上古、支那人の我國九州の一部を指して呼べるにて、今日の肥後國菊池郡山門(ヤマト)郷又は筑後國山門(ヤマト)郡などの地なるべく、「大倭王」といへるも、必ずしも天皇と解するを要せず、一地方の豪族をいへるなるべしといふ。ばだい。『釋記』史書中、耶摩臺・耶摩堆・倭人・倭國・倭面等之號甚多」

野馬臺の詩【句】〔文〕吉備眞備(キビノマキビ)入唐の時、かの國の人、眞備の才學を試みんとて、難解のこの詩を讀ましめし、松尾(マツオ)の明神及び長谷寺(ハセデラ)の觀音の靈、蜘蛛と化して、絲を曳き、讀方を教へたりといふ。即ち

始一定一塡一天一本一宗一初一功一元一建
終一臣一君一周一枝一祖一興一治一法一主
谷一孫一走一生一羽一祭一成一終一事一衡
堰一田一魚一膾一翔一世一代一天一工一翼
孫一子一動一戈一葛一百一國一氏一右一輔
昌一微一中一干一後一東一海一姬一司一爲
白一矢一水一寄一故一空一爲一遂一國一宣
龍一瀛一窘一急一城一土一茫一茫一中一鼓
牛一喰一食一人一黃一赤一興一丘一青一鐘
陽一鼠一黑一代一雞一流一華一竭一猿一外
水一丹一盡一後一在一三一王一英一稱一犬
流一天一命一公一百一雄一星一流一飛

やばたぐ 八幡黑【名】山城國男山の麓、八幡町字大谷(オホタニ)に住める神人たちの製する、純黑に染めたる革。柔軟にして、貴重せらる。

やはたーごばう 八幡牛蒡【名】やはた(八幡)[三]の附近より產する牛蒡。雍州府志「牛蒡八幡山東園村之產爲二名產一、專稱二八幡牛蒡一。園村去二八幡一半里許、元社家大臣氏之所レ住也。……。一說、八幡園牛蒡非二園村一而社人家園之所レ種者也」

やはたーさう 八幡草【名】〔植〕虎耳草(コジソウ)科に屬する多年生の草。溪間の陰地に自生し、葉は、形、大文字草(ダイモンジソウ)に似たれども、それよりも大にして、粗鋸齒あり。淡黃色にして、披針形なる五瓣の花開く。たきなししようま。をとめさう。

やはたーしらず 八幡不知【名】「八幡の八幡不知」を見よ。

やはたーのーみや 八幡宮【名】いはしみづはちまん(石清水八幡)に同じ。源氏「都の內……、近き程に、八幡の宮と申すは、……松浦(マツ)・箱崎、同じ社なり」

やはたはま 八幡濱【名】〔地〕伊豫國西宇和郡にある町。九州に渡る要津にして、巨商尠からず。

やはた-まうで 八幡詣【名】山城國八幡の石清水(いはしみづ)八幡宮に參詣すること。盛衰記「御立願の八幡詣御代官を以て果させおはしけり」

やはた-まねり 八幡參【名】㊀前條に同じ。㊁**やくじんまうで**(厄神詣)に同じ。

やはた-みづひき 八幡水引【名】〔植〕みづひきぐさ(水引草)を見よ。

やはた-みやげ 八幡土産【名】八幡詣する人の購ひ歸る土産物。太祇「丸盆に八幡みやげの弓矢かな」

やはた-むこ 八幡聟【名】能(ノ)の狂言の一。山城國八幡の在所の者、高札を立てて、一人娘のために、一藝ある聟を求めしに、或男、求に應じて、藝を試みられ、失敗する事を作れるもの。

やはた-やま 八幡山【名】〔地〕**をとこやま**(男山)に同じ。

やはちまん 八八幡【名】昔、八月十五日、八幡宮の祭禮の日、八箇所の八幡宮に參詣せしこと。

やばね 矢羽根・箭羽根・矢羽・箭羽【名】矢に刻ぐ鳥の羽根。鷲・鷹・鳶のを第一とし、その他のは雜羽(ザツ)といふ。中にも、鷲を眞鳥(マトリ)といひて、殊に賞翫す。數(ス)又は眞羽(マハ)といひて、殊に賞翫す。數は、普通三片なれども、四片又は二片なるもありて、三立(ミタツ)・四立(ヨタツ)・二立(フタツ)といふ。はぶくら。

やばね-むぎ 矢羽根麥・矢羽麥【名】〔植〕大麥の變種。明治維新後、外國より輸入せしもの。莖も、葉も、やや紅色を帶び、穗は、六條の中、左右二條の花のみ完全に發達結實するによりて、やや矢羽根の如き形をなし、芒は著しく長し。

やはだ 柔肌・柔膚【名】やはらかなる肌。にごはだ。萬葉「妻のみことのたたなづく柔膚すらを劍太刀身に添へ寢ねば」

やはん 夜半【名】よなか。半夜。

やばん 夜番【名】**よばん**(夜番)に同じ。一代男「夜番に戲れ、明方近く、馬子に取り附き、在郷舟に聲を掛け」

やばん 野蠻【名】㊀人民又は國の、開化せぬこと、又、その人民又は國。㊁教育無く、粗暴なること。又その人。野蠻。

やばん-こく 野蠻國【名】野蠻なる國。

やばん-じん 野蠻人【名】野蠻なる人。野蠻國の人。

やはん-てい 夜半亭【名】〔人〕谷口蕪村の號。「に屬す。

やはん-らく 野半樂【名】雅樂の一。平調

やはやは 柔柔【名】『次條の語の轉義』

ほたもち(牡丹餅)を云ふ。〔女の語〕

やはやは 柔柔【貌】いかにもやはらかなるさま。源氏「ただいと若やかにおほどかにて、やはやはとぞたをやぎたまへりし」狂言「鱸庖丁」「茶は、……、湯七分に沫八分むくむくと、やはやは、ほらほらと」

やはら 柔【名】㊀**じうじゆつ**(柔術)に同じ。㊁**いひ**(飯)を云ふ。〔出羽國の方言〕

やはら 柔【貌】**やはらか**(柔)に同じ。**ねやはらこすげ**(根柔小菅)參照。

やはら 柔・徐【副】『前條の語の轉義』**やほら**(徐)に同じ。今昔「和(ナゴ)の起きて、所所を見るに」平家「火のほの暗き方に向ひて、やはら、この刀を拔き出でて、鬢に引當てられたりけるが」

やはらか 柔・軟【貌】物又は心などの、堅からず、剛(ゴウ)からず、又、荒荒しからぬさま。しなやか。柔軟。柔順。源氏「いとやはらかにのたまひて」同「御ぞのけはひ、やはらかなるしも、いとしるかりけり」

やはら-かがり 柔懸【名】荒荒しく見えぬやうに仕懸くること。

やはらかし 柔し・軟し【形一】やはらかなり。柔軟なり。柔順なり。やはらこし。

やはらか-に 柔煮・軟煮【名】蛸(タコ)・貝類、などの肉を、柔かになるやうに煮ること、又、その煮たる物。

やはらか-み 柔味・軟味【名】『みは接尾語、味は假借の文字』柔かなる狀態。

やはら-がみ 柔紙【名】**よしのがみ**(吉野紙)に同じ。

やはらか-もの 柔物【名】『手に柔く感ずる物の義』**きぬもの**(絹物)に同じ。

やはらぎ 和【名】やはらぐこと、又、やはらぎたる物。風俗文選(出女說)「白拍子・流(ナガ)女は、我が朝のやはらぎなるべし」

やはらぐ 和ぐ【動四自】物・心、又、勢など、寬かになる。しなやかになる。おだやかになる。柔軟になる。柔和になる。平和になる。くつろぐ。紀「怡怡、ヨロコビヤハラギテ」狂言「あかがり」「あかぎれ……、ことの外にやはらいで」

和げる光【句】〔佛〕**わくわう**(和光)の直譯。凱陣八島「和げる光のどけき日の出が神」

やはらぐ 和ぐ【動下二他】㊀やはらぐやうにす。やはらがしむ。やはす。古今(序)「をとこ・をんなの中をもやはらげ」㊁わかりやすくす。平易にす。砂石集「世の常の文のやうにやはらげて」

和ぐる光【句】〔佛〕**わくわう**(和光)の直譯。後撰「やはらぐる光にもまた契るかな圖路はれなん嶮の空」

やはら-ぐさ 【名】〔植〕**わらぎ**(黃耆)に同じ。和名「黃耆、夜波良久散」

やはらこし 柔し・軟し【形一】**やはらかし**(柔し)に同じ。續膝栗毛「蕨も、こいつは、根の堅い所(ヒ)ばかりだ。やはらこい所(ヒ)は、内で喰ひまさあ」

やはら-すぎ 柔杉【名】〔植〕**たうすぎ**(唐杉)に同じ。

やはら-すげ 柔菅【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する多年生の草。山野に自生し、高さ一二尺餘に達す。葉は、互生し、狹長にして尖り、平行脈を有し、三縱列に排列し、花は、單性・小形にして、雄花は頂上に、雌花は、數個ありて、葉腋に、何れも穗狀花序をなして開く。

やはら-たまくら 柔手枕【名】やはらかなる手枕。催馬樂(貴川)「ぬき川の瀨瀨のやはら手枕やはらかに寢(メ)る夜は無くて親さくる妻」

やはら-づつ 柔づつ・徐づつ【副】**やはら**(柔柔)に同じ。〔古語〕源氏「やはらづつ引入りたまひぬるけしきなれば」

やはら-づる 柔蔓【名】〔植〕まつぶさ(松房)に同じ。

やはら-とり 柔取【名】**やはら**(柔)㊁を爲すこと、又、その術に巧なる人。雙蝶記「日記、たとひ相撲取(ズリ)でござらうが、やはら取りでござらうが、見つけ次第に縄ぶつてお渡し申さん」

やはらの-かみ 和野紙【名】**よしのがみ**(吉野紙)に同じ。

やはらぶ 和ぶ【動四自】**やはらぐ**(和ぐ)に同じ。源氏「なつかしくやはらびたる方などを、靜かに書きまぜて」(一說に「やはらび」は、「やはらい」の誤にて、**やはらぐ**(和ぐ)の連用形「やはらぎ」の音便なりともいふ)

やはら-やはら 柔柔・徐徐【貌】『**やはら**(柔)を重ねたる語』靜かに少しづつ物するさま。やはらづつ。そろそろ。やはやは。謠曲(龍太鼓)「鼓の聲も、……、わが如く忍音(シノビネ)の、やはらやはら打たうよや」

やはり 矢張【副】『矢張は假借の文字』元よりの樣に。なほ。やっぱり。狂言「見物左衞門」「身共に逢うて、笠を取らせらるるは、どなたぢや。やはり召せ」御伽草紙「さざれいし」「神や佛を念ずる人は、やはりそのしるしの無かるべき」

やばをんな 矢場女【名】矢場㊁㊂に居て、客の相手となる女。

やーひ 野鄙【名】人の性質、物事の趣などの、いやしく下等なること。鄙野。

やひこ 彌彥【名】〔地〕越後國西蒲原(ニシカンバラ)郡にある村。彌彥山の麓にして、北陸街道に當り、彌彥神社所在の地。

やひこ-さん 彌彥山【名】〔地〕越後國西蒲原(ニシカンバラ)郡の西部にある山。全山、火山岩より成る。海拔二一五〇尺に過ぎざれども、平野の一隅に、日本海に臨みて峙てるため、山容秀拔、眺望開豁、この國第一の靈山と稱す。古稱、伊夜比古(ヒコ)の山。

やひこ-じんじや 彌彥神社【名】越後國西蒲原(ニシカンバラ)郡彌彥村に鎭坐せる國幣中社。祭神は天香山(カグヤマ)命。この神、曾て、この國を巡り、海を煮て鹽となし、網

を結びて、魚を獲る方法を、國人に教へたりと傳ふ。創祀年代詳かならざれども、和銅四年、元明天皇神田を寄せ、四至を定め、神殿と攝社・末社とを造營せしめられたり。古稱、伊夜比古(ヒコ)神社。

やびさし 屋庇【名】ひさし(庇)【一】に同じ。字鏡「榮、屋比佐之」

やびつ 矢櫃【名】矢を藏めおくに用ふる櫃。やばこ。義解記「矢櫃一合、せがいの上に、からと置きて」

やびやうし 八拍子【名】雅樂の内、唐樂の樂曲の、八小節にて、一樂節を成すもの。四小節にて、一樂章を成すものは、四拍子(ヨビヤウシ)といひ、太鼓の一鎖を一樂章とする點は、共に同一なり。

やびらき 矢開【名】古、武家にて、幼少の男兒、始めて、鳥獸を射たる時、その鳥獸の肉を調理し、白・赤・黑の餅を備へて祝ひしこと。やぐちびらき。やぐち(矢口)參照。甲陽軍鑑「矢びらきにならざる物の事、猫・庭鳥にて候」

やーびらで 八開手【名】神を拜む時、八度かしは手を打つこと。

やーひらで 八枚手【名】八枚の枚手。多くの枚手。神樂歌(韓神)「八枚手を手に取り持ちてかれ韓神(カラ)のからをぎせらむや」

やひらでーがしは 八枚手槲【名】(植)『枚手には、多くこの葉を用ふるによりていふ』かしは(槲)【一】に同じ。藥鑑草「やひらで柏」

やひろーじろーちどり 八尋白千鳥【名】大さ幾ひろにも達する、白き千鳥。記「八尋白ちどりに化(ナ)りて、天(アメ)に翔りて」

やひろーどの 八尋殿【名】大さ幾尋にも達する、廣大なる宮殿。記「天(アメ)の御柱(ミハシラ)を見立て、八尋殿を見立て給ひて」

やひろーのーはま 八尋濱【名】(地)豐前國築上(チクジヤウ)郡八屋(ハヤ)町の西にある海濱。一名、八劍(ハツルギ)の濱。吹上(フキアゲ)の濱。夫木「春の日の遙かに道の見えつるは八尋の濱を行けばなりけり」

やひろーはたや 八尋機屋【名】大さ幾ひろにも達する、廣大なる機屋。播磨世紀「建二八尋機屋一令三天棚機姫神孫八千千姫命、織二大神神衣一」

やーひろひ 矢拾【名】やとり(矢取)に同じ。

やひろーぼこ 八尋矛【名】長さ幾ひろにも達する、長大なる矛。記「荒ぶる神またまつろはぬ人どもを言向(コトム)けやはせと詔(ノ)りたまひて、……、ひひらぎの八尋矛をたまひき」

やひろーぼこね 八尋矛根【名】前條に同じ。續紀「杠谷樹八尋桙根」

やひろーや 八尋屋【名】廣さ幾ひろにも達するほどの、廣大なる家。記「馳二越八尋屋一、ヤヒロヤヲ……」

やひろーわに 八尋鰐【名】長さ幾ひろにも達する、大いなる鰐。記「八尋わにに化(ナ)りて匍匐(ハ)ひもこよひき」

やーふ 八節・八封【名】結目(ムスビメ)・編目の、多くあること、又その物。**ななふ**(七節)・**さふ**(十符)の類。〔古語〕記「おみの子のやふの柴垣下(ヒ)とよみ地震(ナイ)がより來(キ)ば破(ナ)れむ柴垣」

やーふ 野夫【名】田野に出でて働く男。なかおやぢ。田夫。一代女「野夫打笑ひて、淋しさも、嘸(サゾ)をたよりに忘るると語る」

やふ 野父【名】やじん(野人)に同じ。新可笑記「德に入る道を守り、……、野父には稀なる人ぞかし」

やーふ 野巫【名】『摩訶止觀の卷七に「如三野巫唯解二術一、方救二人一獲二脯胖一、何須學二神農本草一耶」とあり』【一】草野の間に住みて、ただ一術を解するのみなる巫子(ミコ)。【二】〔佛〕寡聞なる禪人の譬。

やーぶ 藪【名】『彌(ヤ)生(フ)の義なりといふ』【一】草木の亂雜にむらがり生えてある土地。古今「日の光やぶし分かねば石(イワ)の上ふりにし里に春も咲きけり」源氏「中務の宮と聞えけるが領(ウ)じたまひける所、あやしき藪になりて侍れば」【二】たかやぶ(竹藪)の略。狂言(貧子爭)「隣の藪から根がさいて、竹の子が出來た」【三】塵芥を捨つる所。ごみすてば。蕪村「子を捨つる藪さへ無くて枯野かな」【四】やぶいしや(藪醫者)の略。鳳俗文選「當時の藪だちを見るに」【五】やぶにらみ(藪睨)【一】の略。

藪から棒【句】!次條の略。重帷子「藪から棒と申さうか、寐耳に水と申さうか」

藪から棒を出す【句】『藪の中より突然棒を突き出す義』だしぬけなる振舞の形容。窓から槍。

藪から棒を突き出す【句】前條に同じ。雄長老百首狂歌「竹の子を盗まれんとてする警固藪から棒を突き出いて持て」

藪に香(カウ)【句】次條の略。〔諺語〕

藪だに香(カウ)の者【句】「藪にも香(カウ)の者」に同じ。〔諺語〕十訓「老いたる尼の、よにあやしげなるが、……と云ひければ、人人恥ぢて、皆立ちにけり。……。藪にかうの者といへる兒女子の譬、旨をたがへざりけり」

藪にて馬鍬(マンガ)【句】『藪の中にて馬鍬を使用する義』とても爲しえぬことを、强ひて爲さんとする譬。〔諺語〕

藪に馬鍬(マンガ)【句】前條の略。〔諺語〕

藪に馬鍬(マンガ)を言ふ【句】『前條の事を爲さんといふ義』無理を言ひ立つる譬。

藪に目【句】「壁に耳」に同じ。〔諺語〕長門本平家「藪に目、壁に耳といふ事あり」

藪に目くばせす【名】風線を他に逸(ソ)らする形容。太平記「獨笑(ヒトリワラ)して、藪に眴(クハセ)してゐたる處に」

藪にも香(カウ)の物【句】次條を見よ。〔諺語〕

藪にも香(カウ)の者【句】藪醫者の中にも、治療の効を奏する者あり。一說に、尾張國熱田の阿波手の森の竹藪の中にて、附近の農夫の、野菜を漬物(ツケモノ)即ち香(カウ)の物にして、熱田の社に奉獻するをいふと。又、一說には、野夫にも、剛の者との義にて、取るに足らぬ者の中にも、價値ある者はあるをいふと。〔諺語〕竹齋物語「藪そすしの竹齋とて、この程、都より下りけり。藪にもかうの者といふ事あれば」膝栗毛「大磯に至り、虎が石を見て、北八詠む。この里の虎は藪にも剛の者おもしの石となりし貞節」

藪の外でも若竹育つ【句】「親は無けれど子は育つ」に同じ。〔諺語〕

藪の中の荆(ヲバ)【句】元來善からぬ者の、周圍より感化せられて、一層惡くなる譬。「麻の中の蓬」の反對。〔諺語〕童子教「隨二順善友一者、如二麻中蓬直一、親二近惡友一者、如二藪中荆棘一」

藪を蹴出しても【句】つまらぬ場所より探し出しても。狂言(嚏の袋)「藪を蹴出しても、あのやうな男は、二人や三人(ヒトリ)は蹴出すれども」

藪をつついて、蛇を出す【句】「毛を吹いて疵を求む」【一】に同じ。〔諺語〕

やぶ 養父【名】【一】〔地〕但馬國五郡の一。郡役所を八鹿(ヤノシ)町に置く。【二】肥前國の舊郡の一。明治二十九年、基肄(キイ)・三根(ミネ)の二郡と合はせて、三養基(ミヤキ)郡を立つ。

やーぶ 野巫【名】やふ(野巫)を見よ。

やぶーい 藪醫【名】次條に同じ。

やぶーいし 藪醫師【名】次條に同じ。

やぶーいしや 藪醫者【名】『藪の、僅かの風にもざわめくを、輕き風邪(ヤブ)にも騷ぎ立つ意に取りなしていふ。一說には、田舍・山中などに住める醫師の、藥種を買ひ求むるに不便なるため、藪などに生ずる草木を採り用ふる義なりと。或は又、藪は假借の文字にて、實はやぶ(野巫)の義なりといふ』術の拙き醫者。庸醫。やぶい。やぶくすし。鳳俗文選「仁不仁論」「されば、とて、かの藪醫者のはやらざるも、仁とはいひがたからん」

藪醫者が七味調合するやう【句】徒にひまどりて、効果のはかばかしからぬ譬。〔諺語〕

藪醫者の玄關【句】「山廊(ヤマ)の玄關」に同じ。〔諺語〕

藪醫者の手柄話【句】手柄を吹聽(ヒケイ)する者は、却って技倆劣れる證據なり。〔諺語〕

藪醫者の病人選【句】〔一〕技倆劣れる醫者の、患者のえりきらひを爲すこと。〔二〕身の程を辨へずして、好嫌(ヨスキキ)を爲すこと。〔諺語〕

藪醫者の藥味箪笥【句】〔一〕技倆拙き醫者の、却って立派なる藥味箪笥を備へ付くること。〔二〕技倆拙き者の、却って立派なる道具を備へ付くること。〔諺語〕

やぶ-いたち 藪鼬【名】藪の中に居る鼬。

やぶい-ちくあん 藪醫竹庵【名】やぶい(藪醫)に同じ。

やぶ-いちご 藪苺【名】〔植〕くさいちご(草苺)に同じ。

やぶい-ばうず 藪醫坊主【名】『昔の醫者は、法體なりしより、坊主といふ』やぶい(藪醫)に同じ。新永代藏「藪醫坊主と侮りて」

やぶ-いも 藪痘・水痘【名】すゐさう(水痘)に同じ。

やぶ-いり 藪入・家父入・養父入【名】『己の家を、藪の中に在りと謙遜していふ。一說には、つさいり(衝突入)より轉じていへる語なりと』農・工・商等の奉公人が、毎年、盆(七月)・正月の十六日前後に、暇を許されて、一日間ほど自家に歸りて寛ぐこと、又その時期、その奉公人。やどいり。やどおり。やどさがり。一代女「やぶ入の春秋を樂しみ」

やー-ぶう 野風【名】〔一〕野を吹く風。のかぜ。〔二〕粗野なる風俗。野蠻なる風習。

やぶ-うぐひす 藪鶯【名】竹藪などの中に居る鶯。野山に居る鶯。俳諧新選「罪の無き藪鶯の高音(ネカ)かな」

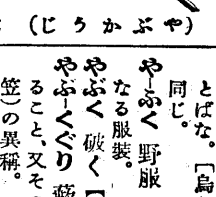
やぶうち-せうち 藪內紹智【名】〔人〕千利休の門人。藪中齋剛中、又は燕庵隱齋と號す。本願寺の良如上人に招致せらる。寛永四年歿す。年八十七(一に九十二)

やぶうち-りう 藪內流【名】茶の湯の一派。千利休の門人。藪內紹智を祖とす。

やぶ-えんごさく 藪延胡索【名】〔植〕罌粟(ケシ)科に屬する多年生の草。有毒にして、球狀の地下莖より、長き總葉柄ある、二回又は三回の掌狀複葉生じ、高さ二三寸に達す。小葉は往往三裂し、淡紫色・不整齊にて、距を有する花、總狀花序をなして開く。山野に自生す。びつちり。

やぶ-か 藪蚊・豹脚蚊【名】〔動〕蚊の一種。普通の蚊よりやや大きく、黑褐色にして、脚部と腹部とに白色の輪紋あり。多くは、樹林・竹藪の中に居り、刺すこと鋭し。しまか。やぶっか。俳諧新選「市仙「涼しさや藪蚊の多い庵ながら」

やぶ-かうじ 藪柑子・紫金牛【名】〔一〕〔植〕紫金牛(ヤブカウジ)科に屬する常綠小灌木。高さ七八寸、莖は草本狀をなし、葉は互生し、形茶の葉に似たり。帶白色にして、赤色の小點ある合瓣花、通常二箇づつ集まりて開き、小球形の果實を結び、熟すれば、紅色を呈す。山野に自生し、又、栽培して觀賞す。あかだま。えびかづら。かねぶ。ししくはず。へいちもく。ぼたん。〔二〕つづらふぢ(葛藤)に同じ。〔三〕からたちばな(唐橘)を云ふ。〔關東・西國の方言〕



(やぶかうじ)

やぶかうじくわ 紫金牛科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門の一科。木本にして、凡そ十八屬・一千種を含み、內、我國に自生し、又は栽培せらるるもの、三屬・十七種を數ふ。やぶかうじ、からたちばな、まんりやう、いづせんりやう、その主なるものなり。しきんぎうくわ。

やぶ-がき 藪垣【名】竹藪をめぐらして垣とせるもの。基佐集「降る雪に篠の青葉も埋もれて拂へば見ゆる寺の藪垣」

やぶ-がくれ 藪隱【名】次條に同じ。萬代「風をいたみ田中の畔(ウ)の藪がくれ日陰のかたにしとど鳴くなり」

やぶ-かげ 藪陰【名】藪のために隱れてある場所。藪のかげ。やぶがくれ。俳諧新選「嘯山「藪陰に春中兀げたり梅の花」

やぶ-がみ 藪神【名】藪陰などにある小き社の神。叢祠の神。甲陽軍鑑「家康果報の義、少少の藪神は、考なりかね申さん」

やぶ-かんざう 藪甘草【名】〔植〕あまちやづる(甘茶蔓)に同じ。

やぶ-からし 藪枯【名】〔一〕〔植〕葡萄科に屬する多年生の草。莖は蔓生にして、卷鬚によりて、他物に纏絡し、葉は互生し、卵形にして、粗齒ある五箇の小葉より成る掌狀複葉をなし、皺葉は赤色、後、淡綠色に變ず。七八月の頃、四瓣黃綠色の小花、聚繖花序をなして開き、豆大の漿果を結ぶ。野山に自生す。かきとほし。ひさごづら。びんぼふかづら。びんぼふづる。びんぼづる。ふくづる。へびうど。やいとばな。〔二〕つづらふぢ(葛藤)に同じ。

やぶく 野服【名】野人の著る衣服。粗野なる服裝。

やぶく 破く【動四他】やぶる(破る)に同じ。

やぶ-くぐり 藪潛【名】〔一〕藪の中をくぐること、又その物。〔二〕にらやまがさ(韮山笠)の異稱。

やぶ-ぐす 藪樟【名】〔植〕いぬぐす(犬楠)に同じ。

やぶ-くすし 藪醫師・藪藥師【名】やぶいしや(藪醫)に同じ。庭訓往來「雖下相二尋醫骨之仁一候上藪藥師等者、間見來歟」竹齋物語「藪くすしの竹齋とて」

やー-くろ 矢袋【名】矢を入れおく袋。

やぶ-くわんざう 藪萱草・千藥萱草【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺。葉は互生し、狹長にして尖り、平行脈を有し、黃赤色の重被花を開く。山野に自生し、又、栽培して、觀賞用に供し、葉は食用とす。おにくわんざう。やへくわんざう。

やぶ-けまん 藪蓮【名】〔植〕むらさきけまん(紫蓮)に同じ。

やぶける 破ける【動下一自】やぶる(破る)に同じ。

やぶ-ごし 藪越【名】藪を隔てて見え、又は事を爲すこと。津國女夫池「藪ごしに覗かれ」

やぶ-ども 八節薦・八封薦【名】八節(フシ)なる薦。神事に、敷物として用ふ。

やぶ-どんにやく 藪蒟蒻【名】〔植〕うらしまさう(浦島草)に同じ。

やぶさ 藪澤【名】藪と澤と。藪又は澤。やぶ。〔二〕藪澤、ヤブサハ」

やぶ-さんざし 藪山査子・藪山槲子【名】〔植〕虎耳草(ユキノシタ)科に屬する落葉灌木。高さ三四尺餘。葉は掌狀に分裂し、葉柄長くして、互生す。小形・綠黃色の離瓣花を開き、小形の漿果を結び、熟すれば、紅色となる。山地に自生し、又、觀賞用として、栽培す。きひよどり。きひよどりじやうど。

やぶさめ 流鏑馬【名】『矢馳馬の轉かといふ』騎射の方式の一。方形の板を串に插みて、三箇所に樹て、水干・綾藺笠(アヤサボ)・行縢(ムカバキ)・籠手(ヒ)の扮裝にて、馬に跨り、馳せつつ、白重籐(シラドウ)の弓に、鏑矢(カブラヤ)を番へて、射るを、本式とす。矢の數は一人三本にて、もと禁裡の馬場殿にて、競馬の手番(テバン)終りし後、左右近衛の射手の、その裝束を改めずして、的を射ることありしの儀、移りて、武家の行事となれるなりといふ。鎌倉時代に、最も盛んに行はれ、神慮を慰めんため、又は、祈願のために、神前にても行へり。みつまと。みつもの(三物)〔二〕〔三〕參照。

やぶ-さめ 【名】〔動〕鳴禽類に屬する鳥。背面は濃き赤褐色、頭上は、邊緣黑褐色なる圓形の羽毛に蔽はるるため、やや魚鱗狀を呈し、嘴は褐色、顏面には、赤褐色の過眼線ありて、その上部には、黃白色の顯著なる眉斑あり。下面は黃白色、喉の兩側と脇とは褐色を帶び、下尾筒は黃褐色、脚は黃白色。西比利亞の東部及び朝鮮に繁殖し、我國にても、北海道以南の地に稀に棲息し、冬季には、支那の南部及び臺灣にも及ぶ。しほさざい。

やぶさめ-ばば 流鏑馬馬場【名】流鏑馬を行ふ馬場。重睡子「馬の庭乘・遠乘と、遙

やぶさ-か 吝【名】〔一〕しはきさま。けち。吝嗇。〔二〕思切(オモヒキリ)の惡きさま。舊態を改むるを難んずるさま。

やぶさし 吝し【形一】やぶさかなり。けちなり。〔古語〕字鏡「嫉、姻也。妬也。也不佐志」

やぶ-さは 藪澤【名】藪と澤と。藪又は澤。やぶ。〔二〕藪澤、ヤブサハ」

やぶ-さんざし 藪山査子・藪山槲子【名】〔植〕虎耳草(ユキノシタ)科に屬する落葉灌木。高さ三四尺餘。葉は掌狀に分裂し、葉柄長くして、互生す。小形・綠黃色の離瓣花を開き、小形の漿果を結び、熟すれば、紅色となる。山地に自生し、又、觀賞用として、栽培す。きひよどり。きひよどりじやうど。

やぶさし 吝し【形一】やぶさかなり。けちなり。〔古語〕字鏡「嫉、姻也。妬也。也不佐志」

やぶさ 藪澤【名】藪と澤と。藪又は澤。やぶ。〔二〕藪澤、ヤブサハ」

やぶ-さか 吝【名】〔一〕しはきさま。けち。吝嗇。〔二〕思切(オモヒキリ)の惡きさま。舊態を改むるを難んずるさま。

やぶさし 吝し【形一】やぶさかなり。けちなり。〔古語〕字鏡「嫉、姻也。妬也。也不佐志」

かに出でし濱の宮、鳥居通の流鏑馬馬場」

やふ-じまり 八節締【名】『やふ(八節)を見よ。じまり(締は縛(シバ)と同義)』結目を幾段にも設け、高く構へたる垣。〔古語〕記「大君の王(オホキミ)の柴垣八節じまり締りもとほし」

やーぶしん 屋普請・家普請【名】家屋の建築。本朝櫻陰比事「この屋普請は、何程になるや、と御尋ありしに」 續七部集「屋普請を春の手すきにとりつけて」

やぶしらず 藪不知【名】「八幡(ヤハタ)の藪知らず」を見よ。

やぶじらみ 藪虱【名】■〔植〕繖形科に屬する多年生の草。高さ二三尺餘、葉は羽狀複葉にて、小葉は深く缺刻し、裂片は披針形をなす。夏季、小形・白色の離瓣花、繖形花序をなして開き、果實は楕圓扁平にして、毛刺多く、衣服など接觸すれば、附著す。原野・路傍等に自生す。のにんじん。〔竊衣〕 ■やぶたばこ(藪烟草)に同じ。

やぶ-すずめ 藪雀【名】藪に居る雀。

やーぶすま 矢衾・矢襖【名】射手多く立ち並びて、矢先を揃ふること。

矢衾を作る【句】射手、多く立ち並びて、矢を射出す。平家「平家の軍兵、矢衾を作りて射ければ、射すくめられて」 太平記「陣を隔てて、矢衾を作って、遠矢に射殺さんと」

やぶ-すねせん 藪水仙・鐵色箭【名】〔植〕

きつねのかみそり(狐剃刀)に同じ。

やーふせぎ 矢防【名】的申(マトナシ)の、飛び來る矢を避くるに用ふる物。板・革などにて作る。やさへ。和名「射乏、夜布世岐。以革爲之、護執弦者之禦矢也」

やぶ-ぜり 藪芹【名】〔植〕**むらさきまん**(紫蔓)に同じ。

やぶ-そてつ 藪蘇鐵・貫衆【名】〔植〕水骨龍(ノウヂ)科に屬する羊齒植物。葉は根莖より生じ、一回奇數羽狀複葉にして、長さ一二尺に達し、鱗毛を具へ、各小葉は革質不等形にして、被包を有する圓形の子囊群を生ず。山野の陰地に自生す。むかでぐさ。ほうじゆしだ。ほそばきじのを。

ひとへしだ。

やぶ-だたみ 藪疊【名】■一面に茂りたる竹藪。梅塵「粹な小梅(ウメ)の隱家(カクガ)へ、心で手と手取りかはし、柾(マサ)の垣根、藪疊」 ■芝居の大道具の一。枠(ワク)に、葉竹を、隙間なく取り附け、竹藪に擬して用ふるもの。

やぶ-たちばな 藪橘【名】〔植〕**やぶかうじ**(藪柑子)■に同じ。

やぶ-たばこ 藪烟草・天名精【名】〔植〕**ゐのしりぐさ**(猪尻草)に同じ。

やぶ-たびらこ 藪田平子【名】〔植〕菊科に屬する草。葉は地下部より叢生すること、蒲公英(タンポポ)のに似、葉叢の間より花莖を生じ、黃色の舌狀花、數箇の小なる頭狀花序をなして開く。山野の陰地に自生す。

やぶたま 藪玉【名】〔植〕次條の略。

やぶたまご 藪玉子【名】〔植〕**ほこりだけ**(埃茸)に同じ。

やぶ-だん 野夫談【名】〔書〕太宰春臺の赤穗義士論を難駁して、義士の行爲を辨護せしもの。一卷。横井也有の著。

やぶぢから 藪力【名】**ばかぢから**(馬鹿力)に同じ。鷹筑波「若竹や十七八の藪力」

やーぶつ 耶佛【名】耶蘇教と佛教と。

やぶ-っ-か 藪蚊【名】〔動〕**やぶか**(藪蚊)の音便。

やぶ-づたひ 藪傳【名】藪を傳ひて行くこと、又その場所。續猿蓑「半殘「涼しさや竹握りゆく藪づたひ」

やぶ-つづき 藪續【名】藪の續きてあること、又その場所。

やぶ-つばき 藪椿【名】〔植〕**たまつばき**(玉椿)四に同じ。芭蕉「藪椿門は葎の若葉かな」

やぶ-てまり 藪手鞠【名】〔植〕■忍冬(カズラ)科に屬する落葉灌木。莖は多く分岐し、高さ一丈内外、葉は對生し、卵形又は楕圓形にして、先端尖り、鋸齒を具へ、表面には、星狀平滑にして暗綠色なれど、裏面には、星狀の軟毛密生す。夏の頃、白色の小花、手鞠の如き形に簇り開き、卵圓形にして、紅色なる果實を結ぶ。へびのき。へみ。へら。

〔蝴蝶樹〕 ■いほたのき(水蠟樹)に同じ。

やぶ-なし 藪梨【名】〔植〕**しらくちづる**(彌猴桃)に同じ。

やぶなみ 藪並【名】〔地〕越中國西礪波(ニシトナミ)郡の村。小矢部(オヤベ)川と澁江川との合流點。式内の古社刑波(オサブ)神社あり。萬葉「やぶなみの里に宿借り春雨にこもりつつむと妹に告げつや」

やぶなみ-じんじや 荆波神社【名】前條「を見よ。

やぶ-にくけい 藪肉桂・天竺桂【名】〔植〕樟(クス)科に屬する常綠喬木。高さ三四丈に達す。皮は、肉桂に似たる香氣と澁味とを有す。葉は對生し、長さ約三寸、革質、全緣にして、長卵形又は長楕圓形をなし、表面褐青色、裏面灰青色を呈す。葉腋より長き花軸生じて、六月頃、淡綠黃色の花被を有する小花を著く。果實は三四房をなして下垂し、熟すれば、黑色を呈す。材は淡黃色にして、木理緻密、建築・器具・薪炭等種種の用に供し、果實よりは、油又は蠟を採取す。暖地に自生す。たぶ。たも。ほとけたらし。まつらにくけい。

やぶ-にんじん 藪人參【名】〔植〕■繖形科に屬する多年生の草。高さ一二尺内外、葉は人參■のに似て、毛あり。白色の小花、繖形花序をなして開く。果實は長くして、他物に附著しやすし。山野に自生す。ながじらみ。わさびにんじん。〔野胡蘿蔔〕 ■かぼらにんじん(川原人參)に同じ。 ■やぶじらみ(藪虱)■に同じ。

やぶ-にらみ 藪睨【名】物を見る時、瞳の斜になる不具。眼球筋の運動自由ならざるに因る。ひがら。ひがらめ。やぶ。斜視。邪視。

やぶ-にらめ 藪睨【名】前條に同じ。

やぶ-ぬし 藪主【名】竹藪の所有主。俳諧古選附錄十番「「藪主に怪しめられて水雞(クイナ)かな」

やーふね 屋船【名】■みあらか。宮殿。〔古語〕 御鎭座本記「瑞舍名號二屋船」 ■やかたぶね(屋形船)の略。藻鹽草「や船」

やふね-くぐのち-の-みこと 屋船久久智命・屋船久久遲命【名】『やふねのみこと(屋船命)を見よ』くぐのちかみ(久久智神)に同じ。祝詞「屋船久久遲命・屋船豐宇氣姫命と、御名(ナ)をば稱へまつりて」

やふねたく 彌船綰く【句】『たく(綰く)■を見よ』力をこめて、幾度も船を漕ぐ。一說に、下記の歌、萬葉集原本に「彌船多氣」とあるは、「彌船八氣(ヤケネ)」の誤にて、危く船にて漕ぎ拔くる義なりと。〔古語〕萬葉「大舟を荒海(アラミ)に漕ぎ出で彌船はけわが見し子等がまみは著(ア)しも」

やふね-さようけびめ-の-みこと 屋船豐受姫命【名】『やふねのみこと(屋船命)を見よ』さゆけひめのかみ(豐受姫神)に同じ。祝詞「屋船久久遲命(クグノチノミコト)・屋船豐宇氣姫命と、御名(ナ)をば稱(ア)へ奉りて」 「じ。

やふね-の-かみ 屋船神【名】次條に同じ。

やふね-の-みこと 屋船命【名】家屋を護り幸(サキ)へたまふといふ神、即ち屋船久久遲命(ヤフネノクグノチノミコト)と屋船豐受姫(ヤフネトヨウケヒメノミコト)命と。前者は木の神、後者は稻の神なるより、家屋は、木にて造り、屋上に草を葺くにつきていふ。祝詞「皇御孫(スメミマ)の命の天(アメ)の御翳(ミカサ)、日の御翳と造り仕へまつれる瑞(ミズ)の御殿(ミアラカ)、汝(イマシ)屋船の命に、天(アメ)つ奇護言(クシヒトゴト)を以ちて、言壽(コトホ)ぎ鎭め白(マウ)さく」

やふね-はく 彌船はく【句】**やふねたく**(彌船綰く)を見よ。

やぶ-はぎ 藪萩【名】〔植〕荳(マメ)科に屬する多年生の草。概形は盜人萩(ヌスビトハギ)に似て、大きく、高さ三四尺、葉は三箇の小葉より成る羽狀複葉にして、葉柄長く、短毛あり。淡紅色の花、穗狀花序をなして開き、果實は莢をなす。山地に自生す。 ■ぬすびとはぎ(盜人萩)に同じ。

やぶ-はさみ 藪はさみ【名】〔植〕**きちじやうさう**(吉祥草)に同じ。

やぶ-はた 藪畑・藪畠【名】竹藪の中にある畑。猿蓑「荊口「藪疇(ヤブウ)や穗麥に屆く藤の花」

やぶ-はら 藪原【名】一面に藪となれる土地。荒廢せる地。〔古語〕源氏「かう物はかなきさまにて、藪原に過したまへる人を」

やぶへび 藪蛇【名】『「藪をつついて蛇を出す」の略』なまじひに手を著けて、反りて、その災を受くること。

やぶーまめ 藪豆【名】〔植〕荳(ズ)科に屬する草。莖は細長くして、他物に纏絡し、葉は互生し、全緣・卵形なる三箇の小葉より成る羽狀複葉をなし、葉柄長し。蝶形・淡紫色の花、總狀花序に開き、地下にも、開かざる花を著け、果實は莢をなし、地下のは、地上のよりも形大きく、種子は食用となる。山野に自生す。ぎんまめ。

やぶまを 藪眞麻【名】〔植〕蕁麻(ムカシ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺、殆ど枝を分たず。葉は對生し、大形の廣卵形にして、先端尖り、質厚くして粗糙、全面に毛茸生ず。葉腋より花軸生じて、四五寸に達し、單性の花、穗狀に排列して、雌雄同株に開く。原野に自生す。

やぶみ 矢文【名】〔一〕矢を射る時、結びつけて、敵軍の中に送る文書。〔二〕『矢の催促の文(ミ)の義』續けざまに送る手紙。「日文(ヒブミ)・矢文」參照。

やぶ-むら 藪村【名】竹藪の中にある村。一茶「藪村の貧乏なれて夕すずみ」

やぶ-むらさき 藪紫【名】〔植〕〔一〕馬鞭(ウマムチ)科に屬する落葉灌木。高さ一丈餘、嫩き時は、莖にも、葉にも、毛あり。葉は對生し、長卵形にして尖り、鋸齒を具ふ。葉腋に、小形・淡紫色の合瓣花簇生し、莓密毛を具へ、球形・紫色の小核果を結ぶ。山地に自生し、又、栽培して觀賞す。けむらさき。やまむらさき。〔白棠子樹〕〔二〕こむらさき(小紫)〔三〕に同じ。

やぶん 夜分【名】〔一〕やほん(夜半)に同じ。〔二〕夜の時。よる。晩。

やぶ-めうが 藪襄荷・杜若【名】〔植〕鴨跖草(ツユクサ)科に屬する多年生の草。高さ一二尺、葉は互生し、全緣・廣披針形又は長卵形にして尖り、夏、中心より花莖を抽き、白色・六瓣の花被を有する花、圓錐花序をなして開き、黑綠色の實を絶ぶ。山野の陰地に自生す。はなめうが。めうがさう。

やぶ-もみぢ 藪楓【名】〔植〕ちりめんもみぢ(縮緬楓)に同じ。

やぶやく 藪役【名】江戸時代に、山城國などにて、竹藪に就き、竹を以て上納せしめし雜稅。

やぶやしき 藪屋敷【名】竹藪に圍まれたる屋敷。續猿蓑(椎然)「水仙の花のみだれや藪屋敷」

やぶらん 藪蘭・麥門冬【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。葉は細長くして、叢生し、平行脈を有し、長さ一二尺に達す。葉叢の間より、花莖生じて、高さ一尺餘に達し、淡紫色の花、三箇乃至五箇づつ、まばらに穗狀をなして開き、小球形にして、光澤ある紫黑色の果實を結ぶ。山野の陰地に自生す。地下部は、藥用に供す。ばくもんどう。やますげ。

やぶ-りんご 藪林檎【名】〔植〕やまなし(山梨)に同じ。

やぶる 破る・敗る【動四他】〔一〕形を崩しこはれしむ。きずつけ害ふ。裂く。やぶく。破壞す。毀損す。〔二〕成り立たしめず。亂す。傾く。源氏「人の言ふこと破りたまふ、いとめざまし」〔三〕負かす。敗北せしむ。擊破す。「敵軍を破る」

やぶる 破る・敗る【動下二自】〔一〕形崩れこはる。きずつき害はる。裂く。やぶける。破壞す。毀損す。破損す。破滅す。〔二〕成り立たず。亂る。傾く。三代實錄「御願の破れぬべきに依りて」〔三〕負く。敗北す。宇治「皇子の軍破れて」破るる布も、二重(ヘ)は久し【句】〔一〕破れやすき布も、二重に合はする時は、永く保つ。〔二〕弱き者も、相合する時は、强くなる。〔諺語〕破れても小袖【句】「捩斷(モギ)れても錦に同じ。〔諺語〕

やぶれ 破【名】破るること、又、破れたること、又その物事。徒然「明(リヤウ)障子のやぶればかりを…張られければ」雙生隅田川「只今の御對顏、やぶれの端」

やぶれ-あふぎ 破扇【名】紙の破れたる扇。やれあふぎ。

やぶれ-いへ 破家【名】破れたる家。こはれいへ。やぶれや。破屋。芭蕉「葎さへ若葉やさしや破家」

やぶれ-がき 破垣【名】破れこはれたる垣。やれがき。太祇「朝顏も實がちになりぬ破垣」

やぶれ-かさ 破傘・破笠【名】〔一〕破れたるさしがさ又はかぶりがさ。新六「さりとてもさせる事なき破傘骨を折りてぞ君に仕へし」謠曲卒都婆小町「破蓑・破笠」〔二〕〔植〕菊科に屬する草。高さ二三尺、葉は下部のは、葉柄長く、楯形をなして深裂し、暗色の冠毛を具ふる帶白色の筒狀花、頭狀花序をなして開く。山地に自生す。きつねのかさ。「兎兒傘」

やぶれ-かたびら 破帷子【名】破れし帷子。發心集「きたなげなる破帷子一つ著て」

やぶれ-かぶれ 破かぶれ【名】やけを起すこと。自暴自棄。鶉鷸合戰「やぶれかぶれ、手勢ばかりにて押し寄せて」平假名盛衰記「もうやぶれかぶれぢや」

やぶれ-ぐつ 破沓・破靴【名】破れたる靴。やれぐつ。弊履。破靴を棄つるやうに【句】「敝履(ヘイリ)を棄つるが如し」に同じ。

やぶれ-ぐるま 破車【句】破れこはれたる車。やれぐるま。宇治「破車に乘りて」謠曲「葵上」「誰とも見えぬ上臈の、破車に召されたるに」破車でわが惡い【句】『「わが」と「輪が」とを言ひかけたる語』他人の惡きにあらず、己が惡きなりとの意を洒落ていふ語。〔諺語〕緋縮緬卯月の紅葉「わが善きに、人の惡しきがあらばこそ、破車でわが惡い」

やぶれ-ごもち 破子持【名】こもち(子持)〔一〕を罵りていふ語。ふるこもち。空穗「あな見苦し、なその破子持が物は見る」

やぶれ-ごよみ 破曆【名】破れたる曆。ふるごよみ。緋縮緬卯月の紅葉「破曆にあらねども、あだな月日を數へたよなら」

やぶれ-ごろも 破衣【名】〔一〕破れたる衣服。敝衣。〔二〕わが衣服の謙稱。狂言(通圓)「この床に、破衣を片敷きて、夢の契を待たうよ」

やぶれ-ざうり 破草履【名】破れこはれたる草履。やれざうり。

やぶれ-さや 破鞘【名】破れこはれたる鞘。一代女「破鞘の脇指(ザシ)」

やぶれ-しやうが 破生薑【名】〔植〕やぶめうが(藪襄荷)に同じ。

やぶれ-しやうじ 破障子【名】紙の破れたる障子。伊賀越道中雙六「破障子一枚十二文、緣(ヘリ)の取れた角行燈(ヤウドン)八文」破障子で、骨ばかり【句】單に骨ばかり(痩せて、肉殆ど無し)との意を洒落ていふ語。日本振袖始「この爺(ザ)と寢たらば、破障子で骨ばかり」

やぶれ-そう 破僧【名】はそう(破僧)に同じ。七一職人歌合「やぶれ僧烏帽子著たれば小めらはの男と見てや尻に附くらん」

やぶれ-だたみ 破疊【名】破れたる疊。伊賀越道中雙六「御禮の詞も出ませぬと、破疊に喰ひつけば」

やぶれ-ついぢ 破築地【名】崩れこはれたる築地。新六「崩れ添ふ破築地の犬走ふまへ所もなきわが身かな」

やぶれ-づきん 破頭巾【名】破れたる頭巾。耳に掛る【句】耳ざはりなる破頭巾、耳に掛る意を、洒落ていふ語。

やぶれ-どき 破時【名】破るべき時期。二代男「鶴菱の下著一つ、これも破時になりぬ」

やぶれ-ぬのこ 破布子【名】破れたる布子。五十年忌歌念佛・清十郎は、破布子一枚で、非人の體(テイ)にはなったれども」

やぶれ-ば 破葉【名】破れたる葉。俳諧古選(調柳)「破葉の石蕗(ブキ)に頬出す馳かな」

やぶれ-ばかま 破袴【名】破れたる袴。敝袴。猿蓑彩鳳「年の暮破袴の幾くだり」

やぶれ-まはる 破廻る【動四自】一體に破る。堀川波の鼓「御身が衣の、破れまはって見苦しさよ」

やぶれ-みの 破蓑【名】破れたる蓑。謠曲(卒都婆小町)「破蓑・破笠、面(オモ)ばかりも隱さねば」

やぶれんが 藪連歌【名】價値なき連歌。筑波問答「連歌に、いかにしたり顔に思はん人も世のゆるさねば、藪連歌など申すものになりはて侍る事なり」

やぶれ-め 破目【名】破れたる部分。破れたる小口(ヂリ)。「じ。やれめ。

やぶれ-や 破屋【名】やぶれいへ(破家)に同じ。

やへ 八重【名】一八つ又は幾つも重なりてあること、又その物。榮花「八重の組垣」二ちゆうべん(重瓣)に同じ。(一重(セヒ)に對して) 俳諧古選和及「初櫻八重の一重の好なし」 「外」を見よ。八重この外(ト)【句】「八重込(コヤ)の八重の榊葉【句】やへさかき(八重榊)に同じ。後鳥羽院集「神風や八重の榊葉重ねても御裳濯(スソ)川の末ぞ遊けき」

やへ 八重【副】幾重にも。多く重なりて。萬葉「わが身一つに七重花咲く八重花咲くと申しはやさね」古今「白雲の八重降りしけるか へる山か へるが へるも老いにけるかな」源氏「世をいとふ心は山に通へども八重立つ雲を君や隔つる」八重立つ山【句】雲の八重立つ山といふべきを略していへる語。源氏「大井川のわたり……、八重立つ山は、更に島がくれにも劣らざりけるを」

やへ-あさ 八重麻【名】模樣の一。麻の葉の、線の複雜なるもの。

やへ-あめ 八重雨【名】重なりて降る雨。しきりに降る雨。新可笑記「八重雨、玉を散らして、止む事なく」

やへ-いい 野兵【名】のぶし(野伏)に同じ。

やへ-いり 八重入【名】やついり(八入)に同じ。

やへ-うめ 八重梅【名】一八重咲の梅の花。出藍集「八重梅の立枝がちなる木の間よりもる月さへや香にかをるらん」二紋所の一。普通の梅の各瓣の間間に、一瓣づつ、先端を現はして描き添へたるもの。

やへ-おび 八重帶【名】八重に卷きたる帶。若鳳俗「鼠色の八重帶」

やへ-おり 八重織【名】絲を幾重にも厚く織ること、又その織物。曾我五人兄弟「八重織に、鑾縫(スシヒ)縫うたる打帶の、厚さは板の如くなるを」

やへ-がき 八重垣【名】一幾重にも作り構へたる垣。やへまがき。記「八雲立つ出雲(イヅ)八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」二香(カ)の一。香(カウ)古くよく、上馬又は法華經の趣ありて、火末は楊貴妃に同じ。

やへ-がすみ 八重霞【名】幾重にも立ちこめたる霞。新後撰「難波潟刈り葺く蘆の八重霞ひまこそなけれ春の曙」

やへがすみ-なにはのはまをぎ 八重霞浪華濱荻【名】新内節の一曲。お國・六三(サウ)の情死の事を作れるもの。淺田一鳥・並木丈助の合作。寛延二年三月十八日、大阪南新家福島屋清兵衞方抱(カカ)の遊女お國が、久寶寺町の大工六三郎と、西横堀に投身して情死せし事實と、同じ日、又、北の新地の遊女かしくといふ者の、前年、酒狂にて、兄を殺しし罪にて、獄門に懸けられし事、及び、翌十九日、神崎(ヤウギ)にて、十右衞門といふ者の馬方と口論せし事とを配合して、仕組めるものといふ。

やへ-からはな 八重唐花【名】紋所の一。普通の唐花を重瓣の形に描きたるもの。

やへ-ききやう 八重桔梗【名】紋所の一。普通の桔梗を、重瓣の形に描きたるもの。

やへ-ぎく 八重菊【名】一八野咲の菊。後拾遺「八重菊に蓮の露をおき添へて九品までぐつつろはしつる」二模樣の一。一代女「空色の昔小袖に、八重菊・鹿子紋(カノコ)を散らし」三緒の結方の一。四香(カ)の一。質は伽羅(キヤ)、香厚く、薫移り易し。

やへ-きんぽうげ 八重金鳳毛・八重毛茛【名】〔植〕きんぽうげ(金鳳毛)に同じ。

やへ-ぎり 八重霧【名】幾重にも立ちこめたる霧。堀文「彦星は天のおしでの八重霧に道蹈みまど へ又や歸ると」

やへぎり 八重桐【名】近松門左衞門作の淨瑠璃「嫗山姥(コモヂヤ)」中の人物。八重桐喋舌(ベリ)の場【句】こもちやまうば(嫗山姥)を見よ。

やへ-ぐさり 八重鎖【名】らんてんぐさり(らんてん鎖)に同じ。

やへ-くみびし 八重組菱【名】模樣の一。菱形の各角を※の形に組み合はせて列ね描きたるもの。

やへ-ぐも 八重雲【名】一八重に立ちこめたる雲。やへたなぐも。祝詞「天(ア)の磐門(イハ)を押し披きて、天の八重雲を、いつの千別(チワ)に千別きて」二紋所の一。一つの雲形を中心として、周圍に、旋轉せる五つの雲を描きたるもの。

やへぐも-がくり 八重雲隱【名】次條に同じ。萬葉「天雲(アマモ)の八重雲がくり鳴る神の音にのみやも聞きわたりなむ」

やへぐも-がくれ 八重雲隱【名】八重雲の中に入りて、形の見えぬこと、又その狀態。堀文「雁がねは霞を分けて今日よりや八重雲がくれ歸りゆくらん」

やへ-くわんざう 八重萱草【名】〔植〕やぶくわんざう(藪萱草)に同じ。

やへ-こ 八重込【名】次條を見よ。八重込の外【句】幾重ともなく仕込めたる所の外。一説には、八重・九重・十重の外、又、一説には、八重・九重・十重の略なりと。〔古語〕紀「打橋の詰(ツ)の遊に出てませ子玉手の家のやへこのとに」

やへ-とうばい 八重紅梅【名】八重咲の紅梅。榮花「八重紅梅を、露かかりながら押し折りたるやうなる御匂なり」

やへ-さか 屋部坂【名】〔地〕大和國高市郡にある坂。萬葉「阿部郎女、屋部坂歌」

やへ-さかき 八重榊【名】枝ごとに、木綿(ユフ)を掛けたる、多くの榊。八重の榊葉。農式帳「太玉串(マガタシ)並天(アメ)八重佐加岐」

やへ-ざき 八重咲【名】花の、八重一に咲くこと。重瓣に咲くこと。

やへ-ざくら 八重櫻【名】〔植〕一山櫻の變種。花は八重にて、大きく、四月頃、他の櫻に後れ、葉に先だちて咲き、普通、帶紅白色を呈す。變種多し。なはしろざくら。ぼたんざくら。詞花「いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな」二女房の裝束に、五衣(イツツ)・表著(ウハ)に至るまで、櫻一又は三を著ることにて、櫻づくしといふに同じかるべしといふ。榮花「女院よりの御裝束は、八重櫻を、えもいはず匂はせたまへり」三紋所の一。正面より見たる櫻の花瓣の間に、同じく櫻の花瓣の一端を配りたるもの。

やへ-しば 八重芝【名】〔植〕かうらいしば(高麗芝)に同じ。

やへ-じふもんじ 八重十文字【名】幾重にも縱横に絡みつくること。やへむじん。

やへ-す 八重簀【名】魚(ウ)の一種。一枚の竹の簀を、一方に魚の入口だけ殘して、回の形に、二重の圓形をなすやうに立てまはし、一旦入りたる魚の出でられぬやうにせるもの。やへとこ。

やへ-すがき 八重簀垣【名】幾重にも作り構へたる簀がき。散木「心あひの風ほのめかせば八重簀がき隙(ヒマ)なきをちに立ちやすらんと」

やへ-するがのかみ 矢部駿河守【名】〔人〕德川氏の世臣。名は定謙、通稱は彦五郎。兩番より、駿河・大阪の町奉行を經て、勘定奉行に進み、後、江戸奉行となり、良吏の聞高く、又、意を北邊の事に注ぎ、人を得撫(ウブ)に遣して、視察せしめ、且つ露國の情勢を探らしむ。天保十三年、事に坐して、禁錮せられ、尋いで歿す。

やへ-だたみ 八重疊【名】幾重にも敷き重ねたる敷物。紀「八重席薦、ヤヘダタミ」

やへ-だたみ 八重疊【枕】こもだたみ(薦疊)に同じ。萬葉「八重疊へぐりの山に」

やへ-たなぐも 八重棚雲【名】幾重にも重なれる棚雲。やへぐも。記「天(ア)の八重たな雲を押し分けて」

やへ-べつ 屋別・家屋【名】こべつ(戸別)に同じ。運歩色葉集「屋別、ヤベツ」

やへ-つつじ 八重躑躅【名】八重咲の躑躅。沙石集「八重つつじを持ちたりけるを」

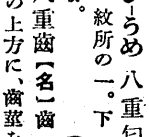
やへ-つぼみ 八重蕾・八重莟【名】八重咲の花の蕾。若鳳俗「玉芙蓉、……葉がくれの八重つぼみ、雨待ちて、今なりと開くべき粧」 「同じ。

やへ-どこ 八重床【名】やへす(八重簀)に

やへ-なみ 八重波・八重浪【名】幾重にも立つ波。萬葉「朝よひに滿ち來る潮の八重波に靡く玉藻の」

やへ-なり 八重生【名】一つの草木に、實の多く重なりて生(ナ)ること、又その草木。〔植〕ぶんどう(文豆)に同じ。

やへにほひ-うめ 八重匂梅【名】紋所の一。下圖を見よ。



(八重匂梅)

やへ-ば 八重齒【名】齒並(ハナ)の上方に、齒茎を破りて、別に生ゆる齒。おさへば。おそば。そひば。

やへ-はたぐも 八重旗雲【名】幾重にも重なれる旗雲。謠曲(月八幡)「八重旗雲を しるべにて、……石清水(イハシミ)いさぎよき靈社を現じたまへり」

やへ-ばな 八重花【名】八重咲の花。重瓣の花。

やへ-ひがき 八重檜垣【名】幾重にも作り構へたる檜垣。新六「年月にしげる葎の八重檜垣もとはまばらに思ひしものを」

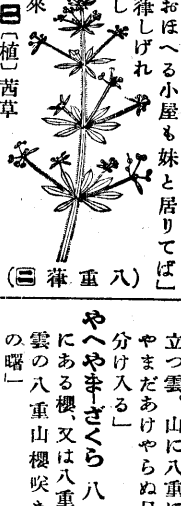
やへ-ひとへ 八重一重【名】〔植〕きりがやつ(桐谷)に同じ。

やへ-ぶき 八重葺【名】屋根を、幾重にも葺くこと。後拾遺「淨の國のこやとも人をいふべきに隙(ヒマ)こそなけれ葺の八重葺」

やへ-ふくべ 八重瓢【名】〔植〕へうたん(瓢簞)[1]に同じ。

やへ-まがき 八重籬【名】幾重にも造り構へたる籬。やへがき。釋迦如來誕生會「袖打掛くる八重籬」

やへ-むぐら 八重葎【名】[1]多く重なり茂れるむぐら。萬葉「珠敷ける家も何せむ八重葎おほへる小屋も妹と居りてば」拾遺「八重葎しげれる宿の寂しきに人こそ見えね秋は來にけり」[2]〔植〕茜草(ネアカ)科に屬する一年生又は二年の草。莖細長く、刺毛ありて、諸物に攀緣し、高さ二尺乃至五尺に達す。葉は小くして、倒披針形をなし、輪生し、刺毛あり、下層の葉は八葉づつなるを通例とす。五六月頃、葉腋より花梗對生し、帶綠黃色の小花、聚繖花序をなして開く。果實は紫色を呈す。むぐら。みぞむぐら。〔猪殃殃〕



(八重葎)(二)

やへ-むぐん 八重無盡【名】やへじふもんじ(八重十文字)に同じ。

やへ-もも 八重桃【名】八重咲の桃。新六「幾かへり千代も重なる八重桃の花のさかりに君ぞあひ見ん」

やへ-や 八重八重【名】やへ(八重)を强めていふ語。榮花「八重山吹をひねり重ねて、八重八重の隔には、青き單(ヒトエ)を重ねつつ」夫木「百草(ハナモ)の花の弟となりぬれば八重八重にのみ見ゆる白菊」

八重八重の弟【句】或人に對して、多くの弟を隔てたる、遙かに末の弟。大鏡「中納言殿を八重八重の弟にて、越え奉りたまへりける」

八重八重の人【句】前條に同じ。清輔集「弟ども、四位にて侍るに、今まで許されぬ由など、申文に書きて奉るとて、八重八重の人だにのぼる位山老ひぬる身には苦しかりけり」

やへ-やま 八重山【名】[1]幾重にも立ち重なれる山。五百重(イホ)山の類。萬葉「朝霞八重山越えて時鳥卯の花べから鳴きて越ゆなり」[2]〔地〕出雲國飯石(イヒシ)郡にある山。高さ三九九〇尺。[3]〔地〕琉球國五郡の一。八重山列島全部を含み、唯一の八重山村ありて、郡役所を、その大字大濱に設く。

やへやま-ぐも 八重山雲【名】八重山に立つ雲。山に八重に立つ雲。壬三集「東路やまだあけやらぬ足柄の八重山雲を今ぞ分け入る」

やへやま-ざくら 八重山櫻【名】八重山にある櫻、又は八重咲の山櫻。新勅撰「白雲の八重山櫻咲きにけり所もさらぬ春の曙」

やへやま-じま 八重山島【名】〔地〕やへやまれつたう(八重山列島)に同じ。

やへやまじやうふ 八重山上布【名】『琉球の八重山島より多く產するによりていふ』さつまじやうふ(薩摩上布)に同じ。

やへ-やまぶき 八重山吹【名】[1]八重咲の山吹。空穗「八重山吹の高く面白き、咲き出でたり」[2]濃き山吹色なるべしといふ。榮花「御かたの女房は、八重山吹を折りたれば」同「御禊には、八重山吹をひねり重ねて」

やへやまれつたう 八重山列島【名】〔地〕琉球の一群島。我國、西南諸島中の最西に位し、臺灣と相距ること六十海里、石垣島・竹富島・小濱(ヲバ)島・西表(ヰリオモテ)島・鳩間(ハトマ)島・波照間(ハテル)島・新城(アラグク)島・黑島・與那國(ヨナ)島の九島より成る。全列島を合はせて、八重山郡とし、八重山村の一村あるのみ。

やほ 彌帆・矢帆【名】大船の舳部に張る、小帆(本帆(ホボ))に對して。太平記「檣を吹き折られて、彌帆にて走る船もあり」

彌帆の柱【句】やほばしら(彌帆柱)に同じ。義經記「彌帆の柱を立てて」

やほ 野堡【名】やはう(矢堡)に同じ。

やほ 八百【數】[1]百の八倍。はっぴやく。[2]數へきれぬほどの多くの數。いほ。ちぢ。無數。

やほ 野暮【名】[1]內情を知らぬこと、又その人。〔江戸時代の遊廓の語〕[2]世情に通ぜぬこと、又その人。不粹(ブスイ)。無風流。やぼてん。

野暮と化物【句】次條及び「化物も引込む時分」を見よ。梅暦「汐合(シホ)の程を量りて、……引込む時分の間(マ)を見合はせ、野暮と化物に喩へらるることなかれ」

野暮と化物は、箱根から此方には居ぬ【句】「箱根から此方には野暮と化物は無い」に同じ。〔諺語〕和合人「野暮と化物は、江戸開闢このかた、箱根からこっちには根だやしと、相場が立ってあるのだ」「を見よ。

やほ-あひ 八百會【名】「潮(シホ)の八百會」八百會の神【句】潮の八百會にいます神。夫木「世の中を天(アメ)の御陰(ミカ)の內になせ荒潮あみて八百會の神」

やほあひ-はいしよ 八百會拜所【名】全國の大小の神祇を集めて禮拜する所。伊勢神宮を始とし、他の神社にても、これを設く。

やほ-あふぎ 野暮扇【名】野暮なる扇。洞房語園「年玉に、殿さま・かみさまに貰きたる黑骨の女扇は、やぼ扇とて、古めかし」

やほ-か 八百日【名】極めて多くの日數。

いほか(五百日)參照。〔古語〕八百日往く【句】往くに、極めて多くの日數を要する程遠し。〔古語〕萬葉「八百日往く濱の眞砂もわが戀に豈まさらじか沖つ島守」

やほ-かひ 八百穎【名】極めて多くの穎。〔古語〕祝詞「初穗をば、千穎(チカ)・八百穎に奉り置きて」

やほこ 八矛【名】多くの矛。萬葉「田道間守(モリモリ)常世(トコヨ)に渡り八矛持ちまゐて來(コ)し時」

やほ-しね 八百稻【名】極めて多くの稻。やちしね。〔古語〕祝詞「初穗は……、汁にも、穎(カヒ)にも、八百稻・千稻(チネ)に引き居(ス)ゑて、秋の祭に奉らむと」

やほ-じめ 【名】次條を見よ。「に同じ。

やほじめの鰭【句】「やましめの鰭」

やほ-すけ 野暮助【名】『人名に擬して、助といふ』やほたらう(野暮太郎)に同じ。松の葉「散茶がよひの野暮助が、駒を早めて乘ったりや、通りん坊」

やほ-ぜん 八百善【名】江戸時代より、淺草三谷(ヤツ)橋向、新鳥越(シンユエ)にありし料理店。享和の頃、すでに都下第一の稱あり き。寛天見聞記「享保の頃、淺草三谷橋の向に、八百善といふ料理屋流行す」

やほたて 八穗蓼【名】多くの穗を著けたる蓼。順集「庭見れば八穗蓼生ひて荒れにけり辛くしてだに君が訪はぬに」

やほたてを 八穗蓼を【枕】『をは感嘆の助詞』八穗蓼の穗を摘むといふ意より、ほつみ(穗積)にかけていふ。萬葉「童(ワラハ)ども草はな苅りそ八穗蓼を穗積の朝臣(アソ)が腋草(ワキクサ)を苅れ」

やぼたらう 野暮太郎【名】『人名に擬して、太郎といふ』野暮なる人。やぼすけ。二代男「皆目(カイ)の野暮太郎は、むごうてならず」

やーぼち 夜發【名】つじぎみ(辻君)に同じ。和名「遊女。……、有二夜發之名一、俗云二也保知一。本文未レ詳。但或説云、白晝遊行謂二之遊女一、待レ夜而發二其淫奔一者謂二之夜發一」一見よ。

やぼぢ 八百路【名】「潮(シホ)の八百路」を

やぼちやう 八百長【名】一『八百屋を營業として、通稱を八百長と呼ばれし者、相撲協會の年寄某と、平生碁を圍むに、優勝の技倆あるに關らず、巧みに、一勝一敗の結果に終るやうにあしらひしによりていふとぞ』相撲を取るに、雙方の妥協の下に、外形だけを、眞に勝敗を爭ふ如く見せかくること、又その取方の相撲。二雙方の妥協の下に、いかにも眞面目なるが如く見せかけて、攻擊し、防禦すること。

やーほつ 夜發【名】**やーほち**(夜發)に同じ。一代男「やほつの輩(カラ)、一日ぐらし、月雪の降る事も、盆も正月も知らず」

やぼてりーがき やぼてり柿【名】染色の一。濃き柿色なるべし。重井筒「京の吉岡紙子染(ガミ)、やぼてり柿か、薄柿か」

やぼーてん 野暮天【名】**やぼ**(野暮)を强めていふ語。古朽木「淺黄の裏は、野暮天の看板にして、近來の前句附(ツケ)には、淺黄裏といへば、武太(タ)の事に通じ」

やぼーに 八百土・八百丹【名】多くの土。次條參照。

やぼにーよし 八百土吉・八百丹吉【枕】『よしは感嘆の助辭にて、「吉」は假借の文字。あをによし(青丹吉)參照』家などを建つるに、先づ多くの土を築(ツ)き固むる意にて、地名の きづき(柝築)にかけていふ。記「纒向(マキム)の日代(ヒシ)の宮は……八百土よしいきづきの宮」

やーほばしら 矢帆柱・彌帆柱【名】角帆を使用する船にて、その先端に、自在に起伏し得るやうにして取り附くる短き柱。

やほーへ 八百重【名】極めて多く重なること、又その場所。五百重(イホ)。

やぼや 八百屋【名】一野菜類を賣る家、又その人。あをものや。二學問・技術・趣味などの、雜駁なること、又その人。

やぼやーだな 八百屋店【名】野菜類を賣る家。やぼや。二代男「世わたりのために、八百屋だなを出だして」

やぼやーばうふう 八百屋防風【名】〔植〕**ばうふう**(防風)に同じ。二**はまばうふう**(濱防風)に同じ。

やぼやーもの 八百屋物【名】八百屋にて賣る商品、即ち野菜類。あをもの。せんざいもの。俳諧新選「雑草」「八百屋物の通の中や山櫻」

やぼーよろづ 八百萬【數】數の極めて多きこと。ちよろづ。やよろづ。「古語」祝詞「天(ア)の高市(ダケ)に、八百萬の神たちを神集(カム)へ集(ウ)へたまひ」萬葉「八百よろづ千萬(チヨロ)神の神つどひつどひいまして」

やぼら【副】やをら(徐)を見よ。字音「世の中のすさまじきままには、やぼら唐にや渡りなまし」

やぼらんぢ 耶僕蘭日【名】〔植〕芸香(ウン)科に屬する灌木。葉は羽狀複葉にて、互生し、各小葉は楕圓形にて全緣。透明なる小點あり。有柄の小花、長き總狀花序に開く。原產地は南米ブラジル。

やぼらんぢーえふ 耶僕蘭日葉【名】耶僕蘭日の葉、發汗藥に供す。

やーぼろ 矢母衣【名】矢の數を敵に知らるるを防ぐために、紗にて作りて、籠(ラ)ヒ又は空穗(ホ)に懸けて用ひし、一種の母衣。

やま 山【名】一陸地の著しく高く隆起せる處。山嶽。二近江國の比叡山の特稱。〔平安朝時代より室町時代にかけての語〕捨玉「世の中に山てふ山は多かれど山とは比叡の御山をぞいふ」宇治「山の横川(ヨカ)に、賀能知院といふ僧」三『比叡山にあるよりいふ』**えんりやくじ**(延曆寺)の異稱。(寺一に對して)古今「山の法師」源氏「山の座主(ザス)、何くれとやんごとなき僧ども」四前項の山一の形に擬へて作れる物。源氏「廣くおもしろき宮の池・山など」榮花「唐衣(ヒタ)・裳の腰など、山を立て、水を流し」五積み重なりてあること、又その物の譬。謠曲「東岸居士」「罪障の山には、いつとなく煩惱(ボウノ)の雲厚うして」六みささぎ。陵墓。源氏「院の御墓拜み奉りたまふとて、北山へ詣でたまふ。……。御山(ヤマ)に參りはべるを、御言傳やと聞えたまふに」七物の最も高き部分。浮世風呂「鑑甲の襠……、山の恰好から、何から、今風で」八事件の進み極まりたる所。たうげ。終極。九疱瘡に罹りて、生死の分れ目に在ること、又その時期。犬子集「見れども山はまだ遠かなりといふ句に氣短におぼしめすなよこのもがさ」十事件・文章などの、最も肝要なる部分。八笑人「これからが山だ」十一山は高く尊げにて、動かぬものなるよりいふ『仰ぎ頼む物の譬。後撰「笠取山の山と頼みし君をおきて涙の雨に濡れつつぞ行く」十二かなやま(金山)の略。(金儲の目的にて、採掘するにつきていふ)十三『金山(カナヤ)の採掘は、僥倖を目的とするよりいふ』萬一の幸を希ひて爲すわざ。やまごと。野心。射倖。八笑人「この旦那が山があってなさるつもりだが」十四狩猟なること、又その人。十五能樂の作物の一。引廻(ヒキマ)とて、幕のごとき物を、竹に掛け、地上の山に擬するもの。曲の種類によりては、柴・柳・紅葉などを插すことあり。十六**やまぼこ**(山鉾)を見よ。狂言「祇園會」「祇園會も近日になりました。今日は、山の役人を極めうと存じ、……。私は、鼓の役を致しましよ」十七三錢を云ふ。〔揚弓・大弓にて、錢を賭物にする場合の隠語〕十八草刈と臭かりとを言ひかけたるなりといふ』かはや。便所。〔甲斐國の方言〕甲陽軍鑑「信玄公、開所を山と仰せられ候故」風俗文選「長崎曙解「甲斐の名將の分別所に定め、山といふ隠語を殘し」十九**まゆ**(眉)一を云ふ。〔常陸國上總國の方言〕二十紋所の一。「山」の字を、種種の形に模樣化せるもの。二十一**とこやま**(床山)の略。〔芝居の語〕

山が來(ク)る【句】根切(ネキ)の脇の土崩る。

山片掛(カタ)く【句】次條に同じ。萬葉「足引の山片掛けて家居せし峰の嵐に安き寢(イ)もねず」

山片附(カタ)く【句】山の方に片寄り添ふ。萬葉「雪をおきて海をな戀ひそ足引の山片就きて家居らす君」千載「タまぐれ山片つきて立つ鳥の羽音に鷹を合はせつるかな」

山が見える【句】『やま(山)八が見ゆれば、その後は、下坂(ザカリ)になりて落ちつく義』前途の見込立つ。「語」

山から里【句】「寺から里」に同じ。〔諺語〕

山千、海千【句】「山に千年、海に千年」の略。〔諺語〕

山高きが故に、貴からず【句】『實語教に「山高故不レ貴、以有レ樹爲レ貴。人肥故不レ貴、以有レ智爲レ貴」とあるに本づく』外觀よりも、實質に於てすぐるるに非ざれば、貴しとするに足らず。〔諺語〕

山高く、水長し【句】『范仲淹の嚴先生祠堂記に「歌曰、雲山蒼蒼、江水洋洋、先生之風、山高水長」とあるに本づく』德高く、心の大なるを、山川に譬へていふ語。〔諺語〕

山と言へば川【句】人の言ふに、殊更に反對すること。右といへば左。**やまかはせんせい**(山川先生)參照。〔諺語〕

山に入る【句】一山中に分け入る。二田家して、山住の身となる。伊勢「といひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りにける」盛衰記「山に入り、市に交はりても、遁れがたきは無常の使」

山に木あれば、工則ちこれを度(カ)る【句】『左傳の隱公十一年の條に「周諺有レ之、曰、山有レ木、工則度レ之、賓有レ禮、主則擇レ之」とあり』山に樹木ある時は、工人は、その長短を度り、木材として、適所に使用す。〔諺語〕

山に千年、海に千年【句】種種の境遇に身を處して、老獪の性質を養ふ。山千、海千。〔諺語〕

山に躓かずして、垤に躓く【句】『韓非子の3篇に「諺云、不レ躓二於山一而躓二於垤一」とあり』大事に對しては、行動を慎むため、失敗せずして、小事には、侮りやすきため、却ってややもすれば失敗す。〔諺語〕

山に船を乗せかく【句】實行すること能はざる形容。

山眠る【句】『「郭熙の山水訓に「冬山慘淡而如レ睡」とあり』冬季、山の草木の落葉して、淋しく見ゆる形容。芭蕉「山はなほ眠りあいてや雪のひま」

山の梁(ウツ)【句】〔動〕『論語の鄉黨篇に「山梁雌雉」とあるは、山路に架けたる橋梁の義なるを誤解せるに本づく』きじ(雉)の異稱。さんりやう。散木「たるきに鳥をさしたりけるを見て、たるきには山のうつばりさしてけり軒端に海の月をやどして」

山の上に又ある山【句】「山上山有リ」に同じ。萬葉「色二山上復有山(イヤヤマ)」

山のおこん【句】『おこんはこんこん即ち狐の義なるべし』「つばな抜こ」の遊戯にて、鬼になりたる者。〔兒供の語〕

山の陰【句】やまかげ(山陰)に同じ。源氏「斯く屢ば立ち寄せ給ふ光に、山の陰も少し物あきらむる心ちしてなん」

山の神【句】一山を守護し又は支配する神。さんじん。和名「山神、夜末乃賀美」二やまこ(山子)三に同じ。字鏡集「魑、ヤマノカミ・ヤマコ・スダマ」三妻。主婦。〔俚語〕狂言「花子」「この小袖は花子様の形見なれども、山の神が見たらば、よい事はあるまい」浮世風呂「山の神の功(コウ)を經(ヘ)たのだから、餘所のおかみさんたちとは、勝手が違ふだらう」「て怒る。

山の神が荒れる【句】妻が嫉妬心に

山の久住者(クチュウサ)【句】一久しく山どもりして修行する人。二比叡山延暦寺に十二年の山ごもりをしたる比丘(ビク)。やまごもり(山籠)參照。讃岐典侍日記「山の久住者ども召したれば、十二人の供・從者參りて、加持まゐり」平家「山の久住者圓應を殺害す」

山の如し【句】一『詩經の小雅に「如レ山如レ阜、如レ岡如レ陸」とあり』物の多くある譬。二積り重なれる形容。庭訓往來「面拜之後、中絶良久、遺恨如レ山」同「積鬱如レ山」

山の聲【句】『「山、萬歳を呼ぶ」を見よ』山の木の、風に吹かれて立つる音を、君が代を祝する聲に聞きなしていふ語。子日行幸和歌序「岸のほとり、色清う澄み、山の聲、高う呼ばふ」

山の盛【句】山の草木の眺佳き季節。空穂「山のさかりは、九月上(ジ)の十日の程になん」

山の幸(サチ)【句】やまさち(山幸)に同じ。紀「山幸、ヤマノサチ」

山の滴(シタタリ)【句】山の岩間などより滴り落つる水。謡曲(枕慈童)「所は酈縣の山の滴、菊水の流」

山の雫【名】山の木などより落つる雫。萬葉「足引の山のしづくに妹待つと吾立ち濡れぬ山のしづくに」

山の末【句】山の頂上。山頂。山巔。紀「山根、ヤマノスエ」祝詞「高山の末、短山(ヤヒロ)の末に上りまして」

山の司【句】一山を管理する役の人。紀「虞人、ヤマノツカサ」二つかさ(阜)を見よ』山の最も高き所。山頂。山巔。萬葉「朝にけに霜は置くらし高圓(マクカ)の山の司の色づく見れば」三こだま(木靈)に同じ。

山の刀禰(ネ)【句】山賊の首魁。秉燭集「旅人行(ク)く間に、盜人途ひたり。旅人は簾(ス)く旅籠(ハタ)も空しきを早くいましね山のとねたち」

山の錦【句】山の草木の、秋に入りて、紅葉せる美しさを、錦に譬へていふ語。源氏「山の錦はまだしう侍り。野邊の色こそさかりに侍りけれ」

山の主【句】一やまぬし(山主)に同じ。二山の座主(ザス)、即ち比叡山延暦寺の天台座主。拾玉「山の座主……、峰の雪心の底を聞きし時山の主とはかねて知りにき」

山の主はおれ一人【句】他人を寄せつけず、獨占して威張る形容。お山の大將已一人。〔諺語〕

山の念佛【名】比叡山延暦寺にて、陰曆八月十一日より七日間、その常行三昧(ジョウギョウザンマイ)堂に於て行ふ念佛。最澄の弟子圓仁(慈覺大師)の遷化(セン)の翌年より、その遺言に基きて、不斷となる。秉花「八月山の念佛は、慈覺大師の始め行ひたまへるなり」

山の端【句】山のはし。萬葉「山のはにいさよふ月の出でむかとわが待つ君が夜はくだちつつ」

山の端近し【句】日・月の光のために、遠山の端きはやかに見えて、常よりも距離近きやうに感ずる形容。赴「夕日、花やかにさして、山のは、いと近くなりたるに」源氏「夜深き月の、明らかにさし出でて、山の端近き心ちするに」

山の吹【名】山の横道なりといふ。

山の袋【句】夾條に同じ。赤染衛門集「いにしへを思ひ入りけんたよりなき山の袋のあはれなるかな」

山の懷【句】やまふところ(山懷)に同じ。源氏「山のふところより出で來たる人」

山の蓬萊ほど有る【句】「山ほど有る」に同じ。

山の御社(ヤシロ)【句】山城國比叡山の東麓にある日吉(ヒエ)神社。近江國に屬す。秉花「このひまびまには、山の御社の八講行はせたまふ」

山の物【句】一山に棲める鳥獸、又、山に產する果實など。「山野(ヤヤ)の物」參照。空穂「猿の渡るとも知らで、……、山の物の音すとて」二雉・山鳥・兎などの稱。(田の物に對して)〔鷹飼の語〕

山の井【句】山地にて、水のたまりて、自然に井となれるもの。やまゐ。萬葉「安積(カサ)山影さへ見ゆる山の井の淺き心をわが思はなくに」赴「井は、……。山の井、さしも淺きためしになりはじめけん」

山は小き壤(クツチ)を讓らず【句】「泰山は土壤を讓らず」に同じ。〔諺語〕十訓「文に曰く、山は小き壤を讓らず、この故に、高きことをなす、……といへり」

山、萬歳を呼ばふ【句】『漢書の武帝紀に「朕用二事泰山一……東卒咸聞下呼萬歳一者三上」とありて、註に「荀悅曰、萬歳、山神稱レ之也」と見ゆ』山の草木の、風に吹かれて音を立つるを、世の泰平を壽くものと見なしていふ語。延喜式「山稱二萬歳一」

山ほど有る【句】物事の澤山ある形容。

山も狹に【句】山も狹(セ)きほどに。夫木「山もせに咲ける躑躅は佐保姫に雖が脫ぎかけしゆるし色ぞも」

山笑ふ【句】『郭熙の山水訓に「春山淡冶而如レ笑」とあり』春季、山の霞たなびき、花咲きなどして、のどかなる形容。續俳家奇人談(蔀石)「山笑ひ谷こたへたる雪解(ユキ)かな」

山を上ぐ【句】疱瘡に罹りて、危險時期を經過す。太平記忠臣講談「獨の子が重い疱瘡、……、疱山も、山を上げ兼ねる」

山を鑄る【句】『「海を煮る」を見よ』

山より金屬を採掘して、錢を鑄る。

山を掛ける【句】「山を張る」に同じ。

山を疊む【句】土を盛り上げて、築山を造る。秉花「山をたたむべきやう、池を掘るべきさま」「を見よ。

山を樂しむ【句】「仁者は山を樂しむ」

山を爲す【句】山の如く積り重なる。山積す。五人女「庭藏見れば、元渡(モトタリ)の唐綾(カラ)、山をなし」

山を拔く【句】「力山を拔き、氣は世を蓋ふ」を見よ。太平記「項羽が山を拔く力、魯陽が日を返す勢ありとも」俳諧古選「子葉「山を拔く力も折れて松の雪」

山を蹈む【句】山路を行く。山ぶみをす。萬葉「通路(カヨヒ)の大木實山(オオミヤマ)美濃の山蹠けと人は蹈めども」

山を張る【句】やま(山)吉の方法を取る。僥倖を望みて、事を爲す。

山を焼く【句】山焼(ヤキ)を爲す。

やーま 矢間【名】一矢を射中つべき甲冑の際間(マヒキ)。盛衰記「矢、雨の足のごとくに飛び來りけれども、甲冑をゆり合はせ、ゆり合はせ、矢間をたばひて振舞へば、……、裏かく矢こそ無かけれ」二さま(狭間)二に同じ。

やま【名】『やめ・よまを見よ』つりいと(釣絲)を云ふ。〔東國の方言〕

やま 夜摩・耶摩(梵 Yāma)【名】〔佛〕一『具さには Suyāma(蘇夜摩)にて、善分・時分など譯す。善く時分を知りて、五欲の樂を受くといふ』やまてん(夜摩天)に同じ。二えんま(閻魔)に同じ。

やま 耶摩【名】〔地〕岩代國十郡の一。郡役所を喜多方(カタ)町に置く。

やま 山【助數】一かたまりつづに積み上げて賣る品物の數をいふに用ふる語。「一山十錢」

やまーあげ 山上【名】山を上ぐること。疱瘡に罹りて、危險時期の經過すること。太平記忠臣講釋「孫の太市、疱瘡も、山上仕舞うたれば、大役濟んだ」〔魂草〕に同じ。

やまーあさ 山麻【名】〔植〕はんごんさう(反魂草)に同じ。

やまーあざみ 山薊【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。莖は高さ二尺乃至四尺、上部に於て分岐し、葉は楕圓形にして尖頂、深き缺刻ありて、羽狀をなし、各裂片は鋸齒を具へ、葉脚は莖を抱擁し、又、莖にも、葉にも刺毛あり。秋、淡紅紫色の花、梢上に、頭狀花序をなして開く。山野に自生す。おほあざみ。和名大薊、夜萬阿佐美。生二山谷一者也」

やまーあぢさゐ 山紫陽花【名】〔植〕こあぢさゐ(小紫陽花)に同じ。

やまーあは 山粟【名】〔植〕禾本科に屬する草。高さ三四尺、葉は互生し、狹長にして尖、やや長き舌を具へ、綠色又は帶紫色の花、多數に集まりて、長き圓錐花序をなして開く。山野に自生す。

やまーあひ 山間【名】一山と山との間。やま。さんかん。廣野(心苗)「山あひの花を夕日に見出したり」二馬の頭の上、左右の耳の間の部分。

やまーあふご 山枕【名】山かせぎの時に用ふる枕。一代男「山枕振り上げて、……、唯打ち殺せといふ」

やまーあらし 山嵐【名】一山に吹く嵐。二柔術の手の一。右手にて、敵の右の袖を、外部より次第に深く摑み、敵の體の浮き上り來れるを機として、その體を釣り上げながら、自己の右足を、敵の右足の裸よりやや上に位する部分に當てて、敵の右の前方に大きく投ぐるもの。三淺草なる金龍山の境内を、茶店等に立ち寄りながらひやかし歩くこと。和合人「茶見公なんぞのは、山あらしといふだけのものだ」

やまーあらし 山荒・豪猪【名】〔動〕嚙齒類に屬する哺乳動物。體長約二尺、尾短く、頭部及び胴の前部の毛は普通なれども、背部の毛は長くして硬化し、末端尖鋭にして、棘狀をなす。印度・亞弗利加等に產し、土中に穴居し、夜間出でて、草木の根又は果實を食す。

(しらあまや)

やまーあらら ぎ 山蘭【名】〔植〕一こぶし(辛夷)に同じ。和名「辛夷、夜萬阿良良岐。一云、古不之波之加美。其子可ノ噉ノ之」二ぎやうじやにんにく(行者韮)に同じ。

やまーあり 山蟻【名】山に居る蟻。葉村「山蟻の覆道作る牡丹かな」「やまぶみ。

やまーあるぎ 山歩【名】山をあるくこと。

やまーあね 山藍・山靛【名】〔植〕大戟(ダイゲキ)科に屬する多年生の草。高さ一二尺、葉は對生し、楕圓形にして、先端尖り、鋸齒あり、毛茸疎生し、長葉柄を具ふ。初夏、葉腋に、黃綠色なる單性の小花、穗狀に聚まり、雌雄異株或は同株に開き、蒴果を結ぶ。山野の陰地に自生し、その液汁を採りて、昔は青色の染料に供したり。萬葉「山藍もて摺れる衣(キヌ)著て」

やまあゐずり 山藍摺【名】山藍の液汁にて、白き布に模樣を摺り附くること、又その摺り附けたる布。あをずり。

やまいち 山市【名】やまいちまる(山市丸)の略。

やまーいちご 山苺【名】〔植〕くさいちご(草苺)に同じ。

やまーいちごつなぎ 山苺繋【名】〔植〕かはらいちごつなぎ(川原苺繋)に同じ。

やまいち-まる 山市丸【名】江戸時代に、江戸柳橋より出でし遊山船の名。墨水銷夏錄「嚴有公の御代、屋形船といふもの、頗にはやり出し、數百艘出來し、中にも、すぐれて大屋形船は熊市丸・山市丸なり。……座敷八間に臺所一間ありし故に、八閒一(イチ)の名を附けしなり」

やまーいぬ 山犬【名】一山に棲める犬。野生の犬。二〔動〕食肉類に屬する獸。形、犬に似て、痩せ、眼は一入鋭くして、性獰猛なり。〔豺〕

やまーいへ 山家【名】やまが(山家)に同じ。重之集「山家は住みてあだにぞなりぬべき春の心も花と見ゆれば」「位」に同じ。

やまーいぼ 山疣【名】〔植〕みぞごゐ(溝五位)に同じ。

やまーいも 山芋・薯蕷【名】〔植〕やまのいも(山芋)に同じ。字鏡「署預、山伊母」

やまーいり 山入【名】山に分け入ること。

やまいり-さんぢゆう 山入三重【名】三重(ミヘ)の一。

やまーう 夜盲【名】とりめ(鳥目)に同じ。

やまーうぐひす 山鶯【名】一山に棲める鶯。野生の鶯。さんあう。二〔植〕やまるりさう(山瑠璃草)に同じ。

やまーうさぎ 山兎【名】山に棲める兎。野生の兎。のうさぎ。

やまーうし 矢申【名】まさまうし(的申)に同じ。

やまう-しやう 夜盲病【名】やまう(夜盲)に同じ。

やまーうつぎ 山空木・山溲疏【名】〔植〕一こくさぎ(小臭木)に同じ。〔蜀漆〕字鏡「蜀漆、山宇豆支之苗」二はこねうつぎ(箱根空木)に同じ。

やまーうつぼ 山空穗・山靫【名】山狩の時に用ふる空穗ならんとも、製作の簡單なる空穗ならんともいふ。平家「破腹卷綴り著て、山靫・竹箙(ヤナエ)に、矢ども少少差し、搔負ひ、搔負ひ」

やまーうど 山人【名】やまびと(山人)一の音便。著聞「道命阿闍梨、修行し歩きけるに、やまうどの、物を食はせたりけるを」

やまーうど 病人【名】『病人(ヤマヒト)の略及び音便』びやうにん(病人)に同じ。蕉雨「やまうどになりぬべく歎く」

やまーうど 山獨活【名】山に生えたる獨活。野生の獨活。太鼓「山うどに木賃の飯の忘られぬ」

やまーうば 山姥【名】一深山に棲めりといふ女の怪物。やまをんな。謠曲「山姥」「山姥の山めぐりするといふ事を、曲舞(マヒ)に作って」二謠曲の一。都の女の、信濃國ちげろの山といふに宿りて、山姥の山めぐりを見る事を作れるもの。一休和尚の作といふ。三能面(ノウメン)の一。山姥の曲にのみ用ふる、老女の容貌なるもの。四常磐津節の一。本外題は「薪荷雪間市川(ヤイヤヤウヤハ)」。近松の嫗山姥(ヤウモヒ)の一節より脱化せしものにて、山嫗を、坂田藏人の寡婦とし、その一子怪童丸と共に、足柄山に棲めるを、源頼光の家臣、怪童丸と力くらべして、都に伴なひ歸り、頼光の臣に取り立てて、名を坂田の金時と改めさせんといふに、山姥、我子の立身を喜びながら、別離を悲しむといふ筋のもの。五前記の謠曲及び俗曲の主人公なる老嫗。風俗文選(公平傳)「坂田公平は、何れの處の人といふ事を知らず。源頼義朝臣に仕へて、公時(キン)が男(コム)、山姥が孫とは言ひ傳ふ」

山姥の申子【句】山姥(一)顧懸して、產まれし子。和合人「山姥の申子を見るやうに、むっくり起きると、山めぐり」

山姥の山廻【句】山姥(一)の、深山の中をめぐりあるくこと。古より、童話に

傳へられ、舞にもせしものと見ゆ。謠曲(山姥)「まづ、この歌の次第とやらんに、よし足引の山姥が山めぐりするを作られたり」

やまうば-の-かもじ 山姥髢【名】〔植〕さるをがせ(松蘿)に同じ。

やまうば-のをがせ 山姥麻桙【名】〔植〕さるをがせ(松蘿)に同じ。

やま-うばら 山茨【名】〔植〕しゆろさう(棕櫚草)に同じ。和名「藜蘆、夜末字波良。一云、之之乃久比能岐」

やま-うめ 山梅【名】㊀山中に生ずる梅。野生の梅。天神記「山梅・野梅・ずばい梅」㊁(植)やまもも(山桃)に同じ。[楊梅]枕「やまうめ、いたどりは」

やまうり 山賣【名】㊀鑛山を賣りつくるを業とする人。雙生隔田川「奥州の金山賣ったる山賣の山こかし」㊁いかさま物を賣りつけて、利益を貪る人。永代藏「博奕仲間(バクチ)・山賣、……、いかに身過なればとて、人外なる手業する事」㊂『助數詞のやま(山)を見よ』古びたる物、又は品劣れる物などを、一山づつに積みて賣ること。

やま-うるし 山漆【名】㊀〔植〕漆樹科に屬する落葉喬木。高さ二三丈。概形は漆樹に似、六七月頃、黄色の小花、複總狀花序をなして開き、扇球形にして、硬毛の密生せる小核果を結ぶ。山地に自生し、用途も亦、漆樹に似たり。㊁つたうるし(蔦漆)に同じ。

やま-えび 山葡萄【名】〔植〕やまぶだう(山葡萄)に同じ。

やま-おく 山奥【名】山の奥。山中。

やま-おくり 山送【名】死骸を山に送りて葬ること。のべおくり。撰集抄「山おくりして、泣く泣く烟となし」

やま-おしろい 山白粉【名】いぼたらふ(疣取蠟)に同じ。

やま-おすが 山おすが【名】『やま(山)㊁は三錢、おすがは五錢なるより、それを加へたる意にていふ』八錢を云ふ。すがやま。たに。[楊弓・大弓にて、錢を賭物にする場合の隱語]

やま-おろし 山颪【名】㊀次條の略。㊁芝居の囃の一。大太鼓にて、風の吹き荒るる音に擬するもの。荒場(バア)・化物の出づる場などに用ふ。山颪の風【句】山より吹きおろす風。山のおろし。山おろし。おろし。萬葉「君が見むその日までには山おろしの風な吹きそと」

やま-おろし 山卸【名】清酒の釀造に於て、先づ酒母の原料を半切桶に仕込み、翌日に至りて、櫂にて擂り碎くこと。もとじ。

やま-か〈分【名】いづみかげ(伊豆御影)に同じ。

やま-が 山家【名】山にある家。義經記「山がに居たりける德人」俳諧雪選石燭「木枯に吹き散りさうな山家かな」

やま-が 山家【名】㊀〔地〕丹波國何鹿(カイノ)郡にある村。綾部(アヤ)町の東二里。舞鶴街道に當り、德川時代には、大字應栖(ウカス)に、谷氏の陣屋ありたり。㊁明治の初年設置の縣の一。四年七月、丹波國舊山家藩の地に立てしもの。同年十一月、京都府に入る。

やま-が 山鹿【名】㊀〔地〕肥後國の舊郡の一。明治二十九年、山本郡と合して、鹿本(カモ)郡となる。㊁肥後國鹿本(カモ)郡にある町。熊本・福岡間の國道に當り、溫泉あるがために、郡中第一の賑を呈す。熊本市の北七里弱。㊂筑前國遠賀(オガ)郡にありし村。明治三十八年、蘆屋町の一部となる。平家、太宰府を落ち、筥崎の海上に漂ひしが、山鹿兵藤次秀遠に迎へられて、一時山鹿城に入りし事、源平盛衰記に見ゆ。

やま-が 山香【名】〔地〕遠江國の舊郡の一。元慶年、磐田郡より分置せられ、地域は、大略東は大井川の上流、西は天龍川に及びしが、中古に至り、磐田・周智(チス)の兩郡に分屬するに至れり。

やま-かうばし 山胡桃【名】〔植〕樟(クス)科に屬する落葉灌木。高さ五六尺餘、葉は互生し、楕圓形にして、先端尖り、全緣にして毛あり。莖にも、葉にも、香氣あり。淡黄色の小花、數箇づつ簇り開き、小き漿果を結び、熟すれば黑色を呈す。山地に自生す。いぬたんば。こなじは。とりつけしば。とりつけのき。

やま-かうもり 山蝙蝠【名】〔動〕翼手類に屬する哺乳動物。蝙蝠の一種。油蟲㊃よりやや大形なるもの。

やま-かがし 赤棟蛇【名】〔動〕蛇類に屬する爬蟲類。全身に紅黑色の細斑あり、背部の鱗片は、一列十九箇を算し、山林又は深溪などに棲み、擧動敏捷にして、無毒なり。

やま-かがち 蟒蛇【名】〔動〕『かがちを見よ』うはばみ(蟒蛇)㊀に同じ。[古語]和名「蟒蛇。兼名苑云、蟒、夜萬加加智。蛇之最大也」

やま-かがみ 山鏡・白蘞・山蘿蔔【名】〔植〕かがみぐさ(鏡草)㊁に同じ。和名「白蘞、夜末加加美」「雙「白蘞、山加我牟」

やま-かがむ 白蘞【名】〔植〕前條の轉。字

やま-がき 山柿【名】㊀〔植〕柿の一品種。實は正圓形にして小く、枝上に簇り著くこと、葡萄の如く、熟すれば、淡黄黑色となる。味甘し。未熟の果實より澁汁を製す。又、老木の心材は、黑色にして、盆・箱などに作る。あまがき。ぶだうがき。まめがき。めめがき。みやまがき。やましぶ。[丁香柿・鹿心柿]和名「鹿心柿、夜末加岐柿之小而長者也」㊁すずめうり(雀瓜)に同じ。

やま-かぐら 山神樂【名】山城國石清水八幡宮にて行ふ神樂。(里神樂に對して)

やま-がくる 山隱る【動四自】次條に同じ。[古語]萬葉「家さかりいます吾妹(ギ)をとどめかね山隱りつれ心どもなし」

やま-がくる 山隱る【動下二自】山の彼方に隱る。みやまがくる。後撰「山がくれ消えせぬ雪のわびしきは君まつの葉にかかりてぞふる」

やま-がくれ 山隱【名】山がくること、又、山がくれたる處。やまかげ。源氏「入道の領(リヤウ)じ占めたる所所、海の面(オモ)にも、山隱にも」

やま-かけ 山掛【名】㊀高く積むこと。㊁やまかけざうふ(山掛豆腐)の略。㊂やまかけそば(山掛蕎麥)の略。㊃雉の頭の一部。

やま-かげ 山影【名】山の、水面などに映れる姿。さんえい。

やま-かげ 山陰【名】㊀山の蔭えて、日などのよく當らぬ處。やまがくれ。やましたかげ。さんいん。源氏「さるべき人の使だに稀なる山陰に、いと珍しく待ち喜びたまひて」㊁やまかづらかげ(山靈蔭)に同じ。[山蔭]萬葉「齋串(シグ)立て靈(タマ)据ゑまつる祝部(ハフリ)がうずの山蔭見ればともしも」㊂たつた(龍田)㊂に同じ。

やま-かけ-そば 山掛蕎麥【名】『やま(山)はやまいも(山芋)の略』蕎麥の種物(シナモ)の一。薯蕷汁(ジル)を掛けたるもの。

やま-かけ-どうふ 山掛豆腐【名】『やま(山)はやまいも(山芋)の略』いもかけどうふ(芋掛豆腐)に同じ。

やま-かご 山駕籠【名】竹にて、手輕に編みたる駕籠。底の形圓く、屋根は網代(アジ)に造り、垂(レ)無く、丸棒又は丸竹を釣手として舁き、道中、殊に山路に用ふ。古の篋輿(ハコ)の類。やまのりもの。さんよ。

やま-かし 【名】〔植〕つづらふぢ(木防巳)に同じ。

やま-がしは 山槲・山柏【名】〔植〕ちよれい(猪苓)に同じ。本草和名「猪苓、也末加之波」

やまが-じんざぶもん 山鹿甚五左衛門【名】〔人〕やまがそかう(山鹿素行)に同じ。

やまが-じやう 山鹿城【名】やまが(山鹿)㊂を見よ。

やま-かしゆう 山何首烏・粘魚鬚【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する灌木。莖生にして、莖と枝とに刺多く、葉は膜質にして薄く、卵形又は心臟形を呈して、先端尖り、三條乃至五條の縱脈あり。托葉は卷鬚に變ず。淺綠色の花被六片、稀には五片を有する小花、通常六箇づつ簇り、繖形花序をなして開き、圓形の漿果を結び、熟すれば、黑色となる。深山に自生し、山民は、

春、嫩葉を採りて食し、又、果實を食ふ。

やまがずまひ 山家住 【名】山家にすまふこと。

やまかぜ 山風 【名】一山を吹く風。山より吹き來る風。さんぷう。 二〔地〕さんぷう(山風)三に同じ。

山風の庵(イホ)【句】山風に吹かるる庵。玉葉「絶えず吹く松の嵐に聞き馴れて時雨も分かぬ山風の庵」

やまかせぎ 山稼 【名】山中にて働くこと、即ち獵人・樵夫などの職業。

やまがそかう 山鹿素行 【名】〔人〕山鹿流兵學の祖。名は高祐、字は子敬、通稱は甚五左衛門。會津(ヤマト)の人。儒學を林羅山に、兵學を北條氏長に學び、才文武を兼ね、赤穗侯に客臣となる。後、辭して、その徒に教授し、程朱の理氣心性を疑ひ、聖教要錄を著して、その說を斥けしため、幕府の忌諱に觸れ、寛政六年赤穗に幽せられしが、十年赦されて、江戸に歸り、貞享二年歿す。年六十四。文武神道に亙れる著書十數あり。明治四十年正四位を贈らる。

やまがそだち 山家育 【名】山家にて育つこと、又、その育ちたる人。やまがもの。

やまがた 山方 【名】山中、又はその周圍。

やまがた 山縣 【名】山地にあるあがた。〔古語〕記「山がたに蒔きし青葉も」

やまがた 山方 【名】比叡山延曆寺に屬する人。榮花「御念佛の僧ども、山がた、奈良がた、さるべき所所、數知らず」

やまがた 山形 【名】一山に似たる形、即ち中央高く、左右の次第に低くなりたる形、又その形の物。東宮年中行事「御帳の間(ヤマ)にあたりて、山形を立てたり」 二鏃(ヤジリ)の形の一。鏑(ギン)の形、山の字の如きもの。 三まとかは(的皮)に同じ。 四鞍の一部。鞍骨(ボネ)の前輪(ワ)と後輪(ワ)との中央部、即ち高まれる所。 五折烏帽子の鍬尖(ヤジリ)の上。正面よりやや山形に見ゆる所。 六線を、中央に於て高く、左右へ斜に垂れたる形。普通の山形の外、入(ワ)山形・花(ハ)山形・指金(ヤジリ)山形などの種類あり。又、細見にも、遊女の揚代の上に、その高下に應じて、種種なるこのしるしを添へたり。葉太平記白石噺「細見に山形の無い氣散じは、紋日もよそに、宮里が」

やまがた 山形 【名】〔地〕一羽前國の山形・米澤(ヨネザワ)の二市及び南村山・東村山・西村山・北村山・最上(モガミ)・東置賜(ヒキタマ)・南置賜の十郡と羽後國の飽海(アクミ)郡とを管轄する縣。縣廳を山形市に置く。明治の初、廢藩の後、山形・置賜(ヒキタマ)・酒田の三縣分立し、同八年、酒田縣を鶴岡に移して、鶴岡縣と改稱せしを合同して、今日に及べり。 二羽前國にある市。東京へ陸路九十三里二町。山形縣廳あり。水野氏の舊藩地。山縣。最上。

やまがた 山縣 【名】〔地〕一美濃國十五郡の一。郡役所を高富(タカヒ)町に置く。 二安藝國七郡の一。郡役所を加計(カケ)町に置く。 三前條二を見よ。

やまがた-ありとも 山縣有朋 【名】〔人〕元帥。舊長州藩士。初の名は、狂介。吉田松蔭に學び、國事に奔走し、明治維新後、陸軍卿に任ず。西南の役、征討參軍となり、後、參事院議長、内務大臣を歷て、十七年伯爵を授けられ、二十二年總理大臣となる。日清戰役には第一軍司令官に任ぜられ、戰後、侯爵に進み、三十一年元帥府に列す。日露戰役には參謀總長たり。戰後、更に公爵に進み樞密院議長となる。大正十一年薨ず。年八十五。

やまがた-おり 山形織 【名】羽前國山形市より產する織物。紡績織・雙子(コマ)織などの種類あり。

やまがた-じやう 山形城 【名】羽前國山形市にありし城。建武年中、足利尊氏の族斯波兼頼、國司葉室光頼を滅したる後、築きて居り、最上(モガミ)氏と稱し、子孫、國事を掌る。天正中、義光の時、四邊を略取して、勢大いに振ひ、關ヶ原の役、德川氏に功ありて加封せられしが、義俊の時、除封せられ、爾後、十餘主を代へて、最後に、弘化二年、水野忠經に至り、傳へて、明治維新に及ぶ。城址今は步兵第三十二聯隊の兵營あり。

やまがた-だいに 山形大貳 【名】〔人〕兵學者。名は昌貞、字は士明。櫛莊と號す。甲斐國の人。常に皇室の式微を憂へ、柳子新論を著す。寶曆六年江戸に出で、小幡(ヤバ)侯織田信邦に厚遇せらる。後、古田玄蕃・津田頼母(モヤ)・藤井右門・竹内式部等と文武を論じ、兵學を講ぜしが、幕府の忌諱に觸れ、明和四年死刑に處せらる。年四十三。明治二十四年正四位を贈らる。

やまかたかく 山片掛く 【句】やま(山)の條下を見よ。

やまかたつく 山方附く 【句】やま(山)の條下を見よ。

やまがたな 山刀 【名】山かせぎの者の用ふる、鉈に似たる刃物。八笑人「振り返って一足逃げるを、山刀の小尻を押へて」

やまがつ 山賤 【名】一山里に住める、賤しき身分の者。野人。源氏「物のなさけ知らぬ山がつも」 二山里にて、賤しき身分の者の住める家。夫木「山がつのさかひに靡く苦竹(ニガタケ)の若若しくて世をや過ぎなん」 三他人を罵りていふ語。十訓「和御房(ワヤ)は、むげによそ目も知らぬ山がつかな」

山賤の賤 【句】前條一に同じ。堀川百首「風早み冬の初は山がつの賤(ヤ)の松垣ひまなくぞ結ぶ」

やまかづら 山鬘・山縵 【名】一『山中に生ずるを取りて鬘とする義』ひかげのかづら(日陰鬘)に同じ。萬葉「昔有二三男一、同娉二一女一也。……(娘子字曰二鬘兒一也)。足曳の山縵の兒今日往くと吾に告げせば還り來ましを」 古今「卷向(マキムク)の穴師(アナ)の山の山人と人も見るがに山かづらせよ」 二曉に、山の端にかかれる雲。續千載「あらたまの年の明けゆく山かづら霞をかけて春は來にけり」 其角「芳野の山ぶみして、明星や櫻定めぬ山かづら」

やまかづら-かげ 山鬘蔭 【名】〔植〕ひかげのかづら(日蔭鬘)に同じ。萬葉「足引の山かづらかげ眞屋(マヤ)にも得がたき蔭を置きや枯さむ」 「に同じ。

やまがに 山蟹 【名】〔動〕いしがに(石蟹)に同じ。

やまかね 山鐘 【名】はちまんがね(八幡鐘)に同じ。俗曲「異八甚」「えにしも永き永代(ダイ)の、……、入相の衣衣(キヌキヌ)ならぬ山鐘も、どんとつくだの辻占に」

やまがのくわうざん 山野鑛山 【名】〔地〕大隅國姶良(アイラ)郡横川・栗野の二村と薩摩國薩摩郡永野村とに跨る鑛山。自然金を產し、輝銀鑛を伴なふ。寛永十七年の發見に係り、德川時代には、島津氏採掘し、今日も產出尠からず。

やまかは 山川 【名】一山と川と。山又は川。さんせん。萬葉「山川そきへを遠み愛(カ)しきよし妹を相見ず斯くや歎かむ」 二山の神と川の神と。萬葉「山川も寄りて仕ふる神ながらたぎつ河内(カフチ)に船出せすかも」

やまかは 山川 【名】一山中にある川。萬葉「雨降ればたぎつ山川岩に觸り君が碎かむ心は持たず」 二次條の略。

やまがはざけ 山川酒 【名】白酒(シロザケ)の銘の一。雍州府志「山川酒。六條油小路酒店釀之。凡山間流水、多白而濃。此酒似二其色一而甘美、因號之」 「に同じ。

やまかはしろざけ 山川白酒 【名】前條

やまかはせんせい 山川先生 【名】『「山と言へば川」を見よ』何かにつけて、他人に反對する癖ある人。

やまがはの 山川の 【枕】山川は、底淺くして、たぎち、音を立て、早く流れゆくより、あさ(淺)・たぎつ・おと(音)などにかけていふ。萬葉「なげきせば人知りぬべみ山川のたぎつ心をせかへたるかも」古今「底ひなき淵やは騷ぐ山川の淺き瀨にこそあた浪はたて」 同「山川の音にのみきく百敷をみをはやながら見る由もがな」

やまかはほり 山蝙蝠 【名】〔動〕やまかうもり(山蝙蝠)に同じ。

やまがはーみづ 山川水【名】山川の水。山中の川に流るる水。萬葉「足引の山河水の音に出でず人の子ゆゑに戀ひわたるかも」

やまーかひ 山峽【名】山と山との間。山のかひ。かひ。〔古語〕萬葉「足引の山峽照らす櫻花この春雨に散りにけるかも」

やまーかひこ 山蠶【名】〔動〕くはご(野蠶)に同じ。

やまーがへり 山歸【名】山に登りたる人の歸ること、又その人。

やまーがへり 山返【名】鷹の、山にて、鳥屋返(ガヘリ)ること。壬二集「引き据ゑよ伊良子(ゴ)の鷹の山返まだ日も高し心そらなり」

やまーがへる 山返る【動四自】鷹、山にて、鳥屋返(ガヘリ)る。新六「山返る網懸(ガケ)の鷹の手馴れても心おかるる君にもあるかな」「沙石集」「百足(デムカ)と山神と蛇と」

やまーがみ 山神【名】「山の神」Ⅱに同じ。

やまがみ 山上【名】〔地〕明治の初年設置の縣の一。明治四年七月、近江國舊山上藩の地に立てしもの。同年十一月、長濱縣に入り、長濱縣は、後、犬上(ガイメ)縣と改稱し、更に滋賀縣の一部となれり。

やまーかむり 山冠【名】やまかんむり(山冠)に同じ。

やまーかん 山勘【名】やまごと(山事)に同じ。

やまーかんむり 山冠【名】漢字の冠の一。「嶽」「嵩」「嶺」などの上部にある山の字。

やまがーもの 山家者【名】山家ずまひの者。やまざとびと。本朝櫻陰比事「山家者の言葉つき、をかしく」

やまーから 山柄【副】山のために。山のすぐれてあるが故に。〔古語〕萬葉「神(カ)からやそこば貴き山からや見がほしからむ」

やまーがら 山雀【名】〔動〕燕雀類に屬する鳥。大さ雀ほどにて、頭部は帶赤黃色にして、眼邊に黑條あり。背部は灰赤色、腹部は淡赤色、他は嘴と共にすべて黑色。四時我國に在り。昆蟲を捕へ食ふ。性怜悧にして、教ふれば種種の藝をし、籠鳥として愛翫せらる。保護鳥の一。山雀の胡桃(クル)廻すやう【句】小取廻(コトリ)に取り扱ふ形容。めのこの草子「山雀の胡桃まはすやうにあちこち取り廻したるばかりにて」

山雀の利根【句】やまがりとん(山雀利根)に同じ。世話藝「山雀の利根」

やまがらーかご 山雀籠【名】山雀を入れて飼ひおく籠。

やまーがらし 山芥・山芥子・山辛子【名】〔植〕Ⅰ十字花科に屬する多年生の草。高さ一二尺。葉は、上部のは、倒卵形又は卵形にて、缺刻あり。下部のは、羽狀に分裂す。黃色四瓣の花、總狀花序に開き、果實は長角をなす。山地に自生す。いぶきがらし。みやまがらし。はまな。Ⅱいぬがらし(犬芥)に同じ。

やまーがらす 山烏【名】Ⅰ山に棲める烏。Ⅱ〔動〕はしぶとがらす(嘴太烏)に同じ。Ⅲ〔動〕みやまがらす(深山烏)に同じ。後拾遺「河のほとりに頭の白き烏の侍りければ、詠める、山烏頭も白くなりにけりわが歸るべき時や來ぬらん」Ⅳ色黑き人を嘲りていふ語。狂言「金岡」「紅(ベニ)や白粉(オシロイ)塗りたれども、下地は黑き山烏」

やまがらーめ 山雀【名】〔動〕やまがら(山雀)に同じ。拾遺「やまがらめ、もみぢ葉に衣の色はしみにけり秋の山からめぐり來(コ)しまに」

やまがらーりとん 山雀利根【名】小取廻(コトリハヒ)なる才智。小才。後撰夷曲集「輪を多く拔けたと自慢する人はいはば山雀利根なるべし」

やまーがり 山狩【名】山に入りて、鳥獸を狩ること。山獵。

やまがーりう 山鹿流【名】兵學の流派の一。山鹿素行を祖とするもの。

やまき 八卷【名】はちまく(八軸)に同じ。盛衰記「法華經の序品(ジホン)をだにも知らぬ身に八まきが來を見るぞ嬉しき」八卷の法(ノリ)の花【句】ほっけはちまく(法華八軸)に同じ。新六「途ひがたき八まきの法の花の紐むすぶ契は空しからじを」

やまーぎ 山木【名】Ⅰ山Ⅱに生えてある木。山の立木。新六「風越(ヒコヒ)に立てる山木の上枝は花も紅葉もある時ぞなき」

やまーぎ 山氣【名】山吉の心。山師の如き心。やまごころ。投機心。

やまーぎく 山菊【名】Ⅰ〔植〕まつむしさう(松蟲草)に同じ。Ⅱりゆうなうぎく(龍腦菊)に同じ。

やまーきさご 山細螺・山扁螺【名】〔動〕腹足類に屬する軟體動物。大さ豌豆ほどにて、鉛色を呈し、陸上に產す。「る所。

やまーきし 山岸【名】山の端の、水に臨め

やまーぎず 山疵【名】石器・陶器などの、製造の時に生じたるきず。

やまきた 山北【名】〔地〕相摸國足柄上郡川村の字。酒匂(サカ)川の北岸。鐵道東海道線の停車場あり。東海道線第一の嶮岨と稱す。

やまーきは 山際【名】山と他の物のさかひ。枕「春は曙、やうやう白くなりゆく山ぎは、すこし赤りて」

やまーきり 山霧【名】山に立つ霧。

やまーぎり 山桐【名】Ⅰ〔植〕あぶらぎり(油桐)に同じ。Ⅱやまならし(山ならし)に同じ。

やまぎりーの 山霧の【枕】山霧の立ち塞ぐを、胸の結ぼれ塞ぐに譬へて、いぶせしに掛けていふ。萬葉「ながつきのしぐれの雨の山霧のいぶせきわが胸誰れをみばやまむ」

やまぎりーのこぎり 山切鋸【名】杣人が、立木を切るに用ふる、幅狹くして長き鋸。

やまーきりんさう 山麒麟草・費茶【名】〔植〕景天草(イハベンケイ)科に屬する多年生の草。高さ一二尺。葉は細長・鈍頭にして、鋸齒あり。麒麟草のに似て、黃色にして紅暈あり。聚繖花序をなして開く。高山に自生す。ほそばのきりんさう。

やまく 夜幕【名】なかまく(中幕)Ⅰに同じ。

やまーくさ 山草【名】Ⅰ山に生えてある草。さんさう。和泉式部集「山陰にみがくれ生ふる山草のやまずよ人を思ふ心は」Ⅱ〔植〕うらじろ(裏白)Ⅳに同じ。雪女五枚羽子板「目出度い事の言草(クサ)・山草、穗長は白妙(シロ)の櫟(クヌギ)の淺翠(ケヤキ)」Ⅲ〔植〕はしりざころ(走野老)に同じ。Ⅳ〔植〕わられん(黃蓮)に同じ。

やまーぐ 山公事【名】山林などに關しての訴訟。本朝櫻陰比事「この堂の事、第一爭ひ、訴訟差上げ、山公事に取り結びぬ」

やまーくす 山樟・山楠【名】〔植〕いぬくす(犬樟)に同じ。

やまーくだし 山下【名】杣人などが、伐りたる木を、里に出すために、川に流すこと、又その木。新勅撰「何となく朽木の杣の山くだし下す日暮はねぞ泣かれける」

やまーぐち 山口【名】Ⅰ山への入口。山の麓の登口。枕詞「倭(ヤマト)の國の六(ムツ)の御縣(ガミ)の山口に坐(ニ)す皇神(ガミ)たち」Ⅱ鷹狩のために、先づ狩場に入ること、又その所。やぐち(矢口)…參照。Ⅲ「山かせぎの者の、山への入口にて、早くも山幸(ヤマサチ)の有無を知るといふにより」いふ。物事の結果の豫感。きざし。前兆。蜻蛉「いちじるき山口なれば、ここながら神のけしきを見せよとぞ思ふ」榮花「この御祈の折節しも悅び仕うまつりたること、山口しるしなど悅び申したまふ」

山口の神の祭【句】古、山にて、木を伐り、又は狩獵を行はんとする時、先づその山口にて、山の神を祭りしこと。延喜式「山口神祭」

やまぐち 山口【名】Ⅰ〔地〕周防・長門の兩國を管轄する縣。縣廳を周防國山口町に置く。Ⅱ周防國吉敷(キシ)郡にある町。山口縣下第一の都會にして、縣廳の所在地たり。南北朝時代より、大內氏の治所として名高く、弘治二年以後、毛利氏これに代りしが、德川時代には、幕命によりて、治所を長門國萩町に移し、文久二年に至りて、復びこの地に移る。

やまぐちーのーしをり 山口栞【名】〔書〕我國の言語の中、助辭・助動辭の性質・用法を解說せるもの。三卷。僧義門の著。

やまぐちーびし 山口菱【名】『周防國山口の大內家の紋所たりしよりいふ』さいはひ

びし(幸菱)に同じ。

やまぐちぼん 山口本【名】おほうちぼん(大内本)に同じ。

やまぐちまつり 山口祭【名】㊀「山口の神の祭」に同じ。 定家鷹三百首「里近き野べの草より立つ鳥に山口祭する程もなし」 ㊁周防國吉敷(キシ)郡宮野村(山口町の東北)なる式内の古社仁壁(ニヘ)神社の祭禮。仁壁は、山口の舊稱なり。

やまくぢら 山鯨【名】猪の肉の隱語。

やまくづれ 山崩【名】水の土中に浸透せるに因りて、山崖の崩れ落つること。やまつなみ。

やまくどき 山口說【名】山づくしの口說節(フシ)。 五人女「蹄見に參りし程に、…、山くどき・松づくし、暫く耳に飽かず」

やまぐに 山國【名】山の多き國。山間にある國。

やまぐに 山國【名】昔、朝廷の公領に屬せし丹波國北田郡山國村。この村の農民の、上京して、仕丁(シチヤウ)の頭として、禁裡に奉公せしもの。

やまくにがは 山國川【名】〔地〕豐前國にある川。彦山(ヤマ)より發源し、東流して、築上(ツイキ)・下毛(シモ)兩郡の境を成し、中津町の北に至りて、周防灘に入る。流程十三里半餘。その峽谷を山國谷といひ、又、發音相近き雅稱耶馬溪(ヤバケ)の名により て著る。一名、高瀨川・廣瀨川・中津川。古稱、三木(ミキ)川。 「見よ。

やまくにだに 山國谷【名】〔地〕前條を

やまくにのみささぎ 山國陵【名】光嚴院の御陵。

やまぐは 山鍬【名】鍬の一種。風呂無(ハロ)鍬の、幅狹く、厚くして、堅牢なるもの。草野・砂土の開墾に用ふ。からくは。どんぐは。

やまぐは 山桑・雞桑【名】〔植〕桑科に屬する落葉喬木。高さ三四丈、樹皮は灰白色を呈し、葉は互生し、心臟形にして、先端尖り、二裂乃至五裂するもあり、粗鋸齒を具へ、面に粗毛ありて、表面は濃綠色、裏面は淡綠色を呈す。淡黃色なる單性の小花、雌雄異株に開き、果實は熟すれば、紫黑色を呈す。山野に自生し、木材は器具の料となり、內皮は製紙の原料となる。養蠶用として、現時各地に栽培せる桑の原種なり。いぬぐは。ささぐは。つみ。のぐは。

やまぐま 山隈【名】山のくま。やまかげ。 源氏十二段長生島臺「山隈にぞ忍びける」

やまくまばる 山隈原【名】〔地〕筑前國朝倉郡安野村・栗田村と筑後三井(ミヰ)郡立石村・立刀洗(タチアライ)村とに亙れる曠野。正平十四年、菊池武光の、征西將軍懷良(カネナガ)親王を奉じ、少貳賴尙・少貳直資等と戰ひし處。

やまぐみ 山胡頽子【名】〔植〕㊀さんしゆゆ(山茱萸)に同じ。 ㊁つるぐみ(蔓胡頽子)に同じ。

やまぐも 山雲【名】山にかかれる雲。山に立つ雲。さんうん。 夫木「足引の山雲よそにめぐり來(キ)ぬ神のめぐみの雨の夕暮」

やまぐも 山蜘蛛【名】山に棲める蜘蛛。平家「塚を掘り崩して見るほどに、四尺ばかりなる山蜘蛛にてぞありける」

やまぐるま 山車【名】㊀〔植〕雲葉(クワザ)科に屬する常綠喬木。高さ三四丈、樹皮は外面粗にして、帶黃色を呈す。葉は互生し、長柄によりて、梢頭に叢生し、卵形又は倒卵形にして、先端尖り、鋸齒を具ふ。夏期、帶綠色の小花、總狀花序をなして開き、果實は豆大にして、肉質の花托に陷入せる萼葵をなす。山地に自生す。材は質硬くして、木理美しく、樹皮は彈性護謨及び鳥黐の原料となる。とりもちのき。 ㊁〔植〕もちのき(黐木)に同じ。 ㊂〔動〕腹足類に屬する軟體動物。殼徑約五分、やや扁くして、螺層圓く、表面は光澤ある黃褐色を呈し、臍孔大なり。我國の南部に多く、陸上に棲む。

やまぐるまーくわ 山車科【名】〔植〕ふさぎらくわ(雲葉科)に同じ。

やまぐるみ 山胡桃【名】〔植〕のぐるみ(野胡桃)に同じ。

やまくわじ 山火事【名】山の林木の燃ゆる火事。自然發火又は人爲に依りて起るやまび。やまもえ。やまやけ。

やまげ 山向【名】やまむけ(山向)に同じ。

やまげた 山下駄【名】山桐などを用ひて造りたる、粗末なる下駄。

やまけら 山けら【名】〔植〕まつぐみ(松茱萸)に同じ。

やまこ 山子【名】㊀山中に棲める妖怪。山の精氣の凝りたるもの、猿の多くの年を經たるものなどいふ。山童(ヤマワラハ)・山男(ヤマヲトコ)の類。 和名鈔「抱朴子云、猨壽五百歲、則變爲玃。漢語抄云、夜末古」 名義抄「魑、ヤマコ・スダマ」 ㊁山事(ヤマゴト)、又それを爲す人。やまかん。やまし。

やまごえ 山越【名】㊀山を越ゆること、又、越えゆく通路に當る山の一部。やまごし。 古今「志賀の山ごえにて」 盛衰記「一萬餘騎にて、三草山(ヤマクサ)を山越に、西の城戸(キ)へと打ちたまふ」 ㊁德川時代に、裏山を越えて、關所破をせしこと。その場にて、磔刑に處せられたり。

やまごえーて 山越えて【枕】山を越えて行きて遠ざかる意にて、ごほ(遠)にかけていふ。 萬葉「山越えて遠津の濱の石(イ)つつじわが來たるまで含(フ)みてあり待て」

やまごかし 山こかし【名】『こかしは竇りこかす義』㊀やまうり(山竇)㊁を卑しめていふ語。 ㊂やまし(山師)㊃に同じ。

やまごころ 山心【名】㊀やまぎ(山氣)に同じ。 ㊁やまごころ(野心)に同じ。

やまごし 山越【名】〔地〕『アイヌ語ヤムクシュナイ(ヤムクシュは栗の刺殼、ナイは澤の義)の轉訛』贈振(ヲイブ)國八郡の一。函館支廳の管轄に屬す。

やまごし 山越【名】㊀山を隔ててあること、又その土地。 萬葉「山越の風の獨居るわが衣手に朝夕(ヨサ)に反(カ)らひぬれば」 ㊁やまごえ(山越)に同じ。

山越の彌陀(ダ)【句】〔美〕畫題の一。來迎(ライガウ)の彌陀の變體。阿彌陀如來が、山を越え來る姿を描けるもの。金色の彌陀と黑ずめる山岳とは、莊嚴・華美の對照を爲す。平安朝時代に多く描かれ、京都の禪林寺所藏に係る絹本・著色のもの、有名なり。 「雛」を見よ。

やまごしやく 山五尺【名】ねこぶき(猫

やまごと 山事【名】投機又は冒險の事業。やまかん。やまこ。やましごと。

やまことば 山言葉【名】㊀たかことば(鷹詞)に同じ。 ㊁柚人などの、山中にて用ふる言葉。 北越雪譜「深山にありて事を爲すには、山言葉といふものあり」

やまごばう 山牛蒡【名】㊀〔植〕商陸科に屬する多年生の草。根は塊狀をなして横に延び、莖は圓柱形にて直立し、高さ四五尺、葉は互生し、大形なる長楕圓形をなし、先端尖り、緣邊はやや波狀をなす。夏日、梢葉の間に、三四寸の花莖生じ、五瓣、淡紅白色の花、總狀花序をなして開き、赤黑色の漿果を結ぶ。山野に自生し、根は有毒なれども、藥用に適し、嫩葉は、灰汁にて煮れば、食するを得。いぬごばう。いをすぎ。たうごばう。 〔商陸〕炭俵(風爐) 「五月雨や露の葉に盛る山ごばう」 ㊁やまばくち(山ばくち)に同じ。

やまごばうーくわ 商陸科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門に屬する一科。草本又は小灌木にして、いぼのきいをすぎいをつきじやこすぎ・たうごばうなど、これに屬す。

やまごんにやく 山蒟蒻・山芋蒻【名】㊀〔植〕てんなんしやう(天南星)に同じ。 ㊁まむしぐさ(蝮蛇草)に同じ。

やまこものなり 山小物成【名】やまねんぐ(山年貢)に同じ。

やまごもり 山籠【名】㊀山中に隱棲して、浮世と遠ざかること。山寺にこもりて、心を佛道に寄すること。 源氏「律師(シ)の、山ごもりして、里に出でじと誓ひたるを」 同「御山ごもり果てべらん日數も承りおきて」 ㊁やまいぬ(山犬)に同じ。

十二年の山籠【句】比叡山延曆寺にて、大乘戒を受けし天台の學徒の、寺の制規に依り、十二年間山を出でず、專心學業に勸めしこと。これを卒へたる者

は、假受小戒と稱し、更に比丘戒(ビクイ)を受けたる上にて、山野聚落に教化するを得たり。最澄の、弘仁十三年、勅許を得て制定せしものなる由、類聚國史に見ゆ。「山の久住者(クヅサビ)」[二]参照。後撰「十二年の山ごもりして、久しう聞えざりつる」枕「おぼつかなきもの、十二年の山ごもり、法師の女親(ヤオ)」

やまごもる 山籠る【動四自】山ごもりをなす。拾遺集「歸りても事ぞともなき身にしあれば吉野の山に山ごもりなん」

やまさ【名】〔植〕**ほしりぐさ**(走野老)に同じ。

やまさ 山サ【名】[一]山形(ガタ)[六]の下に、片假名のサの字を記せるもの。商標などに用ふ。[二]下總國野田町より產する醬油の銘の一。

やまざうり 山草履【名】「に同じ。

やまざか 山坂【名】山と坂と。山の坂路。山の險しき路。拾「山險、ヤマサカ」萬葉「足引の山坂越えてあまざかる鄙(ヒナ)にくだりき」

やまさか-みち 山坂道【名】山路を通過する道。膝栗毛「山坂道」

やまざき 山崎【名】〔地〕[一]『宅坂(サカイ)山脈の南端、淀川に臨める處に在るよりいふ』山城國乙訓(オトクニ)郡に屬する地域。天王山あり。淀川を隔てて、男山と相對し、山城國の關門として、要害無雙の地たり。又、中古、淀川上下の船客の昇降地として、有名なり。[二]播磨國宍粟(シソ)郡にある町。郡中第一の繁華の地。宍粟川の西岸。龍野町より五里。德川時代には、本多氏の陣屋所在の地。[三]明治の初年設置の縣の一。四年七月、播磨國舊山崎藩の地に立てしもの。その十一月、同國に於ける他の諸地と相合して、姫路縣となる。山崎の戰【句】天正十年六月十三日、豐臣秀吉の、明智光秀を、この地に討ち戰。

やまざき-あんさい 山崎闇齋【名】〔人〕儒者。名は嘉、字は敬義、通稱は嘉右衛門。垂加とも號す。京都の人。初、京都妙心寺に入りて僧となり、後、土佐の吸江寺に學ぶに及び、野中兼山・谷時中に知られて、二十五歳にして、髮を畜へ、江戸に出でて、儒を修め、遂に朱學の大家となる。門弟數千人、會津侯・美作侯等の恩遇を受く。晩に吉川惟足(コレタリ)に從ひて、神道を學ぶ。天和二年九月歿す。年六十五。明治四十年正四位を贈らる。

やまざき-かくれい 山崎鶴嶺【名】〔人〕畫家。名は義淵、字は君魚。大阪の人。廬舉の門に學び「最も花鳥を巧みにし、應門十哲の一人に數へらる。文政頃の人。

やまざき-しんたう 山崎神道【名】**すゐかしんたう**(垂加神道)に同じ。

やまざき-しやうげん 山崎將監【名】〔人〕劍法家。通稱は小右衛門。越前國の人。中條流劍法の祖。德川秀忠に仕ふ。

やまざき-そうかん 山崎宗鑑【名】〔人〕俳人。本姓は支那。名は範重、通稱は彌三郎。近江國の人。初、武人として、足利義尙の軍に從ひて、近江の六角氏を討ちし時、義尙、陣中に蕉ぜしより、無常を觀じ、攝津の尼ヶ崎に隱居し、一休に愛せらる。後、庵を山城の山崎に結び、風月を友とし、歌を講ず。連歌の名家なる宗祇の右に出でんと欲し、新たに俳諧・發句の吟を始む。平生、油筒を賣りて、口を餬し、室内、只、一藥鑵あるのみ。晩年讃岐に移り、二十二年歿す。年八十九。

やまざき-ちやう 山崎町【名】〔地〕江戸下谷に在りし町。八笑人「山崎町へ行って、六部の形(ナリ)と笈(オイ)は借りて來て」

やまざき-でら 山崎寺【名】**たからでら**(寶寺)に同じ。淀鯉出世龍門「夜見世の太鼓、晉絕えて、山崎寺の鐘の聲」

やまざき-の-はし 山崎橋【名】古、山城國山崎より、淀川の對岸に架けてありし橋。當時、上流なる勢多(セタ)・宇治の二橋と共に三大橋の名あり。神龜三年、僧行基の架設に係るとも、それより以前すでに有りたりともいふ。後、流失の災に遭ひ、延曆の新造、延喜の修理を經て、又、絕えしを、豐臣秀吉の征韓の時、更に架設し、それも亦絕えて後は、今日に至るまで渡船にて交通を助け、狐川の渡といふ。

やまざき-は 山崎派【名】我國の儒學の一派。山崎闇齋を祖とす。

やまざき-びせい 山崎美成【名】〔人〕儒者。字は久卿、通稱長崎屋新兵衛、後、久作と改む。北峰、又、好問堂と號す。江戸の人。藥舗を業とし、後、金杉の里に隱れ、その居に扁して三餐といふ。後、又、飯田町に移る。安政三年歿す。年六十一。

やまざき-やま 山崎山【名】〔地〕山城國天王山の舊稱。

やまざきよじべゑねびきのかどまつ 山崎與次兵衛壽門松【名】難波屋の與兵衛といふ者、大阪新町藤屋の吾妻といふ遊女の好意に發憤して、吾妻とその情夫なる山崎與次兵衛(住所は攝津國山崎)との難儀を救濟し、與次兵衛も亦與兵衛の罪を身に引き受くる覺悟なりし事を記せるもの。近松門左衛門の作。**ふたつてふぞ**

やまざくら 山櫻【名】[一]山中に生えたる櫻。野生の櫻。古今「山櫻わが見に來ればゆき霞峯にも尾にも立ち隱しつつ」[二]〔植〕櫻の一品種。高さ五六丈、周圍八尺に及ぶものあり。樹皮は暗紫褐色にして灰白色の横理あり、紫褐色にして、光澤と淡渦色の斑點とを有す。葉は互生し、卵形にして、先端尖り、重鋸齒を具ふ。四月頃、葉と共に、五瓣・淡紅白色の花を開き、赤紫色の小核果を結ぶ。花の形小なれども、淡素の趣を具へ、古來最も賞翫せらる。山地に自生し、殊に大和國吉野山・山城國嵐山・武藏國小金井(ネコガネ)など、古來その名著る。材は版木又は小器具の製造に適し、樹皮は曲物を縫ひ止むる料となり、花は鹽漬として、食ふ。〔櫻桃〕[三]〔植〕**こぶし**(辛夷)に同じ。字鏡「木辛夷、山左久良」

やまざくら-ど 山櫻戸【名】[一]山櫻の木にて造れる戸。萬葉「足引の山櫻戸をあけおきてわが待つ君を誰かとどむる」[二]『前項の萬葉集の歌の語を誤解して用ひたるもの』山櫻の咲きてある家。壬二集「み狩する狩場の小野の日は暮れぬ山櫻戸に宿や借らまし」

やまざくら-ばな 山櫻花【名】山櫻の花。山の櫻花。萬葉「足引の山櫻花一目だに君とし見てばあれ戀ひめやも」本居宣長「敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山櫻花」

やまざけ 芍藥【名】〔植〕**しやくやく**(芍藥)に同じ。〔古語〕字鏡「勺藥、山佐介」

やまさち 山幸【名】山にての獲物。狩獵により得たる鳥獸。(海幸に對して)〔古語〕記「火遠理命(ホヲリノ)は山さち彦として、毛の麤物(アラノ)、毛の柔物(ニコノ)を取りたまひき」

やまさつ 山獵【名】山の獵夫(サツ)。萬葉「百草山さつが鹿木の陰やひまもなき居待の月の出でよさりする」

やまざと 山里【名】[一]山中の人里。[二]山中の別莊。山莊。源氏「小野(ノ)といふわたりに、山里持(モ)たまへるに」

やまざと-いが 山里伊賀【名】江戸幕府の職制の一。伊賀者にて、江戸城内吹上の庭にありし山里に勤務せしもの。三十俵・二人扶持にて、羽織袴役たりき。

やまざと-ずみ 山里住【名】山里に住むこと。やまずみ。拾萬「山ざと住したまふこそ、いと心うけれ」

やまざと-にはかた 山里庭方【名】江戸幕府の職制の一。江戸城内吹上の庭に勤務せしもの。白衣(ハクイ)勤たりき。山里庭者の者。「條に同じ。

やまざと-にはのもの 山里庭者【名】前

やまざと-にはばん 山里庭番【名】江戸幕府の職制の一。江戸城内吹上の庭の番を勤めしもの。大奥の廣敷役人の一として、廣敷用人の支配に屬し、上下(カミシモ)役たりき。

やまざと-びと 山里人【名】山里ずみの人。やまびと。源氏「かの山里人は、らうたげにもあてなるかたの劣りきこゆまじきぞかし」

やまざと-ぶ 山里ぶ【動上二自】山里のごとくに見ゆ。ひなぶ。源氏「山里びたる若人(ワカウド)ども」同「山里びたる網代屏風(ヤウビヤウブ)などの、ことさらに事そぎて」

やまさなかづら 山南五味子【名】次條の轉。萬葉「足引の山さなかづらもみづまで妹に逢はずやわが戀ひをらむ」

やまさねかづら 山南五味子【名】山に生えてあるさねかづら。野生のさねかづら。新六「足引の山さねかづらくるくるもあひ見てあかぬ妹にもあるかな」

やまさは 山澤【名】一山と澤と。山にある澤。さんたく。二『次條に引ける萬葉集の歌意に本づけるか』**さはやま**(澤山)に同じ。藻鹽草「山澤、のの字なし。萬なり」

やまさはびと 山澤人【名】山澤一に住める人。萬葉「足引の山澤人の人さはに眞汝(マナ)といふ子があやにかなしき」

やまさはゑぐ 山澤蕨芋【名】山澤に生じてあるゑぐ。萬葉「足引の山澤ゑぐを摘みゆかむ日だにも逢はむ母は貴むとも」

やまさぶ 山さぶ【動上二自】いかにも山らしく、年經て尊く見ゆ。萬葉「畝傍(ウネビ)のこの瑞山(ミヅヤマ)は日の横の大御門に瑞山と山さびいます」「ふ」語。

やまさん 山樣【名】田舍者を嘲りていふ。

やまざる 山猿【名】一山に棲める猿。野生の猿。二山住せる粗野なる人を嘲りていふ語。

やまし 山師【名】一山の生産物なる木材・鑛物などに關係して生活する人。即ち樵夫、山木賣の周旋者、鑛山の採掘事業などを經營する者。二山事(ヤマゴト)をなす人。投機・冒險の事業を爲す人。やまこかし。三他を欺きて利得を圖る人。詐僞師。山師の玄關【句】次條に同じ。山師の玄關構【句】徒に外觀のみを立派に構ふる形容。藪醫者の玄關。山師、山で果てる【句】「川立(カハタ)、川で果てる」に同じ。〔諺語〕

やまし 知母・水香稜・兒草【名】〔植〕**はなすげ**(花菅)に同じ。和名抄「知母。一名、兒草、夜末之」

やまし 疾し・疚し【形二】心中安からず。うしろぐらし。

やましう 山州【名】『州を添ふるは、女風呂屋を呂州、野郎(ヤロウ)を野州といへる類』**おやま**(御山)に同じ。重井筲「正月まへの際際(キハキハ)に、旦那どのは外(ソト)が内、おみき過して、うかうかと山州といへば、目が見えず」

やましぎ 山鴫・山鷸【名】〔動〕涉禽類に屬する鳥。鴫の種類中、最大にて、鳩よりもやや大きく、上面は褐赤色にして、黑色と淡褐色との斑文あり。胸部及び腹部は汚色にして、細き帶黑色の横條斑あり。多くは、十月末より我國に來り、翌年四月頃北歸すれども、少數は、夏も、山地に殘留するもののごとし。藪林の凹地に、粗糙なる巢を營み、夜間濕地に出でて、食を求む。ぼとしぎ。「に同じ。

やましごと 山仕事【名】**やまごと**(山事)

やましし 羚羊【名】〔動〕『山獸(ヤマシシ)の義』**かもしか**(山羊)に同じ。〔古語〕紀「山羊、ヤマシシ」

やました 山下【名】山のした。やまもと。ふもと。さんか。萬葉「鶯の來鳴く春べはいはほには山下光り錦なす花咲きをり」

やました 山下【名】〔地〕一安房國の舊郡の一なる安房郡の私稱。二東京市下谷區、坂本の南、上野山の東麓。今、山下町。車坂町・上車坂町・下車坂町に分る。上野停車場この地にあり。

やましたいほ 山下庵【名】山の下にある庵。爲尹千首「月おそき山下いほの萱垣のほのめきあかすきりぎりすかな」

やましたうみ 山下海【名】山の下にある海、又は湖。壬二集「霜冴ゆる汀の朽葉蹈みしだき山下海に千鳥鳴くなり」

やましたかげ 山下陰【名】山の下かげ。やまかげ。續拾遺「きぶね川山下かげの夕闇に玉ちる浪は螢なりけり」

やましたかぜ 山下風【名】山の下に吹く風。やまおろし。古今「白雪のふりしく時はみよしのの山下風に花ぞちりける」

やましたぐさ 山下草【名】一山の下に生えてある草。二〔植〕**をぎ**(荻)の異名。藏玉集「山下草。荻 夕暮の山下草の山おろしに松吹き寄する風の淋しさ」

やましたざと 山下里【名】山の下にある里。山ぞひの村。

やましたづつみ 山下堤【名】山の下にある堤。曾我虎藪「山下堤の邊より」

やましたつゆ 山下露【名】山の下にある露。萬葉「うば玉の黑髮山を朝越えて山下露に濡れにけるかも」

やましたの 山下の【枕】秋、山の紅葉する時、麓の光るほどに見ゆるより、**あけ**(朱)にかけていふ。萬葉「旅にして物戀しきに山下のあけのそほ船沖に漕ぐ見ゆ」

やましたひかげ 山下日陰【名】山の下に生えてあるひかげのかづら。萬葉「足引の山下日かげ蘊(ラン)ける上にや更に梅を偲(シノ)ばむ」

やましたみち 山下道【名】山の下にある道。新後拾遺「分けすぐす山下道の追風にはるかに送る蟬のもろ聲」

やましたみづ 山下水【名】山の下を流るる水。古今「足引の山下水の木がくれてたぎつ心を塞(セ)きぞかねつる」

やましたみつげ 山下見附【名】〔地〕江戸外郭の山下門にありし見附番所。

やましたもん 山下門【名】〔地〕江戸外郭三十六門の一。數寄屋橋(スキヤバシ)門と幸橋門との間にありしもの。今の日比谷公園正門の東方。江戸名勝志圖解「山下御門、櫻田御門より八町餘辰巳の方、日比谷御門より四町辰巳の方なり。姫御門とも、外日比谷ともいふ。鍋島氏屋敷近所ゆゑ、鍋島門ともいふ」

やましづ 山賤【名】**やまがつ**(山賤)一に同じ。曾丹集「山賤の畑に刈りほす麥の穗のくだけて物を思ふ頃かな」

やましづめ 山賤女【名】「賤(ヅ)の女」に同じ。若風爲酒の帶の光るを、自慢に結び下げし山賤女も」

やましな 山科【名】〔地〕山城國宇治郡にある村。昔は、隣村醍醐の邊をも含めたる宇治郡北方過半の地域の稱にて、奈良及び京都より、近江國への通路に當る。名蹟に富む。山階。萬葉「み墓仕ふる山科の鏡の山に」

やましなあかね 山科茜【名】昔、山城國山科の地より產せし茜染。

やましなかげつぐ 山科景紹【名】〔人〕醫師。武田定盛に學び、又、支那明に航し、その術を究めて歸る。

やましなことつぐ 山科言繼【名】〔人〕朝臣。言綱の男。道號は月岑、法名は照言。永正四年誕生。十一歲にして叙爵、後、內藏頭・右少將・右中將・左兵衞督・參議・左衞門督・加賀權守・權中納言・出羽按察使・太宰權帥を經て、權大納言・正二位に至る。日記(言繼卿記)二十六卷あり。天正七年薨ず。年七十三。

やましなごぼう 山科御坊【名】山城國山科大字北花山(ハナヤマ)にある、東本願寺と西本願寺との別院。山科は、文明年間、蓮如上人の本願寺を建てし地にて、又、蓮如・實如の墳墓あるより、特に別院を置く。東本願寺のは長福寺、西本願寺のは舞樂寺と呼ぶ。

やましなだうり 山階道理【名】山階寺(即ち興福寺)の僧の、藤原氏の氏寺たるを恃み、非理をも道理に言ひなして、橫暴に振舞ひしこと。大鏡「不比等(フヒト)の大臣は、山階寺を建立せしめたまへり。……かの御寺、いかめしくやんごとなき所なり。いみじき非道の事も、山階寺にかかりぬれば、又、ともかくも、人、物言はず、山階道理を附けて置きつ」

やましなでら 山階寺【名】『孝德天皇の時、藤原鎌足の、山城國山科に建てし寺なるよりいふ。元明天皇の時、鎌足の子不比等(フヒト)、これを大和國奈良に移せり』**こうふくじ**(興福寺)に同じ。甚「山階寺の別當になりて」

やましなのおとど 山科大臣【名】〔人〕**ふぢはらそのおとど**(藤原園人)の異稱。

やましなのみかど 山科帝【名】〔人〕『御陵墓の所在地によりていふ』**てんぢてんわう**(天智天皇)に同じ。

やましなのみささぎ 山科陵【名】天智天皇の山陵。山城國宇治郡山科村大字御

陵の北宇御廟野(ウヂノ)の内鏡山の南麓にあり。古、陵上に八角形の廟ありしが、應仁の亂に兵燹に罹り、今は礎を留むるのみ。萬葉「從二山科御陵一退散之時、額田王(ヌカダノオホキミ)作歌」

やましなの-みや 山階宮【名】宮家の一。伏見宮邦家親王の御子是(ノブ)親王より出づ。是親王は、山城國山科の勸修寺(クワンジユウジ)住持の法親王たりしに、明治維新の際還俗せられしに因みて、宮號とせられしなり。

やましなの-をのの-みささぎ 山科小野陵【名】をのみささぎ(小野陵)に同じ。

やましなは 山科派【名】射術の一派。片岡平右衛門家次を祖とするもの。

やましなまつり 山科祭【名】■古、山城國山科の、勸修寺(クワンジユウジ)の南にある、醍醐天皇の外祖父宮路(ミヤヂ)氏夫婦を祀れる神社の祭禮。四月己の日に行はれたり。■後世は、同國北山科の諸羽(モロハ)明神の祭禮。九月九日に行はる。同社の祭神は大己貴(オホナモチ)・火王の二柱なり。

やましなむすび 山科結【名】紐の結び方の一。狂言(不聞座頭)「ししゝ結に笹結、山科結に風車」

やましなや 山科屋【名】「友右衛門の屋號。

やましなりう 山科流【名】「人」俳優大谷

やましなりけい 山科李蹊【名】「人」醫師。名は元富、字は子潤。京都の人。傍ら畫を善くし、特に、墨竹を以て、淺井閣南宮崎筠圃・御園(ミソ)中渠と共に、平安の四竹の名あり。寛延・寶曆頃の人。

やましば 山柴【名】■山にある柴。山より採りたる柴。たにあさ。ちどりのき。新續古今「山里の烟の末と靡くなよただ山柴のこりはてし世に」 嬉野(重五)「山柴に裏白まじる閑古鳥」 ■(植)次條に同じ。

やましばかへで 山柴槭【名】(植)槭樹(ムクロ)科に屬する落葉喬木。高さ五丈、葉は長楕圓形にして、先端尖り、鋭き重鋸齒を具へ、中肋より顯著なる側脈二十餘對、平行す。淡黃色なる小花、總狀花序をなして開き、雙翅を具へたる果實を結ぶ。山地に自生す。やましば。

やましばり 山しばり【名】(植)**みねばり**(峰榛)に同じ。「(植)に同じ。

やましぶ 山澁【名】(植)**やまがき**(山柿)

やましぶ 山十【名】■山形(ヤマガタ)式の下に十の字を書きたるしるし。■その樽の商標によりていふ。下總國野田より出づる醬油の銘。

やましほ 山潮・山汐【名】**やまつなみ**(山津浪)に同じ。 藤南鶏西遊記「安永年間、薩摩の櫻島山、大に燒けて後、山上より大水溢れ出でて、田地・民家、大いに損せり。所の人、これを山汐といふ」 「に同じ。

やましほ 山鹽・山塩【名】**がんえん**(岩鹽)

やましみづ 山清水【名】山より出づる清水。萬葉「山吹の立ちよそひたる山清水汲みにゆかめど道の知らなく」

やましめ 【名】次條を見よ。

やましめの鰭【句】魚の脊鰭の、後部に近き處。やほじめの鰭。

やましやうが 山生薑・山生姜・山薑【名】(植)**はなめうが**(花蘘荷)に同じ。

やましやくやく 山芍藥・山芍藥【名】(植)しらねあふひ(白根葵)に同じ。

やましやり 山砂利【名】陸地より掘り出し、土のまじりたる砂利。

やましゆ 山衆【名】**やましう**(山州)の誤。近頃河原の達引「茶屋の山衆が、色酒に亂れて遊ぶ」

やましよう 山松露【名】(植)**ほこりたけ**

やましろ 山城【名】■(地)五畿内の一。京都市及び愛宕(オタギ)・葛野(カドノ)・乙訓(オトクニ)・紀伊・宇治・久世(クゼ)・綴喜(ツヅキ)・相樂(サガラ)の八郡に分れ、全國、京都府の所管たり。古は「山背」と書きしを、桓武天皇の遷都の時、今の文字に改めらる。城州。 ■催馬樂(サイバラ)の呂の曲の一。

やましろ 山城【名】山上に築きたる城。(平城(ジヤウ))に對して)

やましろがは 山城川・山代川【名】(地)淀川の古稱。記「つぎねふや山代川を宮のぼりわが上れば青によし奈良を過ぎ小楯(ヤタテ)大和を過ぎ」

やましろぎく 山城菊【名】(植)菊科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉は互生し、表面粗糙にして、廣披針形をなし、鋸齒を具ふ。花は、通常の菊のと同樣なる頭序花序をなし、舌狀花も、筒狀花も、白色を呈す。山野に自生し、又、栽培して、觀賞用に供す。

やましろぢ 山城路・山背路【名】山城國への道路。萬葉「つぎねふ山背路を人づまの馬より行くに」

やましろづかひ 山城使【名】古、賀茂祭の時、その式場に參向せし山城の國司。

やましろひこの-かみ 山代彦神【名】大國主神の御子。

やましろぼんち 山城盆地【名】(地)山城國にある盆地、即ち京都市及びその郊外の地。

やましろめ 山城女・山代女【名】山城國の女。記「つぎねふ山代女の木鍬(キヅ)持ち打ちし大根(オホネ)」

やましろめいしようし 山城名勝志【名】(書)山城國の名所・古蹟を、舊記の文によりて記せるもの。二十一卷。大島武好の著。正德元年の刊行。

やましろめいしようしづ 山城名勝志圖【名】(書)十二卷。兩京・大内裏・八省院・豐樂院等の圖を擧げたり。大島武好の著。

やましろや-ぶんぎよ 山城屋文魚【名】(人)江戸藏前の札差。天明中の十八大通の一。豪遊して、產を破る。

やましろ-わう 山背王【名】(人)長屋王の子。天平寶字の初、黃文・安宿(カス)の二兄、奈良麻呂の事に與るを告ぐ。淳仁天皇、これを賞し、姓を藤原、名を弟貞と賜ふ。後、參議・式部卿に至る。

やますが 山菅【名】次條に同じ。 萬葉「咲く花は移ろふ時あり足引の山すがの根し長くはありけり」

やますげ 山菅【名】■山に生えてある菅。■(植)**やぶらん**(藪蘭)に同じ。麥門冬」 和名「麥門冬、夜末須介」 ■**はなすげ**(花菅)に同じ。

やますげうら 山菅占【名】古の占の一法。山菅の葉を結び合はせ、その末を神巫に結ばせて、トひしものといふ。續詞花「又も逢ひがたかりける女の事を、山菅占にて問ひければ、續かざりければ、それに結び具して遣しける、思ひあまり山菅占に物問へばはなればなれになるぞ悲しき」

やますげがさ 山菅笠【名】山菅を編みて作れる笠。或は、山菅を菅笠に言ひかけて、一語のやうに、文(ヤ)なせるならんともいふ。人丸集「おしてるや山菅笠を置きふるし後は誰が著んものならなくに」

やますげの 山菅の【枕】■山菅の實を珍重して、み(實)にかけていふ。萬葉「山菅の實ならぬ事を我に寄せ言はれし君は誰とか寢(ヌ)らむ」 ■山菅の葉は繁くして亂れてあるより、みだる(亂る)にかけていふ。一說には、みだるのみの音にかけたるにて、前項の用法に同じと。萬葉「玉かづら絶えず行かさね山菅の思ひ亂れて戀ひつつかあらむ」 ■山菅の名の前半と同音なるやま(止ま)にかけていふ。萬葉「山菅のやまずて君を念へかもわが心利(リ)のこの頃はなき」 四山菅の葉は正しく相對はざるより、そがひ(背向)にかけていふ。一說には、山菅の名の後半と、發音の近きより、かけていへるなりと。萬葉「かなし妹をいづち往かめと山菅のそがひに寢しく今し悔しも」

やますげ-みの 山菅蓑【名】山菅を編みて作れる蓑。或は、山菅を菅蓑に言ひかけて、一語の如くに文(ヤ)なせるならんともいふ。夫木「吾妹子(ワギモコ)が袖を頼みて足引の山菅蓑を取らで來にけり」

やますはう 山蘇芳【名】(植)**いちみ**(一位)に同じ。「じ。

やますふ 【名】(植)**とりかぶと**(烏頭)に同

やますひ 山住・山住居【名】次條に同じ。和合人「山住居などの閑靜がり」

やま-ずみ 山住【名】一やまざとずみ(山里住)に同じ。二山寺に住むこと。源氏「この世の外の山住などに思ひ立つもありけり」

やますゑのおほぬし-のかみ 山末大主神【名】『この神は日吉(ヒエ)の山の頂にありて、その土を主宰したまへりとての名なりといふ』おほやまくひのかみ(大山咋神)に同じ。

やま-せ 山背【名】やませかぜ(山背風)の略。辨乳母集「勝負の弓の山せに散る花をまとゐの外の人も見よかし」

やま-ぜ 【名】西南の風。大阪叢書昌詩「風有二伊南岐(東南風)・也滿舎(西南風)・阿奈敝(西北風)・滿設之稱(西風)」

やませ-かぜ 山背風【名】一山の方より吹き來る風。二春夏の風。ながせかぜ。瀨田あらし。〔近江國琵琶湖沿岸の方言〕三こち(東風)を云ふ。〔陸奥國津輕の方言〕

やま-せみ 山蟬【名】一山に居る蟬。一茶「山蟬の袂の下を通りけり」二〔動〕くまぜみ(熊蟬)に同じ。三〔動〕かのこざり(鹿子島)に同じ。〔山翡翠〕

やませんきゆう 山川芎【名】〔植〕繖形科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉は再出羽狀複葉にして、葉柄の基脚、鞘形をなし、白色の小花、複繖形花序をなして開く。山間の濕地に自生す。しらねせんきゆう。やまぜり。

やま-ぜり 山芹【名】一〔植〕たうき(當歸)に同じ。和名「當歸、夜末世里。一云、於保勢利。一云、宇萬世利」二おらんだみつば(和蘭三葉)に同じ。三せりもどき(芹擬)に同じ。四のだけ(前胡)に同じ。五ばらふう(防風)に同じ。六前條に同じ。

やま-そだち 山育【名】山地にて育つこと、又その者。やまがそだち。

やま-そてつ 山蘇鐵【名】一〔植〕やぶそてつ(藪蘇鐵)に同じ。〔貫衆〕二水龍骨(ナンヒ)科に屬する常綠・多年生の羊齒植物。葉は根莖より生じ、大いさ二尺餘にして、羽狀に分裂せるさま、蘇鐵のに似、なほ、又、それよりも一層細き裂片を有する全緣の葉をも生じ、子囊群は後者に生じ、暗褐色を呈す。

やま-そは 山岨【名】山のそは。山崖。新六「山そはの山根に延(ハ)へる松の根は絶えぬ常井(ホトヒ)の筒井なりけり」

やま-そば 山側【名】次條に同じ。

やま-ぞひ 山沿【名】山に沿ひたる土地。山のかたはら。

やま-だ 山田【名】山にある田。記「足引の山田を作り」萬葉「君がため山田の澤にゑぐ摘むと雪解の水に裳の裾濡れぬ」

やまだ 山田【名】一〔地〕上野國十一郡の一。郡役所を桐生(キリウ)町に置く。二伊賀國の舊郡の一。明治二十九年、阿拜(アヘ)郡と合して、阿山(アヤマ)郡の新稱を立つ。三尾張國の舊郡の一。中世、廢せられて、春日部(カスカベ)郡卽ち今日の東春日井郡と愛智郡とに分割せらる。四讃岐國の舊郡の一。明治三十二年、三木郡と合して、木田郡となる。五近江國栗太(クリタ)郡にある村。琵琶湖の東岸。草津驛の西一里。矢橋(ヤバセ)と相並びて、大津への渡船ありし地。平家「山田・矢ばせの湖上に、舟押し出だす衆徒もあり」六伊勢國度會(ワタラヒ)郡にありし町。膝栗毛「川崎音頭に伊勢の山田と謠ひしは、和名抄の陽田(ヤタ)といへるより出でたるにや」

山田の碑【句】陸前國桃生(モノ)郡桃生村大字樫崎(カシザキ)にある古碑。貞觀年中、陸奥介坂上高道、夷賊のために戰死せしを表旌せるなりといふ。碑面に「高道墓」の三字を刻せり。

やまだ-あきよし 山田顯義【名】〔人〕明治維新の元勳。山口の人。顯行の子。世世、毛利侯に仕ふ。累進して、陸軍中將・司法大臣等を經、正二位・勳一等樞密院顧問官・議定官たり。功によりて、伯爵を授けられ、明治三十五年薨ず。年四十九。

やま-だいこ 山大根【名】〔植〕まつむしさう(松蟲草)に同じ。

やま-だいこん 山大根【名】〔地〕ねずみだいこん(鼠大根)に同じ。

やま-だいわう 山大黃【名】〔植〕いぶきさらのを(伊吹虎尾)に同じ。

やまたか 山高【名】一江戸時代に、山より收益の額を計算し、その地の村高に編入して、高掛物(リヨウカカリ)を收納せしもの。二次條の略。

やまたか-ばうし 山高帽子【名】たかぼう(高帽)に同じ。

やまたけ 山竹【名】〔植〕いたどり(虎杖)を云ふ。〔備前國の方言〕

やまだ-けんげう 山田撿校【名】〔人〕箏曲家。名は斗養、幽樵と號す。本姓は三田氏。母は山田氏。幼にして盲となる。山田松黑に技を學びて、出藍の譽あり、遂に一家を成し、新曲數十を案出す。師の姓と母の姓と同一なりしより、山田姓を名乘るに至れり。山田流の祖。文化十四年歿す。年六十一。

やまだし 山出【名】一山にて產出・製造したる木材・薪炭・陶器などを、市邑の地に搬び出すこと、又その產出・製造せる物、又それを搬び出す人夫。出世叢話「山出七十五人して曳いたる楠の木にて」膝栗毛「山だしの低き角下駄に、竹の皮の鼻緒をすげたるを穿き」二山そだちそのままの粗野なること、又その人。かけだし。はひだし。ぼっとで。一代女「山出の下女」

やまだし-をとこ 山出男【名】山だし二の男。八笑人「吹かるる春の山出男」

やまだ-そうへん 山田宗偏【名】〔人〕茶道の宗匠。周學・如竿子・四方庵・今日庵等の號あり。後、力圍齋と號す。京都の人。三河國吉田に住み、後、洛西鳴瀧(ナルタキ)に寓居す。千宗旦に學び、遂に一家を成し、江戸に出で、吉良上野介の推薦によりて、小笠原佐渡守の茶道となる。宗偏流の祖。寶永五年歿す。年八十五。

やまだ-ぞめ 山田染【名】河內國南河內郡山田村より產する紫草(ムラサキ)染及び茜(カネ)染。

やま-たち 山立【名】昔の船軍の時、船の舳に居て、海の深さ、漁船・旅船の出入、及び、山・島・潮筋などを見て、進路・方向を艣取に告げし役。

やま-だち 山立【名】一山にて生ひ立つこと、又その人。やまそだち。(川立に對して)二山かせぎに熟練せる者、卽ち樵夫・獵夫など。(川立に對して)三さんぞく(山賊)に同じ。平治「山立・强盜」平家「伊勢の鈴鹿(カヂ)山にて山だちして、妻子をも養ひ」

山立は山で果つ【句】「川立は川で果つ」に同じ。〔諺語〕

やまたちばな 山橘【名】一山に生えてある橘の木。野生の橘。二〔植〕やぶかうじ(藪柑子)に同じといふ。萬葉「足引の山橘の色に出で語らひ繼ぎて逢ふ事もあらむ」三〔植〕ぼたん(牡丹)一に同じ。字鏡「牡丹、山橘」

やまたち-ひめ 山立姫【名】〔動〕ぬのしし(猪)の異稱。やまなしひめ(山なし姫)參照。

やまたつ 山立【句】「聲・山立つ」を見よ。

やまたづ 山たづ【名】一〔植〕にはさと(接骨木)に同じ。柚人の用ふる手斧なりといひ、又、だづは鑄(キヅ)なりとの舊說もあれど、そは、下に記せる古事記の註の「造木」を「木を造る」と訓みて誤解せるなり。〔古語〕記「山たづの(……山多豆の舊說を、更に誤解せるもの』そまびと(柚人)に同じ。草根集「柚かろしこの山たづに柚板のすぐなる道を夏や來にけん」者、是今造木(コトヤツ)者也」二『もと前項

やまたづの 山たづの【枕】山たづ、卽ち接骨木(ニハサト)の葉は、羽狀複葉にて、各小葉相對し、又、複葉そのものも、一枚づつ左右對生する木なるより、むかへ(向へ)にかけていふ。山たづを、斧の類と解して、これを用ひて、物を切るには、刃を吾が方に向けてするため、又、左右の手にて、眞向(マヤマヒ)に振り上げて切るため、又、柚人の立木を伐る場合には、この木の左右に對ひあひてするためなどいへる舊說もあれど、何れも、山たづといふ語の誤解に出てたり。記「君がゆきけながくなりぬやまたづのむかへを行かむ待つには待たじ」

やまだ-とをなん 山田圖南【名】〔人〕德川幕府の醫官。名は正珍、字は宗俊。藥を父に受け、最も儁塞の學に精し。天明七年歿す。年五十七。

やまーだな 山棚【名】やまほこ(山鋒)に同じ。

やまだーながまさ 山田長政【名】〔人〕冒險家。通稱は仁左衛門(ニモンザ)。駿河國の人。關ケ原の一戰に、海内平定し、仕を侯伯に求むるに非ざれば、立身の道なきを思ひ、志を海外に展べんと、元和中、貿易商瀧佐右衛門・太田治左衛門の船に乘りて、暹灣に渡航し、更に暹羅に入る。偶、國内の騷亂に遭ひて、國王を援け、鎮定の功によりて、その女を妻はされ、諸侯に列し、後、遂に國政を攝行す。王殂して、姦臣に忌まれ、毒殺せらる。時に我寛永十年といふ。

(さまがなだまや)

やまーたに 山谷【名】山と谷と。山又は谷。さんこく。萬葉「足引の山谷越えて野阜(ハヤブ)に今は鳴くらむ鶯の聲」

やまたーのーをろち 八岐大蛇【名】素盞嗚(スサノヲ)尊の、高天原(タカマガハラ)を追放せられ、この國土に天降りし後、出雲國簸川(ヒカハ)の上流にて、屠りたまへりといふ大蛇。一身、八頭・八尾を具へ、長さ八峽に亘りたりといふ。

やまだはうこく 山田方谷【名】〔人〕儒者。名は球、字は琳卿、通稱は安五郎。伊豫國松山の人。丸山松陰に就きて、朱學を修む。後、江戸に出で、佐藤一齋に學び、佐久間象山・鹽谷宕陰等と交はり、經濟・法術の事に通ず。藩の郡宰より家老となり、治績あり。明治十年歿す。年七十三。

やまたばこ 山烟草・山莨菪【名】〔植〕菊科に屬する草。倒卵形にて淡綠色なる葉叢生し、その間より花莖抽き出でて、三四尺に達し、無柄の葉數片を著く。黃褐色の花、頭狀花序をなして開く。原野に自生す。りうきうもくかう。

やまだーぶぎやう 山田奉行【名】江戸幕府の職制の一。伊勢國山田に駐在して、老中支配の下に、伊勢大神宮の警衛と、その祭祀及び遷宮の時の造營とに任じ、又、伊勢・志摩兩國の幕領の管轄と志摩國鳥羽港出入の船舶の點檢とをも掌りき。遠國奉行の一。定員は普通一人。芙蓉の間詰にて、水主・同心等附屬したり。

やまだーみつのり 山田光德【名】〔人〕劍客。通稱は左衛門尉。一部齋と號す。眞心影流劍法の祖。貞享・元祿頃の人。

やまだんご 山團子【名】〔植〕はんのき(榛木)を云ふ。〔尾張國の方言〕「る琴曲。

やまだーもの 山田物【名】山田流に屬す

やまだーもり 山田守【名】山田を守る人。相撲集「わがごとや癡ねがてにする山田守かりてふ靡に目をさましつる」

やまーたらう 山太郎【名】㊀攝津國より產し、柚人の、茶を煮、飯を炎くに用ふる、土瓶の如き磁器。嗣水「三日月に雫も足らぬ山太郎」㊁石を括り附けたる木碇。〔薩摩國の方言〕

やまだーりう 山田流【名】箏曲の流派の一。山田檢校を祖とす。主として、關西地方に行はる。

やまーぢ 山路【名】山中の通路。やまみち。さんろ。

やまーぢがや 山茅萱【名】〔植〕きんばいざさ(金梅笹)に同じ。

やまーぢからー 山力【名】山かせぎする者の、強き腕力。持統天皇歌軍法「生ぬるい上方武士、山力に叶はうか」

やまぢーぐさ 山路草【名】〔植〕きく(菊)㊁菊の異名。歲事記栞草「山路草、「寺のちご」。

やまーぢご 山兒・山稚兒【名】比叡山延曆

やまーぢさ 山齊墩果【名】㊀山に生えてあるちさの木。野生のちさ。㊁〔植〕さんごじゅ(珊瑚樹)㊂に同じ。萬葉「山ぢさの白露重みうらぶるる心を深み吾が戀止まず」

やまぢーざけ 山路酒【名】きくざけ(菊酒)㊁に同じ。若鳳奮「南請(カミナケ)の里の屋に名月を知るもしをらし。麗煮の芋に、口缺(カケ)の德利、香(カホ)はさすが菊といへる山路酒」

やまーぢし 山齊墩果【名】やまぢさ(山齊墩果)に同じ。

やまーぢしや 山齊墩果【名】やまぢさ(山齊墩果)に同じ。

やまぢーもとはる 山路元治【名】〔人〕軍人。舊土佐藩士。初の名は忠七。明治維新の際、江戸に出でて、國事に奔走し、戊辰の役、奥羽に轉戰して、一眼を失ふ。職を陸軍に奉じ、中將となり、男爵を授けらる。日清の役、第二軍に屬し、旅順を陷落せしめ、功によりて、子爵に陞敍す。三十年薨ず。年五十七。

やまぢーもの やまち物【名】き(木)㊁の異稱といふ。

やまーぢわう 山地黃【名】〔植〕がんくびさう(雁首草)に同じ。

やまーぢわうぎく 山地黃菊【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ一尺内外、葉は葉柄を缺き、基脚、莖を抱く。暖地の海に近き原野に自生し、淡綠色の花を開く。いづははこ。わたな。

やまーぢーいも 薯蕷【名】〔植〕やまのいも(山芋)に同じ。和名「薯蕷、一名、山芋、夜萬都以毛、俗云、山乃以毛」

やまーぢーか 山塚【名】㊀山と塚と。山又は塚。㊁高く積める物の譬。攝津名所「たとひ七珍の財を、山塚と積めりとも」

やまーぢき 山坏【名】『やまづば(山都婆)を見よ』形の大なる坏。延喜式「山坏・小坏」

やまーづきん 山頭巾【名】山住の者のかぶる頭巾。國姓爺後日合戰「親類・知音の禮讓むづかしと山居致せし頑固者(カタクナモノ)、……山頭巾、振り擔(カ)げたる鐵砲の」

やまーづくし 山盡【名】㊀山の名、又山に關係ある語を擧げ列ぬること、又その擧げ列ねたる文句。松の葉「山づくし、戀とは山路に入りそめしより人目忍ぶの山とはつらや。稀に逢ふ夜は、雛(カタ)さへも時知らぬ山山は名のみして、明くる佗しき葛城山よ」㊁模樣などに、山峯の種種なる形を集めて描くこと、又その描ける模樣。若鳳奮「薄樺染の小袖に、山づくしの書紋(モンヤ)」

やまーづくり 山造【名】山にて伐りたる樹を、用材に仕立つること。庭訓往來「山造斧・鑿(キリ)・鋸・釿(チヨウ)並造作釘」

やまつくりーどころ 山作所【名】山陵又陵墓を造營する場所、又その山陵陵墓。延喜式「到二山作所一」

やまつくりーのーつかさ 山作司【名】古代に、貴人薨去の時、陵墓造營のために設けられし司。

やまーづたひ 山傳【名】㊀山を傳ひて進み行くこと。盛衰記「山づたひに都へ上りて」㊁〔植〕いはがねさう(岩根草)に同じ。

やまつづき 山續【名】山の連なり續きてあること、又その山。俳諧新選(蟻山)「行拔(スヒヤ)の園の紅葉や山つづき」

やまつつじ 山躑躅【名】㊀山に生えてある躑躅。野生の躑躅。猿蓑「智月「山つつじ海に見よとや夕日影」」㊁〔植〕石南(シヤクナゲ)科に屬する落葉灌木。躑躅類中の最も普通なるもの。高さ八尺に達す。小枝と葉の兩面と葉柄とに、粗毛密生す。葉は楕圓形又は廣楕圓形にして、先端尖り、全緣にして薄く、綠色にして光澤あり。花は、四月、枝端に一輪乃至四輪づつ開き、葉と共に出づることもあり、又、葉より早く生ずることもありて、濃紅色又は淡紅色を呈して美し。山地に自生多く、又、栽培して觀賞す。五月躑躅(ツツジ)・霧島躑躅等はその變種なり。あかつつじ。をかつつじ。〔紅躑躅〕

やまーづさ 山苞・山苞苴・山裏【名】山より歸る時のみやげ。萬葉「足引の山行きしかば山人の吾に得させし山づとぞこれ」源氏「山づとに持(モ)たまへりし紅葉」

やまーづーどり 山鳥・山鷄【名】〔動〕『つは領格の助詞』**やまどり**(山鳥)㊁に同じ。〔古語〕萬代「山つどりをろの長尾の尾鏡にかかる心を見るや遠妻(ツマ)」

やまーつなみ 山津波【名】㊀〔地〕やまくづれ(山崩)に同じ。㊁山中の水の横溢して、害を與ふること。山の洪水。やまぬけ。

やまーつばき 山椿【名】㊀山に生えてある椿。野生の椿。萬葉「足引の山つばき咲く八峯(ヤツ)越え獸(シ)待つ君がいはひ妻かも」㊁〔植〕たまつばき(玉椿)㊃に同じ。

やまつくりーどころ 山作所【名】山陵墓を造營する場所、又その山陵陵墓。延喜式「到二山作所一」

やまつくりーのーつかさ 山作司【名】古代に、貴人薨去の時、陵墓造營のために設けられし司。

やまーづたひ 山傳【名】㊀山を傳ひて進み行くこと。盛衰記「山づたひに都へ上りて」㊁〔植〕いはがねさう(岩根草)に同じ。

やまつづき 山續【名】山の連なり續きてあること、又その山。俳諧新選(蟻山)「行拔(スヒヤ)の園の紅葉や山つづき」

やまつつじ 山躑躅【名】㊀山に生えてある躑躅。野生の躑躅。猿蓑「智月「山つつじ海に見よとや夕日影」」㊁〔植〕石南(シヤクナゲ)科に屬する落葉灌木。躑躅類中の最も普通なるもの。高さ八尺に達す。小枝と葉の兩面と葉柄とに、粗毛密生す。葉は楕圓形又は廣楕圓形にして、先端尖り、全緣にして薄く、綠色にして光澤あり。花は、四月、枝端に一輪乃至四輪づつ開き、葉と共に出づることもあり、又、葉より早く生ずることもありて、濃紅色又は淡紅色を呈して美し。山地に自生多く、又、栽培して觀賞す。五月躑躅(ツツジ)・霧島躑躅等はその變種なり。あかつつじ。をかつつじ。〔紅躑躅〕

やまーづさ 山苞・山苞苴・山裏【名】山より歸る時のみやげ。萬葉「足引の山行きしかば山人の吾に得させし山づとぞこれ」源氏「山づとに持(モ)たまへりし紅葉」

やまーづーどり 山鳥・山鷄【名】〔動〕『つは領格の助詞』**やまどり**(山鳥)㊁に同じ。〔古語〕萬代「山つどりをろの長尾の尾鏡にかかる心を見るや遠妻(ツマ)」

やまーつなみ 山津波【名】㊀〔地〕やまくづれ(山崩)に同じ。㊁山中の水の横溢して、害を與ふること。山の洪水。やまぬけ。

やまーつばき 山椿【名】㊀山に生えてある椿。野生の椿。萬葉「足引の山つばき咲く八峯(ヤツ)越え獸(シ)待つ君がいはひ妻かも」㊁〔植〕たまつばき(玉椿)㊃に同じ。

やまつばば 山都婆婆【名】『やまつき(山坏)を見よ』形の大なるつばば。〔古語〕延喜式「山都婆婆・小都婆婆」

やまつみ 山祇【名】『つは領格の助詞』山の神。〔古語〕黄塞「山神(ヤマツミ)の奉(マツ)る御調(ミツキ)と春べは花かざし持ち秋立てば紅葉(モミヂ)かざし」

やまつみのかみ 山祇神【名】おほやまつみのかみ(大山祇神)に同じ。

やまづら 山面【名】山の表面。散本「川むかひの山づら」

やまつり 矢祭・箭祭【名】「矢口(ヤグチ)の祭」に同じ。東鑑「於二伊豆國一射二獲小鹿一頭一……。厳閣備二箭祭餅一」

やまづゑ 山杖【名】山人の作りたる杖か、山を行くに携ふる杖かなるべし。神樂(杖)「逢坂を今朝(ケサ)越え來れば山人の我にくれたる山杖ぞこれ」

やまて 山手【名】■或土地の内にて、山に接近せる方の地域。やまのて。山地。運歩色葉集「山手、ヤマテ」和合人往(オウ)に海がはを見て、歸(カヘ)に山手を見るとしさし」■せきせん(關錢)に同じ。■矢條の略。

やまてとめえい 山手米永【名】江戸時代の小物成(コモノナリ)の一。村持(モチ)の山の秣などの收穫物に關して、村中より納めしもの。

やまてまり 山手毬【名】■〔植〕がまずみ(莢蒾)に同じ。■やぶてまり(藪手毬)に同じ。

やまてん 夜摩天・耶摩天【名】『やま(夜摩)を見よ』三界諸天の内、欲界の第三天。この天に生るる者は、善く時分を知りて、五欲の樂を受くといふ。夜摩。餘天。謡曲「舍利」「欲界・色界(シキカイ)・無色界(ムシキカイ)・化天(ケテン)・夜摩天・他化(タケ)自在天、三十三天攀ぢ登りて」

やまでら 山寺【名】■山にある寺。さんじ。■りふしやくじ(立石寺)の俗稱。

やまてらし 【名】〔植〕はくさんぼく(堅莢樹)に同じ。

やまでらほふし 山寺法師【名】山寺の法師。盛衰記「平泉寺の長吏齊明(ナリイヘ)は、……山寺法師、思ふにさこそあらんずらめ」

やまと 山と【名】『とは處の義とも、たぐの約ともいふ』山の處。一説に、山のたわみたる處。〔古語〕記「山との」もと薄(ススキ)」

やまと 大和【名】■〔地〕『もと、倭と書きしに、和は、これに通ずる字なるより、元明天皇の御代、地名は二字を用ふることと定められし時、大の字を冠して、美稱とし、訓は元のままとせしもの』令義解「内五畿國の一。全國、奈良縣の管轄に屬す。〔倭〕■〔地〕『前項の地は、平安奠都以前、歴代の皇居の地なりしより轉用せるもの』わが大日本帝國の異稱。おほやまと。〔日本養德・倭〕「和日本、此云二耶麻騰一」源氏「唐(カラ)のも、大和のも歌ども多かれど」■大和打にし、上下に框(チリ)なき戸。

大和の三山【句】〔地〕大和國高市(カグ)郡白橿(カシ)村なる畝傍(ヒツボ)山と、同國磯城(キ)郡香久山(カグ)村なる香久山と、同國同郡耳成(ミミナシ)村なる耳無(ミミナシ)山と。古の藤原の都を中心とせる平野の三方に峙立し、相距ること各一里、山容、最もすぐれたるは耳無山、雄偉なるは畝傍山にして、香久山、最も劣れり。神代に、この三山相鬪ひしを、出雲國の阿菩(ホ)の大神聞きて、鬪を諫止せんがため、播磨國まで來りしに、鬪止めることを知り、そのまま播磨國に留まりし由の傳説、播磨風土記に見え、後、天智天皇、播磨國に赴かれし時、その傳説を偲びて詠まれし歌も、萬葉集卷の一に見ゆ。

大和の四家【句】筒井(藤原氏より出づ、興福寺に屬し、勢あり)・十市・箸尾・越智の四家。皆大和に居りしよりいふ。

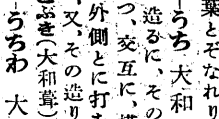
やまと 山門【名】〔地〕筑後國六郡の一。郡役所を柳河(ガハ)町に置きたり。

やまと-いも 大和芋【名】〔植〕『うだいも(字陀芋)を見よ』つくねいも(佛掌薯)に同じ。

やまとうしん 山燈心【名】〔植〕かなうつぎ(金卯木)に同じ。

やまとうた 大和歌【名】わが國の歌。和歌。うた。(唐歌(カラウタ)に對して) 古今集序「大和歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」

やまとうち 大和打【名】塀を造るに、その板を、一枚づつ、交互に、横木の内側と外側とに打ち附くること、又、その造り方の塀。



やまとぶき (大和葺)參照。

やまとうちわ 大和團扇【名】〔植〕いはうちは(岩團扇)に同じ。

やまとうつぼ 大和空穗【名】竹又は木を編みて、穗を作り、黑く塗り、毛皮を著けぬ空穗。

やまとおほぢ 大和大路【名】〔地〕古、京都の三條大橋の東より、南へ、鴨川に沿ひ、宇治を經て、大和國に通ぜし街道。後世は、伏見を經て通ずることとなり、七條以南、伏見までを、伏見街道と呼べども、古は、それより一町東方に通じぬたりといふ。平道「宇陀の郡を志せば、大和大路を尋ねつつ、南を指して歩めども」

やまとおり 大和織【名】木綿絲の太きを經(タテ)とし、太き黄麻絲を緯(ヨコ)とし、又はこれに、毛蓑を集めて平織にせる、厚き敷物地、及びフラッシ織物などの鞄類に用ふる生地の織物。

やまとかかり 大和掛【名】しもがかり(下掛)に同じ。(京掛に對して)

やまとかき 大和搔【名】蔓などを、蛇の纏へる樣に、竹などに絡ますること、又その絡みたるもの。

やまとかすり 大和絣・大和飛白【名】大和國の南葛城(カツラギ)・北葛城・磯城(シキ)・高市等諸郡より産する木綿織の絣。もと白絣なりしが、今日にては、紺絣なるもあり。

やまとかぢ 大和鍛冶【名】大和國奈良に住みし鍛工。太平記「大和鍛冶の鍛うて打ったるを」少少用意仕りて候」

やまとかな 大和假名【名】■かたかな(片假名)に同じ。■ひらがな(平假名)に同じ。蕪村「大和假名いの字を兒(ヂ)の筆はじめ」

やまとがは 大和川【名】〔地〕大和國初瀬(ハツセ)川を上流とし、大和盆地の諸水を合はせて、河内・摂津兩國を流れて、大阪灣に注ぐ川。畿内第二の大河。もと大阪城東を過ぎ、淀川と會して、大阪灣に注ぎしを、元禄十五年、德川幕府、土工を起して、現時の如くせり。流程約十三里の内、下流六里の間、舟楫の便あり。浪華(桃)「五月雨の色や淀川大和川」

やまときさう 山とき草【名】〔植〕ときさう(とき草)に同じ。

やまとぐら 倭鞍【名】我國固有の造り方なる飾鞍。(唐鞍(カラ)に對して) 西宮記「倭鞍・唐鞍」

やまとげた 大和下駄【名】爪掛(ツマカ)を作りつけにせる駒下駄。

やまとげんじ 大和源氏【名】清和源氏の三支流の一。六孫王經基の長子多田滿仲の次子頼光の、罪を得て、流刑に處せられ、その子孫の、世世大和國に居りしもの。平家「大和源氏中務(ナカツカサ)權少輔頼春に仰せて」

やまとけんぶつ 大和見物【名】やまとめぐり(大和巡)■に同じ。

やまとごころ 大和心【名】やまとだましひ(大和魂)に同じ。續世説「さもあらばあれ大和心しかしこくば細乳(ホソ)に附けて有らすばかりぞ」續世説「かの少納言、漢の文を廣く學び、大和心もかしこかりけるにや」

やまとことばへ 大和心延【名】前條に同じ。愚管抄「人がら、大和心ばへ惡(ヨ)かりける人なり。唐才(カラザエ)はよくて、詩など、いみじう作りけれど」

やまとごたつ 大和火燵【名】おきごたつ(置火燵)に同じ。

やまとごと 大和琴・日本琴・倭琴【名】我國固有の絃樂器。桐の材を用ひ、箏と同樣にて、首端を鵶尾に類せる形に造り、六絃を張りたるもの。大さは、長さ六尺

二三寸なると、六尺なると、五尺乃至五尺八寸なるとの三種あり。楓の枝を天然のまま高さ二寸二分、下方の廣さ二寸に切りて、琴柱(ことぢ)に用ひ、水牛の角にて作れる、長さ二寸半の義爪にて彈ず。義爪の形は笏に似て、上下共に圓く、そのやや狹き一方を紘に當つ。今日も、神樂・雅樂等に用ふ。あづまごと。和琴(わごん)。鵄(とび)の小琴(ことぢ)。和名「日本琴、俗用二倭琴二字一、夜萬度古度」

やまと-ことのは 大和言葉 【名】次條に同じ。 源氏「伊勢・貫之(つらゆき)に詠ませたまへるやまとことのはをも、もろこしの歌をも」 新千載「菜原や正しき國の風として大和ことのは末も亂れず」

やまと-ことば 大和言葉・大和詞・倭詞 【名】一我國固有の言葉を指す)雅言。(後世は、主として、中古以前の言葉。 正統記「神日本磐余彦(かむやまといはれひこ)と申すは、神代よりのやまとことばなり。神武は、中古となりて、唐の詞によりて定め奉る御名なり」 二やまとうた(大和歌)に同じ。 源氏「倭詞だに、つきなく習ひにければ」

やまと-ことわざ 大和言業 【名】大和言葉の技。大和歌を詠むわざ。 拾玉「敷島や大和ことわざ君が代に新たになれる惠をぞ知る」

やまと-どよみ 大和暦 【名】ならどよみ(奈良暦)に同じ。

やまと-ところ 山野老 【名】〔植〕はなすげ(花菅)に同じ。 字鏡「茹母、山止已呂」

やまと-さう 大和相 【名】我國固有の人相見(にんさう)。 源氏「高麗人(こまうど)の參れるが中に、賢き相人(そうにん)ありけるを……、やまと相を仰せておぼし寄りける筋なれば」

やまと-さんざん 大和三山 【名】〔地〕「大和の三山」に同じ。

やまと-さんすゐ 大和山水・日本山水 【名】大和繪に畫く山水。 風俗文選「山水譜」「大和山水とて、かはりはあらず。されど、城ある處には天主を聳やかし、神社ある地には鳥居を書くべし」

やまと-さるがく 大和猿樂・大和申樂 【名】室町時代に、大和國に住みて、同國春日神社の神事に從事せし、外山・結崎(ゆうざき)・坂戸・圓滿井(ゐのくち)の四座の猿樂。外山は後の寶生(ほうしゃう)、結崎は後の觀世、坂戸は後の金剛、圓滿井は後の金春(こんぱる)なり。(近江猿樂などに對して)

やまと-しま 大和島・倭島 【名】〔地〕次條に同じ。 萬葉「海原の沖べにともしいさる火は明してともせ大和島見む」 同「天離(あまざか)る鄙の長路(ながぢ)ゆ戀ひ來れば明石の門(と)より大和島見ゆ」

やまと-しまね 大和島根・倭島根 【名】〔地〕やまと(大和)一に同じ。一說に、島根も、島も、磯城島(しきしま)などの例もある如く、古、海に關係なく、單に一區域の地を指しても用ひたれば、やまと(大和)一に同じと。 萬葉「名ぐはしき印南(いなみ)の海の沖つ浪千重に返りぬ大和島根は」

やまと-すがた 大和姿 【名】我國固有の狀態。 町人袋底拔「人の國より傳へ來りし儘にてもて弘めしも、……大和姿になりゆくめるは」

やまと-ぞくくん 大和俗訓 【名】〔書〕爲學・心術・衣服・言語・躬行・應接等の目を分ちて、修身・禮儀・作法の事を記せるもの。八卷。貝原益軒の著。

やまと-だいく 大和大工 【名】大和國に住める大工。歷代の皇居所在の地にて、宏壯なる建築多かりしため、同國の大工を、特に稱譽していへり。 出世景清「南都東大寺大佛再興……、大和大工に飛驒工」

やまとだけ-のみこと 日本建尊 【名】〔人〕やまたけるのみこと(日本武尊)の誤稱。

やまとだけ-のみこと-あづまかがみ 日本武尊東鑑 【名】筑紫には八十梟帥(やそたける)、東國には外濱(ハツトマ)の忍熊(クマ)とて、東西二人の夷魁の、景行天皇第二の姫宮神寶(カムタカラ)姫に婚を請ふことより筆を起して、日本武尊の武勇を稱へたるもの。近松門左衛門の作。

やまとたける-の-みこと 日本武尊・倭建命 【名】〔人〕景行天皇の皇子。小碓(ヲウス)尊、又、日本童(ヤマトワラハ)とも申す。御母は播磨稻日大郎女(ハリマイナビノオホイラツメ)皇后。天皇の二十七年、勅を奉じて熊襲(クマソ)を平げ、四十年、又、東國に蝦夷を征し、歸途、近江國を過ぎ、膽吹(イブキ)山に暴神ありと聞き、これを討たんとし、病を得て、伊勢國能褒野(ノボ)に薨ず。御年三十。

やまとだな 大和棚 【名】違棚(ちがひだな)の一。一筆返(ひとふでがへし)を缺きたるもの。

やまとだましひ 大和魂 【名】我國固有の國民精神。やまとごころ。和魂(わこん)。(漢才(からざえ)に對して) 源氏「才(ざえ)をもとしてこそ、大和だましひの世に用ひらるる方も、强う侍らめ」 今昔「才はいみじかりけれども、つゆ大和魂なかりける者には」

やまたらしひこ-おしびと-の-すめらみこと 日本足彥押人天皇 【名】〔人〕かうあんてんわう(孝安天皇)を稱す。

やまと-ち 大和路 【名】一大和國へ往返する道路。 萬葉「大和路の吉備の兒島を過ぎゆかば筑紫の兒島思ほえむかも」 二大和國の內の道路。 太平記「御下向は大和路に懸らせたまひしかば、道の便も好しとて」 三〔地〕やまとおほぢ(大和大路)に同じ。 保元「大和路を南へ發向するに」

やまと-つかひ 大和使 【名】けんたらし(遣唐使)に同じといふ。 夫本「今の世にありとは聞かず唐(もろこし)のふみ學ぶてふやまと使は」

やまと-づゑ 大和杖 【名】しとみづゑ(仕込杖)に同じ。

やまと-ぢ 大和綴 【名】書冊の和綴(わとじ)の一。紙を、中央にて二つに折り、その折目に孔を穿ち、絲を貫きて綴づること、又その綴方にせるもの。即ち胡蝶綴・帖葉(てふよう)の總稱。

やまと-な 大和名 【名】大和言葉を用ひたる名稱。和名。(唐名(からな)に對して) 順集「大和名に言ひにくき事を」

やまと-なでしこ 大和撫子・大和瞿麥 【名】〔植〕なでしこ(撫子)一に同じ。 古今「あな戀し今も見てしが山がつの垣ほに咲ける大和撫子」

やまと-に 大和煮 【名】牛肉を、日本風に、醬油・砂糖・唐辛(たうがらし)粉などを用ひて、煮詰つめて、罐詰にせる食品。

やまと-にしき 大和錦・倭錦 【名】一我國にて、織りたる錦。(唐錦(からにしき)に對して) 二後世、唐綾に模して、我國にて織りたる絹織物。現今のは、片撚又は諸撚の生絲の、一色に染めたる經(たて)に、種種の美しき色合に染めたる緯絲を緯(よこ)に用ひて、模樣を織り出す。 三〔植〕ちりめんもみぢ(縮緬楓)に同じ。

やまと-ねこ-あまつみしろ-とよくになりひめ-の-すめらみこと 日本根子天津御代豐國成姫天皇 【名】〔人〕げんみやうてんわう(元明天皇)を申す。

やまと-ねこ-あまおしくにたかひこ-の-すめらみこと 日本根子天排國高彥天皇 【名】〔人〕へいぜいてんわう(平城天皇)を稱す。

やまと-ねこ-あめしるし-とよさと-すめらみこと 日本根子天爾豐聰慧天皇 【名】〔人〕にんみやうてんわう(仁明天皇)に同じ。

やまと-ねこ-あめのたかゆづり-いやとほし-の-すめらみこと 日本根子天高讓彌遠天皇 【名】〔人〕じゅんわてんわう(淳和天皇)を稱す。

やまと-ねこ-すべいやてらす-すめらみこと 日本根子皇彌照天皇 【名】〔人〕くわんむてんわう(桓武天皇)を稱す。

やまと-ねこ-たかみづきよたらしひめ-の-すめらみこと 日本根子高瑞彥淨足姫天皇 【名】〔人〕げんしやうてんわう(元正天皇)を稱す。

やまと-の-ふひとべ 西史部 【名】ふひとべ

やまと-の-みことも 日本府 【名】にほんふ(日本府)に同じ。

やまと-の-り 大和糊 【名】防腐糊の一。硝子製の器に容れて、販賣す。

やまと-ばし 大和橋 【名】一『南進すれば、大和大路に通ずるよりいふ』京都市の東北より來り、智恩院の前を經、三條と四條との間にて、鴨川に注ぐ白川の河口に架

れる橋。 ㊁大阪市の東横堀と道頓堀と相接する處に架れる橋。東横堀に架れるを上大和橋、道頓堀に架れるを下大和橋といふ。 生玉心中「大和橋の浪納屋(ナヤ)借っての出店も」

やまとびめ-の-みこと 倭姫命 【名】〔人〕垂仁天皇の第四の皇女。御母は日葉酢媛(ヒハスヒメ)命。天皇の二十五年、豊鍬入姫(トヨスキイリヒメ)命に代りて、天照大神の御杖代(ミツエシロ)として奉仕す。神教に依り、諸國を歴遊して、大神鎮祭の地を求め、終に伊勢國五十鈴(イスズ)川の上流に定めらる。即ち今の伊勢神宮の地にして、後、日本武尊東征に方り、神宮を拜したまひし時、天叢雲(アマノムラクモ)の劒を授けて、これを勵まされたり。大正十年一月、皇大神宮別宮の一として、度會(ワタラヒ)郡四郷(シガウ)村楠部の地に奉祀せられ、又、宇治山田市倭町なる欣淨(キンジヤウ)寺境内の古墳を、假にその兆域と指定せられたり。

やまとびめのみこと-せいき 倭姫命世紀 【名】〔書〕開闢の始より雄略天皇の御代までの伊勢神宮の事を記せるもの。一卷。もと二卷ありしものの、下卷のみ殘れるなりといふ。飛鳥(アスカ)六代の孫大神主(オホミワヌシ)の、天武天皇の頃に記されしを、後、禰宜(ネギ)五月麻呂の、神護景雲二年に清書撰集せしものと傳ふれど、現存のものは、後世の僞書なるべしといふ。神道五部書の一。一名を、太神宮神祇本紀・太神宮本紀・神宮本紀・神代本紀といふ。

やまとごえ 大和笛・和笛・日本笛 【名】六孔ありて、神樂に用ふる、一種の横笛。

やまと-ぶき 大和葺 【名】板葺にて、大和屏と同樣に、一枚づつ、交互に同一平面にあるやうに、その相隣接する端を重ならしめて並ぶること、又その葺方なるもの。小町踊「大和葺の軒の菖蒲や奈良刀」

やまと-ぶし 大和富士 【名】〔地〕にじやうさん(二上山)を見よ。

やまと-ぶみ 大和文 【名】㊀大和言葉の文、又それにて記せる書籍。和文。和書。 ㊁にほんしよき(日本書紀)に同じ。〔日本史〕藻鹽草「やまと書、日本紀也」

やまとぶみ-じんだいの-まき 山和文神代卷 【名】〔書〕日本書紀の神代の卷を、假名書にせるもの。二卷。賀茂眞淵の著。

やまと-ぶんこ 倭文庫 【名】〔書〕しやかはつさうやまとぶんこ(釋迦八相倭文庫)の略。

やまと-ぶろ 大和風爐 【名】風爐の一種。春花五大力「後の方、挾箱一つ、大和風爐。宗十郎、書物讀んでゐる」

やまと-べ 大和邊 【名】大和國の帝都の地を大よそに指していふ語。 記「大和べに西風(ニシ)吹き上げて雲ばなれそきをりともわれ忘れめや」 萬葉「大和べに君が立つ日の近づけば野に立つ鹿もとよみてぞ啼く」

やまと-べい 大和塀 【名】塀の一種。最下の長押(ナゲ)より笠木まで、杉の皮を張り渡し、その上面に、曝竹(サラシダケ)の押縁(オサヘブチ)を、一尺五寸ほどづつ隔てて打ち附けたるもの。數寄屋などに用ふ。

やまと-へうぐ 大和表具・大和裓具 【名】正式とする掛物の表具。上・中・下緣(ヘリ)は、何れも大鷹紙を用ひ、一文字は大和錦、風帶は麻の組みたるを用ひ、各部分の寸法上の關係にも、一定の制規あり。

やまと-へうさう 大和表裝・大和裓裝 【名】前條に同じ。

やまと-ほんざう 大和本草 【名】〔書〕初に本草・藥用の事を概論し、第三卷以下に、和漢の本草約六百種を水・火・金・玉・土・石・穀・造釀・菜蔬・民用・花草・園草等の數十目に分類して掲げ、一一和名・能毒を詳說せるもの。十六卷。貝原益軒の著。

やまとほんざう-かうもく 大和本草綱目 【名】〔書〕支那の本草書を宗とし、我國に於ける金石・草木・蟲魚・禽獸など千三百六十二種を收錄して、和漢の名稱・形狀・氣味・能毒を記載せり。本文十六卷。附錄二卷。諸品圖三卷。貝原益軒の選述。

やまと-ぼんち 大和盆地 【名】〔地〕大和國の北部にある盆地。西方は葛城(カヅラギ)山脈、東方は笠置(カサギ)山脈、東南隅は鈴鹿(スズカ)山脈、南方三畝(ウネ)山脈横たはり、奈良・郡山・高田・御所(ゴセ)に亘れる平原を擁す。

やまと-まど 大和窻・大和窓 【名】突上(ツキアゲ)の障子を具へたる天窻(テンマド)。 寛永發句帳「唐までの月をぞ思ふ大和窻」

やまと-まひ 大和舞・和舞・倭舞 【名】もと大和國より始まりしものといふ。御即位禮・大嘗會又は鎮魂祭、その他、諸社の神事などに奏する、一種の雅樂。舞人四人、歌人二人、樂器は笏拍子(ヤウシキヒ)・龍笛(リウテキ)・篳篥(ヒチリキ)各一人づつにて奏し、裝束には小忌衣(ヲミミ)を用ひ、舞は專ら禮拜・磬折の狀を爲す。又、伊勢神宮にて奉奏する神樂の大和舞は、神宮特有のものにして、少女舞なりといふ。みやこまひ。古今「古きやまと舞の歌、しもと結(ユ)ふ葛城(カヅラギ)山に降る雪は間なく時なく思ほゆるかな」

やまと-まめ 大和豆 【名】〔植〕そらまめ(蠶豆)㊁を云ふ。〔大和國の方言〕

やまと-みこと 大和御言 【名】やまとことば(大和言葉)の敬稱。 千載「三十文字(モジ)あまり一文字をだに詠み連ねつる者は、出雲八雲の底を凌ぎ、敷島大和みことの境に入り過ぎにたり」

やまとみこと-うた 大和御言歌 【名】やまとうた(大和歌)の敬稱。 千載「大和みことの歌は、千早ぶる神代より始まりて、ならの葉の名に負ふ宮に廣まれり」

やまと-みづき 大和水木・女眞 【名】〔植〕くまのみづき(熊野水木)㊁に同じ。

やまと-みつで 大和みつで 【名】〔植〕かくれみの(隱蓑)㊁に同じ。

やまと-みんぞく 大和民族 【名】我國の國民(主として、琉球・臺灣・朝鮮等領有以前の)を、一民族として呼ぶ語。

やまと-め 大和女 【名】大和國の女。 萬葉「うち日さす宮のわが夫(セ)は大和女の膝まくごとに吾(ア)を忘らすな」

やまと-め 大和目 【名】『唐目(カタ)』に對する名にて、日本目の義ならんといふ』昔、藥種を秤るに、百八十匁を一斤として用ひし目方。

やまどめ 山止 【名】山に入ること、又は山の產物の採取等を禁止すること。

やまどめ 山留 【名】やまどめはふ(山留法)に同じ。

やまどめ 山どめ 【名】〔植〕つるつげ(蔓黃楊)に同じ。

やまと-めいしよづゑ 大和名所圖會 【名】〔書〕大和國の名所を列記し、圖畫を插みて說明せるもの。七卷。秋里籬島の著。もと膝禹言といふ者の、編輯を企て、全部の三分に至らずして歿せし後を承けて作成せるもの。圖畫は竹原春朝齋の筆。

やまと-めぐり 大和廻 【名】㊀大和國の名所舊蹟を見物しあるくこと。〔大和巡〕和合人序に伊勢參宮・大和めぐり」 ㊁〔書〕わしうじゆんらんき(和州巡覽記)に同じ。

やまどめ-はふ 山留法 【名】鑛山にて、坑道又は坑井を開鑿する時、留木などにて地山(ヂヤマ)㊁を支持し、その崩壞を防ぐ方法。

やまと-もじ 大和文字 【名】かな(假名)に同じ。(唐(カラ)文字に對して) 撰集抄「漢字に、所所に、大和文字を遊ばしまぜられはべり」

やまと-ものがたり 大和物語 【名】〔書〕『大和言葉にて記して、大和歌の道を知らしむる意の名とも、伊勢物語と同樣に、歌を中心とせる小話を多く記し集めたるもの。二卷。在原滋春(業平の次男)の著とも、花山院の御作ともいへど、詳かならず。姨捨(ヲバ)山の話、采女(ウネメ)投身の話、蒐原處女(ウナヒヲトメ)の話など、その中に在り。

やまとものがたり-ちよくかい 大和物語直解 【名】〔書〕大和物語に註解を加へたるもの。三卷。賀茂眞淵の著。

やまと-めめん 大和木綿 【名】大和國高田・田原木・郡山(コホリヤマ)等の地方より產し、紅(ベニ)木綿・鬱金(ウコン)木綿等の生地(キジ)となる白木綿。

やまと-や 大和屋 【名】〔人〕㊀いはゐはんしらう(岩井半四郎)を見よ。 ㊁ばんざうみつ

どらら(坂東三津五郎)を見よ。和合人「成田屋も、大和屋も、まあ一服呑んで往(イ)きなせえ」

やまと-よみ 大和訓【名】わくん(和訓)に同じ。袋草紙「諸官の大和よみ」

やまとらのを 山虎尾【名】〔植〕玄参科に屬する多年生の草。山野に自生す。莖の高さ二尺許。葉は狹長にて、鋭き鋸齒を有し、對生す。八月頃穗狀の紫色の小花を開く。

やまとり 山取【名】山より木材を切り出すこと、又その人。

やまどり 山取【名】山に陣取ること。天正記「その夜、近邊山取して」

やまどり 山鳥【名】一山に居る鳥。山禽。二〔動〕鷄雞類に屬する鳥。概形、雉に似て、羽毛に光澤あり。雄は全身赤黄色にして、赤黑の斑を有し、尾長く、脚に小き距を具ふ。雌は黑色にして微赤色を帶び、尾短く、尾は單に痕跡を留むるのみ。山野に棲み、肉味美なり。保護鳥の一。「山雞・山翟・鷓」萬葉「足引の山鳥の尾のしだり尾の長長し夜を一人かも寢む」和名「山雞。夜末止利。地理志云、山雞形如二家雞一。雄斑、雌黑」平家「白箟(ノ)に山鳥の尾を以て作(ス)いだりける矢」

(りどまや)

山鳥、鏡に向ひて鳴く【句】『事文類聚の後集に「昔屬寅王結二置峻阯之山、獲二一鸞鳥一。王甚愛之、欲二其鳴一而不レ能レ致。乃飾以二金筴一、饗以二珍羞一。對之逾戚、三年不レ鳴。其夫人曰、嘗聞、鳥見二其類一而後鳴。何不二懸レ鏡映一。鸞視レ形悲鳴。哀音響二中宵一、一奮而絶」とあり』友などを戀ふる譬。『山鳥は、友を戀ひて鳴くに、鏡を見すれば慰むらん、いと哀なり。谷隔てたる程など、いと心苦し」奥義抄「この鏡の事、或物には、昔、隣の國より山鳥を贈りて、鳴く聲妙(ク)なる由を申しけれど、すべて鳴かざりけるを、或女御、友を離れて、鳴かぬならん、鏡を懸けて見せたまへと申しければ、籠に鏡を懸けたりけるに、影を見て鳴きけり」

山鳥の心地【句】意中の人と離れて、獨寢にて過す感じ。源氏「宮は、……、おほとのごもりけり。……。男君は、……、よろづに思ひ明したまふ。山鳥の心ちぞしたまひける。辛うじてあけがたになりぬ」同「うちもまどまず、……、山鳥の心ちして明しかねたまふ」

山鳥のはつ尾の鏡【句】次條に同じ。

山鳥の尾の鏡【句】次條に同じ。續古今「筑波嶺の山鳥の尾のます鏡かけて出でたる秋の夜の月」

山鳥の尾ろの鏡【句】『ろは接尾語。萬葉集卷の十四の歌「山鳥の尾ろの極尾(ハツ)に鏡懸け唱ふべみこそ汝(ナ)に寄(ヨ)そりけめ」に本づきていふ』山鳥一は、鏡に向ひて鳴くといふ傳說あるによりて、その尾に懸くる鏡なりといふ。一說には、山鳥は、雌雄別居し、峰を隔てて寢ね、曉に雄鳥の尾に光ありて、これに雌鳥の姿の映るを見て鳴くことなりと。續拾遺「山鳥の尾ろの鏡にあらねども寢き影見ては音ぞなかれける」

やまどり-あかげ 山鳥赤毛・赤驊【名】べにぐりげ(紅栗毛)に同じ。和名「赤驊、山鳥赤毛馬也」

やまどり-あしげ 山鳥葦毛【名】馬の毛色の一。葦毛に赤毛のまじりてあるもの。

やまと-りう 大和流【名】一射術の流儀の一。我國上代より傳存したりといひ、後世、畠山滿家、これを究めて、太田持資に傳へ、武田流・日置(ヒ)流などの源流となれりといふ。「日本流」二へきりう(日置流)に同じ。

やま-とりかぶと 山鳥兜【名】〔植〕とりかぶと(鳥兜)に同じ。

やまとり-ぐさ 淫羊藿【名】〔植〕いかりさう(淫羊藿)に同じ。和名「淫羊藿、宇无岐奈。一云夜末止利久佐」

やまどり-ぐさ 山鳥草【名】〔植〕かりがねさう(雁金草)に同じ。

やまどり-さう 山鳥草【名】〔植〕前條に同じ。

やまどり-の 山鳥の【枕】一山鳥二は、その尾長く著しきより、をにかけていふ。續後撰「山鳥のをの上(ヘ)の里の秋風に長き夜寒の衣擣つなり」二山鳥三は、雌雄、峰を隔てて寢ぬといふより、ひとりぬ(一人寢)にかけていふ。六帖「秋風の吹き寄るごとに山鳥の一人し寢(メ)れば物ぞ悲しき」

やまどり-ば 山鳥羽【名】山鳥の羽を、矢羽として用ふるもの。

やまどり-ばな 山鳥花【名】〔植〕ひよどりばな(鵯花)に同じ。

やま-とろろ 山黄蜀葵【名】〔植〕うはばみさう(蟒蛇草)に同じ。

やまと-わざ 大和業【名】我國に行ふわざ。町人袋底摂「文字……唐めけるは、大かた異樣(ヤウ)に見えて、大和わざには用ひがたし」

やまと-ゑ 大和繪・和繪【名】一我國風の繪を、支那風の繪に區別していふ語。畫材を我國の風景・人物に取りて、肇致も溫和に描きたる繪。即ち土佐派の繪など。一說に、彩色したる繪なりといふ。「倭畫」禁秘抄「臺盤所、東北障子、到二鬼間一和繪也」住吉「紙屏風に大和繪書きたる、一よろひ立てて」二うきよゑ(浮世繪)に同じ。

やまとゑ-し 大和繪師【名】大和繪を書く繪師。

やまとをぐな-の-みこと 日本童命・倭男具那命【名】〔人〕やまとたけるのみこと(日本武尊)を見よ。

やま-な【名】〔植〕まわう(麻黄)に同じ。延喜式「麻黄。加都禰久佐。也末奈」

やまな 山名【名】〔地〕一遠江國の舊郡の一。明治二十九年、磐田(ヤハタ)郡に併す。二〔地〕上野國多野(タノ)郡八幡(ヤハタ)村の大字。上信電氣鐵道の停車場あり。高崎驛より三哩八。上野三碑の一なる山上(ヤマウヘ)の碑あり。三姓氏の一。新田氏より出づ。新田義重の子義範、上野國山名に居り、地名を取りて姓とし、子孫、足利時代に榮えたり。

やま-なか 山中【名】山のなか。さんちゆう。古今「遠近(ヲチカタ)のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」

やまなか 山中【名】〔地〕一やまなかをんせん(山中溫泉)を見よ。芭蕉「山中や菊は手折らぬ湯のにほひ」二美濃國不破郡關ケ原村の大字。中仙道、これを經由す。正徹、慰草「春ながら伊吹おろしは夜寒にて眞柴折り焚く美濃の山中」三長門國厚狹(ア)郡二俣瀬(ヲマセ)村の大字。山陽道の一驛。宗祇、筑紫道の記「山中といへる所に、聊かなる社ありて」四二村山の中といふ義なりといふ。三河國額田(ヌカ)郡にある村。山を二村山といふ。蜻蛉、覽富士記「旅衣たづきなしとも思ほえず民も賑ふ山中の里」

山中湯治の文【句】本願寺の蓮如上人が、加賀國沼江(エヌ)郡山中村なる東本願寺派の燈明寺の開祖稱念の問に答へて、宗名の義を釋明せし消息。

やまなか-こ 山中湖【名】〔地〕甲斐國南都留(ツルナ)郡中野村に屬する湖。籠坂(ヤカ)峠の下。東西一里二十八町、南北十二町、周圍三里十二町。その水、西北に決潰して、桂川の源を爲す。臥牛湖。富士八湖の一。

やまなか-ごえ 山中越【名】〔地〕山城・近江二國の境にある山路。細徑を北に入れば、比叡山の無動寺に出づ。狂言「花戰」「志賀の山櫻の館(タチ)にて、……。楊貴妃・兒櫻を、裏道より山中越に落し申して候」

やまなか-ぬり 山中塗【名】加賀國江沼(エヌ)郡山中村より產する漆器。元祿中、始めて粗品を製造し、漸次改良を加へて、今日にては、海外へも輸出し、蒔繪の製品をも出し、文房蒔繪の名あり。

やまなか-をんせん 山中溫泉【名】〔地〕加賀國江沼(エヌ)郡山中村にある溫泉場。四面山に圍まれ、東に大聖寺(ダイシヤウ)川流れ、地勢高燥、海拔二百五十尺にして、泉質は鹽類泉。

やま-なし 山梨【名】一〔植〕たうり(棠梨)に同じ。〔樗子〕和名「樗子。陸詞切韵云、

槇、夜末奈之。山梨也」六帖「世の中をうしといひてもいづくにか身をば隱さん山梨の花」 ㊁『前項の六帖の歌に本づきていふ』世を厭ひながら、行くべ處無きことの譬。〔古語〕 落窪いかで堪へたまへるとのたまへば、女、山梨にてこそはといらふ」 ㊂〔植〕いぬなし(犬梨)㊀に同じ。 ㊃〔植〕すみ(栖)に同じ。

やまなし 山梨 【名】〔地〕㊀甲斐國を管轄する縣。縣廳を甲府に置く。 ㊁甲斐國の舊郡の一。國の中央、ほぼ笛吹川の上流の地なりしが、後世、郡境紛亂して、一部は東八代(ツヒガシヤ)郡に入り、他は、明治十一年、東山梨・西山梨の二郡に分る。

やまなし-ひめ 山なし姫 【名】〔動〕やまたちひめ(山立姫)の訛なるべしといふ。 蔬原隨筆「あくまたち我が立つ路に横たへば山なし姫にありと傳へん」

やま-なす 山茄・山茄子 【名】〔植〕㊀次條に同じ。 ㊁東京の山手(ヤマテ)邊より出づる茄子。品質上等、殊に駒込(コマゴメ)邊より出づるを本山(ホンヤマ)と稱し、最もすぐれたり。

やま-なすび 山茄・山茄子 【名】〔植〕㊀ほたんばうふう(牡丹防風)に同じ。〔防葵〕和名「防葵、夜末奈須比。葉似レ葵、味似二防風一故名二防葵一也」 ㊁たうせんあさがほ(朝鮮朝顔)に同じ。 ㊂なつばぜ(夏櫨)に同じ。 ㊃はしりごころ(走野老)に同じ。

やまなは-そうぜん 山名宗全 【名】〔人〕やまなもちさよ(山名持豐)に同じ。

やま-なつめ 山棗 【名】〔植〕さねぶとなつめ(核太棗)に同じ。

やま-なまこ 山海鼠 【名】〔動〕なめくぢり(蛞蝓)を云ふ。〔越後國の方言〕

やま-なみ 山竝・山並 【名】山のならびそばけること、又その狀態、又その山。連山。連嶺。山脈。萬葉「ふたぎ山やまなみ見れば百世にもかはるべからぬ大宮どころ」

やまなもちさよ 山名持豐 【名】〔人〕武將。時淵の長子。父の封を襲ぎて、伯耆・因幡・但馬の守護となり、右衛門督となる。家富み、兵力、山陰・山陽に振ふ。薙髮して、宗全と號す。女壻細川勝元と隙を生じ、將軍繼嗣の事起るに際して、互に黨與を集む。勝元は、義政の弟義視を推し、宗全は義政の子義尙(ヨシヒサ)を擁して、謂はゆる應仁の大亂を惹起し、文明五年、陣中に卒す。年七十。世に赤入道といふ。

やま-ならし 山ならし 【名】〔植〕楊柳(ヤナギ)科に屬する落葉喬木。高さ數丈。葉は菱狀廣楕圓形を呈し、粗鋸齒を具へ、側扁にて、葉柄の長さ一二寸に達するため、風に動き易し。山地に自生し、材は昔、扇子箱製造の料としたり。はこき。はこやなぎ。はこや。さるばやなぎ。よめふり。をかやなぎ。

やま-なり 山鳴 【名】山の鳴動すること。

やま-にがき 山苦木 【名】〔植〕㊀にがき(苦木)㊀に同じ。 ㊁みやまさざべら(深山海桐)に同じ。

やま-にがな 山苦菜 【名】〔植〕あきののげし(秋野芥子)に同じ。 ㊁むらさきにがな(紫苦菜)に同じ。

やま-にしきぎ 山錦木・山衞矛 【名】〔植〕まゆみ(檀)に同じ。

やま-には 山庭 【名】山中の景を摸して「造りたる庭園。

やま-にんじん 山人參 【名】〔植〕㊀繖形科に屬する多年生の草。高さ三四尺、羽狀複葉にて、各小葉は不規則なる缺刻と鋸齒とを具へ、質硬く、葉柄の基脚は莖を抱く。細長き苞葉を具へたる五瓣の白花、複繖形花序をなして開く。日あたりよき山地に自生す。かはらばうふう。しらかはばうふう。たかぜり。やまばうふう。〔石防風〕 ㊁おらんだみつば(和蘭三葉)に同じ。 ㊂しやく(杓)㊀に同じ。 ㊃こちばにんじん(椽葉人參)に同じ。 ㊄てんなんしやう(天南星)に同じ。 ㊅まつむしさう(松蟲草)㊀に同じ。

やま-にら 山韮 【名】〔植〕にら(韮)を見よ。

やま-にれ 山楡 【名】〔植〕あきにれ(秋楡)に同じ。

やま-ぬ 山野 【名】やまの(山野)に同じ。〔古語〕萬葉「赤駒をやまぬに放(カ)し取りかにて多摩の横山徒歩(シカ)ゆか遣らむ」

親詞「山野の物を甘菜(カンサイ)・辛菜(ヒカラ)」

やま-ぬかぼ 山糠穗 【名】〔動〕ぬかぼ(糠穗)に同じ。

やま-ぬけ 山抜 【名】やまつなみ(山津波)に「同じ。

やま-ぬし 山主 【名】山の所有者。やまもち。 六帖「山ぬしはけだしありとも吾妹子(モコ)が結ひてん標(シ)を人解かんやは」

やま-ぬすびと 山盜人 【名】さんぞく(山賊)に同じ。下學集「山賊、日本世話、山盜人(ヤマヌスビト)云也」

やま-ね 【名】〔動〕齧齒類に屬する哺乳動物。體長三寸餘、淡褐色にして、背の中央に黑斑一條あり、尾長し。富士山・日光山などに樓み、枯木の洞穴に巢を營む。

やま-ね-ぐさ 山根草 【名】〔植〕わらび(蕨)㊀に同じ。 藏玉集「山根草。蕨。山根草折りて山路の歸るさに家づと多きかざしなるらん」

やま-ねこ 山猫 【名】㊀山野に棲む猫。野生の猫。 ㊁次條の略。 ㊂『化けて出づる義にていふとぞ』江戸時代の、一種の賣女。

やまねこ-まはし 山猫舞 【名】江戸時代の、一種の技藝。人形を、小袖櫃に似たる箱に入れて背負ひ、腰鼓を鳴らして、市中を歩きまはり、希望者のために、淨瑠璃節に合はせて、人形を踊らせ、最後に、鼬鼠(イタチ)の形に似たる、山猫と呼ぶ物を出し、「ち、ち、くわい、くわい」と喚きて終りとせしもの。やまねこ。

やま-ねこやなぎ 山猫柳 【名】〔植〕㊀楊柳(ヤナギ)科に屬する落葉喬木。高さ四五丈、葉は楕圓形を呈して、先端尖り、邊緣、鋸齒又は小波狀をなし、裏面に毛あり。柳のに似たる單性の花、葉に先だちて開く。濕氣に富める山地に自生す。 ㊁おほさるこやなぎ(山柳)に同じ。

やま-ねんぐ 山年貢 【名】江戸時代に、百姓一箇人の所有又は村中の入會(イリアヒ)なる山より、木柴の採收に對して納めし年貢。小物成(コモノナリ)の一。やまやく(山役)參照。

やま-の 山野 【名】山と野と。山又は野。やまぬ。さんや。 貫之集「花の色を久しきものと思はねば我は山野を假にこそ見め」

やま-の-いも 山芋・薯蕷・署預・野山藥 【名】〔植〕薯蕷科に屬する多年生の草。根莖は、長さ數尺に達す。地上莖は細長く、他物に纏絡して上昇し、初は紫色、後、綠變す。葉は長心臟形にして、先端尖り、葉柄長し。夏日、葉腋に、小形なる淡黃色の單性花、穗狀をなして開き、蒴果を結ぶ。又、葉腋に、零餘子(ムカゴ)を生ず。根莖は澱粉質に富み、食用に供し、零餘子も亦食すべし。じねんじやう。 和名「薯蕷、一名、山芋、夜萬乃伊毛」

山芋が鰻になる 【句】次條に同じ。 藤葉毛「はや十とせばかりの星霜をふりけれども、薯蕷、鰻にならず。相眷らぬ貧乏」

山の芋から鰻になる 【句】㊀鰻は、山の芋の、水に入りて變化せるものなりとの俗說。雀、海水に入りて、蛤となるといふ類。 ㊁立身・出世する形容。連木(レンギ)が烏になる。〔諺語〕心中實虎申「且那の御出世、追っつけ山の芋から鰻にお成りなされうと」

山芋で足を突く 【句】「芋幹(イモガラ)で足を突く」に同じ。〔諺語〕

山芋の山水 【句】粗拙なる文人畫の山水の形容。

山芋を蒲燒にす 【句】『「山芋が鰻になる」を見よ』順序を經ず、急に効果を得んとする譬。

やまのいも-うどん 山芋饂飩・薯蕷饂飩 【名】山芋の皮を去りて、おろしたるものに、糯(モチ)と粳(ウル)とを細かにはたきたるを加へ、捏ねあはせて、切麥を打つと同樣に打ちたる食品。

やまのいも-くわ 薯蕷科 【名】〔植〕顯花植物・被子類・單子葉門に屬する一科。多年生の草本又は小灌木にして、纏繞莖を有す。ながいも。やまのいも。かしゆういも等、これに屬す。

やまのうち 山内 【名】〔地〕相摸國鎌倉郡の舊庄名。今、小坂(カコサ)村の大字に、その

名を留む、鎌倉町の北境に接し、圓覺寺・建長寺・明月院・東慶寺・淨智寺・長壽寺等あり。

やまのうち-うへすぎ 山内上杉【名】上杉憲顯、相摸國鎌倉郡山内に居邸を構へ、子孫長く同地に住せしもの。初、犬懸(カケ)上杉と並びて、代代管領職となり、兩管領の稱ありしが、犬懸家亡びてより、勢力、同族を壓し、後、扇谷(オウギガヤツ)上杉、一時勢ありて、また並立したれども、北條氏、相摸に勢を有するに至りて、衰へ、上野國平井に移り、憲政に至りて、遂に越後國に奔り、家名を、越後上杉家の執事長尾景虎に讓る。その官職によりて、又、山内管領の名あり。

やまのうち-かつとよ 山内一豐【名】〔人〕武將。初名は猪右衛門。尾張國の人。舊高知の藩祖。織田信長に仕へ、安土(アヅチ)城下に居る。後、豐臣秀吉に、更に德川家康に從ひ、從四位下・土佐守二十四萬石を以て、慶長十九年卒す。年六十。

やまのうち-くわんりやう 山内管領【名】

やまのうち-とよのぶ 山内豐信【名】〔人〕舊高知の藩主。容堂と號す。皇室の式微を嘆じ、政權を一途にせんの志あり。明治中興の業、一にその首唱に基せりといふ。功を以て、從二位・中納言に任ぜらる。明治五年薨ず。年四十六。

やまのうち-ようだう 山内容堂【名】〔人〕

やまのうちとよのぶ (山内豐信)に同じ。

やまのうへ-の-ひ 山上碑【名】「上野(ヅケノ)の三碑」を見よ。

やま-の-かみ 山の神【名】**やま**(山)の條を見よ。

やまのかみ-の-しやくぢやう 山神錫杖【名】〔植〕**きつねのしやくぢやう**(狐錫杖)を云ふ。〔攝津國の方言〕

やまのじ-せん 山字錢【名】寛永眞鑑錢の一。背孔の上部に「山」の字あるもの。

やま-の-だん 山段【名】〔文〕淨瑠璃「妹背山婦女(ヲンナ)庭訓」の三段目の末、妹山の主たる太宰の後室貞香(カヲリ)の女雛鳥と、背山の主たる大判事清澄の子久我之助と相愛し、二人共に、蘇我入鹿の命により、その親に殺さるる悲劇の場面。

やま-の-て 山手【名】**一やまて**(山手)**二**に同じ。**二**〔地〕東京市十五區の內、四谷(ヨツヤ)・牛込・小石川・麻布などの地域。(下町(シタマチ)に對して)

山手の七福神【句】東京市西南隅の山の手及びその接續郡部なる諸寺に散在せる七福神、卽ち目黑不動內の大黑天・蛭子、目黑蟠龍寺の辨天、二本榎の毘沙門天、白金瑞聖寺の布袋、白金妙圓寺の壽老人・福祿壽。新年に、これらの諸寺を巡拜して、七福神詣を爲す者尠からず。

山手の奴【句】**やまのてやっこ**(山手奴)に同じ。東海道名所記「山の手の奴ども」

やまのて-じき 山手式【名】東京市の山の手は、住居者に勤人多く、從ひて生活の樣式、下町風と異なること。

やまのて-やっこ 山手奴【名】『赤阪の地は、江戸の山の手に在るよりいふ』**あかさかやっこ**(赤阪奴)に同じ。換骨奪胎本地「小奴に山の手奴」「を見よ。

やま-の-は 山の端【句】**やま**(山)の條下

やまのべ 山邊【名】〔地〕大和國山邊(ヤマベ)郡の一部。今の二階堂村大字井戸堂の邊といふ。後撰集「泊瀨(ハツ)へ詣づとて、山邊といふわたりにて」

やまのへ-の-おくら 山上億良【名】〔人〕歌人。大寶元年、遣唐少祿となりて、かの地に赴き、慶雲元年七月歸朝し、從五位下に進み、靈龜二年伯耆守となり、後、詔によりて、東宮に侍す。和歌を巧にし、その詠多く萬葉集に入れり。天平五年歿す。年七十四。著す所、歌林類聚あり。

やまのべ-の-みち-の-へ-の-みささぎ 山邊道上陵【名】景行天皇の御陵。大和國磯城(シキ)郡柳本(モトナギ)にあり。

やまのべ-の-みち-の-まがり-の-をか-の-へ-の-みささぎ 山邊道勾岡上陵【名】崇神天皇の御陵。後世、その位置を失ひ、今、大和國磯城(シキ)郡柳本(モトナギ)に擬定せらる。

やま-の-みち 山道【名】〔地〕**さうさんだう**(東山道)の古稱。**二ほくろくだう**(北陸道)の古稱。

やまのりもの 山乘物【名】**やまかご**(山駕籠)に同じ。

やま-の-ね 山の井【名】**やま**(山)の條下「を見よ。

やま-の-ね 山井【名】〔書〕俳諧の用に供するために、四季・公事(クジ)・神祭・佛法・草・木・禽獸・食類・衣服等の詞を書き集めて說明せるもの。五卷。北村季吟の著。後、高井蘭山、訂正を加へたり。

やま-の-をんな 山嫗【名】〔植〕『通草は、支那にては、山女ともいふを、直譯せるもの』**あけび**(通草)に同じ。散木「山の女を見て、今日見れば山の女ぞあけびなる野の翁をぞやらんと思ふに」

やま-ばうこ 山母子【名】〔植〕**やまはこ**(山母子)に同じ。

やま-ばうし 山帽子・四照花【名】〔植〕山茱萸(ユスラウメ)科に屬する落葉喬木。高さ二丈、葉は對生し、楕圓形にして、先端尖る。花は多數集まりて、球形の花序を形成し、花序ごとに、四片より成る白色又は帶紅色の總苞を具へ、肉質・紅色の多花果を結ぶ。山地に自生し、又、栽培して、總苞の美を觀賞し、木材は器具の料に供し、果實は食用とす。いつき。とりのあし。

やまばうふう 山防風・石防風【名】〔植〕

やまにんじん(山人參)**二**に同じ。

やまはかり 山量【名】山盛にして量ること。

やまはぎ 山萩【名】〔植〕**はぎ**(萩)**二**に同じ。

やまはくか 山薄荷【名】〔植〕**一**脣形科に屬する多年生の草。莖は方形にして、高さ二三尺に餘り、葉は對生し、卵形にして、基部細く、鋸齒あり。青紫色の脣形花、圓錐花序をなして開く。山野に自生す。ひきおこし。ままをがら。(引起)**二ひきおこし**に同じ。

やまはこべ 山繁縷・山蘩蔞【名】〔植〕**うしはこべ**(牛繁縷)に同じ。

やまはぎま 山狹間【名】山のはざま。山峽。新古今「山はざまきびしく壘む岩かどに年經て切れぬ瀧の絲かな」「畑。

やまばた 山畑・山畠【名】山地にある

やまはたざを 山旗竿【名】〔植〕十字花科に屬する草。高さ一二尺に餘り、葉は莖の下部のは長倒卵形をなし、上部のは長卵形にして、基脚箭形をなし、莖葉共に粗毛を帶ぶ。白色・四瓣の花、總狀花序をなして開き、果實は長角を成す。山野に自生す。のはたざを。「に同じ。

やま-ばち 山蜂【名】〔動〕**くまばち**(熊蜂)

やま-ばと 山鳩【名】〔動〕**一きじばと**(雉鳩)に同じ。和名「鳩、夜萬八止」**二あをばと**(青鳩)に同じ。

やまばと-いろ 山鳩色【名】濃き黃色なる染色、卽ち鞠塵(サクヂン)の御袍などの色。平家「山鳩色の御衣に、鬘(ビンヅラ)結はせて」孕常磐「山鳩色に薄紅(ウスベニ)まぜて」

やまばな 山端【名】〔地〕京都市の北部、愛宕(オタギ)郡修學院(シウガヰヰン)村の字。若狹街道の一驛。八瀨(セ)・大原の出入口に當る。山水清雅、清楚なる酒亭ありて、避暑に宜し。三條大橋より一里二十町。

やまはな-さう 山花草【名】〔植〕虎耳草(ユキノシタ)科に屬する多年生の草。高さ一尺餘、葉は地下莖より叢生し、卵形又は楕圓形を呈して、鋸齒あり。葉間より花莖抽き出で、帶白色の小花を開く。北海道に自生す。

やまはこ 山母子【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ一二尺、葉は互生し、葉柄を缺き、全緣の披針形にして、厚く、表面には光澤あり、裏面には、帶白色の軟毛あり。白色の筒狀花の頭狀花序をなしたるもの、更に多く集まりて、繖房花序を成す。山地に自生す。やまばうこ。

やまばん 山番【名】**一**山の番人。やまもり。**二**こじき。ものもらひ。〔肥前國長崎の方言〕

やまはんのき 山榛木【名】〔植〕**一**樺木(カンバノキ)科に屬する落葉喬木。高さ五六尺、葉は互生し、葉柄長く、卵形又は楕圓形を

呈して、缺刻又は鋸齒を具ふ。單性の小花、穗狀花序をなして、雌雄同株に開き、雄花の花序は長く、雌花のは、松毬に近き形を成す。山地に自生し、本材は器具・薪炭となり、樹皮と果實とは、染料に供す。やしやぶし。**㊁やしやぶし**㊁に同じ。

やまはやし 山林【名】山と林と。山又は林。さんりん。 空蟬山はやしにもまじりて、公(ヤガ)にも仕へじ」 源氏「物おぼえぬ心に任せつつ、山はやしに行きまじり」

やまはりのき 山榛木【名】〔植〕**やまはんのき**(山榛木)に同じ。

やまひ 病【名】**㊀**やむこと。わづらひ。病氣。疾病。病痾。〔疾〕**㊁**思ひ煩ふこと。氣苦勞。心がかり。心勞。 五十年忌歌念佛「且那の病になされた……爲換手形濟みました」 卯月の潤色「貧の病に、肩身もすぼり」 **㊂**『**はちびやう**(八病)を見よ』きず。缺點。短所。 源氏「和歌の髓腦、いと所狹(セ)う、やまひ、去るべき所多かりしかば」

病革まる【句】『禮記の檀弓篇に「曾元曰、夫子之病革矣、不ㇾ可ニ以變一」とあり。革は、この場合、音**きよく**にて、亟に通じ、すみやかの意なるを、古來、**かく**の音なる場合に誤りて訓じ來れり』病氣危篤に陷る。

病、膏肓に在り【句】『左傳の成公十年の條に「醫至曰、病不ㇾ可ㇾ爲也、在ニ肓之上膏之下一」とあるに本づく。肓は、心臟の下、肓は、横隔膜の上にて、古の醫術にては、針藥も施すに由なき至虛の地とし、治癒至難の局部と考へたり』**㊀**不治の病に罹る。**㊁**弊根深くして、改善・救濟の道なし。

病、膏肓に入る【句】前條に同じ。

病無くして、自ら灸す【句】『莊子の盜跖篇に「丘所ㇾ謂無ㇾ病而自灸也」とあり』無益なる苦勞をする譬。〔諺語〕

病直りて、醫師忘る【句】「暑さ忘れて、蔭忘る」に同じ。〔諺語〕

病に沈む【句】病氣、容易に回復せず。長らくの重病に惱む。 空蟬「病に沈みて、いたく苦しからん者」

病に主無し【句】病は誰彼の差別なく犯す。〔諺語〕 「同じ。〔諺語〕

病の容物は體【句】「人は病の器」に病の器【句】「人は病の器」を見よ。

病の霧【句】病のために、心のはれやかならぬを、霧の立ち籠むるに譬へていふ語。 拾玉「思ひやる心ぞはれぬ足引の病の霧の秋の夕ぐれ」

病の床【句】**びやうしやう**(病床)に同じ。

病の席【句】**びやうせき**(病席)に同じ。 愚管抄「御病のむしろに、昭宣公參りたまひて」

病は氣から【句】病氣は心の持ちやうにより、惡しくもなり、快くもなる。萬(ヨロ)の病も心から。〔諺語〕

病は氣から起る【句】『素問に「百病生ㇾ氣」とあり』病は、心の持方次第にて、罹りもし、癒えもす。〔諺語〕

病は口より入り、禍は口より出づ【句】『傅休奕の口銘に「病從ㇾ口入、禍從ㇾ口出」とあるに本づく』病は、飲食を節せざるより生じ、禍は、言語を慎まざるより生ず。〔諺語〕

病は小しく愈ゆるに加はる【句】『韓詩外傳に「官怠ニ於宦成一、病加ニ於小愈一」とあるに本づく』病は、少しく癒えたる時が大切にして、油斷すれば、反りて前よりも重くなる。〔諺語〕

病は身の惚【句】病は、人を惚けしむ。〔諺語〕

病を知れば、癒ゆるに近し【句】己の缺點を知る程の者は、缺點なきと殆ど同じ。〔諺語〕

病を作る【句】作病を爲す。病氣と詐る。一代女「御泰公もなりがたく、季中(カナナ)に病作りて、御暇請ひて」

病を護りて、醫を忌む【句】『周子通書に「今人有ㇾ過不ㇾ喜ニ人規一、如ニ護ㇾ疾而忌ㇾ醫」とあり』**㊀**病氣を大切にして、醫者の診察を避く。**㊁**自己に過失あるに關らず、他人の忠告を聽き入れず。〔諺語〕

この人にして、この疾あり【句】『論語の雍也篇に「伯牛有ㇾ疾。子問ㇾ之。自ㇾ牖執ニ其手一、曰、亡ㇾ之。命矣夫。斯人也而有ニ斯疾一。斯人也有ニ斯疾一也」とあり』德行ある人の不幸にして、惡疾に罹りたるを痛みていふ語。

七年の病に、三年の艾を求むるが如し【句】『孟子の離婁上篇に「今之欲ㇾ王者、猶ニ七年之病求ニ三年之艾一也。苟爲ㇾ不ㇾ蓄、終身不ㇾ得。苟不ㇾ志ニ於仁一、終身憂辱、以陷ニ於死亡一」とあるに本づく』平素より蓄へず、一旦危きに及びて、俄かに求むとも得べからざる譬。

「盜人を見て、繩を綯ふ」の類。〔諺語〕

持ったが病【句】生來の惡癖は、容易に拔け去らず。〔諺語〕

やまび 山邊【名】**やまべ**(山邊)に同じ。 萬葉「霞ゐる富士の山びにわが來なばいづち向きてか妹が嘆かむ」 「同じ。

やまびあし 病足【名】**やみあし**(病足)に

やまびおくり 病送【名】疫病神(ヤクビヤウガミ)「に同じ。

などを驅除すること。

やまびかぶり 病冠【名】**やまひだれ**(病垂)

やまびき 山挽【名】伐採せる木材を、山にて挽き割ること、又その材。

やまびきもの 山挽物【名】**はがらもの**(端柄物)に同じ。

やまびくび 病首【名】昔の戰にて、病人の首を斬り來りて、戰ひて獲たるもののごとく裝ふこと、又その首。

やまひけ 病氣【名】病に罹りたるらしきけはひ。 俳諧新選「千梅「やまひけの無い匂なり菊の花」

やまびこ 山彦【名】**㊀**山に居るといふ神又は怪物。やまのかみ。やまこ。 曾丹集「神無月しぐるるたびの山彦に紅葉を風の手向け來るかな」 **㊁**『古代の人は、前項の山彦が、聲を眞似て發するものと考へたるよりいふ』反響㊀の、山中にて發するもの。こだま。 萬葉「筑波嶺にわが行けりせば時鳥山彦とよめ鳴かましやそれ」

やまびこざうし 山彦草子【名】〔書〕難

解の古語を拾綴して考證解釋せるもの。三卷。橘守部の著。一名、難語考。

やまひごたい 山平江帶【名】〔植〕**きくあざみ**(菊薊)に同じ。

やまひこな 龍膽【名】〔植〕**りんだう**(龍膽)に同じ。 字鏡「龍膽、太豆乃伊久左。又云、山比古奈也」

やまひこやま 山彦山【名】〔地〕相摸國足柄下(アシガラシモ)郡曾我村の東にある山。東に踰ゆれば、大磯に達す。 曾我「曾我と中村の境なる山彦山の峠まで送り來て」

やまひじやうず 病上手【名】灸條を見よ。

病上手に死下手【句】病に罹ること多き者は、却って容易には死なず。〔諺語〕

やまひだかし 病高し【形一】病を、大袈裟に考へてあり。 保寧女集「見る人は、さもこそ病だかし。そら目常によび人なん、これを好む」

やまひだふれ 病倒【名】病に罹りて倒れ死ぬること、又その人。

やまひだれ 病垂【名】漢字の冠の一。「病」・「癒」・「痛」・「痒」などの上左にあるヤの字。やまひかぶり。

やまひづかす 病附かす【動四他】惡口を言ふ。ののしる。 傾城阿波の鳴門「我(ワリ)や、出處(ヂヤ)へは出られぬ身ぢやあらうがなと、病づかすは、疫病の神と名の附く奇特なり」 膝栗毛「何ぢやい、己(オレ)、病づかしくさるな。聲上げさせてこませやい」

やまひづく 病附く【動四自】**やみつく**(病附く)㊀に同じ。 源氏「故權大納言の君の、世と共に物を思ひつつ病づき、はかなくなりたまひにし有樣を」 平家「病づきて失せたまひけるにこそ」

やまひづよし 病强し【形一】病氣に對する抵抗力强し。幾度も病に罹りながら、常に快復す。(病弱しに對して)

やまひづら 病面【名】**びやうにん**(病人)に同じ。 新版歌祭文「久松樣には、振袖の美しい持病が有って、招いたり、呼び出したりにくてらしい、あの病づらが這入らぬやうに、敷居の上、大きうしてすゑておきたい」

やまびと 山人【名】一山に住み、又は山にて働く人。山ずみの人。山かせぎの人。萬葉「足引の山に行きけむ山人の心も知らず山人やたれ」 古今「薪(ヤマビト)負へる山人の、花の陰に休めるが如し」 二仙人。神仙。 神樂「杖「逢坂を今朝越え來れば山人の千とせつけとてくれし杖なり」」 三ろまつ(盧橘)三に同じ。

仙人の洞【句】せんどう(仙洞)の直譯。 增鏡「遠きさかひに臨める心ちするに、めぐれる山の瀧つ岩根、遙かに霞みて見渡さるるほど、仙人の洞も斯くやとぞおぼゆる」

やまひ-なし 病無【名】身に病の無きこと。むびやう。 百合若大臣野守鏡「小判の額を見るまでは、……病なしの病金(ヤミヤウ)と、皆貧、宿へぞ歸りける」

やまびは 山枇杷【名】〔植〕一泡吹(アワヤ)科に屬する小喬木。莖・葉の嫩き時期のもの及び花蕚には、褐色の短毛密生し、葉は革質にして、長楕圓形を呈し、上下兩端尖り、緣邊には、中部以上に刺狀の鋸齒あり。黃褐色の花、圓錐花序をなして開く。山地に自生す。いはしらす。 二いぬびは(犬枇杷)に同じ。

やまひ-ばなし 病話・病咄【名】病に關係ある話。 三代男「有馬の湯……病咄より外なく」

やまひ-びと 病人【名】びやうにん(病人)に同じ。 落葉「世の笑はれぐさなれば、病人になりぬべく嘆く」

やまひひらぎ 山柊・山枸骨・山紅谷樹【名】〔植〕一かきのはぐさ(柿葉草)に同じ。 〔巴〕戟天、和名抄巴戟天、夜末比比良岐」 二こがねばな(黃金花)に同じ。

やまひ-め 病目・病眼【名】やみめ(病目)に病目に炎目【句】「泣面(ツラ)に蜂」に同じ。〔諺語〕

やまびめ 山姫【名】一山を支配するといふ女の神。 古今「裁ち縫はぬ衣(ミノ)著し人もなきものをなに山姫の布晒すらん」 源氏「同じ枝(エ)を分きて染めける山姫に何れか深き色と問はでや」 二〔植〕あけび(通草)に同じ。 行宗集「いが栗は心弱くぞ落ちにけるこの山姫の笑める顏見て」

やまひ-ひも 山紐【名】〔植〕いはひも(岩紐)に同じ。 「持」に同じ。

やまひ-もち 病持【名】びやうきもち(病氣)に同じ。

やまひもの 病者【名】びやうしや(病者)に同じ。 狂言「總繩」「あのやうな病者を道(コウ)して」 「(一位)」に同じ。

やまひ-びやくだん 山白檀【名】〔植〕いちる

やまひ-よわし 病弱し【形一】病に罹りたる時の抵抗力弱し。(病强しに對して)

やまひ-びらき 山開【名】一山道を開くこと。 二靈山などにて、毎年、氣候暖くなりて、衆人の登山を許しはじむること。 三昔、江戸深川の富岡(ヤナカ)八幡にて、三月二十一日、別當の庭園を衆人に觀覽せしめしこと。 俗曲「山開「八幡樣の山開、酒がこうじて、つい、それなりに」

やまひらぎ 山柊・山枸骨・山紅谷樹・巴戟天【名】〔植〕やまひひらぎ(山柊)一に同じ。 本草和名「巴戟天、也末比良良岐」

やまびる 山蛭・山水蛭【名】〔動〕環蟲類に屬する蠕形(ケイ)動物。蛭の類の一種。形大きく、黑山の濕地に生じ、人畜に吸著して、血液を吸ふ。その吸痕は、瘡腫となりやすし。かさびる。

やまびる 山蒜・山葫【名】〔植〕ぎやうじやにんにく(行者韮)に同じ。

やまふ 病【名】やまひ(病)に同じ。〔古語〕 名義抄「疾、ヤマフス・ウレフ」 水鏡「佛像を燒きし罪によりて、このやまふおこりしなり」

やまふ 病まふ【動四自】やむ(病む)に同じ。〔古語〕 散本「奥山の岫(ヤク)がくれなる畠つ守(リモ)知られぬ戀にやまふ頃かな」

やまふき 山蕗・款冬【名】〔植〕やまふぶを(山蕗)に同じ。

やまぶき 山吹・棣棠・款冬【名】一〔植〕『款冬は蕗(ヤマ)にて、冬季を款(コヨ)びて咲く花の義なれば、この木に充つるは、實は古來の誤なり』薔薇(ライバ)科に屬する落葉灌木。高さ四五尺、莖は青綠色にして叢生し、白色・粗鬆の心髓を有す。葉は互生し、卵狀披針形を呈し、先端尖り、不整なる重鋸齒を有し、春、枝端に五瓣・鮮黃色の花を著け、葉の綠色と相交はりて、美觀を呈す。重瓣なるは結實せず。各所の山地に自生し、又、園養せらる。おもかげぐさ。かがみぐさ。 萬葉「鶯の來鳴く山吹うたかたも君が手觸れず花散らめやも」 後拾遺「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞ悲しき」 二紋所の一。山吹山吹・山吹の枝の丸などの種類あり。 三やまぶきいろ(山吹色)三の略。 源氏「山吹・うす色など花やかなる色あひ」 四やまぶきいろ(山吹色)三の略。 三日太平記「一杯が百兩づつ、さあ食(ケ)へ。……お肴のこの山吹、何と、斯うしようぢやあるまいか」 五やまぶきがさね(山吹襲)の略。 枕「女房、櫻の唐衣(キヌ)ども、くつろかに脫ぎ垂れつつ、藤・山吹など、いろいろに好もしく」 六〔動〕ふな(鮒)の異稱。〔古の宮女の語〕

やまぶき 山吹の匂【句】やまぶきにほひ(山吹匂)に同じ。 榮花「「院のは櫻に山吹、一品の宮のは山吹の匂、一の車は濃く、二の車は薄く匂ひたり」

やまぶき 山吹の鰭【句】魚の脊鰭の中部。

やまぶき 山吹【名】金屬を、鑛山にて吹き分くること、又その吹き分けし鑛物。

やまぶき 山吹・款冬【名】〔人〕木曾義仲の妾。又、父の名は菱(ヒシ)。勇力あり、巴と共に數ば戰功を立て、礪波(ナミ)山の戰に死す。一說には、義仲の最後まで生存し、病のために、都に留まると。 平家「木曾殿は、信濃より、巴・款冬とて、二人の美女を具せられたり。款冬は、いたはりありて、都に留まりぬ」

やまぶき-あふぎ 山吹扇・棣棠扇【名】山吹の花を描ける扇。

やまぶき-あへ 山吹韲・款冬韲【名】芥(カラ)を加へずに蜜(ヘタル)鮒鱠(ヤマブキ)。

やまぶき-いろ 山吹色【名】一山吹の花の色に似たる染色。やまぶき。〔款冬色〕 太平記「款冬色の厚總」 二わらびん(黃金)三の異稱。 吉野忠信「山吹色の重賣に事缺きたまふ御身ではなし」

やまぶき-おり 山吹織【名】絹絲を經(テ)に、瓦斯絲又は木綿絲を緯(ヨコ)に用ひて織り、緯絲にて紋をあらはしたる紋繻子。京都・桐生(ヤナ)等より產し、女の帶地とす。

やまぶき-がさね 山吹襲【名】はなやまぶき(花山吹)に同じ。 源氏「山吹がさね賜はる」

やまぶき-ぎん 山吹銀【名】鑛山にて吹き分けたる銀。山吹にせる銀。

やまぶき-どろも 山吹衣【名】山吹色なる衣。山吹がさねの衣。

やまぶき-さう 山吹草【名】〔植〕一罌粟(ジン)科に屬する多年生の草。高さ一尺餘、葉は羽狀複葉をなし、小葉の數、下部のは七箇、上部のは三箇乃至五箇にて、何れも、楕圓形にして尖り、鋸齒あり。春、長き花梗を具へ、山吹のに似たる四瓣・鮮黃色の花開く。山野に自生す。くさやまぶき。 二せりばやまぶきさう(芹葉山吹草)に同じ。

やまぶき-しようま 山吹升麻【名】〔植〕薔薇(ライバ)科に屬する多年生の草。莖は高さ三四尺、葉は二回又は三回の羽狀複葉をなし、帶黃淺綠色を呈し、缺刻狀の鋸齒を具ふ。五月頃、こまかなる白色の花、圓錐花序をなして、雌雄異株に開く。山地に自生す。あかばね。

やまぶき-なます 山吹鱠【名】鮒を鱠とし、山吹三の花を、掻敗(カイ)の上に盛りたる料理。初夏のものとす。

やまぶき-にほひ 山吹匂【名】襲(ネガサ)の色目の一。上を山吹色にし、以下、順次に色を薄くす。春用ひ、女房の裝束の場合には、下に、青き單(ヒトエ)を著用す。

やまぶき-の 山吹の【枕】山吹の花は、うるはしきものなるより、にほふ(匂ふ)にかけていふ。 萬葉「山吹の匂へる妹(イモ)が唐棣(ハネ)色の赤裳の姿夢に見えつつ」

やまぶき-の-えだ-の-まる 山吹枝丸【名】紋所の一。山吹の、枝に花と葉との著きたるものを、圓く綰ねたる形に描けるもの。

やまぶき-の-せ 山吹瀬【名】〔地〕山城國

宇治川の名所。蜻蛉「秋風の山吹の瀬のとよむなべ天雲翔り雁(カリ)渡るかも」

やまぶきーをどし 山吹縅【名】きいさざし(黄絲縅)に同じ。

やまぶし 山伏・山臥【名】一佛道修行のため、山に宿り臥すこと。世を遁れて、山林に棲むこと、又その人。のぶし。拾遺「山伏も野ぶしもかくて試みつ今はとねりの闇ぞ戀しき」 源松「深き山に世を捨て離れたる山ぶしとは」 二しゅげんじゃ(修驗者)に同じ。 宇治「斧負ひ、法螺貝腰に著け、錫杖突きなどしたる山伏」

山伏の峰入【句】「部屋住(ヘヤ)三年、山伏の峰入を見よ。

山伏も門出【句】「乞食(キツ)にも門出」に同じ。【諺語】

やまぶしーこころ 山伏心・山臥心【名】山伏一の心。ひじりごころ。 源氏「聖(ヒジリ)だつといひながら、こよなかりける山伏心かな」

やまぶしーすがた 山伏姿【名】山伏一のごとき身姿(リナ)。 塵鏡「恨み歎きて、山伏姿にいでたちて」 松の葉「山伏姿に様を變へ、兜巾(シキ)・篠懸(カケ)・錫杖を腰に指いて」

やまぶしーだう 山伏道【名】しゅげんだう(修驗道)に同じ。 謠曲「小き兜巾(キン)、篠懸(カケ)を、とく拵へて賜びたまへ。山伏道の御供せん」

やまぶしーだつ 山伏だつ・山臥だつ【動四自】山伏一のごとくに見ゆ。ひじりだつ。 源氏「斯かる山伏だちて過してん」 蕉松「ひたぶるの山伏だちて侍る身には、この世の思はずなどは、思ひはべるべきにもあらずかし」

やまぶしーづつ 山伏筒・山臥筒【名】山伏一の、酒などを入れて携ふる、青竹の筒。ささえ。

やまぶしーのーねど 山伏井戸【名】昔、江戸日本橋と兩國橋との間の川端に在りし井戸。その傍に、幕臣星合伊織(ワオ)の屋敷、又、その裏に俳人服部嵐雪の庵あり。一株の古柳ありて、庵の目じるしとなり、嵐雪柳と呼ばれたり。

やまぶしーむら 山伏村【名】山伏の家の集まり住める村。續猿蓑「仲秋「寒蘚や山伏村の長堤」 「に同じ。

やまぶた 山豚【名】〔動〕ゐのしし(猪)一。

やまぶだう 山葡萄・紫葛【名】〔植〕葡萄科に屬する蔓生の植物。莖は木質を成し、卷鬚によりて、他物に卷絡す。葉は長き葉柄を有し、圓狀心臟形にして、掌狀に三淺裂乃至五淺裂をなし、鋸齒あり、下面に褐色の毛密生す。黄綠色の小花、圓錐花序に開き、黑紫色の漿果を結ぶ。山地に自生し、果實は食用に適し、又、釀造用に供す。えびかづら。かねぶ。くろぶだう。

やまぶぢ 山藤【名】山に生えてある藤。野生の藤。

やまーぶところ 山懐【名】山間の、懐のごとくぼまりこもりてある處。 源氏「かかる山ふところに引き籠めて」 蕉松「鳥の音だになどやかには聞えぬ山ふところに埋もれて」 「じ。

やまーぶな 山橅【名】〔植〕ぶな(橅)に同

やまーぶふき 山蕗款冬【名】〔植〕つはぶき(蘇吾)に同じ。〔古語〕 和名「款冬。一名、虎鬚、一本、冬作、東。夜末布布岐。一云、夜末布岐」

やまーぶみ 山蹈【名】山路を蹈み分くること、又その人。やまあるき。 源氏「昔も、この道にのみこそは、かかる山ぶみはしたまひしかば」 八笑人「吉野・初瀬も及びなきその山蹈も」

やまーべ 山邊【名】山のほとり。やまび。

やまーべ 山部【名】古、山に關する事に從事せし部民。記「海部(マ)・山部・山守部・伊勢部(ベ)を定めたまふ」

やまーべ 【名】〔動〕山間の渓流に居る鱒の幼魚。色彩も、斑紋も、鱒とは小異あり。やまめ。

やまべ 山邊【名】〔地〕一大和國十郡の一。郡役所を丹波市町に置く。二上總國の舊郡の一。明治二十九年、武射(ムサ)郡と合して、山武(ムサ)郡の新稱を立つ。

(べ ま や)

やまべーのーあかひと 山部赤人【名】〔人〕朝臣。又、萬葉集の中の歌人として、柿本人麿と名聲を等しくし、その道の二聖と稱せらる。聖武天皇の神龜の初、紀伊への行幸に從ひ、天平中、陪從して、吉野の離宮に遊び、勅に應じて獻れる歌、伊豫の温泉、幸荷(ニカ)島・敏馬(ミナ)浦を詠める歌あり。又、東國にも遊びしもののごとし。

やまーへん 山偏【名】漢字の偏の一。「岬」・「岨」・「崎」・「嶋」などの左にある山の字。

やまーぼくち 山火口【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ三四尺。葉は上部のは、楕圓形にして、厚く、鋭鋸齒を有し、下部のは、深き缺刻を有して、殆ど掌狀をなし、何れも、上面は綠色、下面は白色にして、細毛密生す。紅紫色にして、薊のに似たる花、頭狀花序をなして開く。くまとりぼぐち。やまごばう。ほくちあざみ。

やまーぼこ 山鉾【名】京都の祇園會に曳き出す、一種の山車(シ)。臺の上に、山の形などの造物ありて、傍に人形を置きたるを、山といひ、長き鉾・長刀などを立てたるを鉾といふ。山は標山(ヤマウ)に倣へるならんといふ。ほこやま。やまだな。 續齊「七月の祇園會の山鉾の有樣、つひに見た事もなく」

やまーぼたん 山牡丹【名】〔植〕しらねあふひ(白根葵)に同じ。

やまーほとときす 山時鳥・山子規・山郭公【名】山に居るほととぎす。山より來るほととぎす。

やまーほふし 山法師【名】比叡山延暦寺の僧兵。寺法師・奈良法師・吉野法師の類。比叡(ヒエ)法師。平家「賀茂川の水、雙六(スゴロク)の賽、山法師、これぞ我が御心に叶はぬものと、白河院も仰せなりけるとかや」

やまーほほき 山蕗款冬【名】〔植〕やまふき(山蕗)の轉。〔古語〕 字鏡「款東花、山保保支」

やまーほほづき 山酸漿【名】〔植〕いぬほほづき(犬酸漿)に同じ。

やまーま 山間【名】やまあひ(山間)に同じ。 公任集「田上(カミ)や山間のもみぢ葉數しあれば秋は終ふとものどけからまし」

やまーまつ 山松【名】山に生えてある松。野生の松。 風雅「山松は見るみる雲にきえはてて淋しさのみの夕暮の雨」

やまーまつかげ 山松陰【名】山の松の木蔭。 萬葉「今よりは秋づきぬらし足曳の山松蔭にひぐらし鳴きぬ」

やまーまつかぜ 山松風【名】山の松風。山松を吹く風。 風雅「寒き雨は枯野の原にふりしめて山松風の音だにもせず」

やまーまつり 山祭【名】山幸(サチ)の多からん事を祈りて、山の神を祭ること、又その祭。 新六「しし矢とて子らがつどひの山祭今日の狩りくら空しからんや」

やまーまど 山窓【名】山家の窓。さんさう。 定家卿百歌合「山窓を寂しきものと思ひしは花見ぬほどの心なりけり」

やまーまゆ 山眉【名】眉の如き遠山。山の端のほのかなるを眉黛に見たてていふ語。 藻鹽草「山眉」

やまーまゆ 山繭【名】【動】一山繭蝶の幼蟲。概形、蠶に似て、やや短く、且つ肥大にして、關節部は縊れ、鮮綠色にして、短毛疎生す。柿・樫などの葉を食ひて生育し、老熟の後、綠色の繭を結ぶ。繭よりは、黄綠色にして、強靭なる絹絲を採取す。〔天蠶〕 師兼千草「賤(ゾ)の女(メ)が引く山繭のいとをめて亂れそむとも知る人や無き」 二夾條の略。 梅暦「帶は、……黑天鵞絨(ベロビド)に、紅(ト)の山繭の鯨仕立」

やまーまゆーおり 山繭織【名】山繭二より採取せる絹絲を材料として織りたる織物。やままゆつむぎ。やままゆ。

やまーまゆーしま 山繭縞【名】山繭二より採取したる絲を交へて織り、紅色に染むる時、他の絲は染まり、山繭の絲のみ、染まらずして、白きままに殘り、縞をあらはすやうにせる織物。

やまーまゆーちりめん 山繭縮緬【名】普通の絹絲に、山繭二より採取したる絲を交へて織りたる縮緬。

やまーまゆーつむぎ 山繭紬【名】やまーまゆおり(山繭織)に同じ。

やままゆ-のてふ 山繭蝶・山繭蛾【名】〔動〕野蠶(ヤサ)の一種。翅は大形にして廣く、深黃色にして、褐色の横線と、各、一箇の透明なる斑紋とを有し、産卵、甚だ不規則なり。「く高まりたる鉦。

やまま-びやう 山丸鉦【名】頭部の丸

やまみす 山御簾【名】昔、芝居・操(ヤツリ)芝居などにて、山の景色を描きて、背景に用ひし簾。我衣「芝居衣裳は、寶永の頃、結構になれり。金入(イキン)繻子・縮緬・紬子(ツムギ)・天鵞絨(ビロード)・熊皮半天・金めっき鉦打などなり。然れども、道具立は、山御簾として、簾に、山或は野、立波、町家の繪など書きて、その氣色を學びぬ」

やまみち 山道・山路【名】一山中の通路。やまぢ。さんだう。さんろ。二山形(ヤマガタ)を、二つ三つ、横に連ねたる形。

やまみつ 山蜜【名】一蜜蜂の巣の中に、自然に作り貯へたる蜂蜜。

やまみづ 山水【名】一山と水と、又その風景。さんすゐ。源氏「山水に心とまりはべりぬれど」二山より流れ出づる水。源氏「さしぐみに袖ぬらしける山水にすめる心は騒ぎやはする」

やまみづ 山水【名】〔植〕蕁麻(イラク)科に屬する草。高さ約一尺、莖は柔かにして、多くは地に臥して匍匐し、葉は對生し、卵形にして、先端細く、小數の鈍鋸齒を具ふ。葉腋より長花梗を出し、黃綠色の花、簇り咲く。山間の濕地に自生す。

やまみづ-てんぐ 山水天狗【名】「山水」の二字を、草書體に續書(ガツキ)にして、天狗の顔と見ゆるやうなる形に書くこと、又その書きたるもの。

やまみつば 山三葉【名】〔植〕うまのみつば(馬三葉)に同じ。

やまむぐら 山鼴鼠【名】〔動〕ひみずむぐら(日不見鼴鼠)に同じ。

やまむけ 山向【名】神事に用ふる榊などを採取するために、山に入ること。やまけ。延喜式「山向・瀧祭」

やまむけ-ものいみ 山向物忌【名】伊勢神宮御造營の用材を伐採する時の物忌。

やまむら-ざ 山村座【名】昔、江戸京橋木挽(キコリ)町にありし芝居。山村小兵衛といふ者の創始に係る。

やまむらさき 山紫【名】〔植〕一やぶむらさき(藪紫)に同じ。二らつきよう(薤)に同じ。

やまむろ 山榁・山杜松【名】〔植〕ざいふりぼく(采振木)に同じ。

やまむろ-にっき 山室日記【名】〔書〕本居宣長の葬式の次第を詳記せるもの。一卷。植松有信の著。

やまむろ-やま 山室山【名】〔地〕伊勢國飯南(イイナミ)郡花岡村大字山室にある山。頂上に本居宣長の墓あり。明治八年、社殿を營み、山室山神社と呼び、同十三年七月、勅使參向して幣帛を賜ひしが、後、宣長の生地なる同郡松阪町に移して、本居神社といふ。「前條を見よ。

やまむろやま-じんじや 山室山神社【名】

やまめ 寡・寡歸【名】やもめ(寡)に同じ。榮花「母上、……、年頃尼にておはしませば、大納言殿は、やまめのやうにておはすれど」俳諧新選(子曳)「きりぎりすやまめの枕はづれたり」

やまめ 山目【名】甲斐國にて、その産物の藥種類に、二百目又は二百三十目を一斤として用ふる量目。

やまめ 【名】一〔動〕やまべに同じ。二〔植〕はしりどころ(走野老)に同じ。

やまめ 水蠆【名】〔動〕たいこむし(太鼓蟲)に同じ。

やまめうが 山囊荷・杜若【名】〔植〕やぶめうが(藪囊荷)に同じ。

やまめぐり 山廻【名】一山山をめぐること。山より山へ傳ひゆくこと。詞花「もろ共に山めぐりする時雨かなふるにかひなき身とは知らずや」二しぐれ(時雨)に同じ。三昔、江戸淺草觀音の境内なる、矢場女(ヤバジ)茶屋女などを素見(ヒヤカシ)しあるきしこと。和合人「いつもの通り奥山をぶらつきあるき、ある茶見世の前を通れば、……。山姥の告子(ツゲ)を見るやうに、むっくり起きると、山めぐりが商賣だ」

やまめぶし 寡臥【名】やもめぶし(寡臥)に同じ。落葉妻(ノ)は、などて、今まで持(モ)たまへらぬぞ。やまめ臥しては、いと苦しきものを」

やまもえ 山燃【名】やまくわじ(山火事)に同じ。續猿蓑「尾頭「山もえにのがれて咲くや杜若(ハガキツ)」「夷」に同じ。

やまもくれん 山木蓮【名】〔植〕こぶし(辛夷)

やまもち 山持【名】山を所有せること、又その人。やまぬし。俳諧新選(漁焉)「山持のよい住成(ナシ)や柿林」「した。

やまもと 山下【名】山のふもと。やま

やまもと 山元【名】鑛山師に、その經營に必要なる資本をおろす人。

やまもと 山本【名】〔地〕一羽後國九郡の一。郡役所を能代湊(ノシロ)町に置く。二筑後國の舊郡の一。明治二十九年、御原(ミハラ)・御井(ミヰ)の二郡と合はして、三井郡となる。三肥後國の舊郡の一。明治二十九年、山鹿(ヤマガ)郡と合はして、鹿本(カモト)郡となる。

やまもと-かねたいふ 山本兼太夫【名】〔人〕西宮傀儡師の祖。西の宮の社家にして、經圓を造り直したる箱の上にて、人形を舞はしつつ市街を徘徊せり。後、京都に出でて、天正五年口宣を賜はり、上村日向掾と名乘れり。

やまもと-かんすけ 山本勘介【名】〔人〕

やまもと-くずゑもん 山本九左衛門【名】〔人〕次條を見よ。

やまもと-くゑもん 山本九兵衛【名】〔人〕徳川時代に、京都二條通寺町西へ入るにありて、專ら節附の正本(ショウホン)を發賣せし書店の主人。出店、大阪と江戸とにあり。大阪のは高麗(カウライ)橋筋の角にありて、山本九右衛門といひ、江戸のは日本橋大傳馬(ヲホテマ)町三丁目にありて、山本九左衛門といへり。大阪の九右衛門は、即ち西澤一風なり。

やまもと-くゑもん 山本九右衛門【名】〔人〕前條を見よ。

やまもと-こまち 山本小町【名】七小町(ナナコマチ)の一。

やまもと-ささのじよう 山本土佐掾【名】〔人〕淨瑠璃家。虎屋源太太の門。初、角(ス)太夫と稱し、後、土佐掾と改む。角太夫節の祖。

やまもと-にしたけ 山本西武【名】〔人〕俳人。無外齋、又、風外軒と號す。京都の人。松永貞德の門。貞門五星の一に數へらる。延寶六年歿す。年七十三。

やまもと-は 山元派【名】〔佛〕さんげんは(山元派)に同じ。

やまもと-ばいいつ 山本梅逸【名】〔人〕畫家。名は亮、字は明卿。尾張國の人。先哲の筆意及び明・淸の遺蹟を學びて、一家を成し、畫く所、布置精巧なり。安政三年歿す。年六十八。

やまもと-はるゆき 山本晴幸【名】〔人〕武將。初の名は貞幸。通稱は勘介。三河國の人。倭身・跛足にして、一目眇す。兵法を伯父成氏及び鈴木重辰に學び、智略あり。今川氏に仕へて用ひられず、去りて、武田信玄に仕へ、信濃の略取、川中島の戰、皆、その謀に出づ。晩に薙髮して、道鬼と號す。永祿四年、川中島の戰に、霧深くして、謙信の近づくを知らず、奮戰して死す。年六十九。

やまもと-ひではや 山本英早【名】〔人〕柔術家。通稱は民右衛門。大阪の人。揚心流を學びて、新機軸を出す。神道流柔術の祖。

やまもと-ほくざん 山本北山【名】〔人〕儒者。名は信有、字は天禄、通稱は喜六。癸疑翁・學半堂逸士・孝經樓主人・竹堤隱逸等の別號あり。江戸の人。世世、幕府に仕ふ。井上金峨の折衷說に服して、これに學ぶ。博學・精通天文・醫卜・野乘等に至るまで、通ぜざるなく、最も經學・詩文を以て名あり。文化九年歿す。年六十一。私諡、述古先生。

やまもと-むへんりう 山本無邊流【名】槍術の一派。出羽國山本郡の人なる山本無邊宗久を祖とす。むへんりう(無邊流)參照。

やまもと-やざぶらう 山本彌三郎【名】

〔人〕人形遣。近江國の人。手妻人形といふものを創む。

やまもと-よしつね 山本義經【名】〔人〕武將。新羅三郎義光(ヨシミツ)の曾孫なる義定の子。近江國に居り、源頼朝・義仲等、兵を起すや、弟柏木義兼とこれに應じ、園城寺に據りて、平氏と戰ひ、敗れて、鎌倉に奔り、頼朝に謁す。後、義仲と入京し、壽永二年、諸將と共に京師を守護せしが、終る所詳かならず。反商(バッ)なりしより、人呼んで、反商の義經又は反商の兵衛といへり。源九郎義經が反商なりきとの俗傳は、兩者の混同に由る。

やま-もみぢ 山紅葉【名】■山にあるもみぢ。山のもみぢ。■〔植〕こはうちはかへて(小葉團扇楓)に同じ。■〔植〕もみぢ(楓樹)に同じ。

やま-もも 楊梅【名】〔植〕楊梅科に屬する常綠喬本。高さ二丈内外、樹皮は赭褐色にして平滑、全緣・長楕圓形にして、先端尖り、表面は深綠色、裏面は淡綠色、互生なれども、概ね枝頭に集まり生ずるため、輪生狀を呈す。初夏、黄白色なる單性の花、雌雄異株に開き、球形の漿果を結ぶ。果肉は多數の小突起を有し、熟すれば、紅色を呈す。暖地に自生し、又、園藝す。果實は食ふべく、木材は器具・薪炭の料とし、樹皮は藥用又は褐色の染料に供す。やまうめ。やうばい。ももかは。和名抄楊梅、夜末毛毛。狀似二苺子一赤色、味酸甜可レ食レ之。七卷食經云、山櫻桃有二二種一、黑櫻子。和名同上。味甜美可レ食矣」

山桃の擇食【句】■山桃を食ふに、初、數多き間は、善きものを選擇して食へども、少くなるに從ひて、惡しきをも避けざるに至ること。■早きと遲きとの差はあれども、歸する所は同一なる譬。遲牛(ソノ)も淀、早牛も淀。〔諺語〕

やまももくわ 楊梅科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門の一科。すべて木本にして、凡そ一屬四十種を含み、我國に自生し、又は栽培するもの、凡そ三種あり。

やまももさう 山桃草【名】〔植〕柳葉菜(ハツ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉は互生し、無柄にして、披針形をなし、小數の齒牙を具ふ。白色・楕圓形の四花瓣を有する花を開く。原產地は北米テキサス州。我國にても、栽培して觀賞用とす。はくてふさう。ふうてうさう。

やまももしゆ 楊梅酒【名】楊梅の實に、砂糖と酒とを加へて釀したる酒。

やまももの-みささぎ 楊梅陵【名】平城天皇の御陵。大和國生駒(イコマ)郡都跡(トアト)村大字佐紀にあり。土俗、禰知(ネチ)山と呼ぶ。

やま-もり 山守【名】山を守ること。又その職務の人。やまばん。萬葉「山守の有りける知らにその山に標(シ)結ひ立てて結(ヒ)の辱(ハ)しつ」字音「木こりの、山守に、よきを取られて、わびし、心うしと思ひて」

やま-もり 山盛【名】山のごとく堆く盛ること、又その盛方(カモリ)にせる物。

やまもり-べ 山守部【名】古、山林の監守に從事せし部民。一說に、海部(アマ)が、海運・海軍の事を掌りたるに對して、一朝有事の日には、陸軍を組織せるものかともいふ。やまべ。紀「改賜二姓山部連氏一、……以二山守部一爲レ民」

やま-や 山屋【名】■淺草區茶屋町にありし酒屋。和合人「今朝(ケサ)、山屋の櫻川を取っておいたが、看があるめえ。……。山屋の門に三年お立ちなされても、呑まぬ酒に酔ひたる例(タメシ)がない」■東京吉原遊廓内にありし豆腐屋。春曲「熊猫子」「戀の山屋が豆腐に鎹(カスガイ)」我おもしろ「吉原豆腐王、肌是美人粧、山屋富山意、富山白雪光、製方二國一、名物五町長、玉箸過二脣上一、消レ如二六月望一」

やま-やかた 山館【名】山地にあるやかた。やまやしき。

やま-やき 山燒【名】春、草の發生を盛んならしむるために、山の枯草などを燒くこと。野燒の類。

やま-やく 山役【名】江戸時代に、山の所有を確實にするために納めし小物成(コモノナリ)。山年貢と同樣なれども、生育せる木柴を刈り取る以上、村内全百姓の入會(イリアヒ)として納め、又、禿山等、不用の地にても、後日の必要上、隣村の山との境界を確實にするために納めしもの。

やま-やけ 山燒【名】**やまくわど**(山火事)に同じ。一茶「山やけの明(アカ)に下る夜舟かな」

やま-やしき 山屋敷・山邸【名】山地にある屋敷。やまやかた。山莊。芭蕉「捨物に梨の接穗(ツギホ)や山屋敷」「同じ。

やま-やどめ 山宿【名】〔植〕**つるつげ**(蔓黃楊)に同じ。

やま-やま 山山【名】■多くの山。■多くの靈山。曾我「虎は、山山・寺寺拜みめぐりけるが」■澤山あること。八笑人「趣向も、案じも山山だけれど」四極點。限度。「いくらか高くても、千圓位が山山だ」

やま-やま 山山【副】多く。澤山に。千萬。「山山忝し」

やま-ゆきのした 山雪下・山虎耳草【名】〔植〕**いはゆきのした**(岩雪下)に同じ。

やま-ゆり 山百合【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。葉は圓柱形にして、高さ三四尺、葉は互生し、廣披針形にして、柔滑。夏、莖頂に、六片の花蓋より成る、直徑八九寸の花を著け、佳香を放つ。花蓋は、白色の中に、淡黃色の一道あり、暗紅色の細點密布し、頗る美麗なり。山野に自生し、又、觀賞用として栽培す。鱗莖も巨大にして、味殊に美なり。えいざんゆり。すぢゆり。ほらいじゆり。よしのゆり。れうりゆり。やまゆりぐさ。

やまゆり-ぐさ 山百合草【名】〔植〕前條に同じ。記「その河を佐韋(サヰ)河といふ由は、その河の邊(ホトリ)に山由理草多かりき。故(カレ)、その山由理草の名を取りて、佐韋河と號(ナヅ)けき。山由理草の本の名、佐韋といひき」

やま-よせ 山寄【名】山の麓に片寄りたる道路。本朝三國誌「關山(セキヤマ)より日は暮れて、山科(ヤマシナ)の山よせを、在所づたひの畠道」

やま-よもぎ 山艾・蓬蒿【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。莖は直立して、高さ五六尺に達し、分岐すること少し。葉は互生し、羽狀に深裂して、裂片の先端尖り、その裏面には灰白色の毛密生す。秋、梢上葉腋に細梗を分ち、褐色・小形の筒狀花頭狀花序をなして開く。山野に自生し、葉は艾の材料となる。おほよもぎ。ぬまよもぎ。いぶきよもぎ。

やま-らっきよう 山薤【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。高さ一尺餘、葉は互生し、狹長にして、葉叢の間より花莖抽出し、紫の六片の花被より成る花、繖狀に排列して開く。山地に自生し、地下の鱗莖は、薤に似て小し。むらさきびき。

やまる 止まる【動四自】止めたるやうになる。やむ。とどまる。

やま-るりさう 山瑠璃草【名】〔植〕紫草(ムラサキ)科に屬する多年生の草。高さ七八寸、下部の葉は、鈍披針形にして叢生し、長さ四五寸に達し、葉叢の間より數本の花莖抽出し、これに著生する葉は、前者のよりやや小く、淡き藍製色の花を開く。山麓の險地等に自生す。やまうぐひす。

やまれ-ぐさ 山れ草【名】〔植〕**あきぎく**(秋菊)に同じ。萬鹽草「をとめ花、秋菊なり。山れ草、同」

やま-わけ 山分【名】■山路を分け行くこと。■二人にて、半分づつに分ち取ること。はんわけ。折半。ふたやま。

やまわけ-ごろも 山分衣【名】山路を分け行く時に著る衣。古今「清瀧の瀨瀨の白絲くりてためて山わけ衣織りてきましを」

やま-わすれ 山忘【名】鷹の後頭部。

やま-わらは 山童【名】山男の類の怪物。やまわろ。

やま-わらび 山蕨【名】〔植〕■**おほかぐま**(狗脊)に同じ。字鑑「狗脊、大和良比。又云、山和良比」■**やぶそてつ**(藪蘇鐵)に同じ。字鑑「毋泉、山和良比。又、鬼和良比」

やま-われ 山割【名】石材の割れ目の、山より採掘する前に生じゐたるもの。

やま-わろ 山童【名】**やまわらは**(山童)の訛。

やまね 山居【名】山に住居すること、又その居所。さんきよ。太祇「壁までが板で穀の山居かな」

やまね 山井【名】「山の井」に同じ。空穂「樓の南なる山井」

やまね 山藍【名】〔植〕**やまあゐ**(山藍)の約。拾遺「足引の山ゐに摺れる衣をば神に仕ふるしるしとぞ思ふ」 赤「草は、……山すげ・やまゐ・日かげ・濱ゆふ」

やまね 山薊【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する多年生の草。細長き根葉叢生し、その間より花莖抽出して、五六寸乃至一尺に達し、頂上に、綠褐色にして、卵狀楕圓形なる穗を著く。濕氣多き原野に自生す。

やまゐみ 山笑【名】〔植〕次條に同じ。

やまゐみ 山笑・黃精【名】〔植〕**なるこゆり**(鳴子百合)に同じ。和名「黃精、於保惠美。一云、夜末惠美」

やまゐんじゆ 山槐【名】〔植〕**ふぢき**(藤)

やまゐんどう 山豌豆【名】〔植〕**いたちさげ**(鼬豇豆)に同じ。

やまを 山尾・山岑【名】山の高處。みね。

やまを 山緒【名】鷹の捕獲し來れる鳥を、鳥柴(トシバ)などに縛る緒。葛藤(カツラ)又は繩を用ふ。「頭政集」御狩する野もせに雪の降りぬれば山緒にたたん葛(カツラ)だになし」

やまをかーづきん 山岡頭巾【名】鬗にて製し、樵夫・獵夫などの間に行はれたる頭巾。江戸の武士も、專ら用ひたりといふ。 膝栗毛「どてら布子に、一腰ぼっ込み、山岡頭巾を被りたる、鬚だらけのむさくろしき男」

(んきづかをまや)

やまをかーてっしう 山岡鐵舟【名】〔人〕舊幕臣。名は鐵太郎、字は猛虎、鐵舟と號す。劍を千葉周作に學び、無刀流を創む。靜岡縣權大參事、宮內少輔たり。明治二十一年卒す。

やまをぎ 山荻【名】山に生えてある荻。野生の荻。

やまをしき 山折敷【名】白木のまま、分厚(ブアツ)に製したる、粗末なる折敷。正月、神前への供物を載するに用ふ。

やまをだまき 山樓斗栄【名】〔植〕毛茛(キンポウゲ)科に屬する多年生の草。高さ一二尺餘、葉は互生し、下部のは二回三出複葉にして、各小葉は深く三裂す。花は、長き花梗に著生し、花冠は五瓣より成り、長き距を具へ、上部淡黃色、下部紫褐色、萼も紫褐色にして、五片より成る。山地に自生し、又栽培して、觀賞用に供す。はうかぞう。

やまをとこ 山男【名】深山に棲めりといふ男性の妖怪。やまこ。やまわらは。

やまをんな 山女【名】■深山に棲めりといふ、女性の妖怪。やまうば、■〔植〕**やまのをんな**(山女)に同じ。 運歩色葉集「山女、ヤマヲンナ。木通」

やみ 闇【名】■光のささぬこと。くらきこと。くらやみ。暗黑。萬葉「照れる日を闇に見なして泣く涙衣濡らしつ干す人なしに」 盛衰記「天、俄かに霧を降らして、闇を成す」 ■夜の暗きこと。月の光の照らさぬこと、又その時。暗夜。古今「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香(カ)やは隱るる」 ■光明を認め得ぬこと。謠「一寸先(イツスンサキ)は闇」 四分別のつかぬこと。心の亂るること。まよひ。やみぢ。後撰「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」 十訓「深き恨の心の闇はしばしの迷なりけれど」 五〔佛〕**みやうあん**(冥闇)に同じ。 著聞「二月(ニグワツ)の中の五日の夜半の月入りにしあとの闇ぞ悲しき」 六文字を讀み得ぬこと。あきめくら。 醒睡笑「南無の二字ばかりを、いかがしてかは見知りたる、その餘の文字はやみなる男」

闇から牛を牽出す【句】「暗闇(クラヤミ)から牛を牽出す」に同じ。〔諺語〕

闇から闇【句】次條の略。

闇から闇に葬る【句】■「闇より闇に落す」に同じ。 ■世間に洩れず、痕跡の留まらぬやうに事件を始末す。

闇に咲く花【句】「闇の女」に同じ。

闇に礫(ツブテ)【句】目あての附かぬ譬。伊達娘戀緋鹿子「さあ、その思案と云うても、闇に礫」

闇に烏【句】辨別しがたき譬。〔諺語〕

闇に鐵砲【句】「闇夜の鐵砲」に同じ。『に彷徨す。

〔諺語〕

闇に惑ふ【句】分別に惑ふ。五里霧中

闇の現(ウツツ)【句】夢にあらず、現(ウツツ)だがらに、心の闇に惑ふこと。古今「うば玉の闇の現はさだかなる夢に幾ども、まさらざりけり」 增鏡「あやしき姿に紛らはして、暗き道を辿りおはするほど、げに闇のうつつの心ちして」

闇の白鷺【句】明かに辨別し得る譬。〔諺語〕

闇の礫(ツブテ)【句】「闇夜の礫」に同じ。

闇の錦【句】■「夜(ヨ)の錦」に同じ。和泉式部集「散り散らず見る人もなき山里の紅葉は闇の錦なりけり」 ■書間ならば明瞭なるべき物の、闇夜なるがために、目に入らぬ物の譬。浦島年代記「間近く閃く太刀影も、闇の錦と、目も遣らず」

闇の花【句】「闇の女」に同じ。

闇の一人舞(ヒトリマヒ)【句】「緣(ヘリ)の下の力持」に同じ。〔諺語〕

闇の夜【句】■**やみよ**(闇夜)に同じ。萬葉「やみの夜の行く先知らず行く吾やいつ來まむと問ひし子らはも」 ■「闇の夜の錦」の略。蕊葉御帶も、更に、斯かる翁の身には闇の夜にはべるべければ、返しまゐらせん」 榮花「關白殿の大饗をぞえも言はずめでたしと思ひしに、かれは闇の夜なりけり。今日は、明かなる鏡にさし向ひたる心してこそは」 ■『あとさきの辨別しがたきを、闇夜に、前後のわからぬに譬へていふ』根附(ネツケ)の瓢簞の、くびれ目の前後の、大小の別なきもの。淀鯉出世襲譚「月夜はなほか、闇の夜も、瓢簞町を腰づけに」 東鬢子「攝南今宮村は、……、元祿、寶永の頃までは、闇の夜といへる壺廬を出せり。藏頭藏尾にして、薄髮分らざる故、闇の夜と號す」

闇の夜の錦【句】「闇の錦」に同じ。空穂「釣殿御覽ぜさせんとしつるを、闇の世の錦といふやうになん」 榮花「上達部(カンダチメ)の御祿のありさまなど、暗ければ見えねど、闇の夜の錦にやとまでなん」

闇の女【句】**いんばいふ**(淫賣婦)に同じ。

闇より闇に入る【句】〔佛〕『雜阿含經の卷十に「從レ闇入レ闇、而從レ冥入レ冥」とあり。無量壽經の卷下にも見ゆ』 榮花「生(ショウジ)が、解脫(ゲダツ)の道を知らず、永久に煩惱(ボンナウ)に迷ふ。冥きより冥きに入る。」〔諺語〕

闇より闇に落す【句】胎兒を、生れぬ內に死なしむ。本朝二十四孝「足利殿の御世繼に敬はるる子を持ちながら、闇より闇と落すか」

親の闇【句】『次條に引ける後撰集の歌にもとづきていふ』親が、前後を忘るる程に、子を愛すること。箱根靈驗鑑 仇討「娘の戀路叶へてやりたい親の闇、心を碎く、その內に」

子ゆゑの闇【句】『後撰集の雜歌に載せたる兼輔朝臣の歌に「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」とあり』親が、前後を忘るる程に、子を愛すること。俳諧古選附錄(巴東)「遺教經は子ゆゑの闇よ世のかたみ」

やーみ 矢見【名】三十三間堂の通矢(シトヤ)などの時、矢の中りたる數を觀測せし人。其角「新三十三間堂、若水や昨日の矢見も木綿賣」

やみ 止【名】止むこと。終止。廢止。

やみ 闇【數】『陰曆にて、毎月の三十日は闇夜なるよりいふ』三十を云ふ。〔雲助等の隱語〕膝栗毛「まんだ安いなら、やみげんこで」

やみ 闇【貌】**やみくも**(闇雲)に同じ。浮世床「闇とぶんのめす」 人笑「あの野郎、風並(カナミ)の好い事だから、やみと力(キリ)みちらして」

やみあがり 病上【名】病後、なほ體力の十分回復するに至らぬこと、又その時期、又その人。病氣あがり。やみあげく。

やみあげく 病擧句【名】前條に同じ。

やみあし 病足【名】病に罹れる足。やまひあし。「同じ。〔諺語〕」

病足に腫足(アシ)【句】「泣面に蜂」に

やみ-うち 闇打・闇討【名】一闇夜に紛れて、相手を不意に討つこと。暗殺。平家「五節(ゴセ)の豐明(ブカリ)の節會(セチエ)の夜、忠盛を闇討にせんとぞ擬せられける」二**ふいうち**(不意打)に同じ。

やみ-おこり 止起【名】**かんけつ**(間歇)に

やみ-おすり 闇絣【名】黑地の木綿織に、細かなる亂絣(ミダレガスリ)を現したるもの。

やみ-がた 止方【名】一止まんとする頃。玉葉「秋の雨の止みがた寒き山風にかへさの雲もしぐれてぞゆく」二病氣癒えんとする頃。快復せんとする頃。後撰「男の病しけるを訪らはで、ありありてやみがたに訪へりければ」「同じ。」

やみ-かへし 病返【名】**ぶりかへし**(振返)に

やみ-からげ 病紮【名】常に病めること、又その人。唐船噺今國姿絵「病からげの穀盜人」

やみ-くも 闇雲【貌】**むやみ**(無闇)に同じ。根無草「戀の叶はぬ業腹(ハラブ)まぎれ、……、闇雲に亡命(ボウメイ)して」膝栗毛「やみくもと摑みあうて」「に同じ。」

やみくもむしやう 闇雲無性【貌】前條

やみさかる 病離る【動四自】流行病衰へ遠ざかる。〔古語〕榮花「赤瘡(アカガ)、……世の人、少し病みさかりて」

やみ-じあひ 闇仕合・闇試合【名】闇黑の中にて仕合をすること。浮世風呂「感の惡い盲人は、芝居の闇仕合の如く、頭を擦れちがうて出づるあり」

やみ-しし 病猪【名】病に罹れる猪。手負の猪。記「猪のやみじしのうだき畏みわが逃げのぼりしありをの榛(ハリ)の木の枝」

やみ-じに 病死【名】一病に罹りて死ぬること。びやうし。二心配の餘りに死ぬること。生涯心中「嘉平次がいとしいばっかりに、世話を病んで病死の」

やみ-じる 闇汁【名】一闇夜に溝・小川などより掬ひて獲たる物を、暗闇にて煮て、暗闇にて食ふこと。やみのよじる。二各自思ひ附きたる魚鳥・野菜などを持ち寄り、汁に入れて煮て食ふこと。やみのよじる。

やみぞ-やま 八溝山【名】〔地〕磐城・常陸・下野三國の交界に跨れる山。高さ三三三三尺。山中深邃にして、溪水八方に放流するより、この名ありといふ。その水、東するものは久慈(クジ)川の水源となり、西するものは那珂川に注ぐ。

やみぢ 闇路【名】一暗夜の道。闇に行く道。二**やみ**(闇)三に同じ。三〔佛〕衆生(シユジヤウ)の迷ひ苦しめる世の中。冥闇(メイアン)この世界。著聞「闇路をば彌陀の光に任せつつ春のなかばの月は入りにき」新後撰「長き夜の闇路に迷ふ身なりとも眠(ネ)さめなば君を尋ねん」四〔佛〕**めいど**(冥途)に同じ。盛衰記「消えも失せなば、若公(ワカギミ)と一つ闇路を伴なひたらば、なかなか嬉しく侍りなん」

やみ-つき 病附【名】病みつくこと。油地獄「病附は跡の月十二日、……、この病は一時も早く婚殿を呼入れ、夫婦になりたいと思ふ氣病(キヤミ)に」

やみ-つく 病附く【動四自】一病に罹る。病氣發す。やまひづく。わづらひつく。やむ。二遊蕩を覺えて、それに耽る。

やみ-どり 闇取・闇捕【名】よくも見定めずに捕ふること。傑作「鳥多く飛び入るを、穴の口を塞ぎて、闇取にするなり」

やみのよじる 闇夜汁【名】**やみじる**(闇汁)に同じ。

やみ-は 病齒【名】病める齒。即ち齲齒(ムシバ)など。庭訓往來「痰病・咳病・疾齒・膜等者」「じ。」

やみ-びと 病人【名】**びやうにん**(病人)に同

やみ-ぶくろ 病袋【名】人の身體を、病氣を包藏せる器と見ていふ稱。三代男「戀の病袋(クワイタイ)、包むとすれど、綻びて」

やみ-ほうく 病惚く・病耄く【動下二自】病に罹りて、氣力衰ふ。

やみ-ぼうく 病惚く・病耄く【動下二自】前條に同じ。重井筒「私、寢言(ネゴ)かな申したか。但し、お前が病みぼうけて、そら耳でがなでござりましよ」

やみめ 病目・病眼【名】眼病に罹ること、又、眼病に罹りてある目。やまひめ。浮世床「病目で、目の赤い内は」

やみやみ 闇闇【貌】前後の辨別もなきさま。條理の立たぬさま。平治「闇闇と敵に討ち取られ」國姿絵「玉體を、闇闇と、逆臣の刃に掛けんこと、勿體なし」

やみやみし 病病し【形二】なやまし。わづらはし。面倒なり。一言芳談抄「佛道を願ふといふは、別にやみやみしき事なし。ひまある身となりて、道を先として、餘の事に心を掛けぬを、第一の道とす」

やみ-よ 闇夜【名】闇の夜。月夜ならぬ夜。あんや。

闇夜に目あり【句】闇夜と雖も、行を慎まざれば、何時とはなく露顯すべし。「壁に耳」の類の語。〔諺語〕

闇夜の提燈【句】「闇夜の燈火(トモシビ)」に同じ。〔諺語〕

闇夜の礫(ツブテ)【句】目あてなく、又、目あてに當らぬ譬。闇に鐵砲。

闇夜の鐵砲【句】前條に同じ。

闇夜の燈火(トモシビ)【句】渇望せる物事に出會ふ譬。「渡(リヤク)に船」「地獄で佛」などの類。〔諺語〕「じ。〔諺語〕」

闇夜の繡(ヌ)【句】「夜(ヨ)の錦」に同

やみら-みっちや 【貌】**むちやくちや**(無茶苦茶)に同じ。曾根崎心中「心の中はむしやくしやと、やみらみっちやの草袋」膝栗毛「煙草盆を蹈み碎くやら、土瓶の茶をぶちまけるやら、三人、やみらみっちやに騷ぎ立つる物音に」

やみ-わづらひ 病煩【名】わづらひ。病氣。繼娘昔八丈「病煩で殺してさへ、子を先だてし親の身は」

やむ 止む・已む・罷む【動四自】一行はれぬやうになる。動作・運行等終はる。絶ゆ。とどまる。とまる。やまる。休止す。廢絶す。二病氣癒ゆ。なほる。快復す。〔古語〕拾遺「我こそは見ぬ人戀ふるやまひすれ逢ふ日ならではやむ藥なし」

已みなん、已みなん【句】『論語の微子篇に「已而已而、今之從政者殆而」とあり』とても前途の望なし。萬事休す。

止む藥【句】病を癒す藥。拾遺「我こそや見ぬ人戀ふる病すれ逢ふ日ならでは止む藥無し」

止む事を得ず【句】その儘に捨ておくこと能はず。せんかたなし。よんどころなし。

已む無し【句】『孟子の梁惠王下篇に「是謀非三吾所二能及一也。無レ已則有レ一焉」とあり』前條に同じ。

已むを得ず【句】『孟子の滕文公下篇に「予豈好レ辯乎。予不レ得レ已也」とあり』「已む事を得ず」の略。

已んぬるかな【句】「已みなん、已みなん」に同じ。俳諧新選(龍眠)「已んぬるかな市に五勺の升あらば」

やむ 止む・已む・罷む【動下二他】一止ましむ。行はぬやうにす。動作・運行等の終はるやうにす。絶つ。とどむ。とむ。よす。休止す。停止す。廢絶す。二病氣を癒えしむ。なほす。治療す。落葉「醫師(クスシ)なり、御病も、ふとやめ奉りてん、……とて、胸かいさぐりて、手觸るれば」

やむ 病む【動四自】病に罹る。病氣になる。わづらふ。やまふ。

病む身より見る目【句】病氣は、惱める當人よりも、傍に居て、看病する者の方が心苦し。〔諺語〕

病む目に突目【句】「弱目(ヨワメ)に祟目」に同じ。〔諺語〕

病む目より見る目【句】「病む身より見る目」に同じ。〔諺語〕

病め醫者、死ね坊主【句】醫者は、病人の多からんことを欲し、僧侶は死人の多からんことを欲す。〔諺語〕

やむ 病む【動四他】一病に冒されて、惱む。病を受く。源氏「にはかに胸を病みて失せにき」二心にかかりて、惱しく思

ふ。生玉心中「嘉平次がいとしいばっかりに、世話を病んで病死(ヤマヒ)の」

やむごと-なし 止事無し【形一】やんごとなし(止事無し)を見よ。

やむ-め 寡・寡婦【名】やもめ(寡)に同じ。(鰥(ヤモメ)に對して)〔古語〕 和名「寡婦。釋名云、無夫曰寡、夜無女」

やむ-やむし 騃し【形二】おろかなり。頑愚なり。〔古語〕 字鏡「騃、廢也。加太久奈。又、也牟也牟志」

やむら 谷村【名】〔地〕甲斐國南都留(ミナミツル)郡にある町。桂川の東岸。甲府市の東十一里半、猿橋(サルバシ)を距ること三里。甲府に亞ぐ繁華の地。

やむ-を 鰥・鰥夫【名】やもを(鰥)に同じ。(寡(ヤモメ)に對して)〔古語〕 和名「鰥夫。釋名云、無妻曰鰥、夜無乎」

やん 兩【數】りやん(兩)に同じ。〔拳(ケン)にいふ語〕 松の落葉「やん・しうすん」

やん-かう 羊羹【名】支那料理の一。羊肉を湯煮にして、汁を捨て、肉を洗ひ、大根・生姜・葱等を加へて、醤油・酒・水にて又煮、取り上げて、骨を去り、肉を薄く切りたるもの。

やんかて 軈て【副】やがて(軈て)に同じ。

やんきい (英Yankee)【名】『元來、今日の亞米利加合衆國の基礎をなしたるニユウイングランド(New England)の住民の綽名なりしもの、一轉して、合衆國の北方諸州の住民を、南方諸州の人の呼ぶ綽名となり、更にその意義を擴張するに至れるもの』亞米利加合衆國の人を、嘲笑の意を含めて呼ぶ語。

やんきいずむ (英Yankeism)【名】亞米利加合衆國の國民の特色。米國風、米人氣質。

やんこ【名】ふね(船)Ⅱを云ふ。〔幼兒の語〕

やんごと-なし 止事無し【形一】『止(ヤ)む事なき義』Ⅰそのままに捨ておくこと能はず。疎略にすること能はず。一とほりにあらず。特別なり。やうごとなし。やごとなし。やつなし。 後撰「二三日侍りて、やんごとなき事によりて罷り立ちければ」 源氏「やんごとなく切(セチ)に隱したまふべきなどは」Ⅱ『尊き物事は疎略に扱ひがたきよりいふ』たふとし。高貴なり。やうごとなし。やごとなし。やつなし。 蜉「内わたりなど、やんごとなきも、今日は、皆、亂れて、かしこまりなし」 同「やんごとなき物持たせて、人のがり遣るに」

やん-ざけ やん酒【名】『やんはやん(兩)か』酒興に乘じて、拳(ケン)などをすること。

やんす【動佐變自】ます(坐す)に同じ。〔京阪地方の女の語〕 天の網島「紀伊國屋の小春さん借りやんしよ」

やん-ちや【名】Ⅰ『やにちや(脂茶)の訛といふ』小兒の、甘えて、むつかること。だだをこねること。わやく。わんぱく。やにちや。やんちやん。 丹波與作「姫君樣、……、やんちやばかり御意なされ」Ⅱ遊蕩。放蕩。〔關西の語〕

やんちや-ごゑ やんちや聲【名】やんちやを言ふ聲。平假名盛衰記「なんの頭是もなき出す駒若丸のやんちや聲」

やんちや-ばう やんちや坊【名】やんちやものやんちや者)に同じ。

やんちや-むすこ やんちや息子【名】やんちやを言ふむすこ。

やんちや-むすめ やんちや娘【名】やんちやを言ふ娘。

やんちやん【名】やんちやに同じ。 浮世風呂「我儘者でござります。いえさ、やんちやんが能うござります」

やんちやもの やんちや者【名】やんちやを言ふ子供。やんちやばう。やにちやばう。やんちやんもの。

やん-な【助】やなの音便。 狂言(節分)「あら、日柊(ヒヒラギ)やんな」 「を見よ。

やん-ぱち やん八【名】『嬈(ヤン)のやん八』

やん-ぱん 兩班【名】『漢字の支那音。朝儀の時、文官は東班に、武官は西班に列せしによりていふ』朝鮮の舊王室の李氏の功臣として、社會の最上位を占めし階級、即ち貴族。文武の官を、殆ど世襲的に占有し、生業を營むことなく、種種の特權を有し、その下に立ちし中人(チウジン)・常民(ジヤウミン)及び白丁(ハクテイ)又は僕(ボク)と稱する三階級に對して誅求・壓迫を加へしため、一般庶民の疲弊を來し、同國衰運の原因をなすに至れり。

やん-ばら【名】勝手氣儘に粗暴に振舞ふこと、又その人。

やんはり【貌】やはらか(柔らか)に同じ。 和合人「和(ハヤ)り遣らねえと、目をまはすぜ」

やん-ぴい 羊皮【名】『羊皮の字の支那音』きつぢを見よ。

やんま【名】Ⅰ【動】蜻蛉(ボウフラ)の一種。形大きくして、體色青綠なり。ゑむば。Ⅱさんぼ(蜻蛉)に同じ。 「蛉釣」に同じ。

やんまつり やんま釣【名】さんぼつり(蜻蛉釣)に同じ。

やんま釣がやんまに釣らる【句】「木乃伊取(イトリ)が木乃伊になる」に同じ。〔諺語〕

やんや【名】『次條の語の轉義』賞讃すべきこと。 浮世風呂「五大力の爪びきを聞き居るも、やんやな沙汰ぢやあねえ」 八笑人「これへ、ちよいとした落(オチ)を附ければ、やんやだ」

やんや【感】賞讃のかけ聲。喝采の聲。 和合人「徳用むきの通力(ツウリキ)が無けれあ、それも喝采(ヤンヤ)とせず」

やんら【感】やらの音便。 本朝文鑑(烏追辭)「やんらめでたや、千町や萬町の烏追が參りて、福の神を祝ひこめ」

やんれ【感】やれの音便。

やんれ、さ、ほい【句】車などを押し ゆく時の掛聲。えんさかほい。

やんれ-ぶし やんれ節【名】くどきぶし(口說節)に同じ。

やー【感】やれの音便。

やー-め 止罷・已【名】やむること、又、やめたること。休止。停止。廢止。 八笑人「なる程、それではやめか」

やー-め 矢目【名】矢の中りたる痕跡。 大鏡「その君の、祭の日調(ウケ)じたまへりし車、……、加茂の明神の矢目負ひたまへりと言ひなしてしかば」 保元「疵の口を灸し奉りけれども、叶はず。……。矢目を見れば、御喉の下より、左の御耳の上へぞ通りける」

やめ【名】つりいと(釣絲)を云ふ。〔北國の方言〕

やめ 八女【名】〔地〕筑後國六郡の一。郡役所を福島町に置く。

やめ-ぶん 止分【名】よしにすと定むること。 置土產「太夫樣から、はなむけに、二百目ほど入る肌小袖を取っておき、みやげに小判進ぜて、四十末社の者どもには、少し子細ありて、やめぶんなり」

やめら-がしは やめら柏・やめら柏【名】〔植〕ちしやのき(齊墩果)に同じ。

やめる 病める【動下一】自痛む。惱む。 八笑人「これから、又呑んだら、明日(アシタ)天窓(アタマ)が病めて」

やー-も 八面・八方【名】やおも(八面)の略。 紀「八維、ヤモ」

やー-も【助】Ⅰ感嘆の助辭やともとの重なりて、強き感嘆の意を示す語。(動詞の已然形に添ふ) 萬葉「わが行(キ)は久にはあらじ夢(イメ)のわた瀨とはならずて淵にあれやも」Ⅱ疑問の助辭やと感嘆の助辭もとの重なりて、その兩意を兼ねたる語。やは。かも。 萬葉「ますらをの心はなしに秋萩の戀にのみやもなづみてありけむ」Ⅲ反語の助辭やと感嘆の助辭もと重なりて、その兩意を兼ねたる語。 萬葉「紫の匂へる妹(モ)を憎くあらば人妻ゆゑにわれ戀ひめやも」 「里。

やもち【名】『山内(ヤマウチ)の訛』山中にある

やもひ 病【名】やまひ(病)Ⅰに同じ。 數木「押されてやもひもぞすると、あたりの木どもを伐り拂はせたまふ」

やもふ 病ふ【動四自】やまふ(病ふ)の轉。 名義抄「病、ヤマヒ・ヤモヘル・ヤマフス」

やもめ 寡・寡婦・孀【名】Ⅰ夫を失ひたる女。くわふ。ごけ。やどめ。やまめ。やむめ。をんなやもめ。(鰥(ヤモメ)に對して) 和名「寡婦。釋名云、無夫曰寡、夜毛女」 竹取「かぐや姫のやもめなるを」Ⅱやもを(鰥)に同じ。 伊勢「男、やもめにて居て」 源氏「源宰相、男のやもめにて」

やもめ-がらす 寡烏・孀烏・鰥烏【名】やもめ鳥なる烏。配偶の無き烏。 新六「ま

た今宵やもめ鳥よ人すけの無きをば知らでわれ驚かす」

やもめ-ぐらし 寡暮・孀暮・鰥暮【名】やもめにて住めること。寡居。蜻蛉「やもめ住したる男の、文(ふみ)書きさして」

やもめ-だふし 寡倒・孀倒【名】『もと、篠竹を、背の形に作りたる、こき箸といふ物にて、稲を扱きし時代には、主として、寡婦、この業に従ひしを、元禄中、和泉國の人、稲扱を發明するに及びて、寡婦の業は奪はるるに至れりとていふ』**いなこき**(稲扱)に同じ。

やもめ-づる 寡鶴・孀鶴・鰥鶴【名】やもめ鳥なる鶴。配偶の無き鶴。生玉心中「田蓑の島のやもめ鶴、泣いて立ちたるあはれさに」

やもめ-どり 寡鳥・孀鳥・鰥鳥【名】やもめなる鳥。配偶の無き鳥。松風村雨束帯鑑「みづからはまた孀鳥、つまは弓取り」

やもめ-びと 寡人・孀人・鰥人【名】やもめなる人。やもめ。やもを。源氏「やもめ人の、引きたがへこまがへる樣(サマ)もありかし」

やもめ-ぶし 寡臥・孀臥・鰥臥【名】やもめにて臥すこと。ひとりぶし。ひとりね。やまめぶし。

やもめ-をとこ 鰥男【名】**やもを**(鰥)に同じ。空蟬「なぞのやもめのまします所に、やもめ男は住ましむる」

やもり 家守・屋守【名】■家屋の番をなすこと、又その人。■江戸時代の、今の差配人に相當せし者。即ち、地主のために、その地面の支配、地代・店賃の徴收をなし、公用・町用を勤め、自身番所に出て、非常を守りしもの。やもりやく。浮世風呂「私の所の地面の屋守を致して」

やーもり 家守・守宮・壁虎・蠎蜓【名】(動)蜥蜴(ケカ)類に屬する爬蟲類。概形は蜥蜴に似て、やや扁く、皮面に細鱗ありて、暗灰色を呈し、前後四肢、何れも五趾を具へ、趾端扁圓、下面に細微なる横皺あり、吸盤の用をなして、よく他物に附著す。床下・天井裏などに棲み、壁墻などに攀ぢて、昆蟲を捕食す。擧動不活潑にて、形態醜惡なれども、無害なり。熱帶地方にては、美聲にて鳴くものあり。かべちよろ。

(りもや)

やもり-とさく 家守少作【名】江戸時代に、所有の田畑多くして、監督行き屆かぬ地主が、監理人を設けて、監督を代理せしめ、小作地の内の幾分を、給料として與へ、年貢・諸役は、地主の支辨と定めし方法の小作。

やもり-やく 家守役【名】**やもり**(家守)■に同じ。

やも-を 鰥・鰥夫・鰥男【名】妻を失ひたる男。やもを。(寡(ヤモ)に對して) 和名「鰥夫。釋名云、無ノ妻曰ノ鰥、也毛乎」

や-や【名】あかご(赤兒)を云ふ。〔京都・大阪邊の語〕俳諧古選・夕霧「ややの親(オヤ)手笠いとはぬ時雨かな」義經千本櫻「雁と、燕と、どちらがかはい。ややを育つる燕がかはい」

や-や 夜夜【名】よよ(夜夜)に同じ。

や-や 稍・良【副】『彌彌(イヤヤ)の略なるべしといふ』■少しづつ程度の進み加はる意。次第に。順次に。漸次に。ややに。源氏「月、ややさしあがり」■他の事物、又は普通の標準と比較して、程度の加はれる意。幾分か。可なり。

ややともすると【副】次條に同じ。

ややとすれば【句】「ややもすれば」に同じ。

ややむすれば【句】次條の轉。字鏡集「按、ヤヤトシテ、ヤヤムスレバ」

ややもすると【句】次條に同じ。〔動もすると〕

ややもすれば【句】ちよっとしたる事にも。大抵の場合に。ともすれば。〔動もすれば〕枕「曇りて、ややもすれば降り落ちぬべく」

ややもせば【句】前條に同じ。〔動もせば〕源氏「ややもせば消(ケ)を爭ふ露の世に後れ先だつ程經ずもがな」紫式部日記「ややもせば、腰離れぬばかり折れかかりたる歌を詠み出で」

や-や【感】見とめて呼びかけ、又は、ふと思ひつき、意外に感じなどして發する聲。枕「誰が沓にかあらん……と言ひけるを、ややや、方弘(ヒロ)がきたなき物ぞやとて」紫花「ややや、いかに思さるるぞと、……、つと捕へ奉りて」

や-やき 屋燒【名】**かやき**(家燒)に同じ。五十年忌歌念佛「主殺(コロシ)・親殺・屋やき・强盜」〔大阪邊の語〕

やーやこし ややこ【形二】複雜にて、理解しにくし。入り組みてあり。〔京都・大阪邊の語〕

ややこ-をどり ややこ踊【名】一種の踊。一說には、幼者のする踊なりと。鹿筑波「涙ほろほろともし火のもと(といふ句に)ややこ踊夜の更くるまで馴らすらん」

ややさま ややさま樣【名】**やや**の敬稱。〔京都・大阪邊の語〕浮世風呂「ややさまが、お乳にお困りなさらぬ」

ややに 稍に・漸に【副】**やや**(稍)■に同じ。〔古語〕記「甚(イタ)く疲れませるに因りて、御杖を衝かして、稍に歩みましき」

ややまし【形二】ややむ樣なり。心なやましし。わづらはし。〔古語〕源氏「いと斯く治めん方なき心まどひにては、願はん道にも入りがたくやと、ややましきを」紫花「いとどしう、痛はしう、ややましげに扱ひ聞えさせたまふ」

や-ややむ【動四自】『彌(イヤ)疾(ヤ)の略なるべしといふ』心惱む。思ひわづらふ。〔古語〕續紀「立ち舞ひてややみたまへば」源氏「いと苦しげにややみて」

ややーやや 稍稍【貌】**やうやう**(漸う)に同じ。〔古語〕萬葉「ややややに形くづほり朝な朝な言ふこと止みて玉きはる命絶えぬれ」

ややーりやう やや良【名】『**やや**とも訓む事ある文字なるよりいふ』「良」の字を、他の同音の字と呼び分くるにいふ語。(耳搔了(ミミトリ)などに對して)

やーゆ 揶揄・邪揄【名】侮りもてあそぶこと。からかふこと。嘲弄。

やーよ 八夜【名】夜の數八つ。記「日(ヒ)八日(カ)、夜(ヨ)八夜を遊びたりき」

やよ【名】賤しき者の妻を指していふ。〔伊勢國の方言〕

やーよ【感】■呼び掛くる聲。やや。やれ。源氏「思ふらん心の程ややよいかにまだ見ぬ人の聞きか惱まん」一茎「やよ虱這へ這へ春の行く方へ」■調子を添ふるに用ふる語。狂言(三本柱)「つうと内へ持ち込め。げにも然(サ)あり。やよ、げにも然(サ)うよの」

やよ、がりも然(ソ)よな【句】『がりも は、如何にもの義かといふ』小唄の終に添へて用ふる囃言葉。謠曲藤榮「川岸の、川岸の根白の柳あらはれにけり。そよの、あらはれて、いつかは、君と、君と我と、我と君と枕さだめの、やよがりもそよな」

やーよう 冶容【名】『易經の繫辭傳に「慢ノ藏誨ノ盜、冶ノ容誨ノ淫」とあり』形をなまめかしく裝ひ飾ること、又そのかたち。化粧。艶容。

やよがは-うつぎ やよがは卯木・やよがは溲疏【句】〔植〕**ばいくわうつぎ**(梅花卯木)に同じ。

やよし【形一】『彌彌(イヤヤ)しの略轉かとも、彌多(イヤオ)しの略轉かともいふ』數多なり。多し。〔古語〕古今「わたくしの老の

数さへやよければ身はいやしくて」

やよすがし 八代洲河岸・八重洲河岸【名】〔地〕東京市麹町區の内、宮城和田倉門より日比谷に至る濠外一帶の地。東は、外濠を隔てて、日本橋區・京橋區の商業地に隣る。東京府廳・市役所・中央停車場(東京驛)及び諸會社・銀行等あり。慶長中、和蘭船の乗員ヤンヨオス(Jan Joosten の略)の假寓せし地なりといふ。德川時代には、國持大名の邸宅多く、大名小路の稱あり。

やよひ 彌生【名】『彌(ヤ)生(ヒ)』の略約』陰暦三月の稱。「暦三月の稱。

やよひ 彌生の節句【句】三月三日の節句。俗曲「花吹雪繻子笠」「彌生の節句は、とりわけ、雛の遊の妹脊事」

やよひ-しき 彌生式【名】『東京市本郷區彌生ケ岡の貝塚にて始めて發見せしより名づく』我國、古代の住民の使用せし土器の形式の一。素燒(キヤ)にて、口狹き壺又は高坏(ツカキ)多く、色は黃褐又は赤褐なり。

やよひ-しだ 彌生羊齒【名】〔植〕水龍骨(ノブキン)科に屬する多年生常綠の草。莖は根莖、葉は二回羽狀に分裂し、長さ二三尺に達す。子嚢群は葉の下面に生じ圓し。苞膜は初め紅色なり。べにしだ。

やよひ-まつり 彌生祭【名】毎年四月七日に行はるる下野國日光二荒山(フタラヤマ)神社の例祭。昔は三月二日に行はれたり。

やよひ-やま 彌生山【名】彌生の頃の山。五月山(ヤマツキ)の類の語。新續古今「彌生山春の名殘もほのかなり何ぞはありて有明の月」

やよ-や【感】**やよ**【一】に同じ。古今「やよや待て山ほととぎす言傳(ツテ)てんわれ世の中に住みわびぬとよ」松の葉「玉櫛笥(タマクシゲ)二人寢よとの、やよや文枕(フミマ)」

やよろづ 八萬【數】極めて多き數。やほよろづ。佛足石歌「この御跡(ミ)八よろづ光を放ち出しもろもろ救ひ濟(タス)したまはなた救ひたまはな」

やら【名】泥深き水底、又、沼澤の類なるべし。〔古語〕萬葉「梯立(ハシタテ)の熊來(キク)のやらに新羅斧(シラノ)落し入れ」仙聲抄「やらとは、かつみ・蘆やうの物など生ひ茂りたる浮土(ウキヒ)なり。田舍の者は、やはらともいふ」

やら【感】**やれ**に同じ。狂言(貫蟹)「やら、奇特や表に案内がある」

やら【助】**一やらん**の略。狂言(自近大名)「見れば、田舍者と見え、何やら尋ねる」 閨女「蜻蛉釣(ツリ)今日はどこまで行ったやら」 **二**二つ以上の事物の入り組みてあるを、並べ擧げていふ語。やれ。「犬やら猫やら」泣くやら喚くやら」

やらい 矢來・矢拂・行馬【名】『入らんとする者を逐ひ遣らふ義。矢來も、矢拂も假借の文字、假名遣も、實はやらひ』竹又は丸太を、縱横に粗く組みて、假に構へた出づるぞ無慘なる。矢拂の内に土壇を構へ、高手(タカ)を許し、羽がひ締」

やらい 夜來【副】ゆふべこのかた。昨夜以來。ゆふべより。

やらい-がき 矢來垣【名】**やらい**(矢來)に同じ。

やらう 野郎【名】**一**をとこ。男子。丹波與作「さてさて、利口な野郎ぢやな」 **二やらうあたま**(野郎頭)の略、又その頭つきなる、若き男子。〔野良〕若風俗「太夫子殘らず前髮おろして、野郎になりし時は」 **三**『野郎頭なりしよりいふ』**かげま**(陰間)に同じ。〔野良〕一代男「野郎もてあそびは、散りかかる花の下(モト)に狼が寢てゐる如し」若風俗「野郎なればこそ、三十四五までも若衆顏して、人の懷の中へもはいる事ぞ」 **四**腰に下ぐる煙草入。〔越後國の方言〕

野郎の蒲鉾(カマ)【句】板の間に伏してある男の、姿を嘲りていふ語。「男の丸太」參照。惠比良濱梅「板の間へ伏さりやあがって、野郎の蒲鉾ぢやあるめえし」

野郎の猪【句】姿を、猪に似たりとて嘲りていふ語。膝栗毛「古傘(フルカサ)を遣らうから、ひつぺがして著ろとけつかる。べらぼうめ、野郎の猪ぢやああんめえし、そんな物が著られるもんか」

野郎の猩猩【句】酒に醉ひて顏の赤き男を嘲りていふ語。契國策「三めが喰った程に、別(チ)やあない事、野郎の猩猩を見るやう、づぶろくになった」

野郎の撫牛(ナデ)【句】蒲團の上にうづくまりてある男を嘲りていふ語。春色惠の花「おや、藤(ト)さん、蒲團の上へお坐(ス)んしな。なあに、おいらあ、野郎の撫牛といふ通句(リフク)は嫌だ」

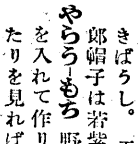
やらう 冶郎【名】なまめかしき男。やさをとこ。たはれを。遊冶郎。

やらう 野老【名】**一**田舍の老人。村翁。**二**老人の謙稱。**三**〔植〕ところ(野老)の漢名。

やらう 夜郎【名】『漢書の西南夷傳に「西夷君長以十數、夜郎最大」とあり』古、支那の西南、今の貴州の西境にありし夷。夜郎自大(イダイ)【句】**一**夜郎は、邊境の蠻夷なるに拘ちず、地域廣く、勢强かりしこと。**二**價値なき者の、仲間の中にてのみ幅を利かする譬。

やらう-あそび 野郎遊・野良遊【名】野郎**三**を招きて、男色の遊興をすること。世間子息氣質「傾城狂・野郎遊は、金銀を皆にし」

やらう-あたま 野郎頭・野良頭・野郎天窓【名】昔、男子の、額髮を廣く剃り上げたるもの。



(頭 郎 野)

やらう-かひ 野郎買【名】野郎**三**を呼ぶこと。根南志具佐「髮は本田に銀煙管(ギンセン)、男娼買(カヒ)と見せかけても」

やらう-かぶき 野郎歌舞伎・野良歌舞伎【名】野郎あたまにて演ずる歌舞伎、即ち承應元年六月、若衆(ワカシユ)歌舞伎の、前髮を附くるを禁ぜられし後のもの。

やらう-ぐるひ 野郎狂・野良狂【名】野郎遊に耽ること。わかしゅぐるひ。一代女「物の見事なる騷(サワ)して、今日は傾城めに心を殘さずか、又は、この里ふつと止めて、野郎ぐるひに仕替へんと思ひ定め」

やらう-ざいもん 野郎祭文・野良祭文【名】野郎**三**の名を並べ擧げていふ歌祭文。三代男「野郎祭文、上(ガ)れのいきづみ聲」

やらう-したぢ 野郎下地【名】練習を積みて野郎となるべき者。若風俗「始めて髮垂るる祝言より、この子は、備はりて、野郎下地なり」

やらう-すごろく 野郎雙六・野良雙六【名】野郎**三**の風俗を描き並べたる雙六。元祿の頃まで行はれしがごとし。類柑子「痩せたうて莫(ナ)も食はぬ花ざかり(ミいふ句に)これぞ雨夜の野良雙六」「同じ。

やらう-だい 夜郎大【名】「夜郎自大」に

やらう-だたみ 野郎疊・野良疊【名】緣無(ヘリ)の疊。ぼうずだたみ。

やらう-ぢやや 野郎茶屋・野良茶屋【名】かげまぢやや(陰間茶屋)に同じ。

やらう-ばうし 野郎帽子・野良帽子【名】若衆(シユ)歌舞伎禁ぜられて、野郎歌舞伎となりし時、これに出演する野郎**三**が、假髮の使用を許されざりしため、置手拭にて、剃りたる額髮の痕を被ひ隱ししが、一轉して、帽子の如くなりたるもの。元祿の頃、加茂川のしほ、水木辰之助等、工夫して、縮緬にて風流に作り、色は紫に定めしより、紫帽子と呼ぶに至れり。むらさきばうし。天の鍋島「謠の本は近衞流、野郎帽子は若紫」

やらう-もち 野郎餅・野良餅【名】昔、餡を入れて作りたる、一種の餅。木芽漬著「あたりを見れば、看板に僞なき、四條川原の野良餅」

やらう-もんやうじ 野郎紋楊枝・野良紋楊枝【名】野郎**三**の紋所を附けたる楊枝。若風俗「何れの工(タク)が創りなして、野郎紋楊枝といへるを始めて、世にもて時花(ハヤ)らかしぬる」

やらう-や 野郎屋・野良屋【名】かげまや(陰間屋)に同じ。

やらうやくしや 野郎役者・野良役者【名】野郎歌舞伎の役者。かげま。

やらう-よばはり 野郎呼【名】人を、何何野郎と呼び捨つること。潮來婚誌「野郎よばはりをしやあがるか。さう聞いちやあ、こっちも合點しねえぞ」

やらう-わかしゆ 野郎若衆・野良若衆【名】やらうやくしや(野郎役者)に同じ。若風俗川原の野郎若衆、……その姿、ありのまま寫せよと」

やらかす 遣らかす【動四他】一爲す。行ふ。やる。やっつける。〔俚語〕和合人「さあさあやらかせやらかせ」二飲み又は食ふ。やる。やっつける。〔俚語〕

やらず-のあめ 不遣の雨【句】やる(遣る)の條下を見よ。

やらず-のかぜ 不遣の風【句】やる(遣る)の條下を見よ。

やら-のーさき 也良崎【名】〔地〕筑前國福岡灣なる殘島(シマ)の北角荒崎(アラサキ)の古稱なるべしといふ。古、太宰府ありし時代に、警備の士を置きたり。のこのしま。萬葉「沖つ島鴨とふ舟の歸り來ば也良の埼守(サキモリ)早く告げこそ」

やらぱ 莉刺巴【名】〔植〕旋花(ヒルガホ)科に屬する草。莖は蔓性にして、他物に纏繞し葉は全緣の心臟形、花は朝顏のに似て、漏斗狀の合瓣花をなし、帶紅白色を呈す。原産地はメキシコ。

やらぱ-とん 莉刺巴根【名】莉刺巴の根の稱。球形にして、樹脂を含み、瀉下劑に用ふ。

やらぱ-し 莉刺巴脂【名】莉刺巴の根に含める樹脂。

やらぱ-せきけん 莉刺巴石鹼【名】莉刺巴脂末及び藥用石鹼を等分に混和して製したるもの。刺戟藥・瀉下藥として用ふ。

やら-はらだち やら腹立【名】『やら(感嘆詞)腹立や」といふ句を略して、名詞となるなるべし』いらだたしく腹立つこと。源氏十二段長生島臺「あまり遲さに待ちかねて、やら腹立に申せしなり」新版歌祭文「在所の女と侮ってか、欲しくば、お前にやるはいなと、やら腹立に門口に放(ホ)れば、ほどけて、はらはらと」

やらひ 遣【名】一やらふこと。二やらい(矢來)を見よ。

やらふ 遣らふ【動四他】逐ひ拂ふ。おひやる。放逐す。記「鬚と手足の爪とを切り被へしめて、神(カミ)やらひにやらひき」

やらん【助】『疑問の助辭やと助動詞らんとの連結せるもの』云云にやあるらむ。云云にてあるならんか。やら。平家「さては、命の生きんずるやらん」御伽草子(文正草子)「この程は、何とやらん、惱みがちにておはしましし」

やらん【感】やんらに同じ。狂言(餅酒)「やらん、めでたや。……、ただ、かね餅こそめでたけれ」

やらん-やら【感】やややに同じ。源氏浮泉節「やらんやらお目出鯛釣る海の幸(サチ)」

やら-やっと【副】やっとを強めていふ語。えんやらやっと。膝栗毛「やらやっと、一枚貰って著たが、あんまり裾が長くて」

やら-やら【感】やらを重ねて、強めていふ語。狂言(連歌見沙門)「やらやら、けなりや、けなりやな」同見布賀「やらやら、數知らずの君が御代のよろこぶや」

やら-ら【感】『和(ヤハ)和(ラハ)の略』辭の爽やかに清きさま。〔古語〕紀「手掌慧亮、此云二陀那則擧謀耶羅羅爾」

やり 遣【名】一遣ること。二やりて(遣手)四の略。〔槍・鑓・鎗〕壽の門松「やりが前垂、茜さす」夕霧阿波の鳴渡「昔は鎗が迎ひに出る。今は、やうやう長刀(ナギナタ)の草履を脱いで、編笠の中の座敷に通りしが」三〔商〕賣ること。賣却。〔取引所の語〕

やり 槍・鑓・鎗【名】一『敵の方へ突き遣りて用ふる物の義。鑓は和字。鎗は、全く別義の漢字なるを、槍と旁(ツクリ)相同じく、且つ金屬を刃とせる武器なるより轉用し來れるなり』細長き刃を穂とし、これに、長き柄を取り附け、相手を突き刺す武器。鉾より變化せるものにて、鎌倉時代の末より用ひ、單に道具と呼びて、重要視せり。穂の形によりて、素(ス)槍・鎌槍・十文字槍・鈎(モジ)槍・管槍・手槍などの種類あり。二きやらしや(香車)一に同じ。壽の門松「香車の槍を以て、槍玉に上げらるるが」三前條三に同じ。

やりあは 槍合【名】雙方互に槍を交へて鬪ふこと。

やり-あふ 遣合ふ【動四自】一互に爲す。相爭ふ。二互に言ひ負かさんとす。互に遣りかへす。

やり-いか 槍烏賊【名】〔動〕頭足類に屬する軟體動物。烏賊類の一。體細くして、全長一尺内外、後方尖り、内鰭三角形をなし、體色蒼白にして、紫褐色の斑點あり。觸脚の吸盤は小なり。我國、暖地の海に多し。肉は生食し、又、乾して鯣(スルメ)とす。

やり-いか 槍烏賊【名】〔動〕頭足類に屬する軟體動物。烏賊類の一。體細くして、全長一尺内外、後方尖り、内鰭三角形をなし、體色蒼白にして、紫褐色の斑點あり。觸脚の吸盤は小なり。我國、暖地の海に多し。肉は生食し、又、乾して鯣(スルメ)とす。けんさきいか。しやくはちいか。

やり-いだす 遣出す【動四他】一牛車(ギシヤ)などを出し進ます。平治「牛飼の裝束して、御車を仕る。上東門を、からりと遣り出す程こそあれ、土御門を飛ぶがごとくに行幸なる」盛衰記「車の簾を逆(サカ)に懸けて、門前に遣り出す」二行ひはじむ。爲しはじむ。やりだす。しだす。しはじむ。

やり-いる 遣入る【動下二他】牛車(ギシヤ)を進めて、或場處に入らしむ。殘牛繪詞「遣り入れられて、逸物(モイモノ)の名を取りぬる後は、繩一つにて、思ふやうに振舞はせて」

やり-いろ 槍色【名】一槍にて鬪ふ時の勝敗の狀態。

やり-う 野流【名】一野を流るる水。野水。二〔地〕緩傾斜の地、即ち平野の河流。河の下流。(山流に對して)

やり-うめ 槍梅・鑓梅【名】〔植〕梅の一品種。花の色、少しく淡紅を帶ぶ。古杓木「夜明けて、天下の春……。鳥追は、鑓梅と共に先がけ」

やり-おとがひ 槍頤・鑓峴【名】尖りて突き出でたる頤。犬子集「鑓おとがひの人はあやにくくいふ句に」とだえつつ訪ふを薩刀あしらひに」東海道名所記「鳩胸にて、しかも鑓おとがひなり」

やり-かけ 槍掛・槍架【名】槍を横たへかけおく臺。刀掛(カタナ)と同類の具。

やり-かた 遣方【名】しかた(仕方)一に同じ。

やり-かた 遣形【名】水平・垂直・壁面等の位置を標示するための假設物。

やり-がーたけ 槍ケ嶽・鑓ケ嶽【名】〔地〕『石英斑岩の群嶺攢立せるさま、槍の如くなるよりいふ』飛騨國吉城(キシ)郡と信濃國南安曇(アヅミ)郡とに跨れる山。飛騨山脈中の一峰。高さ一一六五〇尺。

やり-がーたけ 鑓ケ嶽【名】〔地〕信濃國と越中國との界にある山。飛騨山脈中の一峯。立山(タテヤマ)の正東に位す。高さ九四九七尺。前條の山と區別して、北槍ケ嶽ともいふ。

やり-かふ 遣替ふ【動下二他】しかふ(仕替ふ)に同じ。

やり-かへし 遣返【名】遣りかへすこと。

やり-かへす 遣返す【動四他】㊀牛車(ギッシャ)を、中途より元へ返し戻す。平家「御牛飼に、目をきっと見合はせたり。やがて心得て、御車を遣り返し、大宮を上(ノボ)りに、飛ぶが如くに仕うまつり」㊁しかへす(仕返す)㊀に同じ。㊂相手の、己を遣り込めんと仕掛けたる時、その相手を、その場にて、反對に遣り込む。

やり-かへる 遣歸る【動四自】牛車(ギッシャ)などを、中途より元へ戻して、歸途に就く。增鏡「鳥羽殿におはしまし著きて、……御輿にたてまつれば、留まるべき御前(ギ)どもの、空しき御車を、泣く泣く遣り歸るとて、暮れ惑ひたるけしき、いと堪へがたげなり」

やり-がんな 槍鉋・鑓鉋・鎗鉋【名】臺木を取り附けず、槍の穂先の如き形の身のみより成り、突きて削るに用ふる鉋。昔、假面打その他の木彫家用ひたれども、後世は廢れたり。さをがんな。

やり-かんぼふ 遣看法【名】やりくわんぼふ(遣觀法)に同じ。

やり-がらみ 槍絡・鎗絡【名】槍衾(スヤリ)を作りて、敵軍に對抗する一團。楯絡(ダテガラ)などと同類の語。

やり-きず 槍疵【名】槍にて突かれたための疵。やりて。「の條下を見よ。

やり-きれず 遣切れず【句】やる(遣る)

やり-く 遣句【名】〔文〕『程よく遣る句の義といふ』連歌・俳諧にて、手輕に言ひ去る句。狂言・箕かづき「おのれは、人の氣に當るさし合も知らぬ奴(ヤツ)ぢや。まづ、前句に、連歌を止(ヤ)めよといふ遣句をいふ。擧句に、出て去(イ)ねともいはぬに、暇をくれいといふ」

やり-ぐさ 槍草【名】〔植〕すずめのてっぽう(雀鐵砲)に同じ。

やり-ぐすね 槍藥煉・鎗藥煉【名】手に唾を附けて、槍を取ること。

やり-くち 遣口【名】物事の爲し方。やりやう。やりかた。處置。

やり-くら 遣競【名】互に行ひて、優劣を競ふこと。やりっくら。

やり-くり 遣繰【名】遣り繰ること。くりあはせ。さしくり。くりまはし。一代男「さすが愚かなる遣繰にて、後は現れて、むごく見限られて」

やりくり-さんだん 遣繰算段【名】遣り繰りて、算段をすること、又その方法。

やりくり-しんしやう 遣繰身上【名】遣繰算段の身代。

やりくり-りやらがへ 遣繰兩替【名】こめかたりやらがへ(米方兩替)に同じ。

やりくり-ちゆうね 遣繰中尉【名】びんぼふせうね(貧乏少尉)を見よ。

やり-くる 遣繰る【動四他】不足勝なる物事を、種種に工夫して、辛うじて間(マ)に合はす。くりあはす。さし繰る。くりまはす。

やり-くる 遣繰る【動下二自】遣繰の生活の内に、年の暮となる。猿蓑(其角)「やりくれて又やさむしろ歲の暮」

やり-ぐるま 遣車【名】船の表(オモテ)にある飛車(ヒビク)。

やり-くわんぼふ 遣觀法【名】やりぼなし(遣放)に同じ。遣拂「斯かるやり觀法にて、むねと大事にすべき道をさし置きて」

やり-こし 遣越【名】船の艪床(ロド)の一部。

やり-こむ 遣込む【動下二他】いひふす(言伏す)に同じ。染模樣妹脊門松「いやも無法な人ぢやとやり込めれば」

やり-ごゑ 槍聲・鑓聲・鎗聲【名】鋭き聲。世間手代氣質「隙(ヒマ)入れてゐると、内儀が、槍聲出して」

やり-さき 槍先・鎗先【名】㊀槍の先端。槍の穂さき。㊁槍にて敵を突くこと、又その樣子。㊂勢鋭き長き物の譬。つつさき。ほこさき。一代女「かの男め、あたら槍先を、都の島原陣の役にも立てず」

やり-さく 槍柵・鎗柵【名】敵を防ぐために、多くの槍を立て並べて、柵の如くにすること。「職業の人。ほこけづり。

やり-し 槍師・鑓師・鎗師【名】槍を造る

やり-した 槍下・鑓下・鎗下【名】敵を突き伏する槍の先、又その突き伏すること。甲陽軍鑑「かの曲淵(ヤナガ)・みした傳右衛門、鑓下の高名をする」

槍下の弓【句】昔の軍に、槍組の間に弓組を插み、槍にて敵を誘ひつつ退却し、敵、利に乘りて深く追ひ込み來る時、弓にて射取りし戰法。(「弓下の槍」に對して)

やり-しゆ 遣衆・槍衆・鑓衆【名】『やり(遣)㊀を見よ』多くの遣手。遣手たち。松の葉「その里人の風俗も、名はなつかしきやりしゆ・槍梅」

やり-じるし 槍印・鑓印・鎗印【名】槍の印附(ツケル)の環(ワ)に附けて、他行の時、又は戰場にて、家名を明らかにせしもの。薩摩藩「その外、諸國のお大名、數も限もあら慮外、申すも長柄の御鑓印……、六十餘州の大名樣、お馬印・鑓印、お駕籠おさへの紋印、そらに覺えて罷り在る」

やり-すごす 遣過す【動四他】㊀後方より進み來れるものを、前方へと通過せしむ。行き過ぎしむ。太平記「少し遣り過し、迹を塞ぎて討たん」八犬傳「全隊(モノ)を將(ヤ)って、白井の城へ還りゆくを遣り過し、目送りて」㊁しすごす(仕過す)に同じ。

やり-すつ 破捨つ【動下二他】破りて捨つ。枕「人のやりすてたる文(フミ)を見るに」

やり-そこなひ 遣損【名】やりそこなふこと、又、やりそこなひたること。しそこなひ。「(仕損ふ)に同じ。

やり-そこなふ 遣損ふ【動四他】しそこなふ

やり-ぞなへ 槍備・鑓備・鎗備【名】槍にて鬪ふ任務の隊。「に同じ。

やり-そんじ 遣損【名】やりそこなひ(遣損)

やり-そんず 遣損ず【動佐變他】やりそこなふ(遣損ふ)に同じ。

やり-だいしやう 槍大將・鑓大將・鎗大將【名】やりぶぎやう(槍奉行)に同じ。

やり-だし 遣出【名】㊀やりだすこと。しだし。しはじめ。㊁しやしやう(斜橋)に同じ。

やり-だす 遣出す【動四他】やりいだす(遣出す)の略。

やり-だま 槍玉・鑓玉・鎗玉【名】槍の玉緣(フチ)なりといふ。槍玉に上ぐ【句】㊀槍先に突き上ぐ。㊁多くの中より選びて、犠牲に供す。槍玉を取る【句】槍を手玉に取るをいふとぞ。太閤記「槍玉を取り、二つ三つ、りうりうと鳴らし」

やり-だんじやう 鑓彈正【名】〔人〕武田信玄の臣保科彈正正忠の綽號。

やり-ちがひ 遣違【名】やりちがふこと、又、やりちがひたること。やりそこなひ。

やりちがひ-くぎじめ 遣違釘締【名】ちがひくぎぬき(違釘貫)に同じ。

やり-ちがふ 遣違ふ【動四自】遣りて、くひちがふ。しそこなふ。

やり-ちがふ 遣違ふ【動下二他】しちがふ(仕違ふ)に同じ。

やり-ちがへ 遣違【名】やりちがふこと、又、やりちがへたること。

やり-つかひ 鑓便・槍便・鎗便【名】槍を巧みに使ふこと、又その人。

やり-つく 槍附く・鑓附く・鎗附く【動下二他】槍にて突きつく。武邊咄聞書「治部が勢(セ)へ駈けあはせ、三人槍附け候を」

やり-つく 遣付く【動下二他】㊀興ふるに馴る。常に興ふ。㊁爲すに馴る。常に行ふ。㊂やる(遣る)㊃を強めていふ語。平假名盛衰記「一向に、この法印は、始終夢中で遣りつけた」㊄やる(遣る)㊅を強めていふ語。八奚人「もう二三盃やりつけようか」㊆屈服せしむ。貢かす。やっつける。「音便。

やり-つ-くら 遣競【名】やりくら(遣競)の音便。

やり-つづく 遣續く【動下二他】㊀牛車(ギッシャ)を、多く續けて進み行かしむ。平家「嫡子權亮(ゴンノスケ)少將維盛以下の公達の車ども遣りつづけさせ」謠曲花筐「今は遣幸なし奉らんと、供奉の人人、おん車遣りつづけて」㊁爲すことを續く。續けて行ふ。

やり-っ-ぱなし 遣放【名】やりぼなし(遣放)の音便。

やり-て 槍手・鑓手・鎗手【名】やりきず(槍「疵)に同じ。

やりて 遣手【名】一爲す人。行ふ人。仕手(テ)。二爲すに巧みなる人。巧みに行ふ人。敏腕家。三牛を追ひて、牛車(ギッシャ)を進ましむる人、又その事に巧みなる人。駿牛絵詞「縄一つにて、思ふやうに振舞はせて、主をば牛好(ウシシ)とも、牛飼をば遣手とも申しはべりしか」四興ふる人。五**どんす**(緞子)三に同じ。六『一の船より他の船へ投げ遣るよりいふ』**もやひづな**(舫綱)に同じ。七『突き進む一方の駒なるよりいふ』**きやうしや**(香車)に同じ。八『昔、江戸吉原の遊廓にて、花車と呼びしが、語調悪しきため、轉じて、香車(キャウシャ)と呼び、前項の義と通ずるより、この名稱を用ふるに至れりといふ』妓楼にて、遊女を取り締り、萬事を切り廻す老女。多くは、仲居の老練なる者、これに當る。花車(クワシャ)。きやうしや。やりてばば。やりをんな。「鴇婦・鴇兒・虎婆」東海道名所記「局(ネヅボ)の口に立ち、隔子(シガウ)を覗き、遣手に逢うて」俗つれづれ「遣手の萬が耳の根を」九**やりてむすび**(遣手結)の略。「じ。

やりてばば 遣手婆【名】前條八に同

やりてべや 遣手部屋・鴇母部屋【名】妓楼にて、遣手の居る部屋。娼妓揚屋「寢ずの番に金を遣り、今宵、遣手部屋の引くを相圖に、下座敷へ隱しおく」

やりてぼうこう 遣手奉公・鴇婦奉公【名】妓楼に奉公して、遣手を勤むること。一代女「津の國の色所新町に經めぐりて、昔、この身に覺えし道筋なれば、……、遣手奉公をする事」

やりてむすび 遣手結【名】**いとまき**(絲巻)四に同じ。

やりど 遣戸・槍戸【名】**ひきど**(引戸)一に同じ。枕「遣戸など荒くあくるも、いと憎し。少しもたぐるやうにてあくるは、鳴りやはする」和漢三才圖會「槍戸、俗稱夜利戸、今云、末以良度」

やりどき 遣時【名】一遣るに適當なる時期。二嫁に遣るに適したる時期。よめいりどき。一代女「妹も、やり時になり、始の拵ほどこそなけれ、大かたに仕附けられしに」

やりどぐち 遣戸口【名】遣戸を取り附けたる出入口。落葉「大きなる杉唐櫃のありけるを、後(ウシロ)を舁きて、遣戸口に置きて」

やりどこ 槍床・鎗床・鑓床【名】**やりぶすま**(槍衾)に同じ。

やりとめ 槍止・鑓留・鎗留【名】槍にて突きとむること。油彙「入りたくもあり入りたくもなし(ミ)いふ句に)鑓とめは習ひたれども未練にて」

やりとり 遣取【名】遣ることと、取ることと。興ふることと、貰ふことと。とりやり。とりかはせ。受授。諸藝太平記「文(ヒ)のやりとりさへ疎疎しければ」和合人「この内、盃のやりとりありと知るべし」

やりなげ 槍投【名】『英 Throwing the javelin』投擲(ナゲ)の一。槍を蹈切線より手にて投げ、槍の穂先が、地上に印したる最も近き點と蹈切線の距離とを比較して、勝負を決する競技。これに用ふる槍は金屬製の穂先を有する木製のものにて、長さは二・六米、重量八〇〇瓦以上とす。

やりなは 遣縄【名】牛・馬・犬などに取り附けて、それを進退せしむる縄。平家「最後の御車をば仕り候はばやと、……、懷より遣縄取り出し、著け替へ、……、泣く泣く遣ってぞ罷りける」甲陽軍鑑「犬の遣縄は、三ひろ一寸なり」

やりなほし 遣直【名】やりなほすこと、又、やりなほしたるもの。しなほし。

やりなほす 遣直す【動四他】しなほす(仕直す)に同じ。

やりのく 遣退く【動下二他】一牛車(ウシ)を動かし進めて、その場處より退かしむ。盛衰記「殿下參内したまひけるに、清盛の卿の二男基盛(モトモリ)が車を、門外に立てたりけるを、御隨身、遣りのけよと實めけれども、牛飼童承引せずして」二滯なく爲し遂ぐ。

やりのごんざーかさねかたびら 槍權三重帷子【名】淨瑠璃の一。茶の湯の師淺香市之進の留守の宿に、笹野權三、祕傳を聞かんがために訪れ、市之進の妻おさゐとの關係に嫌疑を掛けられ、辨解のすべなきままに、遂に手を携へて走り、女敵打(カタキウチ)となる筋。近松門左衛門の作。出雲國松江の巷説に本づいて脚色すといふ。

やりは 遣端【名】棄て去る場合。「遣端が無い」『遣端に困る』

やりは 槍・鑓・鎗【名】根木(ネギ)の方法の一。

やりば 槍場・鑓場・鎗場【名】槍にて闘る所。

やりば 遣羽【名】四立(ヨツタテ)の下方にある矢羽。

やりば 遣場【名】送り遣る場所。棄て去る矢羽。

やりはじ 遣羽子【名】**おひばね**(追羽根)に同じ。春の門松「遣羽子も、三い・四う・いつも末長き」

やりはさみ 槍挟・鑓挟・鎗挟【名】鐵製又は銅製にて、眞中に蝶番(カナヒモ)を設けて、自由に屈伸せしめ、馬上の際、右方の腰に挟み、槍の柄を挟みて横たへ支持す

やりばしご 槍梯子・鑓梯子・鎗梯子【名】形、槍に似て、穂先は短く、石突は雁俣(ヤマ)の狀をなし、柄には筋金を入れ、銅輪を捻る時、柄の内より、左右に板金の出づるやうにし、昔、石垣・屋根などに掛け、その板金を足溜とし、梯子として登りゆくに用ひし戰具。壘(タク)梯子の類。

やりばな 槍花・鑓花・鎗花【名】「植」**うつぼぐさ**(空穂草)に同じ。

やりばなし 遣放【名】爲したるまま、片を附けずに捨ておくこと。なげやり。やりっぱなし。雪女五枚羽子板「生(イ)けもせず、殺しもせず、遣放の放飼」

やりはなつ 遣放つ【動四他】はなちやる(放遣る)に同じ。鬼貫「遣り放つ心車に飛ぶ螢」

やりばね 遣羽根【名】**おひばね**(追羽根)に同じ。「(棒菱)に同じ。

やりびし 槍菱・鑓菱・鎗菱【名】**ぼうびし**

やりぶぎやう 槍奉行・鑓奉行・鎗奉行【名】一槍にて闘ふ一隊を率ゐる役。長柄(ナガ)大將。長柄奉行。槍大將。持槍奉行。二江戸幕府の職制の一。老中支配の下に、長柄同心と八王子在住の千人同心とを統轄せしもの。員數は、時により三人乃至五人にて、一定せず、同心十人づつ附屬したり。初、役料を給せられしが、後、二千石高に改められ、菊間(キクマ)南敷居外詰たりき。

やりぶすま 槍衾・鑓襖・鎗襖【名】次條を見よ。曽我虎鬚「左手(ヒダリ)へ寄れば、矢先を揃へ、右へ寄れば槍襖」

槍衾を作る【句】槍を持ちたる者が、多く立ち並び、何れも穂先を突き出して、敵の進み來るを待ち掛く。

やりぶり 槍振・鑓振・鎗振【名】大名の行列にて、槍持奴が、槍を振りながら進むこと、又その奴。俗曲「山谷土手路踊」「對(ヤ)の挾箱(ハコヤ)、つきどっこい槍振ぢや」

やりぶり 遣振【名】一爲す樣子。しぶり。二興ふる樣子。

やりぼぐ 破反古・破反故【名】破りたる反古。狭衣「やりぼぐを得たまひて、切(ア)に繼ぎつつ見つづけたまへる心ち」

やりぼし やり法師【名】次條の約。

やりぼふし やり法師【名】**かりぼふし**(刈法師)に同じ。

やります 遣枡【名】規定の量より小く造りて、姦商が、物を賣る時に、不當の利を得るために用ふる枡。(取枡に對して)

やりみづ 遣水【名】庭園内にせき入れて流し遣る水。源氏「木(コ)繁き中より、籬火どもの、影の遣水の螢に見えまがふもをかし」榮花「池・遣水・山などありて」

やりむしや 槍武者・鑓武者・鎗武者【名】槍にて闘ふ武者。新可笑記「色よき槍武者は、進む時も、退く時も、一番なり」

やりもち 槍持・鎗持・鑓持【名】昔、武家の主人の他行する時、槍を持ちゆきし從者。多くは奴(ヤッ)の役なるより、槍持奴の名あり。道具持。狭衣正秀「槍持のなほ振り立つる時兩かな」

槍持の雪隱(セッ)【句】『槍持が槍を持ちたるままにて入ることを得るごとき雪隱の義』細長く小く建てたる家を嘲りていふ語。

やりもち-やっこ 槍持奴・鎗持奴・鑓持奴【名】**やりもち**(槍持)を見よ。萬葉千載「槍持奴のわざをぎの繪に」

やり-や 槍屋・鎗屋・鑓屋【名】槍を造り

又賣るを業とする家、又その人。やりし。

やりやう 夜涼【名】夜の涼しき氣味。晩

やり-ゆく 遣行く【動四自】牛車(ギッシャ)を進めゆく。 蜻蛉記「車の物見を打寒ぎ、……朱雀を南へ遣り行けば」

やり-よく 野綠【名】やすあ(野梨)に同じ。

やり-よす 遣寄す【動下二他】牛車(ギッシャ)を進めて近寄らしむ。 枕「物見に急ぎ出でて、……近く遣り寄するほど」 字治「車に乘りこぼれて遣り寄せて見れば、未だともかくもしなさで置きたりけるに」

やり-わぎ 槍脇・鑓脇・鎗脇【名】戰の時、一番槍・二番槍の脇に居て、刀・弓・鐵砲にて、これを助けて働くこと、又その人。

やり-をどり 槍踊・鑓踊・鎗踊【名】槍を持ちながら行ふ一種の踊。元祿の頃、俳優水木辰之助の、上方より江戸に來りて行ひしもの、有名なり。 其角「煤掃や諸人が眞似る槍踊」 松の葉「やりをどり 振りやれお振りやれ大鳥毛の振袖行列ぼったて東入(アヅマ)」

やり-をんな 遣女【名】やりて(遣手)四に同じ。 色道大鑑「やり女。やり手の事なり」

やる 破る【動四他】やぶる(破る)一に同じ。 土佐「日記……忘れがたくくちをしき事多かれど、え盡さず、とまれ斯くまれ、とくやりてん」

やる 破る【動下二自】やぶる(破る)に同じ。 神樂(篠)「筐分けば袖こそやれめ利根川の石は蹈むともいざ河原より」 曠野(胡及)「石臼のやれてをかしや石蕗(ツワ)の花」

やる 遣る【動四他】一前方へ動き移らしむ。進ます。行かす。「行る」 枕「中よく遣る者の、車走らせたる」 松の葉「上樣(ウヘ)の御座船か、……、櫓ではやらいで、唄でやる」 二送る。遣す。 萬葉「炙りほす人もあれやも濡きぬを家にはやらな旅のしるしに」 狂言(猿替勾當)「小筒(ヅツ)を……申しつけまして、清水(キヨミヅ)の地主(ヂヌシ)持たしてやりました」 三心の滯を拂ひ除く。鬱悶霽らす。心ゆくやうにす。ゆかす。 萬葉「夜光る玉といふとも酒飲みて心を遣るにあに若かめやも」 源氏「胸の遣る方なきを」 四與ふ。取らす。くる。贈る。 古今「あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれてひとり咲くらん」 狂言(唖の袋)「それ程の者は遣らうほどに、取って行け」 五動詞の連用形に助詞ての添ひたるものの下に續けて、人のために、動作の勞を取る意を示す語。つかはす。 狂言(逃歌毘沙門)「この鋒て割ってやらうが、……、さらば、配分をしてやらう」 六(商)わが米を賣る。 (取引所の語) 大阪繁昌詩「市者之辭……遣(謂ノ賣ニ吾米ニ)・取(謂ノ買ニ人米ニ)・掬(謂ノ得ニ其利ニ)」 七爲す。おこなふ。やらかす。やりつく。やつつける。 (行る) 俳諧古選「雲鼓「四方の春ぬらりくらりとやるぢやまで」 八飲み又食ふ。やらかす。やりつく。やっつける。「一杯やる」 九他の動詞の下に添ひて、その意を强むる意を示す語。 千載「夜もすがら物思ふ頃は明けやらで閨のひまさへつれなかりけり」 夫木「作りやらぬ夏のあらを田拂ひかれ蓬ながらや今かへすらん」

遣つ返しつ【句】言葉又は腕力にて、互に負けじと揉みあふ形容。 俗曲(八重霞浪花潟)「飯代(ハヤイ)の金算用(カネザン)せいと、遣っつ返しつ、あんまり笑止さ」

遣って來る【句】くる(來る)一を强めていふ語。

遣って行く【句】ゆく(行く)一を强め

遣らずの雨【句】情人などの歸るを妨ぐるが如くに、折から降る雨。又折から吹く風なるには、遣らずの風といふ。

遣らずの風【句】前條を見よ。「じ。

遣らん方無し【句】「遣る方無し」に同

遣切れず【句】これ以上は、爲すに堪へず。爲し續くるを得ず。立ちきれず。

遣る方無し【句】一心の悶を除く方法無し。遣らん方なし。遣る瀨なし。 溝鯉集「今はただ力車も盡きはててやる方もなき嘆なりけり」 二施すべき方法無し。せん方なし。 源氏「丹波國篠村といふ所に、年比(トシゴロ)、平茸(タヒラガ)、やる方もなく多かりけり」

遣る瀨無し【句】前條一に同じ。五人女「戀にやるせなくさいなまれて」 若鳳俗「女心のやる瀨もなく」

遣るまいぞ【句】狂言一又は能(ノウ)にて、逃げゆかんとする者を追ひかけ捕へんとするにいふ語。 謠曲(自然居士)「急いで連れて御入り候へ。やるまいぞ」 狂言(盤山伏)「やれ、蟹めが逃ぐるは、やるまいぞ、やるまいぞ、やるまいぞ」

やるぞ 碼【助動】やあぞ(碼)に同じ。

やれ 破【名】破るること、又、破れたる所、又、破れたる物。やぶれ。

やれ【感】一やよに同じ。十訓「某(ガシ)候由、言ひ聞かせよ、やれ」 狂言(禁野)「やれ、許せ、許せ、あぶない」 二急に喜び、又は當惑する時に發する聲。やあれ。やら。やんら。 狂言(盤山伏)「やれ、蟹めが、逃ぐるは」 醒睡笑「ふと伊勢やと諺ひ出し、額を見て、やれと思ひ」 三相手の言ふ所の語句を並べ立てて、繁雜に堪へぬ意を示す語。「やれ記ったの、やれ轉(ウタ)んだのと、やかましい」

やれ、こら、さのさ【句】重き物を動かす時の掛聲。よいこらさのさ。

やれ【助】やら一に同じ。 醒睡笑「和泉の國には、何ともをかしき名字(ミヤウジ)がある。野尻のやれ、草部(クサベ)のやれと」

やれ、この【句】小唄の囃子言葉。 本朝三國誌「雲かと見れば、加賀當笠の、やれ この、紅(モミ)のくけ紐のや」

やれさて【句】やあそれから。 狂言(柿山伏)「やれ、さて、何とやら物欲しう存ずるが」

やれ-あふぎ 破扇【名】やぶれあふぎ(破扇)に同じ。 嚏野(未學)「やれ扇一度に流す御祓(ハラヒ)かな」

やれ-あやめ 破菖蒲【名】襲(カサネ)の色目の一。表は萌黃、裏は青又は紅梅。五月用ふ。

やれいた-ざけ やれいた酒【名】おにころし(鬼殺)一に同じ。

やれ-がき 破垣【名】やぶれがき(破垣)に同じ。 狭衣「曾良「やれ垣やわざと鹿子(カコ)のかよひ道」

やれ-がさ 破笠【名】やぶれがさ(破笠)に同じ。

やれ-ぐつ 破靴【名】やぶれぐつ(破靴)に同じ。

やれ-ぐるま 破車【名】やぶれぐるま(破車)に同じ。 太平記「轅はげたる破車」 謠曲(葵上)「夕顏の宿のやれ車」

やれ-ごも 破薦【名】やぶれごも(破薦)に同じ。 萬葉「さし燒かむ小屋(ヤ)の醜屋(シヤ)にかき棄てむ破薦を敷きて」

やれ-ざうり 破草履【名】やぶれざうり(破草履)に同じ。

やれ-つけ-それ-つけ やれ突けそれ突け【名】昔の猥褻なる見世物の一。 和合人「淺草(ヤ)の地内(ヤナ)の山門前後へ、然るべき地所を借り、やれ突け、それ突け天(ヤ)の岩戸のお扉開いてなら、木戸番はお斷(ヤコト)だぜ」

やれ-つぼ 破壺【名】こはれ缺けてある壺。 鬼貫「やれ壺に澤瀉(ヤマカ)細く咲きにけり」

やれ-な【感】『なは感嘆の助詞』諺物の囃子言葉。 風俗歌「大鳥の羽(ハ)にやれな霜降れり やれな誰か然(サ)言ふ千鳥ぞ然言ふ」

やれ-ばせう 破芭蕉【名】葉の破れ裂けたる芭蕉。 鬼貫「やれ芭蕉やぶれぬ時もばせうかな」

やれ-ま 破間【名】破れたるためのすき

やれ-め 破目【名】やぶれめ(破目)に同じ。 俳諧新選(百歩)「やれ目より人に見られて文紙子(フミコガ)」

やれも【感】『もは感嘆の助詞』やれ一を强

やれも-やれも【感】やれやれに同じ。 和合人「やれもやれも、お若いとはいひながら、まだ佛壇へ御燈(カシン)も上らぬさうだ」

やれ-やれ 破破【貌】甚しく破れてあるさま。 字治「やれやれと著なして」

やれ-やれ【感】やれ一一を重ねて、その意を强めたる語。 蟬丸「やれやれ、千手か、忠光か」 同(盛衰)「やれやれ、今日は天氣

じ。 狭衣「曾良「やれ垣やわざと鹿子(カコ)のかよひ道」

もよし、このやうな仕合(ハシ)はない」

やれねげた 破井桁【名】障子・欄間(マド)の組方又は模様にて、井桁を組み合はせて、所所を繼續せしめたる形。

やーろう 藥籠【名】㊀**やくろう**(藥籠)㊁に同じ。㊁丸くして、堆朱・堆黑等にて、裝飾し、三四重に重ねたる、印籠のごとき箱。もと支那よりの渡來に係り、藥を入れて携帶し、古くは火器などをも入れたり。㊂腰に提ぐる烟草いれ。〔越後國の方言〕

やーろう 夜漏【名】夜間の水時計。

やーわ 夜話【名】夜間の談話、又それを筆記したる書物。よばなし。よがたり。

やーわざ 矢業【名】矢を射るわざ。射術。曾我會稽山「常に射馴れて、矢業よき故」

やーわたり 屋渡・家渡【名】㊀**やうつり**(屋移)に同じ。今昔「吉き日を取りて渡りけるに、例の家渡のやうにはなくて」 廣野(市柳)「屋わたりの宵は淋しや月の影」㊁(動)『天井裏などを這ひ渡ることあるよりいふ』**あをだいしやう**(青大將)に同じ。

やーわたりーがゆ 屋渡粥・家渡粥【名】**やうつりがゆ**(屋移粥)に同じ。木食楚仙翁吟「煮たる茶釜の鬆ぞこぼるる(ミいふ句に)新しき家のわたまし忙はし。やわたり粥の心に候や。忙はしき故にこぼれたる所、よく附き候」

やーわり 矢割【名】石材を割るに、穴を穿ちて、鐵の楔(クサビ)を差し込み、玄翁にて打ち込むこと。

やーゑね 【名】〔植〕次條に同じ。

やーゑみ 【名】〔植〕**ふなばらさう**(白薇)に同じ。字鏡「白薇、夜惠彌。一云、久呂奈」

やーゑん 夜猿【名】夜啼く猿。

やーをう 野翁【名】田舍の老翁。ゐなかおやぢ。村老。

やをーぢざう 八尾地藏【名】龍(ツ)の狂言の一。地獄に墮ちて、閻魔王の前に引き出されたる死人の、日頃、河内國八尾の地藏を信仰せし功德によりて、極樂淨土に送らるる事を作れるもの。

やーをとこ 八男【名】古、安房大神を主神とせる八柱の神に、八少女と共に、一人づつ奉仕せし、八人の童男。 高橋氏文「大八洲(オホヤシマ)に像りて、八男・八少女とを定めて、神嘗・大嘗に仕へまつり始めき」

やーをとめ 八少女【名】㊀前條を見よ。㊁神社に仕へ、神樂の奉奏などをする、八人の少女。 風俗歌「八をとめは、わが八をとめぞ立つや八をとめ」 俳諧奇人談(千也)「割裙や八少女神樂男より」

やーをんな 八女【名】前條に同じ。 延喜式「八男・八女」 夫本「祝ひおく御代の初の八をんなに八百よろづ代の程は見えにき」

やをら 【副】おもむろに。徐徐に。やうら。源氏「姫君、御硯をやをら引き寄せて」 源氏「いとやをら入り來(ク)るに」

やをらづつ【句】少しづつ。 源氏「やをらづづ引入りたまふ御氣色なれば」

い

や行第二の音。古代に於ける發音の方法・位置は、**や**及び**あ**行の**い**の條下に說けるが如くなりしなるべく、萬葉假名に於ては、**あ**行の**い**と**や**行の**い**とは、別字を用ひたるが如し。國語に於ても、**いる**(射る)は**や**(矢)との關係より、又、**おい**(老)は**おゆ**(老ゆ)及び**おや**(親)、**くい**(悔)は**くゆ**(悔ゆ)及び**くやし**(悔し)・**くやむ**(悔む)との關係より、**や**行の**い**なりしならんと思はるるに、中古以來、**あ**行の**い**と同一の假名を使用し、發音も、兩者の間に、何等の區別なきに至れり。但し、上の假名を以て、特にこの音を現すことあり。**あ**行の**い**の條下を參照せよ。

ゆ

【發音】㊀**や**行第三の音。子音yが母音uに結び附きて發す。その發音の方法・位置に就きては、**や**及び**う**の條下に說けるが如し。㊁長音は、**ゆう**と書くと、**ゆー**と、書くとの兩法あり。本書にては、前者に依れり。㊂**ゆ**を**い**列音の假名の下に記して、**う**列拗音を示すに用ふることあるは、**や**㊃に說けるが如し。殊に、漢字の音にては、この場合、すべて拗音に發音すること、**しゅじん**(主人)・**とちゅう**(途中)などの例の如し。

【字源】平假名**ゆ**は漢字「由」(吳音ユ)の草體、變體平假名**ゆ**も、同字の草體、**遊**は「遊」(吳音ユ)の草體、**游**は「游」(吳音ユ)の草體より出で、片假名ユは「由」の略體とも、「遊」の最初の二畫を取れるなりとも、「弓」(訓ユミ)の頭部を取れるなりともいふ。又、萬葉假名としては、前記「由」・「遊」・「游」・「弓」の外、字音に據れるものに「柚」、「悠」・「喻」・「瑜」・「踰」・「愈」・「臾」・「庾」等、訓を取りたるものに、「湯」・「忌」・「結」等あり。

ゆ 湯【名】㊀水を沸かして、溫度を與へたるもの。㊁沸かしたる湯に身體を浸して、垢を去ること、又その設備ある所。ゆあみ。入浴。ゆどの。浴室。 源氏「下(モ)に、湯に下(オ)りて、只今參らん」㊂いでゆ。溫泉。 和名「溫泉、一云、湯泉、由」 古今「但馬の國の湯へ罷りける時に」㊃藥の溶解せる湯。せんじぐすり。〔古語〕 源氏「思ひ慰めて、御ゆなどだに參れ」 榮花「日頃も、あるにもあらぬ御心ちを、……、つゆ御湯をだに聞しめさで」㊄船の隙より入りこみて溜りたる水。ふなゆ。あか。〔淦・淦〕 頭政集「戀しさはとまりも知らでゆく舟のゆにかくものは涙なりけり」㊅鎔かしたる金屬。 俗つれづれ「鏡……是れを湯にし、鑄給ふに」

湯浴(ユア)し柄【句】子供の生先(ウマレサキ)は、產湯(ウブユ)の浴せ方に由るといふ俗說。 空穗「女子は、見るかひなく生し出でたまはば、くちをしかるべし。湯あむしがらとかいふなるものを」

湯とも水ともならず【句】一定の方針の立たぬ譬。どっちつかず。

湯の神【句】大己貴(オホナムチ)・少彦名(スクナヒコナ)の二神。溫泉にて病を療するは、この二神の始めたまひしものなること、伊豫風土記に見え、溫泉所在の地に、これを祀れるもの多し。

湯の器【句】湯を入れて、臺盤の上に据ゑし器具。銀製なりきといふ。ゆき。

湯の辭儀は水【句】次條の略。〔諺語〕

湯の辭儀は水になる【句】㊀入浴の際、辭退し居れば、折角の湯も、冷むるに至る。〔諺語〕㊁謙讓は美德なれども、時と場合とによりては、これを守らざることあり。〔諺語〕

湯のだんこ【句】昔の流行小唄の詞。長町女腹切「皆まで這ふな、湯のだんこか。湯治するなら、道錢(ヂウセン)見事な事かと、金三兩、衣の下より投げ出せば、これこそ、ほんの忝(カタ)有馬の湯のだんこ、やれ、湯のだんこ、湯のだんこ」

湯の原【句】溫泉の湧き出づる原。 萬葉「次田(クスキ)溫泉……、湯原に鳴く葦鶴(アシヅ)はわが如く妹に戀ふれや時分かず鳴く」

湯の舟【句】**ゆぶね**(湯舟)に同じ。 代始和抄「天の羽衣といふは、主上、御湯の舟におりさせたまふ時召さるる御帷子の名なり」

湯の道【句】溫泉場への道。 俳諧新選